不知火 要は勇者でない

SoDate

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、勇者と共に絶望に抗う一人の少年の物語である――

☆この小説は結城友奈は勇者であるシリーズの二次創作となっております

物語開始時の時系列は西暦２０１５年、乃木若葉は勇者であるからスタートします

のんびり投稿になりますが、よろしくお願いします

※　誤字脱字報告をしていただけると、大変助かります

追記：活動報告に質問コーナーを設置したので作品に関してちょっと聞きたいことのある方は気軽にコメントどうぞ

【お知らせ】

・わすゆ編五話の戦闘終了後からの展開を変更いたしました

・これからもボチボチ書いていきます　（２０２３／０３）

目次

西暦外典 1
―諏訪ノ勇者 ／ 上― 1
―諏訪ノ勇者 ／ 下― 6
―北海ノ勇者― 15
西暦―乃木若葉は勇者である― 26
1話―出会い― 26
2話―戦闘― 32
3話―質問― 41
4話―日常Ⅰ― 47
5話―信頼― 52
6話―二人― 58
7話―熱した鉄は、壊れやすい― 65
8話―雨降って地固まる― 74
9話―日常Ⅱ― 81
10話―丸亀城の戦い― 85
11話―遠征／上― 94
12話―遠征／下― 104
13話―居場所― 114
14話―鍵を開く― 124
15話―敗北― 133
16話―激情― 141
17話―絆ノ花　届ク想― 150
18話―過去の話― 159
19話―決戦前― 166

２０話―決戦―　176
２１話―誓い―　184
２２話―未来へのバトン―　191
神世紀２９８　―鷲尾須美は勇者である　／　八重樫徹は勇者になる―
一話，神世紀―２９８年　196
二話，祝勝会　207
三話，仲良くなろう　211
四話，合宿　ト　特別講師　220
五話，戦い　227
六話，日常　234
六・五話，日常―こぼれ話―　240
七話，日常　／　遠足　245
八話，分岐点　254
九話，信じてみよう　261
十話，選択　268
十一話，決戦　276
十二話，終わりと始まり　285
神世紀３００　―結城友奈は勇者である―
第壱話　慎ましい幸せ　292
第弐話　試練に勝つ　298
第参話　輝く心　306
第肆話　清らかな心　312
第伍話　変化　318
第陸話　メッセージ　322

第漆話　祝福する　327
第捌話　試練に勝つ【前】　332
第玖話　試練に打ち勝つ【後】　337
第拾話　平和Ⅰ　345
第拾壱話　平和Ⅱ　349
第拾弐話　期待　356
第拾参話　変化　360
第拾肆話　真実を求める　366
第拾伍話　悲しみ　373
第拾陸話　固い絆　378
第拾漆話　犠牲　383
第拾捌話　友情　391
第拾玖話　深い信頼　397
第弐拾話　偉大なる友情　402
平和な話・1　409
神世紀３００年／秋　―楠芽吹は勇者である―
Ⅰ　開幕　413
Ⅱ　補充の意味　419
Ⅲ　仲間　425
Ⅳ　楠　対　山伏　432
Ⅴ　思い出したもの　441
Ⅵ　同行　445
Ⅶ　単独戦　452
Ⅷ　胸騒ぎ　458
Ⅸ　模索　466

X　無駄じゃなかった ―― 471
XI　後を託す者の為に ―― 478
神世紀３００年／冬～神世紀３０１年―結城友奈は勇者である勇者の章―
勇者の章，1―1　日常 ―― 485
勇者の章，1―2　忘却 ―― 489
勇者の章，1―3　回顧 ―― 493
勇者の章，2―1　捜索 ―― 496
勇者の章，2―2　壁外 ―― 500
勇者の章，2―3　突入 ―― 503
勇者の章，2―4　再会 ―― 506
勇者の章，3―1　現状 ―― 511
勇者の章，3―2　確認 ―― 515
勇者の章，3―3　不調 ―― 520
勇者の章，3―4　安否 ―― 524
勇者の章，幕間 ―― 528
勇者の章，4―1　御記 ―― 532
勇者の章，4―2　追想 ―― 537
勇者の章，4―3　追憶 ―― 541
勇者の章，4―4　彼女 ―― 546
勇者の章，5―1　怪訝 ―― 550
勇者の章，5―2　真実 ―― 553
勇者の章，5―3　神婚 ―― 557
勇者の章，5―4　亀裂 ―― 560
勇者の章，6―1　開幕 ―― 566

勇者の章，6—2　決戦Ⅰ　570
勇者の章，6—3　決戦Ⅱ　574
勇者の章，6—4　決戦Ⅲ　578
勇者の章，7　日常　583
93話—未来—　588
不知火之日常
日常ノ壱　593
日常ノ弐　600
日常ノ参　604
日常ノ肆　610
日常ノ伍　617
日常ノ陸　622
日常ノ漆　628
その後の旅路　636
Recollection；72
Prologue—The scenery is hell
essly monochrome—　639
Episode1—Seeing her face—　645
Episode2—Reunion on a mission.　649
Episode3—The body sinks, to th
e bottom of the water.—　653
Episode4—To meet the girl, s
eternination—　659

西暦外典
―諏訪ノ勇者　／　上―

土を耕し、種を植える
何でもないその動作の一つ一つが、俺にとっては美しく見えた
時は西暦２０１８年、場所は諏訪
天の神、バーテックスから生き延びた人類の生きる拠点の一つ、絶望的な状況でも前を向いて生きていられるのは、きっと彼女たちがいるからだと思う
「みんなー、麦茶持ってきたぞー」
「ナイスタイミング！　皆さん、そろそろ休憩にしましょう！」
畑仕事をしている人たちにそう声をかけると、俺は集まってきた人たちに麦茶を手渡していく
「どうぞ」
「ありがとな、そういやどうだ、修復作業は」
「ボチボチですね、伐採した木材使ったりしてようやく半分って感じです」
「そうか、わりぃね．任せっきりで」
「気にしないでください、俺が好きでやってることですから。それじゃあ俺は歌野たちの方に行くので」
「おっと、引き留めちまったか」
「これくらいの引き留めなら誰も目くじら立てませんよ」

そういって俺はみんなの場所から離れ、畑の近くにある木の陰まで向かっていく
「何やってんだ、二人とも」
「あっ、一輝くん！　うたのんを止めてぇ」
「勘違いしちゃ駄目よ一輝！　これはみーちゃんを冷やすためだから」
「だからと言って棘のついたキュウリを押し付けるバカが何処にいる

?」
「ここにいるわ！」
「自分でバカと認めるな、農業バカ」
　木の陰で水都の頬にキュウリを押し付けていた歌野を引きはがすと、頬を抑えていた水都に麦茶の入ったコップを差し出す
「ほれ、麦茶」
「ありがとう、一輝くん」
「ほれ、歌野も」
「センキュー、一輝」
　俺と歌野の二人も木の陰に腰を掛けると包丁を取り出してさっきまで押し付けていたキュウリのトゲを落として、二つに割り片方を水都に渡す。俺に対してはとれたてのトマトを一個渡してきた。
「一輝はそれでしょ？」
「わかってるねぇ。それでどうよ、今回の収穫は」
「そのトマトを食べてみれば分かるわ！」
　そういいながら歌野は半分に割ったキュウリをかじると、笑顔を見せる
「んー、味も良し！　みーちゃんも食べてみてよ！」
「おいひい」
「でしょう！」
「その調子なら、今回も上々みたいだな…うまい」
　三人で野菜をかじっていると、キュウリを飲み込んだ水都が歌野に話かけた
「うたのんは本当、畑をイジるのが大好きだねぇ」
「いずれは農業王になる女ですので！」
「農業王．なんだか過ごそうな響きだ」
「でも、農業王の上には農業大王、さらにその上には農業神がいるの。農業道は奥深く、エンドレス…」
　二人の会話を聞きながらトマトを齧って、空を見上げる。この時間が俺は大好きだ
　バーテックスに襲われて以降、人類は生活圏のほとんどを奴らに奪

われた。中には空から現れた奴らが原因で空に恐怖を覚えまともな生活が出来なくなっている人たちもいるらしい
「みんな、明るい顔をするようになったわ」
「うん、そうだね」
「そうだな…」

今から三年前――突如として現れ日本を混乱に陥れ、絶望を叩きつけた未知の敵、バーテックス
奴らが現れてから程なくして諏訪湖周辺には結界が張られ結界内への被害がなかった．けれどそれは結界内の話だ、結界の外にいた人の多くが犠牲になった。
俺は外でなんとか生き残っていたがそれでも限界はある、奴らを追い払うために使っていた銃も奴らを倒すまでは至らず、現れたら逃げるのが精一杯、そろそろ限界を感じ始めた時、俺の事を救ってくれたのが勇者、白鳥歌野だった。
その時から何故か知らんが俺の銃もバーテックスに対して、特攻を得るようになったのか奴らに対してだけバカみたいな攻撃力を誇るようになったのだが、結局雀の涙程度であるのはご愛敬だろう

木の陰で休んでいた俺たちの耳に聞きなれてはいるが耳障りなサイレンが聞こえてくる、バーテックスの襲来を告げるサイレンの音だ、俺と歌野は顔を見合わせて頷くと、緊張の色を浮かべていた大人たちに明るい口調で告げる
「スクランブル！　勇者白鳥歌野、征ってまいります！」
「護人（もりと）御子柴一輝、全力で護ってくる！」
俺たちにそれぞれ激励をしてくれる大人たちに対し、歌野も元気よく答えた
「はい！　絶対に諏訪と皆さんを守りますから、結界の境界には近づかないよう、避難していてください！」
「待って、二人とも！　私も行く！」
諏訪大社上社本宮の神楽殿、そこで勇者装束に着替えている歌野を

待ちながら俺は腰のケースに入れていた鉈を軽く振ると、体を解しておく。ある程度の装備がある歌野と異なり俺が完全に生身、ダメージを軽減なんてことも出来ない以上一発一発が命取り。まぁそれでもここまで生き残ってこれたんだから儲けものだと思う

「みーちゃん！　バーテックスが来てる場所は!?」

「ここから東南方向！　狙いは多分、上社本宮だよ」

「奴ら、前宮の『御柱』を狙ってるのね。ふふん、じゃあここからが私の見せ場と言う事で、ショーの始まり！」

そう言うと歌野は俺たちの事を置いて目的地まで向かってしまう

「あぁー、行っちゃった」

「よし！　乗れ、水都！」

「いつもごめんね、一輝くん」

「このくらいなんて事ねぇよ、山育ちなめんな」

水都の事を背負った俺は、全力で歌野の後を追う。流石に就社ほどではないが俺も身体能力にはちょっとした自身がある、さっさと追いつくか

バーテックスの狙っている『御柱』は俺たち諏訪の住人にとって結界の要であり、それが破壊された瞬間結界は壊れバーテックスが流れ込んでくることになる。耐久が無限だったらこっちも気が楽だったのだが、生憎そうはいかない

襲来するバーテックスの数が増加するに伴い、土地神様は結界の規模を縮小し、その分強度を上げることを優先した。現在では既に二社が破壊され、結界が守っている範囲は諏訪湖東南の一帯だけである。

「よし、水都は隠れてろ」

「わかった」

俺はそう言うと歌野の背後から迫っていたバーテックスに蹴りを入れ少しよろけさせると、思い切り鉈を振るう、豆腐を切るようにバーテックスを切り裂くと戦っていた歌野に声をかける

「悪い！　遅れた」

「ノープロブレム！　私一人でも問題なかったわ」

「よく言うな」
　それから程なくして、俺と歌野の二人はバーテックスを倒し終え、息を吐く
「ふぅ…今回も勝てたな」
「あっ、みーちゃん、来てたのね」
「うん、心配だったから」
「心配しなくても、私たちのコンビが負ける訳ないわよ。見ての通りのビクトリー！　みーちゃんこそ危ないから避難してた方が良いのに」
　俺と歌野がそういって、二人でブイサインを作って水都に見せる
「ま、みーちゃん一人くらい、私達が守るから良いけどね！　さーて、帰って畑の続きやらないと」
「そういや俺も家の屋根直すの再開しないとな」
「え、二人ともまだやるの!?　バーテックスと戦った時くらい、休んでもいいんじゃ」
「ノンノン、作物は人間に合わせて待ってくれないわ。それに――畑を耕すって言う『日常』を大切にしたいの」
「俺もそうだな、俺にとっての『日常』が誰かの為になる、それって凄い素敵なことだろ？」
　これが俺たち――諏訪に生きる人たち日常、化物の脅威に怯えていても、日々を懸命に生きる、定期的に通信をしている四国と比べても物資は少ない……それでも俺たちがここで生きていることに変わりはない
　一面に広がる青空を見ながら、俺は家の修復作業を再開した

―諏訪ノ勇者　／　下―

八月も終わりに近づいてきたある日
四国との定期通信をしている歌野の姿を見ながら、俺は鉈のメンテナンスを行い水都は部屋の隅で本を読んでいた。この時間、四国の勇者　乃木若葉と通信をしている時の歌野はいつも楽しそうだ、水都の方を見ると彼女の方は何処か落ち着かないと言った雰囲気である
「それでは、またこの時間に．通信を終えます」
通信を終えた歌野が水都の方を見ると怪訝な表情を浮かべる、訳の分からないと言った感じの歌野は軽く俺の方を見る。原因は分かっているが敢えて分からないと言った風に首を振ると、歌野が水都に話しかける
「みーちゃん、なんでそんなジト目なの？」
「…うたのん、四国と通信している時の喋り方、変だよ。何々ですとか、敬語で大人ぶって似合わない」
「一応、四国との通信は勇者の公式な仕事だから、丁寧な言葉遣いにしないと。というか、電話とか手紙だと、何となく丁寧語にならない？」
「ならない」
その会話を聞いてい太俺は流石にいたたまれなくなったので鉈をケースにしまうと歌野の傍に近寄っていく
「水都は歌野が乃木さんと楽しそうに話してるのみて、嫉妬したんだよな？」
「そうなの？」
「ちがう！　…もういい。私、ご飯食べてくる」
「まってまって、みーちゃん！」
少し赤らんだ顔を隠すように部屋から出ていこうとする水都の腕を歌野は慌てて止める
「私も行くわ。みんなで一緒に食べる方が、ご飯も美味しいものね」
「…うん、行く」
「それじゃあ一輝も、一緒に行きましょ」
「俺も一緒に行っていいのか？」

「イエス！　みんなで食べるなら一人より二人、二人より三人だからね！」

三人で行きつけの蕎麦屋に入ると、それぞれいつものメニューを頼む

この中でも特に蕎麦が好きなのは歌野だ、俺と水都の二人もそこそこ好きだがそれでも彼女の蕎麦好きには遠く及ばない、定期通信でも四国の乃木さんと蕎麦うどん論争をしているくらいだ、三人でざる蕎麦をすすると歌野が素直…　と言うよりもいつも通りの感想を述べる

「うん、おいしい！　温かい汁につけた蕎麦もいいけど、夏はやっぱりざる蕎麦よね。実にクールディッシュだわ」

「うたのんはいつも大盛りだね」

「畑を耕す体力は、まず食べないと出てこないから！　特に蕎麦は、なんとアミノ酸スコアが百なのよ」

「アミノ酸スコア…？」

「アミノ酸スコアは食べ物に含まれるタンパク質の量と必須アミノ酸のバランス良く含まれるかを数字で表した指標の事だな」

「そばには良いたんぱく質がたくさん含まれてるってこと！」

そういいながら今までよりも早いスピードで蕎麦を食べていく

「でもソバの畑を増やさないと、蕎麦粉が足りなくなりそう。ソバは成長がが早いから一年に二回収穫できるけど、本当言うと結界の外の高地が栽培に向いてるのよねー」

「蕎麦は好きだが、流石に危険すぎるからな」

「…うたのん、さっきはごめん」

「え？　なんのこと？」

「怒ったみたいな態度を取って…」

どうやら水都は定期通信の自分の態度の事を言っているらしい、正直歌野がそこまで気にしているとも思えないが。それでも水都にとっては結構重要な事なのだろう

「私にはうたのんが眩しいよ、いつも前向きで、一生懸命で、みんなの

中心にいて．長野のみんなが、四国の乃木さんだって、うたのんのことが好きだろうし」
「みーちゃんだって、みんなから大人気だと思うけど。長野の人は誰だってみーちゃんのこと好きだし、すごいと思ってるわ」
「と言うより、そんなこと言ったら俺なんてどうよ、そこら辺の大工の兄ちゃんくらいにしか思われてないぞ？」
「一輝も空かれてると思うけど、おじさんたちから大人気なわけだし」
　好かれているとは思うが、もうちょっと別の好かれ方をしたかったなと思う。そんなことを話していると水都の表情が暗いことに気付いた歌野がこらと言いながら水都の額をつついた
「後ろ向きに考えないの。みーちゃんは自分の凄さに気づいてないだけよ。だって私、知ってますから。みーちゃんが人を助けてたこと」
「え…？」
「昔、結界の外から避難してきた子供を、バーテックスから助けてたでしょう？　みーちゃんが自分から結界の外に出て、バーテックスを自分で引き付けて…そのお陰で、その子は無事に避難できた。本当にすごいことよ」
「それは．結局その後、うたのん達が来てくれたから助かったんだよ。私だけだったら、あの子も殺されてた…」
「でも、普通はできないわ。戦う力を授かった私が人を助けるより、ずっとずっと勇気がいることだから。だから――みーちゃんだって、勇者よ」
「ありがと…」
「もちろん、一輝もね」
　二人の話を聞きながら蕎麦をすすっていると、歌野が急にそんなことを言ってきた。それがちょっと気恥ずかしくなった俺は、そっぽ向いてそばをすするっているのを見るとそれが可笑しかったのは二人で笑っていた

時が進むごとに、諏訪と四国の回線は繋がりにくくなっていった
それが諏訪の土地神の力が弱くなっている事なのだと、俺たちは感じ取っていた
それでも歌野は毎日畑を耕し、時にはバーテックスと戦ういつも通りの姿を見せていた。相変わらず前向きな姿を人々に見せながら時が進み――九月、大規模な襲撃が起こった
俺と歌野は今までよりも多かった敵に対し、かなりの傷を負った、体当たりで飛ばされ、口のような器官で噛みつかれ・それでもすべての敵を打ち倒した歌野は、諏訪への被害を出すことはなかった
戦いが終わった歌野は病院に行くよりも先に、四国との通信設備がある上社本宮の参集殿にやって来ていた、水都の言葉に大丈夫と答え、時々苦痛に顔を歪めながらもいつも通りの口調で四国との通信を終えた
それを見ていた水都も、通信を行っていた歌野も、そして俺も分かっている・諏訪がもう長く保たないという事を。
いくら四国に戦力が整っているといってももうそれを待つ時間がない、待つことが出来ない
「なぁ、写真を…撮らないか?」
「そういえば…三人で撮った事一回もなかったよね」
「そうね、撮りましょう！　写真！」
通信が終わった後、二人にそれを言うと、歌野と水都も頷いてくれた。三人で並んで写真を撮り終えると、近くに置かれていたプリンターを使い写真を現像すると、二人にも渡す
「ありがとう、一輝君」
「三人お揃いね」
「…そうだな」

それから程なくして、水都に最後の神託が下った
内容はこれまでにないほどの襲撃が起こる・そして諏訪の結界は、その攻撃を耐えることは出来ないということだ。それでも歌野はいつもと変わらない日々を続けた、畑に耕し、収穫間近の野菜たちを見

ながら、嬉しそうにして
「かぼちゃ、大根、とうもろこし。うんうん、グッドなグローイング具合。そろそろ次に植えるものを考えないといけないわね。ねぇみーちゃん。本宮に保管している種、何が残ってたかな」
「…いろいろ残ってたと思う、ソバとか、ダイコンとか」
「あぁ、いいわね。ソバとダイコンなら、種をまくのにジャストな季節だし」
「ソバが出来たら、自分たちで打ってみるか、蕎麦」
「いいわね、それ！」
「――どうして…！」
いつも通りにしている俺たちに対して、水都は言葉を詰まらせながら話始める
「二人は、どうしてそんなにいつも通りなの…？　怖くないの!?　私たちは、もう、明日…！」
水都が言おうとしていることは分かっている
明日の総攻撃．俺たちはきっと勝つことが出来ない、そして結界が破られるという言葉は、俺たちだけじゃない…俺たちだけでなく、諏訪そのものが壊滅させられるだろう。それでも俺たちはいつもと変わらぬ笑顔を水都に向ける
「怖いよ。本当はすごく怖い」
「そうだな…正直、今すぐ逃げ出したい」
「でも、怖くても…　何も出来ないのは絶対に嫌。怯えて何もできなくて…　目の前で人が死んでいくのは、もっと怖いから…」
「逃げ出すなら誰でも出来るんだ…それでも、万に一つでも俺に出来る事があるなら、俺は逃げたくない」
結局のところ、俺も歌野もやせ我慢をしていただけだ、戦うのは怖い…それでも頑張っていくしかできないんだ
「大丈夫よ、私は一人じゃない。みーちゃんがいる、一輝がいる、離れているけど、四国にも勇者の仲間たちがいる。だから…だから、頑張れる」
歌野のその言葉を聞いて、俺も水都も涙が出そうになるが必死にこ

らえる
　一番つらい筈の彼女が泣いていないのに、俺たちが泣くわけにはいかない
「そうだ！　二人とも、私にやりたいことがあるわ。私たちがここにいた証を……想いを、いつかきっとここに来る人の為に、遺しておきたいの」
　その言葉にうなづいた俺たち三人は、手紙と鍬を持ってきた木箱の中に入れて、畑の傍の地面に埋める
「いつか誰かが、これを見つけてくれたら．私たちの想いが繋がっていく。願いは託される．きっと」

　そして、最後の日が始まる
「フィニッシュ！」
「こっちも、打ち止めだ！」
　互いに倒れそうになるが、背中を合わせる事で何とか立った状態を保つ
「はぁはぁ…さすがの私も、つらいわね……」
「弱音を吐くなんて…珍しいな……俺はまだいけるぞ…山育ちだからな…」
「二人とも！　大丈夫！」
　何度目か分からない襲撃を終えた俺たちの元に水都が走ってくる、朝からずっと鳴りやむ事の無いサイレンがいよいよ潮時なのだという事を突き付けてくる。勇者である歌野ですら限界を迎えそうなのだ…　口ではああ言ったが、流石にキツい。腕はガンガン痛むし、さっきの攻撃で肋骨が砕ける音がした
　俺たちにタオルを渡してくれていた水都の動きが止まると、僅かに体を震わせ始める
「来た…これが、総攻撃だ…」
「そろそろ…四国と、通信の時間ね。行かないと…」

「行ってこい…お前が話を…する時間くらい…俺が稼ぐ」
二人を見送ると、目の前に見え始めたバーテックスを相手に鉈を構える、何度も戦い刃こぼれも酷い相棒だが．それでも奴らをぶった切るくらいの切れ味は残ってる

上社本宮の前で相手どっていると、少しずつ押され始めるが、その攻撃が止むと一部のバーテックスが集まり融合をはじめていた
「…二人のところに、行かないとな」
ボロボロの身体を引きずって二人と合流する
「…なんの話、してたんだ」
「夢の話をしてた」
「イエス！　私が農業王になって、みーちゃんが私の作った野菜を世界中に届ける！」
「…それで、最初は喧嘩したりするけど…最後は、みんなうたのんの作った野菜を食べて…笑顔になる」
「素敵でしょう？」
「…そうだな……どうせなら、俺も一枚かませてくれよ…お前の店位なら、俺が一から作ってやるから」
「どうする、みーちゃん？」
「うん…良いと思う」
あぁ、確かに良い夢だな…本当に…それなら
「それじゃあ」
「えぇ、そうね」
「私たちの夢のために、世界を壊させるわけにはいかないわよね！」
「俺たちの夢のために、世界を終わらせるわけにはいかないな！」
バーテックスは一斉に上社本宮に流れ込み始めた
「みーちゃん、一輝。私もね、二人が一緒にいてくれたから、今日まで頑張ってこれた」
「俺も、歌野と水都がいたから．今日まで折れることなく、進み続けら

れた」
俺たちはその言葉と共に大地を蹴り、空に広がる化物どもに向かっていく
「…最後まで一緒にいるよ、二人とも。ずっとここで見てるから」

バーテックスの総攻撃を受けた俺たちは、最後の最後まで戦い続けた、俺は一人総攻撃から生き残った…と言っても骨の至る所にはヒビが入ってる気がするし、左腕に至っては噛み千切られた所為で体のバランスがとりずらい
途中で歌野と分断され、鉈が折れても尚戦い続け、ボロボロになった体を引き摺りながら目的の場所に向かう、歌野と水都はどうなったのだろう…と考えるのも野暮か、霞み始めた目をこすり目的の場所が見えてくる
歌野達が耕していた畑を横切り、一本の木の前までたどり着いた俺は、背中を預けるように座り込むと目の前に折れた鉈を突き刺す
「…よし…これで少しは…わかりやすく……なるだろ」
俺が向かっていたのは三人で木箱を埋めた場所
俺たちの想いを、これからこの場所にくる人達に託す場所
俺が最後に見上げた空は、歌野達と初めて会った時のように嫌になるくらいの青空だった
俺が最後にこの場所を選んだのは歌野達の想いを繋ぐ道標になる為、俺たちがここにいたことを誰かに知っていて欲しいから
最後に一言、誰に伝わるわけでもない・けど、この言葉だけは伝えたかった
「頑張れよ」
俺の呟いたその声は風に乗り、どこかの誰かに伝わった…そんな気

がした

―北海ノ勇者―

「うー寒い寒い。あの日以来、気候おかしいよ」
　雪の降る山の中、勇者　秋原雪花は一人穴を掘っていた
「ん？　天からの影響と味方してくれるカムイの影響がぶつかりあって旭川周辺こんな感じ？　分かってるって。何度も説明うけたもん。よっ、ほっ…今日の作業はこんな所ですかにゃ」
「おーい、雪花。今日の見回り終わったぞ」
「おっ、お疲れ要。どうだった？」
　俺は近くに狐のゆるキャラみたいなのを浮かせている雪花に近づき話しかけると、彼女は今日の様子を聞いてくる
「あいも変わらずだな、どいつもこいつも俺らを引き入れたいってのが透けて見えてくる」
「そっかぁ、まぁそこらへんは仕方ないか…山の洞窟も、かなりの広さになったかなー。どうよ、私たちの隠れ家」
「いい感じなんじゃねぇの？　まぁ俺は使わなくても死にゃしねぇけどな」
　俺がそう言うと雪花は若干呆れたように俺の方を見てくる
「なんだよ」
「いんや、相変わらず捻てるなって」
「うっせぇな、何年の付き合いだと思ってんだ。今さら取り繕う必要もねぇだろ」
「それもそうだ」
　俺は雪花の掘った洞窟の中を見ながら、話しかける
「それにしても、わざわざこんなの作る必要あるか？」
「天から来る奴等は特定の神社もしくは人の居る地域を優先的に狙う傾向があるからね。それなら雪山で一人地下に思い切り潜ってしまえば見つかることなんてないのでは？」
「どうかねぇ、戦ってんのは神様かなんかだろ？　世界を好き勝手出来る奴等がそんな簡単な事見落とすかねぇ」
「そうやって物事を後ろ向きに考えるのはいけないと思うぞぉ…　私

はもうちょい作業しておこうかね。深ければ深いほど生存率あがるもん」
「それなら、俺も手伝う…雀の涙ほどだが役には立つだろ？」
「勇者の力でバリバリ掘るからほんとに雀の涙だけどね、ぶっちゃけ必要ないくらい？」
「人が善意で言ってんのを一刀両断すんじゃねぇよクソ眼鏡」
「はいはい、ごめんごめん」
軽口を叩きながらこうして二人で作業をする。誰かの為じゃなく自分たちが生きる為に動き続ける。それが俺たちの日常だ

「…！　要、敵が来る」
「了解、そんじゃいっちょ行きますか」
「オッケー！　やる事はきっちりやるよ！」

「うわぁぁぁあ、また化け物だぁぁ!!」
旭川周辺に現れた化物どもを俺と雪花の二人でぶった切っていく
「大丈夫！　勇者が来ました！　まったく漁帰りの人達を狙うとは」
「人の心もクソもねぇ…って化け物に言っても仕方ねぇか。間違ってぶった切られたくなかったらさっさと逃げろ！」
自分の血液を変化させた刀を使い化け物をぶった切りながら腰を抜かしている人を無理やり立たせると、そう言い捨てて化け物どもの相手に集中する
「お、おぉぉ。次から次へと串刺しに。相変わらず勇者様の槍は神業だ。」
「あの従者様も、化け物どもを一刀両断にしている」
「さっさと逃げろっつってんだろ！　それが出来ねぇなら隠れてやがれ！　気が散るんだよッ！」
俺がそういうとこちらを見ていた住人達は建物の中に隠れる
「要、相変わらず当たりキツイねぇ」
「自分らが死にそうなのにお気楽に物見遊山としゃれこんでる奴等に

キツく当たんなって方が無理だろ」
「別に物見遊山はしてないと思うけど…っ！　呼び出し!?　別方向からもきたのか!?」
「こっちは俺に任せてお前はそっちに行け、雑魚くらい一人で何とかなる」
「…わかった」
雪花を一人で行かせると俺は残った化け物どもの方を向く
「さぁて化け物ども…俺一人で悪いが楽しく遊ぼうぜ」

化け物どもを相手し終えた俺が一人で雪山に戻ると、既に雪花が戻ってきていた
「早かったな、そんなに楽勝だったのか?」
「いなかったよ、見間違いだったみたい」
「そうか…やっぱみんな精神的にガタついてんのかもな」
「仕方ないとは思うけどね」
「そうは言ってるが、雪花は雪花でうんざりしてんだろ?」
「…やっぱりわかるんだ」
「お前が外面取り繕うの得意なのは知ってるが、クソほど付き合い長くなったし嫌でも分かる」
「そっかぁ…それにしても、精霊もこれくらい手伝ってくれればいいのに」
「言ってやんな…ほれ、油揚げだ」
貰ってきた油揚げを狐みたいなゆるキャラの前に差し出すと、そいつはもしゃもしゃと食べ始めた
「それにしても、この精霊ってのは何なのかね」
「味方してくれてるカムイの遣いらしいけど…ん?　この洞窟を他の人にも教えてあげたらどうかって?」
「狐さんか?」
「うん。そう言ってきてるけど、それじゃ人の気配が増えて天からきた奴等に見つかるかもでしょ?」

「そうだな」
「精霊さん精霊さん。私は勇者やってるけどか弱い人間でもありまして。生き延びるのに必死なわけですよ、それが悪いこととは思わないね」
「そうだな、それに…全員で地下に潜った所でリソースがなくなって全員ポックリだ。分かるかい？　狐さん」
「そ、頑張れるだけは頑張るけど。いざとなれば私たちはここに逃げる！　でしょ、要？」
「…あぁ、そうだな」
　それが俺たちにとっては最善の策であることは分かってる、だが妙に釈然としないのはなんでだろうな

　その日の夜、俺が雪花パトロールと称して街を歩いていると民家の中から話し声が聞こえてきた
『会議も三時間を超えましたが…　どうしましょうか？』
『続けるべきだ。とにかく何か突破口を見出さねば全員死んでしまうぞ』
『及川さん。そういう周囲が不安になる言動は慎んでいただかないと』
「…結論の出ない会議を続けるのは仕方ない。話していないと不安だって言うのは分かる」
「だが、どいつもこいつも出てくるのは結局自分の保身話だけ……だろ？」
「そっ、そりゃ私たちも独自で保身しますわ」
「例えばどんなだ？」
　俺の話しに相槌を打った雪花に対してそう言うと、少し笑いながら彼女は答える
「夜の見回りとか、勇者になれば聴力も増す。お偉いさんのいる家の外で聞き耳立てれば中での声が聞こえてくる…要もそうでしょ？」
「俺は聴力が増してるわけじゃない、持ってる力を使って一時的に聴力を強化してるだけだ」

俺がやってるのは純粋な強化じゃない、自身の能力を使って無理やり火事場の馬鹿力を使えるようにしてるだけだ
『やはり大型の船に乗り込み本土に向かうしかないでしょう。勇者様に護衛して頂き』
『中な。カムイの庇護下だから生活できるというのに。勇者様は今まで通りここで皆を…』
『なんとかしてカムイの力を高めることはできないものか。カムイにおくりものが必要であるのならいつでも出すのだがな。生贄を』
『生贄ならばただ死ぬよりも有益な死というものだろう。今度試してみないか』
「腹に一物抱えてても表向きには全員協力的…だがそろそろダメになって来てるかもな」
「そうかもね……寒いなぁ、ほんと」
「そろそろ行こう、もっと冷え込みそうだしな」
「俺が温めてやるとか、気の利いた事言えないもんかねぇ
「黙ってろ」

「うぁぁぁ助けとくれぇぇ!!」
「はいな！　今助けますよ!!　要は向こうよろしく！」
「委細承知！」
住民の声を聴いた俺たちはいつものように、化け物退治にいそしんでいた。それにしても、少しずつ数が多くなってきてるな
「よし、全滅ね？　はーっ…ミッションコンプ。さ、さらにキツくなってきた…要、そっちは？」
「誰に聞いてる？　まだまだ余裕に決まってんだろ」
「…肩で息してる人の言葉には見えないけど」
「うるせぇ」

「勇者様、従者様、お疲れ様です」

「はいです。犠牲者はなかったようですね。良かった良かった」
「ですが救出手順を間違えてもらっては困ります。優先されるべきは指導者たる私の安全」
「勇者として目の前で襲われた人を見殺しにはできませんよ」
「子供を助けるのならばまだ分かるのです、後の戦力でもあるのだから…が、はっきり言って老人は足手まといです」
及川と呼ばれていた男の言葉に、その場にいた全員は愕然とする
「勇者様。いらない人間は捨てる勇気を。この地域が生き残るためにも」
「はっ！　それなら真っ先にテメェが犠牲になったらどうだい？」
「ちょ、要…」
雪花に対して流石の俺も我慢の限界だった
「なんだと？」
「聞こえませんでしたかい、いやぁ失礼。他所より自分の保身を前面に出してるクソは死ねって言ってんだよ」
「貴様…勇者様の従者だからと言って偉そうにッ！」
「戦う力もないのに威張ってる奴ほど偉そうにしてるつもりはねぇよ」
そう言うと俺は及川の首に刀を突き付ける
「それとも…今この場でテメェの首落として化け物への手土産にしてやろうか？　…って化け物もテメェみたいなゴミ渡されても食わねぇか」
「…要、その辺にして」
「ツチ……わぁったよ」
そう言うと刀を引っ込めて俺はそそくさその場を後にした

それから俺たち二人で街の見回りを続けていると一人の女の子が雪花に近寄ってきた
「おばあちゃんを助けてくれてありがとう、勇者様！　従者様！」
「ん、良かったね無事で。そっちこそ偉いね、元気で」
「勇者様がいてくれるから！」

「…そっか」
「良かったじゃねぇかよ、勇者様？」
「もちろん従者様も一緒！」
「…そりゃどうも」
「あれ？　要ってばもしかして照れてる？」
「うっせ」

　見回りから戻った俺たちは洞窟内の快適化に努めていた
「ハンモックを設置してみたりして。うん。快適な避難場所になってきたね」
「ちょっとした秘密基地だな」
「どう？　ワクワクしてくる？」
「ワクワクしてくる」
　二人でいつも通り軽口を叩きあっていると、雪花は急に黙る
「どうかしたか？」
「…ねぇ、要」
　いつもより真剣な声を聴き、俺は雪花の方を向く
「要はさ、本州に行くべきだと思う？」
「は？」
　雪花の発した唐突な言葉に、俺の思考は一瞬止まる
「及川さんも、いよいよだし。このままだと要は何かしらの理由を付けて追い出されることになる…もしかしたら生贄にされるかも」
「それがどうした、別にアイツ一人くらいなら叩き切れる」
「要には無理でしょ」
「なに？」
「だって…要は凄い優しいじゃん、私と違ってさ」
「そんな事」
「あるよ、要って口は悪いけど結局自分より誰かの為に動くことの方が多いし、自分の事ばっかりな私とは大違い」
「それは聞き捨てならねぇよ、雪花だって頑張ってんだろ、不器用なだ

けで」
「そんな事…ッ！　また敵！」
「話は後だ、行くぞ」
「しゃあないか、もうちょい頑張りますよ！　出撃！」

市街地までやって来た俺たちはいつも通り化け物どもをぶった切っていく、雪花の方を見ると彼女も槍を使って着実に敵の数を減らしていた
「うん？　あぁ敵がこっちに来た!!　勇者様！　何をしているのですか！　こちらに敵が来ております！」
「手が離せないんです！　すぐに行きますから頑張って！」
「しゃあない、俺は行ってくる」
「…任せた！」
例え気に食わない奴でも人に変わりない、俺は及川の方に向かっていた化け物をぶった切ると声をかける
「指揮官づらしてねぇでさっさと逃げやがれ…って待てッ！　そっちは！」
俺の言葉を聞いたアイツは礼の一つも言わずに逃げたのを確認して敵に向き合おうとするが、アイツの逃げた方が問題だった。アイツが逃げたのはまだ化け物がいるか確認できていない場所、慌てて向かうが俺が辿り着くよりも速く現れた化け物にアイツは食われる
「クッソがぁぁぁッ！」
口を人の血で濡らした化け物に向かった俺は、激情のままに周りにいた奴らを殲滅する

「おぉ助かりました、勇者様！　従者様！」
市街地の化け物を殲滅した俺たちは、そのまま住宅街の化け物もすべて倒し終えると、住人の一人が俺たちに感謝の言葉を述べてくる
「でも…及川さん…間に合わなかった。すみません力不足で。」
「いや、あの人を助けられなかったのは俺だ…もう少し周りを見えていれば」

「いえ、勝手に一人で動き回っていた及川さんに非があるのです」

洞窟内に戻った俺たちは改めて雪花と話をする

「雪花…あの話の続きだ、どうして本州に行った方が良いなんて言った？」

「何度も言ってるでしょ、要は優しすぎるんだよ。及川さんの一件だって気に食わないのに割り切って…助けられなかったら責任感じて」

「それは雪花も一緒だろ」

「違うよ、似てても違う…きっと要はこの場所にいたら、いずれ壊れる」

壊れる？　俺が？

「要はこれからも私たちじゃ守り切れないものもある…要はそれを全部背負って潰れちゃう気がする。だから私なんかよりも本州に向かって信頼できる仲間を作った方が良いんだよ」

「お前…ふざけんなよ！　背負うとか背負わねぇとか関係ねぇ！　仮に背負ってても俺が勝手に背負ってるだけだ！」

「ほら、そういうとこ。いつも自分が自分がって…　それに正直、私は要のそういう所が嫌い」

「なに？」

「昔っから、自分の為じゃなくて誰かの為に頑張ってるところが。私は大嫌い」

「…そうかよ」

「うん。だからさ、もういいんだよ…こんな場所捨てても」

雪花の言葉を聞くがどうにも納得いかない、彼女は彼女で結局俺の事言えないじゃねぇか

「なら、お前はどうすんだよ」

「私はほら、ほどほどに頑張ってダメになったら見捨てて一人でここに隠れるだけだよ」

「できねぇだろ…お前の大嫌いなバカと同じように、随分お人好しみ

たいだからな」
「なにそれ、どういう意味」
「そのまんまの意味だよ…お前はお前で一人勝手に抱え込もうとしやがって。結局似たモノ同士なんだよ、俺らは」
「要と似たモノ同士ってすんごい癪に障るんですけど」
「…まぁいいや、お前がそこまで言うなら本州だろうと何処だろうと行ってやるよ。もうここには戻ってこねぇ」
「そうしろそうしろ、クソガキ」
「うっせエクソ眼鏡…じゃあな」
「…あぁここも一人になって清々する！　広く使えるし！」
　もう知ったこっちゃねぇ。この話はいつまで経っても終わりそうにない…　それなら俺が折れてこっちも勝手にさせてもらう、本州にでもなんでも行かせて貰う
「…ねぇ、要」
「んだよ」
　そそくさと洞窟から出ていこうとする俺を雪花が呼び止める、こうして話をするのも最後かも知れないし聞くだけ聞いておこう
「こんな事言うのほんとは凄い嫌なんだけどさ…」
「……」
「お願い、私の事…忘れないでね」
「忘れねぇよ、忘れられるわけねぇだろ」
「そっか、じゃあね」
「あぁ、生きてたらまたいつか」

　そう言って俺はまとめた荷物を持って洞窟から出ていき、本州に渡った
　ここからの話は知っているだろう、本州に渡った俺は四国の壁についての情報を知る…そして大阪の惨状を目の当たりにした後、四国でかけがえのない仲間たちと出会う
　喧嘩別れとあいつらに言ったが、少し違うな……言葉が足りなくて

俺は大切な言葉を伝え忘れただけだ。けれどその言葉は今は取っておくことにする。いつか世界を取り戻した時にでも伝えにいくから、何はともあれこれで俺の…俺と雪花の話は終わりだ

雪の降る崩れた街並みで、私は一人化け物どもを倒し終える
襲来する化け物の数は日に日に増えて行っていい加減諦めても良いかと思うときもあったけど、結局化け物退治に赴く毎日
「要…私たちが似たもの同士っての、間違ってなかったみたい」
廃墟に腰をかけて一人黄昏ていると、あの時助けた女の子がこっちに向かってきた
「どうかしたの?」
「うん!　勇者様!　これ!」
私に差し出してきたのは一枚の絵、お世辞にもうまいとは言えなかったけど、何が描いてあるのか分かる。女の子とおばあちゃんと私…そして要の四人
「そういえば勇者様、従者様は何処にいったの?」
「うん?　要はね…　もっと大勢の人を助けに行ったんだ」
「そっかぁ…もう会えないの?」
「ううん…きっと会えるよ。だって……要は私にとっての勇者様だから」
「そっか!」
「よし!　勇者秋原雪花、もうひと踏ん張り頑張りましょうかね!」
女の子をおばあちゃんの所まで送った私は、頬を叩いて気合いを入れ直す
本当にギリギリになったら諦めるけど、もう少しだけ頑張ってみる…だから要も頑張れ、雪の降るこの場所で私は応援してるから

西暦―乃木若葉は勇者である―
1話―出会い―

今俺の眼前にあるのは、四国とそれ以外の地域を隔てる壁
どうしてここにいるのか、何を目的でここに来たのか
「とりあえず、登るか」
何故か分からないがこの壁を登らないといけない気がする
そんな思いで壁を登り始めてから数時間、壁の頂上に辿り着いた俺が見たのは少し離れた所にある街の風景、それを見ると自然と笑みがこぼれたがここで一つ問題があることに気付く
「ここまで来たがどうやって降りよう」
そう、登るのに数時間かかったこの壁からどうやって降りるかである、登るときはそこらへんにある廃材を利用して壁まで辿り着いたが今は周りを見ても何処にも足場として使えそうな廃材はなさそうだ・こうなった場合の対処法は一つ、覚悟を決めるしかない
「泳ぐか」
覚悟を決めた俺は、壁から海に向かって飛び降りた

「無事勝てて良かったな！　杏！」
「そうだね、タマっち先輩」
タマ達勇者がバーテックスに初勝利を収めてから数日が経った頃、タマと杏は二人で買い物が終わって帰り道を歩いていた。
「それにしても、どこもかしこも勇者フィーバーだな」
「嬉しいけど、流石に少し疲れるね・・・　ってタマっち先輩！　あれ！」
二人で話してると杏が急に海の方を指さすからそっちを見ると、浜辺に人間が打ち上げられているのが見える。
「おいお前！　大丈夫か!?」
タマがそいつに近づいて声をかけると疲弊しきった声でそいつは

言った。
「流石に遠泳は・・・疲れた」
わけの分からないタマと遅れてきた杏を置き去りにして、そいつは寝息を立て始める
「流石にこのままにしておく訳にはいかないよな？」
「そうだね・・・とりあえず、大社に連絡した方がいい気がする」
杏が大社に連絡をしている間に、タマはこいつを仰向けにする．それにしても
「それにしても、なんでこんなにボロボロなんだ？」

目を覚まして最初に目に入ったのは、真っ白な天井だった。若干ぼやけている頭を少し働かせると、とりあえずここが病院であることは理解できた。
「・・・ここ、何処だ？」
「おっ、目が覚めたんだな」
俺が体を起こすと、近くに座っていたらしい少女が俺に声をかけてきた。
「浜辺に打ち上げられてたお前を、タマと杏が助けたんだ」
「そうだったのか、ありがとう」
「おう！　もっとタマ達に感謝しタマえ！っと、そういえば自己紹介がまだだったな、タマの名前は土居球子って言うんだ！　タマでいいぞ！」
「タマ・・・よろしく頼む」
「おう！　それで、お前の名前は何て言うんだ？」
「俺の名前は」
自分の名前を思い出そうとしているだけなのに記憶に靄がかかったような感覚に陥る、濃い霧のかかった道を歩いているような感覚だ。
「どうしたんだ？」
言葉に詰まっているのに違和感を覚えたのか、タマが聞いてくる。

「いや、すまない。今思い出すから少し待ってくれ」
　誤魔化そうとも考えたが下手に誤魔化すのも失礼だと思い、正直に言うとすぐに名前を思い出すことが出来た。
「思い出した…俺の名前は不知火要、よろしく頼む」
「不知火だな！　こっちこそよろしくな！」
　それからしばらくタマと話をしていると、病室のドアが開き医者と一緒にもう一人の少女が入ってくる。
「目が覚めたんですね、良かった」
「おぉ！　杏！　戻って来たんだな！」
　タマがその少女の事を杏と呼んだことで、彼女が俺の事を助けてくれたもう一人の人物であることを理解する。
「疲れている所申し訳ないが、体の検査をしたいから一緒に来てもらえるかな」
　入口の所で話していたタマと杏のことを見ていると、杏と一緒にいた医者が俺に話かけてきた、個人的には体の不調などはないが浜辺に打ち上げられていた人間を検査するのは当然かと思い、返事をする。
「わかりました」
「それじゃあ私に付いてきてくれ、車椅子等は必要かい？」
「大丈夫です」
　そのような事を話した後、医者の後ろを歩いて検査室まで向かおうとすると何故か二人もついてきていた。
「どうしてお前らもついてくるんだ？」
「そりゃ、タマたちが助けたんだから、助けた人の状態くらい知っときたいのさ」
「タマっち先輩の言った通り、貴方の身体が健康なのかどうかわかれば、私達も安心できるので」
「そうか」
　二人の問いかけにそう答えると、杏はハッとしたように俺の方を見る
「そういえば自己紹介がまだでしたね、私は伊予島杏って言います」
「不知火要だ、失礼を承知で聞くが呼び方は杏で大丈夫か？」

「大丈夫です、私の方も要さんって呼ぶので」
「わかった」

それから俺は体や頭の検査を終え、タマと杏の二人も一緒に今の俺の状態についてを聞いた。
「不知火君の身体には特に目立った外傷等はなかったよ、健康そのものだが大事を取って今日一日は検査入院と言う形になるけど、構わないかな?」
「構いません」
「それでだ、問題なのは身体じゃなくてこっちの方だね」
そういいながら医者は自分の頭を指で軽く叩いた
「頭、ですか?」
「あぁ、君が検査を受けてる最中に土居さんから聞いたが自分の名前を名乗るのに時間がかかっていたそうじゃないか?」
「……ええ」
俺の方をじっと見つめながら医者は更に言葉を続けた。
「あくまでこれは私の推測になるのだが、君は浜辺に打ち上げられるまでの記憶を思い出せないのではないかい?」
「それって」
「記憶喪失ってことか!?」
俺の後ろで話を聞いていた二人がそう言うと、医者は首を縦に振る
「仮に記憶喪失だったら、頭部に外傷はなかったから精神的なストレスによるだと思うが・不知火君、君は何処まで自分の事を思い出せる?」
医者にそう言われた俺は、自分の記憶を探り始めると自分の名前、年齢、そして壁に辿り着いた直後の記憶以外をはっきりと思い出すことが出来ない
「自分の名前と年齢、他は思い出せないです」
「この症状に関しては思い出せるかは本人次第だから焦っても仕方ない、検査で疲れただろうから今日はもう休むと良い」
「わかりました」

医者にそう言われた俺が、診察室を出て病室に戻るとタマと杏が俺の事を追いかけてくる
「ちょっと待てよ不知火！」
「どうかしたのか？　記憶以外は特に問題ないってわかっただろう」
「いやそうじゃないだろ！　本当に大丈夫なのか!?」
「そうですよ、記憶喪失って」
「……　確かに帰る場所が分からないのは不便だが記憶がなくなったくらいで死ぬわけじゃないだろう」
記憶がないと言っても、名前と年齢がわかれば後はどうにでもなる、住む場所が無くても死ぬわけじゃない
「その考えは少しおかしい気が」
「そうか？」
「そうだ！　・よし！　不知火の事はタマ達が何とかしてやる！」
「どうにかできるのか？」
「おう！　なんたってタマ達は勇者だからな！」
「勇者…　ッ！」
勇者と言う言葉を聞いた瞬間、頭の片隅がズキリと痛んだ
そんな俺の様子を見ていたらしい杏が俺に声をかけてくる
「大丈夫ですか？」
「あぁ、大丈夫」
「そうですか…　タマっち先輩、要さんも疲れてるみたいだし今日はもう帰ろ？」
「そうだな、不知火！　明日も来るから楽しみにしてろよ！」
そういってタマと杏の二人は俺に手を振って帰っていく、手を振り返して二人を見送った病室に戻りベットの上に寝転がり目を閉じる

深い霧の中で俺は目を覚ますと同時にこれが夢なのだと自覚する
自分以外何も見えない霧の中を歩き続けていると、目の前に何かが刺さっている
刺さっている何かを掴むと、掴んだものが刺さっていた部分のみ霧

が晴れていく
その部分の霧が完全に晴れ、俺の目に映ったのは血に濡れた一本の槍だった。
これは、と思った瞬間俺の意識は何かに引っ張られるように遠のいていく

目を覚まして目に入ったのは血濡れの槍等ではなく真っ白な天井
そのことがさっきの出来事が夢であることを、更に教えてくれた
意識が少しずつ鮮明になっていくのと同時、昨日眠った時との違いを俺に教えてくれた
「静かすぎる」
静かすぎるんだ、人の話し声も鳥の囀りも、風の音さえも一切聞こえない
まるで時間が止まったように世界から音が消えている
余りの出来事に呆然としていた俺は、それよりも異常な出来事に気付くのが遅れた
「光が――」
その声と共に俺は光に飲み込まれた

2話―戦闘―

光に包まれた俺は森のような不思議な空間の中にいた
「ここは一体」
時間が止まったような静寂に不可思議な光と言う未知の状況であるにも関わらず、俺の頭は冷や水をぶっかけられたように冷静だった。
「ここが何処か分からない以上、下手に動かない方がいいか」
それから巨大な枝のような場所に隠れ動かずにいると、少し遠くから音が聞こえた
「なんだ?」
影から顔を出して音がした方を見ると、そこにいたのは正面に巨大な口がついた異形の怪物
その怪物は俺に気が付くと向きを変え俺の方に向かってくる
「さっきから何が起こってんだ…」
次々起きる訳の分からない状況に困惑しながらも、あの怪物に掴まるのは不味い気がすると感じた俺はその怪物から逃げる為に走り出す、少しでも怪物と距離を離す為に必死で走り続けるが人の足では空を飛ぶ怪物と距離を取ることが出来ず、少しずつ距離を詰められる
「不味いな」
危機的な状況であるにも関わらず冷静になっている頭を必死に動かしながらこの場をどう切り抜けるかを考えていると俺の事を追ってきていた怪物が消滅する
「勇者以外の人が樹海にいるだと!?」
「ほんとだ!なんで!?」
その声と共に俺の近くに降りてきたのは2人、金色の髪に刀を持った少女と腕に籠手を着けた赤みがかった髪の少女
「君たちは一体、それにここは何処だ?」
「それはこちらのセリフだ、勇者でもないのにどうして樹海で動けてる」
「どうしてと言われても、俺は偶然ここに迷い込んだ?だけだ」

「迷い込んだだと?」
「あぁ、病室で起きたら様子が可笑しかったから、少し考えこんでいたらここにいた」
「ねぇ若葉ちゃん!詳しい話はひとまず後にしてみんなと合流しようよ!」
「・・・そうだな、すまないが君もついてきてくれ」
「わかった」
俺は二人の後をついていく傍らで、さっきの怪物を薙ぎ払っていく
「凄いな」
「この程度すごくもなんともない、この怪物を倒すのが私達勇者の役目だからな」
俺のつぶやきを聞いたのか金髪の少女はそういってくる
彼女の口ぶりからすると、勇者というのはこの怪物どもを倒すことを役目としているらしい
「そうだ!私は高嶋友奈!君の名前は?」
「不知火要だ」
「じゃあ要くんだ!よろしくね!」
赤みがかった髪の少女、高嶋友奈はそう言うと、もう一人の少女の方を向く
「・・・乃木若葉だ」
「不知火要だ、少しの間だがよろしく頼む」
俺の言葉に答えることなく乃木若葉は、敵を切り伏せながら進んでいく
それからしばらくの間走り続けていると彼女たち以外の人影が見えてくる
「みんなー!」
「友奈さん!若葉さん!」
「大丈夫だったかー!ってなんで不知火がここにいるんだ!?」
「えっ!?ほんとだ!?」
高嶋と乃木の近くに声をかけてきたのは、昨日知り合ったばかりの二人だった

「成り行きだ、それより二人はどうしてここに？」
「どうしてって、そりゃタマたちは勇者だからな！」
言われてみればそうだ、乃木と少し言葉を交わした時にも出た勇者という言葉、その言葉は昨日タマと杏の二人も言っていた。ならば二人がここにいたとしても不思議じゃない
「話はそれくらいにして…敵が来るわ」
言葉を交わしていた俺たちに対してそういったのは二人と共にいた鎌を持っていた少女
「俺はそこらへんに隠れてることにする」
「大丈夫なんですか？」
「あぁ…それに、俺みたいなのが近くにいない方がいつも通り戦えるだろう」
杏にそういった俺は、先ほどのように木の根の陰に隠れると、勇者と呼ばれた少女たちは怪物との闘いを始める、次々と怪物を薙ぎ払っていくその光景を見ていると不意に俺の方を見たタマが叫んだ
「不知火！危ない！」
その言葉を聞いた俺は後ろを振り返ると、かなり近くにいた化け物に噛みつかれ、激痛と共に意識を失った

タマっち先輩の声をきいた私達も要さんの方を見ると、星屑に右腕を食いちぎられ、血だまりを作っている要さんの姿が目に入る
「要さん！」
要さんの近くにいた星屑を倒すと、急いで彼の方に向かう
呼吸を確認するとまだ生きていることがわかり、ひとまず安心するが体温は少しずつ下がり始めていた
「杏！不知火は！」
「何とか生きてますけど…このままじゃ」
「なら急いで星屑を倒して不知火を…」
「あんちゃん！タマちゃん！要くんは…え？」

タマっち先輩と近くに来た友奈さんの言葉が途中で止まった。二人の表情はまるで信じられないようなものを見るようで、二人の視線の先にあるものを見て私も言葉を失う

「どういう…こと？」

唯一絞り出せた言葉はそれだけだった、要さんの身体から流れ出た筈の血液は時間を巻き戻すように要さんの身体に戻っていっていたから

水の底に沈んでいく感覚に襲われ、俺は目を覚ました

身体を動かそうとしても動くことが出来ない、ただ身を任せて沈んでいくだけ

そして実感する、自分はもう死ぬのだと

このまま流れに身を任せようとした瞬間、食いちぎられた筈の右腕が熱くなり始める

「…ッ！」

咄嗟に熱くなりはじめた右腕を抑え、自分の身体が動くことに気付いた

『――、――』

聞こえてくる、頭の奥底から

『―の―、―えて―ね』

「誰だ？」

『私の事、覚えててね』

その言葉を聞いた瞬間、ビデオの巻き戻しのように映像が頭に流れ込んできた

崩壊した街の風景

人々を襲う異形の怪物〝星屑〟

そしてその星屑と戦う一人の少女

彼女と共に戦う、俺の姿

流れ込んできた記憶はその程度だったが、多少なりと思い出すことが出来た
とりあえず、俺にも戦う力があることは理解できた。それなら今やるべきことは一つだ
「彼女たちと一緒に…　戦おう」
その言葉に呼応するように現れたのは昨日夢の中で見た一本の槍。血塗られた槍ではなく深紅の槍に変わったそれを掴んだ瞬間、温かい光に包まれ意識が薄れていった

目を覚ますとそこにいたのは、呆然とした表情の杏たちだった
「どうかしたのか?」
「いや、どうかしたのかって…　大丈夫なのか?」
「大丈夫って、そうか…　俺はあの怪物に腕を食われたのか」
「そうですよ!星屑に腕を食いちぎられたかと思ったら血が要さんの中に戻っていくし…　何が何だか」
「詳しい話は後でする…　今はあの怪物を、星屑を倒す」
杏の助けを借りて、なんとか起き上がった俺は右腕のあった筈の場所に力をこめると、流れ出た血液が腕を形作り始める
「なんだそれッ!?」
「そうなってるの!?」
「これも後で話す…　必ず話す」
驚いていた高嶋とタマに言葉を返すと、腕が完全に復元される
「よし」
復元された右腕の親指を噛み血を出すと、流れ出た血が槍を形成した
「これで俺も戦える、少しだけおぼつかないがよろしく頼む」
「だーッ!よく分からんがタマたちに任せタマえ!」
「よーっし!私もうやるぞー!」
「要さん…　本当に大丈夫なんですよね?」

「あぁ、心配ない」
「わかりました、サポートは任せてください！」
右腕で槍を構えた俺は、二人と共に星屑に向かっていく

「・・・キリがないわね」
「ぐんちゃん！大丈夫！」
「高嶋さん・・・えぇ、こっちは問題ないわ」
「よかったぁ」
高嶋がぐんちゃんと呼ばれた少女と合流しているのを見ながら、俺の方に向かってくる星屑を槍で貫いていく
「不知火、やけに戦い慣れてるな」
「昔取った杵柄って奴だ・・・っと、よそ見は禁物か」
話しの最中も容赦なく襲ってきた星屑を叩き潰していると、周りにいた星屑が一つにまとまり始める
「あれは？」
「バーテックスが進化しようとしてるんだ！」
「不味そうだ、みんなと合流した方がいいんじゃないか？」
「そうだな、行くぞ不知火！」
タマと俺の二人は星屑を蹴散らしながら前線に出ている乃木の元まで向かっていると、その途中で杏たちも合流した
高嶋と一緒にいた少女は驚いたように俺の方を見る
「貴方・・・その武器は」
「タマ達にもいったが、詳しい話は後でする」
合流した俺たちが乃木の元に辿り着くのと同じタイミングで星屑も合体を終え、四本の角が足のようになっている姿に変わった
「わかちゃーん！」
「みんな！・・・と不知火!?」
「詳しい話は後って、このセリフ何回目だ？・・・まぁいいか、俺も手を貸す」
「大丈夫なのか？」
「大型と戦うのは初めてだが何とかなる筈だ・・・秘策もあるから心配

しなくていい」
「そうか…ならばここで、不知火要、君に協力を要請する」
「協力、受諾した」
俺のその言葉を聞いたみんながそれぞれ武器を構え、進化体バーテックスと対峙する
「いくぞッ！」
俺たちは乃木を先頭に進化体バーテックスに攻撃を仕掛ける
進化体バーテックスに向かっていく途中に現れた星屑を俺とタマ、高嶋で迎撃をし、杏がサポートをするなか乃木と鎌を持った少女はまっすぐバーテックスへ突っ込み四本ある角のうち一本を切断しようとするが軽く一撃を与えることしかできなかった
「ダメかッ！」
「星屑は任せた、俺が二人の支援に向かう」
「私も！」
「大丈夫だ…やりようはある」
「よっしゃ！任せたぞ不知火！」
「あぁ、任された」
タマにそういって、俺は乃木達の方に向かう
「大丈夫か？」
「不知火…あぁ、問題ない」
「なら、俺に力を貸してほしい」
「何をする気だ？」
「槍を突き刺して中に俺の血を流し込む」
「血を流し込むって、どういうことだ？」
「星屑に腕を食われて思い出したが、どうやら俺の血は特別らしい」
「よく分からんが、分かった」
乃木のその言葉を聞くと、次は乃木の近くにいた鎌を持った少女に声をかける
「君の力も貸してほしい、頼む」
「貴方の方法なら、バーテックスを倒せるの？」
「倒せるかどうかは分からない、だからこそ少しでも多くの力を借り

たい」
「…　わかったわ」
「ありがとう…　えっと」
「郡千景よ」
「ありがとう、郡」
「それで、どうするんだ？」
　乃木にそう問われた俺は、二人に対してこれからすることについてを説明する
「まず、俺があのバーテックスに近づくまで、二人にはアイツの注意を引いてほしい」
「注意を引く？」
「あぁ、そうしたら俺がバーテックスに槍を突き刺す」
「了解した」
「少し不安だけど…　わかったわ」
「よろしく頼む」
　俺がそういったのと同時に、乃木と郡の二人は左右に散開して進化体バーテックスの注意を引く
　バーテックスの注意が二人に向かったのを確認すると、全力疾走で進化体の元に向かう
　途中で、バーテックスの攻撃がこちらに向かいそうになったが乃木と郡の二人がその攻撃を事前に防いでくれたおかげで何とかバーテックスの眼前まで辿り着く
「後は全力で…　飛ぶ！」
　足に力を集中させジャンプをしたが、後少し距離が足りずバーテックスに触れることが出来ない
「不知火ぃ！これを使いぃタマぇ！」
　背後から聞こえた声に振り返ると、タマが使っていた盾をこちらに向かって投げてくる
　それを足場に使い更に跳躍した俺は槍をバーテックスに向かって突き刺す
「槍を茨のように…　溶かして内側から貫く！」

俺のその声に反応した槍は元の血液に戻りバーテックスの中に木が根を張るように広がっていく、ある程度広がりきった所で根のように張られた血液から長めの棘が生え、内側からバーテックスを貫き、消滅する
「やったな！不知火！」
「あぁ」
近くに来ていたタマにそう答えると、他の勇者たちと合流する
俺が近づいたのを確認すると乃木は俺に話しかけてくる
「不知火・・・お前は一体」
「俺の方も色々と話したいが・・・ここで詳しいことを話すのは無理そうだ、この現象が解ける」
その声と共に俺たちは再び光に包まれる

光が晴れると俺は一人、病室の中に戻っていた
すぐに誰か来るわけでもないと思った俺は、ベットに寝転がると目を閉じた

3話―質問―

目を閉じて、さっき起こった戦いの事を考えていると扉の開く音が聞こえてくる。
「おぅ不知火！　さっきぶりだな！」
「あぁ、さっきぶりだ」
タマの言葉に反応しながら、体を起こすとタマと杏の二人以外にももう一人、初めて見る少女がいた。その少女は俺に会釈をした後言葉を発した
「初めまして、不知火要さんですよね？」
「あぁ、君は」
「私は上里ひなたと言います」
彼女が一緒に来たという事は恐らく勇者の関係者なのだろうと考えていると彼女は俺に声をかけてきた
「不知火さん、疲れてると思いますが幾つか質問をさせていただいても良いでしょうか？」
「大丈夫、質問に答えるくらいは出来る」
「なぁひなた、タマと杏もここにいて構わないか？」
「要さんの事は、私たちも聞きたいです」
「…　要さん、構いませんか？」
「問題ない」
上里にタマ、杏の三人は丸椅子に腰をかけると、上里がカバンの中に入れていたノートパソコンを取り出す
「それでは、質問を始めます」
「あぁ」
パソコンの画面を見ながら上里は質問を始める
「一つ目の質問です。あなたの名前を教えてください」
「不知火要」
「二つ目の質問です。性別と年齢を教えてください」
「性別は男、年齢は１５だ」
「三つ目の質問です。あなたは何処から来ましたか？」

「壁の外だと思う・・・　すまないが詳しい場所は覚えていない」
「覚えていない？」
「あぁ、さっきの戦いで昔の事を少しだけ思い出したが、詳しい場所はまだ覚えてないんだ」
「わかりました、それでは次の質問に移ります」
「四つ目の質問です。あなたはバーテックスと戦った時に不思議な力を使っていたと聞きました、その力はなんなんですか？」
「俺が使った力は血を操る力・・・だと思う、詳しいことはまだ思い出せてないんだ」
「どういうことですか？」
「俺が思い出せたのは力の使い方だけで、どうしてこの力を使えるのかはまだ思い出せてないんだ」
「そうなんですか？」
　それから新たに二つ三つ質問をされた後、上里は軽く息を吐くと再び話し始める
「それでは、最後の質問です・・・不知火さんは勇者の事をどう思っていますか？」
　上里にその質問をされた瞬間、頭の中に今まで見たものとは別の記憶が流れ込んでくる
　前に見た荒廃した街に立っている、俺ともう一人の少女
　顔がはっきりと見えないその少女は笑みを浮かべているが何処か寂しそうに見えて、手を伸ばそうとしたところで上里の声が聞こえてきた
「不知火さん、大丈夫ですか？」
「・・・あぁ、問題ない。それで勇者をどう思っているかだったか？」
「はい」
「勇者の事はまだわからない、けれど助けになりたいとは思ってる」
「そうですか・・・質問は以上です、ありがとうございました」
　上里が質問を終えると、横で静かにしていたタマが俺のことを小突いてくる
「助けになりたいとか、いいこと言うじゃねぇか」

「そうか？」
「そうですよ、助けになりたいって言ってくれるだけでも勇気が湧いてきますから」
　タマと杏からそう言われた俺は少しのむず痒さを覚えていると、ノートパソコンを閉じた上里が二人に言う
「球子さん、杏さん、お二人は不知火さんに伝えることがあったんじゃないんですか？」
「そうだった、よく聞け不知火！　お前はタマたちと同じ学校に通うことになった！」
「学校？」
「はい、私たち勇者は全員一つの教室で授業を受けてる・・・それだけじゃなくて共同生活もしているんです」
「なるほど」
「ほんとは大社が適当なアパートの一室を用意する予定だったんだけど、戦いでのことを聞いた大社が急いで手配したんだ！」
　タマの言葉に出てきた大社と言うのは恐らく勇者を支援する組織か何かなのだろう、仮に勇者と一緒に生活することになるのなら関わることもあるだろうから、心の片隅に留めておくことにする
　そんなことを考えていると上里が俺たちに言葉をかけてくる
「あまり長居するのもどうかと思うので、今日の所はそろそろお暇しましょう」
「そうだな、タマたちはここら辺で失礼するか」
「ちょっと待ってくれ、俺は今日で退院じゃなかったのか？」
　昨日の段階では昨日一日大事を取ってと言う話だった筈だ、もう一日入院するのは病院側にも迷惑がかかるだろう、そんな俺の考えを読み取ったのか杏が疑問を解消してくれた
「病院側には大社が事情を説明して置いたらしいので心配はいりませんよ、要さん」
「・・・何も言ってないんだが」
「要さんは意外とわかりやすいですから、ね？　タマっち先輩」
「おう！　不知火は意外とわかりやすいぞ！」

出会って間もない二人にそう言われるという事は、意外とわかりやすいのだろう

その後、三人は病室を後にすると、入れ違いで昨日俺の事を診察してくれた医者が入ってくる

「やぁ、息災かい？」

「一応」

「勇者と一緒に戦ったんだってね、大社から説明を受けた時はビックリしたよ」

「そうですか？」

「あぁ、勇者たちが戦っていると聞かされても私達にそれを確認する方法はないからね」

医者の言葉を聞いて昨日樹海と呼ばれる場所に行く前に起こっていたことを思い出す。

まるで世界のすべてが静止したような静寂それは周りが静かになっただけでなく本当に世界の時間が止まっていたらしい

「何か考え込んでいる所で悪いが、またついてきてくれないか？」

「また検査ですか？」

「あぁ、大社からの依頼で君の身体を検査するように頼まれたんだ・・・可能であれば血液のサンプルも取ってくれとね」

「不満そうですね」

「当然だろう、私達医者の仕事は患者の病気を治し、健康になった人を笑顔で送りだす事だ・・・検査に関しては私の方でもう一度しようと思っていたが血液サンプルに関しては少しね」

「立派なんですね」

「立派なんかじゃない、私のくだらないプライドだよ・・・それじゃあ、そろそろ移動しようか」

「わかりました」

そういって俺と医者は病室から検査室に移動している最中に、あることを思い出した。

俺はこの医者の名前を聞いていない、たった二日とはいえお世話になった人だから、忘れないようにしっかりと名前を聞いておきたい

「あの、名前を聞いても良いですか?」
「あぁそういえば名乗ってなかったね・・・三好冬吾(みよしとうご)、それが私の名前だ」
「三好さんですか」
「冬吾でいい、そっちの方が私としても気が楽だ」
「わかりました、冬吾さん」
それから検査が終わったのは、日付けが少し変わったころだった
これは余談になるが、食いちぎられた右腕は完全に修復されていたが僅かに跡が残っておりそれを冬吾さんに質問され、正直に答えたら説教されてしまった

検査を終え、晴れて退院となる日
病室に置かれていた僅かな荷物を纏め、冬吾さんと共にエントランスで迎えを待っているとタマと杏がこちらに向かってきているのが見えた
「おーい!　不知火ー!」
「お待たせしました、要さん」
「俺もついさっき荷造りが終わったところだから気にしなくていい」
「そっか!　それじゃ早く行くぞ!」
「ここから少し歩きますけど、大丈夫ですか?」
「心配ない、体力には自信があるからな……　冬吾さん、お世話になりました」
俺は冬吾さんの方を振り返り頭を下げると、柔らかい笑みを浮かべながら冬吾さんは俺に言った
「気にしなくていい、患者が退院するのは喜ばしいことだからね」
「本当にありがとうございました」
もう一度深く頭を下げた俺は、二人と共に病院から出て新しい住居がある丸亀城へと足を進めた

丸亀城に着いた俺は二人と共に教室の前に立つ、二人が先に入っていったのを見ていた俺は一、二回深呼吸をして教室の中に入る

教室の中にいたのはタマと杏を含めた六人、全員ここ数日の間に出会った少女たちだ、そんな彼女たちに向かって俺は軽く頭を下げて言葉を紡ぐ

「不知火要です、これからよろしくお願いします」

4話―日常Ⅰ―

「勇者と言うのは、本当にすごいんだな」
「だろぅ！もっと褒めタマえ！」
丸亀城に住み始めてから数日の時が流れ、少しずつこの場所の空気にも慣れ始めたころ、俺は机の上に広げられた雑誌をタマと杏の二人と共に眺めていた
「おっ、ここに不知火の事も書かれてるぞ！」
「本当だな、小さい記事だが」
「まだ発表されてからあんまり時間は経ってない筈なんですけどね」
「壁の外の生存者…か」
勇者の記事に混じって小さく取り上げていた俺に関する記事に書かれていたのは、壁の外から来た生存者という文字
今の俺には壁の外で生きてきた記憶がない、そんな俺が壁の外の生き残りと言っていいのだろうか
「……そういえば高嶋と郡は？」
そのことを考えないようにするために、辺りを見回すと高嶋と郡の二人がいないことに気付く
「友奈さんは初めての戦いで切り札を使った副作用が無いかの検査をしに病院に行っています」
「郡も一緒にか？」
「いや、彼女は特別休暇で高知の実家に帰省している」
「帰省？」
「あぁ、母親の病状が悪化したそうだ」
「母親の…病状？」
郡の母親は何らかの病気なのだろうか、それも郡が帰らないといけない程の。
そんなことを考えているのがわかったのか杏が乃木達3人に話かけた
「あの、みなさん…記憶喪失の要さんは天恐の事を知らないんじゃ」
「そういえば、そうですね」

「それなら、天恐の事を少し不知火に話しておくか」
「あぁ、タマは説明とか苦手だから任せた！」
タマはそういって自分の席に戻っていくのを切っ掛けに、上里と杏も自分の席に戻る
それを確認した乃木は黒板にチョークで書きながら説明を始める
「天恐――天空恐怖症候群は3年前に初めてバーテックスが襲撃をして以来、バーテックスに対する恐怖によって多くの人々が発症した精神の病」
説明を続けながら黒板にバーテックスと思わしき絵を描いていくが少し独創的だった、だがバーテックスとわかるため何も言わずに説明を聞くことにする
「病状の進行に伴い、徐々に日常生活が困難になり最後には記憶混濁や自我崩壊に至る」
「郡の母親は、その病気を患っているんだな」
「あぁ、一応治療も出来るんだが千景の母親は恐らく…」
彼女に関して俺は何も知らない、どんな環境で育ってきたのか
自分の事をほとんど覚えていない俺だからこそ知っていかなければならない…彼女たちの事を、この世界の事を
「少し聞きたいんだが、この近くに図書館とかないだろうか」
「図書館？」
「もう少しこの世界の事を知っておきたい」
「それなら私が案内します、そういう場所には詳しいので」
「なら、頼む」
「わかりました」
乃木との会話を聞いていた杏が図書館に案内してくれると言ってくれた。ならその言葉に甘えることにする

「よろしく頼む」
「任せてください、それじゃあ行きましょう」
授業が終わり、俺と杏は二人で図書館に向かっていた

ぼーっと夕陽に照らされる街の風景を見ながら歩いていると杏が俺に話しかけてくる
「そういえば要さん、どうして図書館に行こうって思ったんですか？」
「あぁ、乃木にも言ったがもう少しこの世界についてを知りたくなったんだ」
「急にですか？」
「…郡の母親の話を聞いて、改めて俺は何も知らなかったんだと思わされたから」
「私は仕方ないと思います、要さんは記憶喪失な訳ですし」
「記憶喪失は常識に対して無知でいいという言い訳にはならないだろう」
そんなことを話しながら歩いていると、程なくして図書館に到着する
「時間が時間なのであまり長居は出来ないですけど」
「なら、今回は図書館で読まないで借りていくことにする」
「じゃあ利用カードを作っちゃいましょう、要さんって何か身分を証明できるものを持ってますか？」
「身分証…と言うより生活に必要なものは大社から用意されている、問題はない筈だ」
「わかりました、行きましょう」
杏に手伝ってもらった俺は図書館の利用カードを作り終えるとこの街の歴史に関する本を幾つか手に取り、杏の方を向く
「今回はこの辺りを借りようと思うんだが、どうだろう」
「いいと思いますよ、どれも比較的読みやすいものですし」
「わかった、それと杏のオススメの本があったら聞きたい」
「私のオススメ…ですか？」
「検査で時間に追われていた病院の時よりも増えた自分の時間をどう使えばいいのかわからなくて、どうせ図書館まで来たんだから杏が面白いと思う本でも読んでみようかと思ってな」
「それなら、私の部屋にある本を持っていきます！」
「本当か？」

「はい！タマっち先輩は本とか読まないから感想を言い合える人が欲しかったんです」
「そうか、なら時間がある時にでも持ってきてくれ」
「わかりました！楽しみにしててください！」
「…　それと杏、図書館では静かにだろう？さっき見たルールに書いてあった」
「あっ…　すみません」
その後、俺たちは受付で本を借りて帰路につく
来るときは夕暮れだったが日はすっかり落ち、空には星が広がっていた

翌日、部屋から出て昨日借りた本を片手に教室に向かっている途中で郡と出会った
「おはよう」
「…　ええ、おはよう」
特に話もなく二人で歩いていると、手に持った本を見た郡が俺に話かけてきた
「その本、どうしたの？」
「昨日、杏に案内してもらって行った図書館で借りてきた」
「図書館？どうしてそんなところに」
「…　昨日、郡の母親の事を聞いて、この世界で何が起こったのかを知らないといけない気がしたんだ」
「ッ！…　そう」
「その件に関しては謝らせてほしい」
「謝る？」
「人のプライバシーを勝手に聞いてしまうのは、いけない気がした。だから郡に対して謝っておく…　すまなかった」
「…　あなた、変に真面目なのね」
「そういう実感はないが、どうなんだろう」

郡の方を向くと、少しだけ柔らかい表情になっている気がしている
それが少しだけ嬉しくて、自然と笑みがこぼれそうになった瞬間―
―世界の時間が止まる
「これは・・・」
「敵の、襲撃」
その言葉と共に俺と郡の二人は光の中に飲み込まれた

5話―信頼―

光が晴れた目の前に広がっているのは、森の中に似た風景
「準備はいい？」
「あぁ」
「そう、それじゃあ・・・行くわよ」
その言葉と共に千景は勇者アプリを起動すると着ていた服が勇者の物に変化する
それを横目に俺は右腕の親指を噛み切り、流れ出た血を槍の形に変化させた。
「実家から戻って早々、やる気十分だね！」
「高嶋さん・・・病院は？」
「検査だけとは言え、大事を取るようにと言われてなかったか？」
「みんな戦ってるのに、お休みなんて出来ないよ！」
「・・・・・そっか」
高嶋が来たことで柔らかい表情を見せる郡の姿を確認すると、俺は二人に声をかける
「先に行くぞ」
「えぇ」
「了解！」
二人から離れ、星屑を殲滅する為に動き始めた俺は右腕に持った槍を振るい星屑を薙ぎ払っていく
「・・・他に人いないし、試してみるか」
他の勇者との距離が開いている事を確認した俺は自分の腕で星屑を思い切り殴りつける
それを見た星屑は好機とばかりに俺の腕を噛みつく、噛みつかれた激痛と共に意識を失いそうになるが唇を噛んで耐える
腕から血が流れ始めるのを感じると意識を集中させ巨大な刃のイメージを頭の中で形作った
その瞬間星屑を血液で形作られた巨大な刃が引き裂いた
「成功だ」

星屑が消滅すると時間が巻き戻るように俺の身体に血液が戻り、噛みつかれた傷も治っていく
「…よし、次に行こう」
完全に治った右腕を動かしながら、今の場所よりも星屑が集中している場所に向かった。槍を振るい星屑を倒していくと見慣れた姿を確認する
「タマ、杏」
「不知火！…ってどうしたその服!?」
「何かあったんですか!?」
「気にしなくていい、少しアクシデントがあっただけなんだ」
「気にしないわけあるか！後で詳しく聞くからな」
「…わかった」
「今は星屑を倒して若葉さん達と合流しましょう」
「おう！前衛はタマ達に任せタマえ！」
「殲滅する」
俺とタマの二人は星屑に向かって突っ込むと二人で星屑を殲滅していく
「タマ！」
「おうよ！」
俺はタマの持つ旋刃盤を踏み台にして高く飛び上がる
「枝分かれ…貫く！」
飛び上がった俺は槍の先端を細かく分岐させ周りにいた星屑を貫いた、星屑の消滅を確認した俺は枝分かれした槍を元の形に戻してタマ達の元に戻る
「やったな不知火！」
「それにしてもすごいですね、要さんの力って」
「あぁ、力の使い方を朧気に思い出し始めて、改めてその凄さに驚かされてばかりだ…早く乃木の所に行こう」
俺たち三人が乃木の元に向かっていると、少し遠くに巨大な影を見る
「進化体だ！」

「どうする、杏」
「若葉さんと合流したいですけど、進化体の方に行きましょう」
「おう！」
「わかった」
　進路を変更して進化体バーテックスの方に向かっているのに気が付いたのか、星屑が俺たちの方に向かってきた、迫ってくる星屑を倒しながら進化体の方に近づいていくと、周りで起きている違和感に気づく
「進化体の周りにいる人の数が多い・・・？」
　進化体バーテックスの周りにいるのは全部で七人、俺たちの人数は全員で六人だ。それなのにも関わらずバーテックスと戦っている数は俺たち全員の人数を含めても一人多い
　星屑を相手にしながらよく目を凝らす、すると進化体の周りにいる人物の持っている武器は鎌でそれを振るう人物はすべて同一
「もしかして、あれが切り札か？」
　勇者が自分に精霊をおろし、その力を振るう事の出来る文字通りの切り札
　だが、切り札の行使には身体的に大きな負担がかかるから出来る限り使わないよう大社に言われていると聞いている
「郡が使っているのか」
　切り札を使っていることが分かった以上、出来るだけ早くこの戦闘を終わらせないといけないと考えていると、七人の郡が鎌を振るい進化体バーテックスを打ち倒した。それと同時に周りにいた星屑を殲滅し終える
　それからすぐに樹海が光に包まれ、先ほどと変わらない光景が広がっていた、郡と話をするために辺りを見回すと少し離れていた場所で高嶋と話をしている郡の姿が目に入った
「どこにいくつもりだ？不知火」
　郡の方に向かおうとした瞬間、後ろからタマに声をかけられる
　いつもと変わらない筈のその声は俺にとって少しの寒さを思わせるもので、ゆっくり後ろを振り向くと満面の笑みのタマと杏が目に入

る
「それじゃあタマ達にわかるよう説明しタマえ、その服の事を」
「今じゃないとダメか？」
「当然です！要さんは気が付いてないのかも知れないですけど、服の端に血が付いてますよ」
「えっ？」
思わず破けた服の端を見るが血なんてついていない、はめられた
「確認するってことは、心当たりがあるんだな？」
「心当たりがあるなら早く教えてくれよ、し・ら・ぬ・い」
「・・・わかった」
俺がやったことを話すと、タマと杏から怒りの声が飛び病院に行くよう言われた
「検査の結果は問題なし、健康そのものだね」
タマと杏に言われ病院にやって来た俺は、冬吾さんに一通りの検査をしてもらうと検査着を着直す
「それにしても、今度は一体何をしたんだい？」
「怪物の口に腕突っ込んで意図的に噛み千切らせました・・・自分の血が何処まで武器になるのか確認したくて」
「はぁ・・・あのねぇ、君のその戦い方は正気の人のそれじゃないよ？」
自分のやったことを言うと冬吾さんは呆れたように息を吐き、自分に向かい椅子に座るようジェスチャーをする。
そのジェスチャーに従い席に着くと冬吾さんはゆっくりと話始める
「いいかい要くん、君の身体は異常だ・・・本来腕を食いちぎられたり血を出し過ぎると人は死ぬ、それはわかるね」
「はい」
「ならいい、だけど君の場合原理は不明だが致命傷であったとしても元通りに傷が治る・・・医者としては商売あがったりだがそれに関し

ては置いておこう」
　言葉に一区切りつけると、冬吾さんは俺の方を真っすぐ見て言葉を続ける
「君のその体質は便利なものだが完全ではない、もしかしたらどこかのタイミングで体質がなくなるかもしれない…　なら私から言えることは、あまり自分のことを軽視した戦い方はしないでほしいという事だ。今は短い付き合いでも勇者の少女たちは君にとって大切な仲間と言えるほどなのだろう、なら彼女たちに心配をかけないようにした方が良いと、私は思う」
「…　そうですね」
「本当にわかってるのかい？」
「はい、試すにしても別の方法があったと今になって思います、それに彼女たちに相談をすることも出来たのにそれをしなかったんです、なので今回に関しては自分が一番悪いんだと思います」
「そうか、ならば良いとは言えないが出来る限り彼女たちを頼るのが良いと思うよ、人に信頼してもらうには、自分がその人を信頼するのが一番だからね」
　その後、冬吾さんと世間話をした後に診察室を出ると、エントランスホールで郡とばったり出会う
「検査は終わったのか？」
「えぇ、特に問題なしだそうよ」
「そうか…　本当に大丈夫なんだな？」
「やけに心配するわね、急に何？」
　怪訝そうな顔をする郡に対して、郡に対して素直な気持ちを口に出す
「杏たちから、切り札の使用は身体的な負担が大きいと聞いたからな」
「そういうことね…　別に問題ないわ」
「そうか、ならよかった」
　その言葉を聞いてひとまず安心する、俺が来る前ではあるが高嶋は切り札を使用したことで検査入院をすることになったという、なら郡がそうならないという保証もなかった以上心配するのは道理だろう

そんな俺の様子を見ていたのか、今度は郡から俺に話しかけてきた
「ねぇ…　貴方はどうして私に話しかけてきたの？」
「え？」
「貴方と私は一緒に敵と戦うだけ、必要以上になれ合う必要はないと思うのだけれど」
「そうだな…　最初は郡の母親について勝手に聞いてしまった事を謝る為に声をかけた」
「…　なら、貴方の目的はもう果たしたでしょう、なのに何故？」
「最初に入院した時、お世話になった医者の先生に言われた…　相手から信頼を得るにはまず自分から信頼をしろと、それが理由だ」
「え？」
「俺は郡達に背中を任せたいと思ってる、ならまずは自分の背中をみんなに任せることにする…　だが、これから信頼しようと思っている仲間が代償のある力を使ったなら心配するのが道理、なのだと思う」
「仲間…」
「変だろうか？」
「いいえ…　そんなことないと思うわ」
「そうか、ならよかった」
それから俺と郡の間に会話はなかったが、自分の正直な気持ちを伝えた事で少しだけ仲間に近づいたのではないかと…　何となくそう思った

6話―二人―

ここ数日はバーテックスの襲来もなく、平和な生活を送っている現在

この前図書館で借りた本を読み終えた俺は、大社から渡された生活費と言う名の軍資金を使って買った本を読んでいると、タマたちの席がある方から話し声が聞こえてくる

「やっぱ音楽はパンクロックだろッ！」

「そんなことないよ、音楽はバラード、そしてラブソングが一番じゃないかな」

「いや、青春の叫び、情熱の発露！パンクロック！」

「染み入る曲調、心を揺さぶる恋！ラブソング！」

顔を動かしてそちらを見ると、タマと杏が珍しく言い合いをしていた

珍しいこともあるものだと思ったが今は本の続きを読むのが俺の中の最優先事項であることと、そろそろチャイムが鳴る時間であったため視線を本に戻すと、程なくして授業開始のチャイムが鳴る

時は進み昼食時間、全員そろって昼食を取っているとタマと杏の二人を見ていた高嶋が言う

「タマちゃんとアンちゃんって、本当に仲良しさんだね！」

「タマたち、ほとんど姉妹みたいなもんだしなッ！」

そういいながらタマは杏を抱きしめ、杏の方もはにかんだ笑みを浮かべていた

俺はふと気になったことがあり食べながら読んでいた本を閉じると、二人に話しかける

「ほとんど姉妹みたいなものって、どういう事だ」

「それは、えっと少し昔のことになるんですけど――」

そう前置きすると、杏は自分のことを話し始める

「私、小さい頃から病気がちで周囲から少し距離を取られてたんです。それが私に対しての気遣いだっていうのも何となくわかってたんで

すけど、特別扱いされて、少しずつ周りから疎外感を感じるようになって、それが嫌で大好きな読書にのめり込んでいったんです…孤独感を抱きながら物語の王子様のような人が救い出してくれるのを夢想する、それがタマっち先輩と出会う前の私でした」

　それに合わせるように今度はタマが話始める

「タマは小っちゃい頃から今みたいな感じでな、女の子らしさって奴とは無縁だったんだ。毎日ケンカとか危ない外遊びをしてたから親には心配かけてばっかりで、少しは直そうとしたんだけどこればっかりはどうにもならなくて…多少憧れはあったけど女の子らしくなんてなれない、それがタマだった」

「でも、初めて襲撃があったあの日」

「他のみんなもそうだろうけど、タマたちの力化け物を倒すものだってのは理屈を超えて理解できた」

「でも、私には立ち向かう事なんてできないから、怖くて、逃げて、誰か助けてって願って」

「タマはこういう性格だから、自分にぴったりの役割だって思って、巫女の言葉通り近くの勇者を助けに行った」

「その時思ったんです／その時思ったんだ」

「自分を助けてくれた女の子が／自分にはない女の子らしさを持った女の子を」

　王子様みたいだって――

　この子を守ろうって――

　話しを終えた二人は、少し正気に戻ったのか顔を赤らめるとぎこちない笑みを浮かべながら言う

「なんか、少し恥ずかしいな…」

「そうだね…」

「いや、二人の事をもっと知ることが出来た…いい話だな」

　俺が二人にそう言うと、少しからかってやろうという笑みを浮かべた高嶋が二人に言った

「もう一緒に暮らしちゃえばいいのに」

「それは、寄宿舎の部屋が隣同士で入り浸ってるから」

「もう似たようなものですよぉ…　でも、もしタマっち先輩と暮らすなら色々大変かも、部屋の中に自転車とかキャンプ用品とか色々置いてあるからそれを片付けてからじゃないと」
「タマの部屋に置いてあるのはただの自転車じゃなくてロードバイクだ。錆びないようにキャンプ道具だってそのうち使うから！…　大体それを言うなら杏の部屋だって相当だぞ？本棚も机の上も枕元にも本ばっかりじゃん、それも恋愛小説ばっかりだ！部屋に行くたびに増えてるし」
　再び軽い言い合いを始めた二人を後目に閉じていた本を読み始めると早めに食事を終えゲームをしていた郡が俺の方を向く
「貴方…　朝からずっと本読んでるけど、それはなに？」
「そうだ！それタマも気になってたんだ！」
「実は私も…　随分熱心に読んでるから何かなって」
　その声を聞いて顔を上げると、三人だけでなく勇者全員大なり小なり気になっていたらしい、俺は帯を栞代わりに本を閉じると全員に向かって言う
「サルでもわかる上手い信頼関係の築き方と言う本だ」
「…　すまないが、もう一度言ってくれないか？」
　全員が沈黙するが、その中で乃木が俺にもう一度聞いてくる
「サルでもわか――「もういい！私の聞き間違いじゃないことは分かった！」
「そうか」
「大社から不知火さんが出かけたと聞いてはいましたが…　どうしてそのような本を？」
「お世話になった病院の先生に言われたんだ、信頼を得るには自分が相手を信頼する事だと…　しかし俺はどうみんなを信頼していると伝えればいいのかを分かっていない、だから先人の知恵を頼ることにしたんだ」
「不知火…　流石のタマもその本はどうかと思うぞ…」
　その言葉を最後に昼休み終了のチャイムが聞こえ、慌てて教室へと戻っていく

昼食の時間を終えた俺たちが午後の授業を受けていると世界の時間が静止する
俺と勇者たちはそれぞれの武器を構え、樹海化した世界で敵の進行を待っていると、猛スピードでこちらに向かってくる
「なんだこいつは」
「へ…　変態さん!?」
「…　進化体、だとは思うが中々に独創的だ」
乃木、高嶋、俺の三人は思い思いの感想を口にする、言葉を発しなかった郡や杏も若干引いていた
「あれは食えんな」
「バーテックスって食べられるのか」
「いや、食べられるかどうかとか考えないでください！要さんも食べられるなら食べようとか考えないでくださいね！」
若干気の抜けた雰囲気が漂っていた、珍しく一言も言葉を発していなかったタマが不敵な笑みを浮かべると全員の前に出る
「ふっふっふ、ここはタマに任せタマえ！」
「何をする気だ？」
「よくぞ聞いてくれた不知火！実はタマ、こんなこともあろうかと秘密兵器を持ってきていた！…　タマだけに、うどんタマだぁ!!!」
「それを…　どうするつもり？」
別に質問したわけではないが、得意げにうどん玉を取り出したタマに対し郡がそう言うとタマは得意げに言葉を続ける
「大社の人が言うには、バーテックスには知性があるんだろ？そしてあの、人の下半身みたいな姿…　やつはもしかしたら人に近いのかもしれない！」
確かに一理ある…　一理あるのだろうか？そもそも知性があると言っても奴らは人と同じものを食べるのか？と言うより食事の概念はあるのか？
「そっか！だったらうどんに反応して隙ができるかも！」

出来るのだろうか?できなくないか?
「その通りだ、友奈!この最高級讃岐うどんを前にして、人なら冷静ではいられないッ!文字通りくらえぇぇぇ!」
その声と共にタマは思い切り最高級讃岐うどんを投げたが二足歩行の進化体はうどん玉を素通りする、案の定と言うか当たり前な気がする
「「「「!!???!!」」」」
勇者に戦慄走る・・・これは俺が可笑しいのだろうか、それとも彼女たちがうどんジャンキーなだけなのだろうか
「うどんに・・・なんの反応も示さないだと!?」
驚くところはそこなのか?
「釜揚げじゃなかったか!?」
考える所そこなのか?
「ううん、タマちゃん・・・釜揚げじゃなかったとしても・・・最高級うどんを無視するなんて・・・やっぱり分かり合うことは出来ないんだね」
「・・・そのようね」
そんなに深刻な事なのか・・・ッ!?
俺は全員の前に立つと槍の形にしていた血液の形状を盾に変え、全員を庇えるように構えた瞬間激しい衝撃と共に俺は吹き飛ばされた、体を叩きつけられ一瞬意識が飛びそうになったが、何とか起き上がるとバーテックスは身体をうねらせ、もう一撃を杏に向けて繰り出す
その攻撃をタマが受けたが、威力を殺しきれなかったのか杏共々吹き飛ばされた
「くそっ、早く合流を・・・ッ!」
俺が動こうとしたタイミングで、吹き飛ばされたタマたちの方から旋刃盤が飛んできた、進化体はそれを避けるが少し遅れて放たれた矢が旋刃盤のワイヤーに引っかかり進化体を真っ二つにした
「凄いな・・・」
思わず頬が緩みそうになるが二回頬を叩いて、気を引き締め直すと乃木達と合流し残った星屑の殲滅しに向かおうとして、近くに落ちて

いるうどん玉の存在に気づく
「持って行っておくか」
俺はうどん玉を拾い上げると、手に持っていた槍をボールくらいの大きさに変えると、星屑が集まる方に全力で投擲した
そのボールを追いながらイイ感じの場所に辿りついたのを確認する
「自家製クレイモア地雷…　爆砕！」
その言葉と共に俺の投げた血液ボールは爆散し、破片が次々と周りにいた星屑の身体にめり込み消滅していく
「一丁上がり…　でいいのだろうか」
「前にも思ったが、容赦がないな」
隣にやって来た乃木にそんな事を言われたが、別にそんなことはないだろうと思う
「歴史書を読んで、相手のやって来た事を知ったからな…　加減をする理由が見当たらない」
「それもそうだな、不知火、私に続け！」
「了解、背中は預けた」
その言葉と共に俺と乃木は残った星屑の方に向かう

それから程なくして戦闘と検査が終わり、翌日の食堂
アームホルダーで腕を固定されたタマが杏にうどんを食べさせてもらっていた、骨折はしていなかったらしいが左腕は暫く使えないらしい
「うまいッ！」
「良かったな、タマ」
「あぁ…　不知火もありがとな、最高級うどん回収しておいてくれて！」
「成り行きだ、気にしなくていい」
実を言うと現在タマが食べているうどん玉は、昨日回収したうどん玉ではない

袋詰めされたとは言え、少し放置されていたものをそのまま渡すのはどうかと思い、検査の帰りがけに新しいものを買いそれを渡した。
更に余談になるが作戦に使われた方のうどん玉は責任をもって俺の昨日の夕食になった
「腕は…　大丈夫なのか?」
昨日の事を思い出しながらひとりカレーを食していると、乃木がタマに腕の調子を聞いていた
「ただの脱臼だから心配無用!でも心配してくれてありがとな!」
「軽い怪我でよかった」
「窮屈だから取っちまいたいくらいだけどな…　こんな時ばっかりは不知火の不思議体質が羨ましいぞ」
「取るのはダメだよ、怪我が長引いちゃう」
「…　俺の体質も良いことばかりじゃない、すぐ直ると言っても痛覚はあるからな」
「そういうもんなのか…　うまい!」
タマは俺のそんな言葉を聞きながら杏に食べさせてもらったうどんに舌鼓を打っていると、それを見ていた高嶋が遠慮がちにタマに言った
「そのうどん、私も一口…　貰ってもいいかな?」
「友奈、あのうどんはいわば球子の戦利品だ…　一口くれなんてはしたないぞ」
「若葉ちゃんこそ、よだれよだれ!!」
「見事なまでに説得力がないな」
「き、気のせいだ!」
「若葉ちゃんも食べてみたいくせにぃ、どう?タマちゃん」
「えー?どうしよっかなぁ」
戦いの間にあるつかの間の平和と勇者たちの日常、そこには確かに絆がある
まだ作りかけかもしれない絆、それを見ながらいつか自分がそこに入れると良いな等と考えながら、俺は残ったカレーに舌鼓を打った

7話―熱した鉄は、壊れやすい―

「気が安らぐ…　眠くなってくるな」
今勇者全員で来ているのは高松市にある温泉旅館
あの戦いの後暫くの間、襲撃は無いと言われた俺たちは休養期間としてこの旅館に宿泊しているというわけである
「…　一体俺は誰に向かって話しているのだろう」
最近はタマや杏たち勇者に囲まれていた所為か、一人でいる時間に寂しさを覚えるようになってきた
「そろそろ上がるか」
一足先に温泉から上がり、みんなが出てくるのを待っていると一足先に高嶋が出てくるのが見えた。高嶋も俺に気が付いたのか手を振って俺に声をかけてくる
「お待たせ―！」
「いや、そこまで待っていない…　高嶋こそ、まだ入っていても良かったんだぞ？」
「……」
「どうかしたのか？」
「苗字！」
「えっ？」
「そろそろ名前で呼んでくれてもいいんじゃないかな？」
「それもそう…　なのか？」
「そうだよ！それに、仲良くなりたいならまずは名前で呼び合う所から、だよ！」
「そうだな…　これからは名前で呼ぶことにする」
俺が名前で呼ぶことを了承すると若干むくれていたたかし…　友奈はいつも通りの笑顔を見せた
「そうだ！それなら若葉ちゃん達も名前で呼んだらいいと思うよ」
「他のみんなもか？」
「うん！」

「はぁ、満腹！」
「食べてすぐ寝ると牛になるよ」
「むしろそれが狙いだ！タマは牛のようにデカく強くなるんだ、宇和島の闘牛のように！」
「そういう牛にはなれないと思う・・・」
　全員が温泉から上がり、夕食を食べ終えると球子がすぐに寝転がった、それを見ていた杏がタマにちょっとしたことを言いタマがそれに返事をする
　当たり前になった日常を身近に感じると、最近は安心を覚えるようになってきた
「ご飯、すごく豪華だったね。値段を想像すると怖いけど」
「やはり、四国勇者への特別待遇なのでしょうね・・・。丸亀城にも、四国各地から〝勇者様へ〟と様々なものが送られてきています。食べ物もですし、高級工芸品なんかも・・・」
「そうだな、初めは何かの宣伝目的の贈答品かと思ったが・・・違う」
「なら、俺がここにいるのは場違いな気がしてくるな」
　今回の破格の待遇が勇者に対しての物なら、勇者でない俺がここにいていいものかと疑問になってくる。そんな俺に気が付いたのか上里が俺の疑問を解消するために話を始めた
「それは違います、不知火さんは確かに勇者ではありませんが勇者と共に戦う者であることに変わりはありませんから」
「俺は勇者ではないが世間から見たら勇者だと言う事になるのか？」
「そうなりますね」
「少し複雑な気分だ」
　勇者じゃないのに勇者扱いされるのは、複雑な気分になってくる
「私は当然の待遇だと思っているけど・・・　私達は政治家や芸能人なんかには到底出来ない事を・・・　やっているんだから、もちろん貴方の待遇に関しても間違っていると思っていない」
「当然の待遇・・・　か」

郡にはそう言われたが、少しずつマイナス方面になり始めたので、別の事を考える為に、ここで友奈に提案されたことをみんなに言ってみることにする

「そういえばさっき友奈に言われたんだが、信頼関係を示すためにみんなの事を名前で呼びたいんだが、大丈夫だろうか？」

俺の言葉にみんな目を見開いていた。

友奈の事を名前呼びした瞬間、郡の方から少しだけ圧を感じた気がするが気にしないでみんなの反応を待つ

「タマと杏はいまさらだよな」

「そうだね、結構初めの頃から名前呼びだったし」

「提案したのは私だし、私は良いと思うよ！」

名前呼びだったこともあり特に疑問はなかったタマと杏の二人に提案してくれた友奈は肯定的に言ってくれた

「そうですね、不知火さんとは少し距離を感じてましたし良い機会かもしれませんね」

「私も良いと思う、呼び方の違いは些細なものだが、それでも戦闘においては大きなものになると思うからな」

「私は…　まぁどっちでもいいわ」

「そうだ！この際タマ達も不知火のこと名前で呼ぶことにしようぜ！」

「賛成！良いと思う！」

乃木と上里の二人も肯定的に言ってくれた、郡も否定的ではないようでひとまず安心する

全員を名前呼びすることに決まったわけだから改めて全員に言っておこう

「改めて…　若葉、ひなた、タマ、杏、友奈、千景、これからもよろしく頼む」

「おう！改めてよろしくな要！」

「これからもよろしくお願いしますね、要さん」

「よろしくお願いします、要さん」

「要、これからもよろしく頼む」

「一緒に頑張ろうね！要くん！」
「……　よろしく」
　たかが呼び方、されど呼び方
　呼び方一つではあるが少しだけ信頼関係が築けたのではないかと思う
「よし！温泉にも入ったしご飯も食べた…　だが寝るには少し早い、と言う事でみんな！ゲームでもするか！」
「ゲームですか…　こんなこともあろうかと将棋盤なら持ってきました」
「ヒナちゃん渋いね！私は王道だけどトランプ！」
　カバンからそれぞれ将棋盤とトランプの束を取り出したひなたと友奈の二人
「ゲームなら…　そこにあるわ」
　千景がテレビを指さすとその下にはゲームのハードらしきものが置かれていた
「他にも、人狼だったら紙とペンとスマホのアプリがあればできますね」
「よしっ！だったら全部やるっ！そしてタマが全部勝つッ!!」
「勝負事とあれば、俺も真剣に取り組もう」
「おっ、やる気だな要！だが勝つのはタマだ！」
　結論から言うと、俺とタマの二人は全く勝つことが出来なかった
　正確に言えば、ほとんどのゲームで千景が圧勝だった、将棋、トランプ、人狼等、普段からゲームをしているだけあって千景はめっちゃ強かった
　千景に手も足も出ず敗北したタマと杏の二人は現在部屋の隅で落ち込んでおり、俺も部屋の壁に背をつけ真っ白に燃え尽きている
「さすがぐんちゃん、全勝だね」
「得意だから…」
　現在はトランプ勝負の決勝戦、若葉と千景の一騎打ちと言う状況である。
　少しの間だが一緒に過ごして千景が若葉の事を若干ライバル視し

ている為、この勝負は彼女にとって負けられない戦いであるのだろう、気迫が伝わってくる
「この勝負も、次で決着・・・今回も、勝つ」
「現在一勝一敗だ、今度こそ勝ち越させて貰うぞ」
千景とゲームに慣れ始めた若葉の二人は接戦のままゲームは進んでいった
ボーっと見ていたが徐々に千景の表情が苦しいものに変わっていっていることに気付いた、少し周りを気にすればだれでも気が付けるその変化に若葉は気付く様子はない
「絶対に・・・負けない・・・貴方には・・・ッ！・・・絶対・・・」
若葉が最後の一枚を場に出そうとしたタイミングでひなたが若葉の耳に攻撃を仕掛けた事で結果は千景の勝利に終わった、その後ひなたを追いかける形で若葉が出て行ったのを見て、俺もゆっくりと腰を上げた
「どっか行くのか？」
「時間が時間だからな、飲み物でも買って部屋に戻る」
「そっか、また明日な！」
「おやすみなさい、要さん」
「あぁ、おやすみ」
その言葉と共に部屋を出ると、丁度戻ってきたひなたとすれ違った、彼女に部屋に戻ることを言うと少し後ろから若葉が戻ってくる
「要・・・部屋に戻るのか？」
「あぁ、そういう若葉は浮かない顔だな」
「あぁ、少しな」
「そうか・・・今から話せるか？」
「？問題はないが」
「なら少しだけ付き合ってくれ、飲み物は奢る」
そう言うと俺は若葉を連れて自販機のある場所まで向かう
「飲み物を買いに行くのに付き合えという事か？」
「あぁ、どうせなら全員分適当に買っていこうと思ってな」
「そういうことか」

最初に自分用の飲み物を買うと、若葉の方を見ずに言葉を続ける
「それで、ひなたに何て言われたんだ」
「・・・自分の周りの人のことも、もっとよく見てあげてくれと言われたんだ」
「そういうことか」
「何か心当たりがあるのか!?」
「若葉、それ以外にもひなたに何か言われただろう」
「自分で気付かないと意味がないともいわれた」
「・・・それなら、俺から言えることは何もない」
「そうか・・・」
「飲み物も買ったし、部屋に戻るか」
部屋に戻っている最中も若葉はひなたに言われたことを考えているようだった
五人分の飲み物を若葉に渡した俺は、若葉が気付く助けになればと部屋に戻る前に一言言っておくことにした
「最後に一つ、熱した鉄は壊れやすいという事を覚えておいて欲しい」
「どういう意味だ?」
「鉄は熱すると加工しやすくなるが同時に脆くなる・・・ただの戯言だが、若葉には鉄を壊す側の人間になって欲しくないからな」
その言葉を最後に俺は扉を閉め自分の部屋に戻った

休養から半月ほどが経ちバーテックスの襲撃が起こった
敵の数は現在の十倍以上、マップに表示されている敵を見ながら若葉は険しい顔で言う
「多すぎる」
「いままでの十倍・・・ううん、それ以上いるかも」
「それなら、今回はいつもより慎重に行った方がいいかもしれないな。杏、何かいい作戦は?」
「そうですね、敵の数が数なので全員離れすぎないように立ち回るの

が一番かと」
「やっぱりそうなるか」
俺たちが話す傍らで険しい顔をしていた若葉は、皆より少し前に立っていた
「若葉、作戦は――「私が先頭に立つ」
「待ってください、若葉さ――」
俺と杏が言い終える前に若葉は敵の方に向かって行ってしまう
「俺も後を・・・ッ！」
若葉の後を追おうとした俺に大量の星屑が襲い掛かってくる
今までよりも統率の取れた動きで攻撃を仕掛けてくるバーテックス相手に中々若葉と合流することが出来ない
「きりが無いな」
「不知火君！」
「千景か・・・何かあったのか？」
「高嶋さんが乃木さんのところに一人で向かっていって・・・」
「ッ！・・・わかった、二人より三人の方がいいだろう、千景はタマたちのフォローを頼む、友奈と若葉の方には俺が向かう」
「・・・わかったわ」
俺は無理やりバーテックスの包囲網を突破すると若葉と友奈の元に急ぐ
それにしても、バーテックスの行動が知能的になり始めている気がするのは気の所為だろうか
「今まで以上に、慎重に行かないとな・・・いた、若葉！友奈！」
「要！」
「要くん！」
「二人より三人だ、俺も一緒にここを受け持つ」
若葉と友奈のフォローをしつつ星屑を打ち倒していくがこのままだとジリ貧であることに変わりはない
それに、俺のこの体質はあくまでも自分を死なない程度にするものだと、この戦いの中で気が付いた。切り傷や打撲の修復はされない、体の部位が損傷するか致命傷を受けない限り、修復機能が発動するこ

とはなかった
「意図的に致命傷を受けて全快するか?…　いや、それだと若葉たちをカバーする時間が足りない…　なら、このまま行くしかない!」

その後、俺たちは星屑の猛攻を耐え抜きなんとか全員生き残ることが出来た
けれどそれは辛勝…　勇者たちは満身創痍、友奈は意識を失い病院へと運び込まれた
病室で眠る友奈を俺たちが見守っていると、乾いた音が病院の廊下に響く
「乃木さん…　どうしてあなた、あんな勝手なことをしたの…　!?」
「伊予島さんも不知火くんも全員が安全に戦える方法を相談していた…　なのにあなたが一人だけで勝手に戦おうとするから、高嶋さんが……　ッ!」
普段なら俺も含めて誰かしらが止めていた筈だ、けれど今回は誰も止めずに見守っている。
きっと千景が責めなければ千景以外の誰かが責めてしまっていたから、今は事の成り行きを見守っているのだと思う
「自分勝手に特攻して…　高嶋さんを巻き込んで!不知火君が居なかったら高嶋さんの負担はもっとひどいものになっていたかもしれない!…　精霊の力を使うなり負担を減らす手段もあったのに、あなたはそれすらしなかった!」
千景の言葉を聞いた若葉は何も言わない、きっと彼女も色々考えているのだろうがそれを知るすべは今の俺たちにはないから
「あなたは…　周りが何も見えていない…　!自分が勇者のリーダーだってこと…　もっと自覚すべきよ……　!!」

鉄は、熱すると加工しやすくなるが同時に脆くもなる
幾つかの戦いとその合間の平和な日常で培った俺たちの絆は、熱した鉄と似たようなものだった
これからどんな形でもなれるが、ちょっとしたことですぐに壊れる
今の俺に、それを直す手立ては思いつかなかった

8話―雨降って地固まる―

月の光が照らす月の中、俺は一人千景が若葉に言った事を思い返していた

あの戦いの翌日、目を覚ました俺は友奈の様子を見に行くと既に千景が来ていた
「来てたのか」
「えぇ…」
「… すまなかった」
「どうして… 貴方が謝るの?」
「俺がフォローしきれていれば、友奈は今より軽傷ですんだかも知れないから」
「それなら、謝る必要はないわ… あの時は全員に余裕がなかったから… それでも、割り切れないものはあるから」
「いや、あの場で千景が言ってくれなかったら、きっと他の誰かが若葉に怒りをぶつけていたと思う」
あの場所では千景のやったことが最善だったと思う
それから話すこともなく、二人で友奈の事を見ているとタマと杏の二人もやって来た
「二人も来たんだな」
「おう!」
「やっぱり心配ですから」
「早く目を覚ますと良いな」
話す事も思いつかず四人で友奈の病室の前にいると残りの二人、ひなたと若葉もやってくる
「よう」
「あぁ… 友奈の様子は、どうだ?」
「… まだ意識は戻りません」
若葉の問いに杏がそう答えると、若葉は目を伏せ俯いた
「大丈夫ですよ… この病院には、最良の設備と最高の医師が揃って

います。検査でも、命に別状はないということでしたから」
ひなたはそういうが、全員の気持ちが明るくなることはない
友奈が死ぬはず無いと信じているが、それでも不安が無いと言ったら嘘になる
「どうして…こんなことに…」
「これが…貴方の引き起こした結果よ…」
拳を握りしめてそういう若葉に対して、千景は一歩前に出てそういった
この中で友奈と一番仲の良かった千景にとって、今回の原因が若葉であると感じてしまっている以上責めたくなってしまうのだろう
若葉の方も自分の独断専行が原因であることは理解しているだろう
「なぜこんなことになっているのか…貴方は分かっているの?」
「分かっている。私の突出と無策がすべての原因だ…」
若葉のその言葉を聞いた千景は振り絞るように言葉を発する
「違う……!」
「やっぱり貴方はわかっていない…!一番の問題は、戦う理由なのよ…!」
「戦う、理由?」
若葉の戦う理由?
「あなたはいつも、バーテックスへの復讐のために戦っている!…だから怒りで我を忘れてしまう!自分が周りの人間を危険を晒しても、気づきさえしない!」
千景の声が病院の廊下に響く
その言葉はここにいる全員に聞こえていたが誰も若葉を擁護することはできなかった。
「あなたに、私達のリーダーとしての資質なんて、ない…!貴方が戦うことで、高嶋さんは傷ついた…高嶋さんだけじゃない、みんな傷ついていく!…きっとそれは、これからも変わらない!…だったら、もう――」
「そこまでだ、千景」

これ以上は本当に取り返しがつかなくなる、そう思った俺が千景の事を止めると、杏が声をかけてきた
「流石に言い過ぎです、千景さん。若葉さんは今までずっと先頭に立って戦ってきたんですよ。そのやり方が強引でも…すべてを否定するのは間違っています」
「ここで言い争っても友奈が目覚める訳じゃない…頭を冷やそう」
千景は踵を返して廊下を戻っていく、もうこの場にいる意味が無いと思った俺も、自分の病室に戻ろうとすると杏が声をかけてきた
「要さんは…どう思ってるんですか?」
「俺は若葉の過去を知らない…だからわかったような事を言えない…だが、これからも若葉に背中を預けたいとは思っている」
その言葉を最後に俺はその場を後にする

あの日の事を思い出しているうちに、どうやら眠ってしまっていたようで気が付くとカーテンの隙間から日が射していた、平日ではあるが教室に行く気が起きなかった俺は杏に今日は休むとメッセージを送ると私服に着替え、部屋を出る。
「とりあえず部屋から出たが、何をしよう」
適当に宿舎の周りを歩いていると、一台の自転車が目に入る
あの戦いが起きる少し前に大社から支給された軍資金で買ったものである
やることも思いつかないしたまには気ままに自転車を走らせるのも良いかも知れない
そう思った俺は自転車の鍵を開けると自転車に跨った

適当に自転車を走らせていると、少しだけ気分がマシになってくる
よく考えてみるが俺は若葉の事をほとんど知らない、彼女の過去もほとんど聞くことはなかったし聞こうとも思わなかった
「帰ったら少しだけ、話をしてみるか」
思い立ったが吉日だと思い、自転車を反転させると見知った顔が目

に入る、相手も俺に気が付いたのか目を丸くしていた
「要さん?」
「杏と・・・ 若葉?」
「こんなところで何をしてるんですか?」
「少しだけ、気晴らしを・・・ そういうそっちは・・・ 聞くまでもないか」
杏の横にいた若葉の表情は昨日までとは異なり晴れやかなものに変わっていた
「振り切れたみたいだな、若葉」
「あぁ、心配をかけてすまなかった」
「謝る必要はない」
「そ・れ・で、要さんは学校をサボってまで気晴らししたんですから、意味はあったんですよね」
「あぁ、俺も俺なりに整理はつけた、ひとまず若葉の事を教えてほしい・・・ 安心して背中を任せる為にも」
「わかった」
俺の言葉に答えた若葉の姿は思い詰めたものではなく、自然なものに戻っていた
「それじゃあ、そろそろ丸亀城に戻りますか?」
「あぁ、球子あたりが心配してそうだからな」
「要さんはどうしますか?」
「俺も帰るよ、元々戻ろうと思っていたからな」
二人の方を向きながらそういうと、後ろから迫っている影を見て少しだけ笑みがこぼれる、それを見た二人は不思議そうな顔をしたが、その直後に後ろからタマが二人の肩を組む形で抱き着いた
「タマがどうしたって?」
「タマっち先輩!?どうしてここに・・・」
「二人が深刻そうな顔で出て行ったからな、ケンカでもするのかと思って探してたんだ・・・ と言うか要!お前何でここにいるんだ!」
「気晴らしだ」
「一人だけサイクリングとかズルいぞ!今度はタマも誘え!」
「わかった・・・ それで、電柱の陰に隠れてる奴は呼ばなくても良いの

か？」
「そうだった・・・お前も隠れてないでいい加減でてこいよ！」
タマがそう言うと、おずおずと電柱の陰から千景が出てきた
あれだけ大喧嘩・・・喧嘩と言っていいのか微妙な線だがまぁ良いか、とにかく千景も若葉が心配だったのに違いないらしい
「千景・・・」
「私は無理やり土居さんに連れてこられただけよ」
「その割には、やけにこっちを気にしていたみたいだが？」
「黙りなさい、サボり魔」
それを言われてしまうとこちらは何も言えなくなってしまう
すると若葉が俺たちの方を振り返ると、頭を下げてきた
「千景、それにみんな・・・すまなかった」
「私は思いあがっていた、自分だけで戦っているつもりになって、過去に囚われて周りに目を向けようとしなかった。それだけじゃなく怒りで我を忘れることもあった・・・これはすべて、私の心の弱さが招いた事だ」
俺たちへと向けられた若葉の謝罪は、その言葉一つ一つから彼女の気持ちが伝わってくる
それは俺以外のみんなも感じていたようで、若葉の言葉を黙って聞いている
「これからはもう、一人で戦っているなどと思い上がったりしない。今生きる人々の為に、私は戦う・・・だから、私と共に戦ってほしい」
「もちろん、若葉さんはリーダーです」
「当然だ、タマに任せタマえ！」
「そこはタマたちにの方が良くないか？・・・俺の背中は元々お前達に預けてある、それは今も変わらない」
「言葉では何とでも言える・・・だから、ちゃんと行動で示して・・・そばで、見ているから」
「あぁ、心しておく」
俺たちが返した言葉に対して、若葉は凛とした表情を見せた

翌日の教室で俺たちは目が覚めた友奈にもしっかりと謝罪をしたうえで一緒に戦って欲しいと告げたことを若葉から聞いた
彼女は笑顔でそれを了承してくれたと笑顔で言っていたのが忘れられない
「ようやく元通りって感じだな」
「そうですね、一時はどうなることかと思いましたけど」
「まぁ、タマは最初からこうなるってわかってたけどな！」
「本当にすまなかった」
「もう謝罪はいいって」
千景は友奈のお見舞いに行き、ひなたは大社からの呼び出しで不在
残った俺たちは教室で少しだけ雑談に興じていた
「それにしてもビックリしましたよ、要さんまで様子がおかしかったから」
「あの時の俺も少し焦っていたのかも知れない」
「今はもう大丈夫なんだろ？」
「あぁ、適当に走らせて街を見て、ようやく守っているものが何なのか実感したところだ」
「なら、もう心配ないな！」
助けられてから今に至るまで、俺はしっかりと守るべき世界の姿を見ていなかったのだと改めて実感した
これじゃあ若葉の事を言えないなと、自分自身に呆れているとタマが話始めた
「これで、タマたちは本当の意味でチームになったって事だな！」
「今までは違ったのか？」
「今まではほら、アレだどことなく距離があったからな」
「うっ・・・」
「あぁ別に責めてるわけじゃない！いい加減しゃきっとしタマえ！」
雨降って地固まるというのは今のような状況の事を言うのだろうと、彼女たちの話を聞きながら思う

あの戦いで崩れかけた俺たちだったが、若葉は自身の弱さに気づき、俺は守るべきものが何なのかを実感できた

9話―日常Ⅱ―

「バーテックスの・・・　総攻撃？」
「はい、今回の神託で明らかになりました。まもなく四国へバーテックスの侵攻があります、それも・・・　かつてない規模で」
バーテックスの総攻撃
星屑が大量に襲ってきたあの戦いよりも規模の大きい戦いが起こる
「心配ないさ、タマに任せタマえ！」
「私も頑張ります」
「勇者の力を見せつけてやるわ」
「みんなで力を合わせればきっと大丈夫だ」
若葉たち四人がそう言ったのを聞くと少しだけ勇気が湧いてきた
今この場にいない友奈も同じ気持ちなのだと思う
「今までよりも大規模な戦いになるなら、しっかりと作戦を立てないとな」
「そうだな」
「そういえば、いいニュースもあるんでした」
俺たちがどうすればいいのか話し合おうとしたところで、何か伝え忘れてたのかひなたが俺たちに声をかけてくる
「安芸さんが教えてくれたんですけど」
「「安芸さん？」」
その名前に心当たりがない俺と千景の二人がその名前が何なのかを聞くと、タマと杏が疑問に答えてくれた
「勇者の力に目覚めた日、タマに杏の場所を教えてくれた巫女さんだ」
「真鈴さんがいなかったら、私は今ここにいませんでした」
成る程、前に聞いたタマたちの話で杏がタマを助けられた最大の功労者はその安芸さんと言う人物だったのか
その後タマと杏の二人はひなたから安芸さんの話を聞くと、二人で盛り上がっていた
「ところでいいニュースって？」

「それはですね…」
途中で止まっていた話を聞くと柔らかい表情でニュースを告げた

「壁の外の生存者の反応…か」
壁の外がどうなっているのか分からない現状で、壁の外に生存者の反応が見つかった…その結果は壁の中にいる人たちにとっては希望になりえるのだろう。だが、今の俺たちにとって最優先するべきはバーテックスの侵攻だ、星屑相手でもあれだけ苦戦を強いられている俺たちにとって、今まで以上に連携としっかりとした作戦が必要になる
「今は自分に出来ることを」
全員で生きて帰る…それが俺の今の目標だ

それから数日経ったある日、若葉に話かけられた
「どうかしたのか?」
「この前はみんなに迷惑をかけたからな、その罪滅ぼしと言うかなんというか」
「そうか、だが俺は気にしてないぞ?」
「これは私なりのケジメだ、何かしてほしいことはないか?」
「何かしてほしいことか…特に思い当たらないな」
「ちょっとしたことでいいんだが」
「それなら、放課後釣り堀にでも付き合ってくれ」
「わかった」

放課後になった俺と若葉の二人は丸亀城から少し歩いた所にある釣り堀にやってくると二人で並んで釣りを始める、それからしばらく

互いに話すことはなかったが若葉が俺に話しかけてくる
「要は…　普段からこういう場所に来るのか？」
「そうだな、一人で何か考えたいときは結構来る」
「少し意外だ、要はあまり外出しないイメージがあったからな」
「確かに俺はあまり物を買わないが、意外と外には出るぞ」
「そうだったのか」
「あぁ、基本的に丸亀城の周りを散歩するか、自転車を走らせるかのどっちかだけどな」
　時間が緩やかに進んでいる中、少し気になったことがあるなら聞いてみた
「そういえば、俺以外の人たちは何を頼んだんだ？」
「千景とは一緒にゲームをしたな、友奈には……」
「どうかしたのか？」
「いや、その…　友奈には…　耳かきをしてもらった…」
「耳かき？」
「あぁ…」
「詳しくは…」
「聞かないでくれ」
「わかった…　それにしても、若葉も変わったな」
「そんなにか？」
「あぁ、付き合いの短い俺でも分かる…　少し柔らかくなったな」
「そうか、ならそれは、みんなのお陰なのだろうな」
　そういっている若葉の表情は晴れやかなものだった、俺はそんな若葉の方を少しだけ見ると、俺は再び釣り竿の先端に視線を戻した
「釣れないな…」
「そうだな…　だが、こういう静かな時間も悪くないな」

　バーテックスの大規模侵攻が控えた日の事、こんな穏やかな日がた

まにはあってもいいのではないかと思いながら、再び竿を垂らした

１０話―丸亀城の戦い―

俺たちの眼前を埋め尽くすのは、星屑と言われる無数の敵
目の前にいる異形は着実に俺たちの方へと、向かってくる
「比喩ではなく、無数と言うことだな」
若葉のその声から、今回の戦いが今まで以上に激しくなることが予想できる。無数の敵に対するは、勇者五人と勇者でない者が一人・・・それでも、俺たちならこの状況を打破できる。不安が無いと言ったら？になるが、それでも俺たちならと前を向く
「若葉ちゃん、眉間に皺が寄ってるよ！要くんも！そんなに怖い顔しなくても大丈夫。私達は絶対に勝てるから」
「・・・そうだな」
「俺、そんなに皺が寄ってたか？」
「鬼瓦みたいな顔してたぞ、要」
俺の問いに対してタマが答えると、友奈が何か思いついたような顔で俺たちに話かけてくる
「そうだ、みんなでアレやろうよ！」
「あれ？」
「みんなで肩組んで丸くなって『行くぞー！』ってやる奴！」
「円陣ですね。そういえば、勇者になる前の学校では球技大会なんかでやってるチームがありました」
「・・・いいかもしれないな」
そう言うと、千景を除く若葉たち四人は円陣を組んだ
千景はどうすればいいのか迷っているようだ、俺の方も参加すべきかどうか悩んでいると友奈とタマの二人が俺たちに手を差し伸べてきた
「ほら、ぐんちゃんも！」
「要も！さっさと入りタマえ！」
「・・・うん」
「そうだな」
俺と千景も含めた六人は円陣を組むと、リーダーである若葉が声を

上げる
「敵の数は無数。だが四国以外にも人類が生き残っている可能性…いや、希望が見つかった！その希望の為にも私達は負けられない！……必ず守り抜くぞ！ファイト！」
「「「「「オー!!!」」」」」
俺たち六人全員で声を合わせる。

今回の総攻撃で杏が考えた作戦は、陣形を使うこと
六人全員で決められた場所に配置し役割分担でバーテックスを迎撃する
迎撃の中心地は丸亀城、そこから東、西、北にそれぞれ一人ずつ配置し、杏が後方で待機し残った二人は適宜持ち場を交代する、杏は司令塔兼撃ち逃したバーテックスを倒していくという形である、長期戦を見越した今回の戦闘、勇者は切り札の使用を出来るだけ控えるようにと言われている
「丸亀城の正面には私が立つ」
「正面はバーテックスの群れの中心だから一番大変だよ？…いいの？」
「だからこそ、私がやらねばならない」
「…なぜ？より多くのバーテックスを…仕留めたいから？」
千景が若葉にそう言うと若葉は今までとは違う復讐者ではない、勇者としての瞳で真っすぐ千景を見ると軽く笑い言葉を返す
「違う、勇者のリーダーとしての責務――そして何よりも、この四国の人々を守る為だ」
若葉の言葉を聞いた全員が表情を緩める、千景はまだ少し納得いかないと言った感じだったが
「分かったよ。そんじゃ、正面は頼むぜ、リーダー！」
「無理はしないでね、若葉ちゃん！」
「若葉の背中は俺たちに任せろ…だから、俺たちの背中は若葉が頼

む」
「あぁ！任された！」

全員が配置につきバーテックスを迎え撃つ為に待っていると、友奈が大声で若葉に声をかけた
「若葉ちゃーーんッ！落ち着いていこぉぉぉぉ！頑張って、リーダーーー！」

内容的に若葉の事を励ましたらしい、友奈のそういう部分があるから俺たちは前を向けて戦えるのかも知れない・・・　いや、友奈だけじゃないな、若葉も、杏も、タマも、千景も、ギリギリだが絶妙のバランスで今まで戦ってきたんだ

そう気合いを入れ直すといよいよバーテックスとの戦闘が始まった、正面の若葉が向かってくるバーテックスを切り裂き、東側の友奈と西側のタマも拳と旋刃盤を使いバーテックスを次々と屠っていく
「アンちゃん！ごめん、一匹そっちに行ったよ！」
「任せてください！」

友奈のその声で後方指揮の杏がボウガンを使い、取り逃した一匹を葬ると、前衛で戦っている三人の方を見ながら指示を出す
「タマっち先輩！地面スレスレ、下方から迫る一群がいます！旋刃盤なら届く距離です！」
「りょーかい！任せタマえ！」
「友奈さん、やや突出しすぎています！少しだけ後ろに下がってください！」
「わかった！」

戦場の状況を目でとらえ、的確に指示を出していく杏、積極的とは言えない性格だが、彼女の持つ観察眼は俺たちの中で最も優れている

そんなことを考えながら出番を待っていると千景に少しだけ焦っているように見えた
「千景さん」

そんな彼女の様子に杏も気が付いたのか声をかける

「焦ることないですよ、この戦い方は一人でも欠けたら成り立ちません。すぐに千景さんは必要になります」
「必要…」
「…千景が何を焦っているのか知らないが、少なくとも俺たちには千景が必要だ…だから心配はいらない」
「伊予島さん、不知火くん…大丈夫よ。焦ってなんかいないわ、さっきのは戦いへの意気込みで緊張していただけ…」
「それならいい…俺も持ち場に戻る」
「えぇ……ありがとう」
小さく呟いたその声は確かに届いていたが、今は聞こえていないふりをする…そろそろ戦いも佳境だ

それから半時間ほど経過したころ、前衛を張っている三人にもそろそろ疲労の色が見えてくる、その中でも特に動きが鈍り始めたのは真正面からバーテックスと戦い続けている若葉だった。
「若葉さん！交代です、撤退してください！」
「まだ戦え――、分かった！千景、交代してくれ」
既に若葉の方に向かっていた千景は若葉と何か話していたようだが、二人はハイタッチをすると若葉のいたポジションで千景が戦い始める
杏は状況を把握しながらこの中で一番リーチの短い友奈への援護射撃も行っている、少し前にも背後から友奈に食らいつこうとするバーテックスを撃ちぬいたところだ
「ありがとー！」
援護射撃に気が付いた友奈は拳を振りながら杏に感謝の言葉を伝える
「あんずーっ！このまま友奈を援護してやってくれっ！こっちはタマ一人で大丈夫そうだから！」
「分かりましたー！」
そうは言うものの不測の事態が起こる可能性も高いこの戦場だと

少しの判断ミスが命取りになりかねない
「杏、タマの方の支援に向かっても良いか？」
「・・・　お願いします！」
「任された」
　俺の提案が杏に受け入れられると、真っすぐタマの方まで向かい彼女の横に迫っていたバーテックスを貫く
「支援に来た」
「タマは良いから友奈の方に」
「友奈には杏がついてる・・・　なら、タマには俺がつく」
「・・・・・　じゃあ、頼んだ！」
「あぁ」
　タマが前衛を張って旋刃盤でバーテックスを屠り、一定の距離からは俺がバーテックスを撃破していく
　友奈の方に向かっても良かったのだが、友奈も俺も基本的にはある程度のリーチまでバーテックスを入れないといけない、それなら同じ近接型の俺よりも杏が支援についたほうがいい
「若葉さん！タマっち先輩と交代でお願いします！」
「よし！」
「要さんはそのままバーテックスを倒しつつ、若葉さんのサポートをお願いします！」
「了解」
　杏のその指示でタマと若葉が交代することになり、俺はこのまま若葉のサポートに移る、俺と若葉は同じ近接型である為、少しでもリーチを伸ばす為に戦いながら槍を少しだけ伸ばす
「待たせた！」
「気にするな・・・　任せるぞ」
「あぁ！」

　戦い始めてから体感三時間と言ったところで、バーテックスの動きに変化が起こる

星屑は一か所に固まり、一つの異形を形作る
「注意してください！進化体を形成し始めました！」
蛇のような形の異形へと変化したバーテックスはそのまま若葉の方に襲い掛かったが、呼吸を整えた若葉が進化体を一刀両断する
「若葉さん！まだ！」
その言葉を聞いた瞬間、一刀両断された進化体がまだ倒されていないことに気付く、若葉の背中をカバーする形で増えた進化体を切り払う
「すまない、助かった」
「いや、それにしても厄介だな」
「あぁ、斬れば敵を増やすだけか」
背中合わせの形になった俺と若葉は増えた進化体を牽制しつつ、残った雑魚を片付けていく
雑魚を倒すことは出来るが俺たちの武器だと精々進化体の攻撃を弾くか、鞘の打撃程度でしか攻撃が出来ないため進化体に対して決定打を撃つことが出来ない
「若葉ぁ！要え！切り札を使うぞッ！」
「待て球子！それなら―」
「いいや、待たない！それなら自分がとか言うのもなし！タマにはタマにも活躍させろぉ！」
若葉の言葉を聞かなかったタマは切り札を使用するとそれに伴い旋刃盤が大きくなっていくが流石にデカくなりすぎだ
「デカすぎんだろ…」
思わず声に出てしまったが、どうやら杏も似たような反応をしていた、タマはデカさお構いなしと言った様子で巨大化した旋刃盤をぶん投げるとワイヤーは切れ旋刃盤は俺たちの頭上を通過すると炎を纏い進化体を切り裂いた
切り裂かれた進化体は炎に焼かれ、あっという間に燃え尽きる
「す、すごいな…」
「いろんな意味でな…」
少しでもずれて俺たちもろともだったらと考えると若干寒気がす

るが気にしている場合じゃない
　そんなことを思っていると、タマが体勢を崩し倒れそうになっていた
「タマっち先輩!?」
「だ、大丈夫・・・ ちょっとクラっと来ただけだ」
「でも・・・ !」
　最前線で戦っていた俺達にもその様子は見えていた為、若葉が球子に声をかける
「球子!大丈夫か!?やはり精霊の力は身体に負担が大きすぎる!」
「いいや、若葉・・・ そんなこと言ってる場合じゃないみたいだぞ・・・前を見ろ!」
　球子のその言葉を聞き俺たちは前を見るとバーテックスは更に同化を続けていた、その大きさは俺たちが見てきたバーテックスに比べても圧倒的に大きかった
「若葉ちゃん!あんな大きくなったら、どうにもできないよ!」
　友奈のその言葉を聞いていた若葉が険しい顔をしながらも融合途中のバーテックスを観察すると、何かを見つけたようで全員に言った
「こいつの身体にはまだ脆い部分がある!完成前にそこを叩けば倒せるかもしれない!」
「でも!どうやって・・・」
「それなら、タマと輪入道に任せタマえ!」
　ふらついた身体でタマはそういうと巨大化した旋刃盤の上に乗る
「タマっち先輩!私も行くよ!」
　バーテックスの場所まで向かおうとした瞬間、杏も旋刃盤の上に飛び乗っていた、それだけじゃなく友奈や若葉、千景も既に旋刃盤の上に乗っていた
「俺はしんがりを務める、皆より遅れるが、雑魚は任せろ」
　俺は旋刃盤の上に乗りはしなかったが、しんがりを務める為に槍を構える
「よっし、それじゃ出発だ!」
　旋刃盤の上にいる勇者が撃ちもらした雑魚を倒しているが圧倒的

に手数が足りない、俺にも何か切り札があればいいのだがと考えた所で頭の片隅がズキリと痛む…　星屑を倒しながら自分自身と向き合っていると心の内から何かが形作られていく朧気ながら自分ではない誰かが使っていたそれを模倣する

「…　ッ！」

体中の血が沸騰し、あふれ出た血液が俺の周りに集まり勇者の切り札のように形作られていった、赤黒い外套が形作られ、顔には右半分を覆い隠す形で面が付いていた

「これなら…　行ける！」

そう思ったのもつかの間、この状態を長時間維持するのは不可能だと、本能が告げている

若葉が旋刃盤の上からバーテックスに向かっていくのを合図に俺は周りに集まっていた雑魚を新たに出来た蛇腹剣のような武装で薙ぎ払う

「要さん…　それ」

「勇者でいう切り札みたいなものだ…　それより、今だ！行け！」

赤く染まりそうな視界を何とか保ちつつ、俺は迫りくる星屑を塵へと変えていく

強力な力だがこのままだと正体不明の衝動に飲み込まれると思い始めたタイミングで若葉が融合途中のバーテックスへの道を切り開いたことに気付き、全員に声をかけた、四人は融合途中のバーテックスの脆い部分を攻撃し、バーテックスが崩れていくのを見ながら俺は意識を手放した

ふと、真っ白な空間で目を覚ます

自分以外に何もいないのかと見渡すと、紫色の狐みたいな存在が居た

「君は…　？」

何処かなつかしさを覚えるその生物に手を伸ばそうとした所で、視

界が急激に遠のいていった

目を覚ますと、タマと杏が俺の事を心配そうにのぞき込んでいた
「よかった、起きたみたいだな！」
「意識が戻らないので心配しました」
タマと杏にそう言われて身体を起こすと、二人だけではなく友奈と千景の姿も見えたが唯一若葉の姿だけ見えなかった
「若葉は・・・？」
「まだ合流出来てません」
杏のその言葉を聞いた俺は立ち上がるとよろよろした足取りで歩き出そうとするが体のバランスを崩し倒れそうになる
「おっと」
「危ないですよ」
二人に抱えられる形で、歩いていると自然と体調が回復し一人でも歩けるようになった
五人で若葉の事を探しているとひなたと話している若葉の姿が目に映る
「あ、いたぞ！おーい！」
「良かった、元気そうですよ！」
「あの子が・・・そう簡単に死ぬわけないわ」
「若葉ちゃん！私たち、勝ったんだよ！」
「元気そうでよかった」
「さっきまでぶっ倒れてた要がそれをいうのか？」
「切り札使って倒れそうになってたタマにそれを言われる筋合いはない」
「うぐっ・・・」
そんなことを話しながら俺たちは若葉の元に近づいていった

11話―遠征／上―

場所は瀬戸大橋記念公園

若葉たち勇者五人、巫女であるひなた、そして四国外生存者の俺を含めた七人はこれから壁の外への調査遠征へと向かうことになる

いつ何時敵の襲撃にあっても大丈夫なように勇者は全員戦闘装束、ひなたも巫女としての正装をしている。かくいう俺はと言うとずっと自前の服・・・というか私服で戦っていたのだが今回の遠征に伴い正式に戦闘装束が作成された。

戦闘装束と言っても籠手と胸当て、臑当て（すねあて）と簡易的なものだが神樹の加護で今までと比べると少しだけ防御力が上がるらしい

「にしてもさ、四国の外に出るのって何年ぶりだろ」

「私、バーテックスが出てきたときには本州から移って来たから三年ぶりくらいだよ！」

「あんまり遠出とかしなかったので、私は四国を出るのは初めてです」

「私も・・・そうね」

「タマは四年ぶりくらいだなぁ。家族で広島に行った時以来だ」

タマの問いかけで盛り上がっているみんなを横目に見ながら俺は今回の遠征の目的を再確認する

遠征は四国から出発し、若葉たちの戦闘準備が整うまで一人で戦い続けたという勇者が居た諏訪、そして人類生存の希望が見いだされた北方を目指す手はずになっている。かなり長距離の移動になるがヘリや船での移動は不要な戦闘を引き起こす可能性が高いとのことで移動は徒歩だ

もしかしたら今回の遠征で俺の記憶の欠片が見つかるかも知れない

だがもしそうなったら今ここにいる俺はどうなるのだろう、記憶をなくす以前の俺が戻るという事は今の俺は消えるのではないかと考えると少しだけ怖くなる

「要？どうした？」

「あ、あぁ・・・いや、なんでもない」

「そうか?なんかめっちゃ深刻そうな顔してたけど」
「要くんどうかしたの?」
気が付くとタマだけじゃなく友奈まで近くにやって来ていた
いけないな、切り札擬きを使ってから少しだけ精神が不安定になっている気がする、だがあまり心配させる訳にいかない
「心配ない、大丈夫だ」
「そうか?」
「あぁ」
少し納得していないようだったがタマと友奈の二人は戻ると、その間に誰がひなたを背負っていくのかを決めたようだ
「では、行くか」
「「「……」」」
若葉の合図に反応を示さない他の勇者に何かあったのかを確認する為に後ろを向くと若葉がひなたの事を抱えていた、お姫様抱っこで
「背負うって言うより抱えるって感じだな」
「しかもお姫様だっこ…」
「なんか、見てるこっちが照れる」
「?なにかおかしいか?」
「まぁ… あなたがおかしいと思わないんなら、いいんじゃないかしら…」
「お姫様と王子様みたいだね!」
ちょっとしたハプニング?はあったが無事出発することになった、自分たち以外のものでサイズの大きいものは俺が持つことになり、いよいよ本州へと歩みを進める

今回遠征が出来るようになったのは先の戦いで敵側の戦力が大幅に削れたと大社側が判断したからである
そして敵の攻撃が沈静化した今なら勇者が四国を離れることも可能だろうと考え、四国外に生存者がいるという希望が見つかったことも踏まえ今回の遠征が決まった。

今回の遠征を行うにあたり行われた実験で、壁の外でも変わらず勇者の力を使うことが可能である事、結界外の空気は十分に清浄である事が証明された。一部ではバーテックスの発する毒素により大気が汚染されているという噂が流れていたようだが、空気はバーテックス発生前よりもキレイになっていたらしい。

最後に、神の力を織り交ぜた通信ならば四国から離れても連絡を取り合うことが出来る事、これはかつて諏訪と行われていた通信技術の応用らしい、そんな実験の数々によって今回の四国外遠征が決まったらしい、巫女のひなたに関しては神樹から神託を受けられる存在として同行が決まったらしい

最初の目的地へと向かっている最中も、若葉たちの雰囲気は明るい、前回での戦いでの勝利がみんなに自信をつけるのと同時に、結束をより強固なものにしたようだ

「タマちゃんのアウトドアグッズがあって良かったね！」

「ふふん、火の起こし方、飯の炊き方、なんでも任せタマえ！」

「頼もしいな」

「そうだろうそうだろう！…　そういえば、要は出来ないのか？」

「そこら辺の記憶も残ってないが、案外やってみると体が覚えているかもしれない」

「そっか！なら一緒にやってみるか！」

「そうだな、そうするか」

俺とタマ、友奈の三人がそんなことを話していると、少し後方にいた杏がタマに話しかける

「まさか、タマっち先輩のアウトドア趣味が役に立つ日がくるなんて…」

「人生、思いもよらないものね…」

「人生について考えるほどかー！タマをバカにしてるだろ！」

最初はそんな和気あいあいとした感じで進んでいた俺たちだった

が、瀬戸大橋を抜け岡山に入るとそんな気分もなりを潜める
　見える景色のほとんどが破壊され尽くしており、元々存在したであろう町はもはや見る影もない、工業地域であったと思われる場所は事故か何かで起きた爆発によって内部から爆発、跡形も残っていない
「ひどいな、これ…」
「文字通り跡形もなし…か」
　俺もタマも降り立ったその景色を見ながら険しい表情を浮かべることしかできない、そしてそれと同時に俺たちが戦っている存在が人間から見たらどれだけ理不尽なものであるかを実感していた
「念のために…生き残りがいないか確認しよう」
　若葉のその言葉と共に降り立った場所から人口密集地であった場所まで移動するが、人どころか虫一匹見つけることが出来ない
「倉敷は、古い時代の景観を残す町としても有名だった筈…それが、こんな」
「行こう、先はまだ長い」
　若葉のその言葉を聞いた俺たちは二手に分かれることになり、グループ分けは若葉・ひなた・千景と友奈・タマ・杏となり、俺はひなたを護衛する為に若葉たちと一緒に行くことになった
「生き残っている人は、いないのでしょうか…」
「ここも全滅したのよ…きっと…」
　ひなたのつぶやきを聞いたのか千景がその言葉に答えた、彼女の言葉にはやるせなさと怒りが滲み出ている、口には出していないが勇者の誰もが同じ気持ちなのだろう
「まだそうと決まったわけじゃない、どこかに避難している人が居る可能性もある」
　そういう若葉に対し、千景は訴えかけるようににらみつける
　流石に間に入るかと考えたタイミングで、ひなたの声によって近くからバーテックスが一体出てきていることに気付く、俺と若葉が臨戦態勢を取るよりも早く千景がバーテックスに切りかかる、鬼気迫る表情でバーテックスを切り裂く彼女を俺たちは見ている事しかできなかった

現れたバーテックスを怒りのままに切り裂いた千景は死んだ敵をなおも切り付け続ける
「もうやめろ、そいつはもう死んでる」
「行きましょう・・・、生きている人を探すんでしょう・・・」
俺の言葉を聞いた千景が手を止めると俺たちには一切目を向けず一人で歩き始める
結局その日、生存者の存在を確認することはできなかった

「若葉ちゃーん!・ぐんちゃん、ヒナちゃーん!・要くーん!」
それからしばらくして、合流地点で待っていると友奈の声が聞こえてくる
やって来た彼女たちの方を見るが三人の表情も明るくない、そのことから結果はこちら側と変わらず生存者は発見できなかったことを実感する
「私たちの方は、生存者は見つけられませんでした。バーテックスとは何度か遭遇しましたが・・・若葉さん達の方はどうでしたか?」
「こちらも同じだ。それに、今でもバーテックスがうろついてるとなると、このあたりに人が残ってるとは考えにくいな・・・」
分かっていたことだが、その事実は俺たちの心にあまりにも重くのしかかった
暗い雰囲気が漂い始める中、その空気をぶち壊すようにタマが明るい口調で声を上げる
「日も暮れてきたし、そろそろ野営する場所を決めないとな!」
「そうですね!お腹も空きましたし!」
タマの意図を察したであろう杏も同じように明るく言うと暗い雰囲気が少しだけ緩和されたように思う
「無事に残っている建物があればいいが・・・」
「うーん、どれもボロボロで今にも崩れそう・・・」
「倒壊のリスクはあるが、雨風をしのぐなら駅の中を使うというのもありじゃないか?」
「いや、待ちタマえ!野営するなら綺麗な水があるところでないとダ

メだ。タマたち、そんなにたくさん水を持ってきてるわけじゃないからさ」

確かに、タマの言ったことは的を得ている、人間にとって水は大切だ。だが、そんなに大量の水がある場所はここら辺にあるのだろうか、一応携帯式浄水機を持ってきているが気休め程度にしかならないだろう。水場と睡眠場所を確保できる場所

「あと、焚き火をするために木の枝を集めやすいところがいい。ご飯を作るにも火が必要だしな！となると・・・」

「キャンプだな！」

まさかと思ったが案の定俺たちがやって来たのは六甲山付近のキャンプ場跡、移動に時間を使い日も落ち始めている以上ここから更に移動するのもキツイだろう

「というか、タマっち先輩がキャンプしたかっただけなのでは・・・？」

「そ、そんなことないぞ！ここだったら水も確保しやすいし！焚き火のための枝だってある！・・・な！要！」

「あぁ、そうだな・・・それに日も落ち始めてるからこれ以上移動するのも危険だろう」

急に話を振られて困惑しかけたが、まぁたまにはこういう経験も良いだろう

一応生存者がいないか探すが、襲われた痕跡だけで生存者の痕跡はなかった、道具に関しては倉庫の中からひなたがテントを見つけた

「やった！これでもっとキャンプ感が強まるぞ！」

「やっぱり、球子さんはキャンプがしたかっただけなのでは・・・？」

「そ、そそそそんなことないぞ、ひなた！ほら、雰囲気だって重要だろ！なっ、要！」

「いちいち俺に振るのか・・・まぁそうだな、ずっと気を張っていても疲れるだけだろうし、いいんじゃないか？」

またタマが俺に振ってきたので率直な意見を言うと、そうだろうと

いったタマに背中をバンバン叩かれた。少しだけ痛い
その後俺たちはテントを張ったり、小枝を集めて火を起こしたりした
その準備も小枝集めも、ついでに言うと夕食の準備もタマが大活躍だった
「タマ、大活躍だな！」
「タマっち先輩が、本当に先輩っぽく見えます…」
「それはどーいう意味だ、あ～ん～ず～？タマは普段から先輩っぽいだろ！」
「いたた！頭ぐりぐりしないでください！」
それから俺たちは夕食のうどんを食べ終えた
最初は少しくらい雰囲気だったが、キャンプをしているうちに少しずつ元の空気を取り戻していき、夕食を終えるころにはすっかり元の雰囲気に戻っていたが唯一千景だけが無言のまま、どこか浮かない表情を浮かべていた
「あー、美味しかったぁ。外で食べるうどんは格別だねぇ」
「…うん」
「それにしても良かったですね、倉庫の中に道具が残っていて」
「そうだな、屋根のしたでしっかり休めるのはありがたい…遠征で四国を離れている間は特に…な」
「若葉ちゃん、しんみりしすぎですよ」
「まだ一日目だっ！無事な地域だってきっとあるさ！」
若葉が少ししんみりしているのに気が付いたひなたとタマの二人がそういうと若葉は少しだけ明るい表情で返事をした
「よし！暗い気分は水浴びでながそう！」
「え!?ちょっと寒くないですか？」
「賛成！廃墟の調査で体が埃っぽいしな！」
「でも…　要さんは」
「心配するな、みんなが入っている間は火の番でもしていることにする」
皆が水浴びをしている間、一人でぼーっと火の番をしていると一足

先に上がって来たらしい千景が焚き火の前に腰をかけた
「もういいのか？」
「えぇ・・・」
火がぱちぱちと音を立てるだけの時間がしばらく続いたが、千景が俺の方に話しかけてきた
「ねぇ、貴方は・・・どうして戦ってるの？」
「質問に質問を返すようで悪いが、何故そんなことを聞くんだ？」
「だって、貴方には記憶がないんでしょう」
「あぁ」
「なら・・・私達と一緒に戦う義理も・・・一緒にここまでくる必要も・・・ない筈なのに」
「確かに、千景の言う通りかも知れない」
「それなら・・・どうして」
戦う理由・・・か
考えたこともなかったけれど、一つ理由があるとしたら
「俺が戦う理由は・・・きっとみんなだと思う」
「私達？」
「あぁ、確かに俺には記憶がない・・・だから町の人達を守りたいって気持ちもあるけど、一番はみんなの助けになりたいからだと思う」
「だから、何かあったら仲間を頼って欲しい」
「えぇ・・・そうね」
俺の言葉が何処まで千景の求めている答えになったか分からないけど、納得のいく答えだったらいいなと思う

若葉たちがテントで、俺は焚き火の近くで寝袋を使い寝ることになった
それに関しては流石にみんなも渋っていたが、何とか説得し外で眠っていると木々の騒めく音で目を覚ます
「・・・敵、か」
寝袋から出た俺は槍を出現させてバーテックスの相手をしている

と若葉たちも起きてくる
「要！大丈夫か？」
「あぁ、心配ない」
その後、勇者と共に襲ってきた雑魚を一掃すると、この場所から移動を開始する
夜明けだったこともあり、冷たい風を受けながら移動していると何かを思い出したように杏が言う
「そういえば、大阪の梅田駅あたりには、すっごく広い地下街があるみたいですよ。そこだったら雨風の心配もないし、シェルターみたいなところに避難している人がいるかもしれません」
「そうだな…　地下ならば、出入り口を塞いでしまえばバーテックスも侵入できないだろう。地上よりも安全かもしれない。そこに行ってみるか」

梅田駅にやって来た俺たちは周りを見渡すが、他の街と同様にひどい有様だった
「…　ッ！」
梅田駅にやって来た瞬間、頭がズキリと痛み始める
「要さん？顔色が悪いようですか？」
「あぁ…　心配ない」
偶々近くにいたひなたに心配されるが、そこまで酷い頭痛でもなかったためひなたには大丈夫だと告げる
途中で杏が書店街を襲撃されたことで憤慨しているのを苦笑いしながら他の場所を探してみると梅田駅の一部分が他よりも激しく倒壊しているのに気が付く、その痕跡は襲撃を受けたものではなく、戦闘によって破壊されたものであるように見えた
「俺は…　ここを知っている？」
戦闘の痕跡を見た瞬間、記憶の一部が戻ってくる…　四国の壁へ向かう途中、俺はバーテックスの姿を見つけてここで戦ったんだ。バーテックスをすべて倒して駅の中に入ったけど、その結果は
「な…　なんだよ、これ!?」

入口から降りた辺りでかつての記憶を思い出すと、先に行っていたタマの叫びがこちらまで響いてくる、急いで追いつくとそこにあったのは白骨の山
数十ではなく、数百はあるであろう骨の山と、ここで死んだ人々を弔うように建てられた木の十字架
「ひどい…　地上もボロボロで地下も…　こんな」
「なんだ…　これは…」
あまりの凄惨な光景に全員も言葉が発することが出来ず、立ち尽くしてしまっていた
「酷いな…　相変わらず」
「ッ!?…　要は…　ここを知っているのか?」
「あぁ、知ってる…　正確には、思い出したのは先ほどだ」
「教えてくれ、要ッ!ここで一体…　何が…」
若葉の言葉を聞いた俺が、十字架の前に立てかけておいたノートを取ると、それを若葉に渡す
「俺もこの場であったことを見たわけじゃない…　ここで何があったのかは、そのノートに書いてある」
「…　ッ!」
酷だと思うが、俺が説明するよりもそのノートを読み、知ってほしい
ここで何が起きたのかを…　人の手によってどれだけの地獄が生み出されたのかを
俺からノートを受け取った若葉は、震える手でノートを開いた

12話―遠征／下―

『二〇一五年　某日
地下に潜んでから何日経っただろうか、もう日付けもわからない
だから時間の感覚を失わないために日記をつけることにした』
『七月末に突如現れた化物から逃げて私たちは地下街に逃げ込んだ
みんなで出入り口にバリケードを作ったが私達も外に出られない
地上は今どうなっているのだろう』
『お父さんもお母さんももういない…　家族は妹だけ
妹はまだ小学生だ、高校生の私がしっかりしないと』
『二〇十五年　某日
今日起こった喧嘩で人が死んでしまった
食料の奪い合い、意見の対立、弱い者いじめ
化物から逃げるために閉じこもっているのに
人間同士で争うなんてバカみたい…!!』
『死体は決められた場所に集められている
放置しておくと衛生上の問題もあるし精神的にもよくないからだ
私　遺体をモノみたいに書いちゃってるな…』
『二〇十五年　某日
妹が家に帰りたいとわんわん泣く
普段ワガママも言わないおとなしい子なのに…
妹の泣き声に苛立った大人が外に放りだすか殺すかしろといった
そんなことさせない、妹は私が守るんだ』
『二〇十五年　某日
本日のご飯は栄養補助食品二個とスナック菓子半袋
食糧問題で大人たちが話し合っている
弱いものを殺して食料を節約するべきだという人
バリケードを解いて、外に出るべきだという人
今日も結論はでなかった』
『外にまだ化物はいるのだろうか…　誰にもわからない』
『二〇十五年　某日

妹に元気がない
呼びかけると返事をするけどぼんやりしている
何かの病気かもしれない』

『二〇十五年　某日
今日も妹は元気がない、でもどうすることもできない』

『二〇十五年　某日
病院につれていかないと・・・』

『二〇十五年　某日
妹が返事をしない
どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう』

『二〇十五年　某日
ひどい争いがおこった
一部の人達が勝手に「食糧節約のため」と老人と病人を殺し、その人達も別の人達に殺された
もう、訳がわからない
妹も殺されてしまった、私ももう死んでもいいかもしれない』

『二〇十五年　某日
地上へ出ようと訴えていた人たちがバリケードを壊してしまった
化物が次々と入り込んでる、防火シャッターも簡単に壊された
きっと・・・あいつらは私達が自滅するのをわかってて放置してたんだ
私は今、死体置き場にいる
最期は・・・妹と一緒に迎えようと思う』

日記を読み終えた若葉は目の前に広がる白骨の山を見ながら呟く
「これが・・・その結果か」
「あぁ、ここで起こった・・・惨劇の記録だ」
そう言うと若葉は視線を俺に移し問いかけてくる
「要が来た時には・・・」

「あぁ、俺に出来たのはここにいる人たちを悼む事だけだった」
「そうか…」
そろそろ移動しようと思った瞬間、通路の暗闇から重いものが動く音と複数の気配を感じる
「バーテックスか…!?」
「おそらくな…」
若葉は刀に手をかけ、深く息を吐くと俺たちに指示を出す
「…ここに生き残りはいない。早々に脱出するぞ！　ひなたは私たちの傍を離れるな！」
その言葉と共に俺たち全員が武器を構え、警戒をしながら出口に急ぐ
この閉鎖空間で戦闘になると今いる場所が倒壊するだけじゃなく、四方を囲まれジリ貧になる可能性も高かった。その後、奥から続々と現れるバーテックスを倒しながら地上を目指す
若葉を筆頭に地上へ向けて進んでいく、バーテックスを薙ぎ払いながら横を見ると同じく鎌を振りバーテックスを切り裂いていた千景の姿が目に入る、何を考えているのか分からなかったその姿は焦りを含むと同時に何かに怯えているようにも見えた

地上へと脱出した俺たちはそのまま名古屋を目指す
今までは何とか希望を持っていた若葉たちも、あの惨状を見た後ではもう「次こそは」なんて言葉を口に出すことはできなかった

名古屋までやって来た俺たちは大型ビルの上に降り立ち、街全体を確認する
今までと変わりないかと思われた街の風景だが、よく見ると他の街と圧倒的に異なる場所があった
「おいおい…　なんだ、あれ？」
タマもその違和感に気が付いたようで顔をしかめながら駅の方を指さす
本来街が広がっていたであろう一面には卵のようなものが植え付

けられていた
　遠くに見えるはずの卵の中では、無数の何かが蠢いている様子がはっきりと見える
　口にしないだけで、卵を望遠鏡で見ていた勇者たちもそれが何の卵なのかを理解したのだろう
「・・・う、う」
　耐え切れなかったのか膝から崩れそうになっていた杏を支えるとゆっくりと地面につける
「大丈夫か？」
「大丈夫かっ、杏!?」
「だ・・・大丈夫っ。ちょっと、ビックリしちゃって・・・」
　俺とタマの二人が杏の様子を確かめる
　俺たちには大丈夫と言った杏だったが顔は真っ青で瞳には涙が浮かんでいる
　今まで人の住んでいた場所がここまで無残に荒らされている、そして自分たちの住んでいる場所もいつかこうなるのではないかという恐怖感は計り知れないものだろうと思うが、俺はその事実をどこか他人事のように思ってしまう
「私たちの四国も・・・いつかこんなふうに・・・」
「そんな事・・・タマたちが絶対にさせない！　そのためにタマたち勇者がいるんだ！　こんなふうに、させてたまるかっ！　人間が・・・わけのわからない化物に負けてたまるかっ！」
　感じた不安を断ち切るようにタマがそう叫ぶ
　その叫びは杏だけでなく自分自身に向けた叫びなのだろうと感じているとタマの言葉を聞いた杏も弱々しい笑みを浮かべると、自分で立ち上がろうとする
「手を貸す」
「ありがとうございます・・・」
「みなさん！　まずい状況ですっ！　囲まれています・・・！」
　ひなたの言葉と共に周りを見回すと空中の所々にバーテックスが浮かんでいるのが見える

奴らは続々とその数を増やし続け今にもこちらに向かってくる雰囲気だった、あっと言う間に取り囲まれた俺たちに対しバーテックスは一気に向かってくる
「タマは今、腹が立ってんだ…　この世界は、お前たちなんかに奪わせないっ！　そのためなら、どんなことだってやってやるっ！」
「球子、待て――」
若葉が言うよりも早く、切り札を発動させたタマは巨大化した旋刃盤を空中の敵に向かって思い切り投擲する
その身をチェーンソーのように回転させた旋刃盤は炎を纏うと空中にいるバーテックスと、地面を占領する卵を焼き尽くした
「球子、軽々しく切り札を使うな！」
「悪い、若葉。ついカッとなった…　まぁ後悔はしてないけど」
「正直、俺はスカッとした…　タマがやらなかったら、多分俺がやってたからな」
「だろ！　…　そうだ！　どうせだからこれに乗って名古屋を見て回らないか？　空から探したほうが手っ取り早いだろ」
「…　あぁ」

空からの捜索は生存者がいるような状況には見えなかったため短時間で終わった
駅前のビルに戻ってきた俺たちが旋刃盤から降りると大きさは元に戻り、タマも切り札の使用状態を解除する
「あー、やっぱりキツいなぁ、切り札を使うのって」
「大丈夫か？」
「あぁ、心配は無用…　ッ！」
大丈夫と言った直後に前回同様タマの身体がふらついたのを見て俺は彼女の事を支えると、疲れを感じさせる笑顔でタマは俺に礼を言ってくる
「タマっち先輩…　切り札はどんな影響が出るのか不明なんだよ。あまり軽々しく使わないで」
「わかった」

その後、少し休憩を取るか話し合ったがタマが大丈夫と言い続けたため、このまま諏訪まで向かうことになった

暫く移動し、ようやく諏訪まで到着した
諏訪湖周辺に降り立った俺たちは、そこから南下して諏訪大社の上社本宮を目指す
その途中で見た街の風景も他の地域同様破壊し尽くされていて、そこに人の住んでいたころの地域はなかった。そのまま俺たちは上社本宮に到着するがそこに『社』と呼べるようなものは存在しなかった。
建物があったであろう場所はすべて残骸へと変わっており、他の場所よりも入念に破壊されていることがわかった
「…ッ！」
言葉にならない声を上げた若葉だったが、それでも彼女は顔を上げ言葉を続ける
「探そう…生き残りがいないかを」
手分けをして上社本宮を中心に探し続けたが、生存者はおろか人のいた痕跡すら見つけることはできなかった
「なにか見つかったか？」
「こっちは何も、要くんは？」
「俺の方も同じだ」
次第に日も暮れかけた頃、俺は友奈と合流し互いの状況を報告するが、俺たち両方とも手がかりすら見つけることはできなかった
「ねぇ要くん。ここ…」
「畑か？」
「そうみたい、とりあえず若葉ちゃん達も呼ぼう！」
友奈がみんなを呼びに行っている間に畑の周りを歩いてみると、夕陽に照らされた木に背を預けるような体勢の白骨と刃が中心から欠けている鉈を見つけた
「要くーん！」
「友奈、それにみんなも」
「なにか見つかったのか」

「あぁ…　ここだ」
　俺が白骨のある場所を示すと、若葉たちが白骨に目を向ける
「人…　でしょうか」
「でもなんでこんなところにいるんだ?」
「あれ…　?」
　タマと杏が白骨に目を向けるのと同じタイミングで、友奈が何かを見つけたのか白骨の寄りかかっている木の近くを掘り始める、よく見ると地面から僅かに出ている何かがあることに気付く
　友奈に続く形で勇者たちは無言で地面を掘り始める、その間に俺は白骨の纏っていた衣服を少し探ってみると内ポケットから一枚の写真を見つける、その写真は多少の色褪せはあったが比較的綺麗な状態で残っていた
「写真…　か」
　写真に写っていたのは頬に土を付け満面の笑みを浮かべている麦わら帽を被った少女とその隣で少し照れくさそうに笑っている少女、恐らくこの畑で採れたであろう野菜を見せつけている短髪の少年の三人
　その写真を眺めていると友奈たちも埋まっていたものを掘り出したようだ、掘り出されたのは少し大きめの木製の箱だった
「誰かが残したのか…　?」
「考えられるのは、其処の骨の人ですが…」
　若葉が息をのみ、箱を開ける
　中に入っていたのは一本の鍬と折りたたまれた一枚の手紙。若葉はその手紙を開くとゆっくりと読み始めた

『初めまして。
　いえ、もしかしたらこれを読んでいるのが
　乃木さんではないかもしれませんから、初めましてと言うのは変ですね
　もしこの手紙を乃木さんでなければ
　どうぞこの手紙を四国の勇者である乃木若葉さんに渡していただ

ければと思います
奴らが現れた日から、既に三年程になります
諏訪の結界も縮小し、切迫した状況になってきました
ここはもう長く保たないでしょう
けれど、まだ乃木さん達の四国は残っています
人間はこれまでどんな困難に見舞われても再興してきました
諦めなければ、きっと大丈夫
乃木若葉さん
まだあったことのない私の大切な友達
あなたに出会えたことをうれしく思います
あなたが戦いの中でも無事であるよう
世界があなたのもとで守られていくよう願っています
人類を守り続けるのがたとえば私ではなかったとしても
乃木さんのような勇者が守り続けてくれるのであればいい
私はそこにつなげる役目を果たします
最後に
この天災を乗り切った後、大地を耕して蘇らせるときに
この鍬も使っていただければ幸いです
私も一緒になって、耕しているという気持ちになれますから』

手紙を読み終えた若葉の瞳には涙が溜まっていた、言葉を交わした大切な友人が残した手紙
若葉の読んでいた手紙を覗き込んでいた仲間たちも言葉を失っていたが、その中で千景が苛ついたように声を上げる
「ここも…　同じ…　全部壊されて」
「ううん、全部じゃない…」
千景の言葉に対して友奈は首を横に振ると、木箱の中に入っていた鍬を持ち上げ優しく抱きしめる
「これが残ってた、白鳥さんから引き継いだバトンだね、きっと…」
「俺たちは、彼女から受け継いだんだと思う、何よりも大切な想いを…」

そういうと友奈は鍬を、俺は写真を若葉に差し出す
差し出された二つを受け取った若葉はそれをしっかりと受け取った
「やっと…　会えたな、白鳥さん。お前の意思は、確かに引き継いだ」
若葉の声を聞き届けた俺は白骨の方に向かうと、目の前に刺さっていた鉈を抜き取る
鉈は本来の役割を果たすことが出来ない程に摩耗していたが、そこには目の前にいる〝誰か〟の想いがしっかりと込められていた
「あなた達が守ってくれたから、俺たちはここにいる…　俺はあなたが誰なのか分からないけれど、その想いは、ここを守った勇者の想いと一緒に俺たちが持っていく…　だから、今はゆっくり休んでくれ」
誰に聞かせる訳でもない、ただの自己満足を終えた俺はみんなの元に戻る
『頑張れよ』
誰のものでもない声が俺の耳に届いた、それは彼が確かにそこにいた証だ

その後、大社に報告するために本宮内を調べていたひなたが、破壊された社殿跡から小さな布袋を持ってきた
「それは？」
「何かの種…　みたいです」
「多分これ、ソバの種だと思います。こっちの袋のは大根の種…　こっちのはキュウリかな？　今の季節に植えられるものもありますね」
種、畑、鍬、この三つがあるのならやることは一つだろう
けれど、俺が声をかけるよりも早く若葉たちは畑を耕し始めた、彼女の遺してくれた鍬を使って一人一人交代で、想いを込めながら畑を耕し、柔らかくなった土壌に種をまく。形になる可能性は低いだろうがそれでもこの場所を元の形に戻したかった。
「この鍬と残った種は、四国に持ち帰ろう」

若葉のその言葉に頷くと、畑の傍で少しだけ休息を取った
休息を終え、移動を再開しようと思った矢先、目を覚ましたひなた
の言葉でこの遠征は終わりを告げることになった

――四国が再び、危機に晒されます

13話―居場所―

『勇者様と巫女様による調査の結果、諏訪地域の無事が確認されました。現在大社は、諏訪地域の避難民へ物資を輸送する方法などを検討しています。また、諏訪以外の地域でも人類が生存している可能性が高いと見られ――』

「相変わらず嘘ばっかりだ。せっかくのうどんが不味くなる」

前回行った遠征の結果を大社に伝えたが、大社側は事実をそのまま報道せずあくまでも市民に希望を持たせるために偽りの事実を報道することにしたらしい、その判断は間違いでないとは思うがそれでもやはり複雑な気分になる

タマもその判断には納得がいっていないようでテレビを見ながら悪態をついていた

「人々の士気を下げないために情報を操作する…戦争なんかではよくあることですけど…」

「仕方ない…と割り切れたらよかったんだが、案外うまくいかないもんだな」

俺はそういうと目の前のざるそばを食べ始めた

啜りながら周りを見るが、やはり全員が今回のやり方には不満を持っているようだった…いや、元々少しずつ溜まっていった不信感が今回の事で表に出始めたって考えた方がいいか

かくいう俺も、色々支援をしてもらって感謝はしているが信用は出来ていないのが本音だ

「みんな、うどん伸びちゃうよ、ニュースばっかり見てたら！よーし、伸びるくらいだったら、私はタマちゃんの肉うどん食べる！」

「あっ！友奈、お前！肉まで食べやがったな！」

「残すくらいだったら、食べてあげた方がいいかなって」

「ちゃんと食べるつもりだったんだ！こうなったら、友奈のうどんキツネを頂く！」

「あー！一枚しか入ってないのにっ！」

タマと友奈がうどんをめぐって起こした争いを横目に見ながら、俺

は残ったそばを啜る
「・・・うまい」
　我関せずと言う態度でそばを啜り続けていると、ひなたと杏の二人
タマたちのことを仲裁していた。どうやらさっきまでの暗い雰囲気
はなくなったみたいだ、俺がそばを食べ終えたのと同時に友奈がみん
なに言う
「あのさ!大社の人達が流しているニュースは、今は嘘だけど、私たち
が本当にすればいいんだよ。バーテックスを全部やっつけて、世界を
取り戻して!」
「あぁ、友奈の言う通りだ」
　友奈の言葉に若葉は頷くと、携帯テレビの電源を切る
　それと同じタイミングくらいだろうか、うどんを食べ終わった千景
は誰と目を合わせることもせず食堂から出て行ってしまった
「そういや、タマも康司あるんだった。杏、午後の授業、欠席するって
先生に言っておいてくれっ!」
「え?うん、いいけど・・・」
「サボりじゃないからなっ」

　授業が終わり帰り支度を進めていると、杏が俺の方に近づいてくる
のが見えた
「要さん」
「何か用か?」
「えっと、その・・・」
　杏は口ごもっているようだったが、様子を見れば何が言いたいのか
は大体分かる
「タマのことだろ?」
「・・・はい、最近のタマっち先輩どこかおかしいというか、何か隠して
るみたいで」
「確かに、最近のタマは何か隠してるだろうな」
「要さんもそう思いますか!?」

「あぁ、多分俺たちを心配させないようにだろうが…逆に心配になった？」
「はい…」
「なら、本人に直接聞くのが一番だろう、杏が聞けばきっと答えてくれるからな」
杏は何も言わなかったがどうやら決心がついたらしい、もう大丈夫だろうと帰ろうとしたところで杏に服の裾を掴まれた
「…一緒に来てくれませんか？」
一人では不安な部分もあるのだろう、俺もタマとはだいぶ長い付き合いになってきたし心配だという気持ちもある
「わかった、俺も心配だからな」
「ありがとうございます」
宿舎の前で杏と二人、タマの帰りを待っていると杏が俺に話かけてきた
「そういえば要さん、記憶が戻ったんですよね」
「少しだけ…だがな」
「…そうですか」
「あぁ、意外と変わらないもんだな…けど、前ほど思い出すのが怖いとは思わなくなった」
「やっぱり、怖かったんですか？」
「そりゃあな、思い出したら俺の中のなんかが変わっちまうんじゃねぇかって思ってたし」
「あの、要さん…その口調」
「あっ、すまない…最近は気を抜くとな」
記憶を思い出してから…正確には遠征から帰ってきてから以前の俺の話し方とでもいえばいいのだろうか、とにかくそういったものが気を抜くと出るようになりはじめていた。みんなの前ではそこまで出ることはないが今回は少々気が抜けてたようだ
「私は良いと思います…その、新鮮で」
「そうか？」
「はい…今くらいは気を抜いてもいいんですよ？」

「なら、お言葉に甘えさせてもらうかな」
そんなことを話してると目の前からタマが歩いてくるのが見える
「あれ、杏に要。どうしたんだ?」
そう聞いてくるタマに対し、杏は何も答えない
だが俺が答えるのも違うと思ったので二人でじっとタマの事を見つめる
「な、なんだ…?タマ、杏を怒らせるようなことしたか?あっ、もしかして前に借りた本によだれ垂らしっちゃってたこと、バレたのか!?ぎごめん、読んでたら眠くなっちゃって…」
「え!?一ページだけへによへひょになって返ってきたの、そのせいだったの!?」
「そのことじゃなかったのか!?しくじったぁ!」
どうやら杏に気圧されて別にバレてないことを暴露したらしい、実にタマらしい
「もう…本のことは後でもっと問い詰めるとしてそうじゃないよ。…タマっち先輩、何か隠してるでしょ」
「隠してるって…」
「今日の午後、授業でないで、どこいってたの?」
隠しごとを聞くというより、夫の浮気を問い詰めるみたいな雰囲気になってきたな、だが…
「ここで話すのもアレだし、部屋戻ったらどうだ?」
「そうだな」
「それじゃ、俺はここで」
「いや、どうせだから要も聞いてってくれ」
「後で杏から聞く…それに女子の部屋に入るのは抵抗が…な」
真面目な話とは言え、女性の部屋に気軽に入るのは気が引ける
「要なら大丈夫だろ、悟り開いてそうな顔してるし」
「ぶっ飛ばすぞ」
少し納得いかない部分はあったが、成り行きでタマの隠し事を聞くのに部屋の中に入る
タマは椅子に、杏はベットに、俺は地面に座るのを確認すると、タ

マは何処に行っていたのかを話始める
「病院に言ってたんだよ、今日は」
「病院？」
「そう、大社の関連病院。タマたちがいつも検査を受けてるとこ」
「漂着した俺が入院したとこか」
「そうそこ」
　タマはかつて俺がお世話になった冬吾さんの勤務する病院に行っていたらしい
「何かあったの？」
「いや・・・怪我とか病気とかじゃないけ。けど・・・遠征で精霊の力を使った時からかね？なんか身体に変な感じしてさ」
「変な感じか・・・」
「おう、それで念のため、もう一度検査してもらったんだよ。けど、やっぱり異常なしだってさ」
「なんだ・・・」
　タマの言葉を聞いた杏は安心したように息を吐いた、俺の方もタマに異常が無くて良かったと思う・・・けど、変な感じか
「でも・・・やっぱり変な感じするんだよなぁ・・・なんか言葉にはできないけどさ」
「何となく・・・わかるかも知れない」
「要もか？」
「あぁ・・・ほら、少し前に俺も使っただろ、切り札擬きみいな奴」
「そういえば・・・」
「言われてみれば使ってたな」
　俺の言葉を聞いた二人も思い出したようだ、タマが感じてる変な感じとは違うと思うが、俺が感じていた違和感についてを話すには良い機会かも知れない
「あの切り札擬きを使ってから、妙にマイナス思考になるというか、気分が落ち込むんだよな」
「気分が・・・」
「落ち込む」

「そ、一人でいると悪いことばっか考えちまってな」
「それが、要の感じてる変な感じか？」
「あぁ、タマの感じてる変な感じとは違うかも知れないが、話しておきたかったんだ」
俺の話しを聞いた杏は俺とタマの方を見て神妙な顔をしていう
「タマっち先輩、それに要さんも・・・もし何かあったら、絶対に無茶しないでね」
「あぁ、わかってるさ」
「当たり前だ、杏も無茶はするなよ」
「うん」
何だかんだでいつもの雰囲気に戻った俺たちはその後少しだけ雑談をすると、俺は部屋に戻った。杏は今日もタマの部屋に泊まっていくらしい

翌日、体操服に着替えた俺たちは教室ではなく、外に集まっていた
今日は若葉が提案した切り札以外なんでもあり、優勝者は他のメンバーに何でも命令できる命令権を貰えるという模擬戦と言う名のレクリエーションをすることになったらしい
始まる前に実際の武器をしようとした若葉がひなたに圧を受ける一幕もあったが、レクリエーション改め、勇者王決定戦の始まりだ
「ところで、勇者王決定戦ってことは俺参加したらダメなんじゃないか？男だし、勇者じゃないし」
「要も私達からしたら勇者の仲間だ、問題ない」
まぁそういう事なら遠慮なしで参加しよう、やるからには全力で行く
「とりあえず様子見だな」
丸亀城の屋根の上で様子を見ていると、若葉と友奈の二人が戦いを始めていた
見える範囲で確認をすると、千景も同じように様子見、タマと杏は

姿を見せない以上同じように隠れていると見るのが良いか
　そんなことを考えていたら戦況が動くのが見えた、刀を飛ばされた若葉が鞘を使って隙のできた友奈に追撃をかけようとしたところを千景が止めた、二対一かと思ったらタマも来て三対一になったか
　若葉とは差しで戦ってみたかったし、加勢に入るか
「よう、若葉。加勢はいるか？」
「必要ない…　と言いたいところだが、頼むとするか」
「あいよ…　と言うわけで三対二だ」
　背中を合わせる形で俺と若葉は武器を構え、三人に向かう
「俺はどうすればいい」
「とりあえず三人の相手をして隙を作ってくれると助かる」
「若干無理のある要求だが…　最善は尽くすよ」
　居合の構えを取った辺りで若葉が何をする気なのかは大体察しがついた
　俺は精々三人の目がこっちに向くように戦うとしますかね
　三人に向かって走り出した俺がまず初めにリーチの近い千景を潰すことにした、途中でタマが旋刃盤を投げてくるが俺はそれを弾くと、同時に千景の振るってきた鎌の刃を槍の柄で抑えるとそのまま内側には入り込む形で接近し、一発を喰らわせようとしたが寸でのタイミングで友奈から妨害が入る
「助かったわ、高嶋さん」
「大丈夫！さっきのお返しだよ！」
「流石のカバー力…　だけど、戦ってるのは俺一人じゃないだろ？」
　その言葉と共に若葉が二人に向かって飛び出し、ノックアウトした
「流石の腕前だな」
「そっちもな…　さてと」
「後はタマ一人か」
　俺たち二人がタマの方を向く
「ここは…　戦略的撤退だ！」
　追う暇もなくタマが森の中に消えていくのを二人で見たのち、俺は若葉に話しかける

「どうする?俺たちも始めるかい?」
「いや、先にタマを倒そう、お前とはそれからだ」
「分かった、そんじゃ俺は先行していきますかね!」
若葉に先行して俺は森の中に入ると、タマを探すために歩き始める
それにしても生い茂ってるなほんと・・・
「ッ!」
森の中を歩いているとどこからともなく矢が二本飛んでくる
「杏も森の中に・・・って当然か」
彼女のリーチなら真正面切って戦うよりも遮蔽物を利用した戦い方の方がいいのは事実
再び探しだそうとしたタイミングで近くから動く音が聞こえてくる、警戒しながらそっちを見ると、若葉に向かって飛ぶ旋刃盤の姿が目に入った。ここからじゃ若葉の援護に行くのも無理だろう、案の定若葉も敗退か
「あたッ?!・・・えっ?」
後ろを見るとボウガンを構えた杏が立っており、近くには地面に落っこちた矢が一本・・・やっちまった
「気を抜きましたね、要さん」
「その通り、若葉が負けて一瞬やる気をなくしかけたのがダメだった」
「それじゃ、私はタマっち先輩と合流するので」
その後、俺も負けた事を知ったタマが杏とのチームワークの勝利などと言っていたタイミングで杏の矢が額にぶち当たり負け、結果は杏の優勝と言う事になった

「私のものになれよ、球子・・・」
「そんなこと言われても、タマには好きな人が・・・」
俺が一体何を見せられているのだろう
「待ちなよ!球子さんが嫌がってる!」
「高嶋君!!・・・・・・って、なんじゃこりゃぁぁ!」

今目の前で行われている寸劇が優勝者である杏の願いだったわけだが、見てる方は結構気まずくなる…というか単純に恥ずかしい。とか思ってると恥ずかしさが上限を突破した球子が爆発した
「カットカットぉ!ちゃんとセリフ通り言ってくれないと!タマっち先輩」
「言えるかぁ!!…なんなんだよ!優勝者の命令が「お気に入りの恋愛小説の再現」って!しかもなんでタマが内気な少女役!?」
「このヒロイン背が低いって設定だから…」
「チビだって言いたいのか!?」
タマ程ではないが友奈と若葉の二人もこそばゆそうな表情をしてる、と言うより若葉は若干呆れてる
「男子の制服ってなんか変な感じだね」
「わざわざ衣装まで用意するとは、恐ろしいこだわりだな…」
「再現度を高めるために当然です!!」
「さっきのシーンはもう嫌だぞ!…と言うよりなんで要は何もしてないんだ!!」
「何もしてないんじゃない…出番がまだなだけだ」
全員が一瞬の沈黙した後、杏は少しむくれながら言った
「再現度に不満はありますが、よしとしましょう…では次の人は」
その言葉を聞いた瞬間、千景はビクっと肩を揺らす
「千景さん?」
「あんな恥ずかしいの…ぜ、絶対にお断りよっ!?」
見事なまでに動揺してる、ＴＨＥ・グールビューティの権化みたいな千景もさすがにこれには動揺するか
「千景さんの役は何がいいでしょう…と言うのは冗談で」
「えっ」
「千景さんには別の命令にします」
そういうと杏は千景に一枚の紙を差し出す
「これって…」
「みんなで作ったんだよ」
「学年が変わるだけで場所はずっとここだけどな」

「だが、形だけでもこういう行事は行った方がいい」
「私もそう思います」
「千景さんへの命令は…「それを受け取ってください」です」
杏が千景に渡したのは、手作りの卒表証書
みんなが思いを込めて千景の… 大切な仲間の為に作った一枚
「そう… 命令なら、仕方ないわね…」
千景は手作りの卒業証書を受け取ると、照れ臭そうに胸に抱いた
「では、そろそろ… シーン2行きましょう!」
「まだやるのか!?」
「もちろん、シーン10まであますし」
「多いな!?」
「私もどんどん撮ります!!」
「ひなたはもう少し自重しろ!!」
コント見たいなやり取りを見ていると、目を輝かせた杏が俺の方を向く
「シーン2!タマっち先輩のお姫様抱っこからスタート!!要さん、出番ですよ!」
「もう勘弁してくれぇ!!」
「よし、行くぞタマ」
「要もなんでそんなにノリノリなんだよぉ!!」
騒がしいけれど、安心する空気。
それを感じながら俺は、ここが一番落ち着くなと感じながら照れるタマをお姫様抱っこをする

１４話―鍵を開く―

昨日はやけに寝つきが悪く、いつもより遅れて教室に入るとタマがみんなに何か話している所だった
「おっ、来たな要！」
「おはよう…　全員でどうしたんだ？」
「実はな、今みんなでお花見をしようって話してたんだ！」
「花見か…　いいな、気晴らしにもなる」
「だろ！それじゃあ次のバーテックスとの戦いが終わったらお花見だー！俄然、やる気が出てきたぞ！」
新しく決まった予定に思いを馳せながら、俺たちはいつも通りの日常が進んでいくと思っていたが、次の戦いが起きたのは…　その日の夕方だった

樹海化警報を聞いた俺たちは樹海と化した世界の中で押し寄せるバーテックスの軍勢が押し寄せてくるのが見える
「なんだよ、今までにない事態とか言ってた割には、対したことないな」
「油断するなよ、球子。何事も大丈夫だと確信した時の方が、失敗は起こりやすい」
「今回は若葉の言う通りだ、タマ。場所は戦場、一瞬の油断が命取りになる」
「はいはい、若葉も要も真面目だな」
俺と若葉の言葉に対し、タマは余裕そうに言葉を返してくる
一度丸亀城の戦いと言う決戦に勝利し、全員の心に多かれ少なかれ余裕が生まれ始めているのだろう
「あのっ！皆さん、聞いてくださいっ！」
杏が声を上げると全員の注目が杏に集中する
「どうしたの…　？」
「今回は切り札を使うことはなしにしましょう」

「それは…　なぜ?」
　それをきいた千景が納得いかない視線を杏に理由を聞くと、俺たちを見つめながら杏は言う
「元々大社からも、精霊の力を使うのはできるだけ控えるように言われていましたし…　もしかしたら、本当に危険かも知れません」
「…　状況次第では、使わざるを得ない場合もあるわ」
「でもアンちゃんの言う通りだと思う。使わないに越したことないよ」
「…　高嶋さんがそう言うなら」
「作戦の方針も決まった所で、みんなそろそろ気合い入れよう…　敵が来るぞ」
　そういいながら若葉が敵の方を見ると、バーテックスはさっきよりも近い位置まで移動していた

　全員が一定の距離から離れることなく、迫りくるバーテックスを撃退していく
「数は前より少ないみたいだな」
「うん、これならみんな大丈夫」
　杏はタマの言葉を聞きながら融合するために動き出すバーテックスを確実に仕留めていく
「少し前に出る」
「気を付けてくださいね」
「あぁ」
　杏に一声かけると、他のみんなよりも少し前に出て迫ってくるバーテックスの注意をこちらに向ける、少しの間バーテックスの相手をしていると、杏から声をかけられる
「要さん、そろそろ下がってください!」
「了解」
　俺がタマと杏の近くまで後退すると周りに吹雪が吹き荒れ始める
「タマ、これは」
「杏が切り札を使ったんだ…　というか、寒いいいいい!」

「アンちゃーん!?この吹雪なにー!?」
「完全に視界が遮られている!敵味方の位置も分からない!」
「さ、寒い・・・」
「みなさん、危険ですから動かないでください!残りの敵は、全部私が片付けます!」
　切り札を使ったであろう杏の引き起こした吹雪は、周囲のバーテックスに襲い掛かる。それから数分後、吹雪が収まっていくと、ほとんどすべてのバーテックスが凍り付いていた、残ったバーテックスの数は残り僅か、ラストスパートと言った感じだ
「やったね、アンちゃーん!もう敵、少ししか残ってないよ!」
「だが、杏自身が切り札を使うなと言っていたのに、よかったのか!?」
「あ、そうだぞ、杏!お前が危険だって言ったのに!」
　友奈と若葉が残ったバーテックスの相手をしながらそういうとタマも思い出したように杏に言った
「えっと、大丈夫、きっと・・・　私、今までの戦いで一度も切り札を使ってなかったから。他の人が使うより、安全だよ」
「まぁいいや、説教は後だ!今は残ったバーテックスを――」
　そういいかけたタマの言葉が止まる、彼女の見ている方を見ると前に出てきた個体と同じくらい巨大なバーテックスがいた、前回の個体との最大の違いはサソリの尻尾のような部位を持っている事・・・それを見た瞬間、全員が直感する
　――あいつはヤバい
　現状一番攻撃力の高い杏が攻撃を仕掛けるが目の前のバーテックスにはダメージを与えている様子はない
「そんな・・・」
　呆然とする杏に向かって彼女を貫こうとするサソリの尻尾が迫ってくる、杏は間一髪のところで避ける
「大丈夫か」
「はい・・・なんとか」
　そうこうしている間に周りにいた小型が一つに集まり大型に融合していく

「まずいよ、若葉ちゃん！これだけいっぺんに進化体が出てきたら！」
「使うわ・・・切り札」
友奈たちの言葉を聞いた千景が切り札を発動して、進化体の方へ向かう
「待ってください、千景さん！」
「状況が状況だ！迷っている場合ではない！」
「うん！」
突如として現れた大型バーテックスと進化体相手にこっちも出し惜しみをしている場合ではなくなる
千景に続く形で友奈と若葉の二人も切り札を発動すると進化体へと向かっていく
「杏！要！危ない！」
サソリの尻尾が俺たちの方に向かっているのに気付くのが一瞬遅れる、ギリギリの所で槍使い尻尾の軌道を逸らすと切り札を発動したタマの助けが入る
「二人とも、大丈夫か！」
「俺の方は問題ないが・・・すまない、杏を守り切れなかった」
「私も大丈夫、ちょっと掠っただけ・・・え？」
杏の掠った後を見ると、その部分だけ赤くただれたように腫れている、それを見るまで気がつかなかったが俺の方も傷の治りがいつもより遅い。それを認識した瞬間、傷を負った左腕が悲鳴を上げ始める
「・・・ッ！」
「杏、それに要も・・・腕が！」
「あのバーテックスの針、毒を持ってるんだ」
「成る程、通りで傷の治りが遅いわけだ・・・」
「くっ、あいつ・・・！」
「右腕が無事だったら戦えるから」
「俺の方も、しばらくすれば治る・・・だから大丈夫だ」
杏は右腕でクロスボウをしっかりと握り、俺も動かすことの出来る右腕に槍を再構成する
「・・・わかった。だったら早く治療できるように、さっさと戦いを終

わらせる」
　そう言うとタマと杏の二人はサソリに視線を向ける、サソリの方も二人に狙いを定めたようで攻撃のタイミングを測っているように見えた
「攻撃は最大の防御！杏とタマで同時攻撃を仕掛けるぞ！」
「俺はあいつが攻撃を仕掛けてきたときの為に全力で防御に徹する…　今回は俺がお前達の盾になる」
「…　ッ！任せた！」
　二人が攻撃を仕掛けようとするのと同時に俺は右腕に全神経を集中させ、相手の出方を伺う
　杏の冷気とタマの炎を纏った旋刃盤がサソリに向かって飛んでいく
「いけぇ！」
「お願いっ、効いて――！」
　だが、二人の願いは届かず攻撃は表面に僅かな傷をつけただけだった
「全然、効いてないっ！」
　目の前の敵が放つ圧倒的な力は俺たちに絶望を叩きつけてくる、それに一瞬気を取られそうになったが、真横から迫ってくる尻尾に気づき、慌てて二人を庇う形で抱きしめると、今まで感じたこともないような衝撃が俺を襲い、意識がブラックアウトした

　目を覚ますとそこは真っ黒な空間だった
「俺は…　死んだのか？〃また〃何も守れず」
　誰に伝えるでもない言葉を言い終えてから、俺は自分の発した言葉に違和感があることに気付く
　――〃また〃って、どういう事だ
「まぁ、今さら気にしたところで仕方ないか」
「ちょっとちょっと、何勝手に諦めてんの？」

仕方ないと割り切ろうとした瞬間、背後から声が聞こえてくる、振り向いてみるとそこにいたのは宙に浮く一匹の狐
「狐？」
「狐ってのは流石に酷くない？…　と言うかもしかしてまだ、思い出せてない？」
「思い出すって、まさか俺の記憶の事か？」
目の前にいる狐は俺の記憶の事を知ってるのか、だとしたらこいつは俺と関係あるという事になるが…　全く心当たりがない
「いやぁ、ここまで忘れられてると流石に傷つきますよ」
「すまない」
「まぁいいよ、許したげる…　頭は忘れてても心は忘れてないみたいだしね、私のこと」
「心…」
「そっ、まぁいいや。今回は時間がないから手短に説明すると…　このままだと要たち三人ともお陀仏だね」
「三人ともって…　俺はもう死んだんじゃ」
「まだ死んでないよ、なんていうのかな…　今は生と死の境界線を彷徨ってる感じ？そんで私はまだ要に死んでほしくないからこうして出てきたってわけ」
俺はまだ死んでない、ならやることは一つだろう、一刻も早く二人の元に戻らないと
「なら早く俺を戻してくれ」
「安心して、急がなくても少ししたら元の世界に戻るから…　でもその前にちょっとだけ」
狐は俺の方に近寄ってくると、自分の頭を俺の頭にぶつける
「今の要じゃ勝てない…　なら、私が記憶を戻すのを手伝ったげる」
その言葉と共に記憶の扉に掛かっていた鍵が次々と開かれていく、自分がどうして四国を目指したのか、この力と体質が一体何なのか、そして…　あの言葉を言ったのは誰だったのか
「思い出した？」
「あぁ、まだぼやけてる部分はあるけど、大切な所は思い出せた」

「ならよかった、それじゃ早く行ってあげて…　今の仲間の所に」
「…　今の仲間って言い方は違うな、あいつらもお前も、俺の大切な仲間だ」
「そっか、それが聞けただけで満足だ…　それじゃあ、頑張れ」
「……　ありがとな、雪花」
記憶の大切なピースを彼女によって思い出させて貰ってから、ホントに大事な所はいつもアイツ任せになってるなと、記憶を取り戻した自分自身に少し呆れる
意識が浮上するとき、最後に後ろを向くと彼女――秋原雪花は少しだけ寂しそうに手を振っているのが見えた

激しい打撃音と共に目を覚ますと体を起こしていた杏とサソリの尻尾から俺たちの事を守っているタマの姿が目に入る
「杏、タマ…」
「要さん！」
「起きたか…　要…　それなら…　杏を連れて…　逃げてくれ」
起きて早々腑抜けた事を言ってきたタマの言葉を無視すると、槍を出現させながらタマの横まで向かう
「頼む…　ッ!!」
「うっせぇバカ」
その言葉と共にサソリの尻尾が離れた一瞬の隙を見てタマを杏の所に投げ飛ばすと向かってきた尻尾を槍で受ける
「要!?何してんだ！」
「杏、タマ連れて隠れてろ…　あのデカブツは俺がやる」
「でも…　ッ!?一人じゃ」
「大丈夫だ…　頼む、信じてくれ」
杏の方を振り向かずに、尻尾をパリィすると改めて槍を構え直す
記憶が戻った…　てのはどうでもいいが、大切な仲間がわざわざ激励してくれたんだ、今の俺は負ける気がしねぇ
「俺の切り札の名前は…　そうだそうだ、思い出した」

「血戦偽装（けっせんぎそう）――尾裂狐（おさき）」

勇者が使う切り札のように、自らに宿す精霊をイメージする

但し、神樹に接続できない俺は一度の使用につきバカみたいな負荷がかかるが、体質上そんなことを気にする必要はない

体中からあふれ出る血液が、俺の身体に纏わりつき、外套を形成していく

赤黒い外套、顔の半分を覆い隠す狐の面、そして背中に現れた蛇腹剣のような九本の尻尾

だが、前回使用した時のような衝動に飲み込まれる感覚が今日はない

偽装を完全に顕現させると、俺は九つの尻尾を使いサソリの尻尾を切り裂いていく

「正直厄介極まりない敵だったが関係ねぇ・・・　力の限りぶっ潰す！」

その言葉と共に俺は周りにいる大型バーテックスを薙ぎ払いながらサソリ野郎に向かって一直線に進んでいく

「磔刑で死ねぇ！」

九本の尾をサソリに突き刺すが、そこまでダメージを与えられている様子はない、一本ずつでダメなら九本まとめて突き刺せばいい。そう考えると九本あった尻尾を一つに纏め攻撃を仕掛けた。

分散していた破壊力を一本に纏め、攻撃を仕掛けるとサソリの身体に少しずつひびに入り始める

「もう少し・・・ッ！」

少しずつ身体が言う事を聞かなくなり始めるのを感じる

「要ぇッ!!」

「要さぁんッ!!」

後ろを向くとサソリに向かって一本の矢が飛んでくる、それを見た俺は尻尾を再び九本に戻し飛んできた矢の尻をにまず一本目の尻尾を叩きつける

加速した矢はそのままサソリにぶち当たりその体を大きく揺らす、それを確認した瞬間矢の刺さった場所にすかさず二本目、三本目と尻尾を叩きつけ続ける、九本目の尻尾を叩きつけ終わった瞬間、サソリ

の身体がひび割れる
「これがダメ押し・・・　我流！槍撃神威！」
ひびが入った身体にダメ押しの一撃・・・　昔、雪花の使っていた技を自分流にアレンジした一撃をぶつけるとサソリ型バーテックスは地に墜ち、爆発する
俺はそれを見届け、偽装を解くと同時に意識を手放した

15話―敗北―

「今回は随分と無茶をしたみたいだね」
病院の診察室で、俺のカルテを見ながら冬吾さんはそう言った
「そこまでですかね？」
「あぁ、確かに傷は治り始めてるが、骨の方はダメージを受けたままだ」
「そうなんですか？」
「そうだ・・・しばらくが無茶せず、体を休ませるのは良いだろうね」
冬吾さんはそう言うとカルテを机に置き、俺の方を見る
「検査はこれで終了・・・この後はあの子たちの所に寄っていくのかい？」
「はい・・・それじゃあ失礼します」
俺はそういって診察室を出て、そのまま別の病室を目指す
あの戦いの後、意識を失った俺、タマ、杏の三人は大社の手によってすぐにこの病院に運び込まれたらしい、結果俺は3日間眠りっぱなしでタマと杏は俺より早く意識は戻ったが負った怪我が思いのほか酷いものだったため、2、3週間ほど入院することになった。
俺の方な眠っていただけだから、今日で退院だ

「よう、二人とも大丈夫か？」
「おう！　大丈夫すぎて退屈してるところだ・・・ッ！」
「タマっち先輩、まだ治ったわけじゃないんだから大人しくしてないと・・・」
俺が病室に入るとタマと杏の二人は元気そうな顔を俺に見せてくれたが、怪我の治りはまだまだのようだった
「変に動いて杏に心配かけさせるなよ」
「わかってるって・・・でも。出来るだけ早く治すからな」
「そんなに焦らなくても大丈夫だ、特にタマは武器が使い物にならなくなってるからな」
「うぐっ・・・それは言うなよ」

「でも、タマっち先輩が守ってくれたから私達は生きてるんだよ？」
「そ、そうかぁ？」
　杏の言う通りタマがあのサソリの攻撃から俺たちを守ってくれなかったら、三人とも今この場にいなかったかもしれない、あの戦いは本当にギリギリだったと思う、俺が目を覚ますのが少しでも遅かったらタマと杏は尻尾に貫かれていたし、タマたちが守ってくれなかったら俺も杏もあの場所で殺されていたと思う…　そう考えると今この場に全員揃っているのは、本当に奇跡なのだろう
「要？　どうかしたのか？」
「何か考え事ですか？」
「いや、全員無事でよかったと思ってな」
　そんなことを考えていると病室のドアが開き、若葉たちが入ってきた
「お前らも来たのか」
「あぁ、要のほうこそ体は大丈夫なのか？」
「問題ない…　と言いたいところだが骨の方がガタついてるみたいでな、暫く無茶は禁物だ」
「それなら、要さんも入院していた方がいいのでは…？」
「日常生活に支障がないから自宅療養で問題なしだそうだ」
「でも、みんな無事でよかったよ！」
「そういえば、千景は？」
　俺がそういうと若葉たち三人は気まずそうに黙ってしまう、俺たちが何のことかわからずにいるとひなたがゆっくりと話始めた
「千景さんとは、最近話が出来てないんです？」
「話が出来てない？」
「うん、ぐんちゃん最近話しかけようとしても、一人で帰っちゃうというか…　避けてるというか？」
「…　ッ！　要さん、それって」
「多分、そうだろうな」
「何か知ってるの!?」
「おそらく、切り札の後遺症が出てる可能性がある」

「切り札の…　後遺症?」
「あぁ、俺のものと勇者のものが同じか分からないが…　切り札には身体的な負荷以外にも、精神に何かしらの影響を及ぼす可能性がある」
「タマっち先輩と要さん、それぞれ切り札を使った後に違和感を覚えたみたいなんです」
「タマ、あの時の話し、しても良いか?」
「あぁ、大丈夫だ」
　タマから許可をもらうと、あの時の事を若葉たちに話始める
「タマが授業を休んだ日が合っただろ」
「あったが…　それがどうかしたのか?」
「あの日、俺と杏の二人で授業を休んでまでタマが何をしたのか聞いたんだ…　まぁ、俺は成り行きだったがな」
「それでタマっち先輩からあの日は学校を休んで病院に行っていたと聞いたんです」
「そうだったんですか…」
「タマちゃん、大丈夫なの!?」
「おう、大丈夫だ…　と言っても、その日も検査を受けに行っただけなんだけどな」
　タマがそう言うと友奈は安心したように胸を撫でおろしているのを見ながら、話しを続ける
「俺の方も丸亀で初めて切り札を切ったあの日からちょくちょくマイナス思考になることが多くてな、違和感を感じてたからタマの話しを聞いて、一応話したんだ」
「それで、もしかしたら切り札は身体の負荷以外にも私達の知らない後遺症があるんじゃないかって思ったんです」
　杏のその言葉を聞いた若葉は何かが腑に落ちた表情をしていた
「成る程、だからあの時切り札を使わないよう言ってたんだな」
「はい…　もし精神的な負担まであったら、本当に危険ですから」
「じゃあ、千景さんは…」
「精神が不安定になっているのか…　精神的な汚染を受けてるのか知

らないが、どっちにしても切り札の後遺症は残ってるんじゃないかと思う」
「でも、それなどうすればいいんだろ…」
「現状、自然に後遺症が治るのを待つしかないと思います…」
「それ以外だと、俺たちで千景の事を気遣う以外ないだろうな」
俺はそう言うと椅子から立ち上がる
「もう帰るのか？」
「あぁ、そろそろ寝なれた布団の上で寝たいからな… じゃあ、また」
そういって俺は病室から出ると、病室側の壁に背を預けている千景の姿が目に入る
「… 来てたんだな」
「ええ… その… 心配だったから…」
「そうか、もしかして… って聞く必要もなさそうだな、その様子だと」
「……」
俺のその問いかけに対して、千景は俯いたまま答えようとしない
「別に責めるとか、そういう事をするつもりはないが… せめて少しくらいあいつらの事を頼っても良いんじゃないか？」
「… わかってるわよ、そんなこと…」
「そうか… じゃあ、俺は先に帰る、ここまで来たんだから少しくらい顔を見せてやれよ」
「… そうね、そうするわ」
帰る前に千景の方を見ると、少しだけ今までの千景に戻っている気はしたように見えた

俺が退院してから1週間ほどの時が経ち、俺と若葉、友奈、千景の四人は壁の近くまでやって来ていた
今回の任務は壁外の敵の討伐、メンバーは現状動くことの出来る俺

たち四人だ
「珍しいよね、壁外の敵の討伐なんて」
「そうだな、大社の方針が変わったのか…？」
「もしくは、早急に対処しないといけない程の敵が現れたか…」
「どちらにしても、あまり考えたくない事には変わりないな」
「ぐんちゃん？」
若葉に続いて俺も壁の外に向かおうとしたところで千景が立ち止まっていることに気付いた友奈が声をかけていた
「高嶋さん、私……いえ、なんでも…ないわ」
その様子が少しだけ気になったが、この場は友奈に任せ俺は壁の外に向かって歩くと隣に来た若葉が声をかけてくる
「いいのか？」
「あぁ、千景の事なら俺より友奈の方がいいだろ」
「そうだな…それじゃ、行くぞ」
「あぁ…いつも通り言っておくが、背中は任せた」
「ならこちらもいつも通り、任された」
俺と若葉はいつも通りのやり取りをすると、腕でタッチをすると友奈たちよりも一足先に壁の外に出ると、そこには俺たちの予想とは大きく異なるものが居た、今までのそれこそこの前戦ったサソリとも比較にならない程巨大なバーテックス、まだ作りかけで所々は形成されていないものの、今で来ている姿だけでも俺たちにとってどれだけの脅威になるかは理解出来た
「こいつは…」
「この存在が壁の中から確認できない筈は…まさか、隠されている？」
「どうやって隠してるかは神樹の力…で何とかなりそうだが、今はそんな事言っている場合じゃないか」
「そうだな、友奈と千景も呼んで四人で対処しよう」
若葉はそういうと友奈と千景の事を呼びに行く
その間に目の前にいる超巨大バーテックスを見つめる、こいつを倒すには何が必要なのか…いや、そもそもこいつに俺たちの攻撃が通

るかすら怪しい所ではある、なんせ勇者の切り札で最も火力のあるタマの攻撃ですらあのサソリに対して決定打にはならなかった
「要！」
「若葉、二人も来たみたいだな」
「これは…」
「こんな大きな敵、壁の外からは見えなかったよ?!」
壁を越えて外までやって来た二人も目の前に存在する超巨大なバーテックスを見て、案の定な感想を持ったらしい
「結界の効果で隠されていたのだろう…」
「また…隠すのね…」
「あぁ、だが…」
「今は全力で敵を倒すのが優先…でしょう」
「その通りだ」
「切り札の使用は…とか言ってる場合じゃないか」
「…行こう！」
俺たち四人はそれぞれ自身の切り札を発動させると超巨大バーテックスに攻撃を仕掛けるが、やはりと言った感じでダメージを与えられている様子はない
「ぐんちゃん避けてッ!!」
友奈のその言葉を聞き、千景の方を見るとバーテックスがエネルギーを溜めているのがわかった
急いで千景の所まで向かい放たれる火球から千景を助けると壁に降りると放たれた火球はそのまま本州へと向かい直撃した部分を焼き尽くした
「千景…大丈夫か?」
「えぇ、貴方は…ッ！」
「大丈夫だ…この程度すぐ治る」
そういいながら改めて火球が直撃した場所を見る、千景もその光景が見えたようで呆然とした様子で本州を見つめていた
「ぐんちゃん、要くん！」
「二人とも、大丈夫か！」

「高嶋さん…　乃木さん…」
「あぁ、問題ない…　とは言い難いな」
「要くん、その怪我…」
「心配するな、すぐに治る」
「…　このままだとこちら側が消耗するだけだな」
　俺たちの様子を見た友奈は、一瞬何かを考える素振りをした後決心したように顔を上げる
「みんな、私に試してみたいことがあるんだ」
「何をする気だ」
「一目蓮よりも、強力な精霊の力を使えば、もしかしたら」
　友奈のその言葉を聞いた若葉は強い口調で否定する
「無茶だ！」
「お前達の使ってる切り札だけでどれだけ体に負担がかかってるのか忘れたわけじゃないだろ…　それ以上の力を使うとお前の身体が」
「わかってる！　…　でも、四国のみんなを絶対に守るんだ…　私達の世界を終わらせないためにッ！」
　精霊を卸そうとしている友奈は今まで見たことのない程の気迫を身に纏っており、立っているだけで現れる強大な精霊の力が伝わってくる
「来いッ！　酒呑童子!!」
　友奈が卸した精霊は酒呑童子。鬼の王ともいえる存在
　強大な力を身に纏った友奈はそのままバーテックスの方へと向かっていった。俺も友奈の場所に向かおうとするが足に力が入らずその場に倒れこむ
「要！」
「悪い…　体に力が入んねぇ」
　俺が倒れこんでいる間に友奈は迫っていたバーテックスを蹴散らし、その一撃をバーテックスへと放つ
　攻撃を喰らったバーテックスの身体が抉れるのが分かったがその一撃を放った友奈は切り札が解け、そのまま海に落ちていく
「友奈ぁぁぁぁぁ！」

「高嶋さ――――ん！」
「くそったれぇッ！」
「要ッ!?」
ガタがき始めた身体を無理やり動かして、友奈の元へ向かうと彼女を庇う形で海の中に落ちていった

16話―激情―

「あぁ～、まーた随分と見慣れた天井だなぁ」
「要さん、目が覚めたんですね」
「ひなたか」
俺が目を覚ますと、近くにいたひなたが声をかけてきた、ゆっくりと体を起こすと左腕の違和感に気付く、いつものような感覚じゃなかった。左腕の肘から下には包帯が巻かれていた
「腕が痛むんですか？」
「いや、まだ治りきってないんだなって…　そういえば、若葉たちは？」
「若葉ちゃんと千景さんは宿舎に戻っています、友奈さんは…」
「友奈は、どうかしたのか？」
「友奈さんは、切り札の連続使用で現在面会謝絶状態です」
「そんなにひどい状態なのか？」
「連続使用そのものより、卸した精霊が問題だったんです」
「酒呑童子か…」
「はい、酒呑童子と言う精霊はかなり強大な精霊です…　単独での使用でも他の精霊以上に負荷が大きい」
「それを友奈は単体ではなく複数の精霊との連続使用で体が負担に耐えられなくなった…　って認識でいいのか」
「はい、その認識で問題ありません」
その言葉を聞いて理解することが出来た、何よりも今回の怪我は友奈一人に無茶させてしまったのが原因だ。そんなことを考えているとひなたの顔にはそれ以外にも何かあるという顔をしているのが、何となくわかった
「…　それ以外にも、何かあるって顔をしてるな」
「ッ！　…　それは」
「とりあえず話してみてくれないか？　言われない事には知りようがないからな」
俺のその言葉を聞いたひなたは躊躇い交じりにと言った風だった

が、何を隠していたのか話し始めた
「話しをする前に…　まず、これを」
ひなたは自分のスマホを操作すると、ＳＮＳの画面を表示し俺に渡してくる
その画面を見て俺は少し吐き気を覚える、画面の中に書かれていたのは勇者に対する誹謗中傷の数々だった
「…　酷いな、これは」
「はい…」
「大社の方で何とか出来なかったのか？」
「頑張っては見ているようですが、一度ネットに出てしまった情報を消すとなると流石に厳しいみたいです」
「打つ手はほぼなし…　か、ホント使えねぇ」
「え？」
ひなたが驚いた表情をするのと同時に、自分が何を言ったのかを理解する。自然に出たその言葉は俺にも切り札使用の後遺症が出ている事を改めて実感させるものだった
「すまない…　やっぱり何処かおかしくなってるのは間違いないみたいだ、悪いが今日の所はもう帰ってくれないか？」
「…　わかりました」
俺の言葉を聞いたひなたが病室から出ていくのを確認すると、包帯に巻かれた左腕を見ながら誰に伝えるでもなく呟く
「ほんっと、やるせねぇよな…　壁の外も…　中も」

翌日、やけに外が騒がしいと思いベットから起き上がると病室の外に出る
「うっせぇな…　ここは病院なんだから、ちったぁ静かに出来ねぇのか」
「不知火…　君」
「要…」
外に出た俺が見たのは、尻餅をついて倒れている若葉と、彼女の事

を突き飛ばしたと思われる千景の姿が目に入る
「お前ら…なにやってんだ?」
「これは…」
「ったく、ケンカをすんのは勝手だが矢んなら河川敷とか場所を選びやがれ…観葉植物が可哀そうだろうが」
「あ、あ。すまない」
「立てるか?」
「大丈夫だ」
立ち上がろとする若葉に手を貸していると、千景が何も言わずにどこかに行こうとするのが見えた
「千景、おめぇはこのままでいいのか?」
「……ッ!」
千景は一瞬立ち止まるが、何を言うわけでも再び歩き出してしまう
「言葉にしねぇと…ってこれは後で本人に言うから良いか」
「要…お前、口調が」
「あ?…あぁ、悪い」
若葉に言われて初めて自分がいつもと違う口調…と言うよりも気を抜いている時の口調になっているのに気づき、いつもの口調戻す
「それで、何があった?」
「実は…」
「若葉ちゃん、ここは私から」
若葉を制したひなたの口から何があったのかを聞いた
千景がいつもより感情的になっていた事、ちょっとした事で若葉と千景の二人が言い争いになった事、その結果千景が若葉の事を突き飛ばし若葉が怪我をした事
事情を聴いているうちに若葉の治療が終わったようで、ひなたと一緒に治療室に入ると若葉は自分の腕を見ながら一人で何かを考えているようだった
「若葉ちゃん」
「若葉」
「二人とも…すまない、どうにも感情の自制が出来てなかったみた

いだ」
「そのことについてお話が・・・　球子さんと杏さんにも話したほうがいい話なので、場所を移しましょう」
「そうだな」
「わかった」

　タマと杏の病室までやって来た俺たちは、俺はひなたにこれから話す事を聞いた
「それでひなた・・・　俺たち全員に話しておいた方がいい話ってなんだ？」
「タマと杏にもってことは、重要な話しなんだよな？」
「はい、本当は友奈さんもいたらよかったのですが・・・」
「それなら多分大丈夫だと思います・・・　朝方友奈さんが目覚めたって聞いたので」
「じゃあ、俺が友奈の所に行ってくる」
　そう言い残すと俺は、誰かに言われる前に友奈の所に向かおうとすると、丁度友奈も杏たちの病室に向かってきていたようで廊下でばったり会うことが出来た
「要くん、どうしたの？」
「ひなたが話したいことがあるらしい、重要な事だろうから呼びに行くところだった」
「わかった、私も丁度アンちゃん達の所に行こうと思ってたから」
　タマたちの病室に戻ると、友奈の分の椅子も用意されていた為、それぞれ話しを聞く体勢に入るとひなたは話しを始めた
「今朝、大社から連絡がありました・・・　切り札の影響について、検査結果から新事実が分かったそうです」
「新事実ってのは、俺たちが予想している通りでいいんだよな」
「はい、精霊を宿すと肉体にもダメージを受ける。その結果、攻撃性の増加や自制心の低下などが起こり。最終的には言動にも大きな影響が出ると・・・」

それは俺たち…　と言うよりも杏が予想した通りだった。それを聞いた友奈は病室を出ていってしまう
「友奈さんッ！」
「私が探しに行ってくるッ！」
「俺も行く、人手は多いほうがいいだろう」
そういって俺と若葉の二人は急いで友奈の事を探しに行くと、思いのほか早く友奈は見つかった。友奈は何処かに電話をかけているようでその様子から焦っているのが分かる
「お願いッ！　出てッ！　…　お願い…　ッ！」
「友奈」
「ッ！　…　要くん」
「千景のことか？」
「うん、ぐんちゃん…　電話に出なくて！　でも、私、どうすればいいかわからなくてッ！」
「落ち着け、友奈」
「落ちついてなんていられないよッ！　…　お願い、ぐんちゃんを…」
「何とかする…　俺だけじゃなく、若葉たちと一緒に」
「うん…」
「要ッ！」
「若葉、千景の居場所は？」
「千景はいま、高知の実家に帰ってるんだ」
その言葉を聞いた瞬間、いつも唐突に来る嫌な予感がいつもより鮮明に感じた
「高知…　遠いな」
「急ごう」
「要も一緒に来るのか？」
「当たり前だ…　いつもより嫌な予感がする」
「わかった…　行くぞ、要！」
若葉は勇者服、それを追う形で高知まで向かうことになる今いる場所から高知まではかなりの時間がかかる、場所にもよるが到着は夕方

くらいになるのは確定、それなら並んでいくよりも場所を知っている若葉を先行させた方がいい
　全力で移動している間にも少しずつ嫌な予感が増していく
「見えてきたぞッ！」
「あそこかッ！　…若葉、あれッ！」
　上から千景が帰ったらしい実家の場所を見ると、一般人相手に鎌を振り上げる千景の姿が目に入る
「不味いな、ここからだと間に合わないッ！」
「いや、間に合わせるッ！　…若葉、俺を踏み台に使って加速しろッ！」
　そういいながら俺はいつもの槍を構成するのを応用し、盾を作り出すと若葉に向かってそれを構える
「…わかったッ！」
「行けッ！　若葉！」
　若葉が盾を踏み台に加速するのを確認すると、体に負担がかかるのを無視して盾から槍に構成し直すとそれを思い切り伸ばし地面に突き刺す
「これで…そのまま地面に落っこちるッ！」
　槍の長さを調節し、通常の長さに戻すと地面にを思い切り踏ん張って千景の元までまっすぐ向かう
「その怒りはお前の感情じゃないッ！　精霊の力の影響だッ！」
「精霊？　…そんなもの、関係ないッ！　許せないのよッ！　命がけで戦ってきたのに、なぜ蔑まれないといけないのッ！　こんなことになるならッ！」
　その言葉が発せられる前に千景の元に辿り着いた俺は槍を振るい千景の手元から鎌を弾き飛ばす
「それ以上は言うな、千景」
「不知火…くん…」
「それ以上言ったら、お前だけじゃない、俺たちのやって来た事すべてが…お前の中で無駄になる」
「それは…」

「一時の感情に任せて…お前の手でお前自身の大切なものまで壊させるわけにはいかない」
「どうして…そこまで」
「仲間だからだ」
俺の後ろにいた若葉がそういうと黙ったままの千景に伝える
「それに、私は…私達は頼まれたんだ、お前を助けてくれと」
「だから俺たちはお前を助ける…お前に手を伸ばし続ける。俺たちの為に、お前を助けてくれと願った友奈の為に」
「…ッ！　高嶋さん」
無我夢中になっていて気が付かなかったが、いつの間にか俺たちの周りには人だかりができていた。けれど、周りにいる人達から視線は好意的なものではなかった。自分と異なるものに対する恐怖、勇者に対する不信感、視線のどれもが悪意に満ちたものだった。今までこんな視線に耐えながら生きてきたのだと思うと、千景に対してある種の尊敬を抱かざるえないが、それ以上に胸糞が悪い
「お前ら…どうしてそんな視線を彼女に向けられる」
「要？」
「不知火…くん？」
「悪い若葉、千景を連れて先に行ってくれ…この視線は、俺にとって許容できる範囲を超えてるからな」
若葉にそういい先に行かせると、誰に問いかけるでもなく、さっきと同じ言葉を放つ
「お前ら…どうしてそんな視線を向けられるんだって聞いてんだよ」
「…何言ってんだ、アイツ？」
「関係ねぇ疑問浮かべるより先に、誰でもいいから答えやがれって言ってんだよッ！」
誰が発したのかもわからない、他愛のない言葉一つで俺の心の中にあった自制心が切れるのを感じた。胸の内から湧き上がってきた黒い感情をそのまま槍の刀身に乗せて、思い切り地面を抉る
周囲にいた人々が恐怖の混じった悲鳴を上げるのが聞こえたが、こ

こまで来ると俺はもう自分自身を止めることが出来なかった
「あいつが…千景がテメェらに何をしたッ！　間違っても勇者になったが人を守れてねぇとか言うんじゃねぇぞッ！　勇者だって只の人だからなぁ、そんなふざけた事を言ったらこの場でソイツをぶっ殺す…それを踏まえて聞いてやるから今度はしっかり答えやがれ。千景がテメェらに何をしたッ！」
「あ、あいつの両親は…」
「両親？　アイツの両親のやったことが千景と何の関係がある？　関係ねぇだろ？　…その態度で大体わかったよ、知った風な口を利かせて貰うがテメェらアレだろ？　ようは千景の事を使い勝手の良いサンドバッグ程度にしか思ってねぇんだろ？」
　俺のその言葉を聞いてもなお、周りにいる人間は一言も発さなくなる。向けられている視線は恐怖一色に変わっている…些細なことのはずなのにそれが俺にとってどうしようもなく苛立たせる
「あぁ、クソッ！　イライラする…どいつもこいつも雁首揃えて、今更自分は被害者みてぇな顔しやがってよ、お前らがアイツの事をもう少し気遣ってれば今見てぇな結果にゃなんなかったんじゃねぇのかよ」
　我ながら滅茶苦茶な事を言っているなと思い、変な笑いが出そうになるがそれを塗り潰すように黒い思考が俺の事を蝕んでいくのを感じる…と言うか、もうこんな場所ぶっ壊しても良いだろ
「…もう壊すか、自分の苛立ちを言葉にするぐらいなら、いっそ全部ぶっ壊すのも良いかもな」
「それはダメです、要さん」
「あぁ？　…ってなんだひなたか、どうした？　後ろに無能をぞろぞろと」
　俺に声をかけてきたひなたは後ろに大社の無能どもをぞろぞろと連れてこのクソみてぇな場所においでなすった。大社の奴らは周りにたかってた奴らを帰らせているのを見ながら俺はこのイライラを込めてそこら辺に生えてた木を思いっきりぶん殴る
「ったく、これからがいいとこだったのに何の用だよ？」

「なんの用って…　若葉ちゃんに言われて要さんを迎えに来たんです。まったく、千景さんを止めに行ったはずの要さんが暴走してどうするんですか？」
「…　仕方ねぇだろ、それに俺は勇者じゃねぇし好き勝手したって構わねぇだろ？」
「構わないわけないでしょう！」
　今まで聞いたことのない声音を俺に向けられ負の感情に飲まれかけていた頭が少しだけ冷静になる
「要さんは私たちの大切な仲間なんですよッ！　貴方がいなくなってしまったら私も若葉ちゃんも、みんながどれだけ悲しむか理解してないんですかッ！」
「それは…　いや、そうだな。すまなかった」
「冷静になってくれたのならそれでいいです」
　ひなたの言葉で頭に上がっていた血がすっと引き冷静になった。冷静になると今度は俺の処遇がどうなるのかが気がかりなってきた、結構洒落にならない事をやらかしているから流石に無罪放免ではないだろう
「そうですね、要さんの処遇については追ってお話します…　けど、まずは帰りましょう」
「そうだな」
「帰ったらまずは皆さんに謝ってくださいね、球子さんも杏さんも心配していましたから」
　今回の一件で改めて自分たちの使っている切り札によってもたらされる精神ダメージの危険性、そして俺の切り札も勇者たちの切り札と及ぼされる影響事態は変わりないのだという事を思い知らされる結果になった

17話―絆ノ花　届ク想―

千景の実家がある場所から帰ってきた俺は、しばらくの間自室謹慎と言う結果に落ち着いた、勇者ではないと言え対バーテックス戦における貴重な戦力であることには変わりないが故にこの程度で落ち着いたらしい。

千景は精神が不安定であることから勇者システムを一時的に剥奪したうえで自宅謹慎になっているらしい、家族ともどもあの場所から離れたらしいがあそこでの千景の扱いの根本的な原因は彼女の両親にあるとみて間違いない、その両親と一緒に生活したところで千景の精神が回復するかと聞かれたら、否としか言いようがないだろう

「勝手に出かけようにも、腕がこれじゃ抜け出すのも無理だし、どうすっかな」

現在、俺の腕には大社謹製の手枷で両手をガッチリ拘束されてしまっている。やろうと思えばぶっ壊すこともできるが流石にそれはバーテックスが攻めてきたとき以外するつもりはない。

『7．30天災の悲劇から、後一か月程で四年が経とうとしています』

気を紛らさすために操作がクッソしずらいながらも里もリモコンを使って適当にチャンネルを回していると、若葉の演説が丁度テレビで放送されていた

『人命や国土、そして自由に見上げることのできる空。多くのものを私達はあの日奪われました』

「くっだらねェ」

仲間が行っている筈の演説なのに、今の俺にはそれがどうしても只の戯言にしか聞こえなかった。話しを聞く価値もないと思った俺はテレビを消すと再びベッドに横になり目を閉じる

「―め――要、――――要、起きろぉー」

「あ？」

「ようやっと起きたか、アホ要」

目を覚ますとそこに広がっていたのは真っ白な空間と中央に置かれたコタツとミカン、それだけじゃなく冷蔵庫にテレビ、新作の漫画ｅｔｃ．下手したら俺の住んでいる宿舎よりも充実した生活空間が形成されていた
「なんだこれ」
「ありゃ、私の事は無視ですか」
「…それじゃあ質問って形に変える、これは何だ？」
「そりゃ見ての通り、雪花さんの生活スペースですけど」
さらっと訳の分からんことを言う目の前の人物――秋原雪花に対して俺は訝し気な視線を向ける
「そもそも、どうして雪花がここにいる」
「どうしてって言われても、ここにいる私は要が作りだした存在だから…としか言いようがないんだよね」
「俺が、作り出した？」
「そうそう、私は要にとっての防波堤って所かな」
「成る程…納得はしたが、それとこの生活空間は関係あるのか？」
「そういう話しはくつろぎながら、いつまでも気張ってると一人疲れるでしょ」
雪花と共にコタツの中に入ると、俺は改めて話しを始める
「改めて、俺の目の前にいる雪花は俺自身が作り出したものって認識でいいんだよな」
「そっ、言うなればイマジナリーフレンドみたいなもんかな、どう？イマジナリー雪花さん」
「またこうやって話せるのは嬉しいが、するなら本物の方がよかったって言うのが本音だな」
「そりゃそうか…まぁここと外の時間は直結してないし、ゆっくりしてきなよ」
そう言うと雪花は目の前のミカンを手に取り、食べ始めた。それにしてもこの空間が幻だとは思えねぇな
「それにしても、なんか大変だった見たいだね」
「知ってるのか？」

「そりゃ、イマジナリー雪花さんですから。要の見たもの聞いたものは全部私にも見えてるし聞こえてる」
「そりゃそうか」
「まぁ気持ちは分かんなくないよ、私も他の人見捨てて一人で逃げようとした身ですし…　けど、流石にあの場所丸々壊し尽くそうとするのはイマジナリー雪花さん的にはアウトかなぁ」
　そりゃそうだ、自分でもあれが正しくないことぐらいわかってはいる…　けど、歯止めが利かなくなって止めようがなかった
「まぁ要の切り札も元を辿れば私の奴がモデルになってるから、勇者の切り札と後遺症が同じなのは仕方ないけどね」
「そういえば…　そうだったな」
　俺の作りだした雪花と話しているうちに少しずつ思い出した記憶の中でも靄のかかっていた部分が鮮明になっていくの感じる、元々俺の戦い方の根本にあるのは雪花だ、それを自分なりにアレンジしたのが今の俺の戦い方だ
「もう少し話したいけど、そろそろ戻った方が良いかもね」
「どういう事だ？」
「言ったでしょ、私は要の作りだした私だって。だから外の様子も少しだけわかるんだよ…　誰か来たみたいだから、今日はこの辺で」
「また…　来れるのか？」
「滅多なことがあればね…　基本的に最終防衛ラインだから今回見たいなのが無いと会うのは無理だね」
「そうか。それは少しだけ残念だ」
「そんなこと言ってないでさっさと行った」

　雪花に追い出される形で意識が浮上し、俺が目を覚ますと丁度若葉が俺の部屋に入ってきた所だった
「すまない、起こしたか？」
「いや、丁度起きた所だ」
「そうか…　要、何かあったのか？」

「どういう事だ?」
「いや、どうしてかわからないが随分すっきりした顔をしていたからな」
「…夢の中に、昔の友人が出てきてくれてな。少し相談に乗ってもらったおかげだと思う」
「…そうか、それはまぁいい、少し話しをしたいことが」
若葉がそういいかけた瞬間、スマホから樹海化警報が鳴り響く
「こんな時にッ!」
「言ってる場合じゃないだろ、行くぞ」
「あぁ!…って要、その手枷は」
若葉のその言葉に俺は親指の腹を噛み切って血を出すと、それを利用して手枷の中心部を切って両腕が動くようにする
「これで行ける」
「よし、行こう要!」
「あぁ…それにしても、たった二人か」
「いや…千景も一緒だ」
若葉のその言葉に俺は耳を疑う、千景がもう前線に復帰する?
「大丈夫なのか?」
「わからない、だが今は千景を信じる他にないだろう」
その言葉を最後に、俺たち二人は樹海化の光に包まれる
「千景…」
「もう大丈夫よ…行きましょう」
そういう千景だったが、俺にはまだ彼女がいつもの千景に戻っているようには見えなかった
「考えるのは後…今は目の前の敵か、先に行くぞッ!」
「わかった!千景、復帰早々で悪いが力を貸してくれッ!」
俺と若葉で先行して星屑を倒しながら、千景の方を見ると彼女も俺たちとは少し離れた場所で星屑と戦っていた
「これならいけるか?」
「あぁ、このまま押しきる――ッ!」
星屑の数も確実に減少し始めていた瞬間、若葉に向かって攻撃が飛

んでくる
　なんとか気が付いた若葉は刀でその攻撃を弾くと攻撃の飛んできた方に目を向け、驚いたような表情を見せる
「千景ッ！　どうしてッ！」
「構えろ、若葉…　今の千景は」
　その言葉を言い終わる前に切り札を発動した千景が若葉に向かう、俺もそれを防ごうとするが七人御先によって現れた千景の分身体が俺の足止めをする
「あなたさえいなければッ！」
　分身体の攻撃を捌きながら星屑の相手をしていると、若葉に向けた千景の言葉が聞こえてくる
「あなただけが愛され、私は疎まれ嫌われ…　そんなの不条理じゃない！」
「ッ！」
「あなたがいなくなればッ！　みんな私を頼ってくれるッ！　賞讃を…　！　愛を…　！」
「やめるんだ千景！」
「全部、私が受けるのっ！」
「それは違うぞ、千景」
　妨害を何とか脱した俺は本体の千景の攻撃を受け止める
「不知火君…　あなたまで、乃木さんのッ！」
「違うッ！　前にも言っただろう、俺がお前を止めるのは、お前自身の手で大切なものを壊させないためだッ！」
「何を…　ッ！」
　千景の事をはじき返すと、俺は手に持っていた槍を地面に突き刺すと一歩前に出る
「一時の感情に任せて、お前はすべてを壊すつもりか…　お前が欲しかったものをッ！　仲間をッ！」
「なか…　ま」
「そうだ、千景。要だけじゃない、私も、ひなたも、タマも、杏も、友奈も…　誰一人お前の事を蔑んだりしない」

「…　ッ！」
「誰か一人が勇者なんじゃない、千景も含めたお前達全員で勇者なんだ。周りの評価なんて捨てちまえ…　お前が一人で日影にいるなら俺達でお前を日の当たる場所まで引っ張り出す。お前が孤独に押しつぶされそうだったら、俺たちが一緒にいてやる。だからまた一緒に戦ってくれ」
「よく言ったぞ！　要！」
　話しに夢中で少し気が付くのが遅れたが、俺たちの方に向かっていたバーテックスその言葉と共に飛来した旋刃盤によって引き裂かれる
「球子！　もう大丈夫なのか!?」
「おう、完全復活だ！」
「嘘ついちゃだめだよ、タマっち先輩…　まだ足は治りきってないんだから」
「バラすなよ、杏ぅ」
「土井さん…　伊予島さん…」
「久しぶりだな、千景！」
「千景さん、大丈夫ですか?」
「え、えぇ…」
「どうやら、援軍はタマたちだけじゃないみたいだな」
　その言葉を発した瞬間、飛んできた友奈が思い切り千景に抱き着いた
「ぐんちゃん、ごめんね！　私…」
「高嶋さんッ!?　どうして謝るの…？」
「だって、私ぐんちゃんが悩んでるのに力になってあげられなかった…　大切な親友なのに」
「高嶋さん…」
「言わせて貰うが、切り札の後遺症はあったが…　今回は全部千景の一人相撲なんだ…　よッ！」
　星屑をぶった切りながらそういうと、千景は少しだけ呆然とした顔をする

それを見ていた若葉もほんの少しだけ笑みをこぼすと、バーテックスを倒しながら話す
「確かに、言われてみればそうかもしれないな…　はぁッ！」
「乃木さん…」
「千景さんがどういう風に思ってたのかはわかりません…　でも、私たちは絶対に千景さんを見捨てたりしない、タマっち先輩！」
「おうさ、タマに任せタマえ！　…　千景！　タマは何が何だかさっぱりだが、これだけは言える！　千景はタマたちの仲間だ！　だから何かあったらタマたちを頼りタマえ！」
若葉に続く形で杏とタマの二人も千景に言葉をかける
「ぐんちゃん、間違った事をしたらいっぱい謝ろ！　私も…　ううん、私たちも一緒に謝るから…　だから、また一緒に行こう！」
全員の言葉を伝えられた千景は、肩を震わせ俯いていたが近くに落ちていた鎌を取ると前を向いた
「高嶋さん、乃木さん、土井さん、伊予島さん、不知火君…　ありがとう、そしてごめんなさい」
「「「「大丈夫！　気にしてない（ません）！」」」」
全員で千景に笑顔を向けると残ったバーテックスを眼前に捉え若葉が号令を出す
「よし！　全員で残存バーテックスを叩くぞ！」
「「あぁ！（うん！）（おう！）（はい！）（…　ええ）」」

その後の戦闘はスムーズに終わった、まだ完全に治っていないとは言え勇者全員が復帰したことで連携を取りながら戦う俺達にとって星屑程度は敵ではなかった。途中融合しようとしたバーテックスもいたが、それも全員で連携し倒すことが出来た…　それは切り札を使用せず、初めて融合体を打ち破った瞬間でもあった
「だぁー！　つかれたー！」
樹海化が解け丸亀城の敷地内に戻ってきて早々、タマは地面に倒れながらそういうと、杏も地面に腰を下ろし、笑いながら言った

「そうだね、病み上がりだからちょっと辛いかも」
「そうだね、私も疲れたー！」
「最近気を張り詰めたままだったから、今回ばっかりは私も同感だ」
「でも、無事勝てて良かった…　本当に」
　俺、友奈、若葉の三人も地面に座り込むと、少しだけ離れた場所にいた千景がおずおずと若葉の場所までやって来た
「乃木さん…　その、ごめんなさい…　私」
「いや、謝るのは私の方だ…　私は、千景の気持ちを何一つ理解できていなかった。リーダー失格だ」
「そこまでは―「いいや！　その通りだ！　若葉はなんでもお堅く考えすぎなんだ！　もう少し頭を柔らかくだなぁ」
「タマ程柔らかくしたらそれはそれで問題だけどな」
「なんだとー！　要！　それどういう意味だ！」
「さぁな」
　少しシリアスな雰囲気になりそうだったが、タマが割り込み俺が乗ったことで重くなりそうな雰囲気は消え、いつもの懐かしい雰囲気が帰ってくる
「さてと、それじゃ全員で祝勝会しようぜ！」
「そうだな、偶には騒いでもバチは当たらないだろ」
「その提案は大変良いと思いますが、その前に球子さんたちは病院に戻りましょうか」
　この場にいる俺たち以外の声が聞こえた方を見ると、そこには少し圧のある笑顔をこちらに向けているひなたの姿があった
「い、いやぁ…　タマはもう元気だし…」
「も・ど・り・ま・しょ・う・か」
「はぃ…」
「祝勝会は…　また今度だね、タマっち先輩」
　改めて病院に連行されていくタマたち三人の姿を見送っていると、隣に千景がやって来た
「どうかしたのか？」

「貴方にも…　その…　お礼を言っておこうと思って」
「気にすんな…　助け合うのが仲間、だろ」
「そうね、でもお礼は言わせて…」
そう言うと千景は深呼吸をすると、笑顔で俺に向かってお礼の言葉を告げた
「ありがとう――要君」

18話―過去の話―

誕生会会場のように飾り付けられた食堂に俺たち七人は居た
「よし！全員コップを持ったみたいだし、若葉！ここはリーダーらしくビシッと決めタマえ！」
「私か⁉」
「そりゃそうだろ、リーダーなんだから」
「えー、そうだな…」
「無理に考える必要ない、思った事をそのまま口に出せばいい」
真面目過ぎる若葉は案の定、悩み始めてしまったため、助言になっているのか分からないが一応その言葉を伝えると若葉は俺達の方を向いてグラスを前に出す
「色々あったが、一人も欠けることなくここまでこれた…今日は騒ぐぞ！乾杯！」
「「「「乾杯！」」」」
堅物から出るとは思えない言葉に少しだけ面食らったが、それだけ心を許して貰えていると考えたら、案外気分は悪くな…と言うより気分が良いまである

「そういえば、要さん記憶が戻ったんですよね？」
全員が思い思いの事をしていると、杏が俺に記憶の事を聞いてくる
「そうだな…細かい部分はぼやけてるが殆ど思い出したって言っても大丈夫だろう…冬吾さんにも残りはちょっとしたきっかけで思い出せるって言われたし」
「それなら教えてくれませんか？要さんのこと」
「あっ、タマも知りたい！」
「確かに興味あるな」
「私も気になります、要さんに今まで何があったのか」
「話しても良いが…そんなに面白いこともないぞ？」
「それでも教えてほしいかな、要君のこと」

「私も…　少しだけ聞いてみたい…　私たちの知らない貴方の事」
　確かに、勇者の過去は聞く機会はあったが俺の過去は記憶を失っていた時も、記憶が戻ってからも色々あって話すことはなかった…　確かに丁度良い機会かも知れない、皆に俺の事を、そして俺の力を知ってもらうには
「そうだな…　少しだけ長い話になるがいいか？」
「大丈夫だ、今日はみんな時間があるからな、ひなたも大丈夫だろう？」
「はい、今日は特に予定も入れていないので」
「そうか、ならゆっくり話しても大丈夫だな」
　全員の時間が大丈夫だと知ると、俺はゆっくりと話始めた

　俺の生まれは千葉県の片田舎、確か下の方だった気がする
　家族は両親に祖父母、後は兄貴と姉貴が居たな、まぁ二人とも俺とは結構歳離れてたし、特に嫉妬とかされることもなく兄弟仲は良かったしな。仲睦まじい普通の家って感じ…　まぁ、一つ他の家と違う所を上げるなら母方の実家が神社だった事だけど、実家自体は母さんの兄、俺の伯父さんが継いだから俺の家族自体は神職とは無縁の生活を送ってたんだ。
　そうだ、ここで言っておくが当時の俺に今みたいな力はなかったからな、この力と体質に目覚めたのはバーテックスの襲撃があってからだから、普通に怪我もしたし病気も患った。

「と言う事は…　要は千葉で襲撃にあったのか？」
　いや、襲撃にあったのは北海道だな
「北海道？」
　あぁ、こっからはバーテックスが襲ってきたときの話になるんだが、奴らが襲ってきたあの日に俺たち家族は北海道旅行に行ってたんだ…　まぁ当時の俺は小学生だったけど兄貴は社会人で姉貴は大学

生だったから行ったのは俺と両親だけだったけど
　北海道に着いた日の夜、家族でホテルに泊まってる時にあいつらは来た・・・ っとここら辺の話は暗くなるから別にしなくても良いだろ、とにかく色々あって生き残った俺は今の力と体質を手に入れたって訳だ・・・ そんで一人彷徨ってる所を雪花・・・ 北海道の勇者に拾われてそっから二人でバーテックス倒しながら暫く生活してたんだ
「「「「北海道の勇者!?」」」」
　うぉッ!そんな驚くことか?
「驚くなと言う方が無理だろう!」
「そうですよ!北海道にも勇者がいたなんて・・・」
　まぁ、話を続けるぞ?
　そっからここに来るまでは二人で北海道で戦ってたんだが、少しずつ限界が近づいてきてな、あっちはここみたいにバックアップしてくれる組織もないから大変だった。生傷が増えても自分で治療してたし切り札ガンガン使うから精神的には疲れまくるし・・・ でも不思議と雪花だけはあの時も信じられたんだよな。
　多分、ここに来るまでずっと一緒にいたからこいつだけは裏切らないって思ってたのかも知れない・・・ けど終わりってのは唐突に来るもんで雪花が急に〝要は四国に行け〟とか訳の分からんことを言い出してな。そっからあーだこーだ言い合った挙句喧嘩別れみたいな形でこっちに来ちまったから、そう考えると割と後悔ばっかしてきてるなって思うよ、ホント
「そんなことが・・・」
　まぁ今にして思えば雪花にも考えがあってそういう事言ったんだろうな・・・ まぁそこらへんも今は置いとくとして、次は俺の使ってる力の話でもするか
　俺の力はなんでも一族由来の力らしいんだよな
「一族由来ってことは・・・ お兄さんたちも使えたんですか?」
　いや、兄貴と姉貴はおろか父さんも母さんも爺ちゃん婆ちゃんもこんな力使ってなかった。聞いた・・・ と言うか読んだ話だと母方のご先祖が使ってた力っぽいんだよな、こういうの何て言うんだっけ?

「先祖返りではないか?」
　それだ、先祖返り…　力の方も似たようなもんだけど、問題は体質の方なんだよな。こっちは神様から貰った呪いらしいんだが厄介なことに一族の血にじゃなくて血を操る力に紐づけられてるみたいなんだよな
「じゃあ要君の傷の治りが異常に早いのって」
　呪いの所為だな、まぁこの呪いは今の俺にとってはプラスだし…この力があるからお前らに出会えたみたいな所もあるから気にしちゃいないんだけど…　そんじゃ詳細から話していくと一族由来の力は見たまんまだな、血を操る力
　実家の文献だと〝操血術〟とか書かれてたけど、言いずらいしなんか変にすかした感じになんのが嫌だから今まで通りこの名前は使わない方針で行く、ご先祖たちは一つの武器を極めて使ってたから、今の俺みたいに偶に別の武器に帰るとかはしなかったらしい。読んだ文献だと刀を使ってる人が多いって聞いたな
「刀か…　要は使えないのか?」
　普通に使えるけど?と言うより俺が使ってた武器元々刀…　と言うか片手剣だったし
「そうなのか!?」
　あぁ、今俺が使ってる槍は元々雪花の使ってた槍が元になってるし、戦い方とか我流がちょこちょこ入ってるけど根本は雪花の戦い方だからなぁ…　正直記憶を思い出したからこそ言えるけど槍も良いが偶には刀…　と言うか剣を使いたくなる
「そうか…　それならどうだ!?たまには手合わせなど」
「若葉ちゃん、今は要さんの話を聞くのが優先です、まだ大事な事を聞けてませんから」
　呪いのことか?
「はい、教えてください…　要さんのご先祖様に何があって呪いを受けたのか」
　そうだな、詳しいことは俺も覚えてないんだが、神様に生贄として捧げられる予定だった巫女を横から攫って行ったらしい。それを

怒った神様が俺の一族…と言うよりも当時の不知火家当主に呪いをかけたらしい
「成る程…それならどうして呪いは要さんの代になって急に呪いが現れたのですか?」
さっきは当時の当主に呪いをかけたって言ったけど巫女を横から攫って行った件も癪に障ったみたいだが、それ以上に神が許せなかったのは偶然とは言え人が人である以上の力を得てしまった事、神から与えられた加護もなしに人以上の力を得てしまった俺の一族を神は許さずに呪いをかけた…死ねずに苦しめって想いと一緒にな
「それじゃあ要さんも…」
寿命は分からんが、少なくとも外的要因で死ぬことはないな、後これに関しては微妙だがこの体質になってから風邪とかも全然患わなくなったからそういうウィルスとか病気でも死ぬことはないな…まぁご先祖が書いた文献だと年は取ったみたいだから寿命では死ねるんじゃないか?神が指定し、限られた生の中で懸命に生きるのが人間だからな
俺の話しはこれで終了、何か質問はあるか?

「そういえば、さっきから要さんの話に出てる文献って持ってきてないんですか?凄い興味あるんですけど」
話を終えた俺に対して杏が文献の所在について聞いてくる、確か文献は必要だから持って来ていた筈だ
「多分俺が壁に着いた時の荷物の中に入って…あぁぁぁぁぁ!!!」
「急にどうした!?」
「俺の荷物…壁の上に置きっぱなしだ」
忘れてた、壁に着いた時に文献とか入ってる荷物が濡れるのは流石にまずいと思って荷物壁の上に置きっぱなしで来てたんだった
「すまない、今から急いで取りに行ってくる…話すだけ話して途中抜けするようで悪いが2，3日空けるここを留守にするから」
「待ってください!」

そういって急いで荷物を取りに行こうとしたら杏が俺の事を引き留めてくる
「それなら私も一緒に行きます、古くから伝わる文献・・・この目で状態を確認しておきたいので！」
「杏が行くならタマも行く！」

その後、他のメンバーも行くと言い始めたが流石に全員で行くわけにはいかないという事で、俺と杏、タマの三人で荷物を取りに行くことになった
「それにしても、随分と雪花ってやつの事を大事にしてるんだな。要は」
「そんなだったか？」
「はい、昔の事・・・と言うよりも雪花さんって人の事を話している時の要さん、いままで見た事ないくらい優しい顔してました」
「そうだったのか・・・」
言われてみて自分がそんなだったのかと自覚し、少しだけ恥ずかしくなってくる
「要がそいつの事を大切に思ってるってのは伝わってくるけど、やっぱり少し微妙な気持ちだ」
「私達の知らない要さんがいるって・・・当たり前のことですけどやっぱり複雑です」
「・・・すまなかった、皆への配慮が不足していた」
「いや、元々はタマ達が勝手にナーバスになってるだけだ」
「それに・・・要さんはきっと雪花さんから渡されたバトンだと思うんです」
「バトン？」
「はい、雪花さんって人がどういう人だったのか私達は知りません・・・でも、その人が四国に行けって言ったのは、要さんに生きていて欲しかったからだと思うんです。それに結果論ですけど、要さんのお陰で

四国と諏訪以外にも生存者がいるって希望を持つことが出来た。諏訪だけじゃなくて雪花さんから渡されたバトンは要さんのお陰でしっかり繋がったんです」

杏の言葉を聞いて、少しだけあの時の雪花の気持ちが理解出来た。互いに大切だったから、四国に行けって言ったのか…生きていて欲しいから。けど、それなら俺はお前mにも一緒に来てほしかったよ。後悔が多いとは言ったが…出来る事なら俺はもう一度会いたい。あって今度はしっかりと謝りたい

「要…泣いてるのか?」

「大丈夫ですか?」

自分でも気が付かないうちに流れていた涙を俺は袖で拭うと、二人に笑顔を向ける

「あぁ…もう、大丈夫だ!」

そういうと俺は二人と共に忘れた荷物を取りに壁まで向かった

今は無理でも、戦いが終わった時…もう一度雪花に会いに行こう、会いに行って真正面から謝ろう

それがたとえ、どんな形になろうとも…いつの日か、絶対に

１９話―決戦前―

まもなくパーテックスの侵攻が起こる
そう神託が下ったことを聞いた俺たちは今まで以上に鍛錬に励んでいた
「そういえば、みんなは聞いた？」
友奈の言った言葉に全員思い当たる節があった俺たちは、休憩がてらそのことについて話すことにした
「大社の計画の事か」
「うん」
「確か・・・結界の強化計画でしたよね」
「儀式を行い、壁の結界を強化する・・・そうすれば、壁の中に敵が入ってくることもなくなる」
「・・・大社は計画は二つあるとも言っていたわ」
「壁の強化計画が失敗した時の予備プラン・・・って考えていいのか？」
俺のその言葉を聞いた若葉は、首を横に振ると俺たち全員に向かっていう
「それは、わからない」
「わからない？」
「あぁ、もう一つの計画については私やひなたにも知らされていない」
「二人に聞かされてないとなると・・・よっぽど重要な計画何でしょうか？」
「その可能性はあるが・・・逆に俺たちに伝えたら不利益になる何かがあるのかも知れない」
「とにかく！次の戦いに勝てば敵は来なくなって平和になる！ってことだよね！」
全員が考え始めていると友奈が顔を上げて俺たちにそういうと、全員の顔が少しだけ緩む
「そうだな」
「それじゃあ！戦いに向けてみんなでがんばろー！」

「よし、鍛錬再開だ！」
その言葉と共に、俺たちは今まで以上に気を引き締めて鍛錬に励んだ

鍛錬を終えた後の教室
「だぁぁぁ、疲れたぁ…」
「タマっち先輩。まだやることがあるでしょ？」
教室の中にいる俺たちの何人かは、気の抜けた表情で机に突っ伏していた。その理由はいたって単純で今朝の鍛錬で全員気合いを入れ過ぎて、そこで体力のほとんどを使い切ってしまった。何とか教室までたどり着いたが、ここに来て何人かは限界を迎えた
「みなさん。お勉強の時間ですよ、シャキッとしてください」
「持ってきたぞ…今日は一段と多いが」
そう言うと俺は教室に持ってきた大量の文献を教壇の上に置く
俺とひなたが取りに行っていたのは様々な伝説や民間伝承、昔話の書かれている本
「なんか…今日はやけに多くないか？」
「侵攻がいつ起こるか分からない以上、今のうちに知識を付けておいた方がいいだろう…とのことだ」
「様々な文献に触れて精霊のイメージを強く掴む事で強力な精霊を身に宿しやすくなる、大社の人に言われたことでしょう」
「今日はみんな疲れているんだが…」
「常在戦場…と言いたい所だがその気持ちはかなりわかる」
「まぁ、軽く目を通しておくだけでもだいぶ違うと思うので…」
何だかんだと言いながらも全員上から本を取り出すと、目を通し始める。どうこう言いつつも全員がいつ来るのか分からない侵攻に備えておきたいという気持ちはあるのだと思う
「みんな、ちょっと良い！」
「どうかしたのか？」
「明日みんなで一緒にお出かけしない？」

「お出かけ？」
「うん、夏休みで授業もないし…　どうかな？」
「俺は別に構わない、特にやることもなかったしな」
「明日は鍛錬も休みだし、私も構わないぞ」
「私も」
「タマたちも大丈夫だよな！杏！」
「うん、私も明日は予定入れてなかったし」
「ぐんちゃんは？」
「私も…　大丈夫」
「じゃあ決まり！待ち合わせは大手一の門前ね！」

翌日、集合時間の十分前に大手一の門前まで行くと既に待っているひなたの姿が目に入る
「おはよう、早いなひなた」
「十分前行動は基本ですから…　それにしても変ですねぇ」
「何が変なんだ？」
「いえ、いつもなら皆さんもこれくらいの時間には来るのですが」
「来ていないみたいだな」
「何かトラブルでもあったんでしょうか…」
「すまない、待たせた！」
そんなことを話していると急いでこっちに来る若葉の声が聞こえてくる、俺とひなたは若葉の方を見て…　言葉を失う、やって来た若葉の服装はおよそ年頃の少女がするような格好ではなく、どこかの不審者がしていそうな格好だった
「若葉、お前…　流石にそれは」
「なんですか、その恰好!?」
「変装だ!!勇者は目立ってしまうからな!!」
「変装するにしても…　それは…」
「おっはよー！」
「…（絶句）」

若葉の服に言葉を失っていると今度は友奈の声が聞こえてきた。
こんなことをするのは若葉だけだろうと思い友奈の方を向き、またも言葉を失い、ひなたに至ってはあまりの光景に膝から崩れ落ちていた
「やっぱり変装は基本だな」
「うんうん！」
「却下です…　今すぐ着替えてきてください」
どす黒い圧を放ったひなたに対して、若葉と友奈の二人は肩を振るわせ返事をしていた
「すみません要さん、私は二人の服を選んでくるので少し待っていてください」
そういって二人を連れて戻っていくひなたを見送りながら時間を空でも見て時間を潰していると向こうからやってくる千景の姿が見えた
「お待たせ…　みんなは…？」
「タマと杏はまだ来てない、若葉と友奈はさっきまでいたが服装がアレすぎてひなたと一緒に宿舎に戻った」
「二人は一体どんな服で来たの…？」
「若葉は不審者、友奈はジャージにヒーローのお面」
それを聞いた千景は俺たちのように言葉を失っていたようだが、気を取り直して話始める
「そういえば…　この前両親の所に行ってきたわ」
「一人でか？」
「流石に一人は無理…　大社の人達と一緒に必要最低限の荷物だけ取りにね…　みんなから貰った卒業証書も置きっぱなしだったから…」
「そうか、それでどうだった？」
「特に変わったことはなかった…　と言うわけではないわ…　父は母を置いて何処かに逃げてしまってたから」
「ッ!?…　そうか」
「別にあなたが気にする必要はないわ…　もしかしたら、私達にとってはこの方がよかったかも知れないから」

「良かった?」
「ええ」
　千景は少し悲しそうに、けど何処かすっきりとした表情で言葉を続ける
「きっと、いつかはこうなっていた筈だから…　どんな形でも一度離れて、ほとぼりが冷めてそれで会いたいと思ったら会う…　そうすれば、少しは家族らしい会話が出来るかも知れないから」
「千景がそう決めたなら、俺は何も言わない…　友奈たちもそうだろうしな」
「そうね」
「おーい!千景――!要ー!」
「すみません、遅れちゃって」
「別に構わないが…　何かあったのか?」
「それが、タマっち先輩が変な格好で行くって言うから。何とか説得して普通の服にしてもらってたらこんな時間に」
「変な服って言うな!アレは立派な変装だ!」
「ちなみに聞くが…　どんな服だった?」
　俺がそう聞くと杏は言うのを躊躇っていたが、タマが堂々と告げる
「ジャージにサングラスと帽子だ!」
　どうやらタマの言う変装は若葉と同じような不審者スタイルだったらしい…　それで行くのを止めてくれた杏には本当に感謝しかない
　二人が来てから程なくしてまともな格好に着替えた若葉と友奈を連れたひなたが戻ってくる
「全員揃ったみたいですし、行きましょうか」

　ひなたのその言葉を切っ掛けに全員で門の前から街へと繰り出す、平和な街並みを眺めたリ、茶屋で軽く食事を取ったりしたが思いのほか騒がれることもなく普通に歩き回ることが出来た
「意外と騒ぎになったりしないものだな」
「当然でしょう、悪いことをしているわけではないんですから」

「あはは、そうだね」
「それにしても…こうして平和な光景を見ていると、俺たちのやって来たことが無駄じゃなかったって感じるよ」
「…そうね」
一時サイクリングで街に繰り出したことはあるがその時は丸亀城の周辺かそこから少し離れた所にしか行ってなかったし、街の人達ともほとんど会うことはなかった。ここにきてから触れた勇者以外の人物は大社の職員か、千景の故郷にいた人達だけだ…本当に守る意味があるのかと思っていたがこうして平和な風景を見ると、やはり守ってよかったと感じる
「まるがめ婆娑羅まつり…」
「丸亀お城まつりと双璧をなす、市内最大の祭りだな。もうそんな時期か…」
「今年も盛大にやるみたいだね」
「それじゃあ、次の戦いを終わらせて絶対にみんなで行きましょう」
「そうだな！よしっ、目標が出来ては俄然やる気が出てきた！」
若葉たちがそんな事を話している中、無言で何かを考えていたひなたはガバっと顔を上げると目を輝かせ俺たちの方を見る
「浴衣を買いましょう！いやむしろ、今から着ましょう！」
「なんで今すぐッ!?」
「他意はありません！」
「嘘だ!!」
「なんかひなたの目の奥に煩悩が見えるのは俺だけか？」
「…奇遇ね、私にも見えるわ」
煩悩があふれ出し始めているひなたを説得している若葉と友奈の姿を見ていると、結局浴衣は祭りの時にしてその際に撮影会もすることに決まったらしい…まぁ俺は浴衣を持っていないから関係ないが
「要さんの分の浴衣は後ほど買いに行きましょう！」
前言撤回、俺も逃げられないらしい

それから色々と見て回った先で俺たちが辿り着いたのは丸亀道、何でも香川で有名な神社に繋がる道らしいが俺にはよく分からない
「金比羅宮かぁ…　そういえば私、小さい時はよく神社に行ってたんだ」
「神社に？珍しいな」
「うん。金比羅宮みたいに大きいのじゃないけど」
道を歩きながら友奈が言った言葉を聞いたタマが話始める
「そういや、タマたち友奈のことあんまり聞いたことないな」
「そういえばそうですね…　要さんの話は前に聞いたけど、友奈さんの話は聞いたことなかったかも」
「友奈はいつも自分より他人の事を優先して、話の聞き手に回ることばかりだからな」
「気遣い屋さんですからね、友奈さんは。素晴らしいことです。だから、みんなから好かれるんでしょうね」
「…　そうね」
海が見える広場まで付いた友奈が俺たちの方を向くと言葉を紡ぐ
「ありがどう…　でもね…　本当はそんなに褒められることじゃないんだ。みんなの事を気にかけてるとか、気遣い屋さんとか言われてるけど…　ただ嫌なだけ、気まずくなったり、誰かと言い争うのがつからいから…　だから、相手の話を聞くばっかりで…　自分を言い出せなくて」
そこで友奈は一度言葉を止めたが、改めて話し始める
「でもね、みんなには知ってほしいんだ…　私のこと」
「あぁ、聞かせてくれ。友奈の事を」
「私達も、友奈さんの事をもっと知りたいです」
「どんなことが来てもタマたちがどーんと受け止めてやるから、心配すんな！」
「ありがとう」
友奈は深呼吸をすると自己紹介をするように話始める

私は高嶋友奈
奈良県出身で誕生日は一月十日、血液型はＡ型
趣味は武道で…　あ、あと食べることも好きかな。
小さい頃はよく自然の中で遊んでて家の近くの神社のボランティアで掃除を手伝ったり、境内で遊んだりしてた…　でも、偶に神主さんに見つかって怒られてたっけ。
でも、タマちゃんみたいにアウトドアが得意だったり、アンちゃんみたいに頭が良かったり、ぐんちゃんみたいにゲームが得意って訳でもなかったし。なんというか、すっごく普通だった。
だから勇者になった時は、どうして私なんだろう?って驚いたし、戦うのも怖かった。でも…　家族とか友達を失うのは、もっと怖かった

「私、本当はね…　怖いから戦ってる…　臆病者なんだ」
友奈の話を聞き終えた俺は、彼女に対して自分の思ったままを伝えることにした
「友奈は臆病者なんかじゃない…　大切な人を失うのが怖いのは当たり前だ」
「たとえ怖いから戦っていたとしても…　高嶋さんは、勇気を振り絞って戦っている事を私達は知ってる…　誰がなんと言おうと、高嶋さんは勇者よ」
「ぐんちゃん、要くん…」
「そんなこと言うならタマだって杏を失うのは怖いけど…　失わないように守るって決めたからな!」
「私も、最初はすごく怖かったけど、みんなが一緒にいるからここまで戦って来れました」
「怖いから戦うのは悪いことじゃない…　大切なのは、感じた恐怖から一歩踏み出す勇気だと思う。そして、ここにいる全員友奈がその勇気を持っているのを知っている、だから友奈は臆病者なんかじゃな

い」
「ありがとう・・・」
夕陽を背に俺たちの方を向いていた友奈は、晴れやかな笑みを俺たちに向けた

友奈の話を聞いた後、俺たちも色々な事を話していると、少しずつ日が暮れ始める
「こんなに話したの、生まれて始めてかも」
身体を伸ばしながら友奈がそう言うと同意するように若葉も話始める
「要の時にも思ったが、腹を割って話すというのは良いものだな」
「みなさんの事がもっと分かった気がします」
「なんか、より絆が深まったって気がするよな！」
「そうだね」
「もっといろいろ話したいけど、次はお祭りだぁ！」
「その前に、まずは敵の侵攻を食い止めないとだけどな」
俺がそう言うと一番前を歩いていた若葉が立ち止まると、俺たちの方を向いた
「みんな、絶対に勝とう・・・私たちのため、そして・・・これから先に続く未来の為に」
「あぁ」
「当たり前だ！」
「はい」
「うん」
「・・・ええ」
「私も・・・皆さんが無事に帰ってくるのを、待っていますね」
「あぁ、絶対に生きて帰ってくる・・・私たち全員で」

翌日、バーテックスの侵攻が起きた
眼前にいる敵は無数の星屑と前に戦ったサソリと同じ大きさの巨大バーテックスが複数
無数の敵に対するは勇者が五人と擬きが一人
「みんな…行くぞ！」
若葉のその言葉と共に、最後の戦いが幕を開けた――

２０話―決戦―

眼前に見えるのは無数の星屑と複数の巨大なバーテックス
「雑魚は無数だが敵は六匹…　今までとは非にならない程の大規模な戦いだが、必ず生きて帰ろう」
若葉の言葉に全員が頷くと、それぞれ武器を構える
「杏、今回は切り札を使っても構わないんだよな？」
「うん…　でもあんまり使いすぎないようにね」
「絶対に勝とうね！」
「えぇ…　絶対に」
「要、死ぬなよ」
「そっちこそ、無茶しすぎて死ぬなよ？　…　ここで一人欠けるのは目覚めが悪いからな」
「そうだな」
そういうと眼前の敵に刀を向ける
「みんな…　行くぞ！」

その言葉と共に六人全員で星屑を蹴散らしながら大型の元に向かう
「地中にッ！」
「そいつは俺に任せてお前らは先に行け」
地中に潜った一体を対処するために、俺はみんなを先に行かせ地に足を付ける
「出し惜しみはなしだ、血戦偽装―尾裂狐ッ！」
切り札を使った俺は新たに現れた九本の尻尾を地面に突き刺し、こっちに敵の方に伸ばしていく
「見つけたッ！」
敵の場所を捉えた俺は、そのまま尻尾を地中に潜った敵を引っ張り地中から引きずりだす…　敵を目視するした俺は糸を手繰り寄せる感覚で一気に敵へと近づき槍を突き刺す
「地獄への片道切符だ…　とくと味わいなッ！」

突き刺さった九本の尾と一本の槍を敵の体内で茨のように伸ばし、内部から敵を破壊する
身体を維持することのできなくなった敵が消えていくのを見ながらみんなと合流するため再び前線に移動を開始する、さっきの敵を潰している間にみんなとの距離がだいぶ離れた…　急がないと

「要くん、大丈夫だよね」
「不安ならタマたちがちゃちゃっと倒して、要の所に行こう」
「そうだね…　そうだよね！」
球子と友奈の会話を聞きつつ、敵に意識を集中すると大型の内一体がこちらに何かを飛ばしてくるのが見えた
「みんな気を付けろ！　攻撃が来るぞ！」
「その攻撃は、タマに任せタマえ！　…　こいッ！　輪入道！」
切り札を切った球子が巨大化した旋刃盤を構え敵の攻撃を防ぎ切った
「杏！」
「わかった！　。来てッ！　雪女郎ッ！」
球子と切り札を発動した杏の二人が、砲撃をしてきた敵に対して合体攻撃を放つ
「これだけだと、まだ破壊力が足りない」
「それなら、私がブーストすれば、問題ないよねッ！　酒呑童子ッ！」
躊躇いなく酒呑童子を下した友奈が、炎と冷気を纏った旋刃盤を思い切り殴ると、今までとは非にならないスピードで敵の方に向かっていった旋刃盤は大型を貫き、消失を確認する
「見たかッ！　タマたちの力ッ！」
「よしッ！　全員でこのまま進むぞッ！」
迫りくる星屑を倒しながら、大型に向かって進んでいく
「待ってくださいッ！　大型の数が少なくなってますッ！」

「まさか…　要の方にッ！」

「ったく、しつこい奴は嫌いなんだよッ！」

　みんなと合流しようとしていた俺の前に現れたのは二体の大型バーテックス、こっちに向かってくる反射板を蹴りで逸らすと、今度は背後から無数の矢が降ってくる

「危ねぇなッ！　…と言うか、連携攻撃とか聞いてねぇぞ」

　片方に攻撃を集中したらもう一匹がこっちに攻撃を仕掛けてくる…　かといってもう片方が飛ばしてくる光の矢を避けると反射板で矢を反射してこっちに返す、ちょっとした小細工だが一人で相手するのは流石にキツいものがある

「どうすっかなッ！」

　八本の尾を地面に突き刺して残った一本を合わせて三角形を作ると、上に突き立てた一本と残り八本を繋げるように血液を使って細かい網を形成する

「さて、一時しのぎは出来るがこっからどうするか…」

　豪雨のように降りかかる矢を何とかしのいでいるがこのままだとジリ貧なのに代わりない…　少しだけ考えてた後、他の勇者のように他の精霊の力を借りることを思いつく、出来るか分からないがやってみる価値はある

「偽装解除――ッ！」

　血戦偽装を解除すると同時に、降りそそぐ矢が確実に俺にダメージを与えていくがそんなことを気にしている暇はない。意識を集中させ、精霊と波長を合わせる

『珍しい客人だな…　人の身であるが人でない者の力を持っている』

　何処からともなく、声が聞こえてくる。けれどそんなことを気にしている余裕今はない

『客人よ、早速だが要件を聞こう…　儂（オレ）に何の用だい？』

単刀直入に言うと、力を貸してほしい
『力を？　…　そいつはまたどうしてだい？』
俺の大切な仲間を守る為に
『そうかい、貸してやってもいいが…　見返りはなんだい？』
戦いが終わったら、うまい茶でも飲ませてやる
『はっはっは、そいつぁいい。自分の命とか言ったら断ってたが、その条件なら手を貸してやるとするかね』
ありがとう
『いいって事よ、それじゃあ叫べ、儂（オレ）の名をッ！』
「あぁッ！　血戦装束――滑瓢（ぬらりひょん）ッ！」
俺が繋がった精霊はぬらりひょん、人の家で茶を飲むだけの妖怪と言われたり、別の所では妖怪の総大将ともいわれている存在、敵の攻撃を受けながらもゆっくりと立ち上がると槍の形状を刀に変化させる
「ふぅ――」
意識を集中させると、ゆっくりと敵に近づき刀を振るう…　新たに出現させた鞘に刀を納刀すると光の矢を撃ってきていたバーテックスは真っ二つになる、一体目が完全に消滅したのを見るとそのままもう一匹に近づいて、刀で真っ二つにする
ぬらりひょんよりも尾裂狐の方が火力は高い、ならば何故ぬらりひょんの力を借りたのか。答えは簡単だ…　ぬらりひょんの一太刀は一刀一刀が必殺、火力ではなく技で確実に敵を屠る、それがぬらりひょんと言う妖怪の力だ

要の方にいた大型二体が消滅するのを確認すると、とりあえずひとまず息をつく
「要の方も大丈夫みたいだな」
「大型は残り一匹ッ！　この調子で一気に――ッ！」

そういった瞬間、急に千景が切り札を使い、私達全員に飛びついてくる、千景によって全員が元いた場所からそれた瞬間、巨大な火球が私達の横を通りすぎた、火球はそのまま海の方に飛んでいきそのまま消滅する

「なんだッ！　さっきの攻撃ッ！」

「今のは…　まさかッ！」

「えぇ…　そのまさかよ」

火球の飛んできた方に視線を向けるとそこにいたのは今までとは比較にならない程巨大なバーテックス、まだ所々は完成していないが私達が壁の外で見た時よりもその姿完全なものに近づいていた

「みんなッ！」

「要…　アイツが」

「来たのか…　ついに」

眼前に聳え立つ巨大な敵を、私達は見る事しかできなかった

「みんな、あれ見てッ！」

何かに気が付いたらしい友奈に指をさされた方を見ると、さっきまでこちらに向かっていたバーテックスが軌道を変え、超大型の方に向かっているのが見える

「文字通りここで完成させようって訳か」

「それなら…　私達がやることは一つね」

要と千景の言葉を聞いて、私も刀を握り直して全員の前に立つ

「敵将が出てきた、ならば私たちはその将を叩くッ！　…　降りよッ！　大天狗ッ！」

若葉の言葉に全員が頷くと、若葉も切り札を使い全員が精霊を卸した状態になる

「高嶋さん…　大丈夫？」

「うん！　今は不思議とパワーが湧いてくるんだッ！」

友奈だけでなく、全員の顔が今まで以上に気力に満ち溢れていた

「杏、何か作戦は無いか？」
「そうですね…　あの大きさだとまともな攻撃で倒すのは難しいと思います…　なので皆さんの攻撃を未完成の部分に集中させましょう」
「意図的に急所を作りだすって認識でいいのか」
「概ねそれで間違いはないです」
「…　それなら、私は敵の陽動に回るわ」
「俺も敵の気を引き付ける役に回ろう」
「よし…　行くぞッ！」
　俺と千景の二人は真正面から超大型に向かっていくと、炎を纏った星屑を俺たちに向かって放出してくる。千景と俺でその星屑を蹴散らしながら。彼女に話しかける
「それにしても…　意外だなッ！」
「なにが…？」
「お前が攻撃に回らなかった事…　少し前なら絶対に攻撃側に回ってただろうからな」
　未完成部分に向かっていく若葉たちを見ながら俺がそう言うと、千景が少し呆れたような表情でこっちを見てくる
「もしかして…　こんなときに冗談で言ってる？」
「あぁ、少しでも気を紛らわせたらなと思って…　なッ！」
「でも…　そうね…　確かに少し前なら、戦果を急いで…　無効に行ってたかも知れないわね」
「今は違うのか？」
「えぇ…　今は自分の為じゃなく、仲間の為に戦っているから」
「そうかい…　変わったな！」
「貴方も…　ねッ！」
　敵を抑えつつ、若葉たちが作戦を成功させるのを待つ…　頼んだぞ、みんな

私、友奈、球子、杏の四人は千景と要の二人が敵を引き付けているうちに超大型の元まで向かう
「そろそろ接敵します・・・みなさん、準備を」
「あぁ」
「よっしゃ来た！」
「いくよ・・・ッ！」
近づいてきた超大型を見上げながら、私達は武器を構え攻撃を始める
「先発は貰うッ！」
その言葉と共に私は切り札によって出現した翼で、未完成部分まで近づき、思い切り刀を振るう。切り札によって強化された一撃は超大型の未完成部分を真っ二つに切断しダメージを与えることに成功する
「球子ッ！　杏ッ！　このまま続けッ！」
「よっしゃッ！　行くぞ杏！」
「うんッ！」
続けざまに放たれた二人の合体攻撃が私のダメージを与えた個所に当たり、超大型に少しヒビが入る、この調子ならいけるッ！
「もう一息だッ！　友奈ッ！」
「うんッ！」
急速降下で友奈のところまで戻り、手を伸ばす。友奈が手を掴むと再び超大型の場所まで飛び思い切り友奈の事を投げる
「いけぇッ！　友奈ぁぁぁッ！」
「全力・・・ッ！　勇者ぁパァァァァァンチッ!!!」
友奈の放った一撃を受けた超大型はダメージを受けた場所を起点に少しずつヒビ割れていく、このまま壊れていくかと思った矢先、超大型は再びエネルギーを溜め火球を放とうとしているのが見えた
「不味い・・・ッ！」
「大丈夫だよ・・・若葉ちゃん」
友奈がそういった瞬間、星屑の相手をしていた千景と要の二人が鎌と刀を振るいエネルギー火球ごと超大型に傷をつける。それが切っ

掛けとなり火球は放たれる前に超大型の一部が砕けた
ダメージを受けた超大型は少しずつ後方に移動すると、他の敵と共に壁の外へと消えていった
「勝ったのか…？」
「多分ですけど」
「うん、勝ったんだと思う」
私の疑問に友奈と杏の二人が答えると、その答え合わせともいった形で少しずつ樹海化が解除されていく
「そうか…私達は、勝ったのだな」
「やったな！　杏！」
「うん…勝てて良かった」
「やったねッ！　アンちゃん！　タマちゃん！」
「最後のは流石に無茶させ過ぎよ…」
「見せ場が作れてよかったんじゃないか？」
光の中で球子たち三人は喜びを分かち合い、要と千景の二人は拳を突き合わせ笑っていた
私達は勝ったのだという安心感が、私の中に広がると同時に急に眠気が襲ってきて私はそのまま目を閉じる

21話―誓い―

あの戦いから、早くも数か月の時が流れた
現在についてを話す前に少しだけあの後の事を書き留めておく
あの戦い、俺たちの力を合わせて超巨大バーテックスを退けた後、持てる力を使い切った俺たちは丸亀城の敷地内で倒れているところをひなたが発見し、大社の人達によって病院へと運び込まれ、三日間意識が戻らなかったらしい。
あの戦いに関しては状況によっては全滅もあり得た以上全員が五体満足で帰ってこれたのは奇跡なのだと、俺は思う

「何を書いているんですか？」
「ひなたか…　いや、偶には日記でも書いてみようかと思ってな」
「日記ですか、そういえば大社の指示で若葉ちゃんも似たようなものを書いていたような」
日記を閉じながらひなたの言葉に返事をしつつ日記帳代わりに使っていた学習ノートを閉じると、改めてひなたに要件を聞く
「それで、わざわざ部屋に来たってことは何か用があったんじゃないのか？」
「そうでした、実は若葉ちゃんの壁外調査についていくことになったんです」
「壁外調査？」
ひなたが言うには、結界が強化された後から壁の外で何かしらの事象が起こっているらしい、若葉がその事象を調査するように言われたのを知ったひなたは自分もそれについていくと言ったらしい
「それで、それが俺の部屋に来るのと何の関係があるんだ？」
「じゃい、大社から要さんも同行させるようにと、大社から言伝を預かって来たんです」
「はぁ？　なんでひなたがそれを伝えんだよ、あいつらが直接言いにくればいいだろ」

「大社側も要さんからはあまり好意的に思われていない事を分かっていたようで・・・断られる可能性があるなら私から言えば多少了承される可能性が上がるからと・・・」
「確かに大社の事は好いちゃいねぇが恩義は感じてる。恩義を感じてる相手の頼みを真正面から突っぱねるなんてこたぁしねぇよ。ビビりすぎだ」
「私もそう言ったんですが・・・」
ひなたが苦笑いしながらそういってくる。だが相手の気持ちも分からなくはないこっちは大社に所属しているわけではない一般人である以上、いつ寝首を掻かれてもおかしくないと考えているわけだ。もうそんな事しねぇよ
「まぁいいや。壁外調査の件は了解した・・・そういえば、調査に行くのは俺たち三人だけなのか？　タマ達は？」
「有事に備えて待機だそうです」
「了解、いつ頃行くんだ？」
「2日後ですね」
「あいよっと・・・そういやもう一つ聞いて良いか？」
「何ですか？」
「タマ達は待機なのに俺だけ同行しろってのはどうしてだ？」
「確か、要さんのご先祖様が神から受けた呪いに関係しているとか言っていたような」
俺の血に関わる事か、それを聞いて少しだけ合点が言った。確かに刻み込まれた呪いと外で起きている事象が何かしらの関連を見せるのなら事象そのものを解決する手がかりになるかもしれない
それから一通りのことを俺が伝え終えるとひなたは軽く頭を下げて部屋から出て行った
「それにしても・・・壁の外の未知の事象ねぇ」
今から考えこんでも仕方ないと割り切って、俺は机の上に置かれていた本を読み始める

何事もなく迎えた二日後、俺と若葉、ひなたの三人は壁の上にやって来ていた
「本当に一緒に来てよかったのか？　壁の外は危ないぞ」
「覚悟はできています」
「気持ちは分からなくないが、やっぱリ若葉はひなたに対して少し過保護だな」
「なッ…　私は純粋に心配して！」
「わかってるわかってる」
若葉は気合いを入れ直すと、俺たち三人は壁の外に足を踏み出し。外に広がる光景に言葉を失った
壁の外に俺たちの知っている世界は既になく、目に移るのは焼き尽くされ火の海となった世界だけだった
「なんだ…　これ」
「世界が、壊された？」
余りの光景に理解が追い付かなかった俺たちだったが、若葉の言葉に対して、何とか頭が回るようになったひなたが答えた
「いえ…　破壊なんてものじゃありません。世界の理そのものが書き換えられたんです…　もう世界に残っているのは四国（ここ）だけでしょう」
これが俺たちの戦っていた相手の力だと思うと、流石に吐き気がしてくる
「帰りましょう」、この光景を中の人に伝えるんです
「…　あぁ」
「そうだな…　他のみんなにも伝えて本格的に対策練った方が良さそうだ」
壁の中に戻った俺たちは大社に外で起こっていたことを報告し終えると、丸亀城に戻りタマたちにも外で見たものを伝える
「…　それ、本当なの？」
「あぁ」
「そんな…」
「じゃあ、タマ達がやって来たことは無駄だったって事かッ!?」

「壁の中で人類が生存している以上、やって来たことがすべて無駄だったわけじゃない」
　今までの想像を越える事態になり、全員どうすればいいのかわからなくなっていたが、若葉が俺たちに声をかける
「今ここで、下を向いていても何も解決しない…　それならどうするのが一番いいかを考えよう」
「そうだよ！　今までだってそうやって頑張って来たんだからッ！」
「けどなぁ、タマ達六人じゃどうしようもないぞ？」
「…　今回は土居さんの言う通りね…　何かするにも私達だけじゃ人手不足」
　何となく今この場で話していても仕方ない気がする
「今この場で話してても結論出そうにないし、とりあえず各々で適当に案を考えてきて明日話し合った方がいい気がするんだが」
「そうだな、今日はみんなへの報告だけのつもりだったからな、そうした方がいいかもしれないな」
「私の方も、改めて大社の方に何か打開策がないか聞いてみます」
　今日はそこで解散になり、明日各々が案を持ち寄ってそれを議論するという形に落ち着いた

　それから数日の間、俺たちは外の敵への対処方を話し合いながらいつものように過ごしていた
　ある日、訓練の時間になり集まった俺たちにひなたが告げたのは俺たちにとって予想外の一言だった
「戦う必要が…　なくなった？」
「それ、どういうことだよ！」
「言葉通りです。もう皆さんは戦わなくてよくなりました」
「どうしてそういう結論になったのか、教えてもらっていいか？」
　外の様子を考えると、以前よりも絶対に状況は悪くなっている筈だ…　それなら、今までよりも更に戦いが激化することはあれど、俺

たちが戦わなくてよくなる理由はない筈だ
「そうですね…　今は強化された結界で星屑たちも四国には入ってきませんが、神樹様の力が尽きた時、私たちは炎の海にのまれ…　すべてが終わる。もはや人類の根絶は完了したと言えます」
「それは何か？　俺たちに諦めてゆっくり滅びを待てって言ってるのか？」
　俺の言葉に対してひなたは首を横に振ると、再び話始める
「いいえ…　確かに状況は絶望的です。けれどそこに活路はあったんです」
「…　活路？」
　俺だけでなく、ひなたの言葉を聞いた俺たちは首をかしげた。
「奉火祭」
　その言葉は、俺の先祖の遺した文献の中にも残っていた…　ご先祖が助けた巫女、彼女が生贄となる筈だった儀式の名前
「神代の時。土地神の王が天の神に自らの住み処から出ないことを代償に、その地を不可侵として赦して欲しいと願った神話『国譲り』…　それを模した儀式を代々執り行ってきた一族が居た。ですよね、要さん」
「…　あぁ、俺のご先祖が助けた巫女の居た村、奴らは自らの村が飢饉で苦しむ事を恐れ、毎年巫女一人を生贄として選び、生きたまま炎でその身を焼く、登る煙を神への遣いと見立て村の豊穣を願った…　贄に火を燈し　神に奉げる。その村はその儀式を豊穣を願う祭り…　奉火祭と言う名前で行っていた」
　どうやら大社のやろうとしていることは俺の知っている奉火祭で間違いないらしい
「大社は、その故事と要さんの持ってきた文献に乗っていた儀式を基にした儀式…　地に棲まう者が天の神への願いを伝えたんです」
「神に伝える…　そんなの、どうやって…　？」
「まさか…」
　ひなたの言葉を聞いていた杏は何か思い当たったようでひなたを見ると、彼女は首を縦に振る

「巫女を火の海に身投げさせた…　か」
「はい、六人の巫女が選ばれました」
「薄々そんな気はしてた…　あの糞みたいな儀式を模してる時点でな」
「…　儀式は、成功したのか」
「神託が来ました、勇者の力を放棄すれば、もう攻められることはない…　と。彼らからすれば、人が神の力を使うことは禁忌…　と言う事でしょう」
「もう戦うなって事か…　じゃあ俺はどうなる？」
「要さんの力はあくまで人の身で宿した力…　勇者の力とは違う」
「俺みたいな異分子が一人いた所で、神様は問題にしないって事か」
　そういい終わると、俺は踵を返して訓練所を後にする
「お、おい！　要！　どこ行くんだよ！」
「要さんッ！　待ってください！」
「今は若葉とひなたの二人にしてやれ…　俺たちがいると気を使って吐き出せるもんも吐き出せないだろ」
「ぐんちゃん…　私たちも」
「そうね…」

　若葉とひなたの二人を残し俺たちは先に戻ろうとして、足を止める
「悪い…　少し飲み物でも買ってくる」
「それならタマも」
「タマっち先輩…」
「…　そうだな、先行ってるぞ」
「あぁ、すまないな」

　一人で自販機の前まで行くと、耐え切れなくなった俺は思い切り壁をぶん殴る
「結局…　なんもできてねぇじゃねぇか、俺は」
　人には限界がある、守れるものは精々自分の両手が届く範囲だ

拾えるのは両手で持てるもので精いっぱいだ…　けれど、それがどうしようもなく、やるせない

どうしようもなくて顔を上げた俺は地平線の向こうに広がる壁を睨みつけ、拳を突き出す

「…　絶対に、取り戻す――アイツの居た場所を、俺たちにバトンを繋げた、あの人たちが守った世界を」

これは、自分に対する誓い…　神に己を呪われた一人の人間の、ちっぽけな誓い

22話―未来へのバトン―

奉火祭が行われてから、数か月の時が流れた
いつも通り流れていくと思っていた日常は変わり、一時の平穏を取り戻した俺たちはそれぞれの道を進んでいた…と言っても、本格的に動き始めるのはもう少し先の話になる
現状で一番変わったことと言えば、大社の内部改革が行われたことだ
神に赦された者としての自覚を表すために名前を〝大赦〟と改めたらしい…若葉曰く屈辱的な名前らしいがそれに関してはまぁ横に置いていくとする
さて、ここからはそれぞれの進む道となるわけだが…まずは若葉か
若葉は大赦の内部改革に協力するらしい
民衆の心を安定させる事が自分の使命だと言っていたが、それはあくまで表向きの話だ…実際は勇者システムの基礎戦闘力の強化をはじめとした、天の神に対抗する為に尽力するらしい
ひなたは、若葉と同じ内部改革に協力…と言うよりも大赦の内部改革は彼女が主導で行うことになっている、現状の情報管理及び統制がお粗末な大社を改革しより秘密をしっかりと隠せる組織を作ることが目的だと彼女は言っていた
タマと友奈の二人は表立った内部改革には協力せず、後任の育成に尽力すると言っていた
頭を使ったり策謀を巡らせるのは苦手だと本人も語っていたし、それがあっているのだと思う
続けて杏だが、彼女は主にひなたのサポート…ひなたの手が回らなくなった部分のサポートをするって感じになるらしい。まぁそこらへんは俺の知らぬ部分だし、あっちに任せることにする。
最後に千景、彼女は大赦から離れることに決めたと言っていた。正直以外だったがもう戦う必要がない以上、自分に出来る事はあまりな

いらしく、自分のしがらみを全部振り切って好きな事をするらしい。
退職金は大量に貰うと言っていたし今の彼女なら変に心配する必要もないだろう

さて、勇者はそれぞれの道を進み始めたわけだが一切会えなくなるわけではないし若葉も意見を貰うために定例会は開くと言っていたし、これから先もこの絆は消えることはないだろうと考えている

「何してんだ?」
「荷物を纏めるがてら、全員のこれからをノートに書いてたんだよ」
「成る程なぁ、それにしても…　いつか来るかと思ったけど、案外早く来たなぁ」
珍しく感慨深そうに言っているタマを見て少し笑いそうになるが、それを抑えながら彼女に聞く
「なにがだ?」
「いやな、タマたちがバーテックスと戦い始めてから結構経つけど…個人的にはもう少しだけここでの生活を続けたかったなぁって」
「今生の別れって訳でもないし、俺と千景以外は新しい宿舎に移動するだけだろ?」
「そうだけどさ…」
タマは俺の方を見て、言葉を詰まらせているのを見て流石に限界だった、耐えていた笑いをタマの前で思い切り噴き出す
「なッ!　…　なに笑ってんだ!　タマは」
「いや、悪い。流石に可笑しくてな」
「何が可笑しいんだよ」
少しすねたような顔をしていたタマの頭の上に手を置き、彼女の頭を雑に撫でながら言葉を紡ぐ
「何度も言ってんだろ、一生会えなくなるわけじゃない…　会おうと思えばいつでも会える…　それに、お前らが呼べば俺は何処にだって行ってやる」

「そっか…　そうだよな！」
「あぁ、それじゃ…　みんなのところに行くか」
「おう！」

段ボールひと箱程度の荷物を纏め、俺は宿舎の部屋を出る
ここに足を運ぶのも、今日で最後になるかも知れない…　手に持った段ボールをそのままに俺は宿舎の方を振り向くと頭を下げ、タマと共にみんなの元に向かう

「そういえば要」
「どうした？」
「いや、要には聞いてなかったからさ、これからどうすんだ」
「そうだな…　試しに何でも屋でもやろうかと思ってる」
「何でも屋？」
「おう、なんかカッコいいだろ？」
「そうかぁ？」

そんなことを話しながら歩いていると、丸亀城の前に立っている若葉たちの姿が目に入る
「二人とも、遅いぞ」
「すまない…　少し用事を済ませてた」
「要が日記みたいなの書いててな、それで少し遅くなった」
「日記って…　あの時書いていたものですか？」
「あぁ、ここで書けるのも最後になるからな」
「そうですね」
「それにしても、色々あったね」
「そうね…　本当に色々あった…」
「けど、どれも私たちにとってかけがえのないものです」

全員で丸亀城の前に並び、城の方を見る
僅かな時間だがここで生活した俺と、長い間この場所で生活を送っ

ていた彼女たち…　長さは違ってもどちらも大切な思い出には違いない
「全員並んだな…　ふぅ、ありがとうございました！」
「「「「ありがとうございました！」」」」
　俺たち全員で今まで世話になった学び舎であり帰る場所だった所に礼を言うと、門の前で立ち止まる
「ここからは、全員別の道だな…」
「そうですね、私達はこちらの道に」
「俺と千景は反対か」
「そうね…」
　俺と千景の二人でみんなの方を向くと、軽く手を上げる
「それじゃあ、またな」
「また…　明日」
「おう！　またな！」
「またね、ぐんちゃん！　要くん！」
「明日会えますけど、お元気で」
「何かあったら、すぐに言ってくださいね」
「これからも会う機会はあるが…　達者でな」

　四人に別れた俺と千景は二人は、分かれ道まで並んで歩く
「それにしても、千景は本当に良かったのか？」
「…　なにが？」
「俺もそうだが、新しい宿舎…　と言うかアパートに行くことも出来たんだ、友奈たちもいるしそっちの方が良いんじゃないのか？」
「…　確かに、少し前の私ならその方がよかったかもね」
「なら」
「話は最後まで聞いて…　確かに少し前の私ならそうしていた…　けど、あなた達が私に教えてくれた…　どれだけ離れていても、すれ違っても消えない絆（モノ）があることを…　だから、私は大丈夫」
「確かに、そうだな」

晴れやかな表情を見ながら、俺も軽く笑う
それから一言二言、言葉を交わしているうちに分かれ道に着く
「またね…　要君」
「あぁ、またな」
その言葉を最後に、俺と千景も別れ一人で新しい道を歩き始める

神世紀――元年
六人の勇者と一人の異物による、天の神との戦いは…　人類と神の和平と言う結果で幕を閉じた
これは人類にとっての勝利ではなく、敗北である…　だが、これから先、何年、何十年、何百年かかったとしても俺たちは…　人類は神に打ち勝つことが出来る可能性があると信じている
だからこそ、俺たちは今を全力で生きる
俺が一人の勇者からバトンを託されたように
彼女たちが諏訪を守った彼女たちからバトンを受け取ったように
俺たちの渡す希望と言う名のバトンが…　未来の勇者に繋がることを願って

神世紀２９８　―鷲尾須美は勇者である　／　八重樫徹は勇者になる―

一話，神世紀―２９８年

神世紀２９８年、初代勇者たちが守った時代の遥か未来

「護人…　ですか」

「はい、貴方には勇者としての適性があることが判明しました。八重樫徹　様」

「なんなんですかその、護人って…」

「護人は勇者様と共に世界を守る人物の事です。この地に護人の適正者が現れたのは初代勇者様の現れた時代が最後…」

「それが…　俺なんですか」

「その通りに御座います…　八重樫様には、勇者様と共にお役目に付いて頂きたく」

「お役目？」

「はい、壁の外よりやってくる敵から、神樹様を守っていただきます」

勇者と共に、神樹様を守る…　それが俺の使命

「わかりました。俺に出来る事があるなら…　やります」

「感謝いたします、八重樫様」

こうして俺は、勇者と共に戦う者…　護人に選ばれた

神樹館、今の俺が通っている学校の名前

「おはよーございます」

「徹くん、朝野挨拶はしっかりと丁寧に…　よ」

朝の挨拶をして席に着くと、一人の女の子が俺に話かけてくる。彼女の名前は鷲尾須美、いちおう幼馴染って事になるらしいがここ一、二年まともに会話してなかった所為で妙に実感が薄い

「悪かったよ、次からはちゃんとするから」

「いつもそう言って結局直さないでしょ、言葉の乱れも心の乱れよ。

はい、もう一回」
「…　おはようございます」
「よろしい、明日もちゃんとしないと駄目よ」
「相変わらず二人は仲良しだね～」
　俺たちの様子を見て、そんなことを言ってきた少女の名前は乃木園子、見た目通りほんわかとした少女である
「いや、そこまで仲良くしてるつもりは…　って寝てる!?」
　ほんわかしている以上にこの、乃木園子という少女は時間さえあればいつでも寝ている少女でもある。すっかり見慣れた光景になっている朝の風景を見ていると朝の学活の時間になった
「はざーっすっ！　ま、間に合った！」
「三ノ輪さん、間に合っていません」
　朝の朝礼をする直前になって教室に入ってきた少女の名前は三ノ輪銀、三ノ輪が担任の先生に出席簿で軽く叩かれる。その後自分の席に着席した三ノ輪の周りがぱぁっと明るくなったのを見て、相変わらず三ノ輪はみんなに好かれているなぁなどと思っていると三ノ輪がカバンの中を漁っていた
「アウツ、まずい教科書忘れた」
「…　本当に大丈夫なのか？」
　どうやら教科書を忘れたらしい、ほんと何しに学校に来ているんだか…
「それでは、授業を始めます。皆さん教科書の１４ページを…」
　授業が始まろうとした瞬間、鈴の音と共に世界が止まった
「みんな？」
　隣にい鷲尾は世界は何が起きたのか一瞬理解できていないようだったが、すぐに理解したように周りを見回す
「これは…　まさか」
「あれ!?　みんな止まっちゃったッ!?」
「あれ～？」
「みんな…　動けるのか」

「徹くんも動けるのね」
「俺も一応適正はあるみたい」
　俺たちが理解するのに時間はかからなかった。これが「お役目」なのだという事を
「〝敵〟が、来る――」
　その声と共に俺たち四人は波のように押し寄せる光に飲み込まれた

「これが樹海化・・・」
「うーん、もはやどこがどこなのかさっぱり分からないね。全部木だ・・・。自分の家も分からない。鷲尾さん、イネスどこかな」
「こんな時にイネスの心配をしなくても・・・」
　三ノ輪が心配していたイネスと言うのは、駅前にある巨大なショッピングモールの事だ。なんでも揃うと言われていて俺たちの家族もよく利用している
「でも、イネスがなくなったら大変でしょ？　あそこの中、公民館まであるんだから」
「そう言われてみれば、確かになくなったら大変だよなぁ」
「でしょ！　やっぱり八重樫くんは分かってるねぇ」
「大丈夫よ、敵を撃退したら、樹海化も、元に戻るんだから」
　そんなことを話している俺と三ノ輪に対して、鷲尾は自分に言い聞かせるようにそう言っていた。その後樹海のとある方向を見る、あっちは確か鷲尾や俺の家がある方向だった筈だ
「あっ、あれが大橋かな」
「あちらとこちらをつなぐ橋・・　あそこから敵が渡ってくるのね」
「でも、大橋は完全に樹海化しきってないんだね～」
「本当だな、原型が残ってるのには何か理由でもあるのか？」
「でも分かりやすくていいよね。アタシ達のお役目は大橋を守るんだから、あそこに行けばいいわけで」

「神樹様の存在も、分かりやすいね～」
普段は目視することの出来ない神樹様は、樹海の奥地で大木となり神々しく輝いている
「じゃ、そろそろ」
「そうね・・・お役目を、果たしましょう！」
三ノ輪が携帯端末を取り出すと、俺達は頷きあい端末を操作する。操作の方法は訓練で身についている。鷲尾達三人は勇者アプリを、俺は護人アプリを起動させる。このアプリが神樹様を狙う外敵を討つための力
勇者三人はそれぞれ花を咲かせた
鷲尾須美は清楚の花を
乃木園子は優雅な花を
三ノ輪銀は情熱の花を
三者三葉の花を咲かせた勇者たちの隣で俺も護人の戦闘装束に姿が変わる。俺の姿は宮司を思わせる和装に胸当てと籠手、そして臑当てだ。戦闘装束に変わった俺たちは大橋まで一気に跳躍した
大橋の真ん中を陣取った俺たち四人は武器を構える、俺達の使うに武器は全員が違う。鷲尾の武器は弓で乃木の武器は槍、そして三ノ輪の武器は巨大な双斧。三人ですべての距離に対応できるバランスの取れたパーティになっている、三人の武器を確認した後、自分の武器を確認してみると俺の武器はチャクラム、投擲武器でありながら近接武器としても使えるもの。それが片手に一つずつ
「みんな、落ち着いて戦いましょう」
「そういう鷲尾も、あんま気負いすぎるなよ」
恐らく鷲尾は三ノ輪も乃木も危なっかしいと思っているようだが俺が一番危なっかしいと思っているの鷲尾だ、真面目気質の彼女はどうしても真剣に物事を考えすぎる、そんなことを考えていると俺たちの目の前に巨大な影が現れる
「あれが・・・バーテックス。向こう側から来る〃敵〃」
奴等は人を襲う、逆に人以外は襲わず通常兵器は効果が無い。そんなバーテックスに唯一対抗できるのは神の力を宿す勇者、そして護人

のみ…　そして奴らの最終目的は神樹様の破壊。奴らが神樹様に到達し、破壊された時人類は滅亡する
「よっし、ぶっ倒す！」
「…　ちょっと！」
「あ、ミノさん。私も！」
「そんじゃ、俺も！」
「…　もう！　みんな待ちなさい!!」
　三ノ輪が手に持った斧でバーテックスに一撃を与えるが、攻撃を受けた部分はすぐに再生し、元の状態に戻ってしまう
「浅かったッ！」
「ミノさん逃げて!!」
　その言葉を聞いた三ノ輪は判断が一瞬遅れ、攻撃を受けそうになっていたが、乃木が槍の先に装着されていた傘のような部分を展開し攻撃を防ぐ
「園子！」
「ごめんミノさん…　ちょっと持たないかも」
「えっ？」
　その言葉と共に乃木と三ノ輪は吹き飛ばされる
「てめぇッ！」
　俺はそのままバーテックスに近づこうとするが敵の放つ水の弾に阻まれ近づくことが出来ない
「近づけねぇッ！」
「なら、私が…」
　その様子を見ていた鷲尾が矢を放つがその攻撃も水の弾に当たりバーテックスを届くことはなかった
「そんな…　！」
「鷲尾！　前ッ！」
　呆然としていた鷲尾にバーテックスの放った水の弾が向かっていく。俺も動こうとするが行く手を阻むように水の弾を撃ってくるバーテックスに苛ついていると水の弾は鷲尾の眼前まで迫っていた
「…　ッ！」

「須美ぃ！」
　当たりそうになった水の弾は何処からともなく放たれた赤い矢によって鷲尾の眼前で弾ける
「大丈夫かッ！」
「えぇ…　でも、何が」
「大丈夫じゃないでしょ、頬に傷が…」
「これくらい大丈夫よ」
　それでもさっきの一撃が効いたのか足が竦んでしまっている鷲尾に向かって放たれる攻撃をチャクラムで切り裂いていると三ノ輪がこっちにやってくる
「二人とも！　だいじょう―もがッ!?」
「心配して来てくれたのは嬉しいけど、三ノ輪の方こそピンチになってないッ!?」
「ん…　わーッ！　ミノさんッ!?」
「もう、これ弾力がッ！」
「鬼さんこっちだ、手の鳴る方に攻撃を向けろぉ！」
　鷲尾が三ノ輪の頭にある水の球を何とかしている間に俺は攻撃を全力でこっちに引き付ける
「マジか…」
　攻撃を避けながら三ノ輪の方を見ていると水の球を飲み始めていた…　アレ絶対体に悪いだろ
「はぁ…　うぅ～…　気持ち悪い」
「ま、まさか三ノ輪さん…　自分を閉じ込めていた水を、全部飲んだの!?」
「身体に悪いんじゃないのか?」
「ミノさん、大丈夫?」
「うん、始めはサイダーだったけど、途中からウーロン茶的な味わいになったから、飽きずに飲めたわ」
「あ、味のレビューを聞いてるわけじゃなくて…　でも無事でよかったぁ～」
「ってそうだ、バーテックスは!?」

「もうあんなところまで…　急がないと!!」
　バーテックスが想像以上に神樹様に近寄っていたのを確認する
「でも、どうやって止めるんだ?」
「私の矢じゃ傷つきもしないし…　効きそうなのは三ノ輪さんか徹くんだけど」
「あの水が邪魔で近づけないもんな」
「そうだな、近づこうにも近づけない」
　三人で頭を悩ませていると乃木が何かを思い出したような顔で俺たちの方を見る
「ぴっかーんと閃いた!」
　乃木から聞いた作戦はシンプルなものだった、まず最初に乃木の槍に装着されている傘を盾替わりに使う、その次にバーテックスの気をこちらに向け全員でバーテックスの放つ攻撃を防ぐ、防ぎきったら今度はこっちのターンだ。攻撃が途切れた隙をついて俺と三ノ輪が突撃、バーテックスに大ダメージを与えるというものだった
「いくよ!　準備はいい?」
「えぇ、でも…　本当にこれで上手くいくのかしら」
「きっと大丈夫だよ、さっきも一応受け止められたし。それに今度は三人なんだから」
「乃木さん…」
「それじゃあ…　いくわよ!」
「「おぉー!」」
　俺たち三人で槍の柄を持ち、鷲尾が弓矢を構えて…　放つ
　放たれた矢はバーテックスを砕き、注意をこちらに向けてくる
「こっちに気がついたよ…　!」
「…　来るぞ!」
　四人で槍の柄を持ち、攻撃を受け止める…　少しずつ押され始めるが全員で足を踏ん張り耐え続ける
「勇者は根性!　押し返せー!!」
　三ノ輪の言葉を聞いた俺たちは気力を振り絞り耐え続けていると、攻撃が途絶える

「途切れた！　今!!」
「突撃――！」
　その言葉を聞き、俺と三ノ輪の二人はバーテックスに突っ込む。
バーテックスの方もそれを簡単に許してくれるわけはなく水の弾をこちらに撃ってくる
「あの水！」
「鷲尾さん！」
「任せて！」
　鷲尾は二人の言葉に力強く頷くと、矢を放ち水の弾と相殺する
「ナイス！　須美！」
「いっけーミノさん！　やえくん！」
「合わせられるか！　徹！」
「意地でも合わせるッ！」
「いいねぇ、好きだよそういう返事!!」
　炎を纏った三ノ輪の双斧と風を纏った俺のチャクラム、両方が合わさり破壊力の上がった一撃をバーテックスに叩き込むとバーテックスは消え天から花びらが降ってくる
「これは…」
「始まったんだ、〝鎮花の儀式〟が…　きれい」
「ん？　待って待って？　…　てことは！」
「撃退…　出来たってこと？」
「多分な…」
「「やったぁー！」」
　三人が抱き合っているのを見ながら俺は、大の字に寝転がると花びらの降ってくる空を見る
「…　つっかれたぁ」
「いやー！　正直怖かったけど、何とかなるもんだね！」
「え、ミノさんあれで怖がってたんだ？　実は私もドキドキだったよ～」
「私も…　正直不安だった」
「徹は？」

「ん？　…　あぁ、正直怖かった」
「まぁでも、勝てたんだからオッケー！」
はしゃいでいる二人と照れている一人を見ていると、樹海化が解けていった
ふと気配を感じた方を見ると、片手にボウガンを持った誰かがこちらを見て笑っている気がした

「あれが今代の勇者か…　しっかり見守ってるから、頑張れよ」
遠目に三人の勇者と一人の護人の姿を眺める
あの日託されたバトンは、今も尚繋がりづづけている
「さぁて…　帰って依頼片付けるかぁ」
樹海化が解けていく中で、俺は身体を解しながら踵を返した

戦いが終わった後、検査を受けた俺と鷲尾、乃木の三人は校門前まで並んで歩く
「ねぇ乃木さん、徹くん。よければ、その…　今日は栄えある役目も果たせたことだし、祝勝会でもどうかしら…　？」
「いいんじゃねぇか？」
「うんっ！　いこういこう！」
鷲尾から出た言葉は何とも最近の若者らしからぬ言葉だったが、乃木は顔を輝かせて鷲尾の手を取る
「ありがとね私、今、シオスミを誘うぞ誘うぞと思って、でも中々言い出せなかったから…　すごく嬉しいんだよ～」
「の、乃木さん…　そうだったんだ」
「ちょっと待て乃木、俺は？」
「やえくんは呼べば来てくれそうだし～、まずはシオスミからかな～って」

「まぁそうだから否定はしない」
　確かに否定は出来ない、その後も矢継ぎ早に今日の戦いの事をマシンガンのように鷲尾に話をしていたのを聞きながら、俺は歩いていると乃木は鷲尾だけじゃなく俺もぐいぐい引っ張ってくる
「よぅし！　じゃあイネスのフードコートに行こうよ！　もちろん次はミノさんもいれてね」
「フードコートはいいけど。乃木さん、シオスミだけはやめて欲しいかな…」
「えっ、じゃあねぇ…　ワッシーナとか…　アイドルっぽくない」
「えと、それもやめて…　乃木さんも、ソノコリンとか、いやでしょ？」
「わぁ素敵」
「ごめんなさい、忘れて…」
「いいんじゃねぇか？　ワッシーナ」
「徹くん？」
「オーケー、口を慎みます」
　流石、鷲尾須美
　若干圧を出すときの鷲尾は基本的に怖い、最近事務的な話ばっかりだったからすっかり忘れていた…　我が幼馴染はおっかない
「何か変な事…　考えてない？」
「滅相もございません」
「あっ、閃いた。ワッシー！　どう？」
「うーん、変なのになるよりはいいかな」
「よろしくめ、ワッシー！」
「浸透速いな」
「おーい！　お待たせ――！」
　三人で歩いていると後ろから三ノ輪の声が聞こえてくる
「あれ、もう大丈夫なのか？」
「おう！　問題ないってさ！」
「よし、それじゃあみんなでイネスに…　行こー！」
「おー！」
　三人の少女と一人の少年…　これから始まる戦いは厳しいものに

なる

　これは神に見初められ少女と人として勇者を模した力を振るう少年・・・神に見初められるのが無垢なる少女のであるのなら。もしもそこに一滴の異物が入ったのなら、その結末はいったいどうなるのだろう・・・

二話，祝勝会

始めての戦いが終わったその日、俺を含めた四人は大型ショッピングセンター　イネスのフードコートにやって来ていた。そんな中で鷲尾がカバンから一枚の紙を取りだして席を立った
「えっと…　今日という日を無事に迎えられたこと、大変うれしく思います」
まさかの祝辞…　祝辞でいいんだっけ、こういうの
「本日は大変お日柄も良く、神世紀二百九十八年度「勇者・初陣」の祝勝会という事で」
「堅苦しいぞぉ、かんぱーい」
どうやら三ノ輪も堅苦しいと感じていたらしい。鷲尾の祝辞をぶった切ってジュース飲み始めた
「せっかく準備したのに…」
「まさか、休み時間の間真剣に書いてたの…　それか？」
「えぇ、そんなに堅苦しかったかしら…」
「…　おっと、ジュース切れた、買いに行ってこよ」
「ちょっと!?」
明言するのは忍びない…　というより言ったら言ったでクソ真面目な我が幼馴染はちょっとしたことでも深刻に受け止めかねない事を、かかわりがなくなっていた俺でも知っている
「あっ、そういえば鷲尾さんから誘ってくるのって初めてじゃない？」
「そういえば、そうかも」
三ノ輪の言葉に同調すると、彼女は少しだけ前のめりになって言う
「合同練習もなかったし、私らの初戦。良くやったんじゃないか？」
「ねー！それで私も興奮しちゃって…」
「案外何とかなるもんだよなぁって感じだったな」
「わ、私も…　実はその話をしたくて」
「ワッシーも？」
ジュースのストローをいじっていた鷲尾はおずおずとではあるが話を始める

「私、二人のことを信用してなかったと思う…　それは、三人のことが嫌いとかじゃなくて、私が…　人に頼ることが苦手で」
「ワッシー」
「でも…　それじゃ駄目なんだよね、。今回だって…　きっと私一人じゃ何もできなかった」
　そこまで言った鷲尾は、俺達の方を向く
「だから、その…　これから私と、仲良くして…　くれますか?」
「なーに言ってんだ!もうすでに仲良しだろ!」
「そうだよ!それに私も友達作るの苦手だったから」
「だな、わざわざ仲良くしない理由もない…　幼馴染ってことを抜きにしてもウェルカムだ」
　俺の言葉を聞いた乃木は目を輝かせて俺の方を向く
「へ～!ワッシーとやえくんって幼馴染なんだ～!」
「お、おう…　どうした急に?」
「なんでもないよ～」
「でも、あんま幼馴染って感じしないよな」
「ここ一、二年は色々立て込んでて二人で遊ぶこともなかったからなぁ」
「いいや!アタシの勘がそれだけじゃないって言っている!」
　俺の言葉を聞いた三ノ輪は確信を持った目でこちらを見るとニヤついた表情で俺に詰め寄ってくる
「ほれほれ、アタシに言ってみ?本当の理由をさぁ」
「いや、その…　何と言うか、ほら。もうすぐ中学生だし…　ちょっとした気恥ずかしさというか。接し方を忘れたというか」
「なぁんか難しい言葉使ってるけどさ、ようは鷲尾さんが美人だから恥ずかしいんだろ?」
「びッ!!」
「……　まぁ、そうともいう」
　三ノ輪の言ったことは結構的を得ている。それこそ俺と鷲尾は小学校に入る前からの付き合いでそのころからやたら愛らしかったし、それが小学校入ってからその…　何と言うか…　発育の方が大変よ

ろしくなったというか…　かわいいから美人になったというか
　実際にめっちゃ可愛くなってるんで、接し方がわかりません」
「…　途中からめっちゃ声に出してるぞ、お前」
「えっ？…　どこから？」
「発育の方がから駄々洩れだったよ～」
　かなりの不味さを感じながら鷲尾の方を見ると、彼女の顔は真っ赤になっていた
「その…　鷲尾、すまん…　さっきのは言葉の綾と言うか」
「…　んな事で」
「え？」
「そんなことで、避けられていたなんて…　一生の不覚」
「あぁ、そこなんだ」
　なんか心配してた割に大丈夫そうだったなぁなどと考えていると、ジュースが切れていることに気付いた。お小遣いにも余裕があるしもう少し買っても大丈夫か
「ごめん、ジュース切れたからちょっと買いに行ってくる」

　徹くんが飲み物を買いに行ったのを見た私は大きく息を吐いて机に突っ伏した
「ワッシーよく我慢したね～」
「…　恥ずかしかった」
「鷲尾さんってもしかして、真っすぐ褒められるのに慣れてない？」
「慣れてないというか…　慣れないというか…　けど、少し距離を感じてた理由が分かってホッとしたわ、本当に嫌われてると思っていたから」
「よし！それなら私たちも協力するから元の距離に戻れるようないっぱい遊ぼう！」
「さんせーい！」
「…　それじゃあ、お願いしようかな」
　やっぱり、私が勝手に遠慮していただけだったんだ、これからもっ

と仲良くなろう、仲良くなれるように頑張ろう

「ただいまー」
「遅かったなー」
「店が思った以上に並んでてさ、ちょっと時間食った」
そう言って座ると、三ノ輪が話始めた
「そういえばさ、もっと仲良くなろうって話をしたじゃん」
「したね～」
「ならさ、まずは形から入るべきじゃない？」
「形から？」
「そっ、形から…　そこで、まずはフレンドリーに名前で呼び合おう」
名前で呼び合うか、うん良いと思う。父さんが言っていたが仲良くなるには名前で呼び合う所から始めるのが一番らしい
「それすごい良いと思うよ～！」
「そうだな、父さんも似たような事言ってたし、それが一番の近道な気がする」
「よしっ！それじゃあ改めてよろしくな、園子、徹…　鷲尾さんも、須美って呼んじゃっていいよね？」
「えぇ、こちらも…　銀と呼ぶわ」
なんだか分からないが、仲良くなるって言うのはこういう事なんだろうなって感じの会話だ。三ノ輪…　もとい銀のフレンドリーさには尊敬すら覚える、真似出来る気はしないが見習って行けたら良いかと思う

三話，仲良くなろう

「…　銀はまた遅刻！」

祝勝会をしてから大体一週間後、合同練習の日になったわけだが案の定銀は集合時間に遅れていた。これが一回目ならまだ何かしら理由があるのだろうと須美もなるのだろうが銀は散開に一回のペースで遅刻をしてくる為、真面目な彼女としては見過ごせないのだろう…　個人的にはまだ遅刻してでもやってくる分マシだと思うのだが

「ごめんごめん、お待たせ！」

本日の遅刻時間は八分

このペースならまぁモンぢアハないだろうが、ルールに厳しい須美は見過ごしてくれないだろう

「銀、どうして今日は遅れたのかしら」

ほら始まった

「ええと…　や、何を言おうが遅れたのは自分のミスだし…　ごめん、気をつけるよ！」

すっかり見慣れた光景になったのだが、銀はいつものように理由を言わず謝るだけだ。彼女にも彼女なりの事情があるのだろうと思うが…　この後の展開は大体決まってる

「勇者としての自覚を、もっと持たないと。私達はこの国を守るべく――」

「はぁ…」

遅刻をする銀、小学生とは思えない説教をする須美、そして今回もゴーイングマイウェイな園子。この調子だと訓練が始まるのはもう少し後になるなぁ等と考えながら、須美の説教を見守っていた

それから須美の説教も終わり、ついでに訓練も終わった後、銀の次に帰り支度を終えた須美が何かを考えこんでいるようだ

「どうかしたのか？」

「徹くん…　少しね」
「もしかして、銀のことか？」
「えぇ、銀がどうして時々遅れるのか…　これは調査をしないといけないと思って」
「そうか？」
「そうよ！原因があるなら元から絶たないと意味がないわ。よく考えると銀は勇者になる前から、授業に対しても割と遅刻が多かったもの、やはり何か理由があるのよ、それを言ってくれないならこちらから探りに行くまで！そのっちと徹くんも協力してくれる!!」
「はぁ…」
「Ｚｚｚ…　すやぁ～」
　こうなった須美を止めることは骨が折れる…　協力した方が楽だろう
「分かった、協力する」
「ありがとう、二人とも」
　返事をした俺と未だに眠っている園子、ほぼ選択肢が一つな気がするけれど考えないでおこう

　休日
　俺たち三人は三ノ輪家の前までやって来ていた
「何か問題があるようなら、私達が力にならないと…」
「いつの間にか私も協力することになってるけど、頑張る～！」
「あんま気張らず適度にやろう」
　これなら流れに身を任せるのが一番いい
　これも友達の為だ。我が家の家訓の一つにもなっている。自分に近しい人が何かを抱え込んいるようなら全力で力を貸してやれと、これは祖父母の代に世話になった人の言葉らしい…　というより祖父母がお世話になったというその人から伝わった教えは今も結構残っているあたり、その人には本当に感謝しているのだろう
「見て～、二人とも。あれあれ」

俺達の目に飛び込んできたのは赤ん坊をあやしている銀の姿、弟がいると言っていた為あの子が弟さんなのだろう。まだ赤ん坊ならご両親が忙しい時には銀が世話をしているのもう頷ける

「弟の世話をしていたのね、銀は」

実際の所ここにいる須美と園子は中々に良いところのお嬢様だ、乃木家は大赦のトップだし鷲尾家も大赦ではかなり歴史のある家だったと思う。俺の家である八重樫家は大赦に置いてそこまで格式の高い家ではない。大社のトップである乃木家とは比べるほどではなく、鷲尾家と比べても数段劣る家であるが、それでもそこそこ由緒正しい家柄だと自負している。

逆に三ノ輪家は大赦で発言権はあるが、使用人を雇えるほど家は裕福ではない…と言っても一般家庭よりは裕福であることに変わりないのだが。そんなことを考えていると銀が動きだし始める

「今度は家の中のお掃除もしてるよ～、私もああいうのしたことない～。凄いね、あ。今度はお使いに出かけるみたいだよ～」

「働き者だわ…お使いにもついてってみましょう」

「……改めて思うけど、やっぱあの二人とは比べちゃいけねぇわ」

特に園子の発言は中々にショッキングだったなどと考えていると置いていかれそうになったので慌てて二人を追う

お使いについていくという名目で銀の尾行をしていた俺達の目に入ったのは、小さなトラブルに次々と遭遇する銀の姿だった。ある時は目の前で自転車に乗った小さい男の子が倒れ、それを助けたと思ったら今度はおばあさんが腰痛だと言って銀の目の前に座り込む

「こ、これはいわゆるトラブル体質～？」

「遅刻の理由が判明したわね…」

「なんでもいいが、手伝いに行ってやろうぜ」

「そうね…銀！」

「大丈夫かー！」

「うおっ、須美！徹！」
「園子もいるんだぜ～」
「園子まで！」
　四人で腰痛のおばあさんを家に送り届けた後の帰り道、俺達が今までやっていたことを銀に話した
「じゃあ三人とも家の前から見てたっての？うわぁ、なんか恥ずいなぁソレ」
「恥ずかしくなんかないよ、偉いよ～」
「そうだな、誰かの為に進んで行動するのは良い事だ。とウチの曽爺ちゃんも言っていたらしい」
「遅れるには、いつもこういう理由があったわけね」
「まぁ…　ね」
「だったら言ってくれればいいのに～」
「それは、なんか弟や道行くおばあさんの所為にしてるみたいで…何があろうと自分の責任な訳だし」
　そうだ、予定があるのなら人によっては無視して素通りをする人もいる。それをしないのは銀の良いところだと思う。困っている人を率先して助けるなんて大人でも簡単には出来ない
「そうね、どんな理由があろうと、遅れていいわけがないわ」
「トホホ…　はい」
「ミノさんはトラブルに巻き込まれやすい体質なんだね～」
「昔っからね、ついてない事がないんだ。ビンゴとか当たったことないもん…」
「これからきっと良い事が…　ん!?」
　話をしていた俺達は、世界に起こった異変に気付く
「これ…　時間とまってるよね～？私の感覚がいきなり鋭くなったわけじゃないよね～」
「えぇ、それはないわ。敵よそのっち」
「そういえば、須美って園子の事あだ名で呼んでるのな」
「今!?…　まぁ、本人がそっちの方が良いって言っていたし」
「徹くんも呼んでもいいんだぜ～」

「遠慮しとくよ」
「おいでなすったぁ！休日台無し！」
銀の言葉を最後に俺達は樹海化の光に飲みこまれた

前回と同じように大橋の真ん中に陣取った俺達が見たのは左右に秤を付けた化け物の姿
「何、あのフォルムは・・・天秤？」
「天秤が・・・空に浮いてるね～」
「なんというか、かなりシュールな光景」
少し困惑をしているが神樹様に向かってきている以上敵には変わりないだろうと思い、俺が両手に持ったチャクラムを構える
「全く、どういう生き物なんだか。ウィルスの中で生まれただけで、あんな形になるもんかね」
「さぁな・・・でも、俺らは撃退するだけだからな。パパっと終わらせるか」
「作戦通りに動くわ、分かってるわね銀、徹くん」
「そうだった、敵を見るとつい突撃したくなる。須美よろしく」
「そういえば作戦あったな・・・忘れてた」
「そもそもどこが顔なんだろ～」
俺達がそんなことを言っている間も園子は敵の観察を続けていたらしい。とはいえまずは作戦だ、手始めにロングレンジの須美が弓矢で敵に攻撃を仕掛ける
「向こう側へ戻りなさい！」
その言葉と共に放たれた須美は複数の矢を同時に放つが磁石に引き寄せられるかのように天秤バーテックスの分銅部分に吸い寄せられる。吸い寄せられた部分は相当硬いらしく敵にダメージを与えられていなかった
「！もう一度・・射かける！」
その後も須美の放った矢はすべて不自然な軌道で分銅の部分に吸

い寄せられダメージを与えることはできていなかった。悔し気に唇を噛んでいた須美に一度目を向けた後、再びバーテックスに目線を向けると、奴は何の感情もなく前進してくるだけだった

「ミノさん、やえくん。あの敵、体と体の繋がっている部分が細くてもろいかも～」

「接続部を狙って攻撃ね、了解！・・・徹！」

「分かってるよ、サポートはお任せ！」

俺と銀、園子の三人で攻撃を仕掛けようとするがバーテックスが急に回転を始める、そうして巻き起こる竜巻のような防御壁が邪魔をして近づくことが出来ない

「くっ、この、近づけない・・・！」

尚も回天を続けるバーテックスはそのまま須美の放った弓矢を撃ち返してくる

「矢をそんな風に返すなんて・・・」

須美を狙った攻撃は狙いが散漫だったため、避けることはできていたが須美を狙っていなかった矢の何本かは樹海に向かっていった。

「落とせるか？・・・いや、落とす！」

その言葉と共に俺は両手に持ったチャクラムを投げて、須美の矢に当てる。この前の戦いでは使わなかったがチャクラムに装着されているワイヤーを使う事である程向きをコントロールすることが出来る。矢をすべて弾くとワイヤを巻き戻してチャクラムを手元に帰還させる

「大丈夫か、須美」

「えぇ・・・ありがとう」

「気にすんな」

「くぅ！ちょっと不味いかなコレ」

「どうすれば、どうすれば・・・」

「多少はましになったと思ったが、須美。少し落ち着け」

俺たちは攻めあぐねている上、今回の敵は須美と相性が最悪・・・そのことが焦りに繋がったのか須美は軽いパニックを起こしていた

「ぴっかーんと閃いた！」

「何か思いついたか!?」
　ベストタイミングだ、園子のアイデアはこの状況を打開するきっかけになることが多い
「うん！台風の目ってあるよね。この回転も、周囲に強くても…　頭上はお留守かもしれない！」
「そっか！上から飛び込めばいいんだ！園子ナイスアイデア！」
「よっしゃ、じゃあ踏み台は任せろ！高くぶっ飛ばしてやっから」
「頼りにしてる！」
「でも竜巻に飛び込んでいくようなものだから、相当危ないわけで…」
「やってみなくちゃ分からない！須美、フォローお願い！」
「銀ちょっと待って…」
「徹！頼んだ！」
「信じるからな！」
　その言葉と共に俺はチャクラムを踏み台のように構えるとその上に銀が飛び乗ってくる
「ぶっ飛べぇぇぇぇ！」
　持てる力のすべてを使って銀を高く上げると銀は隕石のようにバーテックスに向かって降下し、一瞬見えなくなった直後にドスンと言う音がなりバーテックスの動きが止まる
「今だ!!」
「よし！突っ込む!!」
　須美が一瞬だけ遅れたがそれでもすぐに追いつきバーテックスに攻撃をしかける、勇者たちの装備に比べると劣る俺の武器も神の力を持っている武器に変わりない。風を纏ったチャクラムで銀とは反対の方向からバーテックスを切り刻んでいく
　それからしばらく、俺達四人の攻撃を受けていたバーテックスは少しずつ後退していき、橋から完全に撤退する。それを見た俺達は完全に気力を使い切りぐでっと倒れこむ
「銀…　傷は、大丈夫？」
「何度目の質問よそれ、戦闘中に割と回復してたし深い傷はなかった

し、平気だって」
「そう…ごめんなさい。矢が通じなくて、結果、銀に突っ込ませてしまって」
「そんなの相性もあるし、気にするなって。だいたいアタシとか徹は武器的に突っ込むのが仕事なんだしさ」
「メインアタッカーはそれでも銀だけどな」
「徹、少し拗ねてる？」
「べっつに～、アタッカーとしての仕事ないなぁとか思ってねぇから」
「やっぱり拗ねてるじゃん！」
　俺達がそんなことを言い合っていると、黙っていた須美が口を開く
「突っ込むのが仕事…か。もしかしたら私達って、あまり仲良くならない方がいいのかな…」
「え、ど、どうしたのわっしー」
「な、なんだよいきなり…」
「……だ、だって。銀が竜巻の中に飛び込んだ時、心配で…心配で…動きが鈍くなっちゃったから…」
　気が付くと須美が泣いていることに気付く、きっと敵が去ったことを切っ掛けに色々なものがあふれ出してしまったのだろう。園子が慌てて慰めているようだが泣き止む様子はない
「心配をするのは、その人が好きな証だ…ってひい爺ちゃんが言ってたんだ。恩人の言葉らしいけど詳しく俺にはわかんねけどさ、須美が心配するのは当たり前だ！仲間なら心配するし、心配される…けど、それも全部ひっくるめて相手の為に頑張るのが仲間だと思う」
「徹の言う通りだぞ、須美。アタシの勇者システムは近接専用にタフに仕上がってるんだから大丈夫だ…まぁでも、時々練習に遅れてりゃ、そりゃ本番で不安がられるか」
　そう言うと銀は須美の頭を撫でながら、明るい口調で言う
「よし！アタシ家を出る時間を早くする、そうすればトラブルがあっても間に合うだろうしさ」
「銀…」
「だから、もっと仲良くなろうよ、須美。アタシ須美から仲良くならな

い方が良いって言われた時、グサッときちゃった。そっちの方が敵の攻撃より堪えたって」

「うんうん、私もだよわっしー」

「確かに、俺なんざ幼馴染だぜ?せっかく元通りになって来たのに今度はそっちから距離を置かれるのはキツい」

「ごめん、ごめんね…」

泣いている須美を銀は抱きしめていた。それこそ泣き止むまでの間ずっと…戦いは始まったばっかで不安なこともいっぱいあるかもしれないけど、これからもっと仲良くなっていけばきっと何とかなる。俺達四人なら…きっと

四話，合宿　ト　特別講師

　初夏の風が瀬戸内海から舞い込んでくる頃。俺達は学生らしく図書室で勉学に勤しんでいる。須美は銀に勉強を教えており、園子はいつものように寝ており、俺は適当に持ってきた本を読んでいる
「なぁ、勉強より先にイネス行かない？　あそこのフードコートがアタシを読んでる」
「ダメよ銀」
「須美ってば取りつく島もないッショ」
「何それ新キャラ？　ほら集中して銀」
「はいはい、鷲尾先生。分かりましたぁ」
　再び勉強を始める二人を見ながら本に目を落とし読むのを再開する
「寝てる園子は放置でいいンすか、鷲尾先生」
「彼女は、頭いいのよ…　見えないけど」
「少し酷いな、気持ちは分かるけど」
「おのれ天才少女め…　耳元で害虫の名前をひたすら囁いてナイトメアを見せてくれようか、いひひ」
「よくそんな鬼のような発想が出来るわね。自分がされたらどう思うの」
「アタシ大丈夫だもん、Ｇとか」
「やるじゃない…　なら徹くんは？」
「俺も基本的に大丈夫だな、不意打ちはＮｏだが」
「そういう須美はどう？　Ｇ」
「…　どうしてウィルスで絶滅してくれなかったのか…　恨むばかりね」
「お、苦手なんだ。やだー可愛いー」
「話を逸らそうとしても駄目よ銀。さぁ歴史の勉強に戻りましょう、この四国を覆う壁はどうして存在するの？」
「アタシだってそこまでウマシカじゃないよ、神樹様が四国にいる人間を結界で守ってくださっているんだ」

「そうね。外の世界で蔓延している死のウィルスがら神樹様が護ってくださっている」

この調子で須美と銀の歴史の授業が続いているのを見ながら、俺は本のページをめくる。適当に手に取った小説が恋愛小説だったため何となく読んでいるがこれが中々に面白い。たまには読まないジャンルに手を出してみるのも良いかも知れない

それからしばらく勉強会を続けているとあっと言う間に訓練の時間になった。丁度園子も目を覚まし大赦の訓練場に移動しようかと思った所で担任の先生が俺達の元にやって来た

「そろそろ移動時間…って、分かってるみたいね。それじゃあ訓練所に行きましょうか」

「「はい先生。よろしくお願いします」」

俺達四人が挨拶をして先生が車を発進させようとしたところで何かを思い出したように、先生が俺に声をかけ、全員が車に乗り込むと先生は車を発進させる。訓練所に到着するまでの間、クラスの友達についての話をしていると、また先生が話かけてくる

「あなた達、いつの間にかすっかり仲良しね」

「そうですか？」

「えぇ、私から見てもすっかり仲良しよ…そうだ、一応便宜上隊長を決めておかなくちゃいけないの。乃木さん、隊長頼めるかしら？」

「え、わ、私…ですか～」

園子は少し驚いたような表情をすると、須美の方を見る。須美も驚いているようだったが何かを察した後、すぐ先生の言葉に返事をした

「そのっち、私もその意見賛成よ」

「アタシじゃなければどっちでもいいよ」

「俺も、園子で良いと思う」

「みんな…わ、私にできるかな～」

「で、隊長を決めたあなた達に通達。さらに連携を深める為に、今度の三連休、大赦が運営している旅館で合宿をしてもらいます」

「効率的に鍛えられますね、助かります」

「合宿…うわぁお泊り会だ～やった！」

「そりゃ楽しみだ、いよいよ夏だし。なんかワクワクしてきた！」
「合宿か・・・確かに楽しみだ」
「それと、連携を深める以外にも個人の技量を上げる為に特別講師の人にも来てもらうことになったの」
「特別講師・・・ですか？」
「えぇ、勇者についても知っているし、腕も私が保証する・・・きっとあなた達の糧になると思うわ」
先生はそういい終わると再び運転に戻る。それにしても須美と銀たちの間で妙に温度差があるというか・・・ほんと何なんだろうな、この噛み合ってるのに微妙に噛み合ってない感じ

それから時は進み合宿の日、バスの中で俺達三人は銀の事を待っているが中々来ない
「遅いわね、銀」
「いつもみたいにトラブルに巻き込まれてるんだと思うが」
「大丈夫かしら・・・」
「や、悪い悪い！　遅くなっちゃって」
「銀！　大丈夫！　何か深刻なトラブルに巻き込まれたとかじゃない？」
「大丈夫、心配ないよ」
銀はそう言うとバスの席に座るとバスは発進する
「あれ、先生、特別講師の人って」
「彼は現地で合流することになっているの」
「彼ってことは・・・男の人、ですか？」
「確かに男だけど、心配ないわ。あの人は少し変わってるから」
先生のその話を聞くと、須美は少しだけ肩を撫でおろした
それからバスに揺られること数十分、海岸に到着した俺達を待っていたのは大学生くらいに見える男の人だった
「この人が特別講師の不知火要さんです」
「「「よろしくお願いします」」」

「おう、よろしくな…　それにしても、今代の勇者はこの子たちか、神樹も残酷なことをしやがんな」
「え？」
「いや、何でもねぇ…　それで、俺は今日何をすればいいんだ」
「そうですね…　とりあえず一度彼女たちの事を見て貰えませんか？」
「それはアレか？　俺がこの子らの相手をすりゃ良いって事か」
「はい、頼めますか？」
「それくらいならお安い御用だな。時間もねぇしとっととやるぞ」
　不知火先生のその言葉を聞いた須美が困惑したように言う
「戦うって…　勇者の状態でですか？」
「当たり前だろ、そうじゃねぇとお前らの技量わかんねぇし」
「その…　大丈夫なんですか？」
　心配そうに聞く須美の様子を見た不知火先生は少し何かを考えると理解したようにポンと手を叩く
「心配は無用、これでも荒事には慣れてるからな未熟者四人くらいなんてこたぁねぇよ」
　その言葉を聞いた須美は少しむっとした表情をし、銀も俄然やる気になったという風である、園子は相も変わらずで俺もさっきの言葉には少々むっと来た、これでもバーテックスを二度も退けているのだ、何も知らない人にそう言われるのは心外である

「よし、そんじゃ普段通りにかかってこい」
　そういう不知火先生は動きやすいジャージのズボンに半袖、手に持っているのは練習用の槍、対するこちらが勇者服と万全の体勢だ
「最初はどうする？」
「いつも通り前衛はアタシと徹、中衛は園子で後衛は須美でいいだろ…　それじゃ行くぞ！」
「ちょっと、銀！」
「俺もお先に！」

「徹くんも！」
　俺と銀の二人で突っ込み左右から攻撃を仕掛けようとした瞬間、腹にバカみたいな衝撃が入り吹き飛ばされる
「徹！」
「バーテックスならこんなことねぇが俺は人間だ、周りを見て臨機応変に」
　その言葉と共に銀の持っていた斧を槍で弾くと、柄で銀の事も吹き飛ばした
「猪突猛進なのは嫌いじゃない、鍛え甲斐があるねぇ…　それで残りの二人は？」
「私がいくよ～」
「よっしゃ。全力で来い」
「お手柔らかにお願いしま～す」
　そう言うと園子は不知火先生と打ち合いを始めるが、ぱっと見た感じ園子が押しているようにも見えるが不知火先生が焦っている様子はなかった
「こっちの手にも警戒してるし槍捌きも上手い…　流石若葉の子孫」
「え～？」
「なんでもねぇよ、はいっ、終わり」
　そう言うと不知火先生は園子の槍に自分の槍を交差させ上に弾くと、頭に手を置いた
「負けちゃった～」
「最後はそこの子か、遠慮せずに撃ってこい」
「…　行きます」
　俺達の様子を見ていた須美も覚悟を決めたようで数本の矢を射ると、不知火先生に向かって放つ
「狙いは良いけど、集中力が足りてねぇな」
　須美の放った槍を簡単に弾いた先生はゆっくりとした足取りで須美の方に近寄っていく。矢を弾かれたのに少し驚いた須美だったが気を取り直し再び弓を放つが、そのことごとくを不知火先生に弾かれる

「素養はあるけどちょっとしたことで、取り乱しそうになるのはダメだな」

そう言うと不知火先生は槍の柄で軽く須美の頭を叩く

それで模擬戦が終わったことを確認した先生は、俺達四人と不知火先生を入口に呼び戻す

「それで、どうでしたか？」

「全員素養はマル、だけど安芸ちゃんの言う通り致命的に連携が出来てねぇな。この状態で個人の強化なんざしちまった日にゃスタンドプレイが横行して全員レッドカードだ」

「・・・相変わらずわかりづらい言い方をしますね、あと安芸ちゃんはやめてください」

「悪かった、まぁわかりやすくに言うと連携を鍛えるが吉、個人の上達はその後しっかりと。以上」

「それじゃあ、本来の予定で？」

「そうだな、予定通り連携強化の特訓で良いだろ」

その言葉を聞いた先生は俺達を改めて浜辺に集めると、本来予定していたであろう特訓を始めた。不知火先生はというとそんな俺達の様子を懐かしいものでも見るように眺めていた

合宿初日の夜、安芸ちゃんに呼ばれ今代の勇者の訓練に一枚噛むことになった俺は、合宿所の廊下から静かな海を眺めていた

「何か考え事ですか？」

「ん？　あぁ・・・安芸ちゃんか」

「だから、安芸ちゃんはやめてください。子供たちの前だと教師としての威厳が・・・」

「んなもん必要ねぇだろ、あの子らは安芸ちゃんの事好きみたいだし、安芸ちゃんもあの子らの事大切に思ってんだろ？」

「大切に思ってるのは当たり前じゃないですか」

「ならそれでいいだろ、威厳なんざかなぐり捨ててあの子らの事大切にしてやんな」
　俺がそう言うと安芸ちゃんは、呆れたような表情を浮かべた後軽い笑みを浮かべる
「…　要さんのそういう所、初めて会った時から変わってない」
「そりゃそうだ、かれこれ三百年くらい前からこんな感じだからな」
「いつも言ってるけど、それ本当なの？」
「あの子らくらいの頃からの付き合いなんだし、それは安芸ちゃんが一番分かってんじゃねぇの？」
「頭では分かってても…　やっぱり納得いかないの」
「まぁそりゃそうか…　本当だよ、何なら見るか？　お前のご先祖が写ってる写真」
　安芸ちゃんのご先祖、安芸真鈴とはタマと杏を通して知り合った。あいつら程付き合いが長かったわけじゃねぇが酒飲み友達みたいな間柄だったし、何かと愚痴に付き合うことも多かった
「それは何回も見せてもらったから大丈夫よ…　それより、もしもの時は」
「もしもは何回も聞いたよ、それに知ってんだろ？　おれｉｆってのが好きじゃねぇんだ。精神年齢２００も超えちまうとｉｆなんて考えるのが馬鹿らしくなるからな」
「なら――」
「だから安心して待ってろ、俺が居る内は安芸ちゃんの教え子はぜってぇ死なせねぇからよ」
　静止した世界の中、俺はそう言って安芸ちゃんの頭に軽く手を置くと、迫りくる光の奔流を睨みつけた

五話，戦い

夜も更け、就寝時間が近づいた頃。四人部屋に布団をの中に入り寝る準備は万全と言った所で銀が俺達に話しかけてきた
「お前ら、簡単に寝られると思ってる？」
「私はいついかなる時でもすぐ寝られるよ～」
「明日も早いのよ、銀。ほら目を閉じなさい」
「いやだ・・・というか徹はなんでそんなに離れてんだよ」
「布団をくっつけては抵抗がある」
「なんだそりゃ」
「なんでもいいだろ、俺は寝る」
そう言って布団を被り眠ろうと、していると隣で誰かが立ち上がる音が聞こえてきた
「そうだ、好きな人の言い合いっこをしよう！」
立ち上がった誰かがすぐさま布団に戻る音がした・・・それにしても好きな人の言い合いっこって、女の子ってそういうの好きだなぁってつくづく思う
「銀、好きな人って・・・」
「も・ち・ろ・ん。お父さんとか身内で濁したやつは、勇者剥奪な！」
好きな人を濁したら勇者剥奪は流石に罰が重すぎるだろ
「そ、そういう銀はどうなの？」
「どきどき～・・・」
「うーん、いない！」
「それはずるいよ～」
「私もいないから、おあいこね・・・そのっちは？」
「ふ、ふ、ふ、私はいるよ～」
マジか、園子にはいるのか、好きな人・・・誰だ、同じクラスの男子か？　他のクラスか？　それとも上級生？　下級生？　純粋に気になる
「おおっ！　コイバナ来たんじゃない？」
「だ・・・誰？　クラスの人？」

「うん、わっしーとミノさん、それとやえくん」
それは…好きのベクトルが少々違うのでは？　少なくとも二人や俺が求めていたものとは違うんだ
「…まぁ、そうよね」
「アタシら揃いも揃っていいのかね、もっとこう燃えるような…」
そういった所で、俺達四人は世界の雰囲気が変わったのを感じる
「燃えるような戦い、か…はぁ…こんな時にバーテックスとか勘弁してよ」
「ぼやかないの、隊長、号令を」
「え、ええと出撃～」
「よっしゃ、頑張りますか」

樹海化した旅館から飛来した俺達は、いつものように大橋の中心に陣取って敵の襲来を待っていると、そこまで時間が経たないうちに、橋の向こうからやってくる敵の姿を確認する
「来たっ、おぉ今度はなんかビジュアル系なルックスしてるねぇ」
「と、尖っていて強そう～」
「攻撃力高そうだな」
「矢で攻撃してみるわ」
須美が気合いを込めて弓を引き絞ると、バーテックスは大橋にその巨体をおろすと四本の角っぽい部分が大橋にめり込んだ
「今回こそ…！」
気合いを込めて須美が矢を撃ち込んだ。須美の矢が敵に向かって飛んでいく途中でバーテックスは小刻みに振動を始めた。その振動に呼応するように樹海…いや、世界そのものが振動する
「地震、あいつが起こしてるのかッ!?」
銀がバーテックスの起こす振動がこの地震を起こしていることに驚くと同時にぎいん、と鈍い音が樹海中に響き渡る。須美の放った矢はその振動に弾かれ刺さることはなかった
「う、また通じないというの…？」
「落ち込んでる暇はないよ、わっしー！　この地震を止めないと！

敵に近づくよ！」
「え、ええ」
　気持ちを切り替え、四人で敵に近づこうとするとバーテックスは橋から牙を抜き、急上昇を始める
「なんだ？　地震は止まったけど…　このまま逃げる気か!?　降りて来いコラァー！」
　銀がそう言っている間も園子は敵の事をじっくりと観察していたようで、月の光を受けたバーテックスが鈍く光ると、銀と俺に向かって
「ミノさん、敵が何か仕掛けてくるよ！　斧で防御して！　やえくんも、ミノさんの斧に風くっつけて！　ぶわーって！」
「えっ…　んなっ！」
「とにかくやってみる！」
　園子に言われた通り銀の使っている斧に風を付与しようと念じると、案外簡単にできた。それと同時にバーテックスは光弾の雨を樹海に向かって降らせる
「避けたら橋も樹海もヤバい！　上ッ等！　野球は結構好きなんだよね！」
「なら、バッティング勝負と行こうぜ！」
「いいねぇ！」
　俺と銀は風を纏わせた斧とチャクラムを使い、銀は次々と光弾をはじき返していく、樹海の方に飛ばすのではなく空中に向かって弾き飛ばせば被害は出ない
「銀！　徹くん！　大きいのがくるわよ！」
　須美から飛んできた言葉を聞いた俺達はバーテックスの方を向くとレーザーのような光線がこちらに向かってくるのが見えた。咄嗟に俺達は自身の持っている武器を交差させることでなんとか防御する。俺達の武器に纏わせていた風のお陰で多少は負担が軽減されている気がするが、それでも長持ちはしないと思う
「んぐぐぐ！　…こ、これは、キツい」
「キッツ…！」

「ミノさん、やえくん、その光線どれくらい受け止められる～？」
「あ、あと十秒っ・・・気合いを出せば、じゅっ・・・十二秒ぐ、ら、い、は・・・」
「俺も・・・それくらい・・・それ以上は・・・流石にっ」
「なら、私とわっしーで、上空の敵を叩くよ～！　行こう、わっしー」
　俺達に対して園子はそう言うと、須美と共バーテックスの方に向かっていく、上の様子をはっきりと目視することは出来ないがそれでも二人を信じて・・・この場を守る
　それから程なくして、バーテックス～放たれていた光線が止み、俺達が上を見ると、園子の槍によってダメージを受けたバーテックスが空から下に降りてくるのが見えた、須美も園子をサポートするようにバーテックスに弓を撃ち込み続ける、俺達が走って二人の場所に向かっていく間もバーテックスは徐々に後退を続け、回復した体でよろよろと壁の外に消えていった
「須美ー！　園子ー！」
「二人ともー！」
「ミノさん、やえくん」
「二人とも、大丈夫なの？」
「ちょっと腰に来てるけど、問題なし！」
「そういえば、バーテックスは？」
「壁の外に逃げていったよ～」
「もう少し待って、もし戻ってきたら・・・射る」
　そんなことを話していると樹海が再び光に包まれ、俺達は大橋の見える公園の芝生に倒れていた。

「あーっ！　それにしても、腰にくる戦いだった・・・上空から来るビームを防ぎ続けるとか、地味すぎるし・・・」
「それを言うなら俺も同じだよ、光弾弾いて光線受け止めて・・・腰が痛い」
「でも、二人がああして攻撃を受け止めてくれたから、私達は攻めに出られたんだよ～」

「そのっちは…　あの短時間でよく決断できたわね、攻め込もうって」
「だってミノさんとやえくんが十秒持つって言ったんだから、十秒は持つと思って。それだけあればなんとかなるな～って。火力がある敵なら長引かせるのは危険そうだったから」
　その言葉を聞いた須美は、園子に何かを感じ取った表情をすると、頬を少し赤らめていた
「そのっち…　凄いわね。貴方こそ、隊長よ。本当に」
「ね、ここぞって時にやってくれる」
「やっぱ咄嗟の判断力なら園子が一番だわ…」
　俺たちがそんな事を話していると、芝生を踏む音が聞こえてくる。いくら勇者のお役目だとしても俺達はまだ小学生…　もしおまわりさんとかだったら怒られるだろうなぁって考えていると、俺達の目に入ったのは予想外の人だった
「おっ、ここに居たか…　頑張ったみたいだな」
「不知火先生…　どうして？」
「どうしてって…　そりゃ、あれだ。部屋に様子を見に行ったらお前らいなくなってたから、もしかしたら勇者のお役目ってやつかなと思って探し回ってたんだよ」
　それにしては、少し見つけるのが早すぎる気がする
「よくここだってわかりましたね」
「西暦の資料とか見てると、樹海化の後勇者たちは祠の近くに転移するってあったからな。そんで事前に安芸ちゃんから聞いてた何処から敵が来るのかって情報を照らし合わせれば…　大体の場所は絞れる」
「先生すごいね～」
「昔取った杵柄ってやつだ。これでも本業は何でも屋だからな、迷子のペットから迷子のご老人まで。人探しはお手のものだ…　っと、一応安芸ちゃんにも連絡しとかねぇと」
　そういうと不知火先生は、携帯電話を取り出して連絡を取り始めた…　それにしても少し妙な気がする、樹海化した段階で勇者以外の時間は止まる、なら俺たちがここに出てきたんなら先生たちが来るの

はもう少し後になるんじゃないか…と。その小さいけれど確かにそこにある違和感がさっきまで晴れ渡っていた心に少し靄を残した

それからは何事もなく合宿最終日、帰り支度を終えバスの前までやってきた俺たちの前に不知火先生がやってきた
「お疲れさん、合格には程遠いがここ三日でだいぶ連携もうまくなって、ほんとによくやったと思うよ」
そういいながら先生は俺たちに一本ずつラムネを渡してくる
「わ～ラムネだ～」
「先生、これ貰っていいの!?」
「当たり前だろ？　俺からお前らに頑張ったご褒美だ」
「ありがとうございます」
「ほれ、八重樫も」
「…　ありがとうございます」
ラムネを受け取った俺は、改めて不知火先生の方を見る…やっぱりこうしてると普通の人なんだよなぁなどと考えながらラムネを開けて飲んでいると、不知火先生が話始めた
「あぁそれと、これからお前達の訓練。俺も安芸ちゃんと一緒に見ることになったから」
「「「へ？」」」
「全員揃って驚いた顔してんな…　まぁアレだ、大赦の上の方から正式に勇者たちの訓練に指導役として参加しろってお言葉を貰ってな。他の要求なら突っぱねてる所だが、その話なら大歓迎ってことで受けることにしたんだよ」
「…　そ、そうなんですか」
「そうなんです」
そういうと不知火先生はどこか気の抜けた…というか優しそうな笑みを浮かべた

俺たちにとって新しい先生が一人増えました、名前は不知火　要
掴みどころのない人で少し適当そうな雰囲気を感じさせる人です・・・多分俺たちに隠してることは山ほどあると思うけど。たぶんいい先生なのだと思います

六話，日常

のどかな休日、太陽が昇りきってからすぐ
俺は自分の家から少し離れた空き地で、不知火先生と向き合っていた
「それじゃ、早速始めるか」
「はい、お願いします！」
俺はそう言うと両手に持った練習用チャクラムを構え、要さんに向かっていく
「はぁっ！」
「重心が利き腕き偏り過ぎだ」
要さんに向かってチャクラムを振るった直後、足を引っかけられた
俺はそのまま地面に激突する
「ほら、大丈夫か？」
「大丈夫です、次お願いします」
「…いや、今日はここまでにしよう」
「どうしてですか!?」
「今日は重心が偏らないようにすることを第一にする…今日はひたすら武器を振って振って振り続けろ、片手ずつじゃなく、両手で振ることを意識するんだ」
その言葉共に不知火先生はベンチに座り込んでしまう
「今日って…それだけですか？」
「あぁ、戦い方をどうこうよりも、まずは危なそうな癖を直す所から始めないとな」
「危なそうな癖って…なんか経験でもあるんですか？」
「いつだか忘れちまったが、やらかしそうになったことはある…だから重心が片方による癖は直したほうがいい」
本当に…一体何をしてたのか分からないなこの人は、けど実際にそれで怪我しそうになったってことは今の俺の戦い方は結構危ないんだろうなぁとは思う、それから俺はひたすらチャクラムを振り続ける

「八重樫、今度は重心が聞き手と逆に寄り過ぎだ」
「はい！」
　意外と重心がどちらか片方に寄っているというのは理解しずらいもので、不知火先生に言われなければ実感することが出来なかった

「よし、今日はここまでだな」
「終わりですか？」
「あぁ、休憩入れたって言ってもかれこれ一時間振りっぱなしだ。それにお前、今日は何か予定があるんじゃなかったか？」
「そうだった、今日はみんなでイネスに行く予定だった」
「なら、ちゃちゃっと準備してイネスに向かった方が良いだろ、それに今日は俺も予定がある」
「安芸先生とですか？」
「どうして安芸ちゃんとって発想になる」
「違うんですか？」
「違う」
「じゃあ誰なんですか？」
「少なくと、俺個人の用だな」
　不知火先生個人の用時…　かなり気になる
「ほれ、とっとと帰って準備したほうが良いんじゃないのか？」
「…　そうですね、そうします」

「って事が今日あってさ」
「へぇ…　というか徹って不知火先生と特訓してたんだ」
「やえくんも頑張ってるんだね～」
「それにしても気になるわね…　不知火先生は秘密も多そうだし」
「まぁそれは置いといて…　ジェラート食べようぜ！」
「そうだな、そうするか」
　それからジェラートを食べながら、何処に行くかを話し合った結果。全員の意見が一致したという事で本屋に行くことになった。なんの変哲の無い日常だったが、ホントに今日も平和だなぁ

平和な休日を過ごした翌日の神樹館、その休み時間。俺達四人は黒板を使ってお絵描きに興じていた
「須美のそれ、なんだ…？」
「翔鶴型航空母艦の二番艦、瑞鶴よ！」
「ガチすぎるだろ！」
「でしょう!?　旧世紀…昭和の時代に数々の戦いで活躍した我が国の空母よ！　囮になって最後の最後まで頑張ったの！」
「須美ってそういうのやたら詳しいよな」
「夢は歴史学者さんだから」
「真面目か！」
「結構須美っぽいぞ」
　他の子たちは宇宙飛行士とか警察官と言っている中で歴史学者なのが実に須美っぽいというかなんというか、反応に困る
「三人は何か夢があるの？」
「私は～…小説家とかいいなって思って、時々サイトに投稿したりしてるんだよ」
「あー、なんか納得」
「独特の感性だものね」
「俺は良いと思うぞ？」
　小説家ってのは園子に合ってる気がする、そうなったら締め切りとか守れるのだろうかとも思ったがマイペースなだけでしっかりしているし何だかんだで園子は大丈夫な気がする
「徹は？」
「そうだなぁ…ありきたりな気がするけど警察官とか？」
「へぇ、なんで？」
「やっぱ困ってる人を助けるって…なんかいいじゃん？」
「わかる！　アタシも幼稚園の頃は皆や家族を守る美少女戦士になりたかったなぁ」
「じゃあ、今は？」

「え？　…　あー、うん、へへ…」
「なんで照れるの？」
　園子がそう言うと目に見えて照れ始めていたが一度呼吸を整え、もじもじしながら話始めた
「いやぁ、家族って良いもんだから。普通に家庭を持つのもアリかなって…？　つ、つまり…お、お嫁…さん…？」
　やはり照れっぱなしながら銀がそう言うと須美と園子は三人でくっついてじゃれ合っていた。銀の方もめっちゃ照れているのを見ると、何か分からないが…よく分からないものに目覚めそうになる気がする

　夢に語ってよく分からないものに目覚めかけた翌日の事、もうすぐオリエンテーションと言う事もあり、安芸先生から六年生としての自覚をしっかり持つようにと言う注意を受け、俺達四人は園子の机の近くに椅子を集めてオリエンテーションについて話していた
「オリエンテーションって何をするんだっけ？」
「一年生と一緒に楽しく遊ぼうってことじゃない？」
「どうなんだろう、鬼ごっことかかくれんぼとかすればいいんじゃないの？」
「…　相手は真っ白な一年生、であれば…！」
　なーんか須美に変なスイッチ入ってる気がする
「将来を見越して愛国心の強い子供達を育成することも私達の任務の一環と言えるわね！」
「言えるか？」
「言えないと思うぞ？」
「なんだか楽しそう～、それじゃあ、早速計画を立てよう～…　あれ？」
　そういった園子は机の中からノートを取り出そうとしていたようだが、俺達の前に出てきたのは園子のノートではなく一枚の手紙だった

「引き出しに手紙が入ってたよ、なんだろ?」
「果たし状か!?」
「不幸の手紙かも知れないわ！　気を付けて!!」
「いや、そうはならんやろ」
「えーとぉ、最近、気が付けば貴方を見ています」
「やっぱり決闘か！　場所は何処だ！」
　彼女たちの思考回路はどうなってしまっているのだろう、勇者のお役目でついにぶっ壊れたのだろうか
「私は貴方と仲良くなりたいです」
「須美、取り合えず塩はしまおう」
　というか何処から塩を出した、そしてなぜ塩を学校に持ち込んでいる
「お役目で大変だと思いますが、だからこそ支えになりたいです…だって」
　手紙の内容を聞いていくうちにどんどん赤くなっていった銀は内容を聞き終えると、あたふたながら話を始めた
「も…　もももしや、これって…　あれじゃないか!?　あ、頭にラのつく」
「羅漢像!?」
「須美さんそれは、頭文字が〝ラ〟じゃなくて〝羅〟だね。羅だけどラじゃないね…　ラブレターでしょ」
「あぁ！　ラブレター…」
　須美さん、しばしのフリーズの後顔真っ赤になって慌て始める。そんな中園子はいつも調子で特に照れた様子はない
「そっかぁ、私ラブレター貰っちゃったんだぁ、嬉しいなぁ～」
「ななんでそんな落ち着いているの!?　こっここ恋文を貰ったのよ!?」
「字とか封筒とか見ればすぐわかるよ。出した人、女の子だよ?」
　その言葉を聞くと、銀は安心したような表情に変わり須美の方はそれはそれでも問題なのではみたいな表情をしていた、まぁ気持ちは分からなくないけど

ラブレター騒動があったその日、学校から帰って今日纏まったオリエンテーションでの自分の役割を予習していると、隣にある鷲尾家の庭でお炊き上げをしている須美の姿が見えました…　何があった

六．五話，日常―こぼれ話―

「よし、今日はここまでだな」
「終わりですか？」
「あぁ、休憩入れたって言ってもかれこれ一時間振りっぱなしだ。それにお前、今日は何か予定があるんじゃなかったか？」
「そうだった、今日はみんなでイネスに行く予定だった」
「なら、ちゃちゃっと準備してイネスに向かった方が良いだろ、それに今日は俺も予定がある」
「安芸先生とですか？」
「どうして安芸ちゃんとって発想になる」
「違うんですか？」
「違う」
「じゃあ誰なんですか？」
「少なくと、俺個人の用だな」
俺の方を見てる八重樫は随分と気になっているようだったが、今回に関してはほんとこいつらには関係ねぇ用事だからなぁ…まぁ時が来たら話せばいいか
「ほれ、とっとと帰って準備したほうが良いんじゃないのか？」
「…そうですね、そうします」

八重樫と別れた俺は、その足でそのまま花屋まで向かう
「こんちゃーっす、頼んでた花引き取りに来たんですけど」
「不知火さん、いつも御贔屓にして頂いてありがとうございます」
「ここの花屋は無茶な要望も聞いてくれますからねぇ、ホント頼りにしてます」
「いつでも頼ってくださいな。花は注文の通りでいいんだよね？」
「はい、ありがとうございます」
「それじゃあこれ、いつもの花束が九つね」
花屋のおばちゃんから花束を受け取った俺は、その足で瀬戸大橋記念公園…その中にある英霊之碑まで向かう

　此処には相変わらず人はおらず閑散とした雰囲気だが、その雰囲気が俺は嫌いじゃなかった
「よお、また暇を潰しに来たぜ」
　誰に対してでもないその言葉に、自分で笑うと一番手前の石碑まで降りて花束を供えていく。そこに書かれている名前は　乃木若葉・上里ひなた・伊予島杏・土居球子・高嶋友奈・郡千景…　そして白鳥歌野。どの名前も俺にとっては縁の深い名前だ、それ以外にも赤嶺や弥勒等、関わりのあった人たちの石碑前に花を供えると、若葉たちの名前が書かれている石碑の前に胡坐をかいて座る
「今日お前らの所に来たのはいつも通りの近況報告って奴だ…　もしかしたらどっかで見てるかも知れねぇが、今代の勇者は小学生が三人だ。後は珍しく護人もいるな」
　それから俺が彼女たちの前で話したのは、今代の勇者たちの活躍とここ最近俺が何をしていたのか
「そういえば、言い忘れてたけど事務所移転したんだよ。長くは持った方で築三百年とか言うバカみたいな間、俺の家兼事務所だったわけだが流石に老朽化で危険だからって移転することになっちまったよ」
　西暦の勇者だけでなくそこに住む町の人々、若葉たちがバトンを繋いできた人たちとの思い出が詰まった事務所だったが。流石に老朽化の波には逆らえなかったようでだいぶガタが来ていた…　住んでいた俺も直し直しであった為、きっと良い機会なのだろう
「でも…　なんか丸亀を離れる気にならなくてな、やっぱり事務所を構えるなら丸亀じゃないとって事で、今はここら辺に借りてる仮の家を事務所代わりに適度に頑張ってるよ」
　この場所に来ると、どうにも悲しいというか…　何処かやるせない気持ちになっちまうからいけねぇなとか思いつつも、それと同時に懐かしい気持ちになっちまう以上やはりここに定期的には来たくなるのが不思議だ
「さてと、近況報告も終わったし俺はそろそろ帰るわ…　丁度、お客さんも来たみたいだしな」

そう言って俺が階段の方を見ると、巫女服を着た少女が一人立っていた。漆色の髪が特徴のその少女はゆっくりと若葉たちの石碑の前までやってくると花束を置き手を合わせる。その様子を無言で見ていると、手を合わせ終わった少女はゆっくりと俺の方を向く
「お久しぶりです、要様」
「様はやめてくれ、ひより。いつも通りさん付けで良い」
「今はお仕事中ですから」
そう言って何処か懐かしい笑みを浮かべてくる少女の名は〝上里ひより〟…ひなたの子孫であると同時に、上里家の現当主でもある
「そうか、それにしても珍しいな。仕事でここに来るなんて」
「ご先祖様には申し訳ないと思いますが、本当に用があるのは要様に対してなんです」
「俺に…用？」
「はい、要様にお伝えしなければならないことがあります」
真剣に俺の方を見つめるひよりを見ていると、心がざわつくのを感じる…遠い昔、西暦時代に侵攻が起こった時と同じざわつきだ
「…聞かせてくれ」
「巫女の一人が、神樹様から神託を受け取りました…まもなく、勇者様に危機が訪れると」
「危機？…それをあの子達には伝えたのか？」
「いいえ、私を除いた大赦上層部は勇者様たちに不安を与えないようにと、この事実を伏せています」
「またいつもの秘匿体質が出たか…そこは仕方ない。最悪俺の口から勝手に伝えさせてもらう」
「具体的な情報は分かりませんが、上里家当主として、要様の判断を信じます」
「…ほんと、ひなたに似てきたな」
「誉め言葉として受け取っておきますね」
ホント、上里家っていうのはどうしてこうもやたら頼もしいのかね、まぁそれはこの際どうでもいい

「伝えたいことってのはそれか？」
「はい、今回伝えなければならなかった要件は済みました」
「わかった、神託の件はひとまずこっちで預かって安芸ちゃんと相談してみる」
「よろしくお願いします」
「あぁ、合点承知だ…　それじゃ、俺はもう帰る」
「…　あの！」
　来た道を戻り、帰ろうと歩き出した瞬間ひより止められる
「まだ何かあるのか」
「これは…　これは上里家当主としてではなく、一人の人間、上里ひよりとしてのお願いです」
「……」
「もしもの時は、勇者様たちを…　園子ちゃん達の事を助けてあげてください、あの子の悲しむ顔、見たくないですから」
「……　それは依頼か？」
「はい、上里ひよりから不知火要さんに依頼します」
「なら、その依頼引き受けた…　だが、条件がある」
「…　なんですか？」
「俺はあくまであの子達に判断を優先する、それと隠し事はなし。この二つが条件だが、構わないか？」
　その言葉をきいたひよりは少し考えたような表情をするがすぐに何かを決意した表情で俺の方を向く
「構いません」
「分かった、それなら後は任せろ」
　ひよりからの依頼を受けると、俺は英霊之碑を後にする。あの場所で依頼を受けてしまった以上、どれだけ時間がかかったとしても俺はこの依頼を完遂しなければいけなくなった…　これは誰に言われたでもない、たった一人の勝手な誓いだ
「とりあえず安芸ちゃんに神託の事話して…　後は、最悪に備えて鍛え直しておくか」
　そういいながら見上げた空は、あの頃から変わることのないクソみ

てえな青空だった

七話，日常　／　遠足

「夏だ！」
「プールだ！」
「「そして水着だ！」」
「貴方たち浮かれすぎじゃない・・・？」
「・・・熱い」
　晴れ渡る空、照り付ける太陽、耳に聞こえてくるセミの声・・・熱い
「いーじゃんか、せっかく遊びに来てるんだし。須美こそいつまで準備体操してるのさ」
「準備体操は大事よ、水の事故って怖いんだから」
「それで・・・徹はどうした」
「実は俺、熱いのダメなんだ」
「そうなんだ・・・」
　一人で地面で伸びていると、園子が俺達に話しかけてきた
「ねぇねぇ、もし今敵が来たら私たちって水着で戦うの？」
「それは嫌だよなぁ、まぁイレギュラーなんてそうそう起こらないだろうけど」
「ちょっと銀！　一体目だって早く来たのだから気を緩めちゃ駄目よ」
「へいへい・・・っていうかさ、須美って実は高校生くらいじゃね？」
「もっといってるね～、大学生くらいかも」
　この二人が須美の何処を言っているのかは触れないで置いて。俺は一人でのろのろと日影に退散している間に銀と須美の二人はバカみたいな速度で競争していた・・・俺が癒えた義理じゃないんだが、この後オリエンテーションの準備があるのに、大丈夫か？

　結果から言うと、ダメでした
　四人で椅子を並べて座っている銀は現在机の上でぐでっとしている、やはりプールで遊びまくったのが原因だろう、一方の須美は意外に疲れた様子はない。遊んでいたといってもある程度セーブはして

いたのだろう、そこらへんは流石須美と言ったところか
「当日は楽しみだねぇ」
「・・・ありがとう、みんなのお陰で最高のオリエンテーションになるわ」
とりあえず明日のオリエンテーションで行う出し物の準備は出来た、少し不安だが子供たちは喜んでくれるだろう

オリエンテーション当日、とりあえず俺は音響担当と言う事でラジカセ片手に待機をする、内容は確認済みだし俺はひたすらカセットを再生するだけだ
「大変だ！　海の向こうから悪い怪獣が攻めてくるぞ！　君ならどうする!?」
とりあえず、通常のＢＧＭを流す
「逃げる～・・・」
「それだと怪獣にここを取られちゃうよ?」
「えっと、たたかう！」
「そう！　アタシたちには神樹様がついてる！　勇気を出して戦いましょう！」
会場のボルテージが良い感じにあったまってきたところで銀が入口の方に手を向ける、そこに見えたのは二人の人影・・・そう、彼女たちの名は！
「国防仮面と一緒に！」
「国を護れと人が呼ぶ・・・愛を護れと叫んでる」
「国防仮面、見参！」
教室の中に入ってきたのは、須美と園子・・・ではなく国防仮面一号と二号、子供たちの声援が聞こえる以上やっぱりヒーローショーって人気なんだな
「さぁみんな！」
「声を揃えて――」
「富国強兵～!!」

「すばらしいわ、もう一度！」
　これで本当に良いのか？　なんて考えてたら、やっぱダメだった見たいですね、安芸先生の姿が見えた段階で諦めた・・・　一応何か救いは無いかとあたりを見回すと不知火先生の姿が見えたから視線で助けを求めるけど首を横に振られる、やっぱダメかぁ

　それから数日の時が流れいよいよ遠足が近づいた昼休み、給食を食べ終わった俺達三人の元に須美がクソ分厚いプリントの束を渡してくる
「三人には、これを渡しておきたくて」
「……　須美さん、ナンすかこれ」
「・・・　銀、そりゃしおりだろ・・・　そう書いてある」
「その通り、私達の班の遠足のしおりよ、銀。データ版は今、二人の端末に送っておいたわ」
　相変わらず、楽しみなことに対する熱意は半端じゃない、それが鷲尾須美だった事を最近はすっかり忘れていた
「オフゥ。これ、わざわざ作ったんか須美さん」
「遠足……　楽しんでいいと思うと、少し張り切って夜更かししてしまって。予定よりずいぶん量が増えてしまったわ」
「わっしーは凝り性さんというか、のめり込むタイプだよね～」
「・・・　将来、須美の旦那になるやつは苦労するだろうなぁ」
「それなら心配ないだろ、最有力候補がここに居るし」
「そうだね～」
「なっ!!　二人ともッ！　きゅ、急に何をッ!!」
「急にどうした？」
「なんでもないわ!!」
「そ、そう・・・？」
　今日の須美は今まで以上に感情のふり幅が激しい気がする、まぁ寝不足みたいだし仕方ないかなどと考えていると銀が俺の方を呆れた目で見ていた

「どうした？」
「いや別に」
よく分かんないなぁほんと
「と、とにかく。これを活用して準備を済ませておきましょ…遅れたら、お灸よ」
「そういうの何処に売ってるの…？」
「そりゃ、イネスだろ…」
「そうね、イネスよ」
「ナイスイネス！」
あそこ基本何でも売ってからなぁ、お灸専門店とかあっても不思議じゃないか

そして迎えた遠足の日、俺達が訪れたのは街から少し離れた所にある公園。国内最大級の庭園や裏山にあるアスレチック等が目玉のスポットだ、流石観光地と言う事もあり俺も何度か来たことはあるがやはりテンションは上がるな
俺達四人がやって来たのはアスレチックコース、先陣を切った銀が軽やかな足取りでアスレチックを制覇していく
「銀ちゃんすごーい！」
「ありがとう」
「たまにはこういうのも面白いわね」
「そうだな」
「やっぱ勇者としては身体を動かしていかないとな」
「ちょっと待って～」
俺たちも銀の後に続き、アスレチックを制覇すると銀が笑顔で言ってくると俺たちの後ろから園子の声が聞こえてきたからそっちを向くと、園子はパンダのようにタイヤにぶら下がっていた
「三人とも早いよ～」
半泣きになっていた園子を二人で救助すると、四人で次のアスレチックまで向かう

「よし、次はあれだ！」
「あ、いたいた。銀ちゃんちょっといい？」
　次のアスレチックに向かおうとした銀に話しかけてきた女の子の方に行くと、どうやらサインを求められたらしい
「妹がね、大きなお役目についてる銀ちゃんに憧れてるみたいで」
「そ、そうか…　私ももう、サインする側だったのか」
　やたらテンションの高い銀に少し不安を感じながらも四人でアスレチックの前にやってくると前と同じように銀が先陣をきる
「いやー、楽勝楽勝！　アスレチックくらいじゃ簡単すぎるな」
「ちょっと銀！　気を付けないと危ないわよ」
「大丈夫大丈夫、このくらい片手だって――」
　そういったタイミングで縄を掴んでいた方の腕が離れ、地面に向かって落下してくる、すぐに気づいた俺達三人が大勢を崩しながら受け止めると、須美は厳しい口調で銀に話しかける
「銀、楽しいのは分かるけど浮つきすぎよ。お役目の重さをよく考えて」
「ごめん…　そして、反省します！　口数を減らします！」
　一応須美の言葉が通じたのだと信じたいが、昼食時になると銀はいつもの調子に戻っていた
「ふおぉぉ、これ絶対うまいやつだ！　うまいやつだよ！」
「口数減らすんじゃなかったの」
「ミノさんはわんぱくだねぇ」
「そのっちも中々だと思うんだけど」
「まぁ楽しければいいんじゃないか？」
「それは、そうだけど」
「そういえば、わっしー虫苦手なんだっけ？」
「ちょっとだけ」
「大丈夫だよ！　仲良くなれるから！」
「そ、そうかしら…」
　園子の方を見た須美の目に入ったのは大量のカブトムシに止まられ、カブトムシの怪人と化した園子の姿だった。それに別のナニカを

幻視したであろう須美は声にならない悲鳴を上げながら倒れ、俺も声が出るまでもなく意識を手放した

　ぶっ倒れた俺達二人が起きたころには、銀の手によって焼きそばは完成しており三人分全員分が更に盛られていた為。全員揃って手を合わせる

「「「いただきます」」」

　しっかりと挨拶をした俺達は各々焼きそばを一口食べる…　うまい、麺とソースはしっかりと絡まっているし野菜や肉の分量も適量。語彙力がなくなるほどにうまい

「うまいっ！　これはカブト味だな」

「焼いてないから！」

「入ってたら大問題だよ」

「このお肉おいしい～」

「園子ならもっといい肉食べてるんじゃないの？」

「このお肉がいいの～……　はぁーーっ」

「なんだなんだ？　忙しい奴だな」

　お前がそれを言うのか

「わっしーもミノさんもお料理出来るのに、私だけなんにもできないなって…　ふと自分が恥ずかしくなったんよ」

「それなら徹も料理出来ないだろ」

「…　俺は料理出来るぞ？」

「うそっ!?」

「本当よ、銀」

「八重樫は元々大赦の要人に仕えるのが仕事だからな。家事全般小さい頃から叩き込まれてるんだよ…　適正を持ってる俺は例外になっちまったけどさ」

　八重樫家はもとより、乃木や上里等初代勇者の家系うぃはじめとした重要な家系に仕えるのが生業だった。護人の適正が無ければ俺だってどこかの家系に仕えることになっていたと思う…　まぁその性質上俺は小さい頃から掃除、洗濯、料理、護身術等主の為に必要な

技術や礼儀作法は叩き込まれているのだ。最も身についてるのは技術だけで礼儀作法はさっぱりだが
「はぁーーーっ」
「だ、大丈夫よ！　焼きそばくらいすぐ作れるわ！」
「じゃあ次の日曜、みんなで教えて！」
「お安い御用だ！」
「後、やえくんのお料理も食べてみたい」
「任せろ、絶対うまいって言わせてやるからな」

何事も無く時間は進んでいき、俺達は高台の上から住んでいる街の風景を見ていた
「アタシたちの街あっちの方かな？」
「えぇ、あっちで合ってるわ」
訂正、正確には俺たちの住んでいる街を探している…　だった
「大橋やイネスは流石に見えないな」
「ミノさんはほんとイネス好きだねぇ」
「イネスはいいぞ！　なんたって――」
「『中に公民館まであるんだから』」
「もう完全に読まれてるな…」
銀がそう言うと須美は少し得意げな顔を見せる、それを見た銀は須美の方を見ると自分も少し得意げになり言った
「アタシだって、須美については説明書をかけるくらい詳しくなったぞ？」
「あら、最初のページにはなんて書いてあるのかしら？」
「けっこう大変な品物ですのでくれぐれもご注意ください」
「っつ…　確かにそうだな」
銀の言葉に俺が吹き出し反応をすると、須美は少しだけ不満そうな顔を俺たちに向ける
「めんどくさい人みたいな言われ方ね…　否定できないけど」
「いいじゃん、奥行きがあって。私なんて新聞のチラシ並みにぺらいぞ、きっと」

「そんなことないわよ、わかりやすくはあるけど書くことはいーっぱいあるわ」
　そう言うと、須美は明るい口調で銀に言う
「これからも色々な一面を暴いていこうと思うわ」
「お手柔らかに頼むよ…」
「実は私、始めミノさんが苦手だったんだ…」
「おぉい！　いきなり酷いな！」
　少し離れていた園子が銀の肩をぽんっと叩くとそういった
「えぇ、私も同じよ」
「そうか？　俺はそうでもなかったが」
「それは徹くんが銀と似たもの同士だからよ」
「スポーツ出来て、明るくて…　なんだか種族が違う気がして。でも、話してみたらこんなにいい人なんだもん。わっしーもいいキャラしてるし、やえくんも見てて面白いし」
「私はキャラなの!?」
「見てて面白いってどういうことだ!?」
「よく一人で百面相してるところとか～」
「マジか、そんなに顔に出てる？」
「確かに、結構わかりやすいかも」
「マジか…」
　そんなやり取りをしていると俺の方を見ていた銀が笑いながら言う
「確かに話してみないとわからないよな、こういうのは。気にってもらえてよかった…　須美、園子、徹、これからもダチ公としてよろしく」
「「こちらこそ！」」
　銀の差し出してきた俺達は手を重ね、そう言った

　遠足の帰り道、俺達四人は分かれ道に辿り着くまでの道を歩いていると、空を見ながら銀が話始めた

「は～楽しかった！　毎日が遠足ならいいのにな！」
「それ賛成～！」
「俺は反対だな、こういうのは物珍しいから良いのだとひい爺ちゃんも言っていた」
「もう、転ぶわよ！　銀！」

そういいながら四人で歩いていると、須美が銀の事を注意する……その瞬間、俺達以外のすべてが静止する
「これって…」
「あぁ、敵だ！」
「も～せっかく楽しい遠足だったのに」
「遠足終わった後に来ただけ、まだマシじゃん？」
いつもと変わらないように感じるが、今回だけはどうしても不安をぬぐうことが出来ない、それは須美も同じだったようで何処か不安そうな表情を浮かべていた
きっと今回の戦闘を知らせる鈴の音は、俺達にとって不吉な何かを暗示しているように感じていたのだろうと思う

八話，分岐点

時は遡り遠足の数日前、俺は神樹館から徒歩数分の場所にある喫茶店で安芸ちゃんの事を待っていた。理由はこの前ひよりから言われた神託についてを安芸ちゃんと話話し合う為だ

「お待たせしました」

「いや、そこまで待ってない。何か頼むか？」

「それじゃあ、コーヒーを」

安芸ちゃんが席に座ると、俺は店主にコーヒーを頼む。マスターは程なくコーヒーを持ってくると安芸ちゃんの前に置き、カウンターまで戻っていく

「それで、要さん…　話って？」

「この前の休み、ひよりと会った」

「ひよりって…　上里家の？」

「あぁ、その時に言われたことについて、安芸ちゃんに話しておきたくてな」

そこから俺が安芸ちゃんに神託の事を話す

「ひよりが受けた神託だが、勇者たちに危機が訪れるとの事だ、これは聞いてるか？」

「…　いえ、この場で初めて聞きました」

「そうか、まぁ勇者たちに不安を与えられないように情報を止められているのは仕方ないか」

「今日はそのことについて？」

「あぁ、もし今後の戦いで死にそうになった場合俺が手助けする事を伝えておこうと思ってな」

「分かりました、もしもの時はよろしくお願いします」

「ひよりからもあいつらを助けてやってくれって依頼を貰ってる、だから基本的にあの子たちの判断に任せるが絶対に死なせない」

「お願いします」

それから数日の時が流れ、あの子達が楽しみにしてたらしい遠足の

日・・・バーテックスの襲撃が起こった

　樹海化の波に飲み込まれた俺達はいつものように大橋の前で敵を待ち構える
「だんだんこの光景にも慣れてきたなぁ」
「油断しないように銀。そういう時が」
「一番危ない、でしょ？　分かってる須美」
「なんだかミノさん、最近わっしーに注意されるような発言を、わざとしてるみたい～」
「あはは、なんだか癖になってさ」
「勘弁してほしいわ」
　三人はそう言っているだけだが、今回はどうにも不安がぬぐえない
「どうかしたの、徹？」
「・・・いや、なんか胸騒ぎがしてさ」
「！　来たよ～。え、えぇぇぇぇぇ!!」
　須美にそう返してすぐに園子が敵が来た事を俺達知らせてすぐ後に絶叫が聞こえてくる。俺たちも敵の方を見ると今回せめてきらバーテックスは一体だけではなかった・・・目の前にいるバーテックスは二体。それが並び立ちこちらに向かってくる
「あちゃぁ、同時に二体・・・そうだよなぁ、律儀に一体ずつ来る必要ないよなぁ」
「バーテックスは単独行動が基本と聞いていたけれど・・・」
「今までが可笑しかっただけで・・・案外こういうイレギュラーの方が普通だったりするのかもな」
　今回で四度目の戦いだ、慣れてきたからか不安はあるが落ち着いている・・・きっと大丈夫だ
「驚いたけど、大丈夫だよ～。まずはミノさんといやえくんが一体ずつ相手をして、私は二人のサポート。わっしーは遊撃で援護してね。」
「流石ね、そのっち。了解！」

「じゃあアタシは気持ち悪い方と戦う！」
「どっちの敵も気持ち悪いと思うんだが・・・」
「だね～」
　銀の向かった方は尻尾に鋏のついている方だ。なら俺が向かうのはどことなくサソリっぽいほうに向かう。サソリの尻尾を避けながら動き、尻尾を切りつける
「変に小細工が無いからか、今までよりも戦いやすい！」
　銀の方も中々に順調なようでこの調子なら、押し切れると思う
「やえくん！　そっちの敵はやえくんに針を当てたいみたいだから気をつけて～！」
「了解！」
　武器に風を纏わせることで、敵の放ってくる攻撃を僅かに逸らすことが出来る。そうして敵の攻撃を避けつつ着実にダメージを与えていく
「よし、このまま――「上から何か来る！」ッ！」
　このまま押し切ろうとした瞬間、須美の声と同時に数千の矢が俺達に降り注いだ、園子は自身の槍を傘替わりに防、須美はその隣にギリギリで滑り込んだ。銀の方も巨大な斧を交差させて防ぎ、俺も疑似的に風のバリアを作り光の矢を防ぐ
　弓矢を何とか防いだ瞬間、俺達四人の身体に衝撃が走る。光の矢が降り注いでいる間に他の二体は再生し俺達に攻撃を仕掛けてきたみたいだ。まともに攻撃を受けた俺達の身体は宙に浮き、そのまま地面に叩きつけられる
「あ・・・　あぁっ・・・」
「げほっ、ごほっ・・・・・」
「た、立てるか・・・　須美、園子、徹・・・？」
「お、俺は・・・・・　何とか・・・」
　なんとか立ち上がった俺と銀の前に現れたのは三体のバーテックス、新たに現れた一体が光の矢を撃ってきた奴・・
「動けるのはアタシたちだけか・・・　こりゃ、とるべき道は一つだよな、徹」

「そうだな…　気合い入れるか」
　そう言って俺は須美を、銀は園子を抱えて敵の攻撃が当たらない樹海の影に二人を隠す
「よし、それじゃ行くか！」
「あぁ、いっちょ派手にぶちかますか」
「何言ってるの…　銀、徹くん…　こんな時に」
「どうするつもり…」
「勇者が逃げたら世界が終わっちゃうから、ここは頑張るっきゃなでしょ。ね、徹！」
「あぁ、世界を守るのが勇者で…　勇者を護るのが護人だから」
　そう言って銀が握っていた二人の手の上に俺の手を重ねる
「アタシたちに任せて二人は休んでてよ」
「それじゃあ――」
「そんじゃ――」
「またね　／　またな」
　気軽い別れの言葉を二人で済ませると、俺達は化け物どもの前に戻る
「さーてと、徹」
「なんだ？」
「背中…　預けとくね」
「なら、俺も背中を預けとく」
　俺たちは拳を軽く合わせた後、手に持った武器を握り直す
「ここは任せろと言った以上、責任持たないとカッコ悪いからね…　それじゃ、いっとくかァ！」
「あぁ、ド派手に行こうぜ！」
　俺達は弾丸のようにバーテックスに突っ込む、さっきの攻撃で俺達は痛手を負ってしまったがそれと同時に相手の間合いも把握した。それなら相手の間合いから自分の間合いに無理やり引き込んでぶん殴ればいいだけだ。そうしてダメージを着実に与えていくが、ダメージを受けたバーテックスを支援するように光の矢を放ってくる
「二度もッ！」

体中のバネを全力で使い銀の前までたどり着いた俺はチャクラムを交差させ風のバリアを形成する
「サンキュ！　徹！」
「このまま押し切れ火力ソース！」
光の矢がなくなったタイミングで風のバリアを解き、今度は武器に風を纏い敵を切りつけようとした瞬間、防いだはずの光の矢が戻ってきて俺たちの身体を切り裂いていく。何が起きたのかを理解できなかったが矢が降り注いできた先を見て、何が起きたのかを理解する
「まさか…　跳ね返した」
ダメージを受けて動きが鈍った隙をつかれ、反射板で弾かれた俺は地面に叩きつけられる。俺が叩きつけられるのと同時に銀も同様の攻撃を受けたようで隣に落ちてくるのが見えた。ボロボロの身体を引き摺りながら銀の元まで行き受け止めると二人でそのまま地面に倒れこむ
「…　銀……　大丈夫か？」
「きっついけど…　ここで根性見せないと…」
「そう…　だな、もうひと踏ん張り…」
そう言って起き上がろうと瞬間、足に力が入らなくなる。体中から出血し意識も少し朦朧とし始めた
「徹も…　辛い…　なら、須美たちと休んでていいんだぞ？」
「冗談…　この程度…」
口では強がっていても体は動かない、体中から血は出てるしなんか脇腹には穴が開いてる気がする
「が…　頑張らないと、俺達が」
「いや、お前らはもう十分頑張った。美味しいところを持っていくみたいで悪いが…　後は任せろ」
ボロボロの俺達を抱きかかえた人の事を、薄れゆく意識の中で見る
「しら…　ぬい…　せんせい？」
「遅れてすまなかったな。だが、お前達の根性…　俺にも伝わった。だから今は待ってろ、絶対死ぬなよ」
その言葉と共に俺は意識を手放した

少し離れていた距離を進み、俺が瀬戸大橋に辿り着いて頃には、酷い状態になっていた。最初に傷を負い寝かされている鷲尾と乃木を見つけ、それからバーテックスの方に行き二人よりもボロボロになり倒れている八重樫と三ノ輪の姿が目に入った。

「不甲斐ねぇな…　クソ野郎、大口叩いててこれか」

ボロボロの二人を鷲尾達の隣に寝かせた俺は、自分自身を責めるようにそう言った後一人で化け物三体の元に戻る。悠然と前に進み続けるその姿はあの戦いで見た時よりも完全なものになっているのが分かる

「久しぶりだな…　だが懐かしの再会をしてる訳にはいかねぇんだ。全力でぶっ潰す」

その言葉と共に血を使い槍を形成し、化け物どもに向かって走りだす。久々の戦いで少し体に違和感はあるが当時のように動くくらいなら何とかなりそうだ。

現在(いま)は西暦(むかし)のように共に戦(若葉)ってくれる人(たち)はいない、それなら俺の戦法は一つ…　死なないのを最大限利用して敵を叩き潰す、サソリ野郎が降ってきた尻尾に思い切り槍を突き刺すと尻尾を切り裂いたまま、サソリ野郎の胴体まで上がっていく

「まずは…　一匹！」

駆け上がった俺はそのままサソリ野郎の身体の中に槍を突き立て茨のように伸ばす。体内を食い破るように槍でサソリ野郎を引き裂いた瞬間、光の矢が俺に降り注いでくる、少し貰ったがそのまま地面に降りて瞬間、サソリ野郎はゆっくりと後退を始める

「回復力も前以上かよ…　つくづく己の火力不足を実感するねぇ」

適当にぼやきながら次のターゲットを光の矢を撃ってくる化け物に定めると武器の形状を鎌に変化させる

「…　鏖殺してやるよ、相手は二匹だがな」

光の矢を撃ってくる敵に対して俺は鎌を振るい矢を吹き飛ばしな

がら接近し、思い切り鎌をぶん投げる。回転しながら化け物に突き刺さったことを見ると、その地点に向かって跳ぶ

鎌の持ち手を足場にもう一度跳躍すると手の中に新たな槍を形成し化け物の上空から降下する、降下させながら槍の穂を巨大化させるとそのまま化け物を貫いた

「これで二体目、残り一体！」

槍を消して敵に突き刺さったままの鎌を引き抜くと化け物を足場に残り一体に向かって跳躍する。残り一体は尻尾の鋏を使って攻撃してくるが武器を鎌から旋刃盤に変え、旋刃盤を盾に攻撃を逸らすと逆の手にボウガンを出現させ、鋏の脆そうな部分に撃ち込み、その部分をマーカーに旋刃盤を巨大化させ、ぶん投げる。ぶん投げた旋刃盤は矢の突き刺さった地点にぶち当たり、鋏を破壊したのを走りながら確認する

鋏と言う攻撃手段を失った残り一体は反射板で攻撃を仕掛けてくる、一発目を避けながら武器を籠手に変化させると二発目を真正面からぶん殴りひびを入れると新たに刀を出現させ、反射板を足場にして一気に近づき上から下にかけてぶった切る

勇者たちと戦闘を続けた後に俺の連戦、化け物側も持久戦は危険と判断したのか完全に後退しきるのを確認すると樹海化が解かれ始めた

「急がないとな」

樹海化が解けたら急いで病院に連れて行って処置しないといけない程の重傷だった三ノ輪と八重樫の事を考えながら、俺は急いで勇者たちの元に向かった

九話，信じてみよう

目を覚ました俺がの目に入ったのは真っ白な天井、少しぼやけている意識の中、ここが何処なのかを探る為に身体を起こそうとするが、上手く力を入れることが出来ない。

「徹くんッ！　目が覚めたの!?」

天上を見ていると須美の声が聞こえてくる、顔を動かして声のした方を見ると少し涙目の須美がこっちに駆け寄ってくるのが見える

「…こ…ここは?」

「病院よ、本当に良かった…、目が覚めて」

「そうだ…銀は?」

「大丈夫、銀も生きてるわ」

「良かった…」

銀が生きている事にひとまず安心すると、少しずつ意識がはっきりとしてきた。はっきりとした頭であの戦いの事を思い出していくと、意識を失う瞬間の事を思い出した…あの時、俺が最後に聞いた声は不知火先生の声だ

「なぁ、須美…俺たちが意識を失った後。誰がバーテックスを撃退したんだ?」

「それは…」

「その事は俺が直接話す」

「…不知火先生」

声の聞こえてきた方向に視線を向けると、花束を持った不知火先生が立っていた

「花瓶に水を入れてくるから少し待ってろ」

俺が不知火先生に質問をする前に、先生は花瓶を持って病室を出ていってしまう。不知火先生が花瓶に水をいれに言っている間、須美にいくつか質問をしてみることにする

「そういえば、園子は?」

「そのっちは銀のところにいるわ、安芸先生も一緒」

「…銀も、意識は戻ったのか?」

「えぇ、傷の具合は徹くんより酷かったけど…　元気は有り余ってるみたい」
　そうか、銀も生きてるんだな…　本当に良かった。それから他愛のないことを話していると、花瓶に花を生けた不知火先生が戻ってきた。先生は備え付けの箪笥の上に花瓶を置くと、須美の隣に椅子を持ってきて腰をかける
「とりあえず、無事でよかった」
「…　俺もそう思います」
「それじゃ、何から話していくか」
「…　答えてくれるんですか？」
「あぁ…　と言っても答えられる範囲で、だけどな」
　答えられる範囲というのは少し引っかかるけど、とりあえず聞きたいことは一つだ
「俺達が意識を失った後、先生が助けてくれたんですか？」
「あぁ、俺が助けた」
「やっぱりそうだったんですね…　でも、どうして先生は樹海の中に？」
「具体的には言えないが、特異体質みたいなもんだ」
「特異体質…」
　特異体質…　それなら不知火先生は今まで樹海の中は居れていたって事になるんじゃないか？
「なら、俺達の今までの戦いも見てたんですか？」
「見てたよ…　見てて本当にヤバいと思ったら手助けするつもりだった」
　見守られてたんだ…　俺達
「こんなもんで良いか？」
「はい…　本当にありがとうございます、助けてくれて」
「気にすんな、こっちも頼まれてたからな」
「私からもありがとうございます。不知火先生」
「気にすんなって言ってんだろ？　それじゃ、俺はこの後予定があるからもう行く。しっかり体を休めろよ」

そう言うと不知火先生は病室から出ていく。少し話しただけなのに、妙に疲れた気がする
「ごめん須美、少し疲れたからもう一回寝る」
「わかったわ、おやすみなさい…　徹くん」
須美のその言葉を聞くと、俺は目を閉じて意識を手放した

「さてと、行くか」
八重樫の病室から出た俺は、携帯の画面を見た後…　病院の入口に向かって歩き出す
「あれ～、不知火先生だ～」
「不知火先生も八重樫君のお見舞いですか？」
「乃木に安芸ちゃんか。俺は見舞いの帰りだよ」
「安芸ちゃんはやめてください」
声のした方を見て、そこにいたのは安芸ちゃんと乃木の二人、乃木の手には果物の入った籠を持っているという事は、これから八重樫の所に向かうんだろう
「もう少し話たいところだが、これから用事があるから俺はもう帰らないといけないんだ」
「そんなに急ぎの用なんですか？」
「あぁ…　まぁ、ちょっとな」
少し言葉を濁していると、乃木は俺の方をじっと見てくる
「どうかしたのか？」
「不知火先生、何か隠しごとしてる？」
「…　別にしてないと思うが」
「そうかな～？」
「そうだよ…　それじゃあな」
これ以上深堀される前にそそくさと二人の前から退散する。今回の用事は隠す程のものでもないがそれでもいうのは何か違う気がする、病院から出た俺がそのまま向かう場所は大赦本部…　勇者システムの開発部門だ

大赦本部までやって来た俺は、入館カードを受付で見せそのまま開発室に向かい。扉を叩く
「どうぞ」
「邪魔するぞ」
「ようこそお越しくださいました、不知火さん」
俺の事を出迎えたのは勇者システムの開発主任である男…名前は〝伊予島冬馬〟
「それで、頼んどいた件…どうなった？」
「バリアの方はほとんど完成です、精霊を介して神樹様の力をお借りする事で勇者たちを保護するための障壁を張る…って形ですけどね」
「最後の一歩はやっぱり神樹か」
「えぇ、そもそも西暦の勇者システムから根本には神樹様の力が関わっていますからね」
「そりゃそうか…まぁ神樹の力と言えど勇者を護れるなら妥協するしかないか？」
「我々開発室一同これからも改良は続けていくつもりですけどね」
そこらへんはここの技術力を信じるしかないか…それで、問題はもう一つの方だ
「それでもう一つ…〝満開〟はどうなった」
「そっちは手詰まり…今のままだとどうしても勇者様たちは代償を払うことになります」
「…なら、実装は無理か」
「そうですね、いくら世界を守る為とは言え年端もいかない少女に犠牲を強いるのは…システムの改良はこっちでも進めてみます」
「頼んだ」
満開システム。若葉たちの使っていた切り札をベースに独自の進化を遂げた勇者達の新たな切り札。だがプロトタイプは使用者の事が考慮されていないのではと思うほど負担が酷く。一応完成したものも一度使用すると代償として身体機能のいずれかを神樹に供物と

して差し出す…　強力な力を使い大輪の花を咲かせ、いずれ花は散る。こんなものを勇者たちに使わせる訳にはいかない
「…　すみません不知火さん、少し席を外します」
「あぁ、こっちが急に来たんだ。俺の事は気にしなくていい」
　冬馬が席を外している間に改めて、目の前に置かれているバリアと満開システムの資料について目を通す。やはり人間の力だけで開発されていたプロトタイプよりも機能も安定性もしっかりしているが、それはあくまでバリアの話。満開はデメリットをどうにかしないと使い物にならないと考えた方が良いだろう
「戻ったのか…　って、どうかしたのか？」
　改善策を考えていると暗い顔の冬馬が戻ってくる、話しかけた俺に冬馬が言ってきたのは予想する事態の中で最悪のものだった
「勇者システムのアップデートが決まりました…　内容は、機能改修及び精霊バリアと満開の導入」
「…　本気で言ってるのか？」
「…　はい、この前の戦いで二人の重傷者を出してしまった事で、今まで楽観視していた上層部も事の重要性に気づいてしまった見たいです」
「マジかよ…」
　こんなことがあるのか、勇者たちが根性を見せた結果。最も実現してほしくなかった結果に繋がるなんて…　今回ばかりは流石の俺もこれ以上の不干渉を貫くわけにはいかなくなった
「何処に行くつもりですか？」
「決まってるだろ、殴ってでも上層部の意見を変えさせる」
「…　無駄です、現在の上層部は神樹様の事を狂信的に信仰している人がほとんど…　認識が変わったとしても満開の後遺症で神樹様に身体を奉げた勇者の事を神聖なものとして扱いかねない程に狂った人たちの集まりです」
「なら…　このまま黙って従えって言うのかッ!!　何も知らないあの子たちが神なんかの供物になるのを見逃せって言うのかッ!!　俺はそんな事を許容するために今日まで戦ってきたんじゃねぇッ!!」

頭に血が上った俺はそのまま、冬馬の胸ぐらを掴み壁に叩きつける
「落ち着いてください」
「落ち着けるわけねぇだろッ！」
「貴方が冷静さを失ってどうするんですかッ！」
そう言われた俺は、冬馬の事を離すと少しずつ熱くなっていた頭が冷えていくのを感じる
「…すまねぇ」
「いえ、僕も頭に血が上りそうだったので…不知火さんがキレてくれて少し助かりました」
「それで、どうするんだよ…下手に上層部の要求を突っぱねるとお前の首も飛ぶだろ」
冬馬は手を顎に当てて考えると、俺の方を向く
「不知火さん、上里さんから依頼を受けてますね」
「あぁ、もしもの時はあの子たちの事を助けてやってくれってな」
「その時に不知火さんは依頼に条件を付けた…それもあってますか？」
「あってるが、なんで知ってんだ？」
「上里家とは先祖からの付き合いですから、ご当主とも懇意にしてます…そこは置いといて、話の続きです」
「あぁ」
「貴方が言った条件の中にある〝勇者様たちの意思を尊重する〟という条件、今使わせてもらえませんか？」
「どういうことだ」
冬馬は尚も俺の方を真っすぐ見て言葉を続ける
「勇者様たちに精霊バリア、そして満開システムのデメリットを伝えてあげてください…そして彼女たちの出した結論を私達は尊重するんです」
「…もし、彼女たちがデメリットを知って尚、満開を使うと言ったら」
「その時は、私も覚悟を決めます。満開システムを実装したうえで改良を続ける。使わないと言ったら満開システムのデータを削除して

大赦とはおさらばですね」

満開を使って欲しくない…それは俺のエゴでしかない。もしかしたら俺が思っている以上に彼女たちが強くなっている可能性もある、だが

「不知火さん、あの子たちの選択を信じてみませんか？　…立場は違えど、勇者を支える者として」

「…そうだな、信じてみるか」

そうだな、信じてみよう…彼女たちの選択を、たとえそれがどんな結末になろうとも――

十話，選択

「不知火先生が俺達に用って・・・一体何なんだろうな」
「重要な話みたいだけれど」
「まぁ行ってみればいいんじゃない？」
「そうだね～」
あの戦いから二週間ほどの時間が流れ、すっかり元気になった俺達は不知火先生から呼び出しを受け神樹館の用務員室まで向かっていた。俺達の通ってる教室から用務員室は少し歩くことになるが、四人で一緒に歩いていけばそこまで長いって感じはしなかった。用務員室の前に到着した俺たちは扉をノックすると中から声が聞こえてきた
「開いてるぞ」
「「「失礼します」」」
「とりあえずソファにでも座って待っててくれ」
俺達が用務員室の中に入って一番最初に目に着いたのは、机の上に置かれた大量の書類だった、不知火先生はその書類を纏め終える座っている俺達の前にホッチキスで止められた４枚のプリントを差し出してくる
「これは？」
「今回の話で必要になってくるプリント、目を通すのは後で良いから俺の話しを聞いて欲しい」
そう言うと不知火先生は、いつも以上に真剣な目線を俺たちに向けてくる
「いいか、俺がこれから話すことはお前達にとって重要な事だ・・・だからよく考えて答えを出して欲しい」
「・・・わかりました」
俺達四人は不知火先生の言葉に頷くと、先生は話始める・・・その内容は俺達にとって予想もしていなかった事、勇者システムのアップデートで新しく実装される機能についてだった。最初に先生が話したのは精霊バリアと言うものだった。神樹様の力を借りて勇者を保

護するバリアを張る。これは俺たちにとっても安全に戦えるのだから大歓迎だったが問題はもう一つの方。〝満開〟…協力な力と引き換えに勇者の身体を神樹様に捧げるというものだった
「それは…俺達が生贄ってことですか?」
「言い方を変えると、そうなる…大赦の上層部は神樹様への供物になるのだから光栄な事って考えてるみたいだけどな」
「…今日はその話を私達にするために呼んだんですか?」
「厳密に言うと、少し違う」
そう言うと要さんはプリントを置いて、俺達の方を真っすぐ見る
「お前たちに決めて欲しい…満開システムを導入するか、しないのかを」
「…どういう、意味ですか?」
「言葉通りだ…システムを使うお前達の意思を聞きたいんだ」
「私たちが嫌だって言ったら、どうするの~?」
「満開に関する資料はすべて廃棄する」
俺達の意思…そんなことを急に言われても、答えを出す事なんて出来ない
「今すぐとは言わない…一週間後にもう一度お前らの意思を聞かせて欲しい」
そう言うと不知火先生は一人で用務員室を出て行った

不知火先生の話を聞いてから三日後、俺達四人はいつものように机をくっつけてこの前のことについてを話していた
「それで、みんなはどうするのか決まった?」
「…私は、まだ迷っているわ。体を供物になんて…」
「私も…やっぱりまだわかんない」
「うーん、よし!」
少し悩んでいた銀は腕をポンッと叩くと、笑顔で俺達に話しかける
「今日みんなで祭りいかない?」
「銀、急にどうしたの?」

「だってここ数日うだうだ悩んでても結論出ないだろ？　なら、みんなでパーッと遊んでから答えをださない？」
「…　そうだな、そうするか」
「うん、私も賛成～！」
「…　仕方ないわね」
「よし！　それじゃ今日の夕方に待ち合わせな！」
　そう言うと銀は足早に帰ってしまった
「俺達も帰ろうか」
「そうね」
「うん、かえろかえろ～」

　学校から帰ってきた俺は、両親に祭りに行くことを話すとあれよあれよと浴衣に着替えさせられてしまった。時間も丁度いいくらいなので両親に挨拶をして家を出ると、須美とばったり会った
「徹くんも浴衣なのね」
「あぁ、須美も…　やっぱり浴衣か」
「変…　かしら？」
「いや、似合ってると思う。須美は美人さんだから」
「もう、徹くんはそうやって…　まぁいいわ、行きましょう？」
　そういいながら須美が差し出してきた手を握ると二人で待ち合わせ場所まで向かう
「おっ、来たな二人とも」
　待ち合わせ場所に到着すると、既に銀は到着していたようで俺達に話しかけてくる。銀も須美や俺と同じように浴衣姿だった。オレンジ色の浴衣が銀によく似合ってると思う
「おまたせ～、遅れてごめんね～」
「いや、俺達も今着いた所だから」
「よし、全員揃った事だし、早速行こう！　今日は思いっきり楽しむぞー！」
「お～！」
　銀と園子はノリノリで歩きだすと、その後に続く形で俺と須美の二

人も歩き始める
「それにしても、今日はみんな気合い十分だね～」
「せっかくのお祭りだからね、全力で楽しまないと」
「・・・俺は私服でもよかったけど、母さんが無理やり」
「わ、私も親がこれを着て行けって」
「うんうん、ミノさんもやえくんもわっしーも良く似合ってるよ～、もうちょっと寄ってみようか～」
そういいながら園子は俺達の方にスマホを向けてくる、奴め俺達の事を写真に収めようとしているな
「こらこら、写真撮影は禁止よ」
「堅苦しい事言わなくてもいいじゃん、せっかくだしみんなで撮ろう」
銀はそう言うと俺と須美の事を抱き寄せて園子に向かってピースをすると、園子の方からパシャリと言う音が聞こえてきた。
「ありがと～、ミノさん」
「そうじゃなくて、園子もこっちに来るんだよっと」
「わわっ」
銀にお礼を言う園子の事もこっちに抱き寄せると、いつの間にか取り出してスマホを斜め上に掲げて俺達四人の事を写真に撮った
「これでよしっと、後でみんなのスマホにも写真送っとくよ」
「それじゃあ、私はその写真待ち受けにしちゃおう～」
「よし、それじゃ改めて出発だー！」
屋台の出ている場所までやってくると、四人で歩きながら屋台を見て回る
「チョコバナナとかりんご飴とか、もう定番過ぎて珍しくないよね～」
「その割には満喫しているみたいだけど」
「でも、お祭りの屋台とかで食べるのっていつもより美味しく感じるよな、なんでだろ」
「・・・銀は流石に食べすぎじゃないか？」
そう言ってみた銀の手の中には既に、屋台で買った数々の食べ物を持ちながら歩いていた
「いやぁ、自分で食べる用もあるけど弟たちへのお土産とかもあるん

だよ」
「そうなのか」
「むっ!?　何やらイケてる香り…　!?」
「ほんとか園子、何処だ！」
「こっち！」
「ちょっと、銀、そのっち！」
「俺達もいこう」
　走り去っていった二人を追っていくと串焼きを注文して、食べようとしている二人の姿が目に入った、近づいた所で目を輝かせた園子が懐から紙切れを取り出して串焼き屋の店主に見せてすぐ、園子の事を引き摺った銀が俺たちの方に戻ってくる
「何があったの…？」
「串焼きの余りのおいしさに感動した園子が串焼き屋を丸ごと買おうとした…」
「相変わらずと言うか…　何をするか分からないなこの子はほんとに」
「そうね…」
　ちょっとしたハプニングがあったものの、おおむね楽しんでいた俺達は射的屋台の前に居た、鎮座する景品の数々と対面する園子の前には山積みにされたコルク…　そのうちの一発をファンシーなニワトリのぬいぐるみに当てるが倒れる気配は一切ない
「ぬぅ～、ちょこざいな…　でも、まだまだストックは沢山あるんだよ…　！」
「おこづかい、見事に全部使い切ったわね」
「流石のアタシもこの使い方はビックリしたかな…」
「ある意味見習いたい行動力…　だけどな」
　それから園子は山積みにされたコルクの弾を的確に当てるが一向に倒れる気配はない
「あうぅぅ、なんてこったい」
　あっという間にコルクの弾は残り一発、その様子を後ろで見ていた俺達だったが須美が一歩前に出て園子に近寄っていく

「そのっち、あれが欲しいのね」
「うん、一等の鳥さん」
「そのっち、落ち着いて…　肩の力を抜いて」
　園子の横で一緒に銃を構えた須美は、園子に何をすれば良いのかを教えるように話を続ける
「銃の癖は見てたわ。調整は私に任せて」
　そう言うと須美は園子のサポートをするように一緒に銃を構える
「呼吸…　呼吸…　照準に集中して…　今！」
　その声と共に放たれたコルクの弾は鳥の眉間に直撃する
「あとは気合い！　徹くんと銀も一緒に！」
「えっ、はい！」
「はっ、はい！」
　まさかこっちにも飛び火するとは思わなかった為二人そろってビックリしたが、四人で気合いの念を鳥のぬいぐるみに向けて放つとグラグラ揺れたぬいぐるみはそのまま倒れ、落っこちた
「やったー！」
「凄いな…　気合い」
「確かに凄いな…　気合い」
「マジかよ…　こんなのコルク弾で倒せるわけないのに」
「それはどういう意味かしら…」
「あっ!?　いや…　あはは」
　ボソッと呟いただけのはずなのに、それを須美は聞き逃さなかったらしい。須美に睨まれたおっちゃんは苦笑いを浮かべながら園子にぬいぐるみを差し出してくる
「持っていきな、お嬢ちゃん」
「やったー！　やったねわっしー！」
「引き金を引いたのはそのっちよ」
　園子は手に入れたぬいぐるみをおっちゃんに差し出した
「そのキーホルダー四つとこれ、交換して！」

キーホルダー四つとぬいぐるみを交換してもらった園子から一人一個キーホルダーを受け取った俺達四人は須美の案内で花火の見える場所までやってきた
「ここからなら一番よく花火を見えるわ、穴場なの」
「下調べバッチリだね」
「えぇ、過去のブログから特定したの」
「あはは、須美ってそういうのほんと得意だよね」
「そういう部分は昔から変わらずだな」
そんなことを話していると、空に大輪の花が咲いた
「…　ありがとう」
声が聞こえた俺達が須美の方を向くと、須美はお揃いのキーホルダーを見せてきた
「そういえば言ってなかったっけ。ありがとね」
「…　ありがとな」
「私のほうこそ、ありがとね」
園子はそう言うと、花火が彩る空を見ながら言葉を続ける
「私、一緒に選ばれたのがみんなで良かった…　私ってほら、変な子じゃない？　だから、なかなか友達できなくて」
「…　そのっちは変なんかじゃない、素敵よ」
「そうだな、アタシと徹は突っ込む事しか出来ないから、園子が居てくれて本当に助かった」
「…　須美は融通が利かないからな、柔軟な発想力のある園子がいて本当に良かったと思うよ」
「徹くんの言葉は少し否定したいけど否定できない……　でも、私たちだから頑張れたのは事実よ、そのっち」
「…　うん！」
俺達四人は手を繋いで立ち上がると、空を見上げる
「…　そういえば、不知火先生のアレ、答えでた？」
「えぇ…　私は決めたわ」
「私もきめたよ」
「俺も…　決めた」

多分、俺達の出した結論は一緒だと思う…　何があってもこの絆は切れないって信じてるから。この選択を出来るんだ
「私…　二人と友達になれて良かった…　徹君が幼馴染で良かった」
「私も…　友達になれて良かった」
「アタシたちはこれから先もずっと友達、何があってもずっと…　だよね？」
「うん」

翌日、俺達四人は不知火先生と安芸先生に答えを告げる
「私たちは、満開を使います」
「…　本当に良いんだな？」
「俺達は守りたいものを守るために、この結論を出しました」
「…　わかった」
「ごめんなさい…　貴方達にこんな事を強いてしまって」
「気にしないで、安芸先生…　何があっても、私たちは絶対に帰ってくるから」
これが俺達の出した答え、大切なものを守るために…　大切な友達を失わない為に、力を使う
その結末がどんなものであろうと…　真っすぐ前に進むために

十一話，決戦

「これが、新しい勇者システム」
「なーんかそこまで変わった様子ないよな」
　俺達の決断から早くも二週間の時が流れ、アップデートの為に大赦に渡していたスマートフォンが帰ってきた所だ
「そりゃそうだ、変わったのは中で外は変化なし」
「そうなんですか？」
「あぁ…　それより、本当に分かってるよな」
「分かってます…　満開は最終手段。力を合わせて満開を使わなくても済むようにする！」
「その通り、分かってるなら大丈夫だ」
　俺と不知火先生が話を終えると今度は銀が手を挙げて質問する
「はい質問！　アップデート何か変わった所ってあるんですか？　満開とバリア以外で！」
「勇者服と武器も少しだけ新しくなってる筈だ…　その中でも特に変わってるのは鷲尾と乃木の勇者システムだな」
「えー！　アタシは!?」
「俺も変化なしですか…」
「三ノ輪はともかく護人システムにバリアと満開を搭載出来たのは奇跡に近いんだ、あんま言わないでくれ」
「奇跡って…　そうなんですか？」
「あぁ、バリアはともかく満開に関しては無垢な少女が使うこと前提で作られたからな…　正直は話、満開を使ったら何が起きるか一番分からないのはお前だ、八重樫」
　俺が使ったら何が起こるのか…　分からない
「それなら、私たちが力を合わせれば問題ナッシングだね～」
「頑張りましょう、皆で」
「アタシ達なら大丈夫！　きっと次の戦いもみんなで頑張れる！」
「そうだな…　みんなでがんば――」
　そう言った直後、世界が止まる

「言った直後からおいでなすったか」
「…　引率役みたいになるが、改めて言うぞ…　絶対に死ぬな、そして満開システムは可能な限り使うなよ」
「分かってます」

　樹海化の光が晴れると、俺達の目に映ったのは三体のバーテックス
「今度は四体か、ホントに総力戦って感じ」
「気を引き締めていきましょう…　みんなで帰る為に」
「うん、約束だね」
「あぁ、約束だな」
　四人で一緒に帰るという約束、それを果たすために俺たちは戦う。
そう決意した俺たちは勇者システムを起動する
「血闘（けっとう）、開始」
　システムを使って変身する俺たちの横で、不知火先生はそう呟くと
先生の周りに血が現れて鎧を形作っていく
「…　それが先生の？」
「あぁ…　お前達のとは、まったくの別物だがな」
「これが新しい勇者の力…」
「この子たちかわいい～」
「全然変わってないと思ったけど、結構変わってんじゃん」
　俺と先生が話している間に須美たち三人は新しい勇者システムを
感じているらしい、そういう俺もアップデートされた護人システムを
肌で感じていた。確かに今までよりも体に力が満ちるのを感じる
「それじゃあ、いつも通りアタシたちが――」
「待てッ！」
「先生、どうしたんですか？」
「奴らの周りを見ろ」
　そう言われた俺達は、バーテックスの周りを観察すると、いつもの
大きさとは別に小さいのがうじゃうじゃと湧いて出てきていた
「うわっ、なにあれ…」

「星屑…　ヒーローもので言う戦闘員みたいなもんだが、舐めてかかると痛い目見るから気を付けろ」
「妙に実感こもってますね、先生」
「経験談だッ！」
　そう言うと不知火先生はいつの間にか手に持っていたボウガンでバーテックスを狙撃するが、少し掠った程度で大ダメージを与えた様子はない
「やっぱ威力不足か」
「それなら、私が…　ッ！」
　今度は須美が手に持った銃で狙撃をすると今までなら怯む事のなかったバーテックスが一撃で沈める
「すごい…　ッ！」
「力を感じてる場合じゃねぇぞッ！」
　そう言うと不知火先生は俺達を抱えてその場を離れると、大規模な爆発が起こる
「何なんですか、あれッ!?」
「すっごい爆発～！」
「あの化け物どもの能力の一つだ、お前らも知ってるだろうがあいつら初見殺しが多いから気を付けろよ！」
　少し離れた場所で俺達を降ろした不知火先生は武器をボウガンから槍に持ち替えていた
「そのっち、どうするの」
「う～ん、一人だと危ないから二人一組で戦った方が良いと思う」
「そうだな、じゃあいつも通りアタシと園子、須美と徹で良いか？」
「ううん、今回はミノさんとわっしー、私とやえくんの方が良いと思う」
「そっか、わかった」
「それじゃあ…　行こう」
　俺達は二手に分かれてバーテックスと向かい合う
「園子、どうして今回はこの組み合わせなんだ？」
「わっしーの武器が弓矢から銃になったから今までよりずっとミノさ

んの事をサポートできるようになったと思うんだ。だからわっしーがミノさんを守って…　私はやえくんに背中を任せることにしたんだ～」
「そっか、分かった…　行くぞ！」
「うん！」
　俺と園子はこちらに迫ってくる星屑に攻撃を仕掛ける、本当に今までとは比較にならない程の力が出ているのを感じる、この調子ならとは思ったが俺の手の甲にある花の印が少しずつ色付いていくのも視界に入った
「これが満開ゲージ」
「やえくん、使おうとか思ってないよね？」
「思ってない、だから心配しなくても大丈夫だ」
　そうして戦い続けていると、攻撃を抜けた星屑の一体が俺に向かってぶつかってくるが、直前で星屑は障壁に阻まれ動きを止めていた
「やえくん大丈夫!?」
「あぁ、さっきのが精霊バリア」
「この子達って凄いんだね」
「あぁ…　だがキリがないな、ホントに」
　今は優勢だが、人数はこちらの方が圧倒的に少ない…　このままじゃあ。そう思った矢先須美たちの居る方から眩い光が俺たちの方まで見えてきた。そして俺たちの目の前で赤い大輪の華が…　咲いた
「あれは…　まさか」
「満開…」
「これが満開か！　この力なら…　いけるッ！」
　こっちまで銀の声が聞こえてくる、満開をした銀はそのまま周りにいる敵を一振りで殲滅していった
「満開の力…　あれが」
「出し惜しみをしてる場合じゃないか…」
「やえくん、待って！」
「いや、この場を切り抜ける為なら待たない！　…　いくぞ、満開！」

俺がその言葉を言うのと同時に、体に強大な力が入ってくるのを感じる、背に大輪の華を咲かせた俺の戦闘服は所々に鎧武者を思わせる甲冑が現れ。手に持ったチャクラムも通常の物より一回り巨大になっていた

「俺達の世界で好き勝手するなぁ！」

眼前の敵に向けてチャクラムを振るうと、チャクラムの巻き起こした風は巨大な竜巻となり星屑を巻き込み道を切り開いた

「行こう、園子！」

「…　わかった！」

園子の手を掴んだ俺は壁の近くで鎮座していた敵の元に向かっていると満開を使った状態の銀と、銀に抱えられている須美、そして色々な感情を混ぜ合わせた表情の不知火先生が合流する

「…　監督不行き届きだ、お前達に満開を使わせてしまうとは」

「満開を使ったのは俺たちの意思です。それにこれ一回切りですから」

「…　信用できないが、信じる。デカいのが来る！　お前らは左右に避けろ！」

「先生は!?」

「あのデカブツの火球は受け止め慣れてる、いいから行け！」

俺達が今までいた場所から離れた瞬間、神樹様を狙った火球があの巨大バーテックスから放たれた

「どんときタマえ！　意地でも受け切ってやる！」

不知火先生は武器を巨大な…　盾？　にすると火球を受け止める、それを見ながら俺達二人は雑魚を倒しながら巨大バーテックスの元に向かっていると、俺と銀の満開が解ける

満開が解けた瞬間、左腕の力が入らなくなり、手に持っていたチャクラムを落とす

「やえくん、どうしたの!?」

「左腕が急に動かなくなった…　銀は!?」

「アタシは右耳が急に聞こえなくなった！」

「これが満開の代償…」

「やえくん前！」
「しまッ・・・！」
園子の声で目の前に星屑の迫っていることに気付いた俺は咄嗟に
園子の事を突き飛ばすと目の前に迫っていた星屑の体当たりを喰ら
い地面に叩きつけられる
「わっしー・・・」
「・・・ええ、今度は私たちの番、だよね」
「「満開！」」
俺達二人の代わりに満開をした須美と園子は青と紫、二輪の巨大な
華を咲かせると巨大バーテックスの元に向かっていった
「大丈夫か、徹！」
「あぁ・・・それより銀、行けるよな」
「あったりまえよ！　ゲージもマックス！」
「それじゃあ、いくぞ！」
「「満開！」」
再び満開をした俺と銀も先行していた二人と合流する
「二人とも、また――！」
「お小言は後々ね！　今は目の前の敵を倒して帰ろう！」
その言葉と共に、俺達はまっすぐ戦い続ける、目の前の敵を倒して
帰る為に

とめどなく現れる目の前の敵を倒すために満開を使い続ける。俺
と銀は既に四回、園子は三回、そして須美は二回・・・不知火先生との
約束を破っちゃったことは後で謝ればいい。その為にも――
「帰るんだ・・・絶対にッ！」
その想いが繋がったのか、巨大バーテックスは少しずつ後退を始め
る
「よし、このまま――ッ！」
そのタイミングで俺たちの満開は解けてしまった。四回目満開で

俺が失ったのは左耳…　左腕、右目、そして内臓のどこかに続いて左耳…　軽傷で済んでるものの持っていくなら全部内蔵にしてほしかったなどと考えていると、その場にいた銀が意識を失い倒れこんだ
「銀ッ！」
「ミノさんッ！」
「銀ッ！　しっかりしろッ！」
　俺達がそう言うが銀は目を覚ます様子はない…　もしかして
「まさか、意識を…　そんな事あるのかよ」
「須美は、大丈夫か？」
「私は…　もう足が」
　この状況になったタイミングで、俺達とは別の所で戦ってた不知火先生が合流してくる
「不知火…　先生」
「…　すまない、お前達との約束…　守れなかった」
「それは…」
「それだけじゃない、ひよりや安芸ちゃんとした依頼も達成できなくなった…　ほんとに不甲斐ないな」
「それは違います、みんな…　自分で選んだんです」
「…　そうか」
「はい、先生は銀をお願いします。俺はあの大型を」
「そこは俺たちじゃないかな、やえくん？」
「園子…」
「私も行くわ、満開なら足が動かなくても二人のサポートくらいなら出来るから」
「須美…　わかった、行こう」
　俺たちは改めて不知火先生の方を向く、よくみると傷はないっぽいけど来てた服はもうボロボロだった
「今気づきましたけど、先生も結構無茶してますよね？」
「お前らには及ばないよ…　行ってこい」
「はい、行ってきます」
「「満…　開！」」

俺にとっては、五度目の満開・・・ ここまで来たらいくところまでいってやる。その想いで俺達三人は後退を始めた巨大バーテックスを追う。それを阻む形で他の二体がこちらに向かってくるが今は相手をしてる余裕はない！

「邪魔だぁぁぁぁぁぁ！」

片手でチャクラムを振るい目の前の敵を真っ二つにした後、園子が槍で串刺しにする

「何処かに、弱点は・・・」

「もしかして・・・」

「何か分かったのか？」

「うん、わっしー！ 大きいのの真ん中が弱点だと思う！」

「わかったわ！」

園子の言葉にうなづいた須美は、巨大バーテックスの中心に向けて一撃を放った瞬間、それを迎撃するように巨大バーテックスも火球を放ってきた。火球によって須美の一撃は飲み込まれこちらに向かってくる

「当てさせない、絶対にッ！」

二人の前に出た俺は風の結界を作りだしてバリアとの二重体勢で火球の侵攻を止める

「今のうちに二人は行けッ！」

「でも・・・ッ！」

「大丈夫だ、俺にはお前達がついてる・・・ それに、銀から教わった根性もあるからッ!!」

正直少しだけきつくなり始めたが、まだ耐えることは出来る。この間に二人であの巨大バーテックスを倒してくれれば・・・ それで終わりだ

「・・・ わかった」

「絶対にまた会おうな、約束だ」

「・・・ うん、約束」

「えぇ・・・ だから徹くんも絶対に」

「あぁ」

二人を見送りながら俺は目の前の火球と向き合う、正直このままだと押し返すどころかそろそろ体が限界を訴え始めた
「いやっ…　根性見せないとなぁッ!!」
その言葉を放った瞬間、パキリと言う音を立ててバリアにヒビが入り始める
「せめて…　少しでも威力を…」
その後も抑え続けたが、魂よりも先に悲鳴を上げたのは身体…　結界とバリアを砕かれた俺は…　いつの間にか破壊されていた大橋の上に落下する…　体が痛い…　少しずつ意識も朦朧としてくる…
結局、俺はここまでか
「……　その…　こ…　？」
その言葉を最後に俺は、意識を失った

十二話，終わりと始まり

目を覚まし、一番最初に映ったのは真っ白な天井
「ここは…？」
「目が覚めましたか」
「はい…えっと、貴方は」
「挨拶がまだでしたね。私は三好春信…大赦から派遣されてここに来ました」
「大赦…そうだ、戦いは！」
「戦いは君たちの勝利で終わりました…ですが」
「ですが…なんですか？」
「被害を抑えきることは…」
「そう…ですか」
試合に勝って勝負に負けた…とでも言えばいいんだろうか。左腕も動かず、俺は視界の半分が漆黒に染まっている
「起きたばかりでしょうが、今日は休んだ方がいい」
「…わかりました」
三好さんが出て行ったあと、俺は再び眠りに落ちる

目を覚ましてみると、時の進みは速いもので既に二週間の時が流れた。退院できるのはまだまだ先の用でまずはこの体になれる所から始めていかないといけないと診察してくれた先生が教えてくれた
いつものように視力の検査を終えた俺が病室に向かって歩いていると、右側に衝撃が走った
「あの…大丈夫ですか？」
「こっちこそすみません、俺…右目が見えてないんです」
「そうなんですか？」
「はい、そういえば君…名前は？」
「私は…東郷、美森」
「東郷さん…か、俺は八重樫徹ね、よろしく」

「よろしくお願いします」
　東郷美森さん…　なんだろう、どこか懐かしい気がする
「どうかしたんですか？」
「いや、なんか懐かしい気がしてさ」
「懐かしい？」
「えっと…　よく分かんないけど…　昔の知り合いに似てる、気がする」
「ふふっ、なにそれ」
「あぁ…　気にしないで、単なる気の所為だと思う」
「そうかしら…　私もそんな気がする」
　どうやら東郷さんも似たような感じだったらしい
「でも、俺達って今日初めて会ったんだよな」
「そうね…　今日が初めて」
　東郷さんも言っている通り、俺達が会ったのは今日が初めてのはずだ…　そんなことを考えていると、壁にかけてあった時計が目に入る
「あっ、ごめん…　俺、そろそろ病室に戻らないと」
「そうなの、ごめんなさい…　引き留めちゃって」
「いや、先にぶつかったのは俺のほうだし…　機会があったら絶対に埋め合わせするから」
　東郷さんにそう言うと、改めて病室に向けて歩き始めた…　ほんとにどうしてあんな風に感じたんだろうな。東郷さんみたいな知り合いは〃いなかった〃筈なんだけどな

　大赦によって瀬戸大橋跡地の合戦と命名された戦いの後…　俺は一人で大赦本部にやって来ていた。俺がここにやって来たのはあの戦いの後に回収した勇者システムと護人システムを返却するためだ
　本来ならこのシステムを返却するのは本人でなければならないが、三ノ輪は未だ意識が戻らず八重樫と鷲尾…　いや、東郷の二人は記憶を失っている。勇者として戦ったすべての記憶を失うか、大切な仲間

たちに関する記憶だけを失うかの違いはあれど、それでも今のままだと返すものも返せないだろう…そして乃木は、大赦によって祀られている

あの戦いの後、満開の代償によって戦闘不能になった三人の代わりに乃木は最後まで戦い続けた。世界の真実を知っても尚、大切な友達を守るために

「乃木以外の勇者システムと八重樫の護人システム、持ってきたぞ」

「ありがとうございます、不知火さん」

開発室に着いた俺は冬馬に三人分の端末を渡す

「すまなかったな、結局俺一人じゃ何もできなかった」

「俺は勇者たちの戦いがどういう感じなのかわかりませんから、叱咤も慰めもできませんよ」

「分かってる、ただ誰でもいいから謝りたかっただけだ」

「そうですよね…それじゃ、行きましょうか」

「行くって、あそこか」

「えぇ、他はみんな集まってますからね」

そう言うとシステムをアタッシュケースの中にしまった冬馬と共に開発室を出て次の目的地まで歩き始める、飽きるほど長い廊下を歩き豪華な扉の前までやってくると、冬馬は躊躇いなくその扉を開ける

「お待たせしました」

扉を開けると部屋の中にいたのはひよりに安芸ちゃん、そして春信の三人だ

「いえ、我々が早く来てしまっていただけですから」

春信のその声を聴きながら俺達二人も席に座ると、真剣な様子のひよりが話を始める

「今回はお集まりいただき、ありがとうございます」

「…集まったのは、何か大赦側に動きがあったって事で良いんだよな」

「はい、今回の戦いの後…神樹様により神託を受けました」

「いったいどのような神託が下ったのですか？」

「今回の戦いで天の神側は痛手を受けました。しばらくは襲ってくる

心配はありませんが一年後、二年後に再び神樹様を狙って攻めてくると言われています」
「…　それが切っ掛けで大赦内部も本格的に動きを始めると」
「その通りです、伊予島さん。先の戦闘のデータを」
「分かりました」
　冬馬は一緒に端末と一緒に持ってきたノートパソコンを操作して画面にバーテックスの情報を表示する
「伊予島さんに表示してもらったデータを見た大赦は、バーテックスを撃退ではなく撃滅させる方法を見つけたんです」
「あの巨大なバーテックスの真ん中に露出してた部分か」
　殆ど役に立たなかったあの戦闘で意識を失った三ノ輪の事を介抱しながら、攻撃をされた巨大バーテックス…　獅子座と呼称されている個体の中央部にある別のナニカを確かに確認した
「やはり要さんにも見えていたんですね…　その通り、大赦はあれをバーテックスの心臓部を〝御魂〟と名付け、その部分を中心にバーテックスを構成していることが判明したんです」
「その部分を破壊すればバーテックスは撃滅できる…　大赦はそう考えた。上里様、ここからは私が」
「お願いします、三好さん」
　そう言うと今度はひよりに変わって春信が話を始める
「バーテックス関係は今回の問題ではありません…　問題は、大赦上層部が精霊バリアと満開の搭載された勇者システムを有用と判断してしまった事です」
　その言葉を聞いた瞬間、今まで黙っていた安芸ちゃんが口を開いた
「先輩、それってあの子達の戦いを見たうえで判断したってことですか、あの結果を!?」
「…　安芸の言う通り、あの子達の戦いを見たうえで大赦上層部は判断した。俺も上里様の補佐として会議に出席したが、反対するよりも有用だと考える人の方が圧倒的に多かった」
「そんな…」
　満開システムを有用と考える…　神樹を崇拝する者達にとって、満

開を使えば使うほど、勇者の身体は奉げられ神性は増していく。おそらく上層部の連中はそう考えているのだろう
「俺と冬馬もここに呼ばれたってことは、話はここからが本番なんだろ？」
「その通りです、勇者システムに関して大赦は御魂を破壊できるように細かいチューンをしていく方針でまとまっているが・・・問題はシステムよりも勇者そのもの」
ここまで言われてようやく呼ばれた理由を理解することが出来た・・・四人中二人が戦闘不能になった以上、今戦えるのは二人になるがその二人も記憶を失った状態だ
「圧倒的に勇者の母数が少ない」
俺と春信の声が被る、やはりそうだったらしい
「不知火さんと声が被りましたが、言葉の通り・・・大赦が課題として挙げたのは勇者の不足。そして四国全土で少女たちの身体検査を行うことになりました」
「三好、それは勇者適正を計測する為で間違いないよな」
「それで間違いないよ、冬馬」
春信がそこまで話すと、改めてひよりが立ち上がる
「三好さんに話してもらったのはここまでの話・・・私達がこれから話すのは、これからの話です」
そこから俺たちが話した内容は、勇者システムについて・・・そして勇者たちをどうやってサポートしていくか、結論として出されたのは上層部には秘密として満開システムにはリミッターを付ける事。勇者が安易な気持ちで満開を使用しないよう、勇者の想いに呼応し満開を発動できるようにする事・・・もう一つは満開システムの後遺症を勇者に選ばれた子達に前もって教える事・・・これは他と比べると自由に動くことの出来る俺が行うことになった
そしてこの場で話し合ったことは大赦の上層部には極秘で行う事になる・・・まぁ最悪の場合俺が一人で責任を取るつもりだが、それは話さなくても別にいいだろう

長い入院生活も終わり、家に帰ると両親から引っ越しをすることを伝えられた
「引っ越すって、何処に？」
「讃州市よ、お仕事の都合でそっちに映らないといけなくなったの」
成る程、それで引っ越さないといけなくなったのか…　そこからはあれよあれよとことは進み二週間ほどで讃州市への引っ越しが完了した。新しい場所の空気も同じ四国だけあってうまいなぁ
そこから両親に言って家の周りを歩いていると、一軒の巨大な武家屋敷？　みたいな家を見つけた
「でっかい家だなぁ…」
「あら、八重樫くん？」
「えっ、あぁ、東郷さん…　どうしてここに？」
「どうしてって、私の家がここだからよ」
「ここが東郷さんの家!?　もしかして東郷さんって結構なお嬢様だったりする？」
「私は一般家庭の筈なんだけど…」
二人でそんなことを話していると隣の家から一人の少女が出てきた
「東郷さん！　…と、誰？」
「友奈ちゃん」
「えっと、初めまして。俺は八重樫徹っていいます」
「結城友奈です！　よろしくね！」
結城友奈…　凄いフレンドリーな子だなぁ
「徹くんは…　あっ、徹くんって呼んでいい？」
「大丈夫」
「良かった、じゃあ改めて。徹くんはどうしてここに？」
「実は今日讃州に引っ越してきたんだ」
「そうなんだ！　家はこの辺」
「一本先の通りだよ」

俺は一本先の通りを指さしながら、質問に答える
「そっか、それじゃあこれからよろしくね！　徹くん！」
「あぁ・・・よろしく、結城さん。それに東郷さんも」
「えぇ、これからよろしくね、八重樫くん」
俺は右手を差し出して、二人と握手をする。結城に続いて統合と握手をした瞬間、入院した時から止まっていた時間が動き出した・・・・・
そんな気がした

神世紀３００　―結城友奈は勇者である―
第壱話　慎ましい幸せ

『昔々、ある所に勇者がいました。勇者は人々に嫌がらせを続ける魔王を説得するための旅を続けています』

　俺たちがいる場所は幼稚園、何をしているのかというと・・・人形劇である

『そしてついに勇者は勇者は魔王の城に辿り着きました』

　舞台は大詰め、勇者と魔王の対面シーン・・・子供たちも中々に盛り上がっている

「やっとここまで辿り着いたぞ、魔王！　もう悪いことはやめるんだ！」

「わしを怖がって悪者扱い始めたのは村人たちのほうではないか」

「だからと言って嫌がらせは良くない！　話し合えばわかるよ！」

「話し合えばまた悪者扱いされる！」

「君を悪者なんかに・・・しない！」

　そう言ったタイミングで部隊が倒れ、人形を操作していた二人が子供たちに対して丸見えになる

「し、しまった・・・」

「えーっと」

「でも、子供たちに当たんなくてよかったぁ」

「うぅ～ん・・・よ、よし今だ！　勇者きーっく！」

「ちょ・・・おま、話し合おうってさっき！」

　勇者、まさかの有限不実行。さっきまで話し合おうと言っていたが予想外の不意打ちである

「い・・・言っても聞かないから」

「何言ってんの!?　台本通りの展開なら聞くから!?」

「ふ、二人とも何がどうなって・・・」

「完全にアドリブだなぁ、こっからどう持っていこう」

　演者ではない俺達スタッフ組も中々に困惑

「みんな！　一緒に勇者を応援しよう！」
　咄嗟に勇者を応援する方向にシフトすると、子供たちから勇者に向かって応援が飛ぶ
「みんなの声援がわしを弱らせる～」
「今だ！　勇者ぱーんち！」
『と言うわけで。みんなの力魔王は改心し、祖国の平和は守られました』
「みんなのおかげだよ！」
　ちょっとしたハプニングに見舞われたが何とか巻き返し、子供たちも満足したと思う・・・と言う風な活動をしているのが俺達五人、誰かの為になることを勇んでやる部活、勇者部である

　郊外活動の次の日
「起立、礼、神樹様に拝」
「はい、さようなら」
　一日の授業を終えた俺は、いつも通りの挨拶を済ませると扉側に座っている二人の場所まで向かう
「二人とも、今日も部活出るんだろ？」
「うん、徹くんもだよね」
「おう、そうじゃなかったらお前らの所に来ないでさっさと帰ってるし」
「随分と寂しい事を言うのね、八重樫君は」
「もちろん冗談ですよ、早く行こう」
　俺達三人はそう言うと、部室となっている家庭科準備室まで向かう
　今勇者部に所属しているのは五人
　中学三年で部長の犬吠埼風先輩
　先輩の妹で俺たちの後輩、犬吠埼樹ちゃん
　そしてさっき俺が話しかけた結城友奈と東郷美森の親友コンビ
　最後に俺、八重樫徹・・・片手に片目、片耳と不自由な所が多い俺ですが、他のメンバー同様に日々誰かの為になることを全力でやってます

「こんにちは！」
「お疲れさまでーす」
「昨日の人形劇、大成功でしたね！」
　部室に入ってそうそうに友奈がそういうと、風先輩は少し呆れたようにに言葉を返してくる
「何もかもギリギリだったわよ、いやむしろＮＧ」
「友奈ちゃんのアドリブで盛り上がりましたね」
「あれは無茶苦茶と言うんだ・・・」
「今度はもうちょっとセットの安定性確認しておきます」
「そこはお願いね、徹」
「みんな喜んでくれたし、結果オーライ！　勇者はくよくよしてもしょーがない！」
「友奈さんは底抜けにポジティブですよね」
「・・・はいはい、今日のミーティング始めるわよ」
　風先輩の言葉に従い、黒板の前までやってくるとそこに貼られていたのは子猫たちの写真、そしてその上には子猫の飼い主探しと書かれている
「未解決の飼い主探し依頼がどっさり残ってるわ」
「た、たくさん来たね・・・」
「その件って師匠に頼んだんじゃないんですか？」
「何件かは請け負ってもらえたけど、やっぱり私達がやらないとね・・・ということで、今日から飼い主探し強化月間にするわよ！」
　風先輩曰く師匠もいくつか請け負ってもらってるらしいが、それでもまだまだ飼い主の決まっていない子猫は多いらしい
「東郷、ホームページの強化は任せた！」
「携帯からアクセスできるようモバイル版も作ります」
「徹は不知火さんに心当たりが聞いてみてくれる？」
「了解、取り合えずメッセージ送ってみます」
「私達は・・・」
「どうしましょう・・・」
　風先輩に言われた俺は、片手でスマホを操作して師匠こと、不知火

要さんにメッセージを送ってみると、程なくして了承のメッセージが帰ってくる
「風先輩、師匠オッケーだそうです」
「わかったわ、それじゃあ後で話に行きましょう」
「そうだ！　私達、海岸の掃除に行くでしょ。そこでも人に当たってみようよ」
「いいですね」
どうやら友奈と樹ちゃんの方も話がまとまったようだ。そんなことを言っていたら後ろから聞こえていたタイピングの音が止まる
「出来ました」
「「はやっ！」」

それからいつも通り部活を終え、家に帰ると制服からジャージに着替えて浜辺に向かった
「時間通りだな、八重樫」
「今日もよろしくお願いします、師匠」
「それじゃ、最初はいつも通り体力づくりからだ。ランニング行くぞ」
「はい」
俺と師匠の二人で浜辺を走り始める、俺はいつも通り荷物をおろして、師匠は背中にリュックを背負ってランニングを始める
「そういえば師匠、ありがとうございます」
「何が？」
「子猫の件です、引き受けてくれて」
「お前らも頑張ってるのは知ってる、それに俺に連絡をしてくるのは頼らざる負えなくなっただけってのもな」
「そうですね・・・」
師匠感謝をした後、ランニングを続ける、それから体感三十分程走ると次のメニューに移る。師匠から受け取ったのは木製の剣、但し通常の剣とは異なり刀身は分離できるようになっており中にはワイヤーが仕込まれている。蛇腹剣という奴だ

「意識することは覚えてるよな」
「はい、地に足を付けて武器に振り回されないように・・・はぁッ！」
盾を構える師匠に向かって蛇腹剣を振るう、武器に振り回されることなく蛇腹剣は師匠の元に向かっていく。師匠は盾を使って防ぐ
「動きを止めるな、鞭を振るうように連続して攻撃をしろ！」
「はい！」
師匠の言葉に従い、片手で剣を振るい攻撃を続ける。二撃・三撃と繰り返し、暫くしたところで師匠の声が聞こえてくる
「そこまで！」
師匠の言葉で蛇腹剣での攻撃を止める
「よし、だいぶ形になったな」
「ありがとうございました！」
「だいぶ暗くなってきたし、今日はもう帰るぞ」
「はい」
師匠と俺は帰り支度を始める
「そういえば八重樫、最近はどうだ？」
「どうって、何がですか？」
「体、良くなったりしたか」
「全然ですね」
「そうか・・・少しでも良くなりそうだったらすぐに報告しろよ」
「わかりました」
そう言うと師匠は俺を家に送った後に来た道を戻っていった

翌日、いつも通り授業を受けている途中に顔を逸らして友奈と東郷の方を見る。どうやら昨日風先輩に言われた文化祭の出し物について考えていたらしい・・・東郷も見ているのに気づいた友奈は東郷の方を向く
「あはは、なんでもない」
「結城さん、何でもなくないですよ。じゃ、教科書を読んでもらおうかしら」
小さい声だったが、先生の耳にも友奈の声が聞こえていたらしい、

少し呆れたように友奈の事を指す。少し項垂れた友奈が席を立ちあがった瞬間、スマホから今まで聞いたことのない通知音が流れ始める
「えっ、私の!?」
「携帯ですか？　授業中は電源を切っておきなさい」
「はいっ、すみません」
スマホがなっているのは友奈だけじゃなかった、俺と東郷のスマホも同じ通知音が鳴っている。そしてスマホを取り出した瞬間、世界の時間が止まる
「え…」
「み…　みんな…　どうしたの？」
「何だか様子が…」
「一体、何が起きてる？」
そう言った瞬間、俺達を…　いや、世界を光に包まれる
光が晴れた俺達が目を開けるとそこに広がっていたのは、森を思わせる神秘的な空間だった…

第弐話　試練に勝つ

「何これ、何処ここ。私まだ居眠り中!?」
「教室にいた筈なのに・・・」
「知らない場所・・・　いや、俺はここを・・・」
　知っている、そう口にな出そうとしたが言葉にすることが出来なかった。いや、正確にはこの場所を知っているという確証を得ることが出来なかったという方が正しい
　俺の記憶は所々抜け落ちている、それだけじゃない。俺の身体が不自由になる前のすべてと目を覚ました直後の記憶が白いインクをぶちまけたみたいに思い出すことが出来ない
「大丈夫だよ、東郷さんには私も徹くんも付いてるから!」
「そうだな、ここに俺達がいる。だから大丈夫だと思う」
「・・・　友奈ちゃん、徹くん」
「とりあえずここに居ても仕方ない、他の人が居ないか探してみよう」
　俺がそういってからすぐ、近くの木々が揺れ、音が聞こえる。そっちに目を向けるとスマホを手に持った風先輩と樹ちゃんが出てくる
「みんな!」
「風先輩!　樹ちゃん!」
「よかった・・・　!　みんな携帯を手放していたら見つけられなかった」
　樹ちゃんと一緒に友奈に抱きしめられた風先輩はそう言うと、友奈は少し戸惑ったように声をかける
「携帯?」
「これ・・・　地図?」
「このアプリにこんな機能があったんですか」
「その隠し機能はこの事態に陥った時に自動的に機能するようになっているの」
「部に入った時に風先輩がダウンロードしろって言われたやつですよね」
　確かにこのアプリは入部した時にダウンロードしろと言われたも

のだ。それにこの隠し機能を知っているという事は風先輩この場所について知っていたという事になる、そんな風に考えていたのは東郷も同じだったらしい
「…　風先輩、何か知ってるんですか…　ここは一体、何処なんですか？」
「……」
「詳しいことは、俺が説明する」
「…　師匠？」
　東郷の言葉を聞き黙ってしまった風先輩とは別の方から声が聞こえてくる、俺にとって聞き馴染んだ声。声のした方向を向くと歩いてきたのは俺の師匠、不知火要さんだ
「あの人は？」
「えっと、あの人は俺の師匠の不知火要さん…　でも、師匠はなんでここに？」
「そういう体質だから今は気にすんな、それで詳しい話だが」
「不知火さん！　…　ここは。私から話します」
「…　そうか、ならお前に任せる」
　師匠の話を遮った風先輩は改めて俺達に話を始める
「みんな、落ち着いて聞いて…　私は、大赦から派遣された人間なんだ」
「大赦って、神樹様を奉っている所ですよね？　…　なにか特別なお役目なんですか？」
「樹ちゃんは知ってたの？」
「ううん、今…　はじめて」
「…　当たらなければ、ずっと黙っているつもりだった…　でも、私達の班が、讃州中学勇者部が当たりだった」
「あの、班とか当たりとか一体…」
「詳しいことはまた後で…　今見えてるこの世界は、神樹様が作った結界の中」
「やあ、悪い所じゃないんですよね？」
「えぇ…　でも神樹様に選ばれた私達はこの中で敵と戦わなければな

らない」
　そう言うと、風先輩は一度言葉を止めて深呼吸をすると再び話し始めた
「この世界には今、私達しか存在しない」
「他に誰もいないの？　お姉ちゃん」
「えぇ、今この世界に存在するのは私達だけよ」
「…　あの、この乙女型って点は何ですか？」
　その言葉を聞いた俺もスマホを見ると確かに乙女型という点が追加されている
「来たわね…」
　風先輩の見ている先、その上空にソレは居た…　人智では理解することの出来ない異形の怪物
「敵ってまさか…　アレ、ですか？」
「バーテックス、世界を殺すために攻めてくる人類の敵よ…」
「世界を殺すって…」
「お姉ちゃん、ずっと一緒だったのにそんなの今まで聞いたことないよ…？」
「今、初めて話したからね…」
　実際に見てるから信じられているがいつもの日常の中でこんな事言われても信じられなかったと思う
「バーテックスの目的はこの世界の恵みである神樹様に辿り着くこと、そうなった時…　世界が死ぬ」
「そんな、あんなのと戦えるわけが…」
　東郷の気持ちは確かに分かるが、それでも俺の頭の中はビックリするほど冷静だった。あの怪物を倒さないと世界が死ぬのならば…やる事は一つだけだ
「大赦の調査で私たちが最も適正があると判断されたんだ。戦う意思を示せばこのアプリの機能がアンロックされ神樹様の勇者となる…まぁ、徹は少し違うけどね」
「俺は少し違う？」
「えぇ、勇者は本来無垢な少女だけが選ばれる筈のものなの…　だか

ら徹は例外ってこと」
「なるほど…」
「みんな！　何か来る！」
　その言葉でバーテックスがこっちに何か射出してくるのが見えた。
俺達の方に向かってきた何かは俺達の元に来る直前で師匠が全部弾き飛ばした
「大丈夫か？」
「はい、ありがとうございます」
「友奈、ここは私達に任せて東郷を連れて逃げて、早く！」
「は…　はい！」
「樹と徹も一緒に行って！」
「だめ、お姉ちゃんを残して行けない！　…　ついていくよ、何があっても」
「俺も…　覚悟は決まってます」
　俺と樹ちゃんの二人は風先輩の方を真っすぐ見る
「…　どうしたらいいの？」
「樹、徹も…　私に続いて！」
「う…　うん！」
「はい！」
　風先輩に続いてスマホをタッチすると俺たちの服が制服から勇者の物と思われる服に変化し、手にはそれぞれ武器を持っている
「すごい、変身しちゃった!?　これが神樹様の守り？」
「そう、このアプリは選ばれた私達だけが起動させる事が出来る」
「なんか…　凄い落ち着く」
　そんなことを言っている俺達の周りにゆるキャラみたいなのが出てくる、風先輩と樹ちゃんにはそれぞれ一匹ずつ。そして俺の周りには五匹
「…　なんか、俺だけ多くないですか？」
「それはなんでか分からないけど…　とにかくこの子たちは世界を守ってきた力・精霊。神樹様の導きで私たちに力を貸してくれるの」
「精霊…」

「よし、戦い方はアプリが教えてくれる。徹も樹も一緒に行くよ！」
「ちょっ、先輩!?」
「わーっ！　待ってお姉ちゃん！」
「師匠も一緒に！」
「あぁ・・・　つっても、色々と制限はあるがな」
そう言うと師匠も俺達と一緒にバーテックスの元に向かう

バーテックスに接近すると相手もこっちに気付いたようでこちらに攻撃を仕掛けてくる
「八重樫、いつもやっているように動いてみろ」
「はい！」
手に持った蛇腹剣をいつものように動かしてバーテックスの放ってくる攻撃を切り刻む
「いつもより動ける」
「八重樫先輩、すごい」
「後輩にばっかり、いいところ持ってかれていかれる訳にはいかないわよね！」
風先輩は手に持った大剣を使ってバーテックスに直接ダメージを与える
「気を付けろ、バーテックスの再生能力は並のそれじゃない！」
師匠はそういいながらバーテックスの放っている弾のようなものを手に持ったボウガンで撃ち落としていく
「弾の処理はこっちに・・・　ッ!?」
師匠が何か言おうとした瞬間、師匠は膝をついた
「師匠!?」
「大丈夫だッ！　お前は目の前の敵に集中しろ！」
そう言うと師匠は膝をついたままボウガンを構え、尚も射出される弾を撃ち落としていくが何発かの弾を撃ちもらしている
「しまったッ！」
撃ちもらした弾はそのまま樹海の方へと向かい土煙を巻き起こす、

そしてその土煙の中から現れたのは勇者服を纏った友奈だった。高く飛びあがった友奈はそのままバーテックスに拳を叩き込んで大ダメージを与えた
「…すげぇな、やっぱり」
「え？」
「友奈さん、すごいパンチ！　カッコいいです！」
「何だか力がみなぎってきたんだ！」
「警戒しろ！　その程度の傷なら奴はすぐに直す！」
「バーテックスは「封印の儀式」っていう特別な手順を踏まないと絶対に倒せないの」
「て…手順って、お姉ちゃ…きゃ」
「説明するから攻撃を避けながら聞いてね」
「師匠…」
「俺は良い、お前も行け」
「でも…」
「いいから、さっさと行って華々しい初陣を飾ってこい。話はそれからしてやる」
師匠の言葉を聞いて俺も風先輩に合流をすると、風先輩が手順の説明を聞いた後。それを実行するために動き始める
「封印の手順そのいち、敵を囲む…風先輩、配置オーケーです！」
友奈と樹の二人も同様に位置に着くと、風先輩が声をかけてくる
「よしっ、封印の儀いくわよ！　教えた通りにね」
「「了解！」」
スマホの画面を開くと、そこに表示されていたのは祝詞…結構まどろっこしいな、これとか思いながら祝詞を唱えていくと風先輩が声を張り上げる
「大人しくしろ、こんにゃろ―ッ!!」
「「それでいいのッ!?」」
「魂込めれば言葉は問わないのよ！」
「早く言ってよ、お姉ちゃあん」
それでいいならもう少し早く言って欲しかった…って

「なんか出てきた!?」
「封印すれば御魂がむきだしになる、あれはいわば心臓、破壊すれなこっちの勝ち・・・もう少しよ!」
「それなら私が行きます!」
友奈はそういいながら御魂に突っ込んでパンチをするが砕ける様子はない
「固すぎるよこれぇ!」
「・・・お姉ちゃん、なんか数字減ってるんだけど、これなに?」
「それ、私達のパワー残量! 零になるとコイツ押さえつけられなくなって倒せなくなるの」
「ふぇぇ、ということは」
「こいつが神樹様に辿り着きすべてが終わる」
「そういうのもうちょっと早く言ってくれませんか!?」
俺の言葉を無視した風先輩はそのまま御魂の元まで飛び上がると御魂に一撃を叩き込んだ。それと同時に俺達は周りに異常が起き始めていることに気付いた
「これは・・・」
「・・・枯れてる?」
「はじまった、急がないと・・・! 長い間封印してると樹海が枯れて現実世界に悪い影響が出るの」
「時間がない・・・」
そう呟いた友奈は、何かを決意した表情で御魂にもう一撃拳を叩き込むと、御魂は砂になり消えていく
「砂になってる・・・」
「風先輩、あれってもしかして」
「察しの通りよ! 友奈ぁぁぁぁぁぁ! やったね友奈! ナイス友奈!」
「え? え??」
「倒したって事」
「倒した・・・? や、やったぁ!」
「そうよ、すごいよ友奈!」

そんなことを言っていると、俺達は再び光に包まれ気が付くと学校の屋上に戻って来ていた

第参話　輝く心

「あ、あれ？　ここ…」
「学校の屋上？」
「神樹様が戻してくれたのよ」
「師匠、大丈夫ですか？」
「あぁ、もう平気だ…　助かった」
　樹海から戻ってきた俺達と一緒に師匠も讃州中学の屋上に戻っていた、差し出した俺の手を制した師匠は軽く体を伸ばすと俺達の方を向く
「それじゃあ俺はこれから学校側に説明してそのまま帰る、学生はさっさと教室に戻って勉学に励め…　じゃあな」
　そう言うと俺達が声をかける前に師匠はそそくさと学校の屋上からいなくなってしまった。友奈たちは友奈たちで何か話していたようで話を終えた俺もそっちに合流した後、それぞれ教室に戻った

　八重樫と別れた後、少し怪訝な表情をされた俺は何とか先生方に対する説明を終え、一人帰路につく
「それにしても、今回も予想通りか…　調整を急がないとな」
　今回の戦いで八重樫が使用していたのは、彼が記憶を失う前…つまり五体満足の時に使っていた護人システムを2年で少しだけ改良したものだ。現在の勇者システムに性能は近づいているもののそれでもまだ十分とは言えない
「プロトタイプの調整完了まで…　もう少し待って欲しかったけどな」
　八重樫に渡すために現在勇者システムのプロトタイプを大赦が調整中だが、この様子だと八重樫に届くのはもう少しだけ先になりそうだなどと考えながら歩いていたら、急に体の力が抜けていく感覚に襲われ、倒れそうになる
「死なず怪我せずでもそろそろガタが来たか…　上等」

いつの頃からか忘れたが、今みたいに体の力が入らなくなることが起こるようになった…そしてこの現象が起こる時には決まって体の所々が起こる、もっと言うと痛むところは決まって若葉たちと一緒に戦ってた時に傷を負った場所だけ
「三百年前の呪いが今更発症とかだったら、笑えるんだけどな」
自分に対して軽く冗談を言うと、重くなった体を動かして、再び仮設事務所まで歩き始める

あの戦いがあった次の日の放課後、勇者部に集まった俺達は風先輩から改めて説明されることになった
「戦い方はアプリに説明テキストがあるから、今は何故戦うのかって話をしていくね…こいつがバーテックス」
そういいながら風先輩は黒板に書かれた奇抜な絵を指さしているが…
「流石に難解すぎる…」
「あっ…これ、この前の敵だったんだ」
「奇抜なデザインをよく表した絵だよね」
どうやら俺以外にも同じような意見の人は居たらしい、風先輩はそんなことを気にせずに更に説明を続ける
「人類の天敵があっち側から壁を越えて十二体が攻めてくることが神樹様のお告げでわかったわけで、目的は神樹様の破壊、つまり人類の滅亡。以前にも襲ってきたらしいけどその時は追い返すのは精一杯だった見たい…」
なるほど、それじゃ俺たちの前にも先代の勇者かそれに近いものが居たという事になる
「それじゃあ、俺達の前にもバーテックスと戦ってた勇者が居たという事ですか?」
「えぇ、詳細は知らされていないから分からないけどね」
「なるほど…」

「それじゃ、説明を続けるわ。攻めてくるバーテックスに対抗するために大赦が作ったのが、神樹様の力を借りて勇者と呼ばれる姿に変身するシステム、人智を超えた力に対抗するにはこっちも人智を超えた力って訳ね」

「その絵私達だったんだ…」

「げっ… 現代アートって奴だよ！」

「やはり絵は難解だ…」

真面目に説明されているお陰で内容は頭の中に入ってくるが、やはり絵は奇抜… いや、難解で分からない

「コホンッ… ちゅ、注意事項として樹海が何かしらの影響でダメージを受けると、その分日常に戻った時に何かの災いとなって現れると言われているわ…」

少し照れた様子の風先輩が言った言葉を聞いた瞬間、今朝の教室で隣町で事故があったとか話題になっていたのを思い出す、それが恐らく災いと言う事なのか…

「派手に破壊されて大惨事なんてことにならないように私達勇者部が頑張らないと！ 大赦側もサポートに動き始めてるから」

「… その勇者部も、先輩が意図的に集めた面子だったというわけですね…」

ずっと黙っていた東郷がようやく口を開くと、出てきたのはそんな言葉、風先輩もバツが悪そうな表情を見せた後、再び話し始めた

「… そうよ、適性が高い人はわかってたから。私は神樹様を奉っている大赦から指令を受けたの、この地域の担当として」

「知らなかった…」

「… 黙っててごめんね」

その言葉を聞いた友奈は少し前のめりになると風先輩に質問をする

「次は敵がいつ来るんですか？」

「明日かも知れないし、一週間後かも知れない。そう遠くはない筈よ」

「なんで、もっと早く勇者部の本当の意味を教えてくれなかったんですか… 友奈ちゃんに徹くん、樹ちゃんも死ぬかも知れなかったんで

すよ」
「…ごめん、でも勇者の適正が高くてもどのチームが神樹様に選ばれるか敵が来るまでわからなかったんだ、むしろ変身しないで済む確率の方が高くて…」
「そっか、各地で同じような勇者候補生が…いるんですね」
「…人類存亡の一大事だからね」
「そんな大事なこと、ずっと黙っていたんですか…」
そう言うと東郷は一人で教室から出て行ってしまった
「風先輩、私行ってきます」
「俺も行ってきます…結局、重要事項なら黙ってられても仕方ないですから」
俺と友奈の二人は部室を出て東郷の後を追う

二人で東郷を探して歩いていると、廊下の隅に見慣れた車椅子を見つけた、俺達二人は顔を見合わせて東郷の元に向かう
「はい、東郷さん」
「…友奈ちゃん、徹くんまで」
「お茶どうぞ、私のおごり」
「え…でも、そんな」
「本人が奢るって言ってるんだから、貰うが吉だと思うぞ」
「そうだよ！それにさっきの東郷さん、私達の為に怒ってくれたから…ありがとうね」
東郷にそう言った友奈の姿は、やけに眩しく見えた
「あぁ…なんだか友奈ちゃんが眩しい」
どうやら友奈が眩しいと感じていたのは俺だけじゃなかったらしい…やっぱり思うが友奈には人を惹きつける何かがある気がする
「あのね、私、昨日ずっとモヤモヤしてたんだ…このまま変身できなかったら。私は勇者部の足手まといになるんじゃないかって…」
なるほど、この前変身できなかったことを気にしていたのか
「だから、さっき怒ったのもそのモヤモヤを先輩にぶつけてた所もあって…悪い事、言っちゃった」

「それなら謝ればいい、悪いことをしたら謝る、良い事をされたら感謝する。難しいけど勇気を出せば簡単だ」
「徹くん…　そうね、でも」
「「でも？」」
「友奈ちゃんは皆の危機に変身したのに、徹くんも風先輩たちと頑張ってたのに…　国の危機なのに…」
「と、東郷さん…　？」
　これは、なんか雲行きが怪しくなってきたぞ？
「私は、私は…　勇者どころか…　敵前逃亡」
「東郷さーん!?」
「おーい、しっかりしろー!?」
「風先輩の仲間集めだって国や大赦の命令でやっていたことだろうに…　あぁ、私はなんてこと…」
「そうやって暗くなっちゃダメー!」
「そうだ！　前を見よう！　ポジティブに行こう！」
　なんとか励ますが一向に元の東郷に戻る気配がない、さて…　どうしよう
「どうする、友奈」
「そうだ！　元気の出るもの見せてあげるね！　私と徹くんで！　きっとすごく楽しくなるよ！　ね、徹くん！」
「ヘッ!?　…　あ、あぁ、見たら絶対笑顔になること間違いなしだ！」
　そういって俺と友奈の二人は突発で芸を披露したわけだが…　東郷の表情は真顔
「私の為にこんなネタまでやらせて、ほんとにごめんね…」
「逆効果ぁ！　どうしよう徹くん！」
「いやどうしようって言っても、ほんとどうしよう！」
　割とマジでてんぱってる、ホントにどうしよう
「二人は、大事な事隠されていて怒ってないの？」
「俺は、まぁしょうがないかって感じだな…　それに、みんなを守れる力がある。なんというか、それがどうしょうもなく嬉しいんだよ」
「私も、そりゃ驚きはしたけど、でも嬉しいよ！　この適正のお陰でみ

んなに会えたんだから！」
「確かに、適正なかったらまったくの他人だったって考えると、適正にも感謝かもしんない」
「この適正の、お陰・・・」
「うん！」
「あぁ」
「私は・・・　中学に入る前に事故で足が全く動かなくなって記憶も少し飛んじゃって・・・　学校生活を送るのが怖かったけど、二人に会ったから不安も消えて・・・　勇者部に誘われてから学校生活がもっと楽しくなったんだ・・・　そう考えると適正に感謝かも」
「これからも楽しいよ、ちょっと大変なミッションが増えるだけで。ね、徹くん」
「そうだな、それに大変なくらいの方がやりがいあるだろ？」
　そう言うと俺も友奈と東郷の手の上に自分の右手を重ねる
「そっか・・・　そうだね。二人とも本当に前向き」
　ようやく元の東郷に戻ったかと思った瞬間・・・　スマホが鳴り始めた
「これって・・・」
「もう、二度目・・・」
　その言葉を最後に、窓の外から広がってきた光は俺達の事を包み込んだ

第肆話　清らかな心

樹海化した直後の俺達は前回同様に勇者に変身して、やってくる敵を捉える
「3体同時に来たか…」
風先輩がそう言っているのを聞きながら、俺は樹海を見渡して師匠の事を探す
「…　今回は師匠、いないのか?」
「いるよ、正直体調は最悪だけどな…」
俺がそう言うとすぐに師匠は姿を見せる、けどその姿はこの前よりも辛そうに見える
「大丈夫ですか?」
「普通に動く分には問題ない、だが今の俺じゃお前らの援護が精々だな」
「それでも、助かります」
「よしっ、まず遠くの奴は放っておいて目の前の二匹を纏めて封印の儀に行くわよ!」
「遠くの奴の牽制は俺に…　ッ!」
俺たちが話している横で風先輩がそう言った直後、言葉をかけようとした師匠は急いで風先輩の前まで移動していつの間にか持っていた盾を構えた。その直後に聞こえてきたのは金属同士がぶつかりあう甲高い音
「危機一髪…　にしても腕が痛てぇ」
「だ、大丈夫ですか?」
「あぁ、それより気を抜くな…　来たぞッ!」
師匠のその言葉を聞いた俺たちが急いでその場を離れると、大量の光の矢が降り注いでくる
「友奈さん危ない!　後ろです!」
「へっ!?」
俺達と友奈の距離が少し離れた瞬間、近くにいた一体が尻尾を振るい友奈に攻撃を仕掛けた。樹ちゃんが教えたものの反応の遅れた友

奈はそのまま尻尾を叩きつけられ地面に叩きつけられた
「友奈ッ！」
「お前らも気を抜くな、二の矢が来る！」
師匠はそう言うと樹ちゃんの元に向かい盾を構えて光の矢を弾いた
「あ、ありがとうございます」
「無事なら良い、立てるか？」
「はい、大丈夫です」
師匠が樹ちゃんを庇ったのを見る、俺は皆と離れ友奈の元に向かおうとしたら残り一体に行く手を阻まれた
「邪魔だッ！」
蛇腹剣を振るい目の前の扇みたいなやつを攻撃するが思った以上に身体が固いのかろくにダメージを与えられない、一度地面に降りた俺は周りを見渡してみると風先輩たちも光の矢から逃げるのが精一杯で攻撃に転じることが出来てないみたいだ
「このままじゃジリ貧・・・なにッ!?」
急な地響きのような音がした方を見るとあのサソリ擬きみたいなのが思いっきり倒れていた
「そのエビ連れてきたよーっ！」
「サソリでしょ・・・」
「風先輩、今それ重要じゃないと思います」
とりあえず目の前のよくわからんバーテックスを牽制しつつ皆の元に戻ると友奈の他にもう一人、見知った奴が勇者服を纏っていた
「東郷先輩・・・」
「変身できたじゃん」
「えぇ・・・遠くの敵は私が狙い撃ちます」
「戦ってくれるの？」
風先輩の言葉に東郷は頷くと後方に下がるとスナイパーライフルを呼びだしていた
「援護は任せてください」
「わかった、お願いするわ東郷」

「散開、手前の二匹を纏めてやるわよ！」
「「ＯＫ～」」
「みんな、不意の攻撃には気をつけて！」
「「はい！」」
「あいよ！」
「私のより返事がいいッ!?」
　俺と友奈で目の前のサソリを相手にするために動き始める
「友奈、大丈夫か」
「徹くん、うんっ！　大丈夫！」
「良かった…　よし、さっさと終わらせよう！」
「了解！」
　まずは友奈が攻撃を仕掛け次に俺と言う順番で動き続ける、少しでも動きを止めるとあの尻尾の餌食になることはさっきの経験で理解したが故の戦い方だ
「徹くん！　後ろ！」
「やばっ…　ッ！」
「せぇぇいッ！　…　ふぅ、油断はすんなって、教えてなかったっけ？」
「少し優位になったんで、少し油断しました…」
「分かってるなら良し、次からは気を付ける事」
「わかりました」
　間一髪の所で師匠が盾を使って尻尾を弾いてくれたから何とかダメージを貰うことなく済んだけど、流石にさっきの油断は反省点だなと思いつつ動き続けてから程なくしてバーテックスが御魂を吐いた
「御魂が出た」
「こっちも出ましたッ！」
「私行きますッ！」
　そう言った友奈は御魂に攻撃を仕掛けるが、この前のと違ってやたらか軽やかに避けてる
「この御魂微妙に避けてくるよ～！」
「ならここは俺が…」

「いいえ、かわって友奈ッ！　…　点の攻撃をひらりと躱すなら」
　風先輩はそう言うと飛び上がりながら手に持った大剣を巨大化させるとそのまま御魂に向かって振り被る
「面の攻撃でぇ…　押し、潰す！」
　風先輩はそのまま大剣で御魂を押しつぶした
「いやったぁー！　すごい風先輩！」
「自慢の姉です」
「さぁ！　次に行くわよ！」
　次に移ると、その御魂は大量に増える…　流石にアレを一つ一つ潰していくのは面倒だ
「うわわっ、御魂が増えた!?　どれが本物？」
「ま…　任せてもらっていいですか…　！」
　樹ちゃんがそう言うと一歩前に出て自分の武器が装備されている腕を構える
「数が多いなら…　まとめてぇ、えぇぇぇぇぇい！」
　糸を出した樹ちゃんは無数に存在する御魂に絡みつけると糸を振るって切断すると、本物らしき御魂が現れる
「もう一回…　えぇぇぇい！」
　残った御魂をもう一度糸で切断し終えると、御魂は砂となり消滅していく
「はぁ…　やった…　？　や、やったよお姉ちゃん！」
「ナイス樹！　あと一体よ」
　そういってからすぐ、風先輩のスマホが鳴った。どうやら東郷から連絡が来たようで、少し何か話した後、遠くにいたバーテックスが爆散する
「…　ほんとごめんなさい」
「ほぇーっ、一撃必中～！」
「すごいな、東郷…」
　バーテックス側もさっきの一撃が効いたらしく、御魂を吐きだしたが…　動きが速い
「この御魂、動きがはやーい！　はやすぎるよぉ～！」

「くっ…　まって、今なんとか…　！」
　風先輩が動き出した直後、御魂が撃ちぬかれバーテックスは砂へと還る
「東郷先輩…　！」
「撃ちぬいた…　！」
　友奈と俺が東郷のいる方を向い手すぐに樹海化は解け、中学の屋上に戻った

「東郷さん！」かっこよかったよーっ、ドキっとしちゃった！」
「あぁ、めっちゃかっこよかった」
「…　そんな、私」
「本当に助かったわ、東郷」
「風先輩…」
　俺たちのところに来た風先輩がそう言うと、東郷は風先輩の方を見て口を開く
「覚悟はできました、私も勇者としてがんばります」
「…　東郷、ありがとう！　一緒に国防に励もう！」
「国防…　はいっ！」
　少しだけ目の色が変わった東郷を見ながら、みんなの顔にも笑顔が戻る。それから友奈と東郷が何気ない話をしているのを見ているとあたりを見回した樹ちゃんが口を開く
「…　そういえば、あの人は？」
「あれ？　師匠がいない…」
　さっきまで一緒にいた筈の師匠の姿は、中学の屋上にはなかった

「はぁ…　はぁ…　流石に、少し無理したな」
　アイツらと別の場所に転移した事を確認すると、俺は耐え切れなくなって大きく地面に倒れこむ

「武器を軽く切り替えるだけでこの有様…　流石に不便になってきたな…」

樹海に入った段階で俺が召喚しておいた武器は前回と同じボウガンだったが、八重樫を守るために盾に切り替えた…　今になって思えば今の勇者システムにはバリアがあるんだから、少しならと考えた所で、その思考を振り払う

「ダメだ…　思考がマイナスに持ってかれそうになる、切り替えねぇと」

くたくたの身体を動かして起き上がると、スマホのナビを起動する。一応四国全体の地理は頭の中に叩き込んであるがこの体調だとまともに頭が回らない、ナビの案内に従って歩きながら、誰に伝えるでもなく一人呟く

「せめて、この世代が戦いを終えるまでは…　終われない」

だから、もう少しだけ耐えてくれよ…　俺の身体（不知火要）

第伍話　変化

俺達が勇者になってから、早いもので一か月の時が流れた。風先輩の言った通りバーテックスの出現頻度はバラバラでアリ、最後に倒した相手から一か月は何事もなく日常を過ごしていた…　そして今俺たちが待ち構えているバーテックスで五体目、気を引き締めていかないと

「きたっ…」

友奈のその言葉を聞いた俺も視線を前に戻すと、新しいバーテックスがこちらに向かってくる

「あれが五体目…」

「落ち着いて、ここで迎撃するわよ」

「…　ううっ、一か月ぶりだからちゃんと出来るかな」

不安そうにしている友奈がそう言ったら樹ちゃんがスマホを片手に何かの説明を始めた

「言葉にするよりやって思い出したほうがいいだろ…」

「えぇい、成せば大抵なんとかなる！　四の五の言わずビシッとやるわよ！　勇者部ファイト！」

「「「オー！」」」

そうして気合いを入れた直後、バーテックスが爆散した

「…　あれぇ？」

「え、ちょっ…」

「東郷さんが？」

友奈の言葉を聞いた後、東郷の方を見るが彼女が狙撃したようではない…　というよりも彼女はまだ射撃をするどころか狙撃体勢に入ったばかりで狙いを定めた様子もなかった

「…　私じゃない」

「それじゃ一体…」

「もしかして、あの子じゃないですか？」

あたりを見回してみると俺達よりも更に高いところに立っていた少女を指さしてすぐ、彼女はその場から飛ぶとバーテックスの方に向

かっていく
「封印開始！」
その言葉と共に彼女は手に持った刀を地面に突き刺すと俺たちの目には見慣れた封印のカウントが始まる
「思い知れ、私の力！」
「まさかあの子、一人でやる気⁉」
「御魂が出たよっ」
風先輩が驚いた直後、バーテックスが御魂を吐きだしてすぐに御魂から煙が噴出される
「なにこれ、ガス⁉」
「何も見えないよぉ」
「目くらましかっ？」
「そんな目くらまし…　気配で見えてんのよっ！」
御魂に向かった少女は臆することなく煙の中に突っ込んでいくと、どうやら御魂をぶった切ったらしい。煙の中からかすかにだが御魂を倒した時に落ちる砂が見えた。バーテックスを倒した彼女はそのまま俺達の前に降りてくる
「はぁ」
「えーっと、誰？」
彼女は何も言わず真っすぐ俺達の方を見ていると狙撃ポイントについていた東郷も俺達に合流する。彼女が来るのを待っていたのか定かではないが勇者部全員が揃った所でようやく彼女は口を開いた
「揃いも揃ってぼーっとした顔してんのね」
初対面からまさかの一言である
「こんな連中が神樹様に選ばれた勇者ですって…　本当なんなの？」
うわぁ、風先輩がすんごい顔してる、まぁしょうがない気もするけど…
「あの…」
「なによチンチクリン」
「チン…　はぅ」
友奈、リタイアであるなどと考えていると目の前の彼女はまっすぐ

俺達を方を向いたまま口を開く
「アタシは三好夏凛、大赦から派遣された正式な勇者…　つまりあなた達は用済み。はい、お疲れさまでした」
　一難あったかどうかは知らないけれど、一難去ってまた一難…　で良いのだろうか

　という事があった次の日、正式な勇者こと三好夏凛さんが我々のクラスに転校してきました、転校初日は三好さんが質問攻めにあっていたことを除き何事もなく放課後を迎えた
「転校生のふりなんて面倒臭い。でも、ま、私が来たから安心ね、完全勝利よ」
　完全勝利かどうかは分からないけど、頼もしくはあるの…　か？
「なぜ、今このタイミングで？　どうして最初から来てくれなかったんですか？」
　東郷の疑問はごもっともである
「私だってすぐに出撃したかったわよ、でも大赦は二重三重に万全を期している。最強の勇者を完成させるためにね」
「最強の…　勇者」
「そ、あなた達先遣隊の戦闘データを得て、完璧に調整された勇者。それが私…　私の勇者システムよ、対バーテックス用に最新の改良を施されている」
　なるほど、最新式…　というか俺達のよりもアップデートを施された勇者システムって感じなのだろうか
「その上あなた達トーシロと違って、戦闘の為の訓練を長年受けてきている！」
「しつけ甲斐のありそうな子ねー」
「なんですって！　…　まぁいいわ、とにかく大船に乗ったつもりでいなさい」
　なんかこれから、もっと賑やかになる予感がする

「という事があってですね・・・師匠、聞いてます？」
「ん？　・・・あぁ、わり、なんだっけ」
「今日会った事ですよ、新しい勇者が来たって話」
「そうだったな・・・それで、結構好みのタイプだってやつか？」
「違います、賑やかになりそうだなって」
　部活が終わった後の夜、師匠と二人でいつものように訓練をしているがいつもより師匠がボーっとしてる気がする
「師匠・・・ほんとに大丈夫ですか？」
「大丈夫だが、急にどうした」
「なんか今日の師匠、いつもよりボーっとしてる気がして」
「あぁ、そういう・・・気にしなくていい、少し感傷に浸ってただけだ。それより体を動かせー、今日のメニュー終了までもう少しだぞー」
「・・・はい」
　なんか納得いかない
「あ、そうだ・・・明日の放課後、お前ら勇者部の所に人連れて行くから」
「へっ!?　誰ですか!?」
「勇者システムの開発主任、勇者も全員揃ったみたいだし・・・話しておかないといけない事があるからな」
「分かりました、皆にも連絡しておきます」
「任せた」
　師匠の話しておかなければならないことがどんなことなのかは分からない。だけど、明日話されることは、きっと俺たちにとって重要なことだってことだけははっきりと分かった

第陸話　メッセージ

師匠から話があると言われた日の次の日、俺達は全員勇者部部室に集まって師匠の事を待っていた
「遅いですね…　師匠」
「何時くらいに来るって聞いてないの？」
「部活が始まる時間にはいくって聞いてたんですけど」
そんなことを話し始めるのと同じタイミングで、部室のドアが開く
「すまない、待たせた」
「師匠…　何かあったんですか？」
「連れが今日持ってきたもんの調節をさっきまでやってな、それで少し遅れた」
「連れ…　？」
そう言うと師匠の後ろからもう一人男性が入ってきた、優しそうな雰囲気の白衣を着た男性は師匠の横に来ると軽く頭を下げてきた
「勇者の皆様、お初にお目にかかります。私は伊予島冬馬、勇者システムの開発主任をしています」
「勇者システムの…　開発主任」
「詳しい話はひとまず後にして、とりあえず話を始めよう…　どっかの黒板借りられるか？」
そう言った師匠たちを俺は普段会議で使ってる黒板まで案内する
「ありがとな、それじゃ冬馬、準備は出来てるか？」
「大丈夫です、いつでも始められます」
「よしっ、それじゃあ始めるか」
師匠のその言葉が聞こえてきたのか全員黒板のまえまでやって来た
「集まり良いな、そんじゃ改めて…　ほとんど知ってると思うが、俺は不知火要。一応八重樫の師匠って事になるのか、そんでもう一人が伊予島冬馬。さっきも言ってたが勇者システムの開発に関わってる奴だな」
「伊予島冬馬です」

「部長の犬吠埼風です」
「それじゃあ、挨拶もそこそこに話を始めましょうか」
「システム面はそっちに任せるぞ」
「分かりました」
　そう言うと伊予島さんはカバンから資料を取り出すと黒板に何かを書き終えると俺達の方を向きなおす
「それで皆さんは、勇者システム・・・　というより戦い方の説明テキストには目を通してありますよね」
「えぇ、一通りは」
「よろしい、では満開と言うシステムが実装されていることも知っていますか？」
「私は知ってます」
「私達は・・・　まだ」
　大赦から派遣された夏凛と俺達を代表して風先輩がそう答える
「わかりました、それじゃあまずは満開についてを説明しましょう」
　伊予島さんは黒板に書かれた満開の二文字に丸をつけると説明を始めた
「まず、満開と言うのは勇者にとっての切り札、勇者システムで勇者に変身した際どこかに現れるゲージが一定まで溜まる使用が可能になります」
「なるほど」
「続けますね、満開を使用すると強力な力を振るう事が出来、満開を使えば使うほど勇者システムが強くなる・・・　三好さんはこういう風に聞いてますよね」
「はい、そのように聞いています」
「だが、実際には違う」
　今まで黙っていた師匠がそう言うと伊予島さんの横にやってくる
「今日俺達が話そうとしてたのは、それ・・・　満開のデメリットについてだ」
「満開のデメリット？」
「あぁ」

さっきの伊予島さんの説明を聞く限りだと、満開は便利な必殺技のように聞こえたがデメリットがあるらしい
「いいか、満開を終えると散華と言う現象が起きる」
「それは、どういう現象何ですか？」
「…　一度につき体の機能が一つ、神樹に供物として捧げられる」
供物として…　捧げられる？　言われた言葉の意味が分からなかったがそれは俺以外も同じだったようで、みんな戸惑ったような表情を見せていた
「あのッ！　…　供物として捧げられたら、どうなるんですか？」
「…　捧げられたモノは戻らない。供物として捧げられた部分はどんなに手を尽くしても治らない」
「そんな…」
ここで黙っていた伊予島さんは持っていたタブレット端末を操作すると俺達の方に見せてくる
「そこで、俺達は大赦には内緒で勇者システムに少しだけ細工をした」
「細工…　？」
「あぁ、本来なら満開はゲージが溜まれば使えるものだが、俺達は勇者システムにリミッターを付けた…　勇者が強い意志と覚悟を見せないと満開を使えないようにな」
「それじゃあ…」
「お前らが思ってる通りだ、安易な気持ちで満開は使う事は出来ないし、暴発することもない」
師匠のその言葉を聞くと、友奈や樹ちゃんは安心していたが東郷や風先輩、三好さんは何処か腑に落ちないといった様子である
「…　どうして、リミッターを付けようと思ったんですか？」
東郷がそう言うと師匠は俺と東郷に目を向けてくる…　けれど、その瞳は俺達ではなく、俺達を通して別の誰かを見ているように感じた
「そうだな…　強いて言うなら後悔だろうな」
「後悔…　？」
「あぁ、少し前の俺は最悪自分で何とかするって考えてた、今まではそれで何とかなって来てたから余計これで良いんだって一人で抱え込

んでな…　けど、それが間違いだった、あの時の俺は結局何もできず、見守る事しかできなかった…　それが理由だ」

　そんな話、始めて聞いた気がする。出会った頃から自分の話はしなかったし俺も聞こうとしなかったから…　だからその話は初めて聞いたし、その話をする先生の姿が、何故か無理をしているようにも見えた

「さてと、俺達の話はこれで終わりだ…　それじゃ、ここら辺でお暇するかね」

「不知火さん、渡すもの渡すもの」

「っと、そうだった…　教えてくれてあんがとな」

「気を付けてくださいよ」

　伊予島さんとそんな話をしながら師匠は俺の前までやってくると、スマホを差し出してきた

「あの、師匠…　これは？」

「お前用にカスタムした勇者システム…　元々はプロトタイプで負荷もデカいから使えたもんじゃなかったけど、色々と出力抑えてリミッターかけて調整して、さっきようやく完成した所だ」

「それじゃあ…　遅れたのって」

「その通り、とりあえず持っとけ」

　そう言うと師匠は俺にスマホを押し付けて部室から出て行ってしまった

「八重樫君、今持っている端末を渡してくれればデータの移行作業とかしておきますよ？」

「それじゃあ、お願いします…　それより、師匠どうしたんですか？」

「私にもわかりません、最近ずっとあんな感じなので…　それじゃあ私も失礼します、端末は明日中にはお返しします」

　そう言うと伊予島さんも教室から出ていき、部室にはいつもの面子が残ったが少しだけ微妙な雰囲気の中、風先輩が手をパンっと叩くと俺たちに声をかけてくる

「それじゃ話も終わった所で勇者部として、やらないといけない事の話に移るわよ！」

そこから風先輩は手に持ったプリントをを俺達に回すと話が始まった。内容は今週末にある子供会についてだった

「というわけで、今週末は子供会のレクリエーションをお手伝いします」

「折り紙の折り方を教えてあげたり、一緒に絵を描いたりやることは沢山ありますよ、夏凛さん」

ここまで来ると前のような微妙な雰囲気はなくなり、すっかりいつも通りの勇者部に戻ったな等と考えていたところで樹の言葉を聞いた三好さんは樹ちゃんの方を向いた

「ちょっとまって、私もなのッ!?」

「昨日入部届け出したでしょ～」

どうやら入部届けは入手済みらしい… というか確かに入部届けを三好さんは書いてた気がする

「それは形式上でスケジュールを勝手に決めないで！」

「日曜日用事あるの〉やろうよ！ 楽しいよ！」

「う… いや… だいたいなんで私が子供の相手なんかを…」

「嫌？」

三好さんは真っ赤になると言葉を詰まらせていた、やっぱり友奈のコミュ力は本当に強いな

「わ… わかったわよ、日曜日ね。ちょ… ちょうどその日は空いてるわ… ！」

これがかの有名なツンデレと言う奴なのだろうな… というかここまで古典的なのは師匠から勧められた小説に出てきたのを読んで以来だ、実物は初めて見た

「すっかり元通りですね」

「そうね… やっぱり勇者部はこうじゃないと」

「そうですね」

風先輩の言う通り、やっぱり勇者部はこののほほんとした雰囲気が一番だと実感する… ほんとに、日曜が楽しみだ

第漆話　祝福する

　時は流れて日曜日、幼稚園前に集合した勇者部一同だった三好さんの姿が見えない
「三好さん、なにかあったのか？」
「プリント、ちゃんと渡してたわよね」
「確かに渡してたと思いますよ」
「ほんとにどうしちゃったんだろ・・・　私、電話してみます」
　友奈が三好さんに電話をしてみるが出る気配はないみたいだ
「電話にも出ない・・・」
「体調でも崩したのか？」
「・・・　時間も時間だし、ひとまず子供会の手伝いは私達だけでやりましょう」
「そうですね、ここからだと讃州まで少し距離ありますし」
　流石にここでキャンセルと言うわけにもいかない以上、自分たちだけ子供会の手伝いをする他ないか。メインイベントに関しては・・・最悪家に向かって渡すもんだけ渡すか

　それからの俺達勇者部は子供会の手伝いを始めるが、中々に子供達は盛り上がっている。この調子だと讃州に戻った時には日が暮れてるだろうな等と考えながら子供会を終え、終わったころにはすっかり日が沈んでしまっていた
「それじゃ、次の目的地に向かいましょうか」
「「はいっ！」」
「三好さんの住所ってわかりますか？」
「そこは問題なし！　バッチリ調べてあるわ！」
「それじゃあ、はやく行きましょう」
　そこから讃州に戻り、諸々調達した俺達は三好さんの家に向かって歩いていると海沿いのアパートが見えてくる
「あそこね」
「あのアパートですか？」

「えぇ、あのアパートの二階みたい」
　風先輩はそう言うと、さっさと二階に上がって扉の前で止まる
「この部屋ですか」
「えぇ…　それじゃあ、押すわよ」
　チャイムを押すが、出てくる気配はない
「出てきませんね」
「おかしいわね」
　そういいながら風先輩がチャイムを連打すると…
「だ…　誰よさっきから！　もぅ…　！」
　三好さんが木刀を片手に出てくる、どうやら病気とかではなかったらしい
「あ、あんたたち…　どうして…」
「まったく、何度も電話してるのに電源オフにして…　心配して見に来たのよ？」
「よかったぁ、寝込んだリしてたんじゃなかったんだね」
「心配…　？」
「風邪とか拗らしてたら大変だから、なにはともあれ元気そうでよかったよ」
「じゃ、上がらせてもらうわよ～」
「ちょ…　ちょっと」
　家主の断りもなく上がっていいのかと思ったが…　まぁここは流れるままに身を任せよう。そして部屋に入って真っ先に思ったのは…　何と言うか、年不相応な気がする
「これすごい！　スポーツ選手みたい」
「勝手に触んないでよ！」
「水しかない」
「勝手に開けないで！」
「ま、いいから座って座って」
「いきなり来て何なのよ!?」
　ビックリするくらいのフリーダム振りだなぁ、勇者部はなどと考えていると

「あのね…　ハッピーバースデー夏凛ちゃん！」
「「「「おめでとう！」」」」
　そう、わざわざ三好さんの家にやって来たのは彼女の誕生日を祝う為である
「あんた今日誕生日でしょ、ここに書いてあるじゃない」
「友奈ちゃんが見つけたんだよね」
「あって思っちゃった。だったら誕生日会しないとねって！」
「歓迎会も一緒に出来るねって」
「本当は子供達と一緒に児童館でやろうと思ってたの」
「驚かそうと思って黙ってたんだけど」
「でも当のあんたが来ないんだもの、焦るじゃない」
「迎えに行こうと思ったんだけど、少し距離はあるし子供たちは盛り上がっちゃうしで中々解放されなかったんだよな」
「そ、それでこの時間になっちゃったって訳…　ん、どうした？ひょっとして自分の誕生日も忘れてた？」
　俺たちの話に一向に入ってこない三好さんを少し不思議に思ったのは風先輩が三好さんに声をかけるが彼女は黙ったまま俯いていた
「…　あほ…　ばか…　ぼけ…　おたんこなす」
「何よそれ？」
「えっ？　えっ？」
　まさかの罵倒である、だけど不思議とそんなに嫌な感じはしない
「誕生日なんてやったことないから、何て言ったらいいのか分からないのよ…　！」
　成る程…　そう言う事ならいやな感じはしないわけだ。俺達だけじゃなく勇者部のみんなもそんな三好さんの事を優しい表情で見ていた
「お誕生日おめでとう、夏凛ちゃん」
　友奈がそう言った後すぐ、三好さんも席についていよいよ誕生会が始まった
「ワハハ、飲め飲め～」
「コーラで酔っぱらうんじゃないわよ」

「あっ、夏凛さん折り紙練習したんですか？　凄い上手」
「わーっ、みるなーっ！」
　思わぬ形で判明する、三好さんの真実…　というか何だかんだ言って三好さんも楽しみにしてたようである
「勇者部の予定と私達の遊びの予定、えーと後は…」
「コラーッ！　勝手に書き込むなーッ！」
「忙しくなるわよ～」
「勝手に忙しくするなッ！」
「文化祭でやる演劇の練習もあるし、忙しいよ～」
　友奈の一言を聞いた瞬間、その場から音が消えた
「…　演劇？」
「今年演劇やるんだな…　知らなかった」
「いつ決まったんですか？」
「あ…　あれれ？　もしかして。私の中のアイデアを勝手に口走っちゃった…　かも」
「バカなの？」
　三好さん、一刀両断である
「いいわね、演劇」
　そんな中、友奈の案を聞いた風先輩は俺たちの方を向いてきた
「決まり！　今年の文化祭の出し物は演劇で行きましょう！」
　少し前に話合った議題がこんな所で決まるとは予想外だが…
「俺も良いと思いますよ、演劇」
「でしょ？　…　というわけで、分かったわね夏凛、期待してるわよ？」
「私を巻き込まないでよ！」
「巻き込むも何も、一応部員だから手は借りるつもりだったし」
「よかったね、友奈ちゃん」
「うん！」

　俺たちが話をしている横から、友奈と東郷の声が聞こえてくる…
そっからは何事もなく誕生会を終えた俺達は軽く片付けを済ませる

とそれぞれの帰路につく、俺と友奈、東郷は同じ道である為並んで歩きながら、今日の事を振り返る
「成功して良かったね！」
「そうね、夏凛ちゃんも喜んでいたみたいだし」
「文化祭でやる内容も無事決まった…　明日から忙しくなるなぁ」
まぁ、脚本を書くであろう風先輩が完成させるまで具体的な動き始めは出来ないものの、それでもやる事が決まったのは大きいと思う
「おっと、それじゃあ俺の家はこっちだから。また明日」
「うん、またね！　徹くん！」
「また明日」
「あぁ、またな」
それにしても、ここまで平和だと逆にそろそろ何か大きな事件が起きそうで怖くなってくる…　けれど、それでも俺に出来るのは目の前の日常を守るだけだから、死ぬ気で頑張ろう

第捌話　試練に勝つ【前】

相も変わらない日常を送っている勇者部部室、頭に牛鬼をのせた友奈は活動報告に貼る新聞の場所決めを、東郷は勇者部公式サイトの更新、そして風先輩は文化祭でやる演劇用の脚本作りをしている。俺は読書中、樹ちゃんはタロットカードを見つめ、三好さんは煮干しを齧っている…　いつもならこういう場面は基本的に何かしらの依頼があるのだが、今日は随分と暇らしい

「あーもうっ、ストーリーが思いつかん！」

「いつもの人形劇でやってる奴じゃダメなんですか？」

「それでもいいけど、少し子供っぽすぎる気がするのよねー」

どうやら早々簡単にはいかないらしい

「そういえば、にぼっしーちゃん」

「ちょっと待って、それ私の事？」

「いーじゃない、可愛くて」

「ゆるキャラみたいなあだ名つけるな！」

「語尾はぼっしーだな、何々ぼっしー」

「だからゆるキャラじゃないって言ってるでしょうが！」

相変わらずからかい甲斐のある子だなぁ、この子は…

「それより、猫探しのポスター…」

「そんなのもう作ってあるわよ」

そういえば、三好さんにポスター作って来てもらう予定だったな、どんなもんなのか覗いてみると…　中々に個性的

「…　妖怪？」

「…　神話の怪物だろ」

「猫よ！」

「はぁぁぁぁぁ」

「樹？　どうしたのため息なんてついて」

確かに、あまり気にしていないが樹ちゃんがここまで落ち込んでるのも珍しい気がする。風先輩が樹ちゃんに何があったのかを聞くとおずおずと話始めた

「…　あのね、もうすぐ歌のテストでうまく歌えるか占ってたんだけど」
「死神の正位置か…　意味は確か、破滅とか終局だったっけか…　それにしても、不吉だな」
「気にしすぎは良くないわよ」
「そうだよ！　こういうのってもう一度占ったら全く別の結果が！」
友奈のその言葉を信じて改めて三回ほど占ってみるが
「…　見事に全部、死神の正位置だな」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
この結果は流石に全員絶句せざる得ない

そして流石にこのままではまずいと思ったのか風先輩は俺達をいつも黒板の前に議題を書き始める、緊急会議である
「勇者部は困ってる人を助ける！　それは部員だって同じことよ」
「歌が上手くなる方法かぁ…」
「まずは歌声でアルファ波を出せるようになれば勝ったも同然ね…良い音楽や歌というものはたいていアルファ波で説明がつくの」
「アルファ波…　そうなんですか」
「んなワケないでしょ！」
所説…　あるようなないような、とりあえずアルファ波にはリラックス効果…　というか心身にいい影響を及ぼす効果があるとも言われているらしいが…　流石に突拍子がヤバい
「樹は一人で歌うとうまいんだけどね、人前で歌うのは緊張するってだけじゃないかな？」
「それならどうにかしてリラックスできる状況を作るか、人前で歌うのに慣れるしかないですかね」
「それなら、あそこに行こう！」
何か思いついたらしい友奈の言葉を聞いてやって来たのはカラオケ、確かに人前で歌うのに慣れるという観点から見るとカラオケは良い気がする

バッサリと時間を飛ばして結果だけ申し上げると・・・ダメでした
優先輩が高得点出したり、友奈と三好さんがデュエットしたり、東郷がいつもの歌ったりしたけど、やっぱり樹ちゃんは歌うときになるとカッチカチになっていて・・・正直目も当てられなかった、歌声の中に光るものがある分、少し勿体ない
因みに、先人の知恵を借りるという事で師匠に対処方が無いか電話をしたりもしたのだが・・・
「緊張しないで歌を歌う方法う？　んなの、場数こなすしかねぇに決まってんだろ」
というありがたい一言を頂いた後に切られた、流石の師匠も歌は専門外だったらしい。流石に時間も時間なので解散という事になった翌日の勇者部、机の上に置かれているのは大量のサプリメントと調味料
「喉に食べ物とサプリよ」
三好さん、自信満々である
「マグネシウムやリンゴ酢は肺にいいから声が出やすくなる。ビタミンは血行を良くして喉を健康に保つ、コエンザイムは喉の筋肉の活動を助けオリーブオイルと蜂蜜も喉にいい」
詳しい、まるでサプリ博士だなと言わんばかりに知識を披露している三好さんである
「夏凛ちゃんは健康食品女王だね！」
「健康のためなら死んでもいいって言いそうなタイプね」
「さぁ樹、これを全種類飲んでみて、ぐいっと」
まさかの全種類いっき、それは喉の云々よりも体調が壊される危険性があるだろう
「ぜ・・・全種類って多すぎじゃ？　流石の夏凛でもムリでしょ!?」
「さすがの夏凛だって・・・ねぇ」
風先輩の一言がどうやら三好さんのスイッチを入れてしまったらしい
「いいわよ、お手本見せてあげるわ！」

ものすごい勢いでサプリと調味料を流し込んでいく三好さん、全部平らげるとその顔がみるみる青くなると、脱兎のごとく部室を出て行く

「サプリメントは用法容量を守って使いましょう」

それを実感することの出来る実演だった…

「サプリは一つか二つで十分よ…」

三好さんが戻ってきた後、サプリを飲んだ樹ちゃんが歌を歌うが固さは抜けきっている様子はない

「喉よりもリラックスの問題じゃない？」

「体と言うよりもメンタル的な問題っぽいですよねぇ」

「じゃあ次は緊張を和らげるサプリを持ってくるわ」

「やっぱりサプリなんですか…」

なんかこう、もっと別の物はないんだろうか…

そして来るべき樹ちゃん、歌のテスト当日

「樹ちゃん、歌のテスト大丈夫かな」

「大丈夫よ、あの子は私の自慢の妹なんだから」

「応援メッセージは風先輩が教科書に挟んでくれたみたいだし、後は信じるしかないでしょ」

そんなことを話していると部室の扉が開いて樹ちゃんが入ってきた

「樹ちゃん… ど、どうだった？」

「… バッチリでした！」

樹ちゃんのその言葉を聞くと、俺達全員の表情が崩れる… 本当に良かった

「やったやった！」

「きっと皆をかばちゃだと思ったのが良かったのね」

「夏凛さんもありがとうございます！」

「私はべつに… その」

樹ちゃんがちらっと風先輩の方を見た後、俺達全員は天高く拳を突

き上げる
「「「「やったー！」」」」
樹ちゃんが無事乗り切った日の学校も無事終わり、何気ない一日で終わると思っていた
太陽が沈み始め、赤みがかった空が広がる中…　世界は静止した
「このタイミングで来るのか…　よしっ、気合い入れるか」
その言葉を最後に俺は世界に広がっていく眩い光に包まれた

第玖話　試練に打ち勝つ【後】

「残り七体、全部来てるんじゃないの、これ」
　俺達のスマホの画面に表示漁れているバーテックスの数は三好さんの言う通り七体
「総攻撃、最悪の襲撃パターンね…　やりがいありすぎてサプリも増しましだわ…　樹もキメとく？」
「その表現はちょっと…」
　それにしても動きがないな
「なんですぐ攻めてこないんだろ」
「さぁ…　どのみち神樹様の加護が届かない壁の外に出てはいけない教えがある以上、私達からは攻め込めないけどね」
　問題はそこだ、こっちから攻め込めるのが一番いいが壁の外に出ることを禁じられている以上、敵が動いてこっちに来ない限り攻められないのが少し辛いところ、そんなことを考えていると先行して偵察に行ってた風先輩がこっちまで戻ってきた
「敵さん、壁ギリギリの位置から動きそうよ…　皆も準備を」
　風先輩の言葉を聞いた俺達全員が勇者服へと変身して、横一列に並びたつ
「敵ながら圧巻ですね」
「こいつらを殲滅すればもう戦いは終わったようなもんでしょ」
「皆、ここはアレいっときましょう」
「あぁ、アレですか」
「ア…　アレ？　どれ!?　またなんか変なことするのアンタたち!?」
「別に変な事じゃない、円陣だよ」
「円陣？　それ必要!?」
「気合いをは必要でしょ？」
　そういいながら俺達は円陣を組んだ後に少しためらった後に三好さんも入ってくる
「あんたたち、勝ったら好きなもの奢ってあげるから。絶対死ぬんじゃないわよ！」

「美味しいものいーっぱい食べよっと！　肉ぶっかけうどんとか！」
「言われなくても、殲滅してやるわ」
「わ・・・私も、叶えたい夢があるから」
「皆を・・・国を！　護りましょう！」
「あぁ、絶対に護ろう・・・俺達の飼えるべき場所を！」
「よーっし！　勇者部ファイト！」
「「「「おーッ!!」」」」
　円陣を組んで気を引き締めた後、俺達は改めて敵に向き直ると、先陣を切る形で三好さんが敵に向かう
「突っ込むわ！」
「私達も！」
　俺たちがバーテックスと接敵すると、三好さんが一番先行していたバーテックスに一撃を叩き込み、続けざまに東郷の放った一撃が当たったことで、目の前の奴は地面に落ちる
「まずは一匹目！　封印するわよ！」
「すごいよ夏凛ちゃん！」
「他の敵が来る前に倒そう・・・ってこいつ、御魂が凄い速さで?!」
　ものすごい勢いで回転する御魂に三好さんは刀を投げつけるが突き刺さることなく弾かれた
「ちっ」
「それなら俺が動きを・・・止める！」
　蛇腹剣を使って御魂をぐるぐる巻きにすると、動きが少しだけ鈍る
「友奈！」
「任せて！」
　俺の意図を組んだ友奈が御魂にパンチを叩き込むと、一部が欠けて動きが止まる。その瞬間を見逃さなかった東郷が御魂を撃ちぬき、消滅した
「ヒュー、ナイス連携！」
「ありがとう！　東郷さーん！」
　友奈が手を振ってる方向にグッドサインを送った直後、地面が震えるほど大きな音が樹海中に鳴り響く

「な…　何よこの音、気持ち悪…　っ」
「頭に…　響くッ」
「こ…　これくらい、勇者なら…　うぅっ」
「音は…　皆を幸せにするもの、人を苦しめる音は…　こんな音はぁー！」
「ナイス樹！　次は私が…　お前らまとめてぇー！」
　根性を見せた樹ちゃんが敵のベルのような器官を拘束した隙に風先輩が俺達の近くにやって来ていた三体に一撃を叩き込むと音が止み、バーテックスに大ダメージを与えることに成功する
「よしっ、三体纏めて封印するわよ！」
「先輩、待ってください！」
「…　バーテックスの様子がおかしい、戻っていく…　後退？　いや、集まってるの？」
　目の前で起こっている事態が何なのか観察していると、程なくして何故バーテックスが一か所に集まっているのかを理解する
「これは…」
「合体!?　そんなの聞いた事ないわよ！」
「ふぇぇぇぇ」
「でも、まとめて倒せるよ！」
「友奈の言う通り、まとめて封印開始よ！」
「待ってください…　全員避けてッ！」
　敵の様子がおかしいと思い観察していると、火球が俺達の方に向かって飛んできた。まずは一撃目を避けた俺達は各自バラバラに動き火球を避けようとするが、追尾弾のような軌道で俺達の方に向かってくる
「避けられ…　ッ！」
「重力に身体を預けてそのまま下に降りろ！」
　聞こえてきた声の通りにすると、火球と俺の間に何かが割って入り、火球は目の前で爆発した
「うわッ！」
「大丈夫か？」

「…師匠！」
「悪い、少し入るのに手間取った」
「それは良いんですけど、皆が！」
「心配ならお前は他の奴の所に行ってやれ…アイツの足止めは俺がしとく」
「大丈夫…なんですか？」
「あぁ、俺はお前の師匠だからな…わかったらさっさと行け」
「ッ！　…お願いします！」
俺は師匠に背を向けると、ばらけてしまっているがみんなと合流するために走りだした

「さてと、八重樫にあぁ言ったものの…俺一人で何処まで持つか」
正直目の前にいるバカみたいな大きさのバーテックス、地味に因縁深いレオ・バーテックスを見上げながら俺はそう言ってみるが…正直言ったところでどうしようもない
「なら、やる事は一つだよな」
あの子達の覚悟が決まる前に、目の前のデカブツを叩き潰す。そう決めると俺は目の前のバーテックスに向かう、手に持った武器を盾から鎌に変化させる
敵もこっちに気が付いたのに気づきデカブツは火球を放ってくるが、鎌を振るって俺は火球を切り裂く
「切っても切ってもキリがないな…それならぶん投げてみるかッ！」
鎌を思いっきりぶん投げると火球の間をすり抜けてデカブツの身体に突き刺さる
「よし、後は近づくだ…ッ！」
近づこうとした瞬間、足が動かなくなった。自分の足に目を向けると右足の太ももの辺りがひび割れている、それだけじゃない、右足だけでなく左足や両腕も少しずつひび割れ初めている

「時間が…　クソがッ！」
　俺の身体がどうなろうと知ったこっちゃねぇがこれ以上あの子達に負担をかけるわけにはいかない。このまま戦いを続けてたらあの子達は満開を使うことになる
「俺のエゴでも…　そんなの許容できねぇよなぁ！」
　ひび割れ始めた体を動かし、バーテックスに突っ込む走っているうちに右腕の感覚が消える。ひびの入った腕は砕けていないものの完全に動かなくなっている、西暦の頃は腕がなくなったり腹に風穴が空くなんて日常茶飯事だった。このくらいなんてことない
「右が動かなくても、左が…　動く！」
　バーテックスに突き刺さった鎌の柄を持って思い切り体重をかけ表面に切り裂いていく。体をブランコのように動かして鎌の柄の上に乗ると、左手に籠手を出現させる
「借りるぞ、友奈…　はぁッ!!」
　左腕に出現させた籠手で思いっきりぶん殴って表面にクレーターを作った直後、足場にしていた鎌と左腕の籠手が消滅し、俺は地面に叩きつけられる
「あぁ…　くっそ、俺一人じゃここが限界か…　結局…　なんも守れなかったな…」

　風先輩たちの方に向かっていると、大きな爆音が聞こえてくる。振り返ってみるとバーテックスには大きな窪みが出来ていた
「師匠がやったのか？　でも、今はそれよりみんなを…　ッ！」
　その言葉を後すぐに、それに満開の花が咲く
「まさか…　満開!?」
　どうしてと思ったすぐあと、別の場所でもう一輪の花が咲くのを見ながら走っていると、友奈の姿が見えてくる
「友奈！　大丈夫か!?」
「徹くん！　うん、大丈夫だよ」
「良かった…　でも、アレは」

友奈と合流してすぐ、地面から出てきたバーテックスを東郷が攻撃をすると、すぐに御魂が出てくると、それを撃ちぬいた
「強い・・・」
「徹くん、これ！」
友奈に差し出されたスマホを見ると、神樹様のすぐ近くにバーテックスが一体いることに気付く
「神樹様に近いッ・・・けどここからじゃ、間に合わない」
続けざまに三輪目の花が咲く淡い緑色の花、満開をした樹ちゃんは糸を使ってバーテックスを切り裂き、御魂を砕いた
「やった・・・残るは」
「あの大きいのだけ・・・だね！」
俺達も残り一体を向くと、あの一体は火球を集中させて巨大な火の塊を作った。風先輩がその火球を抑えてすぐに俺達にも聞こえる声で叫んだ
「勇者部一同封印開始！　私がこいつの相手をしている間に、早く！」
「よし、行こう」
「あぁ・・・ッ！」
配置に着いた俺達がバーテックスを囲むと封印のカウントが開始されると同時に御魂が排出された
「あれが御魂、うそでしょ・・・」
「マジかよ・・・」
現れた御魂は俺たちがみたどれよりも巨大なモノだった
「何から何まで規格外すぎるわ・・・」
「しかもあの御魂、出てる場所が・・・宇宙!?」
「お・・・大きすぎるよ、あんなのどうやって」
「あんなの・・・どうすれば」
「大丈夫、御魂なんだから今までと同じようにやればいいんだよ・・・どんなに敵が大きくたって諦めるもんか！　勇者ってそういうものだよね」
「行こう、友奈ちゃん・・・今の私なら友奈ちゃんを運べると思う」
「三人は封印をお願い」

「早く殲滅してきなさいよ」
「任せてください！」
「友奈・・・満開は」
「大丈夫だよ、覚悟はできてる」
「・・・わかった、頑張れ！」
友奈たちを見送ってすぐ、封印を続けるが予想よりも速く浸食がすすんでいく
「クソッ！　浸食が速い」
「時間が無い、拘束力がなくなっちゃう」
「このままじゃ・・・ッ！」
少し焦りを感じていると、樹海の影から出てくる人影が見えた
「師匠!?」
「・・・手を貸す、力不足だが多少の足しには、なるだろ」
そう言うと師匠は友奈のいた場所に立つと、槍を出現させて地面に突き刺すと僅かではあるが拘束時間が延びる。全力で拘束を続けていると空がまばゆく輝き、なにかが降ってくるのが見える
「友奈、東郷・・・」
「・・・ッ！」
樹ちゃんが糸を伸ばすとが落ちてくる速度が速いのか、すぐに切れる
「ものすごい衝撃、もしこのまま落ちたら・・・」
「絶対に助けて見せます！」
その言葉の通り、樹ちゃんは幾重にも糸を張り巡らせて振ってきた花の蕾をキャッチした
「ナイス根性！　すごいわ樹、みて、アンタが止めたのよ！」
「夏凛さん、徹さん、行ってあげてください」
「わかったわ！」
「樹ちゃんは？」
「この子は俺が見てるから・・・行ってやれ」
「わかりました！」
三好さんと共に花の蕾に近づいていくと、花が開き眠った状態の二

人が見える。周りを見ると全員生きているのかどうか分からなかったが。友奈の声が聞こえたのを皮切りに全員生きている事が分かった

　そのことに三好さんと二人で安堵していると樹海化は解け、讃州中学の屋上に戻って来ていた

「いやぁー、美人薄命だから私は危なかったけど、セーフ」

「師匠、大丈夫ですか?」

「あれ?　無視?」

　樹ちゃんの近くにいた師匠に声をかけると少し辛そうな笑顔を見せてグッドサインを送ってくるのを見てすぐに、三好さんの携帯が鳴る

「三好夏凛です…　バーテックスと交戦、負傷者四名。至急、医療班の手配をお願いします…　尚、今回の戦闘で十二体のバーテックスはすべて殲滅しました!　私達、讃州中学一同が!」

　そういう三好さんの姿、とても誇らしそうに見えた

　なにはともあれ、これで戦いは終わったのだと思う…　そして俺達は守ったんだ、いつもの日常を

第拾話　平和Ⅰ

あの総攻撃の後、病院まで運び込まれた俺達は検査の為に入院することになった

『昨日の工事中の高架道路が落下した事故の続報です。事故現場周辺で発生した大規模な火災は消し止められ。奇跡的に被害者はいませんでした、事故の原因については調査中で――――』

「道路の落下事故…　か」

「徹、もしかして落ち込んでる？」

「もしかしなくても落ち込んでますよ…　風先輩こそ、満開使ったのにやたら元気ですね」

「…　私だって無理くり元気にやってるだけよ。自分で覚悟を決めたとはいえ…　やっぱりね」

あの戦いで俺と三好さん以外の全員は満開を使用し、体の一部を代償として捧げてしまった

「おっ、友奈も検査終わったみたいね」

「はい…　って風先輩、その目」

「ふっふっふ…　これは先の暗黒戦争で――」

「満開の代償でしょ、なにバカな事言ってんのよ」

「誰がバカよ！」

「そういう友奈は、どっかに違和感はないのか？」

「うん、私は今のところ大丈夫だよ…」

どうやら友奈は今のところ何処か失ったりはしていないらしい、それは風先輩のようにわかりやすい代償ではないのかそれとも本人が気づいていないだけなのか…

「徹くん、どうしたの？」

「あぁ、いや…　元気そうで良かったなって」

「そっか」

俺たちがそんなことを話していると、検査を終えたのか東郷と樹ちゃんもやって来た

「私達も検査終わりました」

「お疲れ様、東郷、樹ちゃん」
「樹～、注射されて泣かなかった？」
　そうして俺と風先輩が声をかけてみると、東郷からの返事は貰ったが樹ちゃんは喋る様子がない…　というより、喋ろうとしているのに喋れていないといった方が正しい気がする
「…　樹？」
「まさか…」
「えぇ、どうやら声が出ないみたいです」
「…　東郷は、どっかに変化はないのか？」
「…　私は左耳が聞こえなくなったわ」
　樹ちゃんは声…　というより声帯か？　そして東郷は左耳
「でも、徹くんのお師匠さんたちが直す方法探してるんならきっと大丈夫だよ！　…　そうだっ、私達バーテックスを全部やっつけたんだから、お祝いしないと！」
「…　そうだな！　いつまでも暗くなってる訳にもいかないし、パーッと行こう！」
　ひとまず暗くなった考えは振り切って目の前の勝利を喜ぶことにする、それに師匠たちがどうにかする方法を探してるんだ…　きっと何とかなる

　そうと決まれば進みは速いのが勇者部、売店でおかしや飲み物等を適当に買い漁ると、みんなのところまで戻る
「売店で買ってきましたー！」
「適当に見繕ったら結構大量になっちゃいましたけどね」
「ほんと、随分買ってきたみたいね」
　まぁいいけど、と風先輩は言うと買ってきたジュースを一本手に取る。それを合図に俺達全員それぞれジュースを手に取ると風先輩が口を開いた
「なにはともあれ、みんなよくやった！　勇者部の勝利を祝って、かんぱーい！」

「「「かんぱーい！」」」

乾杯した後にみんなそれぞれジュースを一口飲むと、友奈の反応に少し違和感を感じる、どうやらそれを感じたのは東郷もだったようでとりあえず後で聞いてみることにして・・・今は楽しもう

「そうだ、みんなにこれ、新しい携帯」

「新しい携帯・・・でもなんで急に？」

「代替え機って奴ね、前のは回収されたでしょ？　メンテナンスとかで戻ってくるのに時間がかかるからしばらくそれ使って」

「・・・あのアプリ、ダウンロードできなくなってますね」

「あれは勇者部専用だからね、私たちの戦いは終わったんだし」

「そっか・・・勇者になる必要なくなりましたんもんね・・・あの、牛鬼は？」

「・・・ごめん、アプリが使えないからもう精霊は呼びだせない」

「そうですか・・・ちゃんとお別れしたかったな」

二人の話を聞きながら、新しいスマホに目を向ける・・・でもそうか、ここに来てようやく本当に戦いが終わったんだっていう実感を持てた気がした

祝勝会を終えた俺が病室に戻ろうと歩いていると少し奥の方から言い争うような声が聞こえてくる。廊下の角から声のする方を覗いてみると、そこにいたのは師匠ともう一人、スーツ姿の男の人だった

「だーかーら、もう大丈夫だって！」

「ダメです、今日・・・というより一か月は病室で安静にしていてください」

「一か月も留守にしてたら依頼が溜まるだろうが！」

「それなら私達で何とかしておきますから、大人しくしていてください」

なんというか、師匠っていっつもどっか落ち着いてるイメージがあったから、ああやって声を上げて言い争いしているのは少し新鮮だ

「というか、なんだよこの包帯・・・布の上からペタペタ札貼りやがって、そんな事しなくても大丈夫だっての」

「万が一があったりしたら、僕たち…　というか僕がご先祖様に顔向けできないので」
「心配性と言うかなんというか…　まぁいいや、分かったよ、大人しくしてりゃいいんだろ」
「わかってくれたようで何よりです…　あぁそれと、貴方から目を離さないように病院にはしっかり言ってあるので、抜け出そうなんて考えないでくださいね」
「…　っち」
「やっぱり抜け出そうとしてましたね…」
「だぁもう！　わーったよ！　抜け出さねぇ！　だからもう帰れ！」
「えぇ、私にも仕事があるのでこれで失礼します」
「…　ったく、心配しすぎなんだよ」
　スーツの男の人が帰るのを見送った後、師匠のぼやいた声が聞こえてくる
「おい、そこに隠れてる奴出て来い」
　どうやら師匠にはバレていたようだ…　廊下の角から出ると師匠は少し頭を掻いた後にこっちへ向かってくる
「…　盗み聞きか？」
「すみません、聞くつもりはなかったんですけど」
「まぁいいや、時間も時間だしさっさと部屋戻れ」
「…　あの、師匠。もしかしてあの時の戦いで何かあったんですか？」
「別になんもねぇよ、考えすぎだ」
「なら、その腕の包帯どうしたんですか…　よく見ると腕だけじゃなくて全身に巻いてるし」
「なんもねぇって言ってんだろ、ただの打撲だ…　じゃあな」
　師匠はそういって病室の中に帰ってしまい、それ以上聞くことはできなかった

第拾壱話　平和Ⅱ

「ふふん、どうよこれ」
「超カッコいいです！」
「ふっふっふ、イケてるでしょ」
　検査入院から数週間の時が流れ、退院した俺、友奈、風先輩、樹ちゃんは二人いないだけでだいぶ広く感じる部室でいつも通りの日常を送っていた。東郷はまだ入院…　三好さんは、まだやって来てないみたいだ
「あれ？　夏凛ちゃん、まだ来てないんですか？」
「そういえば来てないな」
【夏凛さん、何か用事があったんでしょうか？】
「いや、俺も友奈もそんなのは聞いてないけど…　というか」
「樹ちゃん、そのスケッチブックどうしたの？」
【これで話せます、お姉ちゃんの提案です】
「いつ治るか分からないし、やっぱり話せないと不便だからね」
　そう言うと風先輩は部室を見回すと腰に手を当てて話始めた
「それにしても、今日は四人か。文化祭の演劇について話したかったんだけど」
「ハッ、演劇！　そうでした！」
「発案者が忘れてどうする…」
「勇者活動が一大事だったから忘れてても仕方ないわよ。まぁでも、四人だけじゃ話し合いもあんま意味ないし何か他の事を――」

　そんなこんなで、自分たちで出来る範囲の活動を終えた俺と友奈の二人は東郷の病室までお見舞いにやって来ていた
「東郷さんっ、お見舞いに来たよ」
「お見舞いの品、棚の上に置いとくぞ」
「友奈ちゃん、八重樫君」
「パソコンで何してるの？」
「一応、満開の後遺症について纏めておこうと思って…　少しでもみ

んなの為になるように」
「そっか」
「うん。八重樫君、纏め終わったら不知火さんに渡しておいてもらえる」
「わかった、少しでも治療法発見を速めないとだもんな」
「…それと、二人とも来てくれてありがとう」
「お話ししたかったから、徹くんはいるけど東郷さんがいないと学校の楽しさ三割減だよ」
「まるで俺と一緒にいると楽しくないって言ってるように聞こえるんだけど…」
俺がそう言うと友奈は少し慌てたように俺の方を向く
「あぁ、ちがうちがう！　そうじゃなくて…　やっぱり徹くんがいて東郷さんもいるから学校が楽しいんであって！　決して徹くんと一緒にいて楽しくないというわけじゃ…」
「ふふっ、友奈ちゃん。徹くん笑ってるわ」
「へっ？」
「…すまん、冗談で言ったんだがそこまで必死になってしまうとは…　ははっ」
「もうっ！　酷いよ徹くん！」
やっぱり何だかんだあっても相変わらず友奈は良いリアクションをするなぁ、などと考えながら久々にこのやり取りが懐かしい気がする。その後あんまり長く居座っているのも病院への迷惑になると思い、三十分程話した後病室を後にする

それからも何気ない日常を送っていると、本当にこの前まで戦っていたのが嘘のように思うが、友奈はパソコンの操作に四苦八苦しているし満開の後遺症が無いとは言え元々五体満足ではない俺だと出来る事もたかが知れている
東郷の退院ももう少し先だし、三好さんはあの日以来一切やって来ていない、心なしかみんなの表情も少し暗い気がする
「…　やっぱり、三人だと調子出ませんね」

「そうだなぁ、どーにも気が抜けてるって言うか…炭酸の抜けたジュースみたいな感じ」
「徹、その例えはわけわかんないわよ」
「…やっぱりそうですか」
【夏凛さん、ずっと来てないですね】
「ＳＮＳにも返信がなくて。夏凛ちゃん、授業が終わったらすぐ帰っちゃうし」
「一応教室にいる時は話をするけど、なんか一線引かれちゃってる感じなんですよね」
「そっか…」
「よしっ！　私、夏凛ちゃんのところに行ってきます！」
そう言うと友奈は部室から走って出て行ってしまった
「心配なんで、俺も行ってきます」
「わかったわ」
友奈の後を追う形で俺も部室から出て、友奈の後を追う。幸いなことにあまり遠くには行っていなかったようですぐ追いつくことが出来た
「おーい友奈、待ってくれ」
「徹くん、どうしたの？」
「俺も一緒に行く…というか、三好さんが何処にいるのかわかるのか？」
「えっと…どこだろう？」
「ダメじゃねぇか…まぁそうだな、とりあえずいつも鍛錬してる所から行ってみるか」
「わかった！」
二人で三好さんがよく演舞の型みたいなのをやっている浜辺に向かうと、案の定三好さんの姿が見える
「夏凛ちゃーん！　徹くん、ホントにいたよ！　おーい夏凛ちゃーんって、おうっ!?」
「ちょ、友奈!?」
「…大丈夫か、友奈」

「何やってんのよ、あんた」
「二人とも、そこは駆けつけて受け止めてよ～」
「「無茶ゆーな」」
二人で友奈の事を起こすと、三好さんは腕を組んで俺たちの方を見る
「・・・何しに来たの」
「部活へのお誘い！　最近夏凛ちゃんが勇者部サボりまくってるから」
「このままだとバツとして腕立て五百回にスクワット三千回、腹筋一万回って事になるらしいぞ」
「桁おかしくない!?　って言うからしいって!?」
「さぁ？　友奈に聞いてくれ」
「さっき徹くんが言ったバツですが、今日の部活に来たら全部チャラになります！　どう、来たくなったでしょ？」
「ならない、もともと私は部員じゃないし・・・それに、もう行く理由は無いのよ」
「理由って？」
「私は勇者として戦う為にあの学校に来た、あの部にいたのは他の勇者と連携を取った方が良いからよ」
三好さんの言葉を聞く感じ、なんか自分でもわけわかんなくなってしまっているように感じる
「・・・だいたい、風も何考えてるのよ。勇者部はバーテックスを殲滅する為の部活なんでしょ、バーテックスがいなくなったら・・・そんな部もう意味ない！」
「違うよ」
三好さんの言葉に対して友奈ははっきりと否定すると、真っ直ぐ見つめて言葉を続ける
「勇者部は・・・今は夏凛ちゃんもいて、皆で楽しみながら人に喜んでもらえる事をしていく部だよ。バーテックスなんていなくても勇者部は勇者部、戦う為とか関係ない」
「でも・・・私、戦う為に来たから、もう戦いが終わったから・・・だから

もう、私には価値が無くて、あの部にも居場所が無いって思って・・・」
「居場所の有る無しとか関係ないだろ、少なくとも俺達は三好さんも含めて勇者部だって思ってるし」
「そうだよ！　それに勇者部五箇条一つ、悩んだら相談！　戦いが終わったら居場所がなくなるなんて、そんな事無いんだよ」
　そういいながら友奈は三好さんの腕を取ると、言葉を続ける
「夏凛ちゃんがいないと、部室は寂しいし私は夏凛ちゃんと一緒にいるの楽しいし・・・それに私、夏凛ちゃんの事が好きだから」
「ッ！　・・・し、仕方ないわね！　そこまで言うなら行ってやるわよ」
　おっ、三好さん陥落・・・友奈には人たらしの才能があるしころっとやられたな、こりゃ
「そういえば、徹」
「どうかしたのか？」
「あんた、ずっと私の事を苗字で読んでるけど、別に名前で良いわよ」
「良いのか？」
「えぇ、特に気にしないし」
「分かった、それじゃあ次から名前で呼ぶことにする」

　そんなことを話しながら途中で甘いものでも買って部室に戻ると、風先輩と樹ちゃんもまだ部室にいた・・・まぁ部活動時間中だから当然っちゃ当然だけど
「結城友奈！　ただいま戻りました！」
「八重樫徹、ただいまです」
「二人ともおかえり～、おっ夏凛も来たのね！」
「ふ、二人がどうしてもって言うから」
「実際には友奈にころっと陥落したんだけどな」
「うっさいわよ！　徹！」
「あっ！　それとこれ、差し入れです」
　そう言うと友奈は二人に駅前で買ったシュークリームの入った箱を渡す
【これ、駅前の有名なお店のですよね！】

「樹ちゃん正解！」
「…でも、お菓子は…友奈、味が分からないんじゃ」
「あれ？　気付いてたんですか」
「ごめんね、みんな…私が勇者部の活動に巻き込んだ所為で」
「気にしないでください、私達も気にしてないので！」
「そうですよ…俺が言えた義理じゃないですけど、満開はみんな覚悟を決めて使ったわけですし」
「でも…」
「そうですよ！　私は望んで勇者部に入ったし満開だって自分の意志で使いましたから！」
【そうだよ！】
「というわけで結城友奈、今後風先輩からの〝ごめん〟は一切聞きません！」
【私も！】
「俺もですよ」
「…ありがとう」
「さっ早くシュークリーム食べましょう！　風先輩が飢えて死んじゃうと思って買ってきたんですから！」
「ちょっと！　私が二十四時間お腹空かせてると思ってない!?」
少し暗かった雰囲気もすっかり元に戻ったのを見るとなんだか安心する。これで東郷も帰ってくれば晴れて勇者部完全復活だ

三好さん…改め夏凛が勇者部に復帰してから数日後、東郷の退院日になった俺達は勇者部総出で東郷の事を待っていると、看護師に車椅子を押された東郷が出てくるのが見えた
「あとは私が」
「ありがとう友奈ちゃん」
「ここは私の定位置だよ」
すっかり元の場所に収まった友奈と東郷が俺たちの前まで来ると、風先輩に向かって東郷が敬礼をする
「東郷美森、勇者部に帰還しました」

「ご苦労である、東郷准尉！」
　准尉なのか東郷
「まったく…　変な奴らね」
【退院おめでとうございます！】
「おかえり、東郷」
「ただいま、徹くん」
「それにしても、これで勇者部メンバー全員復活だね！」
　友奈はそう言うと茜に染まる街を見ながら話しを始めた
「この街を、私達が守ったんだね」
「普通の人達は私達の戦いなんて知らないんだけどね」
「そうね…　でも、みんながいなかったらこの世界はなくなってた…
ここに住む人たちは、死んでた」
「私、初めての戦いの時すごく怖かった。怖くて逃げたくて…　でも
逃げなくてよかった、ちゃんと勇者出来てたかな…　？」
「出来てたよ、東郷さんは凄くカッコいい勇者だった」
「辛いこともあったけど…　ほんとに守り切れて良かった」
　メール通知音が聞こえてくると、夏凛は少しうれしそうな顔をした
瞬間友奈たちに詰め寄られているのを見ながら、あることを思い出し
た
「そういえば、もうすぐ夏休みだな」
「そういえばそうだね、何しよっか？」
【山でキャンプ！】
「夏祭りも楽しみね」
「…　う、海に行くとか…」
「花火もやっとく？　やるからには打ち上げ花火百発くらい！」
「多分師匠なら出来ますよ、百発は無理でも十発くらいなら」
「十発でも出来るのは凄いわね…」
「よしっ！　全部やろう！　みんなで！」
　戦いが終わり、俺達は日常を取り戻した…　勇者になることのでき
なかった勇者部は元の形に戻り、これから続く日常と新しい思い出に
心を躍らせながら俺たちは帰路につく

第拾弐話　期待

　夏休み前に我ら勇者部一同がバーテックスを十二体倒した、そんな俺達に対して大赦はご褒美として合宿先を用意してくれたらしい
「と言う事で、夏休みに突入した勇者部一同…　合宿に来てます」
「あんた、誰に向かって言ってんのよ」
「…　いやっ、何となく言いたくなっただけ。暑さにやられたかな？」
　何となく声に出したくなったから出したら夏凛に変な表情をされたが、まぁ気にしなくて良いか
「それにしても、友奈たちも楽しそうだなぁ」
「そう言うあんたは、随分と疲れてるみたいじゃない」
「貴重な男手と言うわけで色々荷物持たされたからなぁ、少しは休憩もしたくなる」
「あっそ、それじゃ私は風に勝負でも挑んでこようかしら」
「おー、行ってこい行ってこい」
　風の方に向かっていく夏凛の事を見送ると、俺は目の前に広がる海を眺める
「この広い海も、俺達が守ったんだよなぁ」
「随分と年に似合わずアンニュイな顔してんな、八重樫」
「…　へっ!?　師匠!?」
「ようっ、お前らも旅行か？」
「いえっ、俺達は合宿です…　そういう師匠は？」
「俺は無理やり休養を取らされたんだよ…　アイツら心配しすぎなんだよ」
　師匠は師匠で休養の為にここに来たらしい
「それで、随分とアンニュイな表情をしてる八重樫君は…　一体どうしたんだ」
「何と言うか、少し感慨深くって…　本当に戦いが終わったんだなって」
「…　そうか、そうだよな」
「どうかしたんですか？」

「いやっ、何でもねぇよ…　そんじゃ、俺はもう行くからお前らも楽しめよ」
「はい、師匠もしっかり体を休めてくださいね」
「お前までそれ言うのかよ…　まぁわかったよ」
　師匠はそう言うと浜辺を歩いてどっか行ってしまった…　そういえば師匠の身体、まだ包帯が巻かれたままだったな

　それから浜辺で色々と遊んでいるとすっかり日も沈み始めていた
「楽しかったぁ、もうお腹ペコペコ～」
「夏凛かじってガマンして」
「それどういう意味よ!?」
「どうした、東郷」
「あっ、八重樫君」
「なんか気になってることでもあるのか？」
「…　なんだか、まだ少し不安に思って」
「不安？」
「えぇ、本当に戦いは終わったのかなって」
　確かに、そこは少し疑問に思っていた所だ…　バーテックスは全部で十二体と言われていたが本当にそれだけなのかとも思う、もし不測の事態が起きない可能性は無いのだろうかとも考えてしまう
「確かに…　本当に終わったのか気になる所はある」
「八重樫君も？」
「あぁ…　だけど、今は喜んでもいいんじゃないか？」
「えっ？」
「だってさ、これからの事は分からないけどさ、今は戦いは終わったんだから…　今を楽しめればいいかなって」
「今を…　楽しむ」
「難しいことはわかんないけどな」
「おーい！　東郷さーん！　徹くーん！」
　話が終わってすぐに友奈が手を振って俺達の事を呼ぶ
「そろそろ行くか」

「そうね」

旅館に戻ってきた俺達はそれぞれ着替えを終えると、勇者部一同（俺除く）の宿泊する部屋にやってくると目の間に用意されていたのはビックリするくらい豪勢な料理の数々

「凄いご馳走・・・！」

「何と言うか、流石に恐縮するな・・・」

「あの～、部屋間違っていませんか？　ちょっと私達には豪華すぎるような」

「とんでもございません、どうぞごゆっくり」

「私達、好待遇みたいね」

「ここは大赦がらみの旅館だし、お役目を果たしたご褒美って事じゃない？」

「つっつまり、食べちゃってもいいと・・・！」

【でも、友奈さんが・・・】

「あ・・・」

「おぉっ、このコリコリした歯ごたえ、たまりませんねぇ・・・このつるつるしたのど越しもいいね！」

「もう友奈ちゃん、いただきますが先でしょ」

「そうだった、ごめん」

「あらゆる手段で味わおうとしてるとは」

「いろいろと敵わないわね、友奈には・・・」

ポジティブと言うか、真っすぐなのが友奈の良いところだと改めて実感する、食事を終えた俺達は風呂に入りそれぞれ部屋に戻って布団の中に入って改めて今までの事を考える

「ほんとに、色々あったな」

今にして思うと、あの引っ越してきたときからすべては始まってたのかも知れない

始めて引っ越して友奈や東郷と会って、讃州中学に入学して・・・そして勇者になって戦い夏凛と出会った

「そしてこうやって、戦いが終わって日常を取り戻した」

未来に何があるのか分からないけど、今はただこの日常を噛み締めよう

翌日の帰宅直前、目の前に広がる海を見ていると風先輩が目の前に広がる海を見ながら少し痛いポーズを取っていた
「海が、騒がしいわね・・・！」
言動も少し痛かった
「で、どうしたんですか先輩、改まって」
「そして、そのポーズは？」
「帰る前には私達にはやる事があるでしょう」
「なんかあったけ、花火？」
【ナンパされてないとか言いそう】
「バーベキューですかね」
「ちゃうわ！　一応勇者部の夏合宿なのよ、少しは内容のある話をしないと！　文化祭とか・・・文化祭とか、文化祭とか！」
【三回も言った】
【でも、確かにお姉ちゃんの言う通り】
「劇をやるって話でしたよね、中身をつめていかないと」
「車の中で予定や配役の話し合いね」
「バーテックスを倒しても私達の日常が被害受けてちゃ世話ないわ。しっかり日常のスケジュールを守って完全勝利といきましょう！」
「まぁ、賛成してあげてもいいわ」
【帰るまでが合宿です】
「やるからには、全力で・・・だよな」
「よーし！　文化祭、必ず成功させよう！」
「おー！！！」
今度の文化祭は絶対に成功させることを当面の目標にこれからも日常が続いていく

第拾参話　変化

「バーテックスに生き残りが居て、戦いは延長戦に突入した・・・まとめるとそういうこと、だから皆にこれが帰ってきた」

　合宿から数日の時が流れ、勇者部の部室に集まった俺達が聞かされたのは予想している中でも最悪の事態。バーテックスの生き残りが存在し再び勇者として戦うことになる

「いつもいきなりでごめんね・・・」

「先輩もさっき知ったことじゃないですか、仕方ないですよ」

「そうですよ、それにもう風先輩のごめんねは聞かないって、俺達言ったはずですよ」

「ま、そいつ倒せば済む話でしょ。私達は敵の一斉攻撃だって殲滅したんだから、生き残りの一体や二体どんとこいよ」

【勇者部五箇条　なせば大抵なんとかなる!!】

「その通りですよ、皆がいれば大丈夫です！　それに徹くんも言った通り風先輩のごめんはもう聞かないです」

「ありがとう・・・よーし！　バーテックスいつでも来なさい！　勇者部六人がお相手だー！」

　などと風先輩が意気込んだものの、夏休みが終わり二学期が始まっても生き残りのバーテックスが来る気配はなく日常が過ぎていた

「全然こないねぇ、バーテックス」

「気にしすぎるのも良くないわ、友奈ちゃん」

「そうだな、ずっと気を張ってたら気が滅入っちまうよ」

「二人とも落ち着いてるなぁ、その秘策は？」

「師匠から面倒なことは頭で考えるなって教わった」

「かつて国を護り戦った英霊たちの活動記録、うちで映像みる？」

「で、できればわかりやすくアニメがいいなぁ」

「大丈夫、あるわ」

「あるんだ・・・」

「八重樫君も一緒にどう?」
「途中で寝る自信があるから遠慮しとく」
　そんなことを話しながら歩いていると、友奈の周りを一匹の精霊が周り始めた、俺達の元に戻ってきた勇者システムは俺を除くみんなを守っていた精霊の数が増えた。と言っても増えたのは満開を使用した四人のみで夏凛の精霊は一体から増えた様子はない
「ありゃ?　あわわ、火車!　急に出て来ちゃダメだって!」
「牛鬼に比べると随分自由な奴だな、新しい精霊」
「でも、この子も牛鬼みたいにいたずらっ子なんだよ」
「友奈ちゃんが優しいからわんぱくなのよ」
「戻ってね」
　友奈が火車をスマホの中に戻すのを見た後、少し東郷の方に目を向けるとなにか考え事をしているようだが、今はそこまで気にする事ではないと思っておこう
　それから三人で取り留めのない話をしながら歩いていると、部室の前まで到着する
「結城友奈、入りまーす!」
「こんにちは」
「お疲れさまでーす」
「ウィーッス」
【ウィーッス　です】
「すっかりそのキャラ定着しましたね」
「いやぁ、こんなに眼帯が似合うとはね」
「いい加減挨拶には慣れましたけど…　いつまで続けるんすか、その挨拶」
「いつまでって、そりゃ飽きるまでに決まってるじゃない」
　マジでいつまで続くんだろうなと思いはしても口には出さないで、カバンを机の上に置くと東郷の目の前に風先輩の新しい精霊が現れていた
「あーごめん、そいつ好奇心旺盛で犬神と違ってあんま言う事聞かなくてさ」

一匹現れたのをきっかけに他の精霊もぞろぞろと部室の中に現れる
「新しい精霊をアップデートしてくれたのは良いけど、ちょっとした百鬼夜行ね」
「もういっそ文化祭これでいいんじゃないですか？」
「よくないわ」
「…だが、精霊喫茶ってのはアリなんじゃないか？　奇抜さで言えば一番じゃ」
「八重樫君？」
「…なんでもないです」
「…ったく、あんたたち精霊の管理くらい東郷みたいにちゃんとしなさいよ」
夏凛の方を見たら樹ちゃんの精霊が頭の上でポンポンはねていると思ったら今度は牛鬼に夏凛の精霊が捕食されていた。前と似たような光景だが精霊が増えた事でカオスさが段違いになってしまっている
それからしばらくわちゃわちゃしていたが、精霊は全員スマホの中に戻っていった
「ようやっとみんな端末に戻ったわね」
風先輩がそう言うと、夏凛と東郷の二人は自分のスマホを見ていた。東郷の方は分からないが夏凛の方は自分にだけ精霊が増えていないのを疑問に思ってるんだろう…　俺には元々精霊いないし
【敵…　いつ来るかな　ドキドキ】
「これぱかりは分からないから、私達は劇の練習をはじめよっか」
「私の勘では来週あたりが危ないわね」
「実は敵の襲来は気のせい～、とかだったらいいんだけどね、あの諸葛亮公明だって負け戦はあるのよ？　弘法も筆の誤り、神樹様の予定もミスくらい――」
そういったタイミングで樹海化警報が鳴る
「えぇ!?」
「見事なまでのフラグ回収お疲れ様です」

「…　噂をすればってやつかなぁ」
「風が変な事言うから神樹様からの的確なツッコミね」
「アンタだって勘、外してるじゃない」
　そんなことを言っている間にも樹海化の光が広がっている
「…　来ちゃったわね」
「上等、殲滅してやるわ！」
　その言葉を最後に俺たちは樹海化の光に飲み込まれ、目を開けると二度と見たくなかった景色が広がっている。俺達はアプリを起動し勇者に変身した後、地図に目を向ける
「敵は一体、あと数分で森を抜けます」
「前の総攻撃の双子型…　双子っていうくらいだからもう一匹いて当たり前か」
「でも、一体だけなら」
　そう言い終わると友奈は手の甲にある自分の満開ゲージを見ている、かくいう俺の満開ゲージもほぼマックス。慎重に動いた方が良いだろうな
「今回の敵で延長戦も終わり、ゲームセットにしましょう…　よし！　またアレやろうか！」
「ほんと、好きねこういうの」
「先輩が体育会系気質だから」
　俺達六人は円陣を組むと、風先輩が口を開く
「さぁ！　敵さんきっちり昇天させてあげましょ！　勇者部ファイト！」
「「「「おー！」」」」
　円陣を終えた俺達は目視できる距離になったバーテックスを見る、案の定前に樹ちゃんが倒した奴と同じ姿の敵だ
「やっぱり徹の言った通りか」
「元から二体のバーテックス…」
「まぁ素早いだけだしそこまで脅威じゃないだろ」
「いずれにせよやる事は同じ、止めるわよ！」
「…　よしっ」

「そうよね、やらないと」
　さっき気合いを入れたものの満開の代償の事がある以上少し億劫になってしまうのは仕方ない、俺は自分を鼓舞するために片手で頬を軽く叩き気合いを入れる
「よしっ、先行します！」
「私も！」
「あっ、私も！」
　俺と友奈、夏凛の三人で先行してバーテックスに向かっていると友奈が口を開く
「あいつを封印すれば、生き残りも終わりだったよね」
「風先輩の話だとな」
「それじゃあ、ちゃちゃっと終わらせて文化祭の劇の話をしよう！」
「そうだな、それじゃあ俺がアイツの足を止めるから、後は二人に任せて良いか？」
「うん、任せて！」
「わかったわ！」
　二人の了解を取った俺はバーテックスに近づくと蛇腹剣を伸ばして足にダメージを与える
「今だ！」
「行くわよ！」
「うんっ！」
　その声と共に二人の放った攻撃がバーテックスを地面に倒すと、倒れた状態で敵さんはじたばたしている。足の修復が終わり立ち上がろうとしたタイミングで追いついた風先輩の一撃が再び敵を地面に寝かせる
「風先輩！」
「ありがとね、三人とも」
　樹ちゃんも合流した直後、バーテックスの頭のような部分が撃ちぬかれ動かなくなる
「よし、封印の儀行くわよ！」
　五人で敵を囲むように封印の儀を行うと、御魂は出てきたが数が多

い
「何この数!?」
「・・・私がやるわ！」
「いいえ、トドメは私に任せて貰うわよ！」
「夏凛!?　やめなさい、部長命令よ！」
「私は助っ人で来てるのよ、好きにやらせてもらうわ」
　などと言っている間に、飛び上がっていた友奈が敵に向かって蹴りを放っていた
「勇者・・・キーック!!」
　火車がサポートした事で炎を纏った友奈の蹴りは敵の御魂を打ち砕き、光が天に昇っていく
「やった！　・・・うん、何事もなかった、なせばたいていなんとかなるね」
「ちょっと友奈、なんで勝手に」
「思ったより簡単だったね、みんな！」
　そういう友奈の満開ゲージは溜まり、残り二つで満開が使用可能になる
「あ・・・ごめんね、新しい精霊の力を使いたくなっちゃって、先走っちゃった」
「体は平気？」
「大丈夫、元気そのものだよ」
「まったく、新しい力が試したいってお前、そのセリフどっかの戦闘狂みたいだぞ？」
「そうかな？　でも、みんなに怪我なく終わって良かった」
　その言葉を聞くと、友奈以外のみんなも安心した表情に変わった、それからすぐに樹海化は解けみんなと一緒に元いた場所に戻る・・・筈だった

第拾肆話　真実を求める

「戻ったけど…学校の屋上じゃないよね、ここ…」
「そう…みたいだな」
戦いを終えた俺達が戻されたのは学校の屋上ではない場所
「みんなは…」
「あっ、大橋…！」
俺と友奈も東郷の見ている方を見ると、確かに目の前に大橋があった
「…ほんとだ、結構離れた所にきちゃったね」
「そうだな…それにしてもなんでこんな所に」
とりあえず今いる場所を風先輩たちに報告するためにスマホの画面を付けるが、電波が入ってない
「あれ？　電波が入ってない」
「私の改造版でもダメ…」
「バージョンの違う俺のもだ…ほんと、なんでこんなところに」
「私が呼んだんだよ」
「声が…」
疑問に聞こえたえるように発せられた俺たち以外の声、その声が聞こえてきた方に向かうとそこにいたのは全身に包帯が巻かれ、ベットに寝かされた少女
「…ずっと呼んでたんだ、それでようやく呼びだしが成功したよ」
「君が、俺達を呼んだのか？」
「うん、そうだよ…やえくん」
「やえくん…？」
「わっしーも、やっと会えた…」
「わっしー？　…驚？」
「あだ名だろうな…だが、なんでわっしー？」
ここにきて訳の分からない事が色々出てきた、ここが何処なのか、彼女は誰なのか、どうして俺達を此処に呼んだのか、色々聞きたい事が多すぎる

「二人が戦ってるのを感じて、ずっと呼んでたんだよ」
「東郷さんの知り合い？」
「いいえ、初対面よ…　八重樫君は？」
「…　俺も知らない」
その言葉を聞いた時、少女の瞳には少し悲しみのような感情が見えた気がした
「…　あ～、はは…　わっしーって言うのはね、私の大切なお友達の名前なんだ～、やえくんも同じ。いつもその子達の事を考えててね…つい口にでちゃうんだよ～」
目の前の少女は最後にごめんねと言うと笑顔を向けてくるが…なんだろう、この胸が締め付けられる感覚…　何か大切だったことを…　いや、大切な事を忘れているような感じが頭の中でぐるぐる回っている
「あの…　私達を呼んだんですか？　どうやって…」
「その祠」
「これ…　うちの学校の屋上にもある！」
「バーテックスとの戦いが終わったあとなら、その祠使って呼べると思ってね～」
少女の言ったバーテックスと言う単語を聞いた俺たちはハッとなる
「バーテックスをご存じなんですか？」
「一応、あなた達の先輩って事になるのかな。私、乃木園子って言うんだよ～」
「さっ、讃州中学の結城友奈です！」
「…　友奈ちゃん」
「…　東郷美森です」
「八重樫…　徹です」
「……　美森ちゃんと徹くん、か」
「…　バーテックスが先輩をこんな目に合わせたんですか？」
友奈がそう言うと先輩は少し複雑そうな表情を浮かべながら答えた

「あ、ん～とね、敵じゃないよ、私これでもそこそこ強かったんだから～」

明るくそうは言うが、バーテックスの脅威を俺達は知っている

「あ…　そうだそうだ、友奈ちゃん達は満開について聞いてるよね？」

「はい、その…　代償の事も」

「そっか…　でも、あなた達に伝えられてない事が一つだけあるんだ」

「伝えられて…　ないこと？」

師匠たちが満開システムについてを話した時、俺達に伝えてない事がある？

「うん、勇者は満開の花を咲かせて、咲き誇った花は散って、体のどこかが不自由になる…　ここまでは大丈夫だよね」

「はい…」

「じゃあ続き、勇者は満開を使って体のどこかが不自由になる代わりに、決して死ぬことはないんだ」

「し、死なないなら良い事なんじゃ…　ね？　東郷さん、徹くん」

死ぬことはない、それを好意的な解釈をするのかは個人の自由だが…　俺にはそれを良い事だとは考えることは出来ない。東郷はどうか分からないが、俺達は友奈の言葉に返事をすることが出来ない

「そうして戦い続けて、今みたいになっちゃったんだ～。元からぼーっとするのが特技で良かったかなって、全然動けないのはつらいからね～」

「…　痛むんですか？」

「痛みはないよ、敵にやられたものじゃないから。満開して戦い続けてこうなっちゃっただけ、敵はちゃんと撃退したよ」

「満開して戦い続けた…」

「じゃあ、その身体は代償で…」

「うん」

乃木さんの発したその言葉は、満開の代償を知っている俺達にとっても衝撃的なものだった。あんな体になってしまうまで戦いを続けたという事実が俺たちにとって重くのしかかってきた

「ど…　どうして、私達がそんな」

「いつの時代だって、神様に見初められて供物になったのは無垢な少女だから。穢れなき身だからこそ、大いなる力を宿せる…徹くんが勇者と同じ力を使えてるのは、私達とは少し違うけどね」
「そうなんですか？」
「うん…でもそれは、私よりも君の先生に聞いた方が良いと思う」
「師匠に…」
そう言うと乃木さんは再び話しを再開する
「大きな力を使う代償として体の一部を神樹様に供物として捧げていく…それが勇者システム」
「私達が、供物…」
「でも、徹くんの先生たちは勇者システムの改良をしてるって…」
「もちろん、私たちの為に頑張ってくれてる人が居るのもほんとだよ…でも、どうしようもなかったんだ。頑張っても一歩進んでもそれ以上進めない」
「それじゃあ、私達はこれからも体の機能を失い続けて…」
「でも、十二体のバーテックスは倒したんだから…！　大丈夫だよ、東郷さん」
「友奈ちゃん…」
「倒したのはすごいよね、私たちの時は追い返すのが精一杯だったから」
「そうなんですよ、もう戦わなくていい筈です…！」
「…そうだと、いいね」
友奈の言葉に応えた乃木さんの言葉は、何処か含みを持っているように感じたけれど、今聞かなきゃいけないのはそれじゃない
「失った部分はこのまま、なんですか…？　どうにかして治す方法は…」
「治りたいよね、私も治りたいよ…歩いて友達を抱きしめに行きたいよ…」
「友奈ちゃん、徹くん…！」
気が付くと、俺達の周りを囲むように大赦の人達に囲まれていた
「大赦の人たち…？」

「彼女たちを傷つけたら許さないよ、私が呼んだ大切なお客様だから、あれだけ会わせてって言ったのに会わせてくれないんだもん、先生たちの事は締め出しちゃうから頼れないし、しょうがないから自力で呼んじゃったよ～」

乃木さんの言葉を聞くと、大社の人達は一斉に乃木さんを崇めるように地に頭をつける

「私は今や半分神様みたいなものだからね、崇められちゃって困ってるんだ～。あっ、安心してね、あなた達も丁重に元の町に送ってもらえるから」

俺たちに笑顔を向けてくる乃木さんを俺たちは見る事しかできなかった

「悲しませてごめんね、大赦の人達もこのシステムを隠すのは一つの思いやりではあると思うんだよ～…　でも、私はそういうのちゃんと言って欲しい人だから…　もっと、たくさん遊んで…　いっぱい思い出作りたかったから…　！」

「…　師匠は、乃木さん達に教えなかったんですか?」

「教えてもらったよ…　それでも、自分たちで決めた事だとしても…　やっぱり辛かったから」

俺の言葉に応えながら涙を流していた乃木さんに、東郷が近づいていくと自分の手で乃木さんの流す涙をぬぐう

「…　そのリボン、似合ってるね」

「このリボンは、とても大事なもの…　それだけは覚えているけど…　ごめんなさい、私、思い出せなくて…」

「仕方がないよ～…」

「方法は…　このシステムを変える方法はないんですか!」

「見つかってないってのが現状だよ」

「師匠…」

友奈の問いに答えたのは乃木さんじゃなかった、声の聞こえた方を見るとやって来てたのは俺の師匠

「久しぶりだな、乃木」

「うん、先生も久しぶり～」

「…　お互い、随分と変わっちまったな」
「そうだね、先生も相変わらずボロボロだ」
「それをお前に言われるとはな」
「それで師匠、見つかってないって、どういう事なんですか？」
　乃木さんと話していた師匠に話しかけると師匠はゆっくりとこっちを向く、その目は普段俺に向けるものではなくここじゃない何処かを見つめてるように見えた
「神樹の力を使えんのは、勇者だけ…　その中でも勇者になれんのはお前らだけだ…　俺達も色々やったが、システムを変える方法は見つかんなかった」
「そんな…」
「力になれなくてすまない」
「師匠…」
　ふと、花が舞いざぁっと音が鳴り響く
「返してあげて、彼女の街へ」
　そう言ってからすぐに、乃木さんは東郷の方を向く
「いつでも待ってるよ、大丈夫…　こうして会った以上もう大赦側もあなたの…　ううん、あなた達の存在をあやふやにはしないだろうから…」
　乃木さんは言葉を続けながら視線を東郷から一瞬だけ俺に移して再び東郷に戻した
　その後俺たちは師匠と乃木さんの二人を残して大赦の人が運転する車で讃州まで戻った

「そういえば、先生はどうしてここに来たの？」
「急に気配を感じたからな…　どうやらこの体は自分が思ってた以上に勇者とかの存在を感じやすくなってるらしい」
「…　そうなんだ」
　八重樫たちを見送った俺は、乃木と二人になった空間で話をする

半分神様として崇められてる存在の言葉は相変わらず権力が他の比ではないらしく、二人で話したいと彼女が言ったらその意見はあっさり通った、こっちとしても二人の方が話しやすいから助かる

「そういえば、安芸先生は？」

「元気にやってるよ、今は春信と一緒に色々駆け回ってる所」

「そっか…　みんな頑張ってるんだ」

「…　三ノ輪もな」

「ミノさん…　そっか」

「あぁ…　まぁ、なんだ…　だから荒事は任せろ、保証はないが死ぬまでにはなんとかしてやる」

「そう言う所は相変わらずだね、先生」

「昔っからそうだからな」

そういった俺の事を見てた乃木は笑顔から一転真剣な表情に変わる

「ねぇ…　先生は一体誰の事を見てるの」

そう言った乃木の声は今までとは違う真剣なもの…　そしてそれがどういう意図で発せられた言葉なのかは理解出来た

「先生は私達が戦ってた頃からいつも私達じゃない別の誰かを見てたよね…　先生って、一体何なの？」

「それを教えるのはここじゃない方が良い…　お前らと、讃州中学の全員が揃った時に絶対話す」

「…　わかった、約束だよ？」

「あぁ、約束だ」

俺の事を話すのは、きっとこの場所じゃない…　いつか、あいつらが全員揃った時に、すべてを話そう

第拾伍話　悲しみ

「やっぱ、風先輩暗かったな」
「仕方ない…　のかな、やっぱり」
　昨日、乃木園子と話を終えた後。俺達は聞かされたことを風先輩に話した、俺たち同様に満開の代償があることは説明を受けていた風先輩も、自分たちの身体が供物になっている事実と勇者は消して決して死ねないという事は風先輩にとっても衝撃的なものであったらしい
　変に心配をさせたくないという風先輩の意向で夏凛と樹ちゃんには伝えない事には決まったが、それでも風先輩との顔は晴れないままだった
「そういえば、東郷は？」
「今日は用事があるんだって、先に帰っちゃった」
「そっか、夏凛も今日は先に帰っちゃったし…　俺達も帰るか」
「そうだね…」
　とりあえず部活に来たものの今日はもう人が来る気配もないし部室の鍵を閉めて昇降口まで向かっている途中で樹ちゃんに会った
「あれ、樹ちゃん」
【友奈さん、徹さん】
「樹ちゃんも今帰り？」
【はい、部活は？】
「今日は東郷も夏凛も用事があって休みでな、二人だと出来る事も少ないから終わりにしたんだ」
【そうなんですか】
「うん、そういえば…　風先輩は？」
【お姉ちゃんは、私の担任の先生に呼ばれて】
「樹ちゃんの担任の先生？」
　樹ちゃんの担任の先生に呼ばれたって事は、樹ちゃん関連で何か用事でもあったんだろうか
「…　とりあえず、俺達はもう帰るけど樹ちゃんはどうする？」
【私はお姉ちゃんの事を待ってます】

「わかった、それじゃあ俺達はもう行く…　行くぞ友奈」
「でも…」
「樹ちゃん達なら大丈夫だろうよ」
　その後、樹ちゃんと分かれた俺達はいつも通り家に帰った翌日、俺と友奈…　そして風先輩の三人は東郷に呼びだされて彼女の家を訪れた

「それで、急にどうしたんだよ？」
「実は、三人に見て貰いたいことがあって」
「なに？」
　東郷は俺たちの目の前で短刀を取り出すと、鞘から抜きそのまま勢いよく自分の首に押し付けようとしたが、精霊が彼女の首と刃の間に入ったことで最悪の事態に陥ることはなかった
「な…　何やってんのよ！　あんた今、精霊が止めなかったら」
「止めますよ、精霊は…　確実に」
「…　？」
「東郷、お前…　何を」
「この数日で私は十回以上自害を試みました…　切腹、首吊り、飛び降り、一酸化炭素中毒、服毒、溺死…　すべて精霊に止められました」
「…　何が言いたいの？」
「今、私は勇者システムを起動させていませんでしたよね？」
「あ…　そういえば」
「それにも関わらず精霊は勝手に私を守った、精霊が勝手に…」
「だから…　何が言いたいののよ」
「精霊は俺達の…　いや、勇者の意思に関係なく動いてるって事だろ、東郷」
「えぇ、今まで精霊は勇者の〝戦う〟という意思に従ってるんだと思っていました。でも違う…　精霊に勇者の意思は関係ない、それに気づいたらこの精霊と言う存在が別の意味を持っているように思えたんです」

今まで自分たちにあったことを思い出しながら考えていると、東郷は言葉を続ける
「精霊は勇者の御役目を助けるものなんかじゃなく、勇者を御役目に縛り付けるものなんじゃないかって、死なせず戦わせ続けるための装置なんじゃかいかって」
「…御役目に、縛り付ける」
「で…でも、私達を守ってくれたって事なら悪い事じゃないんじゃないかな…」
「そうね…それだけなら不気味だけど悪いものじゃないかも知れない、でも精霊が勇者の死を必ず阻止するなら…乃木園子が言っていたことは当たっていることになる」
「勇者は…決して死ねない」
あの時の乃木さんがどうして〝勇者は決して死なない〟ではなく〝決して死ねない〟と言ったのか、東郷の話を聞いた事でようやく理解出来た気がする…いや、理解出来たんじゃなく理解してしまったと考える方が良いか
「彼女の言っていたことが真実なら、私達の後遺症がどうしようもない、と言う事も…」
「そん…な」
満開の代償は決して戻ることはない、いくら師匠たちが頑張っていたとしても治す方法は見つかっていない…そしてこれからも、見つからないかも知れない
そんな考えが頭の中でぐるぐると回る、考えれば考えるほど…思考が悪い方に向かっていく
「そん…な…じゃあ、樹の声は…私が、樹を勇者部に入れた所為で…」
涙を流す風先輩の事を、俺達はただ見ている事しかできなかった
俺達三人が東郷の家から並んで帰っている時、俺の携帯の通知音が鳴った

「…師匠？」
　師匠から送られてきたメッセージに書かれていたのは、他の勇者部メンバーを連れて俺達が普段特訓に使っている砂浜に来いとだけ書かれていた
「風先輩、友奈…いまから時間、大丈夫か？」
「何かあったの？」
「師匠が他の勇者部員も連れてきてくれって」
「師匠って、不知火さん…だよね？」
「あぁ」
「私は大丈夫だけど…風先輩は？」
「…私も、大丈夫」
　とりあえず風先輩と友奈の了承が取れた俺達は東郷達にも連絡を取る、樹ちゃんと夏凛からは了解が取れたけど東郷には断られてしまったため、現地集合の樹ちゃんと夏凛を除く俺達は砂浜までやってくると、師匠は既に待っていた
「まだ全員揃ってないみたいだな」
「東郷には断られちゃいましたけど、樹ちゃんと夏凛は後から来ます」
「そうか」
　少し話して分かったが、師匠の様子がいつもと違う。同じ口調でもいつもの師匠にある気の抜けた雰囲気が今日はない
「それで…急にどうしたんですか？」
「別に大したことじゃねぇよ…ただ、お前らのモヤモヤを発散する機会をやろうと思ってな」
「モヤモヤを発散する…機会？」
　そう言うと師匠は普段戦いで使ってる槍を取り出して肩に担ぐ
「昔の経験則だが迷った時は仲間に話す…けど、それが出来ないなら拳を使うしかねぇだろ」
　手持無沙汰なのか師匠は話ながら槍を振り回したりした後に、地面に槍を突き刺した
「今から俺はお前らの敵だ…ぶっ潰す気で行くから、お前らも俺を…殺す気で来い」

偶に訳の分からない事を言う師匠だが、今回は今までで一番…理解が出来ない

第拾陸話　固い絆

「今から俺はお前らの敵だ・・・ぶっ潰す気で行くから、お前らも俺を・・・殺す気で来い」
「ちょっと待ってください師匠！　、急に言われても・・・」
槍を地面に突き刺したままそう言う師匠に向かって、抗議をするが師匠は聞いてくれる様子はない
「勇者服を展開する時間はくれてやる、さっさと勇者になれ」
少し釈然としないが俺達が勇者服を展開した直後、俺の身体が宙に浮いていた
「えっ・・・？」
「まずは、一人ッ！」
師匠のその言葉と共に宙に浮いた俺の身体はそのまま地面に叩きつけられる
「徹くんッ！」
「俺もこんな感じで行くから、お前らも俺に日頃の不安とか怒りをぶつけて来い・・・特に犬吠埼、お前はな」
「私・・・ですか？」
「あぁ、知り合いにお前と同じで色々ため込む奴がいてな、状況が少し違うがいっそ派手に暴れた方がすっきりするだろ？」
「・・・行きます！」
風先輩はそういうと師匠に向かって大剣を振るう
「そうだ、その調子で来い！」
大剣を受け流した師匠はそのまま槍の柄を風先輩に叩きつけようとするが、バリアによって阻まれる
「どうして・・・教えてくれなかったんですか？」
「何をだ？」
「満開の事も、精霊の事も・・・どうしてもっと早く教えてくれなかったんですか！」
大剣を振るいながら風先輩は言葉を続ける
「教えてくれるんなら、もっと早く教えてくれても良かったじゃない

ですかッ！」
「・・・そうだな」
「なのに・・・どうしてッ！」
「勇者に関する情報は大赦の中でもトップレベルの秘匿事項だ、俺の独断で話す事は出来なかった」
「なんでッ！」
「俺が勝手に話をすると、俺の事を信じてくれてる奴等の立場が悪くなる・・・今ですら、ギリギリだからなぁッ！」
師匠は受け流していた大剣を器用に弾くと風先輩との距離を取る

「ねぇ徹くん、不知火さんはどうしてこんな事してるんだろう」
「多分師匠は、俺達がいずれ暴走するかも知れないって事を分かってたんだと思う」
「分かってた？」
「・・・師匠はそういう所があるからさ、わけわかんねぇ人だけど信じてみたいって思える人なんだよ」
希望的観測かもしれないけれど、師匠が俺達の事を・・・勇者の事を第一に考えてくれているのだけは信用したい

「私は・・・私はッ！」
「・・・ッ！」
俺たちの耳に届くのは金属同士のぶつかり合う鈍い音
「知っていたら、樹をッ！　みんなをッ！　戦いに巻き込む事なんてしなかったッ！」
「・・・辛いか」
「辛いに決まってるッ！　私が巻き込んだせいでッ！　樹は・・・樹はッ！　夢を諦めないといけなくなったッ！」
「・・・そう言う事か」
「どうしてこんなになるまで・・・苦しんでまで世界を救わないといけないんだッ!!」
「あぁ・・・そうだな、こんな世界クソくらえだ。助けたもんは全部手

のひらから零れ落ちて…　結局全部無意味になる、だけどなぁッ！」
　師匠は槍から盾に武器を切り替えるとそのまま大剣を防ぎ続ける
「それでも…　存外この世界が悪くないと思ってるから、守るんじゃないのか？」
「ッ！　…　それは」
　風先輩は師匠に振るっていた大剣を地面に下ろすと、師匠は大きく息を吐いて俺達の方にやってくる
「さて、後はお前らに任せた…　丸投げっぽいが腹を割って話すのが一番だ、丁度残りも来たみたいだしな」

　いつもの雰囲気に戻った師匠が少し遠くのベンチに腰を掛けると、少し慌てた様子の夏凛と樹ちゃんがやって来た
「ちょっと、一体何があったのよ!?」
「えーっと…　喧嘩？」
「只の喧嘩でこんなことになるわけないでしょ！　何があったのか教えなさい！」
　問い詰めてきた夏凛に事情を説明し終えると、わけわからないものを見るような目で師匠の方を向く
「ほんとになんなのよ…　アンタの師匠」
「…　俺にも分からん」
「風先輩」
「…　友奈」
　俺と夏凛が話している間に友奈と樹ちゃんはその場で止まってしまっていた風先輩の方に近づいていた
「…　ごめんね」
「前にも言いましたけど、風先輩のごめんは聞きません」
「でも、私がみんなを巻き込んだから…」
　風先輩の言葉を聞いた友奈は、真っすぐ見つめたまま口を開く
「私達は風先輩と会ってなかったとしても、勇者部に入ってなかったとしても戦っていたと思います」
「えっ…」

「だって、世界を守るにはそれしかなかったから…　それしか、選択肢はなかったから」
「でも、最初から知ってたら皆に負担をかける事なんてしなかった…」
　笑顔を向けた友奈は風先輩の前まで行くと、先輩の肩に手を置いた
「不知火さんは言いました、覚悟が無ければ満開は使えないようにリミッターをかけたって…　でも私達は満開を使った、私たちの意思で、覚悟を決めて満開を使ったんです」
【お姉ちゃん】
「樹…？」
【私たちの戦いは終わったんだよ、もうこれ以上失うことはないから】
「…　でも、私が勇者部に誘わなければ、勇者部なんて作らなければ」
【勇者部に入ってなかったら、みんなに出会ってなかったら勇気を持つこともできなかったんだよ？】
「私も、勇者部に入って良かったと思う事はあっても入らなければよかったって思ったことはありません…　だから、作らなければよかったなんて言わないでください」
　その場に崩れ落ちて泣き始めてしまった風先輩の事を抱きしめる樹ちゃんの事を、夏凛の横で見ていたら声をかけられた
「アンタは行かなくていいの？」
「あぁ、もう大丈夫そうだし。夏凛こそ行かなくて良いのか？」
「私も…　別にいいわ」
　いい感じに纏まったなと考えている所で、師匠に聞こうと思っていたことを思い出したので師匠のところに向かう
「そういえば師匠、どうしてこんな事したんですか？」
「さっきも言ったろ、お前らが爆発するかも知れなかったからだよ」
「でも、途中から風先輩の方を優先してましたよね？」
「言ってから気付いたんだが、お前は何だかんだで周りの事を優先するし、結城に関しては…　まぁ、大丈夫そうだしな」
　そう言うと師匠は少しバツの悪そうな顔をする
「…　あの、もし俺達が大丈夫そうだったらどうするつもりだったん

ですか?」
「そ、そん時はまぁ…　普通にカウンセリングで終わらせるつもりだったよ」
「ノープランだったんですね…」
「ま…　まぁ、なるようになるだろ」
　完全にノープランだったらしい師匠の事は置いておいて、ひとまず目の前の問題は解決したって事で良いんだろうか…　それなら、残りの問題は
「まだ、気がかりがあるって顔だな」
「……　そうか」
「どうかしたんですか?」
「何でもない…　だが、強いて言うなら。お前の直感を信じろ」
「直感?」
「そうだ、この先何があっても…　自分の信じたものを信じ、守りたいものを守れ」
「…　どういう意味ですか?」
「ちょっとした戯言だ…　さてと、もう遅いから送る」
　師匠はそういった後に車を取りに行くと言って歩いていってしまう…　さっき師匠の言った言葉がどういう意味か分からないが、東郷の話を聞いてから心の中に渦巻いていた不安は消えることはなかった

第拾漆話　犠牲

「東郷、今日も休みなんだな」
「あっ、徹くん…　おはよう」
「おう、おはよう」
　教室に入ってすぐ友奈に挨拶をすると、東郷の机がある方を見るが…　どうやら今日も休みらしい
　あの日、東郷から話を聞いて以降、彼女は学校を休む事が多くなっている。勇者システム関連の何かを調べているのは分かっているが、何をしているのかは俺達にも教えられていない
　そんなことを思っていると友奈の様子が少し暗いことに気付く
「やっぱり、東郷の事が心配か？」
「うん、東郷さん大丈夫かな…」
「それだけ心配なら、今日お見舞いにでも行くか」
「お見舞い…　？」
「もしかしたら風邪ひいて寝込んでるのかも知れない、部活が終わったらお見舞いに行こう」
「うん！　行こう、お見舞い！」
　俺がそう言うと、友奈は明るい表情に戻り笑顔で返事を返してくると、何かを思い立ったように席を立った
「どっか行くのか？」
「東郷さんに連絡してくる！」
「待て待て待て、もうすぐ先生が来るぞ？　連絡するにしても部活の前とかにした方が良いだろ」
「でも…」
「でもじゃない、それに今すぐ連絡したら東郷が気を遣うかも知れないだろ」
「…　わかった」
　一応納得したであろう友奈が席に戻った所で、先生が教室のドアを開けて入ってくるのが見えたため、俺も急いで席に着いた

それから時間は進み放課後、席を立った友奈は一足先に部室に向かって走って行ってしまった
「ねぇ、友奈何かあったの？」
「夏凛か」
「夏凛かじゃないわよ、それで何かあったの？」
「実は部活終わったら東郷の見舞いに行くことになってな、夏凛も行くか？」
「…　私は別にいいわ」
「そういう割に、別に良いって顔してないが？」
「う、うっさいわね…　良いから部室に行くわよ」
「はいはい、分かった」
「はいは一回」
「…　はい」
俺と夏凛が部室に向かっている途中で、友奈に追いつく
「友奈」
「徹くん、夏凛ちゃん」
「どうだった？」
「留守電だった…」
「でも、留守電は入れといたんだろ？」
「うん」
「なら、帰りがけに立ち寄ればいいだろ、とりあえず…　今は部活に行こう」
とりあえず、ここ最近はまっとうに部活動もできていなかったし、そろそろ活動を再開した方が良いだろうと思ったところでスマホからけたたましいアラームが鳴り響く
「「!?」」
「何!?」
「敵!?　だけど敵は俺達が全部倒した筈じゃ」
「おかしいよ、アラームが鳴りやまないッ！」

困惑する俺達を他所に、世界は光に包まれ樹海と化す
「樹海化した…？」
「どうして、敵は全部倒したのに…」
「とりあえず、まずは勇者にならないと…　樹海化した以上、敵が来るのは間違いないし」
夏凛の言葉を聞いた俺達は勇者服を纏うと、スマホのマップアプリを起動して敵の位置を確認するが、そこに表示されていたのはいつもと全く違う、自分たち以外の位置が真っ赤に表示されている様子
「なに…　これ」
「赤いの全部が敵…　ほんとに、何が起きてるんだよ」
「…　東郷さん」
「東郷がどうした？」
「東郷さんが、敵の近くにいる…　行かなきゃッ！」
「友奈ッ!?」
「夏凛、友奈を頼む！」
「ちょっと、どこ行くのよ」
「風先輩たちに合流するッ！　とりあえず状況を伝えないと！」
「…　わかったわ！」
ひとまず友奈の事を夏凛に任せると、俺は風先輩たちの方に向かっていると先輩たちも考えてることは同じだったようで思ったよりも早く合流することが出来た
「徹！」
「風先輩！　樹ちゃん！」
「これ…　一体どういう事よ」
「俺にもわかりません、でも友奈が東郷の方に向かって…　ッ！」
風先輩に状況を説明しようとした瞬間、俺達に襲い掛かって来たのは人の歯を付けたような気持ちの悪い化け物
「なんだ、こいつら」
「さっきから一体、何なのよッ！」
「…　ッ！」
三人で背中合わせになると、襲ってくる化け物を一匹ずつ潰してい

く
「こいつら、一体一体はそんなに強くない」
「けど、こうも数が多いとキリがないわよ」
「ここは・・・使うしか」
「駄目よ」
「風先輩・・・けどッ！」
「絶対にダメ・・・満開は、本当に必要になった時に使いなさい」
「じゃあ、どうするんですか・・・？」
「とりあえず、お互いにフォローしあいながら東郷のところに行くわよ、何をしたか問い詰めてやるんだから！」
「了解」
風先輩の言葉に樹ちゃんもぐっと拳を握りオーケーの合図をすると、三人で移動しながら壁を目指す
「徹ッ！」
「任されましたッ！」
「！」
「ナイス樹！」
風先輩が道を切り開いて、俺が風先輩の撃ちもらした敵を、そして樹ちゃんが俺達の死角になっている所から来る敵を倒し続ける
そうして三人で進んでいると、俺達とは離れた場所で大輪の華が咲くのが見えた
「満開・・・」
「今は、東郷の方に行きましょう・・・きっと大丈夫だから」
「・・・わかりました」
それから俺達は何度も花が咲き続けるのを横目に見ながら進み続けて、東郷の場所に辿り着く
「東郷ぉぉぉ！」
「風先輩・・・ッ！」
「あんた、自分が何をしたか分かってるの!?」
「それでも、この光景を見たらわかる筈です。この世界が・・・大赦のやり方が、勇者と言う存在がいかに悲惨なものか、私達が救われる方

法はこれしかない…！」
「それでも…私は部長として、先輩として…アンタを止めるッ！」
「わかってください」
「今だ、樹ちゃんッ！」
「ッ！」
東郷が風先輩に銃を向けた瞬間、樹ちゃんが糸を使って東郷の腕を絡めとる
「東郷」
「八重樫くん…」
「これ以上は、流石に見過ごせない」
「八重樫君、貴方ならわかるでしょ…この世界がどれだけ悲惨なものか」
「そうだな、今の光景はまるで地獄だ…」
「それなら…」
「けど、それでも俺は止めるよ…この世界を、壊させない」
俺はそう言うと東郷に一撃喰らわせる
「少し頭を冷やせ…風先輩、俺達も友奈たちのところに」
「そうね…樹、どうかした？」
樹ちゃんの指さした方を見ると、小さい奴らの動きが止まっている
「小さい奴らが動いてない…」
「敵の侵攻が、止まってる？…一体何が」
俺たちが敵の方を向いた直後、背後で大輪の華が咲いた
「な…!?」
「三人とも、退いてください」
「どくわけ、ないでしょ！」
「東郷…お前は一体何をッ！」
「ごめんなさい」
満開をした東郷はその一言の直後、神樹様に向かって主砲を放った
「させないッ！」
「無茶苦茶にも…程があるだろッ！」
「…ッ！」

三人で必死にその一撃を抑えるが、満開した勇者の一撃は強力で、俺達のバリアは破れそのまま地面に激突する
「くっ、スタミナが…」
「まだ、動…ッ!?」
「樹！　徹！」
「風先輩…」
「あんた…その腕」
「まだ、大丈夫です」
「大丈夫な訳ないでしょ！　何があったの！」
「バリアのダメージが容量を超えたんだよッ！」
風先輩の問いに答えたのは、俺ではなく師匠の声だった。師匠は上空に浮遊している小さい奴を切り裂きながら俺達の元にやってくる
「勇者部ってのは、どいつもこいつも思い切りが良すぎるだろ」
「師匠…」
「どういう事ですか、バリアのダメージ容量って」
「詳しい話はもう少し後だ…まだ動けるな」
「私は大丈夫です」
「それなら、話は移動しながらだ」
師匠は俺の事を背負うと移動を始める、風先輩も師匠の樹ちゃんを背負って師匠の後を追ってきている
「それで、どういう事なんですか？」
「八重樫の勇者システムには精霊がいない、つまりお前らの勇者システムに比べると不完全な代物なんだ…それは勇者が普通に使える者にも影響する」
「それって…」
「思ってる通りだ、それで今日はそれを補うための端末を八重樫に渡そうとしてたんだが…状況が変わったから、なッ！」
俺を背負ったまま襲ってくる小さいのを蹴散らしながら樹海の陰に隠れる
「ふぅ…お前らはここで休んどけ」
「貴方は、どうするんですか？」

「決まってるだろ…　世界を救いに行ってくる」
「けど、師匠一人じゃ…」
「心配すんな、これでもあいつらとの戦闘経験だけは豊富だからな…　っとそうだ、ほれ」
　師匠は俺にやけに傷の多い端末を投げて渡してくる
「これは」
「さっき言ってた、お前の補助端末…　後は任せたぞ」
　そう言うと師匠は、振り返ることなく東郷と、あの巨大バーテックスが居る方に戻って行ってしまった

「この体も後どれだけ持つか…　文字通り時間との勝負って奴だな」
　八重樫たちと分かれた俺は一人で、アイツらに対して立ちふさがる
「よう、随分と意気な散歩だな」
「…　不知火先生」
「その呼び方、乃木から聞いたのか？」
「やっぱり、そうなんですね」
　どうやら東郷に鎌をかけられたらしい
「やっぱり、不知火先生は前の勇者に関係があったんですね」
「その通り…　関係者って言うか、ほとんど教え子みたいなもんだったな」
「なら分かってる筈です、それなのにどうして！」
「愚問だな…　そんなの、終わらせない為に決まってんだろ」
　アイツらと戦ってた日から、それだけはずっと変わらないものを今更変えようがない
「それじゃ、そこを退いてもらおうか…　俺が用あるのはお前じゃねぇ、お前の後ろのクソ野郎だ」
「それは出来ません」
　その言葉と共に東郷は俺に向かって一撃ぶっ放してきた、この際

だ・・・大盤振る舞いで行こう
「我が身に降りよ！（力を貸せ）輪入道！」
久々に感じる体を蝕まれる感覚に耐えながら、俺は武器を槍から旋刃盤に変化させ、力が完全に体の中に入った直後、肥大化させた旋刃盤で東郷の一撃を防ぐ
「その姿は・・・」
「とりあえず説教は後にして・・・鷲尾、さっさとそこを退かしてやるから、覚悟しタマえ」
自分のタイムリミットを早めるだけだが・・・それでもやらないよりはマシだと考え、かつて共に戦った姫百合の勇者（大切な仲間の一人）と同じ切り札の外装を纏い、俺は鷲尾の前に立ちふさがる

第拾捌話　友情

目の前に広がっているのは大量の星屑に満開した勇者が一人…
その勇者も他と違って殲滅戦が得意なバカ火力
「さてと、この姿は防御力なら折り紙付きだが…　どうするかな」
俺にとっての勝利条件は東郷…　いや、鷲尾の後ろにいるデカブツを倒す事か…　鷲尾を説得できる奴らが来るのを待つこと。鷲尾の攻撃と星屑どもの突進を守り、いなし続けるが考えるだけ無駄だな
「今はとりあえず出来る事をする…」
「さっきからブツブツと何を…　ッ！」
まずは一か所、残りの砲門は七つ。とりあえず輪入道だと相性悪いな…　敵の攻撃を避けながら一撃を当てるとなると、アレか
「ちょっとした衣替えだ、我が身に降りよ！　義経！」
続けて俺の身体に卸したのは義経、これも桔梗の勇者が昔使ってた切り札である為、使い勝手は知っている。足で地面を蹴り今までとは非にならないスピードで東郷の元に向かいながら、武器を旋刃盤から刀に切り替え砲門をもう一つぶった切る
「これで二つ目」
「何なんですか…　それ」
「ちょっと知り合いの力を借りてるんだよ」
「知り合いの力？」
「気にすんな…　友達は多いほうが良いってだけだ、続けていく…　あぶねッ！」
東郷に気をとられ過ぎて周りにいる星屑の事をすっかり忘れていた、襲ってくる星屑を足場に使いながら移動する、途中東郷からの砲撃が飛んでくるが足場にしてる星屑ぶん投げれば投げたのとは反対の方に進めるし、星屑も片付けられる…　一石二鳥だが
「さっきから妙だな…　デカブツの方に動きが無さすぎる」
さっきから俺の方を襲ってくるのも星屑ばっか…　まさかと思いデカブツの方に目を向けると少しずつエネルギーが集まっているのが見える

「不味い…　ッ！」
「やらせません」
「分かってんのかって聞いても無駄か！　お前の狙いはそれだもんなッ！」
　そうこうしているうちにも火球はどんどん巨大になっていき、放たれた。急いで火球を追おうとするがこの場所からじゃ追いつけない
「うおおおおお!!　勇者ぁぁぁ、ぱぁぁぁぁぁんち!!」
　火球を真正面からぶん殴り、相殺する
「…　主役は遅れてやってくるって奴か」
「すみません、遅れちゃって」
「気にすんな…　それより、東郷は任せて良いか？」
「はい、任せてください」
「それじゃ…　雑魚は俺に任せろッ！」
　雑魚を纏めて叩き潰すなら、彼岸花の勇者の力が適任か
「我が身に降りよ！　七人岬！」
「増えた!?」
「こういう力なんだ…　とっとと行くぞ！」
　さてと…　お前もさっさと来いよ、八重樫
「友奈…　師匠…」
　燃えるながら友奈たち向かうあの小型の事を相手にしている友奈と師匠の二人を見上げていると、風先輩が口を開いた
「…　東郷、自分への攻撃をかわしながらあのでかいのを護衛してるって言うの？　神樹様に向かわせるために…　早くあいつを、封印しないと…」
「風先輩ッ！」
　倒れた風先輩の事を受け止めるとそのまま地面に下ろす
「徹…」
「風先輩、俺も行ってきます」

師匠から渡されたスマホと、自分のスマホの二つを起動する
「護人…　システム？」
師匠から渡されたスマホの中に入っていたのは、勇者システムと似てるけどちょっとだけ違うものだったが、何処か懐かしさを覚える
「よし…　行こう！」
勇者アプリと護人アプリ、二つのシステムを起動した俺の周りに二色の花弁が吹き荒れ、勇者服を形成していく。普段から俺の来ている勇者服の上から、鎧のようなパーツが装着されていく。勇者服の装着が終わり俺の手に握られていたのは、蛇腹剣ではなくチャクラム
「なんか、懐かしい感じだ」
少し体を動かした俺は、思い切り跳躍して東郷と友奈の元に向かう
「東郷！　友奈！」
「八重樫君…」
「徹くん！」
「悪い友奈、遅くなった…　師匠も」
「俺は気にしてねぇよ」
「私も、気にしてないよ！」
「ありがとう」
友奈に並んで、東郷の前に立ちふさがる
「東郷、もう一度言うぞ…　お前は本当にそれでいいのか？」
「そうだよ！　そいつが辿り着いたら、私達の世界がなくなっちゃうんだよ！」
「それでいいの…　一緒に消えてしまおう」
「よくない！」
「あぁ…　そんなの絶対に、認めない！」
俺と友奈は東郷の方に真っすぐ向かいながら、切り札を切る
「「満開！」」
満開した俺と友奈の二人はそのまま巨大バーテックスの方に突っ込む、途中で出てくる雑魚は…
「雑魚は俺が抑える！　行けッ！　友奈ぁ！」
「うおおおおおおおお!!」

友奈がデカブツに一撃叩き込むと中から御魂が出てきた
「御魂！」
「だめッ！」
御魂に攻撃をしようとした友奈を東郷が遮るのを見てすぐ、俺達は東郷の方を向く
「何も知らずに暮らしてる人達もいるんだよ、私達が諦めたらダメだよ！　だってそれが…」
「勇者だって言うの!?　そうやってずっと他の人の為に自分の幸せを犠牲にし続けるの!?」
「犠牲なんて思ってない！　俺達は…　俺は他の人の笑顔を守れるなら…　！」
「他の人なんて関係ない!!」
「一番大切な友達を守れないんだったら勇者何て意味ない…　頑張れないよ」
「東郷…」
「友奈ちゃんも徹くんも、あのままじっとしていればよかったのに…　眠っていればそれで済んだのに…　もう、手遅れだよ」
「「手遅れじゃない！」」
「バーテックスは今からでも倒せばいい！」
「そうだ、壊しちまった壁だって直せばいい！」
「そんなことを言ってるんじゃない！　…　戦いは終わらない、私達の生き地獄は終わらないの。こんな仕組みの言いなりになって生きてる事が地獄なんだよ！」
「地獄じゃないよ！　どんなにつらくても私が…　私達が守る！」
「散華を続ければいずれ大切な気持ちや想いも失くしてしまう、忘れちゃいけないことを忘れてしまうんだよ?　大丈夫な訳ないよ！」
「違う！　たとえ今は忘れてしまっても…　大切な気持ちも、想いも！　心の中には残ってる!!」
「友奈ちゃんやみんなの事だって忘れてしまう…　私にはそれを仕方ないなんて割り切れない、徹くんのように考えられない…　一番大切なものをなくしてしまうのならいっそ…　でも、死ぬことさえできな

いんだよ！」
　東郷の言ってることだってわかる、この世界には俺や友奈のように考えられる人が少ないこと分かってる…　けど
「「忘れないよ！　（ねぇよ！）」」
「…　どうしてそう言えるの」
「私はめちゃくちゃ強く、そう思っているから！」
「俺だって同じだ！　世界中の人から東郷が忘れられたとしても、俺だけは絶対に東郷美森（鷲尾須美）を忘れない！」
　自分の中の、別の部分が叫んだ気がした…　いや、今は覚えていないその部分が、いつかの俺（鷲尾須美たちと共にいた俺）がそう叫んでいる
「私達も…　きっと、そう思っていた…　今はただ〝悲しかった〟という事しか覚えていない…　自分の涙の意味が分からない！」
　自分の想いを、恐れている事を爆発させて、彼女は叫ぶ
「嫌だよ！　怖いよ！　きっと友奈ちゃんも忘れてしまう！　だから…　こんな世界！」
　我武者羅に放つ東郷の一撃が俺達の方に向かってくるが、友奈の前に立って俺がその攻撃を防ぐ
「徹くん！」
「行け、友奈！　俺じゃダメだ…　他でもないお前じゃないと、だから行けッ！」
「うん！」
　友奈を東郷の元に向かわせると、俺は地面に倒れこむ
「良かったのか？」
「師匠…　はい、これで良かったんです。今の東郷に必要なのは…　俺の言葉じゃないと思うんで」
「そうか、お疲れさん…　それにしても、お互いボロボロだな」
「ですね」
　しばらくして、一緒に寝ころんでいた師匠は立ち上がると、俺の方に手を差し出す
「そろそろ最後の大仕事だ…　行けるな」
「当たり前です！　東郷にあんだけ言ったんだから、ここで休んだら

かっこ悪いでしょ！」

師匠の手を取り立ち上がって、二人でデカブツの方を見ると気合いを入れ直した

第拾玖話　深い信頼

目の前で悠然とした存在感を放つデカブツに対して、気合いを入れ直すと隣にいた師匠が話しかけてきた
「さて、それじゃ…　これからどうする?」
「えっ、どうしようって言っても…　どうしましょう」
「急がないとヤバそうだぞ」
「ヤバそうって…　えぇぇぇぇぇ!?」
流石に目の前の光景に驚くなという方が無理だ、俺達の目に映ったのは太陽を思わせる巨大な火球
「流石に驚きましたけど、とりあえず止めます!」
「了解」
放たれた火球に二人で向かい、受け止めた
「師匠…　なんか見た目変わってません…　ッ?」
「抑えるんなら、防御力は高いほうが良いからな…　つっても、流石に…　キツいッ!」
俺達が火球を抑え始めてから少しして、友奈と東郷も火球を抑える為にやってくる
「友奈ッ!　東郷ッ!」
「私達も手伝う…　止まれぇぇぇ!!」
「止ま…　れぇッ!」
必死に受け止めようとするが規模が大きすぎて、じわじわと押されている
「止まら…　ない…　!」
「絶対に…　諦めな…　い…　!?」
「友奈!」
「友奈ちゃん!」
「そろそろ…　ヤバいな…　ッ!」
「う、おぉぉぉぉぉぉ!!」
「風先輩!　樹ちゃん!」
「大事な時に、遅れてごめんね」

「気にしないでください、信じてたんで」
「樹ちゃん…　風先輩…　私」
「お帰り、東郷」
　人数が増えた事で僅かではあるが、火球の速度が遅くなる
「いくよ、押し返す！　…　樹！」
「ッ！」
「満開！」
　風先輩と樹ちゃんも満開をして、少しずつではあるが威力は遅くなるが…　それでも威力が違い過ぎる
「ぐっ、人が多くても…　やっぱキツいわね…　！」
「そこかぁぁぁぁぁ！」
「夏凛！」
「夏凛ちゃん…」
「プロの勇者ってのはね、気配でわかんのよ！　…　勇者部を、なめるなぁぁぁぁぁ!!」
　夏凛はそのまま満開をすると俺達と同じように火球の行く手を阻む
「よぉし、勇者部…」
「「ファイトぉぉぉぉぉぉ!!」」
「なんか、懐かしいなこういうの…　俺も、負けてらんねぇよなぁ!!」
　この世界で動けているのは俺達だけ…　けれど、今はこの世界を終わらせない為に心を一つにして火球を抑える、そして今はこの場にいなくても、友奈は来るって信じてる
「私は！　讃州中学勇者部！」
「行けぇぇぇぇぇぇ！」
「友奈ぁぁぁぁぁぁ！」
「友奈ちゃん!!」
「決めろぉ！　友奈ぁぁ!!」
「勇者！　結城友奈!!」
　真正面から火球をぶち抜いた友奈は、そのままデカブツの御魂に触れる為に突き進んでいく

「届けえええええええええええええ!!」
その言葉と共に、目の前の火球は爆発し、樹海の中に光の雨が降り注ぐ、爆発に巻き込まれた俺達は全員気が付くと地面に横たわっていた
「……ん」
「……？」
「…終わった、の？」
「これは…？」
倒れて動くことの出来ない俺達に、花弁が舞い落ちる
「友奈ちゃん…友奈ちゃん!?」
東郷の叫びを聞き、ボロボロになった体を何とか動かし、友奈の方を見る、今の彼女がどんな状態なのか分からないが…どれだけ東郷が名前を呼んでも、彼女が返事をすることはなかった

目を覚ますと、いつも通りの見慣れた天井、体の所々に感じる痛みが今までの戦いは夢でなかったことを実感させる。ボーっとする頭で立ち上がると体を伸ばすために〃両腕〃を腰に当てて思い切り体を伸ばす
「…あれ？」
何気なく動かしていたが、今まで動くことのなかった左腕に目を向けると、軽く動かしてみる
「左腕が…動く？」
もしかして、治り始めてるのか？

「なるほど、それで揃いも揃って俺の所に来たって訳か」
左腕が動くようになってから数日が経ち、ある程度回復してきた俺、風先輩、そして夏凛は師匠の所にやって来ていた
「はい、師匠なら何か知ってると思って」
「大赦からの連絡は一方通行だしね、それで…何か知らないの？」

「俺は正式に大赦所属って訳じゃない、あくまでも外部協力者だから詳しい情報は俺のほうにも回って来てない」
「そうですか…」
「だが、お前らの御役目はもう終わった… 知り合いの話だと、お前らの散華した部分もそう遠くないうちに治るとさ」
「じゃあ… どうして友奈は目を覚まさないんですか」
俺たち全員が気がかりであった事を師匠に聞いてみる、知らない可能性の方が高いけれど、少しでも他の人の意見を聞いておきたかった
「… これは俺と、俺の知り合いで共通の推測だが。結城は目を覚まさない可能性がある」
「どういうことですか!?」
「おそらく、あのデカブツを倒した時に結城はそれに見合うだけの大きな代償を払った… だから、もし目を覚ますとしてもそれは結城次第だ」
「そんな…」
「だが… お前らは信じてるんだろ、目を覚ますって」
「当たり前よ!」
「なら、最後まで信じ切ってやれ… それが勇者ってもんだろ」
俺達はその言葉を最後に師匠の家を離れる

「… ほんとに、どういう風の吹き回しかねぇ」
勝手によそ様の身体を供物として差し出させておいて、今度は持って行ったものを勝手に返す… まぁ返してくれたことには感謝をするが、少し解せない
「どうして神樹は俺の身体まで治したんだ… ?」
あの戦いの後、俺の身体に入っていたヒビは裂傷のようなものに形を変え今までのように常に最悪の体調ではなくなっている
「まぁ、利用価値があるから生かしてるって所だろうから… 今はそんなのどうだっていい」
問題は結城だ、冬馬や春信だけじゃなく、ひよりまで同じ意見だっ

た以上俺達にはどうすることも出来ない
「けどまぁ、何とかなるだろ」
そんなことを呟きながら俺は本棚から一冊のアルバムを取り出す、
もう長い事目を通していなかったそのアルバムを開く
「なぁ…若葉、みんな」
知ってるからな、初代勇者の絆に負けず劣らず勇者部の絆も、世界
の不条理をぶっ壊すって事を

第弐拾話　偉大なる友情

――ここは、何処？
――私は、誰？
暗くて、冷たくて、寂しい場所
どうしてここに居るのかわからない
『戻ったらきっと…覚えていないだろうけど』
――声…どこから…？
『…貴女は、消滅するはずだったんだ』
――!?
『神樹様は、貴女の身体を蘇生してくれた。けど…それはかなり無理な蘇生だったんだ、御魂に触れてしまった影響で精神が目覚めず、貴女はいまここに在る』
――私はどうすれば元の身体に、みんなのところに戻れるんですか？
声を上げるけれど、私の問いかけが返ってこない
ひとりぼっちの空間で、私はあてもなく動き続けるけれど、どこまでいっても景色は変わらない
――みんなは、無事なのかな？
一人寂しく膝を抱えていると、空から落ちてくる羽根が目に入る
――カラス？
私の目の前にやってきた青色のカラスは光り輝くと人の形に姿を変えた
――あなたは…？
『初めまして、未来の勇者。私は神世紀元年において勇者の御役目を担っている者だ』
私達より昔の勇者…
『この声を聞いている貴女の時代に至るまで、バーテックスとどのような戦いが起こるのか』
これは多分、昔の勇者から私達へのビデオレターなんだと思う

『すべての勇者たちが時に恐怖して、悩んで、苦しんで…　それでも守りたいものの為に戦っていくのだろうと信じている』

遠い昔から、私たちの…　ううん、もしかしたらもっと未来へと向けた言葉

『私達の代の勇者は白鳥歌野…　場所は違えど私達の大切な仲間の一人からバトンを引き継いだ』

『そのバトンは、どれだけ時間が経とうと引き継いでいかれるだろうと私は思う』

引き継がれる、バトン…

『そのバトンの名は〝勇気〟である…　別名を〝希望〟と言う…〟

願い〟とも言う。貴女は決して一人ではないことを知って欲しい』

『多分、今の貴女はとても苦しんでいると思う、痛いこと…　悲しいこと…　絶望すること…』

『それでも耐えられないくらい辛いことがあったのだろう、だからこそ私の声が届いている筈だ』

力強く、それでもとても優しい声で、目の前の言葉が紡がれる

『そんな貴女に私が言いたい言葉はもっと戦えでも…　もっと頑張れでもない』

その言葉発せられてすぐ、靄がかかっていた人影が鮮明になる

目の前にいる青い勇者服を纏ったその人以外にも、後ろにたくさんの人影が見える

『生きろ…　ただ、生きてくれ』

最後に紡がれたその言葉は何よりも暖かい言葉で、大切なものが繋がれた気がした

友奈が目を覚まさないまま、数週間の時が流れた。風先輩の瞳も、樹ちゃんの声も、夏凛が散華して失った部分も…　そして。俺と東郷が今まで失った部分も治りはじめ、分かりずらいが確実に良いほうに向かっている

俺達は毎日のように、友奈の病室に通い…　声をかけ続ける。不安

が無いと言ったら嘘になるが、勇者部のみんなが友奈が帰ってくることを信じているから
「それでね、ようやく演劇の稽古に入れたってわけよ」
「でもお姉ちゃん、全然セリフ覚えられてないんですよ」
「ちょ…　言わないで」
「厳選したサプリもしっかり用意してあるし」
「俺と東郷も万全になったし、今までかけちゃってた負担も担げるようになったから」
「だからね友奈ちゃん…　無理しなくても大丈夫だからね」
何時目覚めるのか分からないし、無茶を言うわけじゃないけれど、早く戻って来いよ

――戻りたい、みんなに会いたい…
この空間をずっと進みながら、あの人の紡いだ言葉が心の中でずっと響いている
『大切な人が居るなら思い出して欲しい…　貴女が生きる事を諦めたら、その人が悲しむ事を思い出して欲しい』
――みんなを悲しませるのは嫌だ…　だけど、この世界が何処まで続いているのか分からない
心が弱くなり、また膝を抱えてしまった私の耳に届いたのは…　私の大切な仲間の声
樹ちゃんの言葉が、風先輩の言葉が、夏凛ちゃんの言葉が、徹くんの言葉が…　そして、東郷さんの言葉が、私を光の射す方に導いてくれる
――そうだ、帰るんだ！　みんなの…　場所に！
光の射す場所に手を伸ばした瞬間、私の意識が急に遠くなっていった

「勇者は、傷ついても傷ついても…　決して諦めませんでした」

温かい日の当たる病院の中庭では、東郷が友奈に台本の読み聞かせをしていた。どうしようもなくても、どれだけ悲しく手も・・・残酷なほどに一日は終わり、そして始まる

「すべての人が諦めてしまったら、それこそこの世が闇に閉ざされてしまうからです」

東郷の読み聞かせをする姿を見ながら、改めて友奈の方に目を向けるが、相変わらず意識が戻る様子はない

「勇者は自分が挫けない事がみんなを励ますのだと信じていました。そんな勇者を馬鹿にするものもいましたが、勇者が明るく笑っていました。意味がないことだと言うものもいましたが、それでも勇者はへこたれませんでした」

読み聞かせを続けている東郷に軽く合図をしてその場を離れると、一人で自販機まで向かい三人分の缶ジュースを購入する

「あっ・・・まぁ、俺が一人で二本飲めばいいか」

ジュースを取ろうとした自分の手が止まる・・・結局俺は何もできなかったのかという思いが急に胸に込み上げてくる

「・・・ダメだな、俺」

少し暗くなった心を振り払うように東郷達の元に戻ると・・・東郷が泣いていた、何かあったのかと急いで近寄ろうとした所で足が止まる

「・・・大切なモノを失うのは・・・やっぱ辛いよな」

自分もそうだったから、今の東郷の気持ちは分かる・・・あの日、あの戦いで大切な友達を一人で戦わせてしまった、忘れたくなかった記憶を取りこぼしてしまったから、今の俺は東郷達の居る場所に向かうことが出来ない

「・・・？」

今まで日影にいた筈なのに、急に光が射した俺は顔を上げる

「・・・ッ！」

少し離れた場所に広がる光景を見た俺は急いで駆け出し、二人も前までやってくる

「徹くん・・・」

「ゆう…　な？」
「うん…　徹くん、ただいま」
「遅刻だよ…　ばか」
泣きそうになる目を抑えると、改めて友奈の方を向く
「おかえり…　友奈」

一度意識を取り戻した日から友奈は順調に回復に向かい、今日の放課後に退院することが決まった…　と言ってもしばらくは車椅子生活らしいが、それでも友奈が帰ってくるのは何よりもうれしい
「と、言うわけで東郷が迎えに行っている間に、我々勇者部残存組は友奈のお帰りなさいパーティの準備を始めているのだった」
「誰に言ってんのよ…」
「そうよ、くだらないことやってないでさっさと手を動かす！」
「はいはい、仰せのままに」
「はいは一回」
「はいッ！　てきぱき働かせて頂きます！」
とりあえず上のほうの飾りつけでもやってればいいかと考えて輪飾りを取って貼りつけていると風先輩が話しかけてきた
「それにしても徹、なんか雰囲気変わったんじゃない？」
「そりゃ、今まで五体満足に動けませんでしたからね…　体が万全に戻った今こそ、この八重樫徹の時代がやって来たといっても過言ではない…　ッ！」
「それじゃ、今までよりもきつめの依頼をお願いしようかしら」
「…　すいません、調子にのりました。重めの依頼は率先して受けるのでキツいのは何卒ご容赦を…」
「意思よわッ！」
「こんなでも病み上がりなんだ…　私生活に使う部分が使えなかったからまだ違和感凄いし」
「あー、わかるわそれ、ちょっとずつとは言え、意外と違和感凄いのよね」

などと話していると、部室のドアがガラッと開く
「じゃーん！　結城友奈、ご心配をおかけしましたー！」
「友奈さん！」
「威勢いいわね」
「ちょ…　まだ準備できてないのに」
「よぉし、これで勇者部全員揃ったわ！　今日はお祝いよ！」
「「「「おー！」」」」
ようやく日常を取り戻す事が出来た…　みんながいて、ようやくそれを実感することが出来た

友奈が勇者部に復帰してから、迫る文化祭に向けた練習と友奈のリハビリ、そして溜まっていた依頼の消化などと忙しい日々が過ぎていったけれどそのすべてが充実したものだった、そしてついにやって来た文化祭の日。裏で大道具を動かす準備をしながら友奈たちの方を見る
「結局世界は嫌なことだらけ辛いことだらけだろう？　オマエも堕落してしまうがいい！　現実の冷たさに震えろ！」
「そんなの気の持ちようだ！　他人でも大切だと思えば友達になれる、互いを思えば何倍でも強くなれる！　無限に勇気が湧いてくる！」
真っすぐ見つめたまま友奈は力強く言葉を続ける
「世界には嫌な事も悲しいことも、自分だけではどうにもならない事もたくさんある…　だけど、大好きな人が居るから挫けるわけがない！　諦めるわけがない！　何度でも立ち上がる！　だから勇者は絶対に負けない！」
それから劇は滞りなく進んでいたがラストシーン手前で友奈が大勢をくずして倒れそうになっていたから舞台袖から出て彼女の事を受け止める
「大丈夫か!?」
「うん…　大丈夫」

「友奈ちゃん…!!」
駆け寄ってきたみんなが友奈の周りに集まってくる
「まだ身体が…」
「…ごめん、ちょっと立ち眩み」
最後の最後で予定とは違ってしまった俺達に対して、観客から送られたのは盛大な拍手
「成功…したのかな」
「ばっちり！　立派な勇者だったわよ、友奈！」

花は咲き、散るのかも知れない…けれど、一度散った花だとしても、そこから生まれた種が新しい花を咲かせる
これから先、どれだけの困難が俺たちの事を待ち受けているのかはその時になってみないと分からない…けれど、きっと俺達なら乗り越えることが出来る、皆と一緒なら…絶対に

平和な話・1

俺達の戦いが終わり、文化祭も終わり、勇者部は元の日常を取り戻していた
「お疲れさまでーす、八重樫徹、現着しました」
「結城友奈、ただいま到着しました！」
「東郷美森、到着しました」
「おっ、来たわね三人とも」
「みなさん、お疲れ様です」
「遅いわよ」
部室にやって来た俺達三人を出迎えたのは、風先輩、樹ちゃん、夏凛の三人・・・というか夏凛は俺達よりも早く部室に来るとか、すっかり勇者部の一員になってるな
「・・・何考えてんのよ」
「いや別に？」
相変わらず間の鋭い完成型勇者だことで
「そう言えば、あの二人は？」
「あいつらなら先生に少し呼ばれてるんで少し遅れると思います」
俺たち勇者部は全部が元に戻ったわけじゃない・・・変わったこともある、それは決して悪いものではない
「それで、今日の予定は？」
「詳しい話は全員揃ってからね」
「分かりました」
「私はホームページの更新、終わらせちゃいますね」
東郷はそう言ってパソコンを起動させ、俺達は各々出来る事をする
「ねぇ徹くん、迷子猫のポスター出来た？」
「あぁ、作ってきたぞ・・・少し師匠の手も借りたけど」
カバンの中からポスターを取り出すと、友奈だけじゃなく風先輩も覗き込んでくる
「ほんとによく出来てるわねぇ・・・実際は不知火さんに全部やってもらったんじゃないの？」

「師匠にはソフトの使い方を教えて貰っただけなんで、正真正銘自分で作りましたよ」
　慣れない作業でだいぶ苦労したけど、何とか作り上げることが出来た渾身のポスター、疑われるのは少しムカッと来る
「ごめんごめん、それじゃポスターもできてるみたいだし、全員揃ったら――」
　風先輩の言葉が終わろうとしたタイミングで部室のドアが開く
「お待たせしましたー！　三ノ輪銀、ただいま現着です！」
「園子もいるんだぜー」
「おう、二人ともお疲れ様」
　そう、我らが勇者部に入ったのは俺と東郷の大切な友達である三ノ輪銀と乃木園子
「よしっ、全員揃った事だし勇者部・・・　活動開始よ！」
「「「「「「おー！」」」」」」
　新生勇者部、本日も絶好調で活動をしています

　それから部室でのミーティングなどを終えた帰り道、俺と東郷、友奈の三人でいつものように並んで歩いているとふと東郷が口を開いた
「何だか、不思議な感じ・・・」
「不思議？」
「東郷さん、どうかしたの？」
「なんでもないの・・・　ただ、友奈ちゃん達だけじゃなくて、またそのっちや銀と一緒に学校に通えると思ってなかったから」
「それもそうだな、俺も東郷も失くしてた記憶取り戻して今度会いに行こうって話をしてたら転校して来てビックリした」
「確かに、急だったもんね」
「でも、やっぱり嬉しかった」
　あの日、あの場所で別れてしまって以来違えてしまった道が繋がり、東郷だけでなく園子や銀とまた同じ学校に通うことが出来る

「ほんと、人の縁ってのは分からないもんだな…」
「どうかしたの？」
「いや、師匠から言われたこと思い出してさ、〝人の縁ってのはわからねぇもんだから、大事にしろよ〟って」
「へぇ」
「不知火さんも、そういう事を言うのね」
「あの人意外と意味わからない事言うぞ？」
「誰が、意味わからねぇこと言うって？」
その言葉を聞いてすぐに後ろを振り向くと、頭にチョップを叩き込まれた
「いってぇ!?」
「こんにちは、不知火さん！」
「こんにちは」
「おう、こんちわっつってももう夕方だけどな…それにしても八重樫、気配を研ぎ澄まして周りにも気を配れって言ったろう」
「日常生活でも…って、師匠何ですかその荷物」
頭をさすりながら師匠の方を見ると、普段に比べる必要もない程の荷物を抱えていた
「あぁ、少し遠出することになってな」
「遠出…何処に行かれるんですか？」
「ちょっと宇多津までな」
「宇多津…どうしてそんなところまで？」
「仕事でな、割と長引きそうだからとりあえず八重樫に伝えに来たんだよ」
成る程、という事は…
「トレーニングは暫くなしですか？」
「なしでもいいが、何があるか分からないから最低限鍛えとけ…じゃあな」
師匠はそう言うと、さっさと歩いて行ってしまった
「師匠、仕事ってなんだろうな」
「長くなるって事は、よっぽど大変な依頼なのかしら」

「どうなんだろ…」
「まっ、師匠なら問題ないだろ」
何だかんだで師匠が死ぬところなんて想像できないし、大丈夫だろう

八重樫たちと分かれた俺は、そのまま大赦が送ってきた車に乗り込んで渡された資料に目を通す
「目的地はゴールドタワー…　ねぇ」
どうしてこんな所に向かわないと分からないが、大赦…　というか上里からの依頼は無下に出来ない
「壁の外の調査に、防人…　ま、詳しい話はついてからって感じか」
これから起こる事が厄介事だというのは分かっているが、俺は自分に出来る事をするだけだなどと考えつつ車の窓から外を見ると、空高くに青い鳥が飛んで行っているのが、目に入る
「まぁ、程々に頑張りますかね」
俺は少しだけ明るい気分になると、車に揺られながら宇多津に向かう

神世紀３００年／秋　―楠芽吹は勇者である―

Ｉ　開幕

　神樹の結界で守られている外側、四国以外が灼熱地獄と化しているその場所で俺は饅頭に口付いたような化け物…星屑に対して槍を突き立てている所である
「こいつで、ラスト」
　地面に叩きつけた星屑の上で汗を拭うと耳につけられたインカムに話しかける
「終わったぞ」
『お疲れ様です、それで…壁の外に何か変化は？』
「いや、特にねぇな、辺り一面火の海だ」
『そうですか、分かりました』
「…急にそんな事聞くとか、なんかあったのか？」
『実は、今日の会議で壁外調査の話が議題に上がりまして』
「壁外調査って、この火の海じゃ調査もクソもないだろ」
『実は、上層部は防人の導入を決めたみたいで…』
　防人…大赦で開発されてた量産型勇者システムと言えるもの、冬馬からは実用段階になったって聞いてたけど、やっぱり大赦は実践投入を決めたって事か
「今回、俺に壁外調査を頼んだのもその一環って事か？」
『まぁ、そうなりますね』
　まんまと利用された…と考える気はないが、正直こんな感じじゃどれだけ調査をしたって変わる事は無いと思うけどな
『それと、不知火さん』
「どうした？」
『防人と壁外調査の件、上里家から正式に協力要請があったので…この機会に伝えておこうと』
「まぁ、その一件に一枚噛めるなら大歓迎だって伝えといてくれ」
『了解です』

「そんじゃ、俺ももう帰え…ろうと思ったが残業の時間だ」
さっさと帰ろうと思った俺の目の前に現れたのは、体を作ってる途中のかに野郎が目の前に現れた。とりあえずインカムの電源を落として星屑に刺さってた槍を引き抜き、構える
「さーて、完全復活してひっさびさだからな…初っ端からフルスピードで行くぜ」
片手で軽く槍を回転させて投擲の構えを取り、かにに向かって思いっきりぶん投げる。そして突き刺さった槍を思いっきり引っ張り火の地面に叩きつけると思いっきり上に飛び槍の柄を手に取る
「久々に、槍を茨のように溶かして…内側から貫くッ！」
かなり前に使った技…槍を液状にして中に浸透させた後、一気に茨のみたいに変化させてぶち抜く、何だかんだ最近使ってなかった気のする技だが…出来て良かった
「にしても、体調は万全…前みたいに動ける」
どうして俺の事まで治療したのか分からない、だが、今は身体を治してもらったことには一応感謝をしておこう…絶対口には出さんけど
かに野郎を倒した俺はその足で壁の内側まで戻る
「それにしても…防人に壁外調査ねぇ」
何と言うか、また一波乱ありそうだな

それから時が進み秋頃、上里家からの迎えの車に乗った俺に渡されたのは今回の一件に関する資料に目を通す
「春信から聞いた通り、目的は壁の外の調査に反撃の土台作りねぇ」
作戦に関しては春信から聞いてた通り
「それ以外に載ってるのは、防人に選ばれたメンバーの情報か」
身長に体重、それにスリーサイズ…それに勇者適正を図る試験での成績、大まかに見ているだけでも全員個性的で面白そうな奴が多い。パラパラと資料を捲っている中で一人、目に留まる奴がいる
「楠芽吹、単純な成績だけならトップ…これなら夏凛にも勝ってるんじゃねぇの」

だけど結果選ばれたのは彼女じゃなくて夏凛だった…大赦関連なら勇者の御役目の重要性も知ってるだろうし、ビックリするくらい悔しかったろうなぁ。まぁあんな御役目選ばれないのが得策だけどな

「到着いたしました」

「分かった、ありがとな」

俺の言葉を聞いた運転手は頭を下げると引き返していった

「にしても、ここがゴールドタワーねぇ」

今までこっちの方には来たことなかったし、少し新鮮だがそんな事言ってる暇もねぇな。とりあえずタワーの中に入ると、見慣れた人物が神官服を着てエレベーターの前で待機していた

「おっ、安芸ちゃんじゃん、久しぶり」

「お久しぶりです、要さん…それと、安芸ちゃんはやめてください、この場所では特に」

「真面目なお役目だし、当然か…それよか、防人のメンバーは？」

「まだ楠さんが来ていません…それ以外のメンバーは全員揃っています、不知火さんは私に付いてきてください」

安芸ちゃんはエレベーターを呼ぶと、手に持っていた仮面をつける…というか仕事モードだと苗字呼びですか、慣れねぇ

「やっぱその仮面付けるんだ」

「えぇ、規則ですから」

まぁ、そりゃそうか…そこらへんはしっかりやっとかねぇと目を付けられかねないからな、それから少しの間エレベータに乗っていると最上階で止まり、扉が開いた

安芸ちゃんの後ろをついていくと集められていた三十人前後のメンバーが目に映る、この子たちが防人に選ばれた少女たちか

それから少しの間、集まっている少女たちから少し離れた場所で残り一人を待っているとエレベーターが開き、一人の少女…楠芽吹が入ってきた

「……！」

集まっている少女たちの姿を見た彼女は、何か感じ取ったみたいだが…それは期待外れだろうが入ってきた時に比べて目に活力が戻っ

たのを見るに悪い結果にはならないだろう
「全員、揃ったようですね」
　全員揃った事を確認した安芸ちゃんは少女たちの前に出ると、話を始めた
「今ここに集まっているのは、勇者という御役目の候補生だった者たちです」
　集められた少女たちは安芸ちゃんの話に耳を傾ける…そして、これから彼女たちに話されるのは衝撃なものだろう
「さて…ここで何人脱落するか」
　誰の耳にも届かないよう俺は呟き、事の行く末を見守る
「あなたたちは皆、勇者適正が高い。その素養を活かして新たな御役目に付いて貰いたいのです」
　設置されていたスクリーンに映し出されたのは壁の外の光景に化け物畜生（バーテックス）の姿…だが、今までそんなことを知らない少女たちは今映し出されている映像に対して疑問符を浮かべていた
「これは、世界の真実の姿…四国を囲む壁の外を映したものです」
「これが、壁の外？何をおっしゃっているんですの？」
　当然の反応だ、急に言われても理解する方が難しい
「確かに壁の外の世界は、致死性のウィルスによって滅びたと聞いています。ですが、この状況は……ウィルスによって、大地が、空が、こんなふうになるものですか？その不気味な化け物は、一体何なのですか」
「あなたの疑問はもっともです…人類が隠してきた歴史を話しましょう」
　それから安芸ちゃんによって語られたのは、西暦から現在に至るまで何があったのか…そして始まりの日から続くバーテックスと勇者の戦いで何が起こったのか
　ボロボロになっている勇者たちが映し出された時に何人かは気が付いたのだろう、勇者のお役目がどのようなものだったのか…ホント、今に至るまで四国で戦っている勇者に死亡者が出ていないのは奇跡と言ってもいいだろう

「神樹様は地祇の集合体であり、バーテックスは天神が人類を滅ぼすために送り込んだ存在です。壁の外の世界は、天神によって変質させられてしまいました。神樹様が作り出した結界によって、かろうじて四国だけが人の住める状態のまま残っているのです」

その言葉を聞いた俺は自然に拳をきつく握っていた。すぐに治癒されたが強く握りすぎて少しだけ血液が地面に滴り落ちている…冷静になろう

「ですが、このままではいずれ神樹様の力が尽き、結界が消え、四国も炎に包まれて滅ぼされます。事態を打開するために、人類も自ら打って出なければなりません。そこで壁の外に出て異界を徹底的に調査し、反撃の準備を整える御役目をあなた達に頼みたいのです」

「いやいやいや無理無理無理無理、あんな化け物と戦えるわけない死ぬよ絶対死ぬこれ死んじゃう奴だよ。あの、えっと、頭痛が痛くなってきたから帰りますです」

そういった少女…確か、加賀城雀だったか。が帰ろうとするが安芸ちゃんがそれを見逃すわけない

「加賀城さん、勝手に帰ろうとしない！もちろん、危険な御役目を生身でやらせたりしません。戦う為の力も用意しています」

そりゃそうだ、普通の人間ならあんな灼熱地獄に一歩踏み出すだけで灰になっても可笑しかねぇ

そっから安芸ちゃんが防人システムについて、それにこれから防人に選ばれた少女たちが訓練を受けながらゴールドタワーで暮らす事等を説明していた、殆ど勇者適正試験の時と変わらないが唯一の違いは防人は個人戦ではなく集団戦が重視されるという所か

こっから防人たちは訓練みたいだし俺のやる事は無いだろ、そう思ってさっさと用意された部屋に向かおうとしたところで安芸ちゃんに首根っこ掴まれた

「安芸ちゃん、苦しい…死んじゃう」

「安芸ちゃんはやめてください、それに不知火さんは殺しても死なないでしょ…んんっ、付いてきてください不知火さん。出番です」

ごもっともな事を言われた俺は安芸ちゃんに掴まれていた首根っ

こを放されたあと防人たちの前まで向かう。どうやら一通りの訓練を終えたであろう少女たちは疲れている様子だったが安芸ちゃんが前に来るとシャキッとする辺りしっかりした子達だ

「それでは、部隊全体を纏める隊長を決めます。立候補者は手を挙げてください」

手を上げたのは楠をはじめとした何人か、それを見た安芸ちゃんは頷くと話を始めた

「それでは、実技の成績と…彼にも手伝って貰いましょう」

「あぁ…俺はこういう役回りなのね」

安芸ちゃんが出番だといった意味に納得しつつ、防人たちの前に出る

「その方は、どなたですの?」

「紹介します、あなた達の戦闘訓練での教官をしてもらう、不知火要さんです」

「ご紹介に預かりました、不知火要です…以後よろしく」

特に話すこともねぇし自己紹介はこれくらいでいいだろ

「それで、あk……神官さん、彼女らと俺は具体的に何すりゃいいの?」

「…不知火さんには彼女たちと組手をしてもらいます、そしてあなたの評価も込みで防人全体の隊長を決めさせてもらいます」

成る程ねぇ、組手って事はアレか、俺にいたいけな少女をボッコボコにしろという事か

「というわけで、お手柔らかによろしく頼む」

あんまり気乗りはしないが、これも将来彼女たちが遭遇する試練に打ち勝つためだと腹を決めるついでに、少し気合いを入れ直すのだった

Ⅱ　補充の意味

さてと、とりあえず全員の実力を見てみたが
「てんでダメ…って訳じゃないが、なーんかピンとこねぇんだよな」
全員そこそこなんだがピント来る奴がいねぇ
「そんじゃ、次は…」
「私です」
「そか、そんじゃ、お手柔らかに頼む」
次の相手は楠か、武器は他と同じく銃剣…まぁそれが防人のメイン武装になるから当然か、訓練で実弾使うわけにもいかないから中身はペイント弾だけど
「それでは、始め」
「ッ！」
「まずは真正面からか…いいねぇ嫌いじゃない」
まずは銃撃で様子を見たりすることが多かったから、こうして真正面から来るのは嫌いじゃない
「が、そうそう当たる程俺は弱くもない…って、あぶねッ！」
楠の振るってきた銃剣をひらりと避けて距離を取るとすかさず銃撃、慣れてりゃ出来る芸当だがここでお目にかかるとは思わなかった
「…ギア上げるか」
「えっ？…ッ!!」
思いっきり大地を蹴って楠まで接近すると右足軸で体を回転させて蹴りを放つ、がこれもガードされた…こっからどうするか見ようと思った矢先、しゃがんだ楠が軸にしてた右足を蹴って俺の体勢を崩した
「貰ったッ！」
「そう簡単には、やらねぇよ」
俺もそうそうやられるわけにはいかないからな、体勢は崩されたが今度は腕を軸にすりゃいいだけだ…と言うわけで右手を地面につけると側転の要領で体を動かして体勢を元に戻す
「そんな…」

「ここまでだな」
　正直、負けはしないがこれ以上やっても時間の無駄になりそうだしここら辺でやめとくのが得策だ。楠は不服そうだったがこれ以上付き合う気もない
「お疲れ様です…それでは、結果を」
「…少しも休ませてくれない感じですか」
「結果は決まっているでしょう、発表したら後は休んでもらって構いません」
「はいはい…そんじゃ、隊長を誰にするか発表するぞ」
　集まった防人等の前で誰を部隊長にするのかを発表する
「防人部隊の隊長は、楠芽吹」
「はい」
「それじゃ、そう言う事で」
　そう言い残して俺は訓練所を後にした

　それから時は進み、防人たちが初めての御役目の日
「なぁ神官さん、俺は同行しなくても大丈夫なのか？」
「はい、不知火さんはあくまで教官…それに、今回は防人たちに経験を積ませる必要もあります」
「経験…か」
　そりゃそうか…でもやっぱり心配なんだよな
「なぁ…気づかれないようについていくのは…」
「駄目です」
　やっぱそうだよなぁ…でも心配なんだよな、少し過保護になりすぎてる気もするが勇者システムに搭載されてるバリアが無い…代わりに装備されてる盾は結構な耐久を誇ってるがそれでも不安なのに変わりないんだよなぁ
「はぁ…」
　心配するだけ無駄だとわかるが、今の俺には防人たちを見送るしかできなかった…ヤバそうだったら今度は無理にでも同行しようと心に誓う…それから数時間後、帰ってきた彼女たちはボロボロだった

が、犠牲者は一人もいなかった

「ごめん…本当に、ごめんなさい」
「あなたはそれでいいの!?せっかく防人として訓練してきたのに、ここで諦めたら何もならない!人が少なくなったら、私たちの任務だって――」
「ごめん…私には無理だったんだよ、ごめん…」
喉か湧いたからエレベーター前の自販機まで行こうとしたところで、楠の部屋から何度か聞いたことある問答が聞こえてきた…防人たちが初めての任務を行った後、心が折れてゴールドタワーを去る子が現れ始めた…それに関しては予想出来た事だから仕方ない
「っ!…ごめんなさい」
盗み聞いていると、楠の部屋から出てきた少女とばったり出会い謝れた
「別に謝んなくていい…それより、少し時間良いか?」
「…はい」
自販機近くのベンチまで行くと、水を一本買って彼女に渡す
「どうぞ」
「…ありがとう、ございます」
一人分間隔をあけて、ベンチに座った俺は彼女に話しかける
「先に謝っとく、楠の部屋での会話盗み聞ぎした」
「…いえ、大丈夫…です」
「そっか…それで、防人辞めたいんだよな」
「はい…私には、無理です」
話してる彼女の肩は震えてた、大方壁の外の光景を思い出しちまったんだろうな
「その事で、俺は君を止めるつもりはない」
「えっ?」
「だってそうだろ、あんな地獄を目の前にバケモンと戦うんだ…怖くて当たり前、トラウマになっても仕方なしだ」

それが当たり前の反応で、人として正しい反応だからな
「…だから、俺は君が辞めるのを止めないし楠みたいにもう少し考えてみてって言う気もない」
「じゃあ…どうして私を?」
「なんつーかなぁ、強いて言うなら思い詰めて欲しくなかったからだよ…あんな光景見て、戦って、ビビッて逃げて…それが悪いとか一切ない、だから罪悪感なんざ感じなくていいって事を伝えたかっただけだ」
そういい終わるとベンチから立ち上がって彼女の方を向く
「とりあえず言いたかったのはそれだけ、時間貰っちまって悪いな」
「いえ…なんだか、少しだけ楽になった気がします」
「そりゃよかった…じゃあな」
同じく彼女の事を見送ると、俺はエレベーターに乗って展望台から外の景色……いや、丸亀城を見る
「そうだよ…ビビッて、足がすくんで、逃げんのが当たり前だ」
アイツらも、勇者部も、鷲尾達も…若葉たちも少なからずそう言う感情はあったと思う。だけどもし、その恐怖を感じ無い奴がいるとしたら――
「そいつはきっと、よっぽど覚悟がキマってるか……とっくにぶっ壊れてるかのどっちかなんだろうな」
楠には後者であって欲しくないな、などと思っているとエレベーターからチンと音が鳴り、中から楠が出てきた
「よう」
「…どうも」
「お前も黄昏に来たのか?」
「いえ…少し、考え事がしたかったので」
「それって、防人をやめたいって言った子をどうにかして引き留められないかって事か?」
「ッ!?…どうして」
「これでも、他人の考えを読むのは得意なんだよ」
まぁ実際には、楠と彼女の話していた内容からざっと推理しただけ

だがな…気配を感じて少し視線を動かすと、隠れてこっちを見ている安芸ちゃんの姿が見えた。大方補充要員の事を伝えに来たんだろう
楠に見えないように伝えておくと安芸ちゃんに合図を送ると、もう一度話を始める
「そういえば、楠は補充の話は聞いてるか？」
「補充…？」
「あぁ、防人の御役目を辞退したいって子が二人、それに先の御役目での重傷者が二人…戦力的には痛てぇだろ？」
「…そうですね」
「だが、次の御役目まで回復を待ってる時間もないし、待つ気も更々ない…そして、能力的に優秀な指揮官型には欠員が出てない」
「まさか…補充って…」
「そういうこった」
補充、その意味をある程度理解したであろう楠は、怒りと…そして戸惑いのような感情を見せた
「もしそれに不服があるなら、俺から言えることは一つ…強くなれ、そして認めさせてやれ、お前らはその程度の存在じゃないって事を」
「…失礼します」
響いたのかは知らないし俺の知ったこっちゃねぇがな、エレベーターの扉が完全に締まると影に隠れてたであろう安芸ちゃんがこっちにやって来た
「すみませんでした」
「すみませんって、何が？」
「要さんに…役割を押し付けてしまって」
「別に、これで嫌われたら仕方ないし…嫌われるのには慣れてるからな」
雪花と一緒に生活してた頃から今に至るまででどんだけ他所の連中から負の感情を向けられたか、最初は胸糞悪かったが今じゃもう慣れちまった
「それより、補充要員は？」
「全部で四人です、明日の朝…楠さん達にも伝達します」

「そか…あれならその役目も俺が変わるけど」
「いえ、私にも私のやるべきことがありますから」
やっぱ、安芸ちゃんは強いな…俺の周りにいる奴らは、俺なんかよりずっと強い
「どうかしましたか？」
「…いや、あの時はチビ助だった安芸ちゃんも随分成長したなと思ってさ」
「……からかってます？」
「そんな訳ないじゃん、そんじゃ…俺も部屋戻るから」
最後にもう一度だけ丸亀城を見るとエレベーターに乗り自分の部屋へと戻った

Ⅲ　仲間

翌朝、防人たちを見つめながら安芸ちゃんと楠の到着を待つ。人数は前回の御役目で重傷を負った二人と昨日の防人を辞退した二人以外の全員

エレベーターの扉が開き楠も合流すると、安芸ちゃん以外の神官の近くにいた四人の少女が防人たちの目の前に出る

「今日から、彼女たちが新たに防人の御役目につきます」

防人たちの前に立った安芸ちゃんが目の前にいる防人のメンバーにそう告げる。その後、四人の少女たちにタワーの空いている部屋を自室に使うように言う…その空いている部屋というのは重傷を負った二人と辞めていった二人が使っていた部屋だ

少し視線を動かして楠の方を見ると、昨日俺が言った補充の意味を改めて実感してるらしい

それから、防人たちは解散になり、彼女たちはこれから授業だが俺はやる事が無い…正直、わざわざ授業をする必要があるのかとも思うが、ここら辺も大赦なりに考えてるんだろう、まぁ俺は大っ嫌いだが

「あっ。不知火さん」

「おぉ、国土ちゃん…相変わらずちっこいなぁ」

そんなことを考えていた俺の前に現れたのは国土亜耶、防人ではなくひなたや安芸ちゃんのご先祖、安芸真鈴と同じ巫女…神樹の神託を聞く存在。何回か会って話したこともあるのだが、正直な話純粋培養過ぎて少し苦手なのが本音である

「あの、不知火さん、くすぐったいです」

「あっ、悪い、絶妙な位置に頭があるもんだからつい」

適度な所に頭があるからついポンポンしてしまう、これに関しては完全に小さい頃の安芸ちゃんが原因だが…本人に言うと何されるかわからんから言わん

「国土ちゃんは、これから授業か」

「いえ、新しく防人となる方たちの為に神樹様にお祈りをと思って、不

知火さんは…？」
「俺はやることないから適当に掃除でもと思ってな…それより祈るならしっかりやった方が良いだろ？　早く行きな」
「はい、それでは、失礼します」
　ホント、今時珍しい位行儀のいい子なんだよな…アレで神樹への信仰がもう少し控えめだったらもう少し接しやすかったんだが、そこら辺は言っても仕方ないか

　それから授業終了時間になったわけだが、正直訓練の時間も俺はあんまやる事ないのだ、これからは戦闘データを基に陣形の構築や体力増強の訓練。指導すればいいだけだから何をするって訳でもないし。頼まれた組手に付き合うだけ
「不知火さん」
「楠か、どうした？」
「組手の相手、お願いします」
「あいよ、今回も俺は素手良いか？」
「いえ、条件は対等に」
　対等って事は、俺も今回は銃剣を使うのか
「分かった、そんじゃ…始めるか」
　近場にあった訓練用の銃剣を手に取ると、楠と向かい合う…防人は集団戦に特化していた方が良いのだが、少なくとも想定外の事態に遭遇した時の為にある程度個人の実力も優先される。だからこうして付き合っている訳だ
「行きます」
「よっしゃ、どっからでも来い」
　楠は前回同様真っすぐ俺の方に向かってくる…が、前回のように付き合ってやるつもりは毛頭ない
「…そこ」
　銃剣を構え、楠…ではなく彼女の足元に放つ、これは対バーテックスではなく対人間を意識した戦い方だが一度受けておくだけでも戦

術の幅は広がる
「ッ！」
「次は…そこだ」
　足を止めた楠の近くをもう一度狙い放つ。彼女の実力は確かに高い…が、戦い方はまだまだ正直だ。そして銃撃を受けた楠は反対に飛ぶのも予想通り、すぐに近づき剣で思いっきり薙ぎ払う
「くッ！」
「少しでも早く体勢を立て直せ、当たるぞ」
　薙ぎ払い体勢を崩した楠に対して忠告をした後ダメ押しの一発、これは楠の心臓部に直撃した
「ここまでだな」
「…もう一戦、お願いします」
「別に付き合ってもいいが、防人は集団戦が命だろ」
　そういいながら俺は楠を防人たちの元に戻り、再び入口の近くまで戻り、今度は陣形に付いて観察を始める…改善点は後でノートに纏めて渡しとくか

　それから時は流れ、昼時…今日は蕎麦の気分だったので一人寂しく蕎麦を啜っていると騒がしいのが入ってきた。食堂内はそこそこ賑わってるから問題ないが一人で食ってた楠に話かける辺り、彼女にもしっかり友人がいるのだと実感させられると同時、自分がこの場ではボッチだという事を実感していると、国土ちゃんが近くにやってくる
「あの、不知火さん」
「なんかあったか？」
「よろしければ、あっちで皆さんと食べませんか？」

　俺が、花の女子中学生に混ざって食事…流石に冗談だろ
「それ、何の冗談？」
「いえ、一人で食べているようでしたので…よろしければどうかと」
「あぁ…俺の事は気にしなくていいから、楠たちと食べといで」
「ですが…」

「良いんだよ…それに、俺はもう食べて終わったし」
「……」
　食べきった蕎麦の皿を持って、席から立ち上がった所で…少し離れた場所にいた楠と目が合った…良かったらどうぞみたいな事を視線で言われてる気がする、国土ちゃんの視線もいい加減痛いし、仕方ないから少し話して戻ろう
「…わかった、少しだけな」
「はい！　それじゃあ行きましょう！」
　巫女ってのはどうしてこうも逆らいずらいんだろうな…と若葉たちと一緒にいたころを思い出していると少し寒気がした
「…少しだけ邪魔する」
「どうぞ」
「あっ、えっと、私は」
「加賀城雀だろ、知ってる」
「は、はい！　加賀城雀です！」
「そんで、そっちの似非お嬢様が弥勒か」
「ちょっと！　似非とはなんですの！　似非とは！　私は正真正銘―」「はいはい、知ってる知ってる」遮らないでくださいます!?」
　騒がしいのが多いな、楠の周りは…まぁ本人がお堅い分こっちの方が良いのかも知れないが
「そういえば亜耶ちゃん、午前中は姿が見えなかったけど、何かあったの？」
　ぎゃいぎゃい騒いでいる弥勒を横目で見ていた楠は国土ちゃんにそんな事を聞いていた
「新しく防人になった方がいますので、神樹様にお祈りをしてたんです。今日防人になった方も、既に防人である皆様も、誰もが無事御役目を全うできますようにと……。隊長の芽吹先輩には伝えておくべきでした、ごめんなさい」
「ううん、気にしないで。ちょっと心配になっただけだから」
　不思議と国土ちゃんと話している時の楠は普段に比べてもかなり優しい表情をしていると思う

「防人をやめて去った方々にも、きっと神樹様のご加護があります」
　一言二言話してるのを傍目に聞いていたが、国土ちゃんのその言葉を聞いた時、複雑な気持ちになった…あの日から今に至るまで、神樹が勇者に対してしてきたことを見てきたからか、俺は神樹を信じられていない
「しずく！　場所がないなら、こっち来たら？」
　楠がこっちに誘った少女、確か山伏しずくって言ったな…どっかで見覚えがある気もしてたけど、ようやく思い出した、山伏は出身は神樹館だっけか。にしても…ここに居る面子は随分と凸凹なグループだなと思う、クソ真面目なな防人部隊の隊長である楠に、生存能力は人一倍の加賀城、似非お嬢様だが実力は確かな弥勒、今のところ実力が未知数の山伏、そして巫女の国土ちゃん
「…まぁ、悪くないチームっぽいけどな」
「何か言いましたか？」
「別に、何でもねぇよ」
　成り行きかも知れないが、展望台で楠と話した時から薄々気付いていたが彼女の眼は初めてここに集められた時よりも良いものになっていたと思う。それはきっとこいつらの影響もあるのだろう
「しかし、芽吹さんの食事はいつも通りですわね。うどんに牛乳って、どうなんですの？　牛乳をお茶に替えるとか、うどんをパンに替えてはいかが？」
「味の組み合わせの良し悪しなんて考えてませんから。体を作るための栄養素が豊富な牛乳は、欠かせません」
　成る程、変な食い合わせにも楠なりのポリシーがあるって訳だ
「……では、うどんを替えては？」
「パンにうどんの替わりなんてできません。生まれた時からこれを食べてきましたから」
「私もおうどん、好きですよ」
　相変わらず、何処にいっても存在するうどん愛好家…マジで必需品みたいになってるな。そっから何故かいつも食べてるもの談義が始まり…地元自慢が始まった、弥勒に始まり加賀城、そして山伏に話が

回ったわけだが
「そうですわ、せっかくですから、しずくさんの事をもっと聞かせてくださいな。しずくさんとは前から色々お話ししてみたいと思っていたのです。どんなご家庭で育ったのですか？　ご両親などは？」
「両親は、心中した」
　弥勒の質問に山伏が答えた瞬間、その場の空気が凍り付いた、楠が弥勒に対して何か訴え、そして加賀城が楠に助けを求めていた
「……そ、そういえば、不知火さんって出身何処なんですか？」
　話題を維持したままこっちにまでパスしてきやがったな楠
「出身か…さぁな、忘れた」
「忘れたって…どういうことですか」
「ちっさい頃ここに来たからな、一応記憶がある範囲だと丸亀に住んでたし、香川でいいんじゃないか？」
　嘘は言っていない（今の年齢が三百ちょいの身からすると）十代のちっさい頃に（北海道から）四国にやって来た、そして丸亀に住んでたのも嘘じゃないし、それに元々の出身より香川にいる時期の方が長いのも事実だ
「そうなんですか」
「俺の事はどうだっていいんだよ…そういや今までの経歴にざっと目を通したが、山伏は小学校神樹館だったな」
　適当に話題投げとくか、神樹館は鷲尾達も通ってた学校だし…勇者関連ならなんか話のタネになるだろ
「神樹館ですか！　確か二年前、神樹館の生徒の中に勇者様がいたんです。しずく先輩は勇者様と年齢が同じですし…もしかしたら知り合いだったんじゃ」
「隣のクラス。だったから…後、そこの人も。知ってる」
　国土ちゃんの言葉に頷いた山伏はそう言うと俺の方を見てきた
「…俺か？」
「うん。小学校の時の、自習の時間に」
　そういや勇者の近くにいた方が良いだろって事で神樹館で教師やってた時、隣のクラスの担任の先生に頼まれて一回自習の時間受け

持ったことあったっけ…つっても見てるだけだったけど
「という事は、不知火さんも勇者様を知ってるんですか？」
「まぁ、一応知り合い…になるのか？」
「はあ～…なんだか驚きました。先代の勇者様の知り合いが二人もいるなんて」
そう答えると亜耶ちゃんは感嘆している一方で、楠の方はやけに真剣な目を俺と山伏に向けていた
「どんな人だったの、先代の勇者って……？　どんな人が勇者になれたの？」
その言葉を聞いたのと同じタイミングで午後の訓練開始のチャイムが鳴り、楠はその答えを聞くことが出来なかった
そしてその翌日、二回目の壁外調査が行われることになった

Ⅳ　楠　対　山伏

二回目の壁外調査、新たに防人となった四人は必要最低限の武器の扱い、そして戦い方だけを教えられ実践投入されることになった
「そうしなければならない程、大赦も焦っているって考えて良いのかねぇ」
「詳しい話は、私にも伝えられていません」
安芸ちゃんにも伝えられてないとなると、やっぱり意図的に情報を隠されていると考えた方が良いか
「二回目の壁外調査、何事もなければいいんだがな」
「私たちは、ただ彼女たちを信じるしかありません」
「…だが、今回また重傷者が出るようなら、俺も勝手にさせて貰う」
前回に引き続き今回も重傷者が出るようだったら、流石の俺も前に出て動く…今、勝手にそう決めた
「もとより、そのつもりです」
「そういえば、安芸ちゃんに一つ聞きたいことがあったんだ」
「聞きたい事？」
「あぁ…山伏しずく、知ってるだろ」
「えぇ、彼女の事で何か？」
「防人ってのは、確か数字によって実力が示されてるんだよな…なら、彼女が一桁の理由ってのは何かあるのか？」
言っちゃなんだが、山伏しずくは楠芽吹や弥勒夕海子に比べると数値は平均的、実際の訓練でも突出した分野を見たことは一度もなかった…資料にも本人の潜在的な資質込みで評価を下したとだけ書いてあっただけ
「そうですね、確かに彼女〝だけ〟では、一桁と言う数字には値しないではない」
「だけって事は…やっぱ資料に書かれてた潜在的な資質って奴に理由があるんだな」
「えぇ、彼女にはもう一つ人格があります…それを込みで、一桁と言う評価になりました」

「そう言う事か、それなら…一回は実力見ときたいな」
「いずれ機会は訪れると思います…どうやら、帰ってきたみたいです」
安芸ちゃんが視線を送ったほうを見ると、どうやら防人部隊が帰還したらしい
それから任務の報告をしに来た楠は、今日の任務中に現れたらしい山伏のもう一つの人格について質問してきた
「あれは、山伏しずくのもう一つの人格です」
俺もついさっき知ったばっかだからビビらなかったけど、聞いてなかったら俺もビビってたと思う
「山伏さんは、自我さえ希薄に思えるような静かな静かな性格ですが、その内側に別の人格を宿しています。粗暴で、荒々しく、そして強い。普段の彼女とは正反対です。追い詰められたりした拍子に、それが出てくるようですね」
「しずくの『九』という番号は、もう一つの人格を考慮してのものだったわけですか」
「そうです、あの状態の山伏さんは故人の戦闘能力が突出していますから」
そこら辺の話は俺も初耳だし、実際に見たわけじゃないから何とも言えないが…それを目撃した楠は少し難ありそうな表情を浮かべてるな
「ですが、防人に必要な連携行動が、まったく出来ていません…アレでは作戦行動に支障が出ます」
「メンバーを従わせるのも、隊長の務めです」
そう言うと、安芸ちゃんはそそくさとこの場所を後にしてしまった
「相変わらず、きっつい物言いだなぁ」
意図的にそうしてるんだろうけど、流石に厳しすぎやしないかね
「…あなたは、一緒に戻らないんですね」
「あぁ、俺は大赦寄りの人間じゃなくて…民間寄りの人間ですから」
「民間寄りって、一体どういう…」
「ちょっとしたことだ、気にすんな…それより、どう従わせるつもりだ？」

「決まっています、相手に実力を見せて納得させる…それだけです」
そう言うの、嫌いじゃない

そしてその日の夕食時、食堂までやってくると喧し娘（仮）こと加賀城雀が絡まれていた…あれが例の山伏しずくの別人格って奴か
「なんだよ、お前、怯えたツラしやがって！」
「ひいい！　シ、シズク様、お許しを～！」
「様とかつけてんじゃねぇ。言いたいことがあるなら、ハッキリ言えよ！」
「わわわ私のような雑魚がアナタ様に口をきくなんて…い、一体いつまでその性格のままなんでしょうか？」
「オレがオレで、文句あんのか？」
「ご、ございませぇん!!」
ありゃ、中々に面白そうなことになってんじゃねぇか
「怯えすぎでしょう、雀…」
どうやらこのまま放置しておくわけにゃいかないと思ったであろう楠が動いた
「ちょっといいかしら」
「ん？　なんだよ」
「め、メブ～！　助けに来てくれたんだね！」
藁にもすがる…ってのは少し違うか、救世主現ると言った感じで加賀城は楠の後ろに隠れた
「あなたのその状態、いつまで続くの？」
「さぁな、久々に出てきたんだし、しばらくはこのまま楽しませてもらうわ」
「…そう」
少し雲行きが怪しくなってきたな
「お前もその方が都合がいいだろ？　あっちのしずくよりオレの方が強いんだ。次の御役目とやらでも、存分に暴れてやるからよ」
「そうね、確かにあなたは私たちの部隊に不用よ」
「……あ？」

楠のその言葉を聞いた瞬間、山伏の表情が変わった。それと同時に楠と山伏の間に存在していた緊張も高まってきた
「防人に必要なのは、連携し、集団で戦う力。あなた一人が勝手な行動を取れば、他のみんなを危険に晒す可能性だってある。指示には従ってもらうわ」
「……俺は自分より弱い奴に従うなんて納得できねぇんだが」
「だったら、納得させてあげる」
「そう言う事なら！　訓練所使っていいぞ」
ここら辺で俺も口を挟ませて貰う
「訓練所を？」
「あぁ、お前らのいざこざも訓練の一環だったって上には説明しといてやる」
「…ありがとうございます」
「そんじゃ、とっとと行くぞ」
そして、俺達がやって来たのは訓練場。俺と楠、山伏の三人だけかと思ったが…まさかそれ以外にもぞろぞろとついてくるとは思わなかったが
「だいじょぶなの？　あいつ、メッチャ強いんだよ！　いくらメブでも…」
「えぇ、今の彼女は私と同じくらい強いですわよ、芽吹さん」
じゃあ問題ないだろ、弥勒は今のところ一回も楠に勝ててないわけだし
「いや、弥勒さんの方が圧倒的に弱いので」
「芽吹さん!?　私はまだ本気をだしていないだけですわ!?」
「ほーう、本気出してねぇなら是非ともその本気とやらを見せてもらいてぇなぁ…弥勒」
「い…今のは言葉の綾というやつですわ」
「なら、その言葉の綾と言う奴を実現させねぇとな」
明日あたりから弥勒には他の奴とは別に新しいメニューを追加してやらないと、とびっきりハードな奴を
「というか、なんであなたたち、ここに来てるの」

あなたたちというのは俺を除いた加賀城、弥勒、国土ちゃんの事だろう
「みんな、芽吹さんの事を心配して来たんですよ」
「違いますわ、国土さん！　私は単なる興味本位です！」
「それなら、弥勒には出てって貰うかな…あくまで訓練の一環だし」
「いえ！　是非とも見学させてくださいまし！」
なら最初から否定すんな…と言いたいところだが、まぁ弥勒だし仕方ねぇだろ
「とにかく芽吹先輩…怪我だけはしないでくださいね」
「心配無用よ、獣に上下関係を教え込むだけだから」

さて、互いに防人の装備――戦衣を展開して準備万端というわけだ
「お前は指揮官の戦衣でもいいんだぜ。ちょうどいいハンデだ」
「悪いけど、あなたに言い訳のタネをあげるつもりはないわ。戦衣の性能差があったから負けた、と」
対峙した二人、そして先陣を切ったのは楠、直突からの横薙ぎ。俺との組手でよくやる一手…その攻撃を山伏は余裕で避けて一撃、楠も受け止めるが現状だけ見るに山伏有利って感じか
「もう少し戦い方しっかり教えとくんだったな」
今のところで個人技を特に教えてなかったのが少し仇になった…って訳でもないか
二度三度にわたって切り結んでいるうちに、少しずつ戦況が拮抗し始めたな
「気合い入ってるじゃねぇか！　絶対に負けちゃならねぇって自分自身に言い聞かせてるみたいだ。そこまでして戦う理由は一体何なんだよっ！」
「私は――私は勇者になるんだ！」
吠えるように楠が発した言葉はそれだった
「その資格があると大赦と神樹様に認めさせてやるのよ!!　そのために防人の御役目も、隊長としての仕事も完璧にこなす！　あなたがその生涯になるなら、屈服させてでも従わせる！　すべては勇者になる

ために!!」
「勇者。勇者ねぇ！」
　楠のその言葉を聞いた後、山伏は力任せに銃剣を振り払って距離を取った
「オレは年前二年前、その勇者って奴を間近で見てた。そいつらがボロボロになってる姿だって見てた」
　確かに、アイツらはボロボロになってたな、まだ小学生だったのに…御役目だからって戦って、あの日から、目が覚めるまで眠りっぱなしだった奴も、祭られてた奴も、記憶を失った奴等だっている
「と言っても、オレはあいつらが勇者として戦ってるところは見ちゃいねぇ。俺が知ってるのは、普段の学校での姿だけだ」
　俺とは逆か、俺は勇者としてのあいつらは知っていても学校でのあいつらは殆ど知らない…知っているのは僅かな事だけ…だからこそ、山伏は思う所があるのだろう、崇められている勇者の、勇者でない一面を知っている者として
「楠……てめぇはこの前、勇者がどんな奴等だったかって聞いたよな？　隣のクラスだった俺でも知ってるくらい、変や奴等だったよ。鷲尾須美って奴がいた。コイツはクソ真面目で不器用だが、友達思いな奴だってのは見ててわかった。八重樫徹って奴がいた。他の勇者に比べると、平凡な奴だったが誰よりも真っ直ぐな奴だった。乃木園子って奴がいた。マイペースで寝たばかりいるくせに、その気になりゃなんでも出来ちまう奴だった。本気になるのは、友達に関わる事だけだったけどな。三ノ輪銀って奴がいた。落ち着きがねぇトラブルメーカーって感じだったが、他人や友人の事をよく気遣ってる奴だった」
　二年前の事なのに、随分はっきり覚えてんだな…それに、アイツ等の事をよく見てる
「あいつらはな、お前みたいにギラギラしてなかった。普通に暮らしてたんだ。学校に来て、授業を受けて、飯を食って、友達と遊んで…。どこにでもいる子供と違わなかった！　勇者になる前だって、お前みたいに勇者になりたいって駄々をこねてたわけじゃなかった

「だったら何？　普通に生きることが勇者になる為の条件だとでも言うの!?」

楠にとって勇者に…特別な存在になるには普通の生き方ではいけないと思っていたのだろう…それでも彼女は、勇者になれなかった

「知らねぇよ。大赦や神樹が何を基準に勇者を選んでるのかなんて、俺の知った事じゃねぇしな！　けどな、俺にわかるのは勇者って奴らはカッコよかった。尊かった。楠、今のてめぇは他人の芝生を見てヨダレ垂らしてるガキ。強いネコが羨ましい、ネコになりたいって喚くネズミ。自由なネズミが羨ましい、ネズミになりたいって愚痴るネコ。そういう奴等と同じなんだよ。そんなカッコ悪い奴が――勇者になんてなれるわけねぇだろ！」

山伏は間合いに入り、楠に刺突を放つ…あれなら普通は避けられないが、楠は機転を利かせたな。銃身を盾替わりにして受け切った。僅かな隙に今まで積み重ねてきた鍛錬の数が違うからこそ出来た技

「取った!!」

「それでも――私は勇者になるのよ！」

刺突の威力にひるむことなく突き進んだ結果だ…ここからは消化試合、拘束された山伏は首筋に銃剣の切っ先を付けられた

「勝負あり…ね」

「……オレの負けだ」

「これで私はあなたを手に入れた。今後は私の指示に従ってもらうわよ」

「わかってる、そういう約束だからな。あ～あ、負けちまったか」

それから何やら話しているみたいだが、俺達もさっさとあいつらに近づきながら話にはしっかり聞き耳立てておく

「…勇者になりたいって駄々をこねてる……か、あなたの言う通りかも知れないわね」

「あん？　どーしたんだよ、悟りでも開いたか」

「私もできた人間じゃないわ。確かにあなたの言葉には割とドキッとさせられたけど…でも、私は私の生き方を変えるつもりはない。がむしゃらに勇者を目指して悪いとも思わない」

それは楠が今までの生き方だったのだろう、そしてそれは…絶対に変えることの出来ないものなんだろう

「私は勇者を目指し続ける。大赦が私を勇者にせざるを得ない実績を作る。不可能だと思われようが、他人からどう思われようが、成し遂げて見せるわ」

「……なんとかの一念って奴か。本当に面白いな、お前」

「私もそう思いますよ。芽吹先輩が自分を否定する必要なんてない。目標の為に一生懸命なこと―それは芽吹先輩の美徳ですから」

俺達と一緒に近くにやって来た国土ちゃんが、楠にそう語りかけた

「亜耶ちゃん……」

「芽吹先輩のそう言う所、私はとても好きですよ」

「……ありがと」

「なんだよ、お前。俺が今、楠木と話してんだ。邪魔すんじゃねぇ」

因みにここで補足しておくと、今この場にいるのは楠と山伏、俺と国土ちゃんの四人だけだ…一緒にいた弥勒と加賀城は気付いたら帰ってた、国土ちゃん曰く帰る時俺にも一声かけたらしいのだが…何やら考え込んでて気づかなかったらしい

「お二人の姿を見ていたら、私も加わりたくなったんです」

「…肝が据わってんな。お前、巫女だろ？　自分よりずっと強い奴に脅されて、怖くねぇのかよ」

「怖く何てありませんよ。口調は乱暴でも、あなたはきっと善い人ですから」

「は？」

慣れねぇとわかんねぇよな。巫女ってのはどいつもこいつもずっと強い奴ばっかって事を…まぁ普通なら巫女なんてのと関わる事は無い筈だけど

「勇者様でなくても、防人に慣れたという事は、神樹様に選ばれたという事です。静かで穏やかなしずく先輩と、強くて頼りになるあなた。どちらか一人でも悪人なら、神樹様がお選びになる筈ありません、だから…あなたもきっと善い人なんです。それに前回、防人の皆さんが誰も死なずに帰れたのは、まぎれもなくあなたのおかげでした。本当

にありがとうございます」
　そんな国土ちゃんの事を見た山伏はきょとんとしてたが、今まで通りの笑みに戻った
「……へっ、お人よしめ。あの雀って奴なんかは、オレにビクビク震えてたのに」
「あれ？　そういえば雀と弥勒さんは？」
　あの二人について国土ちゃんが説明している間に、俺は俺でとりあえず少し荒れた場所を整地しとくか
「そういえばお前ら、用済んだらさっさと帰れよ」
「はい」
「わかりました」
　楠と国土ちゃんは反応したが、山伏は俺の方を見たものの返事はしなかった…そして、楠と国土ちゃんが帰っていく中で山伏だけ近づいてきた。まぁ当然っちゃ当然か
「おい」
「なんか用か、山伏」
「…お前、神樹館で教師やってたよな」
「あぁ、やってたよ…だから驚いた、お前は勇者の事を思った以上に見てたって事実に」
「そうかい、それより一つだけ聞きてぇ事がある」
「答えられる範囲で答えてやるから、言ってみな？」
　その言葉を聞いた山伏は、特に目を合わせることなく告げる
「あいつらは…元気でやってるか」
「…あぁ、新しい仲間も出来て、楽しくやってるよ」
「そうかよ」
　そう言った後、そのまま訓練場を出て行く。そして一人残された俺は訓練場の整地作業を続けた…何と言うか、今日も悪くない一日だった

Ⅴ　思い出したもの

俺、不知火要はゴールドタワーの展望台で丸亀城を眺めつつ、少し前に行われた第五回壁外調査の資料に目を通していた
「今回も死者はなし…これも楠が隊長だからか」
まぁそこに関してはいつも通りだから問題なしっと
「…防人の装備じゃ星屑は兎も角、合体した奴等の相手はキツいか」
個人的な視点になるが、こうして生き残ってこれたのは楠の指示に各自の状況判断…後は単純に運が良かっただけだ
「個人の練度は確実に上がってるが……装備も強化していかないと限界がくる」
どうしたところで、ここで資料を見てるだけだと始まらないか
「…あぁ、久々に壁の外行きてぇな」
「何を物騒な事言ってるんですか、要さん」
「……安芸ちゃんか、何の用？」
「一応、調査の進捗をと思っていたのですが…必要なかったみたいですね」
「あぁ、資料には目を通したから問題なし…防人の奴等も着実に強くなってるし楠の指示も一回目に比べると確実に成長してる…してるんだが」
「装備の問題ですね」
「そう言う事、何とかして強化して貰えるよう頼めねぇか？」
「一応弾薬や装甲などの強化案は採用され、少しずつ進められています」
あくまで弾薬に装甲か、武装そのものの強化はなし…まぁ全部なしって訳じゃないだけマシか。安芸ちゃんに貰ったコーヒーを一気に飲み干して席を立つ
「もう行かれるのですか？」
「あぁ、十分に休んだし……それに、そろそろ気合いを入れないといけないからな」
「…それは要さんも壁の外に行く、と言う事ですか？」

「…五回目の調査で射手座が出てきたってことは、そろそろ俺の出番だろ」
　今までは大型個体だけだから防人たちでも何とか対処出来た、だが今回で十二星座の名を冠する個体が出てきた以上…弾薬や装甲を強化したところで防人では無理だ
「だから俺が出る、あいつらを信じてない訳じゃないが…もしの可能性を考慮しておきたい」
「…そうですか」
　別に死にに行くわけじゃないのに、随分と暗い表情をする
「安心しろって、アイツらは死なせないし俺も死ねない」
「…今日、楠さんにも言われました」
　急に脈絡のないことを言われて頭に？　が浮かんだが、その後の言葉で納得する
「自分の部隊では絶対に死者を出さない、それが自分が自分に課した制約だって」
「へぇ、楠がそんな事をねぇ」
　まだ変わりきれてる訳じゃなさそうだが、アイツが前に言ってた勇者になる…その目的は変わってるわけじゃなさそうだが、その執念がそうさせたって考えるべきか
「そんで、お前はそれに対して何て答えたんだ？」
「それは、隊長としての誓約か…と聞きました」
「そしたら？」
「人間としての誓約だ、天の神の使いだか人類の天敵だが知らないが、化け物に人間が殺される時代は終わらせないといけない…と」
「はっ、違いねぇや…確かに、化け物に人間が殺される時代はさっさと終わらせねぇとな」
　人間が化け物に殺される時代…か、確かに楠の言う通りだな…こんな時代、さっさと終わらせねぇといけない、そのために戦って来たんだもんな
「そんじゃ、俺はもう行くわ」
「わかりました…あの、要さん」

「どうした?」
「あっ、いえ…なんでもありません」
「そっか…それじゃあな」
その言葉を発すると、俺は展望台を後にした

要さんが展望台を出て行ったあと、私は彼の去った場所を見る
「要さん、あなたは…」
展望台を去って行ったとき…違う、私が展望台にやって来た時からあの人の目はとても冷たかった
「あなたは…一体何と戦っているんですか」
あの人が何と戦っていたのか、初めて会ったあの時じゃない…神樹館で、あの子たちを見ていた時から、彼が何と戦っているのか分からなくなってしまった

そしてある日の早朝、いつもより早く起きた俺は訓練場で一人槍を振るう。ただ無心で、敵を屠る為に槍を振るう、頭の中でシュミュレートするのは襲い掛かってくる敵の動きを…無造作に襲ってくる敵の動きを。頭の中で作り上げる
地面に突き刺しているのは、槍の他にも刀、銃、斧、鎌、ボウガン、大剣、鞭、弓矢。そして右腕には細工を施した籠手を、左腕には旋刃盤を、俺が知っているすべての勇者の武器を用意し、イメージトレーニングを行う
「…ふっ」
流れで槍を地面に突き刺し、刀を手に取って仮想の敵を切り裂く、そして続けて斧に鎌、大剣を次々振るう…一通りの武器をすべて使い終えた所で長い息を吐く
「お疲れ様です」
「……楠、見てたのか」
「えぇ、何か参考になるかと思ったので」
「そうか、それで…何か参考になったか?」
「いえ…流石にあの動きを参考にはできませんでした」

「そうだな、それがいい…訓練場片付けるから待っててくれ」
　地面に突き刺した武器を手に取りつつ、片付けを始める
「あのっ！」
「どした？」
「あなたは…」
　そこで楠は何かを考えるように一度言葉を止めた後、意を決したように口を開く
「あなたは、何と戦っているんですか？」
　何と戦っている…か、ここ三百年それは忘れることはなかったし、今も尚忘れないでいる
「決まってんだろ？　バーテックス…人類の脅威だよ」
　西暦の…若葉たちと一緒に戦っていた時から三百年、第一線での戦いを退き、勇者と共に…いや、勇者の少し後ろで時に手を貸し、見守り続けてきた。そんなことをしている間に随分と錆びついちまってたが、防人たちか無事生き残ることが出来るのかという認識で、昨日の安芸ちゃんとの話、楠が言ったらしい人間が化け物に殺される時代…という言葉でようやく目が覚めた
　あの時見た地獄を、地下に積みあがった人々の残骸を、青く広がっていた地平が、炎に包まれる光景を…最後に見たアイツの顔、これまで託されてきたもの（願い）、今まで背負ってきた十字架（想い）を…三百年続いた平和と、進歩した技術によって無意識のうちに封じ込めてしまっていた俺の始まり（最初の地獄）を、取り戻す事が出来た
「よし、片付け終わり…お前も訓練、頑張れよ」
「は、はい…」
　だから俺は…俺がバーテックスを潰す、二度と目の前で死ぬ様を見ない為に

Ⅵ　同行

展望台にいるのは三十二名の防人と俺、安芸ちゃんはまだ来ていない…全員揃ってから少しすると、見慣れた大赦仮面姿の安芸ちゃんが姿を現れた

「本日までの結界外の調査任務、ご苦労様でした。あなたたちの努力のお陰で、壁の外の大地と燃え盛る炎に関する調査は終了しました」

安芸ちゃんは、いつも通り淡々と告げる…だがここまではあくまでも前段階、本当の話はむしろここからだ

「防人の任務は、調査から次の段階へと進みます」

その言葉共に安芸ちゃんが防人たちに見せたのはプラスチックのシャーレと、その中に入っている一粒の種…防人たちにとっての任務はこれからが本番だと言ってもいい

「これを壁の外の土壌へ埋めてください。その後、巫女が祝詞を唱えます。この種は巫女による呼びかけに反応し、壁の外でも発芽して成長する……想定通りにいけば、種を植えた個所に緑が戻るでしょう」

「巫女が祝詞を……まさかあややを外に出すの⁉」

加賀城の反応は当然だ、国土ちゃんは巫女…非戦闘員だからな、戦闘員である防人とは比較するまでもなく戦闘経験なんてもんはからっきしだ

「そうです。巫女である国土さんがタワーにいるのは、この任務を想定していたからでもあります」

「待ってください、彼女を壁の外に連れ出すのは危険すぎます。そもそも結界外の灼熱に、巫女では耐え切れないでしょう」

「心配無用です。あなたたちの戦衣と同様、巫女専用の装備が用意されます」

「ですが、星屑とバーテックスは？」

「あなたたち防人が、巫女を守ればいいのです…それに―」

安芸ちゃんがそう言ったタイミングで彼女の言葉を手で制すと、防人たちの前に出る

「それに、今回の任務からは俺も同行する」

俺の言葉を聞いた防人たちは少しざわついた。そりゃそうだ、こいつらからしたら俺は只の大赦関係者な訳だからな…まぁ、立場だけ見りゃ間違っちゃいねぇか

「巫女護衛の最終防衛ラインには俺が入る。それに楠、お前が…お前達が培ってきた経験があれば出来る筈だ」

「あなた達には期待しています。国土さんを…よろしくお願いします」

今までは淡々と話していた安芸ちゃんだったが、最後の言葉だけは微かに感情が籠っていた

「種を植える……今後は壁の外の大地に、植物を復活させていくつもりなのですか？」

「いいえ、細かくやっていては時間がいくらあっても足りませんし、種もそれほど多くはありません。植物を植えた場所を通路…いわゆる橋頭堡（きょうとうほ）としてある場所にを目指します」

橋頭堡、橋の頭に建造する砦…敵地等での自分たちにとって不利な地理的条件で戦闘を有利に運ぶための前線拠点。本来の意味は橋の対岸を守るための砦らしい、俺も暇つぶしに本読んでたら出てきた言葉を何となく若葉に聞いたらそう返ってきたのを思い出しただけだ

「それで、私たちは何処に向かうんですの？」

「遠い昔、西暦の時代に『近畿地方』と呼ばれていた場所です。近畿地方に辿り着き、陣地を築くこと。そこまでがあなた達の任務です」

近畿地方か、四国来るまでにちょろっと通ったけどあんま覚えてねぇな

「……その後は、勇者の任務ということですか？」

「あなたたちが知る必要はありません。伝達事項は以上です、今後も全力で御役目を果たしてください」

その言葉を最後に、安芸ちゃんは出て行った、楠は…少しイラついてるみたいだな

その日の午後、訓練の様子を見てるが…案の定と言うべきか随分と荒れてるな

「いつも見たいな動きが出来てねぇな…いや、感情に任せて動いてるだけか」
「次、来なさい！」
「では、この弥勒夕海子がお相手いたしますわ！　新たな任務が始まるのですから、その前祝いとして我がライバル、芽吹さんを倒してみせましょう！」
　そう言うと弥勒と楠の模擬戦が始まったのだが…弥勒はあっさり負けたな
「弥勒さんは勢いに任せて突っ込みすぎです！　だからいつも不要な危険を負うんです！」
　そう言った楠は防人全員の方を見て声を張り上げた、それはどっちかって言うと責めるというよりも当たり散らすって言った感じか
「みんな、全然訓練が足りてない！　そんなことじゃ、次の任務か、次の次か――いつか重傷を負うか、殺されてしまうわよ！　大赦は私たちを使い捨ての道具としか見ていない！　あいつらは私たちを守ってくれはしない！　私たちのみは、私たちで守らないといけないの！　あなたたちの弱さじゃ…そんなことだから勇者になれないのよっ！」
　納得する部分はあるが、楠が放った言葉の最後を聞いた瞬間…頭に血が上ったが何とかそれを抑え込む……ここで俺が出るのはお門違いだ、あいつらの問題はあいつら自身で解決しないといけない
「弥勒さんは何も思わないんですか。私たちの新しい任務は……単なる勇者たちの露払いですよ！　今までの調査任務も、これからの任務も、私たちはこれだけの危険を負っているのに……！　命を削ってるのに、与えられている任務はあまりにも下らない！　弥勒さんは悔しいと思わないんですか!?」
「――悔しいに決まってますわ。ですが、大赦のわたくしたちに対する今の評価は、死に程度と言うことでしょう。悔しいですが、駄々をこねて喚いても、何にもなりませんわ。でしたら、今できる事をひたすら全力でやるべきです」
　何と言うか、少し懐かしい気持ちになる…何だかんだ言っても、あ

の残念お嬢も弥勒の血筋か
「ですが―」
「それに私は、与えられている任務がくだらないものだとは思いません。確かに調査も陣地設営も地味な仕事ですが、戦には不可欠な役割ですわ。それに、実績を積み上げて積み上げて積み上げて……そうしていけば、いずれ上が見えてくる筈です。いつかは勇者か、それに匹敵する御役目を任されるはずです。そう考えれば、私たちにとって『くだらない任務』など存在しませんわ！　すべて大きな価値のある任務です！」
　弥勒の言葉を聞いた楠は、何かを思い知らされたと言った顔をしている
「私たちは調査任務をほとんど犠牲泣く終えることができました。犠牲を前提とした防人というシステムに対し、これは大赦の想定を覆す大きな実績に違いありませんわ。陣地設営の任務でも、同じように大赦の想定以上の実績を上げれば、彼らはきっと私たちを軽視できなくなる。今、我々がやっていることは、建物作りで言えば基礎工事のようなものです。大工の娘であるあなたなら、その重要さがわからないはずないでしょう!?」
　どうやら、楠の方も憑き物が落ちたみたいだな…それを見届けると訓練場を後にする

　そして――新しい任務が始まった
　今回は俺も防人たち…というより国土ちゃんの近くを歩いているが、さっきから嫌な気配がひしひしと伝わってくる。それは遮熱機能がある防人も変わらないらしい、特に楠は無意識ながらそれを強く感じているっぽい
「大丈夫、亜耶ちゃん」
「芽吹先輩…気遣ってくれてありがとうございます。でも、大丈夫です。こんなことくらいで弱音吐くわけにはいきません。私の所為で速く進むことが出来ないのですから、せめて頑張るくらいさせてください」

「どうしても辛かったら声かけてくれ」
「不知火さんも、ありがとうございます」
楠…というか防人たちはそんな俺を不審な目で見てくるが、そりゃそうか…他の防人とおんなじ素材の装備を使ってるにしても俺は汗一つかいてないわけだし
「あの、不知火さんはどうしてそこまで涼しそうなんですの？」
「俺は…まぁ、慣れって感じだな」
「慣れ？」
「慣れって…一体どういう」
「詳しい話はいずれ話す」
「…相変わらず、不思議な人」
それからしばらくの間、歩き続けていると再び国土ちゃんが楠に話しかけていた
「芽吹先輩は、羽衣伝説という者を聞いたことがありますか？」
「羽衣伝説？　いいえ、知らないわ」
「天女の羽衣を人間が盗んでしまうお話です」
天女の羽衣を人間が盗む…ねぇ、国土ちゃん曰く天から降りてきた天女が水浴びしてるのを見てた男が羽衣を盗み、隠した…羽衣を失った天女は天に帰ることが出来なくなった。
その後天女は地上での生活を始め、羽衣を盗んだ男と夫婦になり、四人の子供に恵まれ幸せな家庭を持った…しかしある時、天女は隠してあった羽衣を見つけ、男と子供を残し天へと帰り、残された男と子供たちは、嘆き泣き続けた…か
「ずいぶんと身勝手な話ね」
「私もそう思います。羽衣を盗んだ男の人も身勝手ですし、子供たちを置いていった天女も身勝手です。ですが、とある伝承によれば天女は天に帰った後、泣き続ける子供と夫を愛しく思い、一念に一度だけ会うことが出来るようにしたそうです。愛しく思っていたのなら……天女は、本当に天に帰りたいと思っていたのでしょうか」
「帰りたいなんて思ってなかっただろ」
「えっ？」

国土ちゃんの言葉に、何気なく答える…別に天女の気持ちなんざ知ったこっちゃないが、多分そうだろ
「確かにどっちも身勝手だが、大切なモン残して帰りたいなんて気持ちが生まれる程…感情出来ちゃいねぇよ」
「…随分と知った風に言うんですね」
楠の言葉を聞くと、思わず笑っちまった…知った風に言うか、確かにそうかもな
「長いこと見送る側だからな…俺より先に逝っちまう奴はみんな、今際の際（いまわのきわ）にゃ謝罪か感謝だ…すまないかありがとう、だから知った風じゃなくて知ってるんだよ……一人を残して先に逝っちまう奴の気持ちと、一人残されちまう奴の気持ちは…悪い、話が逸れたな。兎に角、まともな感性してりゃ愛しく思う相手を置いてとっとと帰っちまう奴はいねぇって事だ」
そこで話をとっとと終わらせる、少し余計な事を喋りすぎたな…と思っていると加賀城の悲鳴が聞こえてきた
「ぎゃああ、助けてメブゥ～～！　来たよぉぉ！　星屑がッ来たぁぁぁぁっ！」
「護盾隊は国土亜耶を中心に盾を展開！　私たちの任務は、巫女を目的地へ無事たどり着かせることよ！　不知火さんも私の指示に従ってもらいます！」
「了解、何をすればいい？」
「亜耶ちゃんを、お願いします」
「あいよッ！」
今回は他の防人同様に銃剣を武器にする、流石に俺個人の力は温存しておく
「メブゥ～～、星屑は防ぐからぁぁ！　でもこの前みたいなでっかいの出たら、絶対私を守ってぇぇぇ！」
盾持ちが自分を守ってくれは、役割的に本末転倒だろ…とか考えながら銃撃で星屑を蹴散らしていく
「私は盾の外で戦いますわよ！」
「オレも外で戦わせて貰うぜ！　いいだろ、楠!!」

「弥勒さんとシズクに戦闘を許可する！　番号一から六、および弥勒夕海子と山伏シズクは盾の外で星屑と戦闘を銃剣隊の他の者は、盾の内から応戦を！　不知火要は国土亜耶の護衛を！　今回も一人の犠牲も出さず、御役目を成し遂げてやりましょう！」

成る程な、これが楠芽吹に防人隊、か…間近で見て分かったが、ホントにいいチームじゃねぇか

そして戦いながら、なんとか目的地まで到着する。護盾隊が盾を展開している中で国土ちゃんが地に種を植え祝詞を唱え始める。少しすると地面から緑の芽が現れ、その芽は盾の中だけでなく外にまで広がった

「成功したの……!?」

炎に包まれた大地が緑に包まれ、地面が再生していく…次の瞬間、俺の感じていた気配が一層強くなった直後、山伏の身体が吹き飛ばされる

「うおおぁぁっ!?」

俺にとっては、良く見慣れたクソ忌々しい尻尾を持つ化け物の姿が映る…コイツと会うのも何回目だろうな

「スコーピオン・バーテックス……！」

芽吹が口にしたのは、蠍座の名を冠する化け物の名前、何回か殺されかけた事のあるその化け物に防人たちは絶望しているのだろうが…その中で俺の表情には、自然と笑みを浮かんでいた

Ⅶ　単独戦

山伏の身体が宙を舞い、防人たちの表情が絶望に染まる…そんな中で俺の表情には笑みが浮かんでいた
「ぎゃぁぁぁぁ――――!!　助けてメブぅぅ――――!　バーテックスが、出たぁぁ!」
盾で出来た壁の内側で加賀城の悲鳴が鳴り響いた事で、俺の思考もようやく涼しい状態に戻る
「どうしよう!?　どうしよう、メブ!?　バーテックスだよぉ!」
「落ち着きなさい、雀!　あれは完成体のバーテックスじゃない!」
楠の言ってることは間違っちゃいない、外観こそ完全体に近いが所々に未完成の部分が見え隠れしてる…具体的に言うと色が白一色だから八割完全体って感じか
「護盾隊!　攻撃に備えて!」
楠の声に従い防人たちは盾を展開し壁を作るが、それは蠍野郎にあっさり崩され…蠍の矛先が国土ちゃんに向く
「――誰も死なせないッ!」
楠が国土ちゃんの事を庇い、一撃目は防ぐ…丁度空きも出来たし、そろそろ突っ込むか
楠たち二人に対して放たれた二撃目は加賀城によって防がれた
「加賀城!　あと一撃だけ耐えろ!」
「無理無理無理無理ですぅ!」
「お前ならやれっからッ!」
加賀城にもう一撃、蠍の尻尾が放たれた直後…俺は全力で大地を蹴る
「まずは、一撃ッ!」
蠍は尻尾を破壊すべし、これは俺が長生きして腐る程戦ってきたことによる教訓なんだが…やっぱ防人用の武装じゃ致命傷は無理か、とりあえず一発与えたがこれじゃダメなことが分かったのでいったん後ろに下がる
「銃剣隊、狙い!　撃って!!」

後ろに下がってすぐ、防人たちによる銃撃が蠍の顔面みたいな部分を抉る
「塵も積もれば何とやらって感じか…」
「あのぉ、私もそろそろ…ヒィイイッ!!」
「危なかったな」
後ろに下がりがてら加賀城を拾って蠍の攻撃を回避してたんだが、少し刺激が強かったかなどと考えていると後ろから声が聞こえてきた
「芽吹さん、やりましたわ！　このまま一気に……」
「いえ、攻撃は続行しません、撤退します！」
このままじゃ消耗戦になるのが目に見えてるから妥当な判断か…弥勒も少し不満そうな顔を見せたがすぐに納得の表情に変わる
「芽吹先輩…」
「大丈夫よ、亜耶ちゃん。私たちがあなたを守る……撤退を始めるわ！　これより私が持つ指揮権は、私を除く指揮官七人に移行する！番号二から八の指揮官は、他の防人たちと巫女を率い、必ず全員を生きて壁まで辿り着かせること！」
楠の言葉を聞いた指揮官型の七人はその言葉に頷く…こういう状況も想定済みって訳だ
「行動開始！」
楠の言葉と共に防人たちは国土ちゃんを連れて壁の方まで歩きだすが、楠に弥勒だけはその場に留まっていたので加賀城を持って二人の元に行く
「た、助かったぁぁぁぁぁぁ!!」
「お前らは、撤退しないのか？」
「そうだよ！　メブ、逃げよう！　すぐ逃げよう今逃げよう真っ先に逃げようよ～!!」
「私は撤退の殿を務め、スコーピオンを部隊全体を守ります。それと――シズクも助けて連れ帰る。私の部隊から犠牲はださない」
ホントに、いい目をするじゃないの……それじゃあ、俺も俺の仕事をするとしますか

「楠、それなら蠍は俺が引き受ける。お前らは山伏救出に専念しろ」
「駄目です、危険すぎます」
　まぁそうだよな、今回に関しては安芸ちゃんからあんまり動き過ぎるなって言われてるけど…ここは仕方ないか、俺は銃剣の刃の部分で手のひらを切る
「なにを…ッ!?」
「うっそ…」
「なんなんですの、それ…」
　楠たちが驚くのも無理はない、傷跡から流れ落ちる筈だった血液は形を変えて使い慣れた槍の形に変化したから…というか俺が変化させたんだが
「こういう事だから大丈夫、お前らは仲間を救いに行け」
「……わかりました、ですが一つだけ、私からの命令です」
「命令？」
「えぇ、不知火さんも絶対に生きて帰ってきてください、貴方も今は私の部隊の一員ですから」
　嬉しいこと言ってくれるねぇ…一方で加賀城はその話を聞きながらうんうんうねっていたが意を決したように楠の方に顔を向ける
「…よしっ！　メブ！　私も一緒にいる！」
「雀…わざわざあなたまで危険に付き合う必要ないわ、壁の方に向かいなさい」
「危険だって事も、逃げた方が良いって事も分かってる！　でも…メブもシズクもほっとけないから、怖いけど私も一緒にいる!!」
「雀さんの言う通りですわ、芽吹さん。あなたとシズクさんを放ってはおけません。犠牲を一切出さないということは、あなただって犠牲になってはいけないのです…もちろん、不知火さんも」
「雀…弥勒さん…」
　なんか、聞いてるこっちが気恥ずかしくなってくる…部隊の一員とか言われんの久々過ぎてむず痒い
「…そんじゃ、俺は蠍の相手をしてるから救出終わったら合図してくれ」

そういい終わってすぐ、大地を蹴って蠍に突っ込んで行く…山伏にゆっくりと向かっていた蠍もこっちに気づいたようで尻尾を振るって攻撃してくるが

「その攻撃は、いい加減慣れたんだよッ！」

槍を使い棒高跳びの要領で尻尾を避ける…パパっと倒してもいいし久々に暴れたいってのが本音だが、今回の目的はあくまで時間稼ぎ…下手に倒して大量の星屑が撤退してる防人たちの方に向かいました何てことになったら目も当てられない

「鬼ごっこしようぜ、蠍野郎」

武器を槍やらボウガンへ変換させて、蠍に撃ち込んでいると…蠍の背後にキツいのを一発ぶちかましてる山伏の姿があった。それに気づいた蠍も標的を俺から山伏に目標を移した

「おい、何やってんだッ！」

「さっきの一撃、このエビ野郎にお返ししてやらねーと気がすまねぇんだよ！」

そう言った山伏は銃剣を尻尾に突き刺して銃撃をしながらそのまま横に切り裂いた…俺の気遣い全部無駄になったじゃねぇかよ

「シズク～～！　無事で良かったぁぁぁっ！」

「汚ねぇ顔してんじゃねぇ、涙と鼻水くらい拭け。つーか、そんなにオレが生きてて嬉しかったか？」

「だってだって、シズクを抱えて行かなきゃいけなかったら、私が生きて帰るのが絶対難しくなったからぁぁ！　自分で動けるようで良かったよ～！」

「お前は…オレの事を心配してんのかと思ったら、結局自分の心配じゃねーか。まぁ、お前らしいか」

話しているのを横目に見ていると、蠍の方から殺気を感じたため、武器の形態を旋刃盤に変化させて四人の事を突き飛ばした瞬間…蠍の針が俺に襲い掛かってきた

「きゃっ」

「うおっ」

「ひゃあぁ」

「な、何事ですの!?」
「ぐ、うぅぅぅぅぅぅッ！」
「不知火さんッ!?」
何とか軌道を逸らしたが、さっきの一撃で旋刃盤を装備した左腕がジンジンする…やっぱ体のなまりは中々治るもんじゃねぇな
「大丈夫ですか！」
「あぁ…心配ねぇ」
「さっきの一撃…危険ですわね」
「危険なんてもんじゃないよ！　一回でもくらったら絶対死ぬ！」
そうだな、確かに一発食らっただけで死ぬな…経験者が心の中で言ってんだから間違いねぇ
「とりあえず、お前らはさっさと撤退しろ」
「けどっ――」
「…はっきり言うが、お前らいると気にしちまって戦えねぇ、だからさっさと戻れ」
「…命令、絶対に守ってくださいね」
「大丈夫だ、死んでも守れっから」
いまだ戸惑ってる楠たちの背中を押して無理やり撤退させると改めて蠍と向かい合う
「…そんじゃ、始めるか」
武器の形状を旋刃盤から刀へと変化させ、抜刀の体勢に入る……尻尾が迫ってくる
「若葉、お前の技…借りるぞ」
眼前に迫った尻尾をギリギリの所で避け…刀を抜刀、一太刀で尻尾を切り裂いた
「一閃・緋那汰」
若葉から借りた技の名前を言い終わると同時に刀を納刀する…にしても、若葉の奴もっと他に技名あっただろうが
「あぁ、ハズい…何て言ってる場合じゃねぇな！」
蠍の野郎、尻尾の先の針ついてる所ぶった切ってやったのに今度は刺殺じゃなくて撲殺狙いに来やがった、殺意高すぎだろ

「やっぱ爆発力で叩き壊すのが一番手っ取り早いなッ！」
武器を刀から籠手に変更、そして尻尾を避ける為に取っていた距離を一気に詰める…振るってきた尻尾を踏み台に天高く飛び上がり、今回は自分の切り札を切る……一回試したことあるが精霊の力を借りられるのは壁の中限定らしい。炎に包まれてる壁の外じゃ力を借りられないっぽい、支配圏の違いって奴だ
壁の外は天の神どもに有利、壁の中は地の神有利、樹海はどっちにも可もなく不可もなくだがどちらかと言うと地の神有利…クソみたいな相性ゲーだ
「血戦偽装（けっせんぎそう）――一目蓮（いちもくれん）」
身体が沸騰するように熱くなり、少しずつ体中から血液が滲みだしてくる…その血液は体に装甲として装着され、装備状態になる
「友奈、お前の技も借りるぞ…我流！　勇者…パンチッ！」
血戦偽装によって重装化した籠手で思いっきり蠍の事をぶん殴ると、蠍の身体中にヒビが入り崩れた…地面に着地した俺はそのまま偽装を解き、燃え盛る地面に膝をつく
「流石に……キッツいな」
自傷ダメージでボロボロになった身体を自己治癒によって少しずつ治しながら俺も壁の方に向かって歩き出した

Ⅷ　胸騒ぎ

　壁の内側に歩いているうちに、身体も少しずつ楽になってきたが、今だ気怠い体を適当に動かしながら壁の内側に戻ると楠が居た
「不知火さんっ！」
「お前ら、まだ戻ってなかったんだな」
「…あなたも、私の部隊の一員ですから。放って帰るわけにはいきません」
「そうか、それじゃ俺達も戻るか」
「はい…あの、大丈夫なんですか？」
「大丈夫って、何が？」
「一人でバーテックスの相手をして、大丈夫だったんですか？」
「大丈夫だったよ、ひたすら逃げてるだけだったし…逃げるのには慣れてたし」
　実際には倒したんだが、俺は勇者じゃないし…倒したなんて言ったらどうやって倒したのかみたいなのを聞かされそうで少し面倒だし
「そうですか、でも…無事で良かったです」
「お前らも、犠牲者も重傷者もなかったんだろ？」
「はい、一人の犠牲もなく…撤退することが出来ました」
「そうか、それなら良かった」
　今回も犠牲者なしで良かった…それに、楠の表情もスッキリしたものになっている
「…ホントに、良かった」
「何か言いましたか？」
「いや、別に……何でもねぇよ」
　それから、ゴールドタワーに帰還した俺は楠と別れて展望台に向かうと、いつもの神官服を着た安芸ちゃんがいた
「安芸ちゃん、何してんの？」
「要さん…無事で良かった」
「無事でって、別に危ないことはしてねぇよ」
「嘘をつかないでください、ボロボロになったその服装を見ればわか

ります」
「ボロボロなのは服だけで、身体は何ともないから…ホントに心配ねぇよ」
　体質的にも死ねない老いない、嫌になることも多かったが今回ばっかりはこの体質に感謝してる
「そういえば、今回の一件はもう報告貰ったのか？」
「はい、楠さんの帰還が遅くなると報告を受けていたので、弥勒さんから簡単に…後ほど楠さんからの報告を聞くつもりです」
「そうか、わかった」
「何か気になることでも？」
「そう言うのがあるわけじゃない…ただ、漠然と嫌な予感がするだけだ」
　こういう時の予感はすぐに、とは言わないが大抵どっかしらで当たるから嫌なんだ…今まで嫌な予感が外れたこともないし、今回ばっかりは杞憂で終わって欲しいんだが
「とりあえず、俺ももう休むよ…安芸ちゃんも早く休みな」
　それだけ言うと俺も部屋に戻る

　それから数日の時が経ち、少しごたごたしてたらしいも落ち着き、情報をまとめ終わった安芸ちゃんから俺が聞いたのはあの任務の翌日、楠たち四人が病院で検査を受けた結果、彼女たちは火傷を負っているとのことだった
　今までの調査では防人は誰も火傷を負わなかった以上、今回の調査で何かしら予想外の事態が起きたという事になる……防人の戦衣の作成及び調整を行っているが冬馬達で、それ抜きにしても春信や上里の現当主であるひよりが少なからず関わってる以上手を抜いてる可能性はない、そう考えると
「壁の外で燃え盛ってる炎が大赦の想定を超えたって事になる」
　そう考えると、あんま時間がないのかも知れないな……このまま打開策を見つけられなかった場合、人類は滅ぶ

「もしかしたら、そっちの方が楽かもしんねぇな」
「あんまり不吉な事を言わないでくれます？」
「…いつの間に思考盗聴できるようになったのさ、春信」
　大赦の中でもそこそこの役職についている出世頭こと三好春信君が、わざわざゴールドタワーまでやってくるとは
「要さんが分かりやすいだけですよ」
「あっそ……そんで、今日は何か急ぎの要件か？」
「緊急の打ち合わせです、戦衣の耐熱性を壁の外の炎が超えた可能性があると聞いたので」
「あぁ、その件か」
　やっぱり問題になるか、それは分かってたにしても、そう簡単に解決できる気はしないけど
「要さんも、せっかくの休みなんですから少し外の空気でも吸ってきたらどうですか？」
「…そうだな、そうするわ」
「そうだ、要さん」
「どしたって…おっとと」
　春信の言葉に従いエレベーターの方に向かおうとした時、何かを思い出したらしい春信が俺に投げ渡してきたのは、入館許可証？
「なんだこれ」
「どうせ行くんでしょ、丸亀城…大赦の幹部権限で一般じゃ入れない場所にも入れるよう連絡しておいたんで、入る時にその許可証見せてください」
「ホントに、お前は余計な事を……でもま、ありがとな」
　春信に礼を言って、俺はゴールドタワーを後にする

「そんなわけで、やってきました丸亀城」
　ゴールドタワーから徒歩で大体一時間、所々新調されていても相も変わらず懐かしい雰囲気を感じさせる町の中を歩きながら到着したのは丸亀城…最近はこれてなかったこともあって中々に懐かしい感じがする。平日の昼間という事もあり、ガラガラの敷地内を歩いて受

付に許可証を見せた後、その足で向かったのは教室がある場所まで向かう
「ここに来るのも、久しぶりだな」
　一体いつ以来だろうな、この場所に来るのも…いざ懐かしの場所までやって来てこの空気に触れると、やっぱり寂しいという気持ちが出てくる
「気が遠くなくらい昔の事なのに、こうして思い出せる辺り…お前らと過ごしたあの時は、俺にとって大切なモノなんだってのを嫌でも思い知らされるよ」
　若葉たちだけじゃない、西暦で出会ったやつらに神世紀で知り合ったやつら、その全部が俺にとってかけがえのないものだって事を、嫌でも理解させられる
「…こんなの思い出しちまったら、死にたいと思っても死ねないだろうが」
　先に逝っちまった者たちから託された祈り、これから逝っちまう奴らが俺に託すであろう願い
「そんなもん、託される前に終わらせないとな…このクソみたいな戦いを」
　さてと、気分も晴れた事だし…楠たちの見舞いにでも行ってやるか

　青果店でフルーツの盛り合わせでも買って楠たちの病室までやって来たのだが…なんで病室の前に行列が出来てんだ
「あっ、不知火先生、お疲れさまでーす」
「お疲れ…で良いのか？」
「良いんじゃないですか？」
「あぁ、そう…それより、大人気のラーメン屋を思い出すような行列は何事だ？」
「何事って、楠さん達へのお見舞いですよ？」
　お見舞いに見えねぇから聞いたんだけど
「それより、先生もお見舞いですか？」

「まぁな」
「それじゃあ、最後尾にお願いしまーす」
「……あいよ」
お見舞いって、一体何だったけなぁ……
それから俺が入れたのは最後も最後、他の防人のメンバーも帰り俺が入るころには楠たち四人に国土ちゃんが残ってるだけだった
「よう、息災か？」
「不知火さん、来てくれたんですね」
「まぁな…それとこれ、見舞いの品だ」
「おぉ！　フルーツだぁ！」
「良いんですか？」
「良いんだよ」
目を輝かせてた加賀城にフルーツの盛り合わせを渡して、椅子に腰かけると病室が中々に愉快なことになっていることに気付いた
「すっかり好かれてるみたいだな」
「そうですね、悪い気はしません」
ホントに、すっかり丸くなった…というより、色々と気づいたみたいだな。ほんとにいい顔してる
「…そうだ、不知火さんに少々お聞きしたいことがあるのですが」
「聞きたい事？」
「えぇ、実が――」
弥勒から聞いた所によると、どうやら大赦の女神官…というか安芸ちゃんが病室に来たことがあったらしい。会話もしないで四人の容態を見るだけ見て帰っちまったとのこと
「なるほどなぁ」
「えぇ、多分お見舞いだろ思うのですが……って何を笑ってますの？」
「くっ、ははは っ」
「……何かおかしかった？」
「へっ、何々？」
「ははっ、いや、すまん…まさかそんなことを聞いてくるとは思わなくてよ」

もっと別の事を聞かれるもんだと思ってたから、あまりに予想外の質問で思わず笑っちまった…にしてもそうか、安芸ちゃんがねぇ
「そんなことって、これでも結構気になっていたんですが…」
「普通に心配してきたに決まってんでしょ…それ以外で病室に来るわけねぇよ」
「でも、彼女は…大赦は私たち防人の事を道具としか……」
「そりゃ違うぞ楠、それにこの際だからここに居る全員に言っとくとな、神官さんのあの態度はあくまで自分が大赦側だからなんだよ」
「大赦側だから…」
「…どういうこと？」
この際だから、少しだけバラしちまってもいいか…口止めすれば問題なさそうだし
「こっからの話はオフレコで頼むな…国土ちゃんも、そこで果物…というかみかんを貪り食ってる加賀城もな」
「わかりました」
「ふぁい」
「それで、どういうことですか？」
「…簡単に言うと大赦側の一枚岩じゃないって事、そんで中には立ち位置が難しい人もいてあの神官さんがそれって事」
俺だって大赦の中にも反りが合う奴合わない奴ってのはいる
「けど、そんなの関係なしに大赦の職員は勇者に防人…前線で戦ってる奴には必要以上に接触しないってのが最低条件なんだよ」
「それって……」
「いくら勇者適正があるって言ってもお前らは只の子供、それは防人だろうと勇者でも変わらない。だから必要以上に関わっちまうと傷ついていく姿を見て、こっちまで罪悪感を感じちまう…だからある程度距離を置くんだよ」
それ以外のも理由はあるのかも知れないが、俺はそう考えてる…実際問題、二年前に起きた最後の戦いの後、安芸ちゃんは見てられないくらい心にダメージを負っちまっていた
「だから、あの神官は私たちに対して」

「そう言うこった、でも…アイツはアイツなりにお前らの事を心配してるしのは間違いない」
「それにしても、不知火さんも妙に実感こもってるんですのね」
「二年前、お前達みたいに勇者を鍛えてたからな……大切な時に何もできなかった無力さだけなら嫌と言うほど分かってるよ」
今は全員揃って讃州にいるって言っても、俺がもう少しあいつらの負担を抑えることが出来てれば、もっと違う結末になったかも知れないからな
「…そんじゃ、俺ももう帰るかね」
「えっ、もう…ですか？」
「あぁ、あんま長居する気もなかったし、そろそろ日も暮れてきたからな…国土ちゃんはどうする？」
病室の窓に刺さっていた日も傾き始めていた
「そうですね…私もそろそろお暇したいと思います」
「わかった…不知火さん、亜耶ちゃんの事お願いします」
「追い、任しとけ」
俺と国土ちゃんの二人は病院を出て、ゴールドタワーに向かう道を歩き始める
「あの」
「どうかした？」
「今日は、ありがとうございました」
「ありがとうって…何が？」
「神官さんの事、説明してくれて」
「あぁ、別に気にする必要ねぇよ…今回は只の気まぐれみたいなもんだ」
「それでもです…ありがとうございます」
そこまで素直に感謝されると、普通にむず痒い…最近は何でも屋の仕事も出来てなかったし。何だかんだでこういう感謝の言葉を貰ったのも久しぶりだな
そこから普通の世間話をしている間にあっという間にゴールドタワーまで帰ってきた

「ありがとうございました」
「おう、ゆっくり休めよ」
国土ちゃんと別れ、俺も自分の部屋に戻っていく

それからしばらくの間、何事もなく時間は過ぎていった、楠たちも無事退院し、次の任務に備えて訓練を続けていたある日の事、朝食を食べていると、楠が国土ちゃんに話しかけた
「どうかしたの、亜耶ちゃん?」
「なんのことですか?　あ、今日の私、巫女のお勤めで、大赦にお出かけしますね」
そう言った国土ちゃんの表情は何処かぎこちない…いまだ消えていなかった胸のざわつきが一層強くなるのを感じながら、俺は目の前に置かれていた緑茶を飲み干した

IX　模索

「奉火祭…だと」
「はい、大赦は奉火祭を執り行う事を……決定しました」
　春信に呼ばれ旧事務所へとやって来た俺が聞かされたのは、二度と聞くことは無いと思っていた忌々しい言葉
「お前らは…大赦は、アレをまたやるって言うのか？」
「はい、ひより様は最後まで反対していましたが、反対派に比べて賛成派の方が多かった事……そして、奉火祭を執り行う事以外の策が無かった事が決定打になってしまいました」
「……ふざけるのも大概にしろよ」
　流石に今回ばかりは抑えることが出来ない、そのまま事務所から出ていこうとしたが、春信が俺の腕を掴んでくる
「放せ」
「それは、できません」
「もう一度だけ言う…その手を放せ」
「今あなたの手を放したら、取り返しのつかない事になる…だから、放すことはできません」
「なら、お前は…お前らは人柱になるところを黙って見てろって言うのか」
　ふざけるなよ、一度目の奉火祭の時…俺達は何もすることが出来なかった。天の神に書き換えられた世界を前にして、ただ従う事しかできなかった
「仕方ない…と言葉で言うのは簡単です…けど、今は耐えてください。今ここであなたが暴走したら、初代勇者様が…あなたの大切な友が守り続けてきた世界を、滅ぼすことになるんですよ」
「お前……嫌な言い方出来るようになったな」
「これでも、嫌な大人に普段から囲まれてますから」
　ホント、最悪の気分だよ…だが少しだけ、頭の中が冷静になった
「それで…わざわざ引き離して俺に伝えたって事は、防人の奴等にも説明はしてるんだろ？」

「はい、防人たちへの説明は安芸さんが行っています」
「人選が最悪すぎるだろ…大赦は安芸ちゃんの事が嫌いなの？」
「最良の人選だとは思っているんだと思います」
　腸が煮えくり返ってるがそれでも頭が冷静になってる、だからこそ…頭も回ってきた。火の勢いが強まったのも仮説は出来た
「春信、大赦が建ててた計画…わかる範囲で良いから教えてくれ」
「わかりました」
　春信から話を聞く、大赦が防人を使って何をしようとしていたのか、一体何を考えているのか
「大赦が防人を使って行っていた事は…国造りの儀式を行うための下準備です」
「国造りの儀式を行うための…下準備だと」
「はい、現在の大赦の目標は国を護るではなく、国の奪還」
「国の奪還に国造り…つまり大赦は、天の神が行ったことをやり返そうとしてる訳だ」
「大雑把に言えば、そう言う事です」
　天の神に書き換えられた外の世界の理を、今度は自分たちで書き換える…そして防人が行っていた神樹の種云々もそのための下準備だったって事か
「だが、そこまでならわざわざ奉火祭を行う必要はない…それなのにわざわざやるって事は、外の炎が強まったのに理由があるんだろ？」
「お見通し…みたいですね」
「腸煮えくり返ってるが頭は冷えてるからな、いつもより頭が回るんだ…それで、大赦の見解は？」
「見解…と言うより巫女に神託が降りました、天の神の怒りだと。人類が進めてきた反抗計画に当代の勇者による四国を覆う壁…西暦時代から結ばれた契約のの象徴を破壊した上、人類は秘密裏に反抗計画を進めていた。その事が天の神の逆鱗に触れ、バーテックスではなく天の神がそのものがこの地に降臨しようとしている」
　成る程な…正直な話、俺個人としては天の神が降臨してくれりゃ直接叩く機会が手に入る訳だからオールオッケー何だが、それを抜きに

しても今回の大赦は流石に杜撰すぎる
「今回は流石の大赦も焦りすぎたんじゃないか…三百年といちょっと見てきた身からすると、平和ボケしすぎだ」
　若葉たちの言ってた大赦は形だけ残り、中身は劣化していくだけ…そのころには俺も崇められるが大赦に関与するのは難しくなる…ドンピシャで当たってる辺り流石は若葉たちと言うべきか
「予想外は、俺の思ってた以上に大赦の劣化が酷かった事だが…平和ボケしてる奴等がここまで杜撰な計画を立てるとは」
「それだけ大赦の上層部も焦っているんです、神樹様の寿命が想像よりもはやく尽きかけていますから…寿命が尽きる前に計画を推し進めなければいけなかったという事です」
　ホントに、最悪以外の何物でもないな
「…話はそれだけなら、俺はもう行くぞ？」
「わかりました、今日はわざわざ時間を貰ってしまってすいません」
「気にすんな…それより、お前らも気を付けろよ」
「はい」

　春信と別れてゴールドタワーに戻ると、入口では楠が待っていた
「どうした？」
「不知火さん、私と一緒に展望台まで来てください」
「…わかった」
　エレベーターの中での会話は一切なく、展望台に到着すると、楠を除く防人全員がそろい踏み…俺はいつものように防人たちの後ろで展望デッキに寄りかかると、みんなの前に立った楠が話始める
「今回の大赦の決定に、私は納得していない！　みんなはどうなの!?」
　今回の決定…というのは恐らく奉火祭の事だろう、成り行きを見守る為に防人たちの事を見ていると、一番最初に加賀城が声を上げる
「…納得なんて……してないよ、あややが犠牲になるなんて」
　国土が犠牲になる、その言葉を聞いた瞬間、なんで春信が奉火祭が行われる事しか伝えなかったのかという理由が何となくわかった…確かに、そこまで伝えられてたら腕振りほどいて大赦を叩き潰してた

「あややはね、私が防人になったばっかりの頃、どんなに怯えてても、情けないこと言っても、私の事バカにしなかった。防人の御役目に参加してるだけでもすごいって言ってくれた。すごくいい子なんだよ！　なんで犠牲にならなきゃいけないの！　そんなの許せない…でも、大赦もうは決定したって……」

「私は没落した名家、弥勒家の娘です。弥勒家の名前など、もはや多くの人々は知りませんし、知っている者は嘲りの篭った口調で、『あぁ、あの弥勒家』ねと言います。特に名家の人間や大赦の関係者は大概そうです。ですが……国土さんは違いました。彼女は弥勒家を、私の誇りを認めてくれました。そんな子が…犠牲になっていい筈がありません」

「……国土は、いい子。……死ぬなんて、いや」

加賀城だけじゃなく、弥勒や山伏、それ以外の防人も奴等も次々と声を上げていく…ホントに、国土ちゃんがどれだけ信頼され、愛されていたのかを知ることが出来る

勇者になれず、大赦からは使い捨てのような扱いを受けていた彼女たちだからこそ、一人一人を認め、信頼する……今まで見てきた勇者と違う信頼の形、それでも勇者たちの絆に勝るとも劣らない程の強さがある

「だったら―だったら、私たちで亜耶ちゃんを助ける方法を考え出しましょう！　まだ奉火祭が行われるまで一週間ある！　絶対に何か方法がある！　私は諦めない！　みんなもそうでしょう!?　私が指揮する部隊に〝犠牲〟と〝諦め〟はない！」

諦めの悪い奴等の事を見ていた俺の表情に笑みが浮かんだ…これからどうしようかと考えていると、楠が俺の前にやってくる

「不知火さん、亜耶ちゃんを助ける為に…あなたの力を貸してください、お願いします！」

楠だけでなく防人の全員が俺に頭を下げてきた

「…楠、この前、お前が言った言葉を覚えてるか？」

「私の言った…言葉？」

「俺もお前らの部隊の一員だってやつ、言ったろ？　嬉しかったって

…だから、頭なんて下げなくても協力するよ」
「ありがとうございます！」
「…それで、具体的に何をするのかは決まってるのか？」
　言葉が消えた、この感じはアレか…これから考えるって奴だな。
まぁ案の定ここから防人たちで話合いを行っていたがこれと言った具体策は出ない。個人的には弥勒の天の神を打ち倒すってのに賛同したかったが…流石に戦力不足だ
　天の神が降臨して、俺が一人で戦うって言ったのも死ねないのを利用したゾンビ戦法で勝算は殆どなしだったからな
「犠牲なしで、奉火祭と同じ効果を持つ儀式があれば…」
「神事の専門家の大赦が見つけられなかったものを、ボクたちで見つけられるの？」
「可能性は薄いけど、それしか方法はなさそうね…」
「何か資料はない？　どうやって調べればいい？」
「そう言うのに詳しいのって、まさに神官か巫女やろうね…センセは何か知らないですか？」
　ここで俺に振ってくるか
「資料だけなら事務所にあるが、事務所の場所が讃州だから取りに行くのも一苦労だな…一日は欲しい」
「神官は大赦の手先…って言うか立場的に協力してくれそうにないし、亜耶ちゃん以外の巫女は？」
「その巫女とコンタクトを取る方法は？」
　まーた俺の方を見てきた、確かに一応大赦に近い人間ではあるんだが
「巫女の知り合いなんざいないぞ…いや、一人いるがそいつとコンタクトを取るのも難しいだろうし」
　少し手詰まり見たいになってきたが、それでも諦めず、彼女たちは方法を模索し続けた

X　無駄じゃなかった

　具体的な解決策が見つからないまま、夜が明けると俺と楠は安芸ちゃんに呼び出しを受ける、待っている場所に向かうとそこにいたのはいつもの仮面装束の安芸ちゃん
「先日、結界の外に埋めてもらった種を、回収して欲しいのです」
「回収？　なぜですか」
「あの種も神樹様の恵みの結晶です。回収してお返しすれば、神樹様のお力に戻る、国造りの計画が凍結された今、結界外に種を残しておく理由はありません。神樹様のお力は人々の生活の為に、そして世界を炎から守るために、少しでも無駄には出来ないのです」
　結局、何の成果も得られず……何もかもが無駄だったって訳か
「それでは、失礼します」
「そんじゃ、俺ももう行く」
「不知火さん、あなたはもう少し残ってください」
「……あいよ」
「不知火さん、先に失礼します」
「あぁ」
　楠が出ていくと、安芸ちゃんはようやく肩の力が抜けたように息を吐く
「すみませんでした、こういった形になってしまって」
「別に謝る必要はないよ……こっちこそ、辛い役回りを押し付けちまって悪かった」
「気にしないでください……私の元々、こういう役割でしたから」
「嫌でも気にする……俺は結局、何もできなかったから」
「そんな事――」
「あるさ、鷲尾達の時も、勇者部の時も今回も……何も出来てない」
　誰に何を言われようと、その事実は変わらない。今までずっと……伸ばした手は届かずじまいだった
「俺も、もう行く」
「分かりました」

「……それと、全部終わったら防人の奴等に謝ってやってくれ」
「えっ」
「俺には無理でも……あいつらなら、絶対に国土ちゃんを救ってやれるからな」
その言葉を最後に、俺は安芸ちゃんのいる部屋を後にする

そして、新しい任務の日。俺達を含めた防人たちは結界の外に出る
「昔に存在した、とある国の刑務所では『午前中に穴を掘って午後にそれを埋める』という労働があったそうですわ」
「穴を掘って埋めるだけ？　それって何の意味があるの？」
「意味なんざねぇよ、その労働……ただ無意味な事をして精神と肉体を摩耗させるためだけの労働だからな」
「今の私たちが、まさにそのような状況です」
にしても、その国何処だっけな、ヨーロッパかどっかだった気がするし……かなり前に読んだドストエフスキーの小説にもそんな感じの文章があったような気がする
「……暑っついな」
徒労で終わる可能性が無きにしもあらず……などと考えていると、目の前に忌々しい一群が見えてきた
「銃剣隊、射撃用意！　撃って！」
向かってくる星屑に対して防人たちは銃弾を放つ
「楠……先行するぞ」
「わかりました……ですが、危険だと判断した場合すぐに下がってもらいます」
「了解」
手に持っていた銃剣を地面に突き刺して自身の血で槍を形成し、厚い弾幕をすり抜けながら全力で星屑に向かっていく
「まずは、手傷を負った奴から潰していく」
手傷を負った上でこっちに向かってくる奴をまずは一匹、背後から迫る弾丸を気配で避けて続けざまにもう一匹

「この調子でもう一匹……ぐッ!?」
「不知火さんっ！　下がってくださいっ！」
「もう少し行けるッ!!」
「下がりなさい！　命令です！」
「……了解」
武器をボウガンに切り替え、迫ってくる奴を射抜きながら少しずつ部隊の方に後退する

何とか一群を退けた俺達は、種を植えた場所まで辿り着いた。火の海に一か所だけ存在する緑に覆われた地の中心に植えられている種を楠が回収するとすぐさま緑に覆われていた筈の大地は炎に包まれた
「さて、長居する必要はないわね。帰りま――」
「でで出たぁぁ～～っ!!　助けてメブぅ～～～っ！」
振り返ると、クソ暑い炎の中で、冷や汗が流れる。乙女座、山羊座、魚座の三体同時襲撃……モドキにしても、流石にこの戦況は最悪だ
「どうしよう!?　どうしよう!?」
「どうしようなんて決まってる！　逃げるのよ！　総員撤退!!　反撃は一切考えず、逃げる事だけに専念して！」
「殿は俺がやる！　だから後ろは気にせず壁に向かって進め！」
最後尾で化け物どもを牽制しながら壁の中に向かって走る、場所は壁から遠くないし蠍、蟹、射手のクソゲートリオでもない以上、生存の可能性は高い
そう考えた次の瞬間、地面が凄まじい勢いで揺れ始める
「メメメッ、メメッメッブ～!?　ななな、何がっ、起こって、てて、るの～！」
かなり前に食らったことある、山羊座の自身攻撃だ
「銃剣隊ッ！　射撃用意ッ!!!!　――」
「余計な事はしなくていいッ！　お前らは逃げることに専念しろッ！」

銃剣の切っ先で腕を切り裂き、手に持っていた一本とは別に新たに三本を生成し、地面に突き立てる事で無理やり自分の姿勢を安定させると、残りの一本を槍からスナイパーライフルの形に変化させ、放つ
　足にぶち当たり多少のひびは入ったが東郷の持ってる銃程の威力は出ない
「もう一発――」
「後は任せろ！　オレが銃剣で直接、叩き斬ってやるッ！」
「シズク!?　この揺れじゃカプリコーンまで近づけない！　危険すぎる！」
「いいや、オレなら出来る。お前はオレに勝ったんだ。そしてオレはお前に従うって約束した……だからオレが指示に従うのはお前だけだし、そいつの命令に従う通りは無い。それに、お前の目標はオレの目標でもある。犠牲ゼロにするんだろ？」
「シズク……」
「そーいう訳で、よろしく」
「……わかった、ヤバくなったら援護はしてやるから存分に突っ込め」
「おうっ！」
　大地を蹴った山伏……いや、シズクは普段と変わらない速度で突っ込んでいく。その間に俺がやるのは
「……横やりが入らないように、他の牽制をする」
　乙女座の放ってくる弾丸を着実に一発ずつ撃ち落としていく
「足、もらってくぜ!!」
　山羊座の足を斬り飛ばして転倒させた直後、シズクは白い帯に弾き飛ばされた
「シズクっ!!」
「くそッ！」
　持てる力のすべてを使って飛び上がり、シズクに向かっている乙女座の弾丸を撃ち抜きながらシズクの首根っこを掴む
「大丈夫かっ！」
「あぁ――って、危ねぇッ!!」
　一瞬の気の弾丸の内一発が近くに来てることに気付くのが遅れた

が代わりにシズクがそれを撃ち抜くが、流石に距離が近すぎた。空中で体勢を動かしシズクを庇うようにしてすぐ、地面に叩きつけられる
「ぐうっ……」
「大丈夫か!?」
「あぁって、前見ろッ!」
「間に合わね――」
さっきの衝撃で少し動けなくなっていたところにこれか、せめてシズクだけでも……と考えていたところで弥勒が俺達と弾丸の間に割って入ってきた
「シズクさん!　不知火さん!」
「弥勒!」
「バカッ!　お前何――」
その瞬間、撃ちもらした弾丸が弥勒に直撃する、咄嗟にスナイパーライフルを布状に変形させてこちら側に弥勒を引っ張るがそれでもダメージは殺しきれず弥勒の身体からはかなりの量の血液が流れていた
「弥勒!」
「シズク!　弥勒しっかり掴んでろ!」
「お、おう!」
布状にしたものを巻き付けてたままだったので、楠の方に弥勒ごとシズクを投げつける
「弥勒さん!　何をやってるんですか、あなたは!」
楠の言葉に弥勒は何か言っているようだが、その声は俺には聞こえない……眼前には敵が三体、相手にとって不足無しだ
「不知火さんっ!　あなたも早く!」
「……悪いな、それは出来ねぇ」
「あなた……まさかッ!」
「そう言うこった、悪いな」
気合いを入れ直すと、武器形状を刀に変化させ、もう一方の腕に槍を出現させ……目の前のバーテックスモドキに向かって突っ込む。幸いなことに相手の注意は俺の方に向いてる、それがラッキー以外の

何物でもない
　こっちに撃ち込んできた弾丸二蹴りを入れて爆発させる、片足は吹っ飛ぶがすぐに再生するから気にする必要はない。一気に突っ込んで乙女座に槍を突き立て、ぶっ殺す
「次……ッ!?」
　相変わらず素早い動きだった魚座のヒレが眼前に迫ってくるがそれは楠の振るった銃剣によって切り裂かれた
「楠!?　おまえどうして――」
「言ったはずです、私の部隊から誰一人として犠牲者は出さないと」
「でも、弥勒は！」
「弥勒さんは雀たちに任せてきました……私は、あなたを一人で逝かせたりしません」
　その言葉を聞くと、流石に目頭が熱くなってくる……両目を布で拭うと楠の隣に立つ
「さっきの見ただろ、俺は死ねない……だから先に逝くなんてことは出来ないんだが？」
「それでもです……帰りますよ、一緒に」
「あぁ、背中は預けたぞ……芽吹」
「はい！」
　俺と芽吹の二人は、目の前にいる二体のバーテックスを相手にする、乙女座を殺したと言っても完全に消滅させたわけじゃない、星屑はくっつけば復活する以上、あんまり時間をかけてられない
　再生しかけていた山羊座の足を切り払い、星屑の大群は芽吹が二丁持ちした銃剣を乱射して消滅させていく……決定打にはならないが、確実に数を削っていくことは出来る
「削れてるって言っても……流石に数が多いな」
「弱音ですか？　らしくないですね」
「お前に、何が分かるって言いたいところだが……もうそこそこの付き合いか」
　冗談交じりに言うが、傷は治ってもダメージを負った際の疲労は治らない以上……流石に疲れてきたな

「って……マジかよ」
そうこう言ってる間に乙女座が復活しやがった……天の神め、本格的にここで俺達を殺すつもりみたいだな
二人で武器を構えた直後、後ろから声が聞こえてきた
「銃剣隊、構え!!　って――――!!」
後ろを見ると、傷だらけの弥勒は加賀城たち護盾隊がガードし、他のメンバーがバーテックスにダメージを与える
「楠さん、それに不知火先生も、勝手に死なないでください!」
「犠牲ゼロを目指すんでしょう!」
「体勢を立て直して!　その間、私たちが援護するから!」
「あなた達……」
「……どうやら、無駄な事なんて何一つなかったみたいだな」
「そうみたいですね……行きましょう!」
「……おう!」
その後、楠の奮闘に防人たちの協力の甲斐ありバーテックス三体を無事殲滅し、壁の内側に帰還した。重傷者一名、それも予断を許さない状況ではあるが……防人たちは、生存と言う確かな成果を勝ち取った

XI　後を託す者の為に

役目を終えた後、弥勒はすぐに病院に運ばれ緊急手術が行われた。
彼女の負った傷は思った以上に深かったらしく予断を許さない状況だ
「最善は尽くしたが、生き延びることが出来るかどうかは分からない」
それが彼女の事を治療した医師の言葉だった
他の防人たちが帰っても尚、芽吹だけはガラス越しに弥勒の事を眠っている姿を眺めていた。俺は近くのベンチに座って何も言わずにその姿を眺めているといつも通り神官服の安芸ちゃんがやってくる
「楠さん。あなたもかなりの怪我を負っています、治療を受けて安静にしていなさい」
「私はここにいます。弥勒さんが目を覚ますまで」
「今、あなたに出来ることは何もありません。神樹様にお祈りするくらいです。祈る事なら、自分のベットで休みながらでもできます」
神樹に…というか神に祈るねぇ、俺らが戦ってんのは神様なのにそれに祈るのは何とも皮肉な話だな
「何もできない、神にも祈らない。私がやることは…彼女の傍にいて、心の中で呼びかけることくらいです。そんな事、何の意味もないってわかっていますけど…」
「……あなたがそうしたいのなら、それもいいでしょう」
心の中で呼びかける…か、神様が人を地獄に叩き落とすとしたら、叩き落された地獄から人を救い出すのはまた人である…なんてことをカッコつけて考えてみるが、結局の所そいつが助かるかどうかは本人次第としか言いようがない
「私は、自分がもっと合理的な人間だと思っていました」
「何を言うかと思えば」
安芸ちゃんの口調が仕事モードから、少しだけいつもの口調に戻った…というか今までは言葉にのせてなかった感情が言葉にのった
「あなたはまったく合理的な人間ではありませんよ。偏執的とさえい

えるほどのストイックさと意思の強さ。それは合理的ではなく、理想と精神論で生きている人間の身が持つものです」

その言葉を最後に、安芸ちゃんは芽吹から離れてきた道を引き返してくる。俺の目の前を素通りするかと思ったが立ち止まり、声をかけてくる

「不知火さんも、しっかり体を休めてください」

「…知ってるだろ、身体を休める必要ないって」

「それでもです、身体は大丈夫でも精神は疲労する…いつかあなたに言われた言葉です」

いつ行った言葉か忘れちまったが、確かに言った記憶はある…まさかここで、それを言われるとは思わなかった

「分かったよ、今回は大人しく休む」

「そうしてください」

ベンチを立ち上がり、俺も自分にあてがわれた病室に向かって歩きだす

「少しは、懐かしい要さんに戻ったみたいですね」

「…懐かしい俺ってなんだよ」

その言葉を最後に、俺は安芸ちゃんと別れた

それから二日、三日と時は流れ…ようやく弥勒は目を覚ました。聞いたところによるとその間、楠はずっと眠らずに彼女の帰還を待ち続けたらしい

弥勒の病室に入る、ぼんやりとしていた弥勒だったが芽吹の姿を見た瞬間の目に正気が戻る

「あら…我がライバル、芽吹さんではありませんか。心配かけましたわね。しかし私は、やはりまだ死ぬべき時ではないとゲホッ、ゴホッ、ぅ、ぅぅぅぅ……」

「バカなんですか、弥勒さん。まだ意識が戻っただけで怪我も治ってないのに、無理して喋ったら…そうなるに決まってます」

いつもと変わらない言葉だったが、芽吹の目からは涙が零れ落ち始めていた

「あれ…なんで……？　私…泣いて…」
「それはあなたが仲間たちに、全身全霊で向き合ってきたからです」
　俺たちの後に病室に入ってきた安芸ちゃんの放った言葉…口調自体は変わっていないが、神樹館で鷲尾達に接していた時と同じ温かさを含んでいた
「あなたが防人の少女たちと過ごした時間。共に築き上げてきた結びつき。全力で向き合ってきたからこそ、あなたにとって彼女たちは掛け替えのない存在になった。『友達』と呼べる存在です。あなたは今、友達のために涙を流しているのです」
「……友達……」
　勇者になれなかった少女が、防人として戦い続けてきた少女が…手に入れた掛け替えのない存在。決して世界を左右するわけではないが…何よりも大切な成果を彼女は自分の手で掴み取った
「芽吹先輩」
　病室の中に聞こえてきたのは、防人たちが救おうとしていた少女の…国土ちゃんの声だった
「…私、戻ってきました」
　病室の中に入ってきた国土ちゃんは、少しはにかみながらみんなにそう告げた

　それから、国土ちゃんが防人のやつらにもみくちゃにされている間に芽吹と安芸ちゃん…そして俺も話を聞くために屋上にやって来た
「国土さんが御役目を解かれました」
「奉火祭は取り止めになった…と言う事ですか？」
「いいえ、巫女たちの代わりに、一人の勇者が犠牲となることに志願したのです」
「まさか…三好さん？」
「彼女ではありません」
　巫女たちの代わりに自分が犠牲になることを選んだ勇者がいると聞いてすぐ、俺の中に一人の少女の姿が浮かんでくる…一人で背負い込んで、暴走しがちだが。誰よりも友達を大事にしている少女

「志願したのは…東郷か」
「……はい、犠牲となるのは東郷美森様。以前、神樹様の壁に穴をあけた本人が、自ら責任を取る…と」
「……いかにもアイツが言いそうな事だな」
「…亜耶ちゃんは犠牲にならなかった…でも、誰かが犠牲になるんですね？」
　芽吹の言葉に安芸ちゃんは頷いた。よく見ると彼女の肩も少し震えている。芽吹も…誰も犠牲になることのない結末を目指していただけに悔しさが滲み出ている
「防人のお役目は、ひとまず終了となります。今度、また御役目が発生する可能性はありますが、結界外調査と国造りの補佐と言う任務はなくなりましたから」
　その言葉に芽吹は何も答えない
「大赦は、御役目の中で防人に多くの死者が出ると思っていました。ですが…負傷者は出たものの、犠牲はゼロ。よく成し遂げましたね。そしてあなた自身も、昔とはずいぶん変わりましたね。今のあなたが三好さんと並んでいたら、きっと我々はどちらに銀の端末を受け継がせるか、選ぶことはできなかった」
「ギン？　受け継がせる？」
　あれ？　三好の端末って新規で作った奴じゃなかったの…それじゃあ、恐らくこれから必要になるであろう銀の端末が……ない？
「そう……御役目を退き――長い間眠り続けていた勇者です。今のあなたなら、もし端末を受け継いだとしても、笑って許してくれるでしょう」
「あなたは、三ノ輪銀と個人的な知り合いだったんですか」
「個人的、というほどではありませんね。私は先代勇者のお目付け役で……勇者の御役目以外でも、彼女たちの通う学校の教師でした。ただ、それだけです」
　ただ、それだけ…それだけだからこそ、二年前に彼女は誰よりも心を痛めていた、何が起こっているのかわからないから、ただ傷ついていく彼女たちを見守り、決断を見送る事しかできなかったから

だからこそ、今の安芸ちゃんは防人たちと接するのに壁を作っていた…それも、少しは崩れたみたいだけど

「今の楠さんなら、勇者としての御役目も充分に果たせるでしょう。大赦にも、そのように報告しておきます。もし、更なる勇者の補充が必要となった時、あなたがその御役目につけるように」

「その必要はありません。私は勇者にはならない」

その言葉を聞いた瞬間、少しだけ嬉しい気持ちになった、一つの道に固執していた筈の少女は…新しい道を踏み出したのだから

「あなたは勇者になることに、強くこだわっていた筈では？」

「そうですね。今でも勇者になることは、私の目標です…ですが、大赦の『勇者』は、私が目指してるものじゃない。犠牲を前提として生きる存在を、勇者だなんて認めません」

その言葉を聞いた安芸ちゃんは、少し考えこむ…おそらくだが何かを考えているのだろう

「あなたは防人の犠牲をゼロにすると―それは人間・楠芽吹としての誓約だと言いましたね？　そして誓約を実辺しました。しかし、人類の歴史はすべて犠牲の上に成り立っています。科学、文化、そして人の生命そのものさえも、数限りない屍の上に存在するのです」

「えぇ、その通りです」

「それが分かっているならば、なぜそこまで犠牲を否定するのですか。少を犠牲にして多を生かす事ができるならば、それは悪いことではない筈です」

その言葉を聞いて理解した、今の安芸ちゃんは一人の人間の考えではなく、大赦の考えで芽吹に問いかけ…彼女がどう答えるのかを待っている

「あなたは――いえ、大赦は、人類を『全体』でしか見ていない。囲碁や将棋の盤面を見るように、高みから見てるだけ。だからわからない……『大勢の中の一人』でも、その人には家族がいて、友達がいて、愛する人がいる。たった一人でも犠牲になれば、その犠牲になった者を愛する人たちは、世界の終わりと同じくらい悲しいんです！　大赦は高みから見ているだけだから、そんな簡単なことが――中学生にすぎ

ない私でもわかる、そんな簡単な事がわからない。少を殺して多を生かすなんて選択が、良いはずがないんです！」

芽吹の発したその言葉は、聞く人が聞けばただの理想論に過ぎないのかも知れない…それでも、人として忘れてはいけない事が詰まっている。本来ならば少を殺して多を生かすなんて選択を良しとするのはいけない……か

「最後の最後まで死に物狂いで足掻け！　死に物狂いで努力をしてない人間が、安易に誰かの命を犠牲にするなんて選択をするんじゃない!!」

その言葉を聞いた瞬間、芽吹の姿に別の誰かの姿が重なって見えた……血筋とか関係なく、どこかに受け継がれているモノはあるんだな

「大赦から与えられる『勇者』という称号など、不要です。私は、私が理想とする勇者を目指し、必ずそれになって見せる」

「――あなたが理想とする勇者とは、なんですか」

「誰一人、犠牲にしない者。犠牲を生まない道を拓ける者こそ、勇者」

その言葉を、安芸ちゃんは黙って聞き続ける

「私は防人を続けます。今の大赦のような、犠牲を前提としたやり方とは違う方法を、探し続けます。場合によっては、大赦の内部に入って、歪なやり方を変えて見せる。そして誰一人犠牲にならない道を、必ず見つけ出します」

芽吹の新しい宣誓、彼女だけじゃない…勇者部の奴等も似たような思いは持っている…だから、後を任せても大丈夫そうだ

「誰一人犠牲にならない道……あなたなら、いつかできるかもしれませんね」

「成し遂げますよ、必ず」

芽吹はそう言うと屋上から出ていき、俺と安芸ちゃんの二人だけになる

「良かったな」

「そうですね…それにしても、要さん全然喋りませんでしたね」

「元々話を聞くために来ただけだし…それに、あんだけ真剣な問答じゃあ間に入る気も起きなかったよ」

「そうですか」
「そうなんです…ってそういえば、三ノ輪の端末の件、聞いてないんだけど」
「そうなんですか？　伊予島くん辺りが言ってくれてるものだと思ってました」
　アイツからも聞いてない気がする…それとも俺が忘れてるだけか？
「まぁそれはいいや…後は、任せても大丈夫そうだな」
「えっ？」
「……なんでもねぇ、それより銀の端末を夏凛に渡しちまってんなら、どうすんだ？」
「必要になった時の事を考えて、バックアップデータから新たな端末を作成しているので、心配はありません」
「そうか、アイツら東郷が勝手に生贄になりましたとか言ったら絶対に助けに向かうからな」
「その事ですか…勇者部には東郷さんの事は伝えていません」
　そりゃそうだ、絶対に阻止しそうだし…まぁバレるのは時間の問題だろうが
「とりあえず、俺ももう行くよ…安芸ちゃんはどうする？」
「私は、もう少しだけここに居ます」
「そっか」

　俺も屋上から出ると、弥勒のいる集中治療室には行かず、ゴールドタワーにある自分の部屋まで向かう
「後を託す者達の為に…俺も俺に出来ることをする」
　そのために、さよならだ

　翌日、ゴールドタワーにある不知火要の部屋は綺麗整頓され、何処を探しても彼の姿は見つけることはできなかった

神世紀３０００年／冬～神世紀３０１年―結城友奈は勇者である　勇者の章―
勇者の章，１―１　日常

バーテックスとの戦いが終わり、勇者としての役目を終えた俺たちは、元の日常を謳歌していた
「讃州中学勇者部は、勇んで世の為になることをするクラブです。なるべく諦めない、成せば大抵何とかなるなどの精神で頑張っています。今日も勇者部、しゅっぱーつ！　っと」
「小学生の作文か」
「中学生だよ」
なんかこのやり取りもすっかり懐かしくなってしまった俺は、友奈たちのやり取りを聞きながらお茶を飲む……それにしても、なーんか今まで飲んでたのに比べると味が落ちてるような、違うような……自分でいれたからか？
「友奈ー、タウン誌で勇者部の活動を紹介してもらうんだから、良いキャッチコピー考えてよね」
「はーい」
「あの、風先輩。お茶の葉買い替えました？」
「えっ？　別に買い替えてないと思うけど」
「ですよねぇ、やっぱ淹れ方の問題か……」
一応風先輩に確認を取ってみたものの、やっぱりお茶の葉を買い替えたリはしてないらしい……となるとやっぱり淹れ方の問題か、普段通り淹れた筈なのになんだこの言い知れぬ違和感というか、物足りなさは
「お姉ちゃん！　幼稚園からお礼のメールが沢山来てる！」
パソコンの前に座っていた樹ちゃんからそんな言葉が飛んできた、とりあえず全員につられるように俺もパソコンも近くまで行きモニターを確認すると、確かにかなりの量のお礼メールが受信ボックスに入っているのが見える

「ふむ、この間のはバカ受けだったからねー」
「親御さんは苦笑いしてたわよ」
「確かに苦笑いしてたな……それより、やっぱりお茶の葉変わってない？」
「アンタはまだそれ言うか」
そんなことを話しているとガラガラッと部室の扉が開き新しい声が一つ、聞こえてくる
「ごめんごめん～！　もう始まってるー？　掃除当番の途中で寝てしまったんよ～」
「園子……そんな時に寝ることが出来るのはあなたくらいよね……」
「わぁ！　褒められた――！」
「良かったね！　夏凛ちゃんはなかなか人を褒めないんだよ」
と、三人が話していると園子の背後からさらに新しい声が聞こえてきた
「すみません遅れましたー！　実は部室に来る途中体調悪そうな子を見かけちゃって保健室に送ってました！」
「相変わらずその体質は治ってないみたいだな、銀」
「いやー、むしろ酷くなってるというか……寝てた分の反動が一気に来てるというか」
散華の代償で意識を失っている間に随分とため込んだ……らしいのだが俺にはそこら辺よくわからない
「それじゃ、〝全員揃った〟ことだし。十二月期の部会、始めるわよ！」
人数が増えた讃州中学勇者部だが、それでもバカみたいに元気にやっている……のだが、どうにもうっすら違和感があるような

そんな中で今回の部活を終え、友奈と二人で帰宅途中な訳だがやっぱり心の中にある違和感がぬぐい切れない
「徹くん、どうかしたの？」
「えっ、いや……何でもない」

「徹くん、悩んだら相談。だよ？」
「わかってるよ」
　そんなことを話していると、そういえば最近師匠に会ってない事を思い出した
「そういや友奈、最近師匠経由の依頼ってあったっけ？」
「師匠って、不知火さん……だよね？」
「あぁ、そういや最近姿を見かけないなぁと思ってさ」
「うーん、どうなんだろ。でも、確かに最近不知火さんの名前聞かないかも」
「だよなぁ、一体どこで何をしてるんだか」
　ふと目に映った夕焼けを見ながら、俺たち二人は再び帰り道を歩き出した

　四国、壁の外。俺の目に映るのはこちらに向かってくる大量の白い塊と、空高い場所にあるブラックホール
「ったく、いい加減思い切りが良すぎる性格どうにかなんねぇのかよ。大和撫子っつうには少しお転婆が過ぎんだろッ！」
　誰に聞かせる訳でもなく……いや、どうせ聞こえてないだろうがあのブラックホールの中にいるであろう少女に対してそんなことを言いながら左手に持った槍を振るう。こっちの事を噛み殺そうとしてくる星屑どもだが、もうこの程度に負ける程落ちぶれちゃいねぇ
「届くかわかんねぇけど、飛んでみるか」
「血戦偽装（けっせんぎそう）――大天狗（おおてんぐ）」
　身体の内側から焼かれていくような感覚と共に溢れ出る血液が陣羽織を形作り、背中から赤黒い一対の翼が出現する。そして手に持っていた槍の形状も変化し、納刀された状態の日本刀になった
　周りに集まってきた星屑どもを無視して翼をはためかせると上空にあるブラックホールに向かって一直線に飛ぶ、時折近づいてきた星屑を足場にしつつ少しずつ近づいていったのだがあと一歩という所で、足場にしていた星屑に何かが衝突し、爆発した所為で足止めを食

らう……というか爆発って事は
「やっぱ乙女座……それも中途半端に完成してるんじゃなく外観完璧に出来上がってる奴か、面倒だな」
　真正面から叩き潰すのは簡単にできるが、今だって血戦偽装でゴリゴリ体力を削られてる状態……これで乙女座相手して倒した後ブラックホールに突っ込んで体力なくなってお陀仏は流石に避けたぃ
「乙女座倒して今回も撤退だな」
　こっちに向けて相変わらず爆弾を撃ち出してくる乙女座を避けつつ接近し、まずは爆弾の発射口をぶった切る。まずは攻撃手段を奪い後は輪切りにすれば……それで終わりだ
「輪切りにしてすぐ消えたって事は御魂なしのやつか」
　丁度そのタイミングで血戦偽装が解けて元の状態に戻る。上空にいた俺は重力に逆らわずそのまま落下している途中で武器をワイヤーショットに変化させて壁に撃ち込み、そのまま壁の中まで戻る
「大天狗の力を借りればあのブラックホールには届くが……アレがマジモンのブラックホールだったら目的の場所に辿り着く前にこっちがぺしゃんこ。一体どうしたもんかね」
　現状、あの場所への突入は可能って事は理解できた以上次にやる事は突入方法の模索をするために今の拠点……壁の入口近くに張っているテントに戻ることにする

勇者の章，1―2　忘却

週明けのある日、俺が部室にやってくると何やら机の周りに集まっているみんなの姿が目に入る
「お疲れ様です……って、一体何の騒ぎですか？」
「実は樹が家庭科でケーキを作ったらしくてね、徹もさっさと座っちゃいなさい」
「ケーキですか、珍しいもん作るんすね」
風先輩にそんなことを言いながら俺も席に座り、目のまえにある白い箱を見る。そして、箱が開かれケーキが姿を現す……のだが、それは何とも言えない形をしているというか、随分と独創的な見た目をしていた……目の位置から動物である事には間違いないのだろうが、これは一体なんだ？
「作りすぎたから持ってきちゃった」
「偉いぞ、我が妹！」
「……独特のセンスね」
「表現力が豊かだと言いなさい」
表現力……というか、想像力というかなんというか、というかマジで何だこれ、狸……いや、猫か？
「それじゃ、さっそく切り分けて食べよ食べよ」
そして切り分けられたケーキが目の前に出されるのだが、何だろう、この絶妙に切り分けられた謎生物を見ているとどことなく呪われそうな気がしてくるのだが……まぁ、そんなことはどうでもいい、重要なのは味！　どんなに見た目がゲテモノだとしても味が良ければ全て解決だ
という事で、恐る恐る一口食べてみる
「どうです？」
「うん、見た目はともかく――」
「美味しい！」
「お姉さんプロだねぇ！」
「うん、ホントに美味しい！」

「……美味い」
「樹が遂に食べられる料理を、うぅ」
「お姉ちゃん、帰って傷つくよ……」
　見た目は横に置いておくとして本当に美味い、奇跡だなこれは
「いっつん、いっつん！　お店屋さんやろう！　ゆくゆくはフランチャイズで！」
「園子さんはスケールが大きすぎて、ボケなのか何なのかわかんないですよ。でも、ありがとうございます」
　そして目の前に出されたケーキを食い終え、皿の方を見るとそこに残っていたケーキはあと一つだけだった
「「「「「あっ……」」」」」
　さて、こうなると誰が食べるのかで譲りあいになるのが我が勇者部なのだが、そんなことをやっている間にどうして一つ残っているのかを軽く考えてみる
「風先輩、何で一つ余るように切っちゃったんですか？」
「何でかしらね、いつもの癖？」
「癖……？」
「え？　あ、いや……やっぱり何となく？」
　何だろう、昨日も感じたモヤモヤがさらに強くなった気がする、なんといえばいいのかわからないけれど……俺は、俺たちは大切な何かを忘れてしまっているような、そんな感覚
　その後、園子が残り一つになったケーキかなり細かい制度で再び人数分に切り分けたり、日曜の打ち合わせをしたりしていたのだが……俺の頭にそれは殆ど入ってこなかった

　そんなことがあった日の帰り道、友奈もどこかこの日常に引っかかりを覚えていたようであまり会話もなく家の近くまでやってきたところで、ふと足が止まった
「どうしたの？」
「いや……なんかこの家、既視感がある気がするんだよな」
「言われてみれば、確かに……」

友奈と話をすればするほど、やっぱり何処か違和感を覚える。まるで形の違うパズルのピース同士を組み合わせて無理やり絵を完成させているように、記憶と記憶の間にあった何かを切り取って張ったような感覚

「友奈、悪い……今日はここで！」

「えっ？　急にどうしたの!?」

「少し調べたいことが出来た！　それじゃあな！」

友奈と別れて家に帰った俺は今までのアルバムを引っ張り出して写真を確認する。やっぱり、一見すると何の変哲もない写真だけどその間には不自然な空白がある。それは俺が勇者になって園子や銀と一緒に戦い始める前から続いてる

「やっぱり、俺は忘れてる。自分にとって大切な誰かを……」

自分にとって忘れている誰か、それを思い出すために俺がしないといけない事……それが一体何なのかを考える

「……そうだ、師匠」

もしかしたら、師匠なら……そう考えた俺は携帯を操作して師匠に電話をかけるが――師匠が電話になることはなかった

相も変わらず炎の海に白い塊の大群、こっちに向かってくるあの大群を形状変化させた旋刃盤で防ぎながら次の手をどうしようか考える。あのブラックホールに突っ込む以上それなりに体力は残しておく必要がある

「……だから、雑魚どもを相手して無駄に体力を消耗するのは愚策」

さて、どうしたものか……などと考えていると、とあることを思いついた

「やってみるか」

大群から外れた俺は、もう一度向かってくる星屑の攻撃を避けずそのまま食われた……がそのまま食われる程俺は甘くはない、槍を取り

出して口が閉じないようにしてそのまま上空に向かっていく
「ここら辺で良いか」
ある程度まで上がったのを確認したのでそこで星屑を消滅させて周りにいる星屑を足場にブラックホールに近づいていく。こっちを狙ってくれるおかげで勝手に足場がやって来てくれるのは有り難い
「っと、こっからは自力で飛ぶか」
回線を繋げて大天狗の血戦偽装を展開して、そのままブラックホールに突入した
「ぐっ……身体……潰れ……！」
思った以上の重力がきつかったがそこは想定内、全方位を覆うように血液で壁を作って守り入る……のだが、流石にどれだけ続くのかわからない以上、こっからは耐久するしかない
そして、ずっと壁を作り続け、どれだけの時間が経ったのかわからないがようやく四方から襲い掛かってきていた重力の檻から解放されたような気がする
「ようやく……目的地か……」
周囲を見回してみるとどうやらここが目的の場所らしい、何もない空間の中心に巨大な鏡のような何かが見える。流石に血を使い過ぎて若干意識が朦朧としてきているが、それでも彼女を助けさえすれば任務完了――――
「くっそ――流石に――――油――断――――」
彼女の元に向かっていた俺の上空から降ってきた槍に身体中を貫かれたのを最後に……俺の意識は完全に途切れた

勇者の章，1―3　回顧

土曜の朝、昨日からぶっ通しで師匠の事を探し回ってた俺は大急ぎで制服に着替えていた。理由は単純で、今日は幼稚園で勇者部の劇を披露するという予定が入っていたから……なのだがガッツリ疲れて帰ってきた俺はそのまま布団に倒れこみ。無事寝坊をしたのである

「やっちまったやっちまったやっちまった、急げ急げ急げ……っと、とりあえずみんなに一言入れてっと。急げ急げ」

にしても、普段なら寝坊とかしない筈なのにどうして今日に限って寝坊なんてしちまったんだよ。父さんも母さんも起こしてくれなかったし……ホント今までこんな事なんて一度もなかったのに

「よし、着替え終了。あとは……あれ？　カバン何処置いた？」

カバン何処に置いたか忘れるほどに焦っているのは置いておくとして……いや、それを置いておくのは流石にまずいんじゃないか？　そもそも俺はカバンを探している訳でその思考を横に置いておくのは流石にどうかと――

「って、そんなことを考えてる場合じゃないんだよ……あった！」

ベッドの下に滑り込むようになっていたカバンを見つけ、それを取り出すとカバンと一緒に一枚の写真が出てきた

「この写真、こんな所にあったのか」

俺たちが神樹館に通っていたころ、確かまだ銀や園子と一緒に戦い始めたばっかりの頃に〝四人〟で撮った写真――

「――四人？」

確か先代勇者として戦っていたのは俺と園子と銀だけだったはず……というか待て、さっき〝俺たち〟って言わなかったか？　どうして俺たちって言った？

考えれば考えるほどどんどん思考が沈んでいく感覚に陥る、それにこの写真に写ってるのも四人だ、俺と園子、銀……そして、須美

「須美……？　須美って……誰だ……ッ！」

〝須美〟という名前を思い出した瞬間、今までモヤのかかっていた部分が一気に晴れる

「そうだ、須美。鷲尾須美……それに東郷美森、勇者部の大切な仲間。俺の、かけがえのない幼馴染……どうして今まで忘れてたんだ」

忘れちゃいけないはずなのに、忘れたくなかったはずなのに……いや、それを考えるのは後だ。今はみんなの所に行かないと

俺が幼稚園に到着したころには、何故か泣いている友奈を園子が抱きしめているという場面だった。二人以外のメンバーの様子を見ると園子の近くにいる銀も少し様子が変なのを見るときっと彼女も思い出している。そして何かの拍子で友奈も東郷の事を思い出したのだろうと予想できる……最も、途中で劇を終わらせる訳にはいかなかったので少しだけ休憩の時間を設けて貰った後にしっかりと劇を終えた

そして今は後片付けを終え、全員で部室に戻ってきたところだ

「二人とも、一体どうしたのよ。徹もさっきからなんか変だし」

風先輩が、様子のおかしい俺たちに向かってそう聞くと、ゆっくりと園子が話を始める

「……よく聞いてね？　今この記憶は、嘘って事」

「へっ？」

「何か、とんでもなく悪いことが起きていて……それが何なのかわからないけど、私たちはそれをなかったことにしてる」

俺たちにも一体何が起こっているのかわからない、けれど……今この場にいない後一人はそれを一人で解決しようと無茶をしているのだろう

「何を言ってるの？　ねぇ友奈――」

「私、思い出した……勇者部にはもう一人、とても大切な友達がいたんだよ。絶対、忘れたりなんかしちゃいけないのに……私、どうして……」

「友奈、落ち着いて」

「みんな思い出して！　東郷さん！　東郷美森って子が、ここにいたんだよッ！」

友奈の言葉を聞いた風先輩、樹、夏凛の三人もどうやら思い出した

らしい。俺も……ようやく全部思い出せた、園子や銀が戻って来てから確かに途中まで東郷と一緒にいた記憶がある……でも、この場に東郷はいない

「どういう事……？　なんで……なんで私たちの誰も東郷の記憶がないの……？　これ、最初から世界にいなかったみたいになってる!?」

「私、部長なのに……また……」

「お姉ちゃん……」

「でも、もう思い出した。何で……何が起こってるの……？」

彼女が何処で何をしているのか、どうして俺たちの記憶からなくなっているのか……そして、誰が何故俺たちの記憶を消したのか、それを探るすべを、今の俺たちは持ち合わせていない

「なぁ、徹。不知火さんと連絡つかないのか？　あの人なら何か――」

「無理だ。俺も記憶を取り戻す前……それに取り戻した後、何度連絡しても。師匠は出なかった」

「そんな……」

「とにかく、東郷さんを探そう！」

友奈の言葉にうなづいた俺たちは、どこかに消えた東郷の足取りを探し始める

勇者の章，2―1　捜索

そして時は流れ、翌日の部室。園子と銀以外の全員が集まったが、結果は散々なものだった

「東郷さん、元からいない事になってる……教室に机もないし」

「ウチにあるアルバムからも、須美……いや、東郷は全部消えちまってた。父さんも母さんも覚えてなかった」

「全員……手がかりなしか……」

「みんなから貰った応援メッセージ、消えてますけど……東郷先輩がみんなカボチャって書いてくれたんです」

「たちの悪いイジメみたいじゃない……」

ここまで綺麗に痕跡を消されてしまうと、信じていても少し不安になってくる。それに、ここまで情報がないとなると後調べてない所は大赦くらいしかない。そう考えていたのは俺だけではなかったようだ

「大赦なら何か知ってるだろうけど」

「でも、私には何も知らないって……」

「こっちも、同じ答えが返って来たわ」

「っ、また、大赦はとぼけてるってこと？」

「本当に何も知らないみたいだよ。大赦は」

部室の扉を開けて入ってきた園子はさらに言葉を続ける

「わっしーの事、私が話せる地位の神官さんたちに聞いたけど、皆震えながら知らないって……」

「大赦すら知らない事態なんて……」

「東郷さん……」

園子が入ってきてから少し遅れて、両手にアタッシュケースを抱えた銀も部室の中にやってきた

「園子、預かって来たよ」

「ありがとミノさん」

「気にしないで、結局これしかないみたいだし」

そう言いながら銀が開いたアタッシュケースの中に入っていたの

は、七台のスマートフォン。正直身に覚えしかないし……できることなら一生見たくなかった忌々しいモノ
「これって……！」
「勇者、システム……」
「でも、これをどうして――」
「私たちが言いに行く前に、大赦の職員さんから渡されたんだ。もし私たちが大赦に来たら渡してあげて欲しいって、頼まれたんだって……これで、見つけに行こう」
「見つけるって……」
「今も変身できるのよね」
「そうだよにぼっしー」
　そう言いながら園子はアタッシュケースの一角、不自然に空きが出来ている部分を指さす
「見て、わっしーの端末がないんだよ。でも、私の端末のレーダーにわっしーの反応がない」
「園子のだけじゃなくて、アタシの端末にも反応がないし。故障って可能性もゼロ」
「つまり、わっしーは凄くびっくりする所にいるんじゃないかな」
　勇者システムを所持しているのならレーダーに映る。でもそこに反応が表示されてないって事は……東郷のいる場所は、まさか――
「「……壁の外!?」」
「東郷はぶっ飛んでるからあり得るわね」
「その通り、だから勇者になって行ってみようと思うんだ」
「勇者になったら、また力の代償があるんですか？」
　勇者の代償――散華、師匠から聞いたどれだけ技術を進歩させても改善することのできなかった勇者の支払う代償
「大丈夫。今までよりも更にバージョンアップして散華することもないんだって……少し力は落ちちゃったみたいだけど」
「なんか、出来すぎてるって言うか……」
「そうよ。いくら新しいシステムになったって……結局また……」
　けれど、やるしかない。今の状況を打開できるのは、壁の外に出て

東郷を探すには、勇者の力に頼らないといけない
「よしっ！　東郷さんを見つける為なら、私は……」
「待ちなさい」
「でも――」
「初めての時とは違うの、私は部長としてみんなをおいそれと変身させたくない。勢いで、何て言うのはやめて」
「乃木、三ノ輪。アンタたちもよ」
　風先輩の言う事も最もだ
「わかってます」
「うん。たしかに、私たちはひどい目に遭ったけど、勇者が身体を供物にして戦わなければ世界が滅んでいた。大赦はやり方がまずかっただけで、誰も悪くない」
　あの人たちも、元を辿れば人類を救うために動いていた人たちだ。只やり方がまずかっただけで、個人が悪かったというのは違う……それでも複雑な気分ではあるし、俺はもうあの組織を信用出来てない
「確かに、少しむっとする所はあるけど。それでも私たちの為に頑張ってくれた人たちはいる……だから、もう一度だけ私は信じてみようと思ったんだ」
　俺たちの方を見る園子の目には確かな決意が宿っている
「だから前とは違う。今度は納得してやるから、私は行くよ」
「アタシも、勇者の力を使うことに納得はしてます」
　園子と銀の瞳を見て、俺も自分の端末に手を伸ばす
「徹……」
「大丈夫です。確かに大赦は信用しきれません。だけど俺は二人を、二人の信じた者を信用しますし、覚悟はできてます」
「私も、大赦の人とかよくわからないけど、園ちゃんがそう言ってるんだから信じるよ」
　俺と友奈は端末を持って風先輩の方を見ると、少し頭を掻いた後に端末を手に取った
「……あーもう、部長を置いていくんじゃいわよ」
「風先輩っ！」

「まぁ、勇者部員が行方不明っていうんなら、同じ勇者部員が探さないとね」
「……私も、行きます！」
「にしても壁の外か、樹。とりあえずサプリキメときなさい！」
「ちょっ――」
「今回はキメていきますっ！」
「……良いチームだね」
三人でわちゃわちゃやり始めた三人を見ながら、ぽつりと園子の呟いた言葉を聞いた俺と銀は彼女の頭に軽く手を置いた
「やえくん、ミノさん……」
「アタシたちもその仲間、だろ？」
「そういうこった、絶対に帰ってこよう。みんなで一緒に」
「……うんっ！」
決意を固めた俺たちは、もう一度アプリを立ち上げ――友奈たちは勇者に、俺は護人に、再び変身した

勇者の章，2―2　壁外

「新しい勇者システムは、満開ゲージが最初から全部溜まっている状態だよ。精霊がバリアで守ってくれるけど、バリアを使うたびに満開ゲージを消費していく。ゲージは回復しない」

　勇者としての装束を纏った状態で、園子が新しい勇者システムについてを説明してくれた

「満開はゲージがいっぱいなら出来るけど、使えばゲージがゼロになる。そうなったら精霊がバリアを張れなくなる、この時攻撃を受ければ命に関わる。これが散華のなくなった勇者システムだよ」

「今みたいに全部説明してくれた方が、やっぱりいいわね」

「そうね、覚悟が出来るってもんよ」

「俺たちの頃はバリアなしだったし、そっちの方が気合いが入る」

「だな、さっさと須美を連れ戻して。みっちりお説教だ！」

　そして、勇者になったことで身体能力が強化されている俺たちはその足で、壁へと向かう。その途中で誰かに見られるかもしれなかったが幸いなことに今日は人通りもあまりなかったから目撃者は少なそうだ

「この先は、ズゴゴゴって感じだから気を付けてね」

　到着した壁から外に出る前、園子がそんなことを俺たちに言ってきた。ズゴゴゴとは……何とも独特な表現だけど多分、バーテックスの事を言ってるんだろう。只でさえ外は火の海な訳だし

「よっしゃ、それじゃ先頭はアタシと夏凛で務めるから。園子たちはサポートよろしくな」

「ミノさん、にぼっしー。あまり前に出ないでね」

「ん……えぇ」

「わかってるよ」

「樹、今晩はスペシャルうどん作ってあげるからね」

「うん。楽しみにしてるよ、お姉ちゃん」

「よし、行こう！」

　覚悟を決めた勇者部全員で壁の外に出る、相変わらず一面火の海で

地獄絵図だが、心なしか前より火の勢い強くなってる気がする
「うわー……相変わらずの凄まじさね……」
「何度見ても、この世の光景じゃないわね」
「わっ！　レーダーに反応あったよ！」
「えっ!?　どこどこ！」
「何とかなりそうね、友奈！」
「はいっ！」
　園子の端末を覗き込んでみると、確かに東郷の反応はしっかり映ってる
「でも、意外と近いけど……」
「それらしい姿も戦ってる様子も一切ないな」
「この方向で間違い……ええっ!?」
　友奈の見た方向をに視線を向けると、そこには捕らわれた東郷の姿……ではなく天高くその存在を放つブラックホールの姿があった
「ちょ、ちょ、何なのあれ!?」
「わーお……」
「あの位置……だよね？」
「うん、わっしーはあの位置にいるみたい」
「東郷さんが……東郷さんがブラックホールになってる」
「久しぶりに会ったらブラックホールになってる奴初めてだわ」
「お姉ちゃん……」
「いやー、さっすが須美。スケールが違うわ」
「もうスケールとかそういう話じゃないだろ、これ……」
「！　周囲にバーテックスもいるじゃない」
「行ってみよう」
「でも、どうやって……ッ!?」
　ブラックホールになった東郷に目を向けていると、俺たちに向かって白い塊が飛んでくる
「こんな時に……ッ！」
　友奈たちとは離れてしまったが、そんなこと関係なしに星屑はこっちに向かってくる

「おりゃぁッ！」
　今までとは違い五体満足になったうえで二年前よりもシステムの性能が上がってる、なら星屑に手間取る程弱くはない
「銀ッ！　久々に」アレやるぞ！」
「おっしゃ来た！」
　両手に持っていたチャクラムを重ね、背面を銀の方に向ける。銀はそれを足場にして更に高度を上げると、戦斧に炎を灯す
「せぇぇぇぇりゃぁぁぁぁッ！」
　両腕の戦斧を思い切り振るい周りに集まっていた星屑を消滅させると、壁に着地する
「ひっさびさだけど案外上手く行くもんだな！」
「神樹館のコンビネーションは今も健在って事だな」
　等と話していると、少し離れた所で光が収束し大輪の華を咲かせるのが見える
「園子のやつ、初っ端から飛ばしすぎだろ」
「とりあえず、アタシ達も合流しよう」
　俺たち二人も園子たちの所に戻る
「さぁ、これがわっしー行きの船だよ、乗って乗って！」
「じゃ、お邪魔しまーす」
「カッコいいお船です！」
「なんか東郷やアンタのだけずっこくない？」
「私のが一番カッコいいわよ！」
「満開の形は変わってないんだな」
「流石にそこまで変える余裕はないんだろ」
　とりあえず上に乗りこみ、いよいよ東郷の所に出発だ
「さぁ、このまま行くよー！」
　その声と共に、園子の船はブラックホールに向かって進み始めた

勇者の章，2―3　突入

園子が満開で出現させた船に乗ってブラックホールになった東郷の元に向かっている我ら勇者部一同……なのだが

「みんな！　乗り物酔い大丈夫!?」

「酔いって言うか……普通にヤバいよこれ……」

ただでさえ壁の外って言う今までとは全く違う環境いるのに加えて、台風以上の暴風に襲われている現在……正直飛ばされないようにするのが精一杯だ。などと考えていると風の中からバーテックスが複数現れる

「！　仕掛けてきたか」

「あいつらもしかして、ここ守ってるの……」

「うーん、囲まれちゃってるねぇ」

「私が東郷さんの所へ行くよ」

「ちょっと、大丈夫なの!?」

「大丈夫、絶対一緒に戻ってくるから」

「それなら、俺も一緒に――」

「徹くんは、皆と一緒に私と東郷さんが帰ってくる場所を守って……お願い」

俺の方に視線を向けてきた友奈は、どうやらいつもの絶対に自分を曲げないモードに入ってしまっているみたいだ……押しに弱いのはいつもの事だが、今回ばっかりは仕方ない

「わかった、でも……前みたいにあんま待たせないでくれよ?」

「わかってる」

「ちゃんと帰ってきなさいよ、友奈。部長命令！」

「邪魔してくるのは私たちで叩いちゃいますから！」

「あんなもんの中じゃ、何が起きても不思議じゃないわ！　気合いよ！」

「ゆーゆ。わっしーの事、お願い」

「アタシからも、須美のこと、絶対連れ戻してきて」

「うん。任せて、園ちゃん！　銀ちゃん！」

「よーしっ！　それじゃあ、一気に行くよー！」
改めて前を向いた園子は、今までよりも速度を上げてブラックホールの中心部まで向かう、程なくして突入をしても問題ない範囲まで到着したのを見た友奈は改めて俺たちの方を振り返る
「それじゃ、行ってきます！」
その言葉を最後に、友奈は船から飛び降りてブラックホールの中へと入っていった

東郷さんを助ける為に、私はブラックホールの奥に進んでいく。バリアで守られているけれど、それでも周りの重力が私を押しつぶそうしてくる
「……っ！」
後ろからバーテックスが向かって来たけれど、重力に耐えられず潰されてしまった。もし途中でバリアが切れてしまったら私もああなってしまうのだという事を理解すると、恐怖で身体が震えてしまう……けど、怖がってる場合じゃない
「東郷さん……」
助けるんだ、絶対に、戻るんだ、みんなの所に
その思いだけでブラックホールの中を進んでいると、突然視界が真っ白になった
「え――？」
真っ白だった視界が元に戻ると、私がいたブラックホールの中じゃなかった。それに目の前にあるのは私の身体
「ゆ……幽体離脱!?」
初めての経験にビックリしていると、私のほうに向かって火の矢？みたいなものが降ってきた。咄嗟に受けの姿勢を取ったけれど、火の矢は私の身体に当たり、その部分が焼けるように熱くなる。痛みを感じた瞬間、直感的に理解する
「――もし私が砕けたら、身体は、このまま」
何処とも知らない場所、何が起こるのかわからない場所で――そん

なことを考えていると、私の目の前に、水の雫みたいなもの。横を通り過ぎようとする雫の中には東郷さんが映っていた。それを見た私が咄嗟にその雫に触れる

――そのっちが私たちの中学に来てから、大赦にとって予測してない事態が起こっていた

「これって……」

――私が結界の一部を壊してしまった事で、外の火の手が活性化してしまっているのだ。このままでは外の炎が世界を飲み込む、大赦が進めていた反抗計画を凍結し、現状を打破する必要があった

「今見えたのは……東郷さんの記憶。東郷さん、やっぱり中にいるんだねっ！　他には――」

どうして東郷さんが私たちの記憶から消えたのか、この場所のどこに居るのか、それがもしかしたらわかるかも知れないと思った私は、近くにあった別の雫に触れる

――火の勢いを弱めるには、奉火祭（ほうかさい）しかない。それは、神の声が聞こえる巫女を外の炎に捧げ、天の神の許しを請う。昔、西暦の終わりにも行われた生贄の儀式である、と……

――今、大赦でお役目を果たしている巫女達数人が、生贄のお役目に選ばれた……だけど、私でもその変わりが出来るという。私は勇者の資格を持ちながらも巫女の力を持つという、唯一無二の存在だとか

――悩むまでもない、結界に穴を開けたのは私だ。私は償わなければいけない。友奈ちゃんやみんなが無事なら、私一人なら……

――私がいなくなれば、きっとみんなが私を探す……そうしないように、神樹様、お願いします……

「東郷さんはいつも突っ走るなぁ、自分をいないことにしちゃうなんて……でも、約束したもん。東郷さんを一人にしないって――だから、何度でも、助ける!!」

瞬間、私の視界は、再び真っ白になった

勇者の章，2―4　再会

私が目を覚ました場所は、前に一度だけ来たことのある場所だった
「やっぱり、あの時の場所だ」
満開を使った私が、みんなの所に帰る前にいた場所……あの人達から〝生きろ〟って言うバトンを受け取った場所
「東郷さんっ！　……それに、不知火さん!?」
周りを見回してみると、そこには鏡みたいなものに埋まってる東郷さんと、全身を槍に貫かれた状態の不知火さんの姿があった、どうして不知火さんまでここに居るのかはわからなかったけれど、ひとまず東郷さんの方に視線を向けて――私は呆然としてしまった
「これ……なに?」
鏡に埋まってる東郷さんの後ろには、私と同じ状態になっている東郷さんが焼かれていた。多分このまま放置していたら東郷さんは帰れなくなってしまう。そう思った私は東郷さんの身体を掴んで、引き戻そうとする
その瞬間、胸に激痛が走るけど、そんなの――
「構わないッ！　東郷さんを放してッ!!」
自分がどうなったとしても、絶対に東郷さんは……東郷さんだけは

――

「帰ろうっ！　東郷さん!!」
全力の力で引っ張ると、鏡から東郷さんの身体が抜けた
「やった、これで――っ!?」
直後、私の身体に激痛が走った――

ここは、何処だ?
目を開くと、そこには途方もない闇が広がっていた
――俺は

確か俺は、東郷を助ける為にブラックホールの中に突入して……東郷を見つけたすぐ後に、そらから降ってきた槍に身体中を貫かれて

――あぁ、そうか……ついに逝っちまったのか。俺

まさか、こんな所で逝くことになるとは思わなかった。しかも天の神に殺されるとか……なっさけねぇな

「なーに納得しちゃってんの？」

誰かの声が聞こえる、随分と聞いていなかったのにやけに耳に馴染む声……けど、それが誰なのか思い出せない

――納得も何も、アレで死んでないって方が無理だろ

「何言ってんの、殺しても死なないでしょ。要は」

――そりゃそうだ……でも、現にこうして死んじまってる。体も動かねぇし、頭も回んねぇ

「全く、なっさけないなぁ。伊達に長生きしすぎたんじゃないの？」

――そうかもな

「まーたそうやって諦めてる、ほら。シャキッとしなって」

さっきから何なんだ、ボーっとする意識を無理やり引き留める誰かがいい加減鬱陶しくなってきた

――さっきから知ったような口きいてるけど誰なんだよ

「うっ、何となくわかりきってたけど流石にその台詞は堪えるなぁ……流石にショックだわ」

その言葉を聞いてすぐ、動かなかった筈の身体に誰かが触れる

「ねぇ、要……なんかイラついてるのは分かるけどさ。それでも、忘れちゃいけないものがあるんじゃない」

――忘れちゃ、いけないもの？

確かにあったのかも知れないが、今はただ……この感覚に身体を

「お願い、私の事……忘れないでね」

あった、そうだ……忘れちゃいけない約束（もの）が、忘れちゃいけない人達（きずな）が、俺にはある

「目に生気が戻ったね。それなら行こっか、苦しんでる後輩を救いに」

――そうだな、仕事納めにはまだ早かった

闇が晴れ、周りに光が溢れ出す

「久しぶりだな、イマジナリーじゃないだろ？」
「当たり前でしょ、正真正銘本物の雪花さんです……まぁ、精神体だけどね」
「精神体でも、また逢えてうれしいよ」
「随分デレるね、こっちまで気恥ずかしくなる」
懐かしい人との懐かしい会話だが、あんまり長話をしている時間はないだろう。今の俺も精神体ではあるが気を失ってる本体（にくたい）を通して外の様子は分かる
「結城のやつ、随分と無茶をしてるな」
「要も人のこと言えないでしょ」
「それもそうだな……よし、それじゃあ行くか」
「オッケー、久々に気合い入れますか」
その言葉と共に、光の扉が現れ……俺と雪花はそこに向かって一歩踏み出した

痛い、痛い、痛い
痛みで気を失っちゃいそう、でも……帰らないと
「そうだな」
誰かの声が聞こえてきて、痛みに耐えながら目を開くと、そこには見慣れない槍を持った不知火さんが立ってた
「しら……ぬいっ……さ――」
「すまない、辛い役回りをお前ひとりに押し付けてしまって……だから、できるだけお前に降りかかる厄災を俺に移す。できるよな、雪花？」
『できない事はないけど……正直、要が傷つく姿はもう見たくないんだけど』
「今更だろ、頼む」
『仕方ないなぁ……わかったよ』
不知火さん以外の誰かの声が聞こえてからすぐ、私の身体から痛み

が少しずつ引いていく
「ぐっ……この程度、ならッ！」
ある程度まで痛みが引き、声をかけようとしたところで何かが割れる音共に空間そのものが光に包まれ、私は意識を失った

目を覚まして一番最初に目に入ったのは、友奈ちゃんや徹くん、それに勇者部みんなの顔
「やった！　目が覚めた！」
「わっしー！」
「全く、心配かけさせやがってもう」
「みんな……ここ……」
「あんた数日寝てたのよ」
風先輩の言葉を聞いて、私のいる場所は壁の外ではないのだと理解する
「助けて……くれたの……？」
「うん！」
「でも、このままじゃ……世界が火に……」
私がやらないと、このままじゃあ世界が――
「事情聞いたわよ。火の勢いはもう安定したから、生贄は必要ないってさ」
火の勢いが安定した、それって、もしかして誰かが
「誰か、代わりの人が……」
「違うわ。東郷、普通なら死んでる位の生命力をごっそり奪われてたんだって。それできっとお役目を果たしたのよ。でもタフだからまだ生きていた。で、私たちが間に合った。そんな感じみたい」
「いっぱい身体を鍛えててよかったねー」
「どこも以上なしみたいです！」
なんだか、まだ夢の中にいるみたいだ
「本当に、私助かったの……？」
「そうよ、セーフ！」

「お勤めご苦労様。まぁ、もうしばらくは病院でしょうけど」
「相変わらず、無茶ばっかりしやがって……けど、無事で良かった」
「これで改めて、勇者部全員集合だぜー！」
「みんな……」
「東郷さん、ごめんね」
本当に、助かったんだ。そんな気持ちを感じていると不意に友奈ちゃんが謝ってきた、謝られることをした覚えなんてないのに
「東郷さんの事、絶対忘れないって約束してたのに、何日か忘れちゃってて……」
「私のほうこそ、ごめんね。そんなに心配させて……」
「仕方ないよ、多分私でも同じようにしてたよ」
「次からは全部話しなさいね」
「まぁ、お互い様という事で良いんじゃない？　私たちも忘れてたし」
「それでも、皆思い出してくれた……夢じゃないのね……」
「あぁ、夢じゃない。俺も友奈も、みんなこうして一緒に居られてる」
夢みたいな状況でも、夢じゃない。みんなの温かい気持ちが今この時が現実なのだと教えてくれた
「一件落着ね」
「よーっし、これで全員揃ってクリスマス、それに大晦日にお正月だぁ！」
「遊ぶことばっかじゃない」
私は、日常を取り戻すことが出来た。その安心感で……私の胸は一杯になった

その日の夜、シャワーを浴びている友奈の胸には、半分になっているが太陽のような紋章が刻まれていた——ならば、もう半分は誰に映ったのか
未だ、日常の中に禍根は潜んでいる

勇者の章，3―1　現状

　目を覚まし、最初に目に入ったのはいつぶり以来かの見慣れた天井
「あー、そうか……帰ってきたんだっけな」
『あっ、起きた。おはようさん』
「……雪花？」
『はい、雪花さんですよ』
　一瞬頭がフリーズしかけるが、そういえばで思い出した。東郷を助けた時に雪花と再会したんだっけか……まぁ雪花の方は精神体だけど――
「――って、ちょっと待て。お前が俺に話しかけられたのってあの場所だからじゃなかったのか？」
『ん？　あー……っとねぇ、それを説明するにはまず今の要の状況を知ってもらわないといけないんだけど』
「俺の状況って、胸に出来てるこれのことか？」
　来ていたTシャツを軽く捲り上げて、左胸に浮かび上がってきた紋章を見せる。それを見た雪花は頷くと改めて言葉を続ける
『そう、それのこと。最初に行っておくとね、その紋章は天の神のタタリなんだ』
「天の神のタタリ？」
『そう、正確にはタタリの半分って感じかな。もう半分は多分――』
「結城の所か」
『多分だけどね』
　天の神のタタリ、雪花がどうしてそんなことを知ってるのかも気になるがまずはこのタタリにどんな効果があるのか
「それで、このタタリってのはどんな効果があるんだ？」
『そこまでは私もわかんないかな。天の神のタタリってわかったのも私から見てる要がヒビだらけってのとあの時の状況から推測しただけだし』
「成る程な……ってちょっと待て、俺がヒビだらけ？」
　どういうことだ、確かに一時身体が崩れそうにはなってたがそれは

神樹に直されたはず
『そ、それでここからが私が要に憑いてる理由』
　その言葉のすぐ後、雪花はいつものどこか飄々としている雰囲気ではなく真面目な雰囲気になる
『私が要に憑いてるのは、魂の崩壊を止める為』
「魂の崩壊？」
『うん、今の要は今まで受けてた呪いに呪いが重なって本来とは違う効果が出ちゃってるんだ』
「本来とはって事は、今の俺は普通に怪我するし普通に死ぬって事か？」
『そういう事、元々の呪いの効果は消えて別の効果が出ちゃってるの……それが魂の崩壊』
「とりあえずそれは理解できた……それでさっきから言ってる魂の崩壊ってのは言葉通りで良いのか？」
　言葉通りであるのなら俺の魂は少しずつ崩れて言っているって感じになのだろうか
『要が考えてるよりも事態は深刻だよ』
「考えてること読めるのか、今のお前」
『まぁね、今の私は要と一つだし……ってそうじゃなくて、今の要は魂そのものが壊れかけをギリギリ維持してる状態なの、だから今までみたいに無茶はしないで』
「壊れかけをギリギリ……か」
　そんなの今更な気もするけど、決定的な違いは今の俺は普通に怪我するし、その怪我もすぐには治らない。即死級のダメージを負っても復活できない
「簡単に言うと残機が一気にゼロになった感じか」
『なんか認識が軽いなぁ、言っておくけど私が憑いてなかったらあの場所で魂が粉々に砕けちゃってたんだからね』
「それに関しては感謝するけど、この性分は今更直せないぞ」
『そのための私ですよ、他の人でも良かったけど最終的にはみんな要の無茶をオッケーしちゃいそうだし』

信用されてるのかされてないのかよくわからないが、まぁ今やるべきことは一つか
「それじゃあ雪花、行くか」
『行くってどこ……あぁ、あの子たちの所ね』
「とりあえず結城達がどうなのかを確認しときたい」
『オッケー、それじゃさっそく向かいましょうか』
そこから着替え終えた俺は、横で浮いている雪花と共に事務所を出て讃州中学へと向かおうとしたところで――

『そういえば要、学校側に連絡とか入れなくて良いの？』
「……忘れてた」
雪花にそう言われて事務所に引き返し、連絡を入れた
「よし、それじゃあ改めていくか」
『再度オッケー、それにしても要なんか雰囲気変わった？』
「伊達に長生きしてないからな、嫌でも丸くなる」
『そー言うもんかなぁ』
「そー言うもんなんだよ」
なんというか、もうすることはないだろうと思っていた雪花との会話がまたできているという事実が少しだけ嬉しくなる。天の神の中……と言っていいのかわからないが、あの空間や俺の意識の中だけじゃなく、こうして隣で歩きながら会話ができる。その事実で俺の心は少しだけ温かくなる
『あのー、流石にそこまで言われると流石の私でも照れる』
「……そういえば、今のお前は考えてること読めるんだったな」
すっかり忘れてた、あー恥ずかしい
『……まったく、要は雪花さんの事好きすぎでしょ、しょーがないなぁ！』
「俺と別れるときに〝私の事忘れないで〟なんて未練がましいセリフ残したのはどこの誰だったっけ？」
『そ、それは確かに私ですけど……要も要で私の事引き摺り過ぎでしょ!?　何イマジナリー雪花さんって、すっごい恥ずかしいんだけど

!?』

「何年……というか何百年も前の事を掘り返すなよ、恥ずかしい！」

『要にとっては何百年前でも私にとってはほんの数年前ですしー、全くしょうがないな恋人出来そうなのに作らない所為で純情こじらせてる要さんは』

「やかましい、アクロバティックコミュ障」

『私コミュ強ですけど！　どこがコミュ障だってんですか』

「ムードメーカー装ってるのに全然他人に心開かない所」

売り言葉に買い言葉、頭に来るが楽しい会話を続けながら。俺たちは讃州中学へと続く道を歩いていく

勇者の章，3―2　確認

さてと、讃州中学に向かっている途中な訳だが……そろそろクリスマスだからか飾りつけも多くなってきた
「しっかし、こうなると嫌でもクリスマスってのを実感するな」
『なになに？　要はなんかクリスマスに嫌な思い出でもあるの？』
「嫌って言うか、単純にもう一年の終わりだなぁって思ってるだけだよ」
『ふーん、それもそっか。要恋人いなかったしね』
「うっせ」
そんなことを話しながら雪花と二人で話していると目の前に見知った車が止まっているのが見える
『どしたん？』
「知り合いが俺に用がみたいだ」
とりあえず車に近づいて運転席の窓を叩く、そうしてからすぐ運転席のサイドガラスが開いて春信の顔が見える
「珍しいな、こんな所で」
「……少し、耳に入れておきたいことがあって」
「耳に入れておきたいこと？」
「えぇ。どこかに行くのならお送りしますよ」
「それなら頼む」
耳に入れておきたいという話を聞くがてら春信に讃州中学に送ってもらう
「それで……耳に入れておきたいことってのは？」
「神樹様のことです」
「神樹の事？　随分と珍しいがそんな急を要することなのか」
「えぇ……実は――」
春信から聞いた言葉は、俺にとっても衝撃の言葉
「――神樹様の寿命が……尽きかけているようです」
「寿命が……尽きかけてるっ!?」
神樹の寿命が尽きる。つまりこの世界を守っている存在がいなく

なるという事……それは世界の終わりが近いってことになる
「……それで、大赦の上の方はなんて？」
「今はまだ、今後の対策を話し合っているらしいです。上里さんにも情報は入っていないと……」
「現状で出来る打開策はなし……か」
神樹は名前の通り神様の集合体、人の身で出来ることがない以上どうすることもできないって所だろうな。けどまぁ、何をするってのが明確に決まってない以上俺も動きようがない
その後、讃州中学の近くまでやってきたところで車を降りる
「ここまでありがとな」
「気にしないでください。他の情報が入ったらまた連絡します」
『なんというか、まさかの話だったね』
「……そうだな」
規模がデカすぎてどうしようもないってのが本音だが――
「大赦は一体どうするつもりなんだろうな」
『さぁね、でも碌な事考えないって思ってるでしょ？』
「そりゃあな、今までの推移を見ちまってると嫌でもな」
『そう考えると、長生きをするもんじゃないって感じだね』
ホントにそう思うよ……本当に

「ねぇ友奈、飾り付け曲がってない？」
「……うん。大丈夫、大丈夫」
東郷救出を終え、無事メンバー全員が復帰した讃州中学勇者部も今やすっかりクリスマスモード。東郷は公式サイトをクリスマス仕様に変えていたり、友奈たちはクリスマスツリーの飾り付け、そして園子と風先輩は受験勉強……書くいう俺と銀はと言うと
「徹、今日はなんかやる事あったっけ？」
「今日は特になんもないな……クリスマス近いし依頼も打ち止めっぽい」

そう、俺や銀は特に何をするでもないのでボーっとしているだけである

「そういえば、何だかんだ言ってこうやって平和なのも久々かもね」

「あー……言われてみれば確かに」

「確かに、そうかもね……それより。何あの眼鏡」

「視力が落ちたそうです」

俺と銀の会話に入ってきつつ、ずーっと気になっていた風先輩の眼鏡について触れた。視力が落ちる程勉強してるって……そこに来年の自分の姿を幻視して少し嫌になる

「大変ね受験生、部室でまで勉強？」

「先週は色々大変で、勉強どころじゃなかったからねぇ。取り返さないと」

「陳謝ッ！」

風先輩の言葉を聞いた東郷が、目にも止まらない速さで土下座した。先週の云々に関しては東郷ブラックホール事件であるため本人からしたら申し訳なさで一杯らしい

「あぁもう！　そう言うつもりで言ったわけじゃないの!?　気にしないでっ！」

「受験よりブラックホールの方が急務だからねぇ」

「陳謝ッ!!」

「「「あぁっ！」」」

自責の念で腹切りしようとしてる東郷を友奈たち四人で抑え込んでいるという光景を見ながら、騒がしい勇者部が戻ってきたことを嬉しく思いつつ、怪我しないように東郷の手からカッターナイフは回収しておく

「まる、まる、まる、まる、まるっと。よーし、最後の問題もはなまるはなまる、ふーみん先輩全問正解だ」

「いよっし、流石私っ！」

「アタックチャーンス」

「何が？」

「正解すると、女子力が二倍になります」

「やります」
　なんというか、本当に騒がしくなったなと思いつつ眺めているとスマホに連絡が入る……相手は、師匠？
「どしたん？　徹」
「いや、師匠から連絡、校門まで来たから迎えに来てくれだって……ちょっと行ってくる」
「おう、いってらっしゃい」
　とりあえず勇者部の部室から出て、校門まで向かう。冬も冷え込んで寒くなってきた何て思いつつ校門までやってくると少し厚手のコートを着ている師匠の姿が目に入る
「師匠ー！」
「おう、何だかんだ久しぶりか？」
「先週ぶりですねぇ」
「意外と直近で会ってたな」
「ボケるには早すぎるんじゃないですか？」
「うっせ」
　師匠とそんな話をしながら部室まで向かっていると、ふと気になったことがあったのを思い出した
「そういえば師匠、今日はどうしてウチに来たんですか？」
「ん？　あぁ、先週色々あったからな。病気でもこじらせてないか様子見に来たんだよ」
「大袈裟ですよ、これでも俺たちバーテックスを倒して東郷を救出した実力者ですよ？」
「それもそうか」
　久々の師匠とのやり取りをしつつ、一緒に部室まで戻った。師匠はみんな元気そうなのを確認したらお土産だけおいてさっさと帰ってしまったけれど……というかこれ確認の為に来たんならホントに少し心配性が過ぎる気がする
　勇者部からの帰り道、俺は隣を漂ってる雪花にどうだったかを聞く

「雪花、どうだった？」
『間違いないね、半分は結城ちゃんのことろにあったよ』
「やっぱりか」
あの場にいたのは東郷を除くと俺と結城の二人だけだったからそうだとは思ってたが……
『それより要、このままで良いの？』
「良いって、あのタタリのことか？」
『うん、流石に放っておくって選択はしないでしょ？』
「そりゃあな、とりあえず俺に出来ることは探してみる」
曇り空を見上げつつ、帰り道を歩く……無茶しなきゃいいなら、その範囲でやれることをやるだけだ

勇者の章，3―3　不調

「もー、こんな寒いときに何でマンションのエアコン壊れるかな」
　讃州中学勇者部は、今日も今日とて平和……という訳ではなかった
「私も昨日は、急に電灯が切れてとても困ったの」
「二人とも大変だったんだね」
「そう、災難よ災難」
「そんなことくらい、ウチなんて昨日、樹がカギ落として寒空の下二人して大変だったんだから」
「ちょ、言わないで」
「にしても、揃いも揃って災難って、嫌な偶然ですね」
　今この場にいないメンバーが揃いも揃って、ちょっとした災難にあっている。年の瀬だって言うのに嫌な話だし今までの出来事が出来事な所為で嫌でも疑り深くなる
「園子参上なんだぜ～」
「三ノ輪さんちの銀さんもさんじょーう」
　残りのメンツもやってきたようで目を向けると園子は手に包帯巻いてるし、銀は足に湿布を張ってる
「園子さん、その手」
「おぉ、大丈夫大丈夫。こうしてサンチョを被せれば――」
　手に持っていたサンチョに自分の手を食わせる
「あってないようなものシュレディンガー」
「一体どうしたのよ」
「今朝ポットで火傷したんだ」
「大怪我じゃなくてよかったわ」
「うん、小怪我～」
「銀は銀で、転びでもしたか？」
「いやぁ、実は学校来るときタンスにぶつけちゃって、こっちも小怪我だから問題なし！」
「はぁ、揃いも揃って師走に碌なもんじゃないわね。勇者部全員厄払いにでも行った方がいいんじゃない？」

「ちょっと、縁起でもない事言わないでよ……でも必要かも知れないわね」
「俺、別になんにもありませんでしたけど」
けどここまで一斉にみんなが怪我とか災難に襲われる……となると流石に少しだけ違和感を感じる、なんというか俺たちの知らない所で何かが起こってるのでは……そんな気がしてくる
「うーん……」
「徹くん、どうかしたの？」
「いや、なんか引っかかるというか……魚の小骨が喉に引っかかってる感じ？」
「変に疑り深くなってるだけじゃないの？」
「そうなのかねぇ」
「そういえば、友奈ちゃんは何もなかった？」
「っ、うん、平気」
「良かった、友奈ちゃんにまで何かあったらいよいよ何か怪しいものね」
「また、大赦か―って――」
東郷とそうやって話をしていた友奈の表情は少しだけボーっとしてるような、変に何かを隠そうとしているような。そんななんとも言えない感じを受けたけれど、その感覚も園子の一言で吹っ飛んでしまった
「いやいやいや」
「流石の大赦でもそこまで出来る訳ないだろ？　な、徹」
「そ、そうだな、ないない」
「だよねー」
そうは言うもののどうにも変な違和感が拭いきれない気がする
「はいはい、それじゃ、それぞれ持ち場につけ―」
風先輩の一言で俺たち勇者部メンバーも部活モードと言うことで、溜まってる残りの仕事にとりかかった。その途中で友奈と風先輩が一度部室から出て行ったが……何かあったのか？

ウチの仕事場兼自宅である事務所、見た目は只の一軒家なのだがこの一軒家は地下室が存在するのが最大の強みだったりするのでここを選んだってのがある……そして、ここに置いてあるのは西暦から今に至るまで色々な場所で集めてきた資料たち。その一部は四国に来るときウチの実家に寄って持ってきた物も存在している

『随分埃っぽい所だねー、書斎？』

「というより資料室だな、伊達に長生きしてる所為でその手の資料は腐る程ある……まぁ、読めるかどうかは置いておくとして」

『殆ど読めなかったら、それは流石に要の管理が杜撰なんじゃなーい？』

「んなこたどうでもいいんだよ、それじゃさっさと探すとしますか」

こういうのは最新の資料探すよりも先人の知恵を使った方が有効な場合が多いからな、今まで眠らせちまってた分も含めてしっかり仕事をしてもらおう

「とりあえず、最初は大赦のかき集めた資料から――」

そこから置かれてる本棚の中、ちゃんと年代別に纏めてる資料の中でも神世紀の割と古い方に目を通していく

「やっぱ神樹関係の祭りごと系は多いけど、それ以外はあんまりだな」

『今回のは神樹って言うか、バーテックス関連だし。天の神関連の記録とかないの？』

「天の神系の資料か……」

神世紀入ってから結構時間経ったときに、天の神……というかバーテックスを信奉してるアホどもが起こした事件があったが、そっち系の資料何処に置いたっけな

『探すだけなら私でも出来るし、いつ頃か位教えてくれれば探してくるよ』

「助かる、確か――神世紀７２年くらいだった筈」

『了解、それにしてもよく覚えてるねぇ』

「一応、知り合いの名前とかは覚えとくようにしてるからな」
　72年は、特に嫌な事件があった所為で余計印象に残っちまってる……それに丁度弥勒家とかを知り合ったのもそのころだったはず
『あっ、要要、ここら辺のとかそうじゃないの？　白神教事件記録』
「そこら辺っぽいな、少し見てみるか」
　そこから白神教事件記録、主にそこで起こったテロ事件だったり白神教の関わってると思わしき事件の記録をまとめた資料で情報探しをしていると少しばっかしだがバーテックスと天の神に関する資料が出てきた。
「ここら辺だな、それじゃもうひと踏ん張り――」
　しますか、という前に机の上に置いてあったスマホから着信音が鳴る
「八重樫？」
『八重樫って、確か要のお弟子さんだよね？』
「あぁ、基本メールだから滅多なことがないと電話かけてこないんだが――もしもし、なんかあったか？」
『師匠ッ!?　風先輩が……風先輩が事故に遭って！　それで――』
「とりあえず落ち着け、俺もそっちに向かうから。場所は？」
『今は、病院で治療を』
「わかった、すぐ向かう」
　八重樫の電話を切ってすぐ、一旦資料はそのままにして病院まで向かおうとしたところで……不意に体の力が抜ける
『要ッ！』
「っ――大丈夫、それより急ぐぞ」
　それも一瞬だった、なら特に気にする必要はない……そう思い俺は犬吠埼姉の運ばれた病院に向かう

勇者の章，3―4　安否

18時37分

俺が病院まで到着した後、受付で八重樫たちの居る場所を聞いてそこまで向かうと、こっちを向いた八重樫が声をかけてきた

「師匠……」

「容体は？」

「まだ何とも……」

「そうか」

他の奴等の様子も少し確認してみるが全員が全員、心配って感じ。正直自分の先輩がこんなことになっちまって心配すんなって方が無理な話だが……などと考えていると少し息を荒くした結城もこっちに合流する

「みんな――」

「友奈ちゃん」

「風先輩はっ」

勇者部の奴等が見たのは緊急外来と書かれている案内板。予断を許さない状況なのかそれとも――

19時46分

そこからは会話をするでもなく、ただ時間が過ぎていくのを待っていた俺たちの耳に聞こえてくるのは何かを押す音、緊急外来からこっちに向かってきてるって事は多分手術が終わったのだろう。そう予想していると案の定かなり重症だが意識ははっきりしてそうな犬吠埼姉の姿が俺たちの目に映る

「お姉ちゃん」

「いや、参ったまい――っつ」

大丈夫そうに振舞おうとしても今回の事故の痛みが抜けきってないのか、痛みで僅かに顔を歪めた。それを見た勇者部のやつらは心配そうに犬吠埼姉の事を見ていると、あっちもそれに気が付いたらしく改めて話始める

「大丈夫、大丈夫だから。いきなり飛び出してくるんだからなぁ、信号無視すんなっての」
「でも――」
「樹……みんなごめんね、不知火さんまで……」
「気にすんな、一応顔見知りが事故ったって八重樫から聞いたからな」
「まったく、人騒がせなのよね」
「ちょっとは労わりなさいよ」
彼女が無事だってのがわかったからなのか、心なしか張り詰めてた雰囲気が柔らかくなった気がする
「あの、命には……」
「それは大丈夫だから、大袈裟ねぇ」
「でも、受験生になんて酷なことを――」
「それは言わないでっ、試験は受けるから、絶対受けるからっ」
「入院するんでしょ」
「ほんの一二週間だからっ！」
「病院内ではお静かに」
「ぁぃ……」
彼女の寝ている台を押していた看護師は、犬吠埼妹の方を見ると声をかける。どうやら入院の手続きや諸々があるらしい、時間も時間だし流石にここで解散、見舞いは後日になるだろうって事で勇者部の奴等と別れた俺は一人というか正確には人間一人に幽霊一人となったのだが――
「妙だな……」
『妙って、もしかして事故のこと？』
「あぁ、彼女たちは勇者システムを持ってる以上、命の危機に瀕するようなことが起きる場合は勇者になってなくても精霊が守る筈なんだが――」
ｃｏｌｏｒ：＃４ｆ０５９５》『今回あの子は事故に遭って重傷の怪我』《／ｃｏｌｏｒ》
「そう言うことだ……けど、考えるより先に聞いてみた方がいいか」
そう言うと帰り道を歩きながら冬馬に電話をかけると、２コールで

電話は繋がる
「もしもし、冬馬か。実は――」
『バリアの件ですよね、今こっちでも調査をしてる所です』
「そっちでも調査って事は、バリア自体に不備があったわけじゃないのか？」
『えぇ……と言いたいところですがアップデートの際にシステムエラーが出てる可能性も否定できないので今夜は徹夜で確認作業です』
念には念をって所か
「わかった、それじゃあ何かわかったらまた連絡頼んだ」
『わかりました』
電話を切って、とりあえず一息つく
『あっちはあっちで大変そうだね』
「そうだな……けど、エラーかどうかまだわかってない以上――」
『十中八九タタリだと思うけど、私は』
雪花からその言葉を聞いた後、やっぱりその可能性が高いかなんて思いつつ再び足を動かして事務所へ続く道を歩く
――パキリ
何処からか、そんな音が聞こえてきた気がした

風先輩の安否もわかった病院からの帰り道
「道路交通法違反、許せない」
「命に別状がなかったようなものの……」
「精霊は何をしていたのかしら」
「うーん……」
「あまりのスピードで間に合わなかった、とか？」
「流石にそれはないだろ」
信号待ちをしながらそんなことをみんなで話している訳だが、精霊バリアが動かなかったのはなーんか変な感じがする
「もしみんなの身に何かあったら、私正気じゃいられない」

「東郷……国防仮面もブラックホールももうなしだからね」
「くっ」
「ホントやめて」
「あはは、須美はいっつも極端だからなぁ」
「銀、それどういう意味？」
「えっと、あはは……」
「もうっ」
「……」
「友奈？」
「へっ、何？」
普段と変わらない調子だったが、俺たちの少し後ろにいた友奈の様子が可笑しい気がしたから話しかけてみると、彼女はハッとした様子で顔を上げた
「具合でも悪いのか？」
「う、ううん。そんなことないよ」
「友奈ちゃん、怪我や病気にはしっかり気を付けてね」
「うん」
丁度そのタイミングで信号が赤から青に変わる。園子、銀、夏凛の三人とはここで別れて俺、友奈、東郷の三人は自分の家がある方に向かって歩き出す。少し後ろに視線を向けると友奈の方を見てた園子が少し不思議そうな顔をしていたのが気になったが。流石に時間も時間だしまた部活の時にでも聞くことにしよう

勇者の章，幕間

　犬吠埼姉の事故から数日、こっちはこっちで情報を集めているが主だったせいかを得ることは出来ていない。白神教関連の資料にも天の神に関する信仰、そしてその力の研究の情報は残されていたが肝心のタタリ関連の情報は一切記載されていなかった
「……いよいよ手詰まり感が出てきたな」
『だねぇ、ビックリするくらい情報ないね』
「残りはご先祖の資料だけなんだが……経年劣化激しすぎて読めたもんじゃねぇしな」
『他の情報ソースって言うと、やっぱり大赦じゃないの？』
「あの組織がこっちに情報回してくれるとは思えん」
　長生きした都合上、俺の立場は結構上の方らしいんだが名前だけってのが真実で権力的には何も持ってないのが真実……さてと、本格的にどうしたものか、そんな風に考えていると机に置いてあるスマホに着信が入る
「冬馬、って事は勇者システムの調査終わったのか」
『そういえば、全く連絡なかったっけ』
「あぁ、思った以上に難航してたっぽくてな……もしもし？」
『不知火さん、お疲れ様です』
「そっちもお疲れさん、それで勇者システムのことか？」
『えぇ、実際に見てもらった方がいいと思うので、こっちに来てもらっても良いですか』
「構わねぇよ、すぐ向かう」
　勇者システムのソースコードに何かしらの不具合が見つかったのか、それとも何か別の要因が見つかったか。どっちにしろ実際に見た方がいいって本人が言ってるのだからそっちの方がわかりやすいのだろう
　善は急げ、事務所から出た俺はさっそく大赦まで向かう

事務所からバイクを走らせること数時間、神社の本殿みたいな建物の方に向かっているとYシャツにビジネスズボン、それに白衣を羽織っていかにも研究者みたいな見た目の冬馬が手を上げてくる
「顔合わせるのは久しぶりだな」
「そうですね、それじゃあ行きましょうか」
冬馬と一緒に研究室までやってくると、早速パソコンの方まで案内される
「ここです」
「これ、どうなってんだ?」
ソースコードの特定の場所、恐らくバリアに関する場所がまっさらな状態になっちまってる、下手なプログラムの入力ミスってレベルじゃないなこれ
「見ての通りです、この部分だけコードが抜き取られたみたいにまっさらな状態になってしまってるんです」
「抜き取られたねぇ、そういえばバリアの仕組みってどうなってるんだ? システム側のプログラムと精霊の力を合わせてるってのは知ってるんだが」
「そういえば、説明してませんでしたっけ」
「あぁ、聞いた覚えない」
勇者システムのアップデートに多少なりとも関わっているのだが詳しいところはノータッチなのだ、正直実際に動いて使用者の事を守れるならそれで良いと思ってたし
「それじゃあ、改めて簡単に……精霊バリアのプログラムはあくまでも精霊の補佐をするものなんです」
「補佐?」
「はい、バリアを張るのはあくまでも精霊のエネルギーです、システムはそれを正確に張るためのサポートをしてるだけなんです」
バリアを張るのが精霊なら犬吠埼姉の事故の時はどうして精霊はバリアを張らなかったんだ……いや、この場合は張らなかったんじゃなくて張ることが出来なかったって考えた方がいいのだろうか
「ともかく、そのサポートする部分のシステムがごっそり消えちまっ

てるんだな」
「えぇ、バックアップは取ってあったんで今は修正済みです。それにしても前後の記録を見ると外から何かしらの干渉を受けた以外考えられないんですよね」
「干渉？」
「えぇ、ちょっとこれ見てもらっていいですか？」
　次に飛羽真が見せてきたのは犬吠埼姉が事故に遭った日のプログラムの稼働記録、途中まではスリープ状態だったがバリア展開の座標軸の設定などを始めた瞬間。プログラムが急に止まり、そこで稼働記録も途切れている。そして記録が再び再開された時はバリアに関する部分が消失してしまっている
「この件春信たちには伝えたのか？」
「えぇ、一応上層部には報告済みです……何か対処をするとも思えませんけどね」
「そこら辺はひよりたちが動くだろう」
　今このタイミングで干渉をしてくる存在は天の神と見て間違いなさそうだが、どうして結城じゃなくて犬吠埼姉を狙った？　タタリを受けているのは結城だけじゃなかったのか、それとも俺の知らない何かしらによってタタリが発動するスイッチが入ったのか？　そもそもタタリの効果を知れない以上何がどうなってそう言う事態に陥ったのかを知るのは無理だ
「不知火さん？」
「……あぁ、どうした？」
「いえ、何か考えこんでるようでしたので」
「あーっと、少し厄介な依頼が舞い込んでな、どうするかって考えてたんだ……それじゃ、俺はそろそろ行く。情報共有ありがとな」
「えぇ、今後も何か分かったらお知らせします」
　冬馬と別れて研究室を出て外に向かって歩いていると、丁度前から見知った顔が歩いてくるのが見える
「あ～、不知火先生」
「乃木」

「こんにちは、ここで会うなんて珍しいですねぇ」
「そうだな、つっても俺はもう帰るところだが。乃木の方こそ、今日はどうしてここに？」
「私はちょっと調べもの～、そう言う不知火先生はなんで大赦まで？」
「冬馬からちょっと呼び出しを受けてな……それじゃ、俺はもう行くよ」

そう言って乃木の横を通り過ぎ、俺は大赦を後にした

勇者の章，4―1　御記

1月5日

時の流れと言うものは結構早いものでこの前までクリスマスムードだったのに今ではすっかり正月だ、犬吠埼姉も退院したようで昨日だか一昨日だかは勇者部全員で初詣に行ったらしい

『年明けなのに休んでない要さんは、年賀状？』

「三が日終わってるから普通に仕事だよ……それは置いといて世話になった人が多いからな、必然的に来る年賀状も多くなる」

『大変だねぇ』

「別に、長いこと毎年こうだからいい加減慣れる」

そんなことを言いながら年賀状を捌いていると、スマホの画面にメッセージ通知。送り主は乃木？

「珍しいな」

『要、あの子の連絡先持ってたんだね』

「あの子のご先祖さまとは戦友だからな」

『理由になってなーい』

そんな話をしながら乃木からのメッセージを開くと、今から乃木の家に来られるかという内容だった

『どうするの？』

「天の神の云々とかはかなり気になる所ではあるが、とりあえず時間は取れるし。行くか」

とりあえず今ある分の年賀状を片付けて、乃木の住んでるマンションに向かう準備をする

『そういえば要、住所知ってるの？』

「結構前にひよりに教えて貰ったから問題ない」

『プライバシー……』

一応本人には許可取ったらしいから問題ない……筈

乃木園子宅に集まった勇者部一同、どうして集まったのか、それは

昨日の初詣にてクリスマスと正月をまともに満喫できなかったという風先輩に満喫できなかった分をしっかり満喫してもらおうという訳だ

「えぇっ、八マス戻る」

「ふっふっふ、また引っかかったわね」

「八マスって、スタート地点……っ」

そして、現在はですごろくに興じている真っ最中なのである

「怪我でクリスマスとお正月が出来なかった私のために用意してくれたなんて、乃木い、ホントにありがとうねっ」

「だぁいせぃこうッ！」

「友奈もありがとね、入院してる間溜まってた依頼やってくれたんでしょ」

「えっ、あっ、私は……何かやってないと落ち着かなくて」

偏見だけど、友奈の言ったそのセリフは基本的に悩みを抱えてる人なければ出てこないセリフのはず……やっぱり何か隠してるんじゃ

「じゃなくて、元気が有り余ってるから！」

「……えっと、4進むっと。えっと、ふと人生をやり直したくなってスタートに戻る……ってなにこれッ!?」

「ふっふっふ」

「えい、いち、に。歌コンテストで優勝を逃すもディープなファンに支えられ百万円貰う……って園子さんこれ良いことなんですか悪いことなんですかっ!?」

「むふふ、秋から準備してたんよ、もういくつ寝るとって」

そう言いながら園子が樹ちゃんに渡したのはお手製の札束、流石園子、すっごい手が込んでる

「園子はこういうの張り切るからなー」

「小学校の時から割とそんな感じだったな、そういえば」

俺と銀もそんなことを話しつつ次の人を見ると手番は風先輩。ずっと額につけてた十回休み鉢巻を取りながら俺たちに向かってサイコロを見せてくる

「では、ここは部長の威厳で優勝をかっさらっていくとするかねっ！

てや！」
「「「「「「おぉー」」」」」」
風先輩の振ったサイコロの出目は六、最大値。その数分のますを風先輩の駒が進んでいくのだが……
「……車に跳ねられてお楽しみを全部失う、心のショックで十回休み……きーっ！　なにこれぇ!?」
「人生ッ!!」
「きょ、強烈な人生観ね……」
何ともまぁ……いや、乃木家の当主である園子だからってのもあるのかも知れないな。何だかんだ園子自身も縛りが多いだろうし
『園子様、他にお申し付けはございますでしょうか』
「ありがとー、でも今日は大丈夫だから」
「すごいねぇ、お手伝いさんがいるなんて」
「家を出るための条件なんよ」
「アンタも苦労してるのね」
「さてと――」
お手伝いさんがいなくなってすぐ、被っていた獅子舞を置いた園子はその足で家の奥の方まで向かっていった
「面倒なのもいなくなったし、ここからが……本番、よっと」
そう言いながら園子が持ってきたのは大きな包み、見た感じかなりの重量っぽいが大丈夫なのだろうか。そんな考えとは裏腹に園子は持ってきた包みを床にどさっと置くと、埃が舞い散る
「ちょっと、埃臭い……」
「ない、それ？」
「ほら、私複雑な事情で家に色々あるじゃない？」
「それは、確かにそうだけど……」
「またいきなりねぇ」
「それで、荷物の整理に行ったんだ」
「なんでまた？」
そう言った園子はチラリと友奈の方に視線を向けると、再び包みの中。乃木家の家紋が書いてある籠から何かを取り出す

「色々調べたかったしね」
「手の込んだ前振りだったけど、本当の目的はそれね」
　夏凛のその言葉を聞いた園子は取り出した一冊の本？　をじっと見た後に俺たちの方に差し出す。東郷がそれを受け取ってタイトルを見るとそこに書かれていたのは――
「勇者、御記……」
　それを見たみんなは息を飲む。勇者御記というタイトルの本、そしてそれが出てきた乃木家の籠、色々と考えるとそれが結構重要なのものであるというのが何となくわかったから
「随分、古いものみたいですけど……」
「園子、これって――」
「乃木家に伝わる三百年前のものみたいだよ」
「読んだの？」
　その言葉に対して首を横に振った園子は、ゆっくりと立ち上がりながら言葉を紡ぐ
「これから、もう私だけが知ってるなんてよくないし、私も嫌だからね……初回は、みんなで一緒に読もうと思って」
　その言葉を聞いた後、ゆっくりとページが開かれ内容が読まれ始めた
私たちの戦いの記録を記し、未来の勇者に託す――
「未来の勇者って……」
「乃木、何てもの見つけてくるのよ」
「これ。私たちがなぜ今こうなのか、私たちは読まなきゃならない……みんなも、一緒に見てくれる？」
　少し不安そうに、けれど確かな決意を持ってそう言う園子の手を握ったのは風先輩と銀の二人
「もちろんよ」
「当たり前だろ」
「ありがとう、ミノさん、ふーみん先輩……ありがとう、みんな」
　園子の言葉に全員頷いた後。東郷が再び本を読み始めた
西暦２０１５年７月、絶望は空からやってきた――

そこから、記されていたのは当時未知の存在だったバーテックスのこと、そしてその被害によってどのような状況になったのか。大社という存在が人々の導き手となり、神樹の結界が出来た事、そして――西暦勇者たちと、壁の外から来たという一人の青年について初めての戦いを終えてから数日、樹海の中で一人の男と出会った。その男の名前は――

「――不知火……要」

聞き間違える筈もない、勇者御記、三百年も前の勇者との戦いの記録に記されていたのは他でもない――俺たちにとって聞き馴染んだ人の名前だった

勇者の章，4―2　追想

勇者御記を開いた俺たちが読んだのは、西暦勇者……園子のご先祖様たちの戦いの記録。所々は検閲され、黒く塗りつぶされてしまっていたけれど。それでも彼女たちがどのような戦いをしてきたのか、それは伝わってきた

「それで……」

「それがこの代での最後の戦いだったみたい」

西暦、そしてまだまだ未発達だった勇者システム。俺や東郷達三人が小学生時代に使っていた勇者システム同様バリアは存在しない。もしかしたら今の俺たちのものとは比べものにならない程に弱いものだったのかも知れない……それでも、あの人たちは戦い抜いた

「その後は、どうなったんですか？」

「……その後、天の神を鎮める奉火祭が検討、決行。巫女達が奉げられ当代の勇者たちが出撃することはなかった、これで記録は以上みたい」

「奉火祭って、つまり時間稼ぎってことよね」

「三百年ものね」

その言葉を聞いた樹ちゃんは、少しだけ不安そうに風先輩の方を向いた

「園子先輩のご先祖様たちが守ってくれなかったら、私たち生まれてこれなかったんだ……世界を守るってこういうこと？」

「託されちゃってるんだねぇ、次の代へ託すのも、それを終わらせるのも勇者次第」

「不吉なこと言わない」

「でも、私たちの戦いはもう――」

「――終わったと、思いたいけどね」

そう言った園子は、再び包みの方へと向かおうとしたところで、チャイムが鳴る

「そのっち、お客さん？」

「丁度いいタイミングだぁ」

玄関の方へと歩いていった園子は誰かと話している、その話声は少しずつこっちに近づいてきて。俺たちの視界に来客の姿が映る
「よう、新年あけましておめでとう」
「……師匠？」
「うん、実は先生の名前が書かれてたって知ってからこっそり呼んでおいたんだぁ」
「唐突な連絡だから何事かと思えば……そう言うことか」
風先輩の手に持っている勇者御記を見た師匠は、とても懐かしそうに視線を向けてくる。その視線は俺たちではなくもっと遠く、どこか別の場所を見ているような感じがした。その様子を見て、何となくだけど御記の中に書かれている不知火要という人物と師匠は同一人物であるのだと理解する
「師匠……」
「皆まで言うな、聞きたいことは後でしっかり話す」
色々聞きたかった俺の言葉に対してそう言った師匠は包みのある方にゆっくりと歩いていく。包みの中を確認すると端の方にあった大きめの白い箱を取り出してこっちに戻ってきた
「何処にあるんだと思ってたが……まさか、こんな所にあったとはな」
「あの、それって――」
「バトンだよ、大切な仲間から。西暦の勇者たちに渡された……とても大切なバトン」
その言葉と共に師匠は箱を開いた。その中に入っていたのは汚れた布で巻かれている鍬と、刀身が真ん中位でかけてしまっている鉈
「鍬に……壊れた鉈？」
「それがバトン……なんですか？」
「あぁ……お久しぶりです」
そう言った師匠は、その手に持った鍬と鉈を大事そうに抱えると立ち上がる
「さてと、とりあえずお前らは勇者御記を読んだ……で良いんだよな？」
「うん、それで私たちのご先祖様はどんな人だったのか、それが少しだ

けわかったんだ」
「なのに俺を呼んだって事は――」
「その通りぃ、実際にご先祖様たちがどんな人だったのか……それに、西暦の時代に何があったのか。それを実際に見届けた人の口から聞きたいんだ」
「やっぱり、そうだよな」
師匠は抱えていた鍬と鉈に少しだけ目を向け、少しだけ目を閉じる。ほんの数秒、その後ゆっくりと目を開く
「お前らも、何があったのか聞きたいのか？」
師匠の発したその言葉に対して、俺たち勇者部一同は頷く。それを見た師匠は軽い笑みを浮かべた後、スマホを操作してどこかに電話をかける。電話を終えた師匠は改めて俺たちの方を見ながら言葉を紡いだ
「それじゃあ、行くか」
「えっ？」
「あの……行くって、何処に――」
「……いつか、アイツらの事を話すならここにしようって決めてた場所。こんな時ばっかりは大赦様様だな」

勇者部一同を連れてマンションの外に出ると、既にやってきていた車に乗り込んで目的の場所まで向かう。讃州市から離れ、丸亀市までやって来た
俺が若葉たちについて話すのなら、彼女たちと過ごし、思い出を作ってきた場所が良い……俺が西暦の勇者について、俺たちの戦いの記録についてを話す上で最もふさわしいと思ってる場所、それは――
「ここって、丸亀城？」
――そう、あいつらと過ごした思い出の場所、丸亀城
「目的地って、ここなんですか？」

「あぁ、許可は取ってるみたいだし……ついてきてくれ」
勇者部一同を連れて、丸亀城の中を進んでいく。階段を上がり、目的地まで続く廊下を歩いていると目の前に見知った顔が一人いた
「あー、お姉ちゃんだぁ」
「わざわざ悪いな、無理言っちまって」
「この程度の事なら構いません。それに園子も、久しぶりですね」
「うん、久しぶりー」
「今日は様付けじゃないんだな」
「ここに居るのは大赦のではなく、上里家の一人娘ですから」
「そうか」
とりあえず、この場に役者は全員揃った、後はこれまでの事を話すだけだ。目的の場所――教室の扉を開けると、随分と嗅いでいなかった懐かしい匂いが俺の所まで届く
正直、感傷に浸りたい気持ちもあるがこれからするのは彼女たち当代の勇者と、勇者と共に戦う戦士について重要なことであるため我慢する。ひとまず全員を席に座らせて、改めて俺とひよりの二人は勇者部の前に立つ
「色々話す前にまずは紹介、こっちのは上里ひより」
「上里ひよりです、以後お見知りおきを」
「う、上里って……あの上里？」
「えぇ、考えていただいている上里で間違いないですよ、夏凛さん」
少し硬直してしまっている三好だったが、固まってる場合じゃないと思ったのかすぐに元に戻った。とりあえず全員がこっちを向いたのを確認できたから、始めよう――
「それじゃあ、ちょっとした授業形式で初めて行くぞ。西暦の勇者と、彼女たちの戦いの話を」
――少しだけ長い、歴史の授業を

勇者の章，４―３　追憶

「話していくのは……一番最初からで良いか？」
　俺の目の前に座っている勇者部一同が頷いたのを見て、黒板使いつつ俺も話を始める
「すべ手の始まりは２０１５年の７月、空からバーテックスが来たことだ……ここら辺は御記にも書いてあっただろ？」
「はい」
「空からって降ってきたと書いてありましたが、原因は一体何だったんですか？」
「それは俺たちにもわからなかった、原因が一切不明で唐突に現れた星屑どもが人類に襲い掛かって来たからな」
　東郷からの質問に関してだが、どうして天の神が人類に対して牙を剥いたのか。その原因は分かってない……三百年経った今だからこそ人の所業が天の神の怒りに触れたって考察は出来るが当時は本当にわからなかった
「とりあえず話を続けると、人類は正体不明の敵に対する対抗策はなかった……その後、四国に建造された壁の中に人類は逃げ込み、四国以外がその場所の土地神の力で張られた結界の中が、人類にとってのセーフハウスになった。ここまでが最初の始まり」
「四国以外にも、安全な場所があったなんて……」
「安全って言っても、四国程万全じゃなかった、だから馬鹿みたいにバーテックスは襲ってきたしな」
「そっか、確か御記に師匠は壁の外から来たって……」
「あぁ、俺が壁の内側に来たのは西暦の勇者たちの初陣が終わってから少し経ってからだ」
　ここら辺はかなり鮮明に覚えてるというか、嫌でも忘れることが出来ない出来事だったからな……そろそろ次行くか
「そんじゃ次……って言うかお前らにとってはこっからが本番だな、人類の脅威であるバーテックスに対抗するための存在として選ばれたのは神の力が宿った武器に選ばれた年端もいかねぇ女の子たち、乃

木のご先祖たちだな」
「神の力が宿った武器……」
「そう、今の勇者システムはシステムの中に武器が纏まってるが西暦の頃はシステムと勇者の使う武器は別枠だった。そんで勇者の使う武器には神の力が宿ってたって訳だ。例えば乃木若葉の使ってた武器、生太刀は日本刀に神の力が宿ったものってな感じにな」
　相も変わらず千差万別な武器だったりするがそこら辺は一旦おいておいて、横道にそれたのを本筋に戻す
「とりあえず話を戻すが、バーテックスと戦う戦士としての勇者は俺が知る限り四国以外に二か所、諏訪と北海道にもいた」
「諏訪の勇者ってもしかして」
「お察しの通り、この鍬の持ち主だ。彼女の名前は白鳥歌野、俺は直接の関わりはなかったが、乃木若葉とは通信機越しに話をしてたらしくてな。アイツらにとってかけがいの無い仲間の一人だったらしい」
　正直、白鳥歌野という人とは、一度でいいから話をしてみたかった。一人の勇者として最後まで諏訪を守り抜いた人がどんな人だったのか……もっと言うと、その勇者の横に立っていた人たちとも
「師匠？」
「あ、あぁ、すまん。少し物思いに耽ってた……それで、北海道の勇者だが」
「それも御記に書いてあったわね、確か不知火さんが一緒に戦ってた人で、名前は――」
「秋原雪花、犬吠埼姉の言う通り北海道で戦ってた勇者で……俺の相棒見たいな奴だった」
「相棒……」
「色々話せることもあるがそこら辺話すと長くなるからとりあえず端折るぞ。聞きたかったら全部終わってから聞いてくれ」
　雪花の話は色々と長くなるし、もっと言うと幽霊状態でも本人が近くにいるところで変に話して後でからかわれるのは面倒だ……そういえば、さっきから雪花が話かけてこないな。いつもならそこら辺漂ってる筈なのにそれもないし。まぁいいか

「それじゃ、こっからは俺が若葉たち西暦の勇者たちと合流してからの話だが……その前に何か聞いておきたいことあるか？」
「はいはいはーい！」
　さっきから所々で質問には答えてたが、改めてここで一回質疑応答の時間を取っておく。そしてすぐに手を上げながら立ちあがったのは乃木
「私のご先祖様って、どんな人だったの？」
「若葉……か、一言で言うならクソ真面目だな」
「「「「「クソ真面目？」」」」」
「あぁ、頑固で融通利かなくて、それが原因でいざこざが起きたこともあるし……けど、誰よりも真っ直ぐで、勇敢で勇ましい者って意味の勇者なら。一番ピッタリだったかもしれん」
「凄い人だったのね」
「凄かったよ、勇者としても……うどん過激派としても」
「何か言いました？」
「何でもない」
　マジで思い返すだけでもうんざりするというか、こちとらそこまでうどんに洗脳されとらんって時期にしつこくうどん勧めてきやがって。確かにここのうどんが美味いことが認めるが偶には別のモン食いたくなる時があるって言うか、むしろ俺はそっちの方が多いんだっつーの、うどん狂信者め
　等とかつての思い出に愚痴をこぼしていると、壁の外で青色のカラスが何やらこっちを凝視していた……かと思ったらすぐに飛んでった
「まぁいいか、それじゃあ次に――」
「あのっ！」
「どうした、結城」
「私も知りたいことがあるんです……高嶋友奈ちゃんについて」
「高嶋友奈……そりゃ気になるよな、自分と同じ名前だし」
「はい、教えて……もらえますか？」
「もちろん」

「友奈……いや。高嶋はそうだな……結城、お前とそっくりだったよ」
「私と？」
「あぁ、明るくて、一緒にいる奴と自然と笑顔になって、いっつも他人を思いやって……そんな感じなのに大切なことは一人で抱え込む。そんな奴だったよ」
「――ッ」
明るく振舞ってるし、実際に全員のムードメーカー見たいな立ち位置の癖に大切なことは一人で抱え込んじまう。強いように見えて誰よりも普通の女の子だった
「……それじゃあ、話を続けるぞ」

そこから西暦勇者の戦いの記録を語り終え一息ついた俺は、複雑そうな表情をしている勇者部の一同を見ながら口を開く
「さてと、とりあえず俺が知ってるだけの西暦勇者の記録を話してきたわけだが……どうだった」
「どうだったと言われると……」
「なんというか、信じられないって言うのが本音です」
そりゃそうだ、特に千景の話は勇者部からしからショッキングなものでしかないだろう
「でも、最後まで戦い切ったんですね、私たちの大先輩は」
「あぁ、だからそのバトンはお前らが受け継ぐ番って事だ」
俺はそう言って、目の前にいた勇者部の一同に鍬を手渡した
「頑張れよ、後輩」
「「「「「「はいっ！」」」」」」

話が終わり、俺は一人丸亀城の教室に残り、空を見た。アイツらと一緒にいたころはこうして教室から空を見上げるということをあまりすることはなかった気もするが、それが一人になっちまったらこの

有様だ
「お疲れ様です、要さん」
「……あぁ、勇者部の奴等は帰ったのか？」
「はい、しっかりと送り届けるように厳命しましたから」
「そうか、それで……何か俺に用でもあったのか？」
「えぇ、少し耳に入れておきたいことがありまして」
ひよりが耳に入れたいこと、それは結城の受けているタタリの効力の話だった
――結城の受けているタタリは、自分の身体を蝕んでいくもの。しかもそのタタリは他人に話そうとするとその人間にまで被害が及ぶ、それ故に他人に話すことが出来ない
「この事実を知った私たちにもどのような影響があるのかわかりません。直接話を聞かなければ大丈夫なのか……それとも――」
「まぁ、大丈夫だろう……それに、もしもの時は俺が何とかする」
この場所に来て、アイツらの話をしてようやくこっちもスイッチが切りかわった感じだ……これから先何かあったのなら、その時は神世紀の不知火要ではなく、一人の人間として――西暦を、若葉たちと共に戦った不知火要として、全力を尽くそう

勇者の章，4―4　彼女

不知火さんから西暦の勇者……私たちの先輩の話を聞いて、今までの勇者がどれだけのものを背負ってきているのか。それがわかった
私の身体を蝕んでる天の神のタタリは、自分以外の誰かに話してしまったらその人の身に不幸が訪れる……だから私が頑張らないといけないんだ、ようやく戻ってきた日常を守るために――私だけが頑張らないと
そう思ってベットに入るけど、気付けば自然と涙が溢れてくる……本当は辛い、でも頑張らないといけない。どうすればいいのかわからないぐちゃぐちゃの感情に押しつぶされそうになりながら、私の意識は自然と闇に落ちていった

「……へっ？」
私が目を開けると、そこは誰もいない勇者部の部室。どうしてここに居るのかわからないし、ずっと私の身体を蝕んでいた苦しみがなくなっていたからタタリの印のあった場所を見ると、印もきれいさっぱりなくなっていた
「――あぁ、夢だからか」
少しだけ嬉しいって感情が溢れそうになったけれど、自分の意識が闇の中に落ちていく感覚を覚えていたからこれが夢なんだって確証が持てた
「おーい！　友奈ちゃーん！」
ふと、部室の扉の向こうから誰かが声をかけてくる、ものすごく聞き馴染みのある声。その声の持ち主が部室を開けた瞬間、私は目を疑った。着ている制服は違うけれど、そこに立っていたのは私と瓜二つの少女
「私だよ、ほらもう知ってる！」
一瞬彼女の言っていることが理解できなかったけれど、今日不知火さんの言っていた言葉をふと思い出した

――友奈……いや。高嶋はそうだな……結城、お前とそっくりだったよ

「高嶋……さん？」

「そうだよ！　そっくりだね！」

「ご先祖何ですか……私の……」

「うーん、そういうのじゃないみたいだけど……」

高嶋さんは少し考えこんだような表情を浮かべているけど、私にはまだまだ訊きたいことがある

「あの、夢……ですよね？」

「うーん、私も説明が難しいから……とりあえずそれでいいや！」

「それでいいんだ……」

「それじゃあ改めまして、私は高嶋友奈。貴方は結城友奈」

「えっ、うん……」

「固いよー、まぁしょうがないよね、タタリの所為だ」

高嶋さんは、今の私の身に起こっていることを言い当てた。どうしてそれを知っているのかわからないけれど。その事を他の人に話すのは――

「私になら、話しても大丈夫」

私の考えていることを高嶋さんは読み取ったかのようにその言葉を私に向けて言ってきた

「私、祟られてしまったんだ……」

「東郷さんの身代わりになったこと偉いと思うけど、それで天の神がイラっとしたみたい」

「イラっと、そんなことで？」

「うーん、私も長いこと神樹様の中から見守ってたけど、神さまって気まぐれでよくわかんないよ」

「神樹様の中から……見守ってた？」

「うん、私だけじゃなくて。若葉ちゃんにひなちゃん、たまちゃん、あんちゃんにぐんちゃんもみんな……ずっと見守ってた」

高嶋さんが言ってた名前はきっと一緒に戦っていた西暦の勇者や彼女たちを支えていた巫女の名前なんだと思う、でも……と言うことは――

「貴方は、魂なの？」

「正直自分でもよくわからないんだ、あっ、でもオバケじゃないよ……いやオバケか」

「悩まないで話を続けて……」

「っと、そうだった。今日来た目的なんだけどね――友奈ちゃんのタタリ、私が引き受けようか？」

「えっ？」

「神さまは怖くて気まぐれ、でも同時にぼんやりしてる」

「ぼんやり……」

「私と友奈ちゃんは別人だけど、神さまくらいの視点から見ると大体同一人物なの」

言ってることが大きすぎてしっかりとはわからないけど、きっと天の神とか神樹様から見ると私と高嶋さんは見た目と以上に近い人って事なんだと思う。でも、私のタタリを高嶋さんが引き受けてしまったら

「高嶋さんは……どうなるの？」

私の問いかけに、高嶋さんは何も答えなかったけど、その後にまた言葉を続けた

「未来を生きてるあなたが苦しむ必要なんてない」

そう言った彼女の眼は……ううん、眼だけじゃない。言葉とか、何て言えばいいのかわからない部分も全部が、何故か西暦の話をしていた不知火さんと重なって見える

「ありがとう、めちゃめちゃ嬉しいよ」

「うん」

「でも……でもね、誰かに押し付けるなんて、その方が辛い」

「やっぱり私なんだね――」

「――うん」

「他の誰かに押し付けるなんて、その方が辛いよ」

「……うん、わかるよ。これから頑張れる？」
「頑張れないと思う」
自分と限りなく近い彼女だから、彼女に限りなく近い自分だからこそ……唯一この場で自分の本音を話すことが出来た
そして……他でもない彼女の前だからこそ、私は涙を流すことが出来た

勇者の章，5―1　怪訝

師匠から話を聞いてから二日後、そういえば初詣に来ていなかったことを思い出した我々勇者部一同がやってきたのは神社。去年は最後の最後に風先輩が事故るっている不幸に見舞われてしまったから今年こそそんなことが起こらない事を願うためにやってきた次第である

「何だかんだやってるうちに、年越して新年迎えてしまったわ……」

全員で神社に集まって早々風先輩がそんな言葉を漏らしていた

「何よ、めでたい事でしょう？」

「良い女が一つ歳を取ったのよ。三月で卒業だし」

「もう一年居てくださっても良いんですよ」

「いや、それはちょっと……」

年を明けてもいつもと変わらぬ勇者部……と言いたいところだがやっぱり友奈の元気がないように見える。それから全員で甘酒を飲む事になったのだが……風先輩と樹ちゃんが揃いも揃って場酔いするという珍事が起きた

「……やっぱ騒がしい方がいいな」

「どうしたの徹くん、急に」

「あぁ、いや……最近色々と聞いたばっかだったからさ。やっぱ平和なのはいいなぁって」

「そうね、やっぱり何事も平穏が一番」

「なーに二人して年寄りみたいなこと言ってんだよ」

「なんか二人がそうやって並んでるの久しぶりな気がするんよー」

「銀、それに園子も。あっちは大丈夫なのか？」

「風先輩も樹ちゃんも場酔い覚ましで休んでるとこ」

銀からそう聞いて少し離れた所にあるベンチを見てみると座ってる犬吠埼姉妹と二人を看病してる友奈と夏凛の姿が見えた。場酔いするのも早ければ酔いでダウンするのも少々早すぎる気がする

「そういえば、なんだかこの四人で一緒にいるって言うのも久々な気がするわね」

「……そう言えばそうだな」
「確かに、最近はみんなと一緒にいることが多かったもんな」
「！　じゃあさじゃあさ、どうせなら写真撮ろー」
「おっ、いいねぇ」
「それならカメラ係は俺がやるよ」
四人で集まって久々に撮った写真は、何だがとても懐かしいものになった気がした

そんな初詣、そして冬休みも終わりいよいよ勇者部活動も再開、最初の依頼はいつも通りの猫探し
「おーい、猫ー」
「なんか久しぶりな気がするな、猫探し」
「そうだな……何故かカメラマンが二人いるけど」
「慣れよう、いつもの光景だ」
少し離れた場所にいる樹ちゃんが猫のモノマネをした途端もの凄い勢いで東郷と園子の二人が撮影を始めるなどというハプニングもありつつ猫を探す
「あっ、いた。おいでー、おうちに帰ろー」
少し近くに居た友奈が猫を見つけたらしくそう声をかけると茂みから猫が飛び出してきた。猫は上手く風先輩がキャッチしてとりあえず対象の保護には成功した
「友奈ナイス発見よ」
「あはは、怖がられちゃいました」
「子猫発見で依頼クリアね」
「それでは先輩、記念に一枚撮りましょう」
「おっ、いいね！」
すっかり撮影係になった東郷が号令をかけて写真を撮る。そこからカラオケに行ったりしているうちに帰宅って流れになったんだが、途中で夏凛が友奈に話があるらしく俺と東郷は一足先に帰宅することになった

「東郷、最近ずっと写真撮ってるけどどんな感じになったんだ?」
「だいぶ潤って来たわね」
　そう言って東郷がスマホの写真フォルダを見せてくれた。確かに色々な思い出が集まってきている感じがしていい感じだな。歩きながら二人で見ている訳なのだがその途中で東郷が少し不審そうな表情を浮かべる
「どうかしたか」
「うん、やっぱり友奈ちゃんの様子がおかしい気がして……徹くんはどう思う?」
「いや、まぁ……俺も東郷と同じ意見だよ。友奈の様子はどっかおかしい気がする……元気がないというか」
「やっぱりそうよね」
　やっぱり友奈ガチ勢の東郷から見ても今の彼女の様子は少しおかしかったらしい。普段から底抜けに明るい友奈だって悩む事はあるだろう。けれどその彼女がここまで悩んでいる理由が一体何なのか……その理由を知ることになるのは、この時の自分が思っている以上に近い出来事だった

勇者の章，5―2　真実

友奈の元気がいつもよりない事、ガチ勢の東郷によってその疑問が確信に変わった。ならば何が友奈の身に起こっているのか、それを知ることが出来たのはその日の夜の事だった

その日の夜、そろそろ風呂に入ろうと考えていた所で、スマホに通知が来る

「ん？　東郷から……こんな時間になんだ？」

この時間に来る連絡に関しては基本的にグループチャットで行われるため個人宛てに来る連絡がだいぶ珍しい。そんな事を考えながらメッセージを開いてみると今から風先輩たちの住んでるマンションまでやって来てくれとのことだった

どうして風先輩たちの家なのだろう、と考えつつ風先輩たちの家まで向かう

俺が到着したころには既に勢ぞろいしていたようで、最後の到着になってしまった。そんなことを考えながら家の中に上がると目に入ったのは勇者御記と書かれている一冊の手記。それ自体はこの前見たものと同様なのだが前に見たモノよりも新しい

「それは？」

「これ、友奈の部屋から見つかったんだって」

「……何で人様の部屋から発見してるのかはこの際置いときます、何でそんなものが友奈の部屋に」

「最近友奈ちゃんの様子がおかしかった、この中にその原因が書かれてると思うんです」

東郷のその言葉を聞いて勇者部全員の表情が少しだけ変わる

「こんなもんが出てくるなんて……」

「私からも良いかな」

「園子？」

「私もゆーゆが心配になって調べてみたんよ。最近みんなより早く

帰ってたでしょ、実は大赦に行ってたんだ」
「大赦……」
「結論を先に言うと、ゆーゆの様子がおかしいのはね、ゆーゆが天の神のタタリに苦しめられてるからなんだ」
　天の神のタタリ、その言葉を聞いた俺たち全員は息を飲み表情が固まる。せっかく日常に戻った筈だったのに、天の神の名前を此処で聞くとは思わなかったから……それに、天の神のタタリを受ける原因になったのは恐らく――
「そのっち、それは――」
「聞いてわっしー、大赦の調べで、このタタリはゆーゆ自身が話したり書いたりすると伝染する。それがわかったの、だから、この日記は非常に危険なものなの……それでも見る？」
「……見るわ、友奈ちゃんが心配だもの」
　言葉に出したのは東郷、それでもここに集まってる全員の思いは同じだ
「じゃあ読んでみよう、ゆーゆの御記を」
　友奈の書いている御記を開き、一番最初から読み始める。その中に語られていたのは俺たちの最後の戦い……あの巨大な御魂を破壊する為に友奈が戦った後、彼女の身に何が起こったのか
　最後の戦いの後、友奈の魂は一時的に東郷が居たらしいブラックホールの中にいた。そしてどう戻ればいいのかわからなかった所を一人の勇者に救われたこと

　そして、あの戦い……正確には俺たちが満開によって失った身体は奉げられた供物が戻ったのではなく神樹様によって作られた代替えのパーツを代わりに当て嵌められたものであること……そして、友奈の身体は外の世界が炎に包まれる限り治ることはなく、今年の春を迎えられないだろうということ
　そこからは、友奈の日記になっていた。自分の身体が不調であることや彼女の感じていた恐怖、現在に至るまでの気持ちが、嘘偽りない友奈の言葉で書かれていた

「そんな……」
「治らないってどういう事よ、春は迎えられない？」
　案の定、友奈の身に起こったタタリは東郷の身代わりとなったことが切っ掛け、その事実はどうしようもなく東郷自身に重くのしかかってるんだと思う。動き出した彼女の事を園子が止めたが、止めなかったらどうするのか、それを一番わかっているからだろう
　そう言う俺も、あまりにどうしようもない真実に何を言うこともできなかった

　それはみんな同じだ、たとえ真相を知ったとしても。俺たちは、友奈に対して何もできない

　時は遡り夕暮れ、勇者部に西暦の勇者たちの事を話してから数日の時が経ち、いい加減俺の覚悟も決まった日のこと。今まで生きてきて錆びついてしまった身体を動かす為に、俺は一人長棒を振るう
　最近は色々な武器を使い分けて戦っていたが今の俺には急激な回復力も元々持っていた不死性も失ってしまっている、だからこそ――
「――下手なリソースを割くことはできない」
　最後の一振りを振り終えた俺は長棒を置いて汗を拭く。そういえば気になることがあったのを忘れていた
「雪花、そういえば今の俺のタタリの状況ってどうなってんだ？」
『……正直、だいぶ来てるよ。いつどこから崩れてもおかしくない』
「そうか、でも……ここで止まると一生後悔する、そんな気がする」
『相変わらずだね、要は』
「よし、それじゃあもう一回――――」
　――バキリ
　俺はその後の言葉を続けることが出来なかった。何かが割れる音と同時に力の抜けた俺の身体は地面に叩きつけられる

『要ッ！』
「――大丈夫、特に、問題は……」
そうは言うものの不思議なくらい全身に力が入らない。その状態がしばらく続いたが唐突に抜けていたはずの力が戻り、持っていた長棒を支えになんとか立ち上がることが出来た
「雪花、もしかして……さっきのが」
『うん、さっき要の魂の一部が欠けた。わかってるよね魂が完全に砕けるとどうなるか――』
「わかってるよ、わかってる」
『要、お願いだから無茶だけはしないで……このままだと――』
「悪い、その願いは聞けない……ここで無茶をしなかったら一生後悔することになる……そんな気がする。だから無茶もする、そうじゃなきゃこの世界を守ったあいつらに合わせる顔がねぇ」
結局やらないといけない事は変わらないんだ、なら……俺の命を燃やし尽くしてでもやらないといけない事をやるだけだ

勇者の章，5―3　神婚

友奈の抱える秘密が何なのか、その正体を知った俺たち勇者部は出来ることなら彼女の力になりたいと思う反面、具体的に何が出来るのかわからないまま一日は過ぎていった、翌日、通学路を友奈と東郷の二人と一緒に歩いて学校に向かう。一見すると何でもない日常の一幕に思える光景だったが、友奈は歩くのもやっとと言った様子

『――結局、俺や東郷に出来ることってないのかよ』

心配そうに友奈の方を見ていた東郷を少しだけ見つめた後、俺にも何か出来ることがないのか思考し始める。今の友奈は俺たちが御記を読んでその身に起こっているタタリの事を知らないものだと思っている。そしてタタリの効果がある以上彼女は決して俺たちに相談してくることもない

「……最近、あったかくなってきたね」

「うん……」

「もうすぐ春だ――」

普段であれば絶対にありえない友奈の言葉に空返事をする東郷の姿を見ても、今起こっている事態がどれだけ深刻であるのかを表している。かくいう俺は二人の会話に特に割り込むわけでもなく考えを巡らせながら歩いていると、ふと友奈が足を止めた

「東郷さん、徹くん。私ね……結婚する」

「うん……うん!?」

「……なんだって？」

「突然ですが、結城友奈は結婚します」

なんだって？　結婚……血痕？　結城友奈は血痕します？

いやいやいや待て待て待て、結城友奈は血痕しますは流石に文脈めちゃくちゃだ。てことは正しいのは結城友奈は結婚します？

「な――ななななにを言ってるの友奈ちゃん!?　中学生なのに、大体相手は誰!?　まさか徹くん!?　いつの間にそんな深い関係に？」

「まてまてまて！　俺だって初聞きだぞ!?　というか急に結婚でどういうことだ!?　何処の馬の骨だ!?」

「落ち着いて二人とも……相手は、神樹様だよ」
「「へっ――」」
突然の告白を聞いた頭の中が真っ白になった俺たちは、友奈の結婚相手を聞いて更に頭の中が漂白されていった

なんとか再起動を果たした俺は隣で完全に昨日を停止して真っ白になってしまっている東郷を友奈と共に先導して学校まで向かう。まるで油の切れたブリキのロボットみたいに動いていた東郷は自分の席の座った後も機能を停止したまま
「どうすっかな……」
「あ、ははっ……どうしようか」
とりあえず機能停止をしている東郷は置いておくとして、神樹様と結婚とはどういう事なのかを聞かないといけない――と、俺が友奈に話しかけようとしたタイミングで教室の扉が開き夏凛が入ってくる
「あっ……か、夏凛ちゃん。おはよう」
「うん、友奈、おはよう」
夏凛があいさつを返してくれたのを見た友奈は少しだけ不安げだった表情を柔らかくする。夏凛の方もそれを見て若干安堵したように肩を下ろすと次に見るのは機能停止している東郷の方
「えっと……東郷、どうしちゃったの？」
「あぁっと、その――」
「東郷さんビックリしちゃったみたいで」
「なんで？」
「えっとね――」
流石に公の場で話すわけにもいかなかったのか友奈は夏凛の耳元に顔を近づける、恐らく話しているのはさっき俺たちが聞いたのと同じ情報なのだろう
「はぁっ!?」
友奈から話を聞き終えた夏凛もまた目を点にして驚く、そりゃそうだ。急に神樹と結婚なんて言われたら誰だって混乱する。とりあえずこの場で話していても埒が明かないから園子や銀、風先輩に樹ちゃ

んと勇者部全員に情報を共有して勇者部の部室まで向かう

「それで友奈、一体どういう事なんだ？」

勇者部全員が部室に集まったのを確認して、俺たちはとりあえず友奈に何があったのかを訊く

「えっと、この前の夕方のことなんだけどね、大赦の人が私の家を訪ねてきたんだ――――」

そこから友奈が話始めたのは、どうして神樹と結婚――神婚することになった経緯だった。最初に友奈が聞いたのは三百年、四国に壁を張りこの世界を守ってきた神樹の寿命が尽きかけているということ

神樹の寿命が尽きれば四国を守っている結界が消え、人類は滅びる、それを回避するための方法が選ばれた人間が神樹と結婚すること……らしい。選ばれた人間が神婚を行うことで人は神と共に生きることになり、滅亡することはない……しかしその代償として、選ばれた少女は死ぬ

そしてその神婚の相手に選ばれたのが友奈。彼女が選ばれた理由は先の戦いで満開をした友奈は、身体だけでなく魂すら一度神樹に持っていかれている。そして代償として払った身体のパーツに魂を神樹の代替えバーツで補った友奈は存在そのものが神さまに限りなく近い〝御姿〟というものになっている

――大赦は、人類が神の眷属になるための生贄として友奈を捧げ様としている、ということだ

そんなの……絶対に間違ってる

勇者の章，5―4　亀裂

　友奈の話を聞いた俺たちは、それを許容する事などできない。たとえ言葉を発することはなくともその気持ちは同じだったと思う
「あからさまに怪しいでしょ、何引き受けようとしてんの」
「ゆーゆ」
「違うと思います」
「友奈、お前が何を考えたがわからないけど、少なくとも間違ってるってのはわかる」
「みんな……」
「……今のみんなの反応でわかるでしょ、友奈ちゃんの考えが間違っているってことが」
「東郷さん……」
　案の定みんなから出た反応は否定的なものだった。自分たちの仲間が生贄にされようとしている、そして当の本人が自分の一人で抱え込んで勝手に結論を出そうとしている。そんなの俺たちからしたら許容できるものではない
「それにしても大赦め、友奈！　私たちもついてってやるからバッチリ断んなさいっ」
「神婚なんてする必要ありませんよ」
「園子、今から大赦に連絡いれられる」
「うん」
「ま、まっ――」
「もう我慢ならない」
「いくわよ、一度潰したほうが良い組織になるかもしれないね」
　正直な所、俺としても今回ばかりは大赦を許すわけにはいかない。今回だって何を考えたのかは知らないが友奈のタタリの事はあっちも知っていたことってのを考えるに俺たちにも聞かせたら反対するってのは目に見えてたから友奈個人に話をしに行ったんだろう
「待ってっ！　だから、私は……神婚を引き受けるって――」
「その必要はないんだって」

「だって、死ぬんでしょ？」
「わけわからない、生贄と変わらないじゃない」
「あと、神樹様と共に生きるってどういう意味なのかな……」
「その、なんかゾクってくると言うか」
「とても幸せなことだとは思えないわ」
　神婚の話は横に置いておくわけにはいかないが神樹と共に生きるって言うのがどういう意味なのかも気になってくる。流石に今のままって訳にはいかないだろうから一体どういう事なのかを問いただないといけない気もする
「でも、私が神婚しないと神樹様の寿命がきて、世界が終わっちゃうんだよ」
「神樹様の寿命はわかるけど、だからって友奈が行く必要がないでしょ？」
「寿命問題だってもしかしたら解決策があるかも知れないのに、自分から命を投げ出すなんてのは流石に違うだろ」
「――っ、勇者部は、人の為になることを勇んで行う部活、でしたよね？」
「友奈これは違う」
　風先輩は友奈が何を言おうとしたのかはっきりわかっていたのかすぐに否定をするが、それでも友奈は言葉を止めなかった
「でも、これも勇者部だと思うんです。誰も悪くない、世界を守るために、他に選択肢がないならそれしかないなら、私、勇者だから――」
「友奈ッ！　一回頭冷やしな」
「ゆーゆ、それしかないって考えはやめよう……徹くんが言ったように神樹様の寿命がなくなるまでの間に、もっと考えればいいんだよ」
「駄目、なんだよ。考えるって言うけど、私は……私にも、もう時間がなくて――」
　そこまで言うと、友奈は言葉を詰まらせる
「友奈……」
「私たち知ってるわ、友奈ちゃんが天の神のタタリで身体が弱っていることを」

「その話はやめてっ！　私は何も言ってないッ!!」
「友奈ちゃん、大丈夫よ」
「その件も含めて、解決して見せるから」
「大体おかしいですっ、なんで友奈さんがこんな目に遭わなきゃいけないんですか」
「でもね、でもね樹ちゃん。私は嫌なんだ……誰かが、傷つくことが、辛い思いをすることが……それが、今回は私一人が頑張れば――」
「駄目よッ！　友奈ちゃんが死んだら、ここにいるみんながどれだけ辛い思いをするとおもっているのっ！　私……想像してみたけど、後を追って、腹を切ってしまうかも知れない」
「で、でも……東郷さんだって、みんなを護るために火の海に行ったでしょ。あれだって、自分一人で世界を守れるならって思ったからでしょ」
「そうよ！　でも壁を壊した私の自業自得でもあるのよ！　友奈ちゃんは悪くないじゃない！　反対よ！　腹を切るわよ！」
「そんなの……ずるいよ。私は、東郷さんの代わりに――っ！」
「代わりに……なに、友奈ちゃん……」
　そこからの話し合いは、もはや話し合いとは言うこともできない程にひどいものだった、互いが互いに意見をぶつけ合って、今までだったらあまり見ることのない光景
「ゆ、友奈さん……友奈さんが言うように、勇者はみんなを幸せにするために頑張らないといけないと思うんです」
「そ、そうだよ……だから私、頑張ってるよ……」
「で、でも――」
「みんなって言うのは自分自身もそこに含まれてるのよ、友奈」
「幸せ……だよ私は……それで……みんな助かるなら――」
「嘘よっ！」
「ゆ、勇者部五箇条ッ！　なるべく諦めない、私はみんなが助かる可能性に賭けているんだよっ！」
「あんたが生きることを諦めてるじゃないッ！」
「勇者部五箇条ッ！　成せば大抵何とかなるッ！　成さないとなんに

もならないッ！」
「友奈！　五箇条をそんな風に使わないッ！」
　傍から見ても、今の友奈が精神的に追い詰められているという事は分かる……多分、ここでどんな声をかけたとしても、俺たちの言葉は――友奈には届かない
「私は、私の時間があるうちに私の出来ることをしたいんですっ、だから、こうして、みんなにきちんと相談しましたっ」
「これじゃ報告だよ、ゆーゆ。相談しなきゃ――」
「相談してるよッ！」
「すとーっぷ！」
　このままじゃ埒があかなかった言い争いにストップをかけたのは、今までずっと沈黙を貫いていた銀だった。俺たちと友奈の間に割って入るように歩いてきた銀は、手をパンと叩いてから話を始める
「みんな、一旦落ち着いて。これじゃあ話し合いじゃなくて言い争い、互いの主張を押し付け合うだけじゃ何の解決にもならない……でしょ？」
「それは……」
「友奈、アタシはみんなよりも少しだけ付き合いが短いけどさ。それでも友奈が人一倍頑張り屋で、それでも一人で抱え込んじゃったりすることも知ってるつもり……だからさ、苦しいとか、辛いとか、思ったことは口にださないと」
「銀……ちゃん」
「アタシたちはね、みんな友奈を犠牲にしてまで生き残りたいとは思ってない。もしも方法、何か他に方法があるなら力になりたい。その気持ちは同じ」
　諭す……というよりも取り乱した友奈を落ち着かせるように言葉を続ける銀に対して、俺たちは何も言葉を挟まない……いや、挟んだら多分また言い争いになってしまうから、挟むことができない
「アタシも昔、須美たち三人を護るために一人で無茶した経験があるからさ、わかるんだよ。一人で頑張るってのはすっごい辛いし、心が折れちゃいそうにもなる。実際問題、多分アタシも不知火さんが助け

てくれなけりゃあの場で命を落としてたかも知れないし……でもそのお陰で、改めて仲間に頼っていいんだってのは感じることができた。だからさ……友奈も、アタシたちを頼ってくれていいんだよ？

だって、仲間なんだから」

「私は……私、は……っ――」

何かを発しようとした友奈だったけど、その言葉を発する前に顔を青くして部室から飛び出して行ってしまった。いきなりの事で少しだけ意表をつかれたけど、東郷と園子の二人が友奈の事を追いかけて出ていく

「……何をどうするのが、正解なんだろうな」

大切な所で足が動かなかった、動かすことが出来なかった俺は、力無くその場に腰を掛けると頭を抱える。正直、俺本人も言葉を口に出すと喧嘩になってしまいそうで怖くて……でも、何て言葉をかければいいのかわからないくらい、頭の中がぐしゃぐしゃになっていた

「多分だけど、正解なんてないんだと思うよ？」

「正解が……ない」

「うん。世界全体からとか、大赦のなかから見たら友奈の判断が正解なのかも知れない……けどさ、それはそれとしてアタシ達にも曲げられない意地ってもんがある。だからきっと正解なんてないんだと思う」

「……そうなのかね」

「きっとそうだよ、そう信じれば大丈夫！」

そう言って笑顔を見せる銀に対して、俺は目を向けることしかできなかった……どうやらずっと並んでいる気になっていただけで、銀は俺より何歩も前に進んでいたらしい

「なんか、気が付いたらでっかくなってたんだな。銀」

「どーいう意味だそれ」

「そのまんまの意味だよ……俺も、お前に追いつけるように頑張らないとな」

力を振り絞って立ち上がると、俺は自分の頬を叩いて気合いを入れ直す

「俺も友奈を探してきます、自分の言葉は、しっかり伝えないと」
そう言って部室を出ていこうとしたところでスマホに連絡が入った。誰から連絡が来たのか確認するとそこに表示されていたのは師匠の名前
「はい、八重樫です」
「……あぁ、八重樫か。悪いが今から送る場所に来てくれ。話がある」
それだけ言うと師匠は一方的に通話を切り、ＭＡＰアプリの位置情報が送られてくる
表示されていたのは――英霊之碑の位置情報

勇者の章，6―1　開幕

英霊之碑に到着した俺たちを待っていたのは師匠と安芸先生、ああやって二人で並んでる姿を見るのもだいぶ久しぶりだけれど今はそれを気にしている場合じゃないんのが少しだけ悲しい所ではある

……よし、切り替えていこう

「……来たか」

「あの、急に呼びだして一体何の――」

「結城友奈の身に起こってること、その様子だともう知ってるっぽいな」

師匠のその一言を聞いた瞬間、どうしてここに呼びだしたのかを理解するのと同時に身構えてしまう

「一応言っておくが言わなかった事情は知ってるだろ？」

「それは、まぁ……」

「なら、話さなかったのはお前らの知ってる通りだ」

「それで、友奈ちゃんは一体どこにいるんですか？」

「彼女は今、大赦にいます」

東郷の問いかけに答えたのは師匠ではなく隣にいた安芸先生。とりあえず友奈の居場所がわかったなら話は速い

「それじゃあ、大赦に乗り込むわよ」

「ちょっと待った、その前に話しておかないといけない事がある」

「話しておかないと……いけないこと？」

「あぁ、事態は想像以上に切迫してるって事だ」

師匠がそう言った直後、安芸先生のポケットから着信音が鳴った。スマホを取り出した先生は画面を確認すると、師匠の方を向いて首を横に振った

「……やっぱダメだったか」

「何が、ですか？」

「端的に言うとこっちでも友奈の神婚を止められなかったって事だ……裏で色々動いてくれてたみたいだが、全部無駄になった」

「それなら、なお急いで大赦に向かわないと――」

風先輩がそう言ったタイミングで師匠は自分の胸を抑えて倒れそうになる、自分で踏みとどまったのと先生が支えてなんとか倒れることはなかったが急にそうなるのは少しだけ不可解だ
「師匠？」
「悪い……そんで、話しておかなきゃいけない事だが。近々――天の神が攻めてくる」
「それ、どういうことですか？」
「そのままの意味だ……昔のことになるが、天の神は人間が神に近づいたことにキレて裁きを下した。そんなやつが人と神様の結婚を許すと思うか？」
天の神が、人が神に近づくことを許さず裁きを下したのなら、人が神と結婚してその仲間入りをするなんて許してくれるはずがない
「それじゃあ、天の神は――」
「間違いなく、人類を滅ぼしにくる」
直後、俺たちのスマホから鳴り響いたのは樹海化警報、けれどその警報はいつものではなく東郷が壁を破壊した時に鳴り響いた緊急事態を示す音だった。その音もスマホの画面にノイズが走りシャットダウンされてしまう
「な、なんだッ!?」
「まさか、これって――」
「想像より早めに来たな」
「来たって、まさか――」
自身と共に、青空が焼け始める。地平線の向こう側から迫ってきているのは巨大な壁のようなナニカ……俺たちの想像よりもはるかに強大な存在だった
「現実の世界に敵!?」
「あれが……天の神」
「一応、大赦から言われた命令は伝えとく。神婚完了まで敵の進行を抑えろだとよ」
「そんな命令、聞けるわけないでしょ！」
「だろうな、だからお前らはお前らの選択を最優先で叶えろ。恐らく

こうなった以上友奈も樹海の中にいる筈だ……世界なんざ気にしないで。お前らのやりたいことをやるんだ」
「師匠……それじゃあ、敵は――」
「俺が抑える……安心しろ、どうせ死にゃしねぇ身体なんだ、後ろはしっかり任せとけ」
そう言って笑っている師匠だったけれど、それはどうしようもなく
――――
「先行って準備してろ、俺も準備終わったらすぐに行く」
止まってしまった俺たちの背中を押すように師匠はそう言うと道を譲る
「……行きましょう、友奈を助けるわよ」
風先輩のその言葉に頷いた俺たちは、師匠よりも先に天の神と対峙する
「ありがと、安芸ちゃん。身体支えてくれて」
「気にしないでください、それよりもさっきの言葉」
八重樫たちを行かせた俺はその場に座ると、深呼吸をすると安芸ちゃんの言葉に返事をする
「どうせ生い先短いこの身体だ、随分と長いこと頑張ってきたが……そろそろ潮時なんだろうな」
一度実感してしまうと何となくわかる、無茶しないで生きてもどっちみち俺の命は友奈と同じく春を迎えられることはないだろう。ただ無茶をしたらそれが今日明日の命に変わるってだけ、それなら俺は今まで勇者を見てきた者として今代の勇者がやりたいと思ったことをサポートする
「さてと、それじゃあ俺も行ってくる」
「……絶対に、帰ってきてくださいね」
「確約は出来ないけど、努力はする」

座っていた場所から立ち上がると俺も勇者部の方に向かおうとしたところで、安芸ちゃんに手を掴まれた
「どうした？」
「確約してください、帰って来るって」
「いや、だから――」
「絶対に、死なないで」
それに対して、俺は迂闊な返事をすることが出来ない、なんせ今の俺は普通に死ぬ、そして今回の戦いは本気で命を燃やす覚悟で行かないと勝てる勝負じゃないから
「……それじゃあ、行ってくる」
だから安芸ちゃんの頭に手を置いて雑に撫でてから勇者部の所に向かうと、既に勇者服に着替えた勇者部のメンバーが目に入る
「悪い、待たせた」
「大丈夫です……それより、安芸先生は」
「樹海の仕様は多分いつもと変わらないから大丈夫……来たぞ」
勇者たちに並び眼前の敵に前を向けた俺たちは色とりどりの花弁に視界を遮られ、眼前の景色は樹海へと変わった

勇者の章，6―2　決戦Ⅰ

「やばいッ！」
　樹海、俺たち勇者部と師匠の眼前にいた天の神の初撃はレオ・バーテックスの使ってた特大の火球、風先輩の声で俺たち全員がその一撃を避ける
「アイツ、無茶苦茶ッ」
「お前ら全員先に行け、引き受ける」
　師匠はそう言うと、樹海を駆けあがると天の神の眼前に立った
「師匠、大丈夫なんですかッ!?」
「心配すんな！」
　師匠は問題なさげに言ってくるがどうにも不安を拭いきることが出来ない。少しだけ離れたところにいた夏凛は何か決意をした表情を見せると俺たちの方を向く
「アンタたちは友奈のところに行って！」
「ちょ、夏凛ッ！」
「私もここでアイツの相手をするからっ！」
　そう言うと夏凛も師匠の向かった場所まで行ってしまった

　目の前にいるのは天の神、相手にするのは中々に骨の折れる敵だがやるしかない
「さてと、それじゃあ始めますか――って、三好？」
「……私もここで、アイツの相手をするわ」
「いいのか？　ここは俺一人でもなんとかなるが――」
「私たちを見区切らないで、友奈は絶対にみんなが助けてくれる、だから私は、友奈が帰ってくるまでここでアイツを食い止める」
　俺の横までやってきた三好の言葉からは、勇者部の奴等に対する信頼が見て取れる……成る程な、あんま会話ないって言ってた春信がそれでも嬉しそうにしてたわけだ
「それじゃあ……ついてこれるか？」

「当たり前でしょ――当代無双！　三好夏凛ッ！　一世一代の大暴れをとくと見よっ！」
「それじゃ俺も、初っ端からアクセル全開で行くッ！　力を貸せ――大天狗ッ！」
　夏凛の元には力が集まり大輪の華を咲かせ、俺の元には漆黒の羽根が舞い散りながら翼と陣羽織を形成していく。只一転、俺の方で異なっているのは今まで完全に俺の力をメインで構成していた外装は全部精霊の力頼り、言うなれば今の俺は自前の寿命を支払って西暦勇者の切り札を使ってるのと同じってとこだろう
　力を解放した勢いで高く飛んだ、俺たち二人は上空で浮かんでいる天の神に向かっていくとまず相手が放ってきたのは牛のドリル、現れたそれを夏凛が受けている間に回り込んで繋がっているワイヤーを切り裂く
「無事かッ！」
「この程度何でもないわっ！　それより次来るわよッ！」
　身体を反転させて次の攻撃に備える、天の神が使ってきたのは蠍の尻尾。この感じを見るにデカいバーテックスの能力は大体使えるって考えた方が良さそうだな。無数の尻尾をかいくぐりながら近づいていこうとした瞬間、天の神が撃ってきた射手座の矢を撃ってくる
「危っぶなっ！」
「っ！　――バリアを……コイツの所為で――」
「三好ッ！　あんま突っ走るなっ！」
　三好の所まで行ってカバーしようとしたが尻尾に邪魔されて迂闊に近づくことが出来ない。なんとか天の神の方に視界を戻すと閃光と共に光の矢が三好の元に降り注ぐ、あの攻撃方法は今まで腐る程見てきたからわかる
「三好ッ！　後ろだッ！」
「えっ――」
　咄嗟の事で反応が遅れてしまった三好の元に蟹の板で反射された光の矢が再び襲い掛かろうとするが、その直前で割って入った乃木が槍の傘を巨大化させて攻撃を防いだ

「園子ッ！」
「一人で前に出すぎちゃ駄目だよ、にぼっしー」
　とりあえずそっちは一安心、と言ったところでこっちはこっちで少し気を抜いた一瞬の隙を突かれて全方向から蠍の尻尾が迫ってきていた
「まずっ――！」
　迫りくる尻尾に対して少し反応が遅れたこともあり回避行動が遅れた、迫ってきた尻尾は俺の右腕、左足、そして背中をかすめそこから熱い感覚が伝わってくる
　ダメージを受けて更に鈍った俺の元に迫ってくる蠍の尻尾、アレを受ければ確実に命を落とすことは分かっていたがそれでも身体を動かすことが出来ない。このまま尻尾に貫かれて終わりかと思ったが迫ってきた蠍の尻尾は緑色の糸に貫かれる
「大丈夫ですか？　不知火さん」
「……すまない、助かった」
「気にしないでください」
　天の神からの攻撃が止まっている少しの間に、俺と犬吠埼妹も少し距離を離されていた二人に合流する
「樹、あんたまで」
「みんなで守りましょう、友奈さんが帰ってくる。この場所を」
　最初に見た時は姉の後ろに隠れる妹って認識だったが、少し見ない間に随分とたくましくなったらしい……最も、かかわり自体があんまりなかったから詳しいことはよくわからんが

　天の神を夏凛や師匠に任せた俺と風先輩の二人は、満開して現れた東郷と銀の船にそれぞれ乗り込んで友奈の元に向かう
「神樹様の方へ……この先に友奈がいるんだわ」
「友奈ちゃん……」

「須美！　風先輩後ろッ！」
　銀が背後を見て確認するとキャンサーが持っていた大量の盾に反射した光の矢がこっちに向かってくる。必死に避けて友奈の元に向かっていこうとするが中々に光の矢の追尾性能が高い
「面倒だな！　二人とも！　ゲージ使ってなんとかするんで二人は先に行ってくださいッ！」
　このまま逃げてても埒が明かない、それならゲージを使ってでも二人を前に……友奈の元に進ませる。ゲージを全部使って両手に持っていたチャクラムを巨大化させ、風を纏わせるとそれを一つはｔ東郷の船の方に、もう一方を俺たちの方に展開して一時的に攻から守る盾にする
「抜けたっ！　あとは進むだけ――って、今度はなんだよっ!?」
「何あれ……」
　一安心かと思ったら今度は空に穴が開いて中から炎を纏った星屑が大量に出てくる
「次から次へと……っ！」
「手数じゃ圧倒的に不利過ぎるでしょ……ってまずッ！」
　巨大化させたチャクラムを動かしながら星屑に対処してたが流石に巨大化＋風を付与でエネルギーが長持ちしなかったのかチャクラムは元の大きさに戻ると自分の手元に戻ってくる。それを見た銀は東郷の方を見ると少し頷き、俺に声をかける
「徹」
「……了解」
　俺たちが船から飛び降りると東郷と銀の二人は乗っていた船を空の穴に向かって突撃させた。地上に降り立った四人、これから走って友奈のところに向かうことになるが勇者状態ならさして問題なし
「大丈夫か、東郷」
「大丈夫……行きましょう」
　東郷の言葉に頷いた俺たちは、友奈の進んだ方に向けて走り出す

勇者の章，6―3　決戦Ⅱ

樹海の中を走りながら、友奈の元に向かう俺たちの目に映ったのは樹海の一部――木の根が蠢いている光景。それはうねうねと動きながら俺たちに向けて振り下ろされた

「あっぶなッ！」

「これって、まさか――」

「神樹様に、妨害されている⁉」

「知るかぁぁッ！　たとえ神樹様でもね、今回だけは譲れないッ！」

叩き潰さんと言わんばかりに振り下ろされる根を避けながら、走り続けていると、背後からとてつもない爆発音が鳴り響く

「あれって……」

「あれも、天の神の攻撃？」

迫ってくる光を見る限り、あの光の中に入ったら俺たちもただでは済まないって言うのは何となくわかる。ならやるべきことは一つ……友奈の心に一番寄り添える人を友奈の元に送る

「風先輩」

「えぇ……東郷、やれる？」

「……必ず」

「なら、道は……私が！　切り開く‼」

風先輩は満開ゲージを使い切ると手に持った大剣を肥大化させて無理矢理道を作り東郷の事を送り出した。ゲージを使い切った風先輩はかなり消耗したようで膝をつく

「風先輩ッ！」

「大丈夫ですか？　風先輩」

「えぇ……大丈夫よ」

後ろを向くと、光はすぐ近くまで迫っている

「樹……」

「……行きましょう、先輩。三人の所に」

「……えぇ」

俺が風先輩に肩を貸し、銀が地面に突き刺さっていた大剣を引き抜

くと、三人で迫ってくる光と対峙した

天の神の攻撃はどんどん激しくなっていった。蠍、蟹、射手のコンビ攻撃を始め、羊の電撃。今の俺でも武器の形状を変化させるだけなら出来るし、ちょっとした無茶も身体が切り札バフのお陰で問題はない

「ぐぅッ！　アンドロイドは何とかの夢を見るかとはよく聞くが……あの作品の羊は放電しねぇだろッ！　大丈夫かッ！　お前らッ！」

「こっちはなんとかッ！」

「私も……大丈夫ですッ！」

武器の形状を旋刃盤に変えて電撃を防ぐが、こうも足止めされてると近づくこともできない……って、もう次の攻撃が来るのか

「次ッ！　ドリル来るぞッ！」

「それは私が！」

電撃から何とか離脱したらしい犬吠埼妹が緑の糸を伸ばして網を作ることでそのドリルを粉々にする。ほんと糸使いってなんというかこういう場所だと便利だと実感する

――パキリ

「……？」

そんなことを考えていると、身体の内側から何かがひび割れていくような音がした。それに続いて聞こえてきたのは雪花の声

『要、これ以上はダメ』

「駄目って、どういうことだよ？」

『魂が崩れるのを抑え込む為にずっと内側にいたけど、これ以上無茶をすると――』

「……そう言うことか、でもな。無茶をしないといけない場面ってのも。案外ある」

そう言いながら俺が見たのは攻撃を受けながらも前に進もうとし

ている乃木と三好の姿。個々の力はちっぽけだとしても、仲間を思う心は神すらも凌駕する少女たちの姿、そしてその少女たちが神に一矢報いている光景だった

「あいつらが結城の帰る場所を守るなら、俺は……命を懸けて帰る場所を守ってる彼女たちを守る」

どれだけ心ない言葉を受けようとも人々を守り、バトンを繋いだ……俺の大切な仲間たちがそうであったように、そして他でもない。俺の身を案じて一人で四国に行くよう言った大馬鹿野郎みたいに

『ホント、お人好しだね……要は』

「自分じゃ、案外わかんねぇもんだけどな」

身体に刻まれているタタリの紋章が疼く、洒落にならないものが来る……なんとなくだがそれは理解できる。それなら、俺のとるべき行動はシンプル。落ちてきた二人を受け止めに向かう。どうやら犬吠埼妹も同じ考えだったようで落ちてくる二人をキャッチする

「犬吠埼ッ！」

「はいっ！」

そこからは全速力で離脱する、少しばかり諦めた表情をしていた三好と乃木だったが早々に諦めさせるわけにはいかない

「不知火先生、どうして……」

「結城の帰ってくる場所を守るなら、そこにお前らがいないと意味ないだろ……つっても、この調子じゃ少しキツいか」

樹海を焼き尽くしていく炎の速度は想像以上に速い、このままじゃ追いつかれるのも時間の問題だろう。それがわかった俺は声に出さず雪花に問いかける

『雪花、全力で無茶したら。俺はどうなる？』

『私が全力で繋ぎとめて、ギリギリ生きるかどうか』

『そうか、それなら。そん時は頼んだ』

『……ホントにやるの？』

『あぁ、こいつらを生かす為なら……やるだけやってみる』

「犬吠埼！　乃木を頼む！」

雪花にそれだけ伝えると、俺は乃木を犬吠埼妹の方に向けて投げる

と迫ってくる炎の方に対峙する
「ちょっと、何する気ッ！」
「さっさと行け、炎くらい俺が少しは受け止める」
眼前まで迫ってきた炎を旋刃盤で受け止めると、そこで僅かに炎の勢いが停滞した……が、それも一瞬の事ですぐに動き始め、俺の身に卸していた大天狗は光が霧散するように消え、切り札状態が解除される
「まだだッ！　輪入道！　雪女郎！　七人岬！　酒呑童子！　尾裂狐！　そして大天狗ッ！　最後に全員力を貸しやがれぇッ！」
――バキリ
何かが砕ける音がする、今までのように細かく割れていくのではなく、真っ二つに砕けるように、俺の中の何かが割れる。そして、それと同時俺の中に流れ込んでくるのは考えるのも億劫になる程強大な力と、負の感情……正直理性が吹っ飛びそうだが、なんとか堪えて炎の進行を阻む
少しずつ霞んできた視界で後ろを確認すると、あまり影響はなさそうな所まで三人は退避している。それを確認した俺は目を閉じる
「……もう、大丈夫そうだな」
身体を焼き尽くすような感覚に襲われる、片方の視界は真っ黒に染まり、右腕が消失していく……身体の中に留まっていた力が抜けていく感覚と共に、俺は地面に叩きつけられ、意識を手放す
最後に聞こえてきたのは、何かがバラバラに砕ける音だった

勇者の章，6―4　決戦Ⅲ

意識を取り戻し、俺の目に映ったのは一面に広がる青空
「ここは……どこだ……？」
一体ここがどこなのか、自分が何故ここにいるのかを理解できなかった俺は身体を起こした時に、自分の身に起こっている違和感に気付いた。俺の身体を蝕んでいたはずのタタリが消え、戦いで失ったはずの右腕や片目も元に戻っている
「治ってる……けど、不死の力が戻ったわけじゃない……よな」
今の自分に一体何が起こっているのか状況を飲み込む事の出来ない。この場合一番考えられる状況として可能性の高いものは天の神との戦いが終わったか――
「俺が死んじまったか……だよな」
「正確にはまだ死んだわけじゃないよ」
やけに聞き馴染んだ声の方を振り返ると、そこに立っていたのは雪花……だけどこれまで半透明の幽霊モードだったのと違ってしっかりとその姿は目に映っている
「死んだわけじゃないって、どういうことだ？」
最近ずっと一緒にいたからか感動の再会感は全然ないからそこら辺はひとまず置いておいて、まずは一番気になっていることを訊いてみる
「そのままの意味、今の要は肉体と精神が一時的に分離した状態なんだ。それで今ここに居る要は――」
「精神体って事か……それならここってどこなんだ？　俺の送られる地獄にしては随分と穏やか過ぎる気がするんだが」
「えーっとね、ここは何て言えばいいのかな……神樹の中って言うか、微妙に違うっていうか……」
「曖昧な感じだな」
正直な所、ここが何処なのかわからない事には現実世界へと戻る方法の検討もつかない。あっちがどうなっているのかわからない以上早急に戻りたいところなのだが――

「実際に曖昧な世界だからな」
「えっ――」
「久しぶりだな、要」
「若葉……」
「ありゃ、出てきちゃったの？」
「説明をするのに出る必要があったと思ったからな」
　思わぬ人物の登場に少し呆気にとられたが、俺自身僅かな懐かしさを感じつつも思った以上に冷静でいられている
「とりあえず、説明頼んだ」
「あぁ、頼まれた」
　若葉はこほんと咳払いをする。その様子は久しく見ていない光景だったからかやっぱり懐かしい気持ちが溢れ始めてきたりもするが若葉の話に耳を傾ける
「まず、私たちのいるこの世界は樹海と限りなく似た場所だ」
「樹海に限りなく似た場所……って事は、ここも神樹が作り出した場所なのか？」
「それは違う、ここは神樹様の中に内包されてる勇者たちの力で作り出された場所」
「今までの勇者の力で作り出された場所……それなら、どうして俺はここに？」
「……それは」
「要に私たちの力を託すため、だよ」
「お前らの……力？」
　俺に、力を託すって……一体どういうことだ？
「今、勇者部のみんなは神に人として生きる意志を伝えようと頑張ってる。けど……今のままじゃ後一歩足りないかも知れない」
「残酷なようだが、今の彼女たちではあと一歩……」
　彼女たちの意思が神に届かないかも知れない、二人の言っているのはあまりにも残酷過ぎる真実。けれど、それでどうして彼女たちが力を俺に託すのかがわからない
「それで、それがどうして俺に力を託すって答えになるんだ？」

「要には今を生きる彼女たちの背中を押してあげて欲しい」
「今の私たちじゃ、力を……思いを託すことしかできない」
「そう言うことか、でも現実の俺はボロボロな訳だろ？　それで何をするってのも――」
「それなら問題はない。力を託す時に、僅かな時間だが天の神のタタリが無効化できる」
　天の神のタタリが無効化されるって事は、もしかして――
「俺の不死の力が、その瞬間だけ戻るのか？」
「うん、でも本当に僅かな時間だけ」
「いや、十分だ」
　後一歩彼女たちの想いが届かない、それで何も出来ずにバッドエンドなんてのは流石に悲しすぎる。その結末を俺が背中を押すことで帰られるのなら。それをしないという選択肢は存在しない
「俺の方から頼む……お前達の力を、託してくれ……あいつらの背中を、一押しするために、力を貸してくれ」
　そう言って俺は、目の前にいる二人に頭を下げる
「オッケー、託すよ。私の力と、私の想い」
「私も、いや……私たちの力も、要に託す」
　二人がそう言うと、俺を中心に様々色の光が集まり始める。紺、橙、淡黄、濃桃、深紅、緑、紫、白、それ以外にも様々な色が黄金の光で一つになり、俺の中に集まり温かい光に包まれる
「頼んだぞ、要」
「掴んでね、未来を」
「あぁ……絶対に掴み取る。アイツらと一緒に」
　その言葉を最後に、俺の視界は光に包まれた

　目を覚ますと、視界に映ったのは半分が真っ黒になっている空。そこにあるのは相も変わらず天の神の紋章と焦げ付いている樹海。身体を起こしてみると案の定右腕がなくなり目の半分も潰れたまま。唯一違うのは左腕に付けられている中心に虹色の結晶が装飾されて

いる銀色のブレスレット
「確かに身体を蝕んでた倦怠感はない……って事は」
いつもの感覚で少し力を込めるといつもよりゆっくりではあるが消失した右腕と片目が治る……がその直後に襲い掛かってきた倦怠感と共に修復が止まる
「……完璧じゃないが、少しはマシになったか。それなら――」

眼前の神様にアイツらの想いが届くよう、一発ぶちかます。俺のその意思に呼応するようにブレスレットから光が放たれ俺の身体を覆い尽くしていく。白銀の籠手や臑当て、そして胴当てが装着されその上から白い陣羽織を羽織る
武器を持っていなかった手に出現したのは弓と淡く輝く一本の矢……成る程、これを天の神まで届ければいいのか
「それなら、やるべきことは簡単か」
弓に一本の矢を番え、眼前に存在する天の神の中心へと狙いを定める
「ッ、はー……」
呼吸を整える、もしもの事なんて考えない……俺に託してくれた者達の想いを、力を無駄にしない為に
「……届け」
俺も一人の人間として、精一杯の願いを込めて放つ。一直線に放たれた矢は淡い黄色の軌道を描きながら突き刺さる。それを見届けると。個々とは少し離れた場所で大輪の華が咲き誇る
「あぁ――なんというか、ビックリするほど綺麗だな」

その後、咲き誇った華は七色の光と共に、赤く染まった空を砕くそれと同時に始まるのは樹海の崩壊、目に映るのは満開の花を咲かせた神樹――そして、その華が散っていく姿を見ると同時に、悟る
「――長く続いた戦いも、ようやく終わるんだな……掴み取ったんだな、未来を」
ふと横に気配を感じ、そちらを見るともうひとりの俺が立っていた

――ここで立ち止まるのも、いいかも知れないな
「そうだな……それでも、俺はここで立ち止まりたくない」
――三百年頑張ったんだ。もう十分だろう
「いいや、まだまだやりたいことが残ってる」
――ここで立ち止まれば、アイツらに会えるんだぞ
「中途半端な所で立ち止まっちゃ、合わせる顔がねぇよ」
――それならお前は、これからどうするんだ？
「そうだな……とりあえず、行けるとこまで前に進んでみるさ」
――そうか、それなら……行ってこい
「あぁ、行ってくる」
もう一人の俺にそれだけ言うと、一歩前に踏み出した

勇者の章，7　日常

目を覚ますと、俺たちは讃州中学の屋上まで戻されていた。最後の一瞬で何が起こったのかはよくわからないけれど、目の前に広がっているのはいつもと変わらない青空

「生きてる……のか？」

「帰って……きた……」

「世界は――」

「ちゃんと、あるね」

「神樹様は……？」

「消えた……散華？」

自分たちが勝ったのか、どうなのかはよくわからない。けれど今、自分の近くで泣いている友奈の様子を見てわかることは一つ……友奈は犠牲になることがなかった。取り戻したんだ――日常を

天の神との戦いが終わった後――勇者システムは機能を停止した。スマホの画面にはヒビが入り起動することはない。四国を守っていた壁は消え……俺たちの当たり前だった世界は終わりを告げた

壁の中で教授していた平穏も、神樹がいることで得られていた恩恵もすべてなくなり。残ったのはこれからどうなるのかわからない未来だけ

「お待たせ、徹くん」

「お待たせ」

「いや、そんなに待ってない。それより、身体は大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫だよ」

それでも、こうしてまた一緒に歩ける場所を守れたという事実だけで、戦い抜いた価値はあったと思う。そんなことを考えながら、俺は東郷と友奈の二人に並び学校へ向かった。その日のホームルーム

「以上が、大赦から要請があった通達事項です。壁がなくなったことで、これから生活のルールが変わるとのことです。次の通達があるま

で、学校も休校になります――」
「先生、神樹様が枯れんだってニュースで言ってました」
「壁の外には、人が生きてるんですか？」
「まだ調査中とのことだから、滅多なことを言ってはいけません。噂や嘘を言う人が沢山出てくるでしょうけど、くれぐれも惑わされないように」
　こうして事実を突きつけられると、やっぱり自分の心に重く突きつけられるものがある、けれどこれが、俺たちの選択……一を捨てて全を取るのではなく、全を捨てて一を守った勇者の身勝手……駄目だな、こうして考えれば考える程、思考が黒い靄で覆われてしまう

　ゴールドタワー前、この前起こった戦いの後を眺める為に、俺は色々な場所を見てまわっている。有名な所だと剣山。恐らく神樹が最後の力を使って出来る限りで修復を試みたのだろうが、それでも寿命の近かった老木には限度ってもんがある……このゴールドタワーも、修復が間に合わなかった場所の一つなのだろう。何だかんだ思い入れの合った場所を眺めていると、少し離れた場所に見知った顔を二つ見つける
　楠と国土、防人部隊の隊長と巫女だった彼女たちもまた、天の神と戦い未来を選んだ
「これ、全部直すのかな？　プラモみたいにはいかないわよね」
「まだ、何も決まっていないと思います。大赦も混乱したままです」
「……結構な人数が消えたのよね」
「残された神官は、自分の信仰が足りなかったのだと苦しんでいます。防人の皆さんは？」
「待機命令の後も連絡は取りあっているけど、上からの音沙汰はなし。雀なんか家で震えあがっているよ」
　あの戦いで、多くの神官は神樹と一つになる道を選び人としての姿

を失った。現実世界における彼らの扱いは行方不明、恐らくこの事実は公にされることはなく大赦が厳重に保管していくのだろう
「……アプリもエラーが出て使えなくなってる」
「神樹様のお力によって機能していたものは今後使えません」
「……そうね」
「神樹様が消えた事は本当です」
さてと、ずっと盗み聞きしてる状態なのもアレだしそろそろ出ていくか
「随分と、暗い顔してんじゃねぇか」
「不知火さん……」
「久しぶりだな、楠……にしても、随分派手に壊れちまったな」
「そうですね……それより不知火さん、その大荷物は一体――」
「これか？　実は今、四国のあちこちを見てまわっててな、変わっちまったもんを目に焼き付けてるところ」
「……まさか、私たちの代でこんなことになるなんて思いもしませんでした」
「だろうな、正直、俺もこうなるとは思ってなかった」
「……祈ることも罰を受けることもできない。私もこれから、どうしたらいいのか」
国土は巫女として生きてきた。だからこそ神樹が――信仰の対象が消えてしまったという事実が影を落としてしまっているのだろう
――っと、考えていた所で手に付けていたデジタルウォッチから電子音が鳴る
「っと、時間か……俺はもう行く」
「えっ？　はい……わかりました」
「そんじゃあな」
あの二人の事も気になるが、とりあえず今は次の目的地に向かおう
俺が次に向かったのは讃州中学、ゴールドタワーからは結構な距離

はあったが今の俺にとっちゃ特に問題はない。というよりもあの戦いの後に元々持ってた不死の力を取り戻したのに加えて、だいぶ体力やらなにやらが上がっているから問題はない。それに加えてあいつらから託された力の結晶であるブレスレットも左腕に残ったまま

「……まぁ、これで何が出来るのかもよくわかんねぇけど」

あの時みたいにあの鎧と陣羽織を纏えるだけなのか、それともももっと色々な力を持っているのかわからないがそこら辺は追々だろう……っと、目当てのやつがいたな

「おーい、八重樫」

「……えっ？　師匠？」

「この前ぶりだな」

「本当に……師匠ですよね？　幽霊とかじゃないですよね？」

「幽霊なわけねぇだろ……っと、そんなのは置いといて、お前にちょっと渡したいもんがあってな」

「渡したいもの？」

「あぁ」

そう言って俺が八重樫のように渡したのは事務所の鍵、正直今の俺にゃあんま必要ないし。まぁ渡された本人は困惑したような表情を浮かべてるけど

「あの……この鍵って」

「ウチの事務所の鍵」

「スペアキーとかですか？」

「いいや、俺スペアとか作らない主義だし……と言うことで、ウチの事務所今度からお前が自由に使っていいぞ」

「自由にって……それじゃあ師匠は何処に住むんですか!?」

「それはまぁ、心配すんな……それに事務所もそろそろ畳もうと思ってたし。そう言うことで任せた」

「いきなり過ぎますって！」

「ローンは全部返したから心配すんな、そんじゃ頼んだぞ」

「ちょっと、師匠――」

「あぁ、そうだ。八重樫……あんま思い悩むなよ、未来は誰にもわ

からないからな。どんな未来も――お前が動けば掴み取れる」
それだけ言い残すと、俺は八重樫に背を向けて歩き始めた

93話―未来―

3月――混乱していた世界もわずかながら落ち着きを取り戻した。
それでも拭いきることのできない不安を紛らわすために様々な人が様々な行動をするけれど、勇者部は概ね平常運転
唯一変わったことはあるとするなら――
「そ、そそ、それでは、勇者部部会を始めたいと思います」
先代部長の風先輩が引退し、樹ちゃんが新部長に就任したことだろう
「今日は、来たる新年度四月からの活動について、検討したいと思います！」
「新部長緊張してる？」
「は、初めてのことなので」
「ファイト！」
「は、はい！」
ビックリするくらいカチカチの樹ちゃんを友奈が励まして、東郷が書記。そして今回の議題が――新しいボランティアについて
「社会の仕組みが変わってきたから、私たちの活動も考えないと」
「確かに、これからの勇者部は何をするのが一番いいのかって事よね、でもさ、なんでアンタが居るのよ」
そう言って夏凛が向けた視線の先にいたのは風先輩、讃州中学の制服ではなく普通の私服だが、先代部長は相も変わらず勇者部部室にやって来ていた
「何よ！　OGよOG！」
「めんどくさい寂しがりや……」
「なに！　文句あるの!?　ねぇってば――」
「はいはい、好きにしなさいよ」
「生活習慣は変わっても、騒がしいのは変わらないなぁ」
「まぁ良いんじゃない、楽しいじゃん」
だだっこモードになってた風先輩だが切り替えの早さは相変わらず、パパっと切り替わって樹ちゃん応援モードになるのだが……当の

本人が若干呆れ気味なのは置いておいて良いのだろうか
と言った所で園子が取り出したのは正月に見つけた鍬だった
「あのね、いっつん。これからの事なんだけどね、これ、覚えてる？」
「あっ、お正月の！」
「師匠が言う所の西暦の勇者たちからのバトンだな」
「バンドの次は何？　畑でも作ろうって言うの？」
夏凛の言っているバンドとは、東郷ブラックホール事件の前に色々やってたうちの一つだ。因みにその色々やってたという中には勇者部仕様のバンを作ったり、サバゲ―やったりキャンプしたり本当に色々やっていた
「当たらずとも遠からず、あのね……よく聞いて、これが最後の秘密――いろいろ言われているけど、本土に人はもういないの」
「……続けて」
「不知火さんに聞いたんだ、これをご先祖様に託した。白鳥歌野って言う勇者の事を」
そこから園子が話してくれたのは、師匠から聞いたらしい白鳥歌野という人物のこと。師匠も関わり自体は無かったら乃木若葉から聞いた話だって前置きを付けてから園子に彼女の事を話したらしい
「初代勇者――白鳥歌野は、諏訪地方で最後まで戦った。四国を守る最後の時間を稼ぐためにね」
「ひょっとしてその鍬が、凄い武器って事？」
「この鍬が？」
「業物って、一見地味なモノよ――」
「残念、ビックリするくらい普通の鍬なんよ」
当てが外れた夏凛の顔が真っ赤に染まる。流石にこのミスは恥ずかしい……というかフリーズしたまま動かなくなってる
「でも、どうして白鳥さんはその鍬を？」
「乃木の若葉ちゃんが言ってたんだって。神樹の勇者は戦う事が本懐じゃないんだって、戦いが終わった後、元の暮らしに戻れるよう頑張ること、それが勇者の本懐」
「じゃあ白鳥は、戦いの事を忘れないようにそれを？」

「うん、大赦もね、元々はそういう思いで表舞台に出てきたと思うんだよね」

　長い時間を経て体質が変わって行ってしまった。と東郷は言った。現大赦のトップである家系が乃木と上里である以上、組織そのものを作ったのは他でもない初代勇者……けれど、それがここまで変わってしまった。それは酷く残酷な事だけれど、同時にどこか仕方のないことなのではと思えてしまう

「でも、脅威とは誰かが戦わなければならない。甘いこと言っていたら全滅していたわ」

「それはそう。でも、神様と一緒に人間も消えちゃおうなんて選択……白鳥ちゃんたちも怒ると思うんよ」

　と、ここまでは良かったのだが問題は次に園子が発した言葉

「それでね！　私良い事思いついたんよ！」

「良い事？」

「大赦をぶっ潰す！」

「アンタまた極端な!?」

「流石にスケールがデカすぎるだろ……でも何だろう、どっかで聞いた事あるような……」

　すんごいデジャブを抱えてながらとある方向を見ると、顔を青くしている東郷と何か思い出したくない記憶を思い出している様子の風先輩が目に入る。そう言えばあの二人も手段は違えど大赦潰すのと似たようなことしてたっけか

「ぶっ潰せるの？」

「そこ気にするところ？」

「今の混乱に乗じて、乃木園子の特権と私が放った草を最大限利用すれば――」

「ちょっと待っただ、園子」

「そうよ、ちょっと興奮するクーデターだけど落ち着いて、もう争いごとはダメよ」

「うーん、今、超グダグダな大赦に任せておくと、またじゅくじゅくして間違った事しちゃうと思うんだ。だったら私が」

園子が何を言いたいのかわかった。確かにこのままじゃ人間はまた間違った道を選択してしまうかもしれない。だから彼女は自分が犠牲になろうとしているんだろう。けれど、それに対して疑問を投げかけたのは、他でもない樹ちゃんだった

「園子さん、そうすることが、初代勇者の想いに繋がるんですか？　人間の暮らしが元に戻るように頑張るのが勇者だとしたら、若葉さんや白鳥さんを想うのでしたら――」

少し顔を伏せた樹ちゃんだったが、決意をした瞳を園子に向ける

「わかりました！　讃州中学勇者部は！　これからもっと勇者部になります！」

「えっ？」

「変身なんかできなくても、人の為に出来ることは沢山あります！　今、不安になってる人、困ってる人、大勢います。そんな人たちの為に、率先して世の為人の為になることを続けます！　それが私たちの方法です、それじゃダメですか？」

「だ、だめじゃないです」

「だから園子さん、もう危ないことはやめてください。私たちは中学生なんです、勉強も部活も青春も、大切なモノは沢山あるんです」

「うん……わかったよいっつん」

「……良かった」

知らない間に、すっかり成長していたらしい樹ちゃんと、平和的に大赦を見守るという何とも少し不安なような気がする返答に困惑しながらも、なんとか収まるところに収まったらしい

これから大変なことは沢山あるのだろう、けれどきっと何とかなる。窓から見える青空に目を向ける

――師匠、勇者部はこれから問題なさそうです……俺たちこれから頑張っていきます！

勇者部は今日も、平和に張り切っていきます！

……そう言えば、師匠は一体どこに居るんだろう

日本本島――旧諏訪地方

「ぶぇっくしゅん！　風邪か？」

必要なものを最低限まとめたリュックサックを横に置き。目の前にある小さな墓に手を合わせる

「取り戻しましたよ、先輩。世界を」

――随分と、長旅だったみたいだな

「えぇ、本当に……長い旅でした。けどまだまだこれからです、いろんな場所、いろんな世界を巡ってみようと思います」

風邪に混じって聞こえた、幻聴かも知れない声にそう答えると、リュックサックを背負い直して空を見上げる

「よし、次の目的地は――北海道だな！」

どんな場所、どんな世界でも助けが必要なら向かう。青い空の下に歩き始めた

不知火之日常

日常ノ壱

丸亀城を離れてから既に一か月、根無し草だった俺も大赦から紹介された事務所兼家屋を買って今は何でも屋として生計を立てている。依頼はまだ少ないが着実に増えている・・・と言っても依頼の大半はペット探しなのだが、それでも依頼がないよりはマシだろう

「今日の依頼は、迷子の亀探しくらいか・・・って亀!?」

ペット探しは主に犬猫であるが偶に迷い鳥探しは来る・・・けれど迷い亀は今回が初めてだ

「それ以外だと遠足の引率の手伝い・・・これは幼稚園で期日が一週間後か。後で連絡入れとかないとな」

事務所の安楽椅子に座りながら固定電話に手を伸ばそうとしたところで事務所の扉が開かれる

「お客さんか、珍しいな・・・ってなんだ、若葉にひなたか」

「久しぶり・・・と言うほどでもないか」

「こんにちは、要さん」

椅子から立ち上がった俺が事務所の扉を開けるとそこに立っていたのは見知った二人、乃木若葉と上里ひなただった。定期的に会う事のある二人だが用もないのに押しかけてくるタマやそれに付き添ってやってくる杏とは違い、二人は滅多なことが無いとここには来ないのだが・・・来たという事はそれなりに重要な案件なのだろう

「とりあえず、中に入ってくれ・・・二人とも緑茶で良いか?」

「ありがとうございます。ですが、そこまで気を使って頂かなくても」

「親しき仲でもお客人だ・・・家主が茶を出すのは当たり前だろ」

ひなたにそう言うと来客用の湯呑にお茶を入れ、保存していたお茶請けのカステラと一緒にお盆に乗せて二人の元に戻る

「ほい、お待ちどう」

「お茶だけじゃなく、お茶請けまで・・・ほんとに気を使わなくていいんだぞ?」

「依頼人もあんま来ないし、そのまま置いておくとちょこっと顔出したタマに茶請けは食われるからな。こうやってお客さんに出して食べてもらった方が茶請けも喜ぶだろ」
「それなら…　有り難く頂くとする」
「そうですね、いただきます」
　三人で茶を飲んで喉を少し潤すと、改めて若葉たちに要件を聞くことにする
「それで、どうしたんだ…　事務所まで来るとなったら割と急ぎの用だろ？」
「いえ、今日はたまたま近くに用があったので若葉ちゃんと少し顔を見に行こうという話になりまして」
「成る程な、マジで近くに来たから寄っただけか」
「もちろんそれだけが目的じゃないぞ…　要にも少し意見を貰いたいことがあってな」
　そう言うと若葉はカバンからホッチキスで止められた書類の束を取り出すと俺に渡してきた。ざっと目を通してみるとどうやら勇者システムに実装したい機能の企画書のようだが…
「…　これはボツだろうなぁ」
「何故だ!?」
「いやうん、いいとは思うよ？　友奈とかタマは賛成しそうだし…　ただ、ねぇ」
「私としても良い案だと思うんですけどねぇ」
　二人が提案してきたのは、勇者システムに若葉…　と言うか初代勇者の音声データを搭載するというものだった、題して初代勇者応援プロジェクト。個人的にこういう前向きなのは大好きなのだが十中八九却下されるのは目に見えている
「企画にも気合いが入ってるし、メンタル的にヤバくなったら応援するってのも良いとは思うんだけど…　割と逆効果になる可能性もあるからな」
「逆効果？」
「何と言うか、集中しきれないというか…　集中力が切れた時に聞こ

えて来ちゃうと、結構邪魔になるというか…　メンタル的に弱かったら応援は逆にその子を焦らせるというか…」

　自分なりに言葉を選びつつ答えたつもりだが、若葉が少しずつ沈んでいるのが目に見えてわかる

「まぁ、これはあくまで俺一人の意見だし…　提案したら絶賛される可能性もあるんじゃ…」

「実は既にボツになった後なんです」

「じゃあなんで俺に見せたぁ！」

　既にボツになった後の資料を俺に見せて一体どういうつもりだ、こいつらは

「色々と意見を聞いてみたかったんです…　友奈さん達にはすぐ会えますが、千景さんと要さんに会うなら少し時間を調整しないといけないので」

「まさかと思うが、お前らの今日の用事って」

「はい、千景さんにも意見を貰いに行ってきたんです」

「どうだった」

「…　要と同じだ、これはボツになるだろうと言われた」

　案の上だったか、この様子だと友奈やタマあたりは賛成して、杏は賛成だが微妙な顔をしていたに違いない。ここで時間を確認すると既に１５時を回っていることに気付いた

「悪い二人とも、この後依頼が入っててな…　今日はこの辺りでも構わないか？」

「いや、急に押しかけたのはこちらだ。すまなかったな」

「ほんとにすまないな、積もる話をするときはこっちから行くから」

　そう言うと俺はお茶を飲み干して外に出ていこうとする

「そうだ！　若葉ちゃん、どうせなら少しだけ要さんのお仕事を見せて貰うのはどうでしょう」

「ひなた？」

「は？」

「友奈さん達や千景さんはどういう事をしているのか知ることはできますが、要さんのお仕事を見る機会は中々ありませんから、良い機会

です」
「…　要、構わないか？」
「俺は別に良いけど、見て面白いもんでもないぞ？」
「構いません、行きましょう若葉ちゃん！」

　三人で事務所を出た俺達は、依頼主の家まで向かう
「そういえば要さん、報酬はどうなっているんですか？」
「まぁ色々だな、金銭の時もあるし野菜とかの時もある、場合によるが無償の時もあるし」
「無償って…　それで成り立つのか？」
「人の善意を信じてんだよ…　と言うより半分くらいボランティアだからな、俺の仕事」
「ボランティア…　ですか」
　ぶっちゃけると今住んでる事務所も大赦紹介でだいぶ安く買わせてもらってるから僅かではあるが退職金は残っている。人によっては気前よく払ってくれるし、偶にだが肉や野菜、魚と言った食料をおすそ分けに来てくれる人もいるから案外生活には困っていない
「それに、ウチの事務所は　誰かの為になることを勇んでやる　がモットーだからな…　信頼を得るにはまず信用されて行かないと」
「誰かの為になることを勇んでやる、素敵ですね」
「そうかい…　っとここか、すいませーん」
　依頼主の家まで到着した俺は外から声をかけると中から三十代くらいの男性が出てきた
「君たちが何でも屋さん？」
「俺たちって言うか俺ですね、後ろの二人は…　俺が借りている事務所の大家さんみたいなもんです。仕事ぶりを見たいらしいんで同席させても構いませんか？」
「そんなに秘密にする必要もないし、構わないよ」
「ありがとうございます」

応接間に倒された俺は改めて依頼主さんに挨拶をする、若葉とひなたの二人は俺の少し後ろで正座をしている
「改めまして、何でも屋しらぬいの不知火要です」
「家主の犬吠埼陸です。今回は依頼を受けてくれてありがとうね」
「いえ、それで依頼は…　迷子になった亀の捜索でいいんですよね」
犬吠埼さんから話を聞いたところ、彼の飼っていた亀は奥さんと行った祭りの亀すくいで見つけた亀らしく、夫婦で大事に育てていたらしい。
その亀が昨日、水槽の掃除をしていた時に逃げてしまい探して欲しいというものだった
「分かりました、逃げたのはどの辺かわかりますか?」
「水槽の掃除をしていたのが裏庭の水場で、その時亀は近くの桶の中に入れてたんだ」
「なるほど、絶対に見つけるので待っていてください」
「頼むよ、私と妻にとって思い出の亀なんだ」
犬吠埼さんの家から出た俺は、携帯の地図アプリを起動してこの近辺で亀の生きそうな場所に目印をつけていく。こういうとき多機能な携帯電話は重宝する
「要…　大丈夫なのか?」
「ん?　あぁ、心配はない…　大体何処に居そうかは予想ついてるし」
「そうなんですか?」
「今頃は丁度亀の産卵期だからな。犬吠埼さん達もかなり愛情を込めて育ててたみたいだが、見せてもらった水槽の中に土が入ってなかったから多分産卵場所を探しに行ったんじゃないか?」
「あの夫婦が飼っていた亀が雌だという確証はあるのか?」
「ない、だからとりあえずこの近所で産卵に適してそうな場所を潰していっていなかったら、亀が好みそうな場所を潰していく感じだな…　これで逃げたのが一昨日とかだったら難しかったが、昨日ならまだ探しようがある」
そう言うと俺たち三人は近い順に、亀の好みそうな場所をしらみつぶしに当たっていく

「そういえば要さん、どうしてそんなに亀の生態に詳しくないですか？」
「以来のほとんどがペット探しだからな、依頼主が引き取りに来るまでの間預かることも多いし・・・　結構ペットショップに行くことが増えたんだよ、その家々によってペットフードも違うし」
「なるほどな、だがそれがどうして亀の生態に繋がるんだ？」
「ペットも犬猫だけじゃなくて、鳥にハムスター・・・　果ては今回みたいに亀。だからそのペットショップの人に生態を聞くことも多いんだ、行きつけの場所には動物博士みたいな人もいるから・・・　っと、ここもハズレか」
　若葉たちと話をしながら、手当たり次第に探してみるが、当たりを付けた場所は残り三か所。ここで見つからなかったら更に捜索範囲を広げる必要が出てくるかも知れないな等と考えながら次の場所まで向かう
　やって来た場所は他よりも草が伸びており、日の当たる場所は少なかった
「あたりっぽいな」
　水辺に近い場所の草を払いのけるとそこに一匹の亀が居た、少し不安だったが無事見つかってよかった。少し窮屈かも知れないが亀を移送用の籠に入れて出来るだけストレスを与えないように犬吠埼さん家まで戻った
「ありがとうございます！」
「いえ、本当に見つかってよかった・・・　報酬はいりませんから、代わりにその子の為にもっと大きい水槽を買ってあげてください」
「わかりました、本当にありがとう」
「それじゃあ、失礼します」
　そういって俺達三人は犬吠埼さん家から出て歩き始める
「これが要さんのお仕事なんですね」
「あぁ・・・　と言っても仕事になってるのかわかんねぇけどな」

「だとしても、誰かの為になる仕事であることには変わりない…　いい仕事だと思うぞ」
「そうかい…　それじゃあ俺はこっちだが、お前らは駅の方だろ、送るか？」
「いえ、若葉ちゃんがついているので大丈夫です」
「了解、それじゃあな」
「はい、また」
「時間が出来たら今度は私たちの仕事も見に来てくれ」
「まっとうなお役所仕事見に行くわけにはいかねぇだろ、行くなら千景も誘って普通に遊びに行くよ」
そう言うと俺は二人と別れ一人、事務所への帰路につく
今回のように仲間たちと会う機会は少なくなったけれど、これが俺の日常であることを胸を張って誇ることが出来る

日常ノ弐

「えーっと、今日は・・・　急ぎの依頼もなし」
　依頼書の束を見ながら、そう呟くと今日の予定を考え始める。普段なら依頼が溜まっていることの方が多い為こういう事は珍しい、何かやる事は無いかと席を立つと来客用の茶葉が切れていることに気付く
「そういや茶葉を買い足しに行こうと思ってたの忘れてた・・・どうせ暇だし今から行くか」
　ぱぱっと余所行き用の服に着替えると、事務所の鍵を閉めて行きつけのお茶屋さんがある商店街に向かう

「おや、不知火君じゃないか」
「お久しぶりです、おばあちゃん」
「いちいち畏まらなくても良いよ、いつものだよね？」
「あぁ、いつもありがとな」
「気にしなくていいよ、こっちも仕事だからね・・・いつもの２００ｇ、１６００円だよ」
「それじゃあ２０００円で」
「４００円のおつり、また来ておくれよ」
「言われなくても、ここ以外じゃ茶葉は買わねぇよ」
　茶葉の入った袋を受け取りながら婆さんにそう言う
「はっ、そんな事言われても割り引いたりはしないからね」
「元から期待してねぇよ、じゃあな」
　お茶屋から出ると、冷えた風を感じつつ商店街を歩く
「それにしても、もう冬か」
　冷え切った風を感じていると、雪花と一緒にいた時の事を思い出す。向こうはこっちと違って年中これくらいの寒さだったなと考えて、少し変な気分になる
　思えば俺もすっかりこっちの生活に慣れきっているな等と考えながら商店街を歩く

「…　要君？」
　声をかけられて振り返ると、そこにはコートを着て片手にゲーム屋の袋を持っている千景が居た
「千景か、久しぶりだな」
「…　そうね、要君はここで何を？」
「来客に出す用の茶葉がなくなってたからな、買い足しに来た。そういう千景は？」
「…　私は、新作の発売日が今日だったから」
　どうやら彼女は新作ゲームを取りにここまでやって来たらしい、千景の隣に並んで歩いていると彼女が俺に話しかけてくる
「…　最近は、どう？」
「最近か、まぁボチボチだな。俺の仕事は信用第一だし、でもま、食いっぱぐれない程度には生活できてる。そっちは？」
「…　私も似たようなものよ」
「千景は、配信者だっけか？」
「…　えぇ、最初の頃は批判も多かったけど、もう慣れたわ」
「そうか」
　彼女は戦いの後、自分のやりたいことをすると言って電子の海に飛び出した。動画投稿サイトで主にゲームの生放送や実況動画を上げている、確かに最初の頃は批判もあったが、今はすっかり固定ファンもついてかなりの人気を獲得している…　因みにだが俺もチャンネル登録していたりする
「そういえば、高嶋さん達と久々に会ったわ」
「会えてなかったのか？」
「…　ええ、中々時間が取れなかったから」
「どうだった、久々に会った感想は？」
「…　すごく、安心したわ。それと懐かしい気持ちにもなった」
　黙って千景の話を聞いていた俺の方を向かず、言葉を続ける
「不思議ね…　まだ半年しか経っていないのに、皆で暮らしていた時のことが凄く昔に思える」
「…　あの時は俺たちも全力だった。けどその分充実してたのかも

な」
「・・・そうね」
雪花と暮らしていたあの場所と同じくらい、今の俺にとってはみんなの居るこの場所も大切な居場所になっている事を、千景の言葉で改めて実感する
「もう、分かれ道ね」
「そうだな、それじゃあ・・・またな」
「えぇ、また」

千景と分かれた俺は一人事務所に戻る
事務所の中へ戻る前にポストの中を確認すると一通の手紙が入っていた
「東郷堅持・・・誰だ？」
見知らぬ名前の書かれた手紙を確認するのと冷えた身体を温める為に事務所に戻った俺は、自分用の茶葉を使って茶を入れると飲みながら手紙を読み始め・・・少しだけ動揺する
「マジかよ・・・」
東郷堅持という人物から届いた手紙の内容はシンプルだった、自分の妻に会って欲しい。それだけの内容だが彼の妻と言う人物の名前は俺にとって縁の深い人物だったから
彼の妻の名前は東郷紫・・・旧姓は不知火、俺の姉貴だ
手紙には丁寧に住所と電話番号も書かれていたが、正直今さらあってどうにかなるのか、何を話すのかという気持ちが強いがそんな事はどうだっていい・・・問題はどうして手紙を送ってきたのかだ。偶然どこかで俺の名前を知って手紙を書いたのか、それとも俺の名前が公表された時点から手紙は送られ続けていたが、大社によって俺の元に届く前に止められていたのか。正直後者の可能性が高い気がする
「讃州・・・ね」
合わなくても問題ない気もするが、姉貴が生きているのなら兄貴について何か知っているかも知れない・・・両親以外の家族の動向が知れると考えるとあってみても良いかも知れないな

そう考えた俺は、暫く留守にする旨と、急ぎの用の場合は電話をするようにと張り紙をして讃州まで向かうことにする…　前に先方に確認を取っておくのが常識か

そう考えた俺は固定電話を使って東郷という人物に連絡を取る

日常ノ参

徒歩と電車を使って、俺が降り立ったのは讃州市
こっちの方には来たことが無かったから少々新鮮だ、ホントの所は自転車でサイクリングと言いたいところだがいつ迷子ペット探しの依頼が入るか分からない以上、出来るだけ早く帰れる交通手段の方が良いと思い今回は電車だ。最悪能力使って全力で帰るから問題はない…そうした場合周りの目が少々悲しいことになりそうだが、そうなった場合の最優先事項は飼い主と迷子ペットの再開であるから問題はない
「失礼、君が不知火要くんかな？」
一人駅前で待っていると、中々に威厳を感じさせる男性が俺に話しかけてきた
「はい、不知火要です」
「今日は来てくれてありがとう、東郷堅持だ…詳しい話は車の中でしよう」
「わかりました」
俺は近くに止めてあった車の助手席に座ると、運転席に座った東郷さんが車を出発させる
「…そういえば、どうして俺の事を知ってたんですか？」
「元々家内から聞いていた。年の離れた弟がいると…まさかこんな形で合うとは思わなかったがね」
「そうですね」
会話が弾むこともなく暫く車に揺られていると、新しい木造の屋敷が見えてくる
「ついたぞ、ここだ」
「随分立派なお家ですね」
「これでも頑張って働いてようやく建てた一軒家だからね」
車を止めて二人で家の中に入る
「お帰りなさい、あなた」
「あぁ、ただいま」

家の奥から歩いてきた人物を見て、俺は少し呆然とする
「…誰？」
「あら、誰っているのは流石に失礼じゃない、要？」
「姉貴…なのか？」
奥から出てきた人物に呆然とした理由は簡単である、奥から来たのは和服を着こなした古き良き大和撫子的な女性だったから。俺の知っている姉貴は言い方が悪いがもう少しケバかったしチャラついていた
「いや、すまん…あまりのイメージチェンジに少し思考が」
「まぁ気持ちは分かるけどね。何年も会ってなかった訳だから」
「積もる話もあるだろうが、そろそろ中に入ろう…家内の身体に障る」
東郷さんのその言葉を聞いた俺は応接間に通される
「そうだ、お茶とか用意しないと…」
「久しぶりの再会なんだ、そのくらい俺がやる」
そう言うと東郷さんはそそくさと応接間を出ていき俺と姉貴の二人だけになる
「いい人だな、東郷さん」
「今は私も東郷なんだけど？」
「苗字が変わっても姉貴は姉貴だろ、魔法みたいなイメチェンしてもな」
「それもそうね…でも、本当に無事で良かった」
姉貴のその言葉を聞いた俺は聞かないといけない事を改めて聞くことにする
「そういえば姉貴…兄貴はどうなったんだ？」
「兄さんは…亡くなったわ」
「そっか。やっぱり事故か？」
「いえ、丁度半年前に病気で」
「…そうだったのか」
「えぇ、兄さんも貴方に会いたがっていたわ」
「なら、後で兄貴の墓を教えてくれ…せめて俺が元気だって事ぐら

い自分で報告したい」
「わかったわ」
そうして話していると、東郷さんが二人分の湯呑をもってきた
「ありがとうございます」
「ありがとう、あなた」
「気にしなくていい、私は居間にいるから何かあったら呼んでくれ」
「わかったわ」
再び二人になった俺たちほとんど同じ動作で湯呑に口を付ける
「そういえば、姉貴のは白湯なんだな」
「えぇ、今が一番身体に気を使わないといけない時期だから」
そう言うと姉貴はおなかに手を当て優しく撫でる
「マジか…」
「えぇ、マジよ。要叔父さん」
「おじさんはやめてくれ… 結構キツい」
二人で少し笑いあうと今度は姉貴の方から俺に質問を投げてくる
「要は… 今何してるの?」
「何でも屋」
「何でも屋?」
「あぁ… 誰かの為になることを、勇んでやるをモットーに日々近所の人たちの為に右に左に。意外と充実してるよ」
「… 収入は?」
「まぁ一人で暮らす分には問題ないレベル、事務所は大赦からの紹介で格安で買ったし」
「… いい、要。出来る事なら早急に安定した職に就きなさい」
「急にどうした?」
「いいから… 貴方もこれから先、恋人の一人や二人出来るでしょう。そんな時に貴方が甲斐性を見せないと」
やばいな、暴走モード目をしてる… これは暫く止まらない気もするが、一応言っておくか
「いや、恋人とか作る予定ないから」
「黙らっしゃい! 良い、私はね… 要にも幸せになって欲しいのよ」

「いやぁ…　しばらく独り身でいいかなぁって言うか考えるのは速いかなぁって」
「馬鹿ね、兄さんなんて小学生の時にはもう将来の相手を見つけようとしてたわよ」
「いや、マセすぎだろ兄貴、小さい頃から何考えてんだよ…」
　まさかこのタイミングで兄貴に関する衝撃のカミングアウトをされると思ってなかった
「というか、生活は大丈夫だって。大赦…　というか大社から退職金はふんだくったし」
「なら良し」
「そう言うと思った…　にしても姉貴は聞かないんだな、何をしてたのか」
　俺がそう言うと姉貴はあっけらかんと言った風に答える
「どうせ勇者様と一緒に戦ってたんでしょ？」
「どうせって…」
「だってそうでもしないとアンタ一人で壁の外から帰ってこれるわけないし、一応これでも祖父母は神職よ、その程度で今さら驚きもしないし、会おうとしても会えなかった理由を考えるとそれくらいしかないからね」
　相変わらず、変に割り切っているというかこざっぱりしている人だと思うよ
「そういえば、要。今日はどうするの、止まっていく？」
「どうすっかな…　悪い、電話だ」
「気にしないで」
　携帯を取り出して画面を見るとタマの名前が表示されていた。いつもなら電話なんてかけてこないし急な用事でもあるのだろう
「もしもし、どうかしたのか？」
『要！　今どこにいるんだ！』
「何処って、張り紙に書いてあんだろ？　用事で讃州」
『いつ頃帰ってくる!?』
「わからん、用事もないし明日くらいにって…　そっちこそ急な要件

だろ?」
『早く帰って来てくれぇ！　寒すぎて凍え死ぬぅ！』
「自分の家に帰って身体温めて寝ろ！」
『ちょ?　かな―』
　タマからの電話を切ると、今度は杏に電話をかける
「もしもし、杏か?」
『要さん、どうかしたんですか?』
「さっきタマから電話があったんだが、事務所に入れなくて困ってるそうだ。引き取ってくれ」
『タマっち先輩、逃げたと思ったらやっぱり要さんの事務所に・・・って要さん、もしかして事務所にいないんですか?』
「あぁ、用事で讃州に来ててな」
『そうなんですね、とりあえずタマっち先輩の事はわかりました。通報ありがとうございます!』
「通報って、タマのやつ一体何をやらかした」
　杏からの電話を切った俺はそんなことを思いながら、席に戻ると姉貴がキラキラした目で俺の方を見てきた
「ねぇ要、どっちが本命?」
「そんなんじゃねぇ！　勘違いすんなアホ姉貴!!」

　その日は東郷家に泊めてもらった翌日、俺は姉貴から教えてもらった兄貴の墓にやって来ていた
「えーっと、ここ・・・か?」
　墓地を歩いていくと、兄貴の墓であろう目の前に一組の親子が立っていた
「あの、ここって藤原巧さんのお墓であってますか?」
「えぇ、そうですけど・・・貴方は?」
「俺は藤原巧さん・・・というか不知火巧さんの弟の不知火要です」
「貴方が・・・あの人の弟さん。言われてみれば、確かにあの人の面影

があるかも」
　そう言ってくる女性の横にいた子は俺の事をじっと見ていた
「花…　供えても良いですか？　ようやく会いに来れたので」
「えぇ、あの人も喜ぶと思うから」
　女性の許可を取った俺は、墓に花を供えると手を合わせる
「兄貴、会いに来るの遅くなってごめん…　姉貴から兄貴のこと聞いてさ、一応顔見せと報告に来た。半年くらい前には色々あったけど、今の俺は楽しくやってるよ…　こんな形になっちまったけど、会いに来れてよかった」
　そこまで言うと俺は、立ち上がって二人の前まで戻る
「ありがとうございました」
「いいえ、私の方こそありがとう…　わざわざ主人に会いに来てくれて」
「…　お母さん、この人だれ？」
「この人はね、パパの兄弟…　貴方の叔父さん、かな」
「…　初めまして、俺は不知火要。君は？」
「藤原…　智花」
「智花ちゃんか…　智花ちゃんはお父さんのこと好き？」
「うん！　大好き！」
「そっか…　よかった…」
　智花ちゃんのその言葉を聞いた俺は安心すると、二人に頭を下げて駅まで向かう
　形は違えど、兄貴にも…　姉貴にも会うことが出来たし、これからは会いに来ようと思えばいつでも会える。だから今は帰ろう、俺の帰る…　俺の家に
「それにしても結婚とか恋人ねぇ…　いや、ないな、ないない」
　昨日姉貴にさんざん言われて少し意識をしたが結局の所、今は考えても仕方ないと結論付けて。俺は再び帰路につく

日常ノ肆

「準備はいいか、要」
「オーケーだ…　全力で行くぞ」
　久々にやって来た大赦管理の訓練場、俺と若葉は互いに訓練用の刀を構え向かい合う
　どうしてこんなことになったのかを話すには、今よりも五時間ほど前…　具体的に言うと俺が優雅なモーニングを楽しもうとしていた時まで時間を巻き戻す必要がある

　現在時刻、午前七時
　目を覚ました俺は事務所のキッチンを使い朝食を作っていた、普段は食パンを焼いてイチゴジャムを塗るだけなのだが今日は朝から興が乗り和食でも食べようと思い立ちシャケを焼いている
「…　丁度いい感じか」
　既に完成させていた味噌汁を再び温めながらシャケに丁度いい焼き加減がついた事を確認する、更に盛り付けていく
「完璧だ…　これぞ古き良き日本の朝食」
　白米、焼きシャケ、味噌汁…　想像する限り完璧に近い日本人の古き良き朝食を見て一通り満足した俺は手を合わせる
「いただきます…　うまい」
　一口食べた瞬間に、今日も一日頑張ろうという活力が湧いてくるのを感じる…　やはり普段からこうやってちゃんとした朝食を作るべきなのだろうか等と思案していると事務所のチャイムが鳴る、一度朝食を食べる手を止めて箸を箸置きに戻して入口まで向かう
「はーい、どちら様ですかー？　新聞の勧誘なら間に合ってますけど」
「あぁ、起きていたか」
「若葉？」
「朝早くから連絡もなしにすまないな」

「いや、それは気にしなくてもいいけど…　まぁいいか、とりあえず話は中で聞く」
　とりあえず若葉を依頼人用のソファに座らせると、湯呑にお茶を入れて目の前に置く
「食事中だったか？」
「時間が時間だしなってそれは良いんだよ。こんな朝早くからどうした？」
「実は要にも協力して欲しいことがあってな」
　そう言うと若葉はいつぞやと同じように、資料を俺の方に渡してくる
「また初代勇者応援計画だか何だかのトンチキな奴じゃねぇよな」
「トンチキは酷くないか!?　…　んんっ、今回はいたって真面目な内容だから安心しろ」
「あいよ……　これマジで言ってるのか？」
「あぁ、少なくとも他の幹部は本気だ」
「疑似勇者計画ねぇ…　こんなもん作ってる暇があったら正規品の勇者システムを強化した方が良いと思うんだが」
「私もそう思うが、勇者以外にも戦える力は必要だと考えているらしい」
　随分と好戦的だ事で、そんな事を思いながら俺は書類を若葉の方に返す
「まぁ大まかには理解したが、俺は何をすればいい？」
「私と戦ってくれ」
「はい？」
「だから、私と戦ってくれ」
「それはアレだよな…　データ収集が目的だよな」
「最初からそう言ってるつもりなのだが…」
「主語が足りてねぇんだよ」
　…　と、まぁこんなことがあり俺と若葉は模擬戦をすることになった。少しでも多くのデータを取る為にお互い全力で臨む事なんてお達しもきたがそんなの当たり前だろう、せっかくマジで若葉とぶつか

れる機会を貰ったんだ。報酬替わりに全力で楽しませて貰うとしますかね

「若葉ちゃん、要さん、行きますよ？」
「あぁ」
「おう」
　今回の審判役として立ち会うのはひなたでデータを収集用のカメラを構えているのは杏だ
　それ以外にもこの場所にはタマ、友奈、千景の三人も今回は観戦しにやって来ている、何だかんだで久々に全員集合した気がする
「かなめー！　わかばー！　頑張れよー！」
「二人とも、応援してるからねー！」
　タマと友奈の言葉を聞きながら俺たちは互いに構えをとる
「それでは、始め！」
　その声と共に俺は若葉に向かって刀を投擲する
「なにッ！」
　急いで刀を弾いた隙を狙って一気に接近、蹴りを放つがもう一方の手に持っていた鞘で蹴りを防御されたため、距離を取って落ちてきた刀を掴む
「急だな」
「これくらい、お前なら防ぐだろ」
「そうだな…　今度はこちらから行くぞ！」
　その言葉と共に腰を落とした構えからこちらに接敵してくる、若葉の視線から予測するに初動は切り上げか、一歩後ろに下がり若葉の攻撃を避けると続けざまに、鞘での攻撃を刀を使って防ぎそのまま反撃に移る
　刀身をスライドさせるように近づき、若葉を切りつける。ここまでは若葉も予想してたようで刀を使って防がれる…　まぁそれでいいんだけどな

攻撃を防御した事でがら空きになった脇腹に蹴りを叩き込む
流石にここまでは予想出来ていなかったようで、体勢を崩し弾き飛ばされる
「…今のは少し効いたぞ、要」
「わりぃな、これでも結構テンション上がってんだ。それに俺は刀を使うと足癖が悪くなるらしい」
「そうか、だが今の一撃で理解した…私も本気で行かせて貰う」
その言葉と共に若葉の眼の色が変わる、アレは本気で敵を倒すときの目だ…いいねぇ、心が躍る
そこからの俺たちに言葉はいらなかった、互いに眼前の敵を打ち倒す為、鍔迫り合いを行い隙を晒すことのない攻防を続けていく。この戦い一瞬でも隙を晒したほうが負けると理解しているからこそ、俺達は一定の距離から離れることなく互いの剣激を捌き続ける
俺は剣激以外にも蹴りを喰らわせようとしてもその攻撃も避けられるか防がれるようになってきた。案の定というべきか若葉は俺とやり合ってる中で少しずつ俺の行動パターンに対処し始めている
この調子だと、刀と言う武器で巣の鍛錬量が上の若葉に押し切られる可能性が出てきた。負けるのはさして苦ではないがジリ貧になり技量負けというのはなんというか、少し気に食わない。俺のその様子を理解したのか若葉は俺から距離を取ると居合の構えに移行する
…成る程ね、互いに次の一撃でフィニッシュを決めようって訳だ
上等、若葉が行った無言の提案を受け入れた俺も距離を取り刺突の構えに移行し、攻撃に入った
「そこまでッ！」
攻撃は互いに一瞬、持てる力のすべてを使って若葉に向かった俺が突きを放ち若葉も居合の体勢から抜刀した所でひなたの声を聴き俺たちは武器を止める
「二人とも、熱くなりすぎです」
「すまない、ひなた」
「結構前にやった模擬戦でまともに戦えなかったからよ、ちょっとマジになっちまった」

「まったく、本当はお説教したいところですけど。まずは二人ともシャワーを浴びて着替えてきてください」
「わかった」
「了解。そういえばデータは」
「若葉さん達が必要以上に戦ってくれたおかげで十分取れましたよ」
そう言ってきた杏だが、心なしかいつもより言葉にトゲがある気がする

俺と若葉がシャワーと着替えを終えて、みんなの所に戻ると流れで昼食は全員で取る事になった
「ほんとに驚きましたよ、要さん。急に若葉ちゃんに蹴りいれるんですもん」
「確かに、あれはビビったなぁ」
「そうかぁ、俺と若葉ならあれくらいやっても可笑しくないと思うんだが」
「おかしいおかしくないの問題じゃないですよ。見てる人はびっくりするんですから」
「でも、二人ともすっごく楽しそうだった！」
「そうね…それに、少しだけスッキリしたし…」
「千景…？　それはどういう…」
「気にしなくていいわ」
全員が同じ場所に集まり、食事を取りながら話をする
丸亀城で暮らしていた時には当たり前の光景が、今では随分と懐かしく感じる
「要さん、どうかしたんですか？」
「いや、なんか懐かしくなっちまってな」
「お、なんだ要？　寂しくなったのか？」
「んなわけねぇだろ、寝言は寝て言えチンチクリン」
「なっ！　チンチクリンとはなんだ!!　タマもな！　これでもまだ成長してんだぞ!!」

「それならもう少し身長伸ばせ」
「言ったな！　タマが気にしている事をー!!」
　ホントに、こいつらと一緒にいると飽きないな。まぁ俺が焚きつけたものの喚くタマの事は置いといて疑似勇者システムについてをひなたたちに聞く
「そういえば、疑似勇者システムの名称って決まったのか？」
「まだですね、あくまで企画段階なので」
「なら、俺から一つ名前の案を出しといて良いか？」
「構いませんよ」
「じゃあ…　防人ってのを提案しとく」
「防人…　ですか」
「私は良いと思うぞ」
　防人、要地の守備に当たる兵士の事を指す言葉だった筈だ。壁の中を守る…　勇者が敵と戦うのなら防人は外敵から守る事を主にする。まぁどういう運用がされるのかは企画段階という事もありまだ分からないが、勇者とは異なる運用を視野に入れられるだろう
「無視するなー!」
「いってぇ！」
　そんなことを考えていたらほっとき続けていたタマに思い切り腕を噛みつかれた
「いってぇな！」
「なら無視すんな！」
「いい加減落ち着きゃ良いだろ」
「いいや！　これはタマの威厳に関わる問題だ！　そう簡単に落ち着けるかぁ!!」
「タマっち先輩！　要さん！　食事中は静かに!!!」
「はい…」
　喚いていると、杏から注意が入り二人そろって仲良く、席に戻る
　偶にはこういう日があっても良いかと思う反面、流石にやり過ぎたと反省をする日でもあった

後日ひなたから連絡があり、疑似勇者システムは二つの形態で運用されることが決まった

まずは、勇者でない人でも使えるようになるが、その分通常の勇者よりも性能が劣るという〝防人システム〟こっちはまだ勇者に選ばれる条件等が不明である為、通常の勇者システム同様に少しずつ性能を上げながら武装の開発等を主に行っているらしい。根本のシステムに使う重要部分が未完成な以上完成され運用がいつになるか分からないが、ひな形となる物を作っておくのもいいだろう

もう一つは男でも纏える勇者服としての運用だ。これから先、例外が現れた時の為に作っておくらしい。このシステムを作るきっかけになったのは諏訪から持ち帰った鉈らしかった。あの鉈は勇者と共に戦っていた男が使っていたもので、諏訪の土地神様の神力がまだ残っていたとひなたから聞いた・・・こちらは現状の勇者システムのデータを流用するらしく、一応試作品は完成しているらしいがやはり使用者が見つからず宝の持ち腐れ状態らしい。まぁ例外なんざ三百年に一人出てくれれば良いほうだろう。

最後に言い忘れていたが、男性用の勇者システムは〝護人システム〟という名前になったらしい。

まぁ未来の事は未来の自分に任せて、俺は今日も今日とて依頼にいそしむ日々をスタートするのであった

日常ノ伍

相も変わらず飛び込みの依頼が少ない何でも屋しらぬい。始めてからだいぶ時間が経った事ですっかり馴染み困った時の駆け込み寺のようになっている我が事務所だが、最近何故かペット探しだけでなく浮気調査も依頼されるようになってきた。どうにも最近　何でも屋＝探偵と認識され始めているようで極稀にそういった依頼も届くようになってきた。まぁ浮気調査は報酬金が高いし、何かしらの役に立っている筈だから受けるに越したことはない

「・・・　にしても今日は暇だねぇ」

そんなことを考えているのだが、今日はマジで暇である

季節が冬と言う事もあり、ペットは軒並みお家でぬくぬくしているし極稀に来ると言った浮気調査の依頼もない。すっかり助っ人を頼むときの常連さんになっている幼稚園もこの時期は行事もないし最近新しい保育士さんが入ったとのことで依頼の頻度も少なくなってきた

「今日はもう閉めるか」

このまま待っていても依頼は来ないだろうと判断して事務所の鍵を閉めに行こうと動き出すと扉が開いた

「よう、何でも屋。今大丈夫かい」

「大丈夫ですけど。源十郎さんは何か急用ですか？」

事務所に入ってきたのは　五十嵐源十郎さん

事務所の最寄りにある商店街で銭湯を経営しているおっちゃんだ、ここに事務所を構えたての頃はよく銭湯を利用していたという事もありかなり世話になった人物でもある

「銭湯のボイラーがちょっと拗ねちまってな、見てもらえねぇか」

「ボイラーですか、わかりました。今日は仕事もないんですぐ見に行きますよ」

「いっつもわりぃな、風呂上りの牛乳サービスすっからよ」

「はいはい、工具とか用意したらすぐに向かうんで先戻っててください」

「おう、頼むな」
　そう言って事務所から出ていく源十郎さんの事を見送ると、俺も事務所奥の作業室から必要な工具とちょっとしたガジェットを取り出す。ガジェットと言うのは俺が暇つぶしにレンタルショップで借りた二人で一人の探偵もの特撮に影響を受けてお試しで作ってみた便利道具の事である
　今回はセンサー機能付きのゴーグル、熱感知機能等を備えた優れものであり、こういう修理系の依頼には欠かせないものだったりする

　工具を持ってやって来たのは源十郎さんの経営する銭湯〝幸せ壮〟なんでこの名前にしたのかを聞いたところ何となくと返ってきた、まぁ名前は気に入ったものを付けるのが一番というしこの名前も良いと思う
「源十郎さーん、来ましたよ」
「おう、来たか」
「ボイラーっていつもの所でいいんですよね？」
「うちにはそこ以外ねぇからな、頼んだぞぉ」
　源十郎さんの言葉を背にボイラー室の中に入ると持ってきたゴーグルを装着してボイラーの点検を始める・・・と言ってもいつもはちょっとした応急処置だから何とかなるものの本格的ば点検となると専門知識も資格も持っていないからお手上げなのだが、なので今日もちょっとした不調であることを願いつつ見ていく
「ありゃ、こりゃあダメだ」
　目を向けた先にあった設備はいつもより派手にぶっ壊れてしまっており、これじゃあ俺の手には負えそうにない。素直に業者を呼ぶ方が良いなと思いながら源十郎さんのところに戻る
「どんな感じだ？」
「ありゃ業者に頼まないと無理ですね、素人がどうにか出来る範囲超えちゃってます」

「やっぱりかぁ」
「もしかしてわかってました?」
「わかってたってより薄々感づいてたな、なんせいつもより機嫌の直りが遅いと来たもんだ」
「なら業者に依頼しましょうよ…」
「自分らで何とか出来んならそれに越したことはねぇだろ」
「まぁそうですけど」
「何はともあれ、これで業者に任せた方が良いってのは分かったからな、今度来た時は牛乳一本サービスしてやるよ」
「ありがとうございます、それじゃあ俺はこれで」
「おう、気ぃつけて帰れよ」

銭湯からの帰り道、そういえば今日の夕食を決めていないことに気付いた
「冷蔵庫の中身なんか入ってたっけなぁ」
最近外で食うことも多かったから冷蔵庫の中が若干寂しいことになっていた気がする。とりあえず今日はスーパーの半額弁当で済ませるかぁ
「引ったくりよぉ!」
後ろから叫び声が聞こえ、振り返ってみるとカバンを持った男がこっちに向かって走ってきているのが見えた
「どけぇ!」
どくふりをして自分の足を相手の足に引っ掛けて相手の体勢を崩し、そのまま腕を拘束、思い切り締め上げる
「いててて!」
「この時期に引ったくりはダメだろ、すみません、誰か警察お願いします!」
それからしばらくの間ひったくり犯を拘束していると、警察官の姿が見えたのでひったくり犯を引き渡す
「ご協力ありがとうってなんだ、何でも屋か」

「なんだは無いでしょう、これでも立派な一般市民ですよ?」
「君も定期的に事件に巻き込まれるからね、こっちでもちょっとした有名人だよ」
「マジですか」
「あぁ、とりあえず捜査協力感謝します…　私生活で何かあったら依頼するからその時はよろしくね」
「期待しないで待ってます」

警官と分かれた俺は再び事務所に帰ろうとして、夕食を買い忘れていたのを思い出した、少し道を逸れて割と繁盛している商店街の中を歩きスーパーまで向かっていると声をかけられる
「おーいあんちゃん!　ちょっとこっち来な」
「肉屋の兄ちゃん、なんか依頼?」
「いいや、この前ウチの倅を見ててくれただろ?　そん時の礼がまだだったと思ってな。これ持ってきな」
「コロッケですか」
「出来立てだ、お代はいらないからなんかあった時また頼むよ」
「あんがとございます、これで夕食買う必要がなくなる」
「そいつぁ良かった、それじゃあな!」
「はい、今後とも御贔屓に」
思わぬ収穫だ。まさかコロッケを貰えるとは、それも出来立てを6個。確か米は炊いてあったはずだから冷蔵庫の中身で適当に汁物作って今日はそれで済ませよう

事務所に帰ってくると、閉めたはずの鍵が開いているのに気付く
「はぁ…　たでーま」
「おう!　やっと帰って来たな!」
「お邪魔してます、要さん」
「…　遅かったわね」

事務所の中に入ると、我が家のように寛いでいるタマと安楽椅子に座って所長気分を味わっている杏、そして来客用のソファでゲームをしている千景の姿が目に入る・・・何と言うか、この組み合わせは珍しいな

「タマと杏はともかく、そこに千景とは随分と珍しい組み合わせだな」

「・・・事務所の前で偶然会っただけよ」

「というか要！　その手に持ってるのなんだ！」

タマが俺の方にやって来てコロッケの入った袋を奪うと勝手に中を見る

「コロッケじゃん！　これどうしたんだ！」

「肉屋の兄ちゃんに貰ったんだよ。前に息子さんの面倒見たことがあるからそのお礼だとさ」

「食べてもいいか！」

「・・・もう夕食を食おうと思ってたし、食べていくか？」

「行く！」

「杏と千景はどうする？」

「せっかくなので、御馳走になろうかな」

「・・・私もそうするわ」

「分かった、そんじゃ冷蔵庫の余りで適当にもう一品二品作るから待っててくれ」

タマは言わずともなかれ杏と千景も夕食を食べていくという事で、汁物以外にももう一、二品作ることにする。外出用の上着を脱いでエプロンを付けると手を洗い料理を始める

今日は一人で夕食だと思っていたがまさかの大所帯、少しだけ気合いを入れて夕食を作るとしますか！　こういう風に何人かで夕食を食べることは珍しいからな

料理をしながら、そんなことを考える一日だった・・・いつ終わるか分からない平和の中で、やっぱり人の繋がりってのはあったけぇなと時間できる日になったと思う

日常ノ陸

神世紀になってから初の猛暑日、今まで過ごしやすい日々続きだったこともありテレビでは熱中症に注意するようにとアナウンサーが言っている

そんなある日の事務所、数日前に空調のぶっ壊れたこの場所の主は扇風機の風を受けながらアイス片手に書類と向き合っていた

「あーつーいー……」

「そういうのは口に出すから暑く感じるんだ……心頭滅却だ」

書類と向き合っている俺に話しかけてきたのは、ソファーの上で溶けかかっているタマ

「なぁー、かなめー……どうにかして涼しくしてくれー……」

「どうにかって言われてもな。どうしようもないぞ」

「えー」

「と言うか、どうしてタマはうちにいるんだ。仕事は？」

「タマは今日休みー」

ぐでっとした状態のタマを横目に見ながら最後の書類に目を通し終え、一息つく

「……よし、今日の仕事終了」

「おっ、終わったか！」

そう言うとタマがソファーからぐわっと顔を上げて俺の方を見てくる。さっきまで溶けてたのにすぐ元に戻る辺り本当に体力だけは有り余ってるんだと思う。けど、わざわざ来たんだからそれなりの理由があるんだろう

「それで、今日は一体何の用だったんだ？」

「ん？　特に用はないぞ？」

「ねぇのかよ……じゃあ何でこのクソ暑い中わざわざうちに来た」

「要が一番暇そうだったからな」

「流石にキレるぞ」

どうやら暑さでだいぶ気が短くなってるらしい……だが、ここまで来て何もすることがないというのは結構困る。仕事が終わったもの

の特にやる事がないから新しい空調を見に行こうと思っていたから、それ以外は特にやる事が思いつかない
「……仕方ない、アイスでも買いに行くか」
「おぉ、良いな！　早速行こう！」
　クソ暑い事務所から外に出ると、密閉された空間よりも風がある分幾分かマシだと感じるようになる
「あっついけど外の方がマシだな」
「ホントだなぁ、それで何処に買いに行くんだ？」
「コンビニに決まってるだろ……遠出できん」
　そこから俺とタマの二人で向かった先は、事務所から徒歩十分ほどのところにあるコンビニまでやってくる
「ほれ、奢ってやるから好きに選んで来い」
「さっすが要！」
　そう言ってアイス売り場まで向かったタマを見送ると、今日の夕食を選ぶために弁当売り場まで向かう。普通の弁当やら麺類やらと色々並んでいる
「さて、どうするかな」
　家に食材はあるが日持ちするものが多いし言っちゃなんだがこうも暑いと料理をする気も起きない、そこまでガッツリ食える気もしないし今日は麺類にするか
「かなめー！」
「どうしたタマ、決まったか？」
「おう！　それと要、今日はこれ食おうぜ！」
　アイスと一緒にタマが持ってきた物にを見ると握られていたのは袋詰めされたそうめんの束
「そうめんか、確かに暑いしたまには……って、お前今日もうちで食ってくのかよ」
「勘違いするな、食べるのは要だけではない。久々にみんなで食べようって意味だ！」
「みんなって、若葉たちもって事か？　でも全員の時間合わせるのは無理だろ」

「そこの心配は無用だ！　ちゃんと全員の予定は聞いてるからな！」
「……変な所で根回しが早いな本当に、まぁそれなら別に良いけどよ」
　タマの持ってきたアイスとそうめんを買い物かごの中に入れると弁当売り場を後にして飲み物コーナーで適当に飲み物やらそうめん用の汁を選んで会計を済ませる
「それで、今日は何処で食うんだ？　ウチか？」
「ふっふっふ、それは着いてのお楽しみ。タマに着いてきタマえ」
　自信満々のタマについていくと、確かにそこはビックリする場所……と言うよりも見慣れたシルエットだった
「丸亀城か……」
「おう、どーだ？　ビックリしただろ？」
「あぁ、確かにビックリした……よく借りられたな」
「実はな――」
「球子から連絡が来てから大至急手配したからな、許可を取るのに苦労した」
　タマの話を遮るように後ろから声が聞こえてきた、そこにいたのは最後にあった時よりもだいぶ大人びている若葉と、その隣にいるひなただった
「若葉とひなたも久しぶりだな」
「あぁ、こうして会うのはかなり久々だな」
「お久しぶりです、要さん」
　タマに若葉、ひなたの三人だけだというのにこうして顔を合わせると随分と懐かしい気持ちが沸き上がってる
「それで、今日は何処で食うんだ？」
「食堂の使用許可は貰ってますから、今日はそこで」
　今まで何度も通ってきた道を四人で歩いて、俺たちが食堂までやってくると中央に設置されている流しそうめんのレーンが目に入る
「流しそうめんか」
「はい、レクリエーションは大事だと思いまして」
「楽しそうでいいな！」
「そうだな……そういや、友奈は若葉たちと一緒じゃないのか？」

「ん？　友奈なら先に――」
「あっ、要くんだ！　久しぶり！」
「ようやく来たわね」
「お久しぶりです、要さん」
　茹で終わったらしいそうめんの載った皿を持った友奈、千景、杏の三人が食堂の調理場から出てきた。どうやら俺とタマが一番最後だったらしい
「すまん、待たせたみたいだな」
「気にしないでいいよ。それより早く食べよ？」
　とりあえず全員揃ったという事各々が皿と箸を手に取って、ホースでレーンに水を流し始めると本格的に流しそうめん大会が開始される。因みに麺を流す役割はとりあえず三十分おきに交代と言うことになった
「そんじゃ、流すぞー」
「誰が一番多く食えるか、勝負だ！」
「いいねぇ、負けないよー！」
　どっちが多く食えるか勝負をしようとしている友奈とタマの姿に少し苦笑いを浮かべながら最初の麺を流す。水に乗って結構な速度で流れていく麺を一番最初に手に入れたのはタマでも友奈でもなく千景だった
「あっ」
「高嶋さんも土居さんも甘いわね。勝負はどの場所を選ぶか、そこから始まっているのよ」
「お前も参加するのかよ」
　まさかの挑戦者に少し目を丸くしてしまったが、とりあえず次の麺を流した

　それから、かなり白熱している流しそうめん争奪戦に若葉も参戦し若干の混沌とした来たようだったがそこまで思っていたよりも早く自分の手番が終了し、次の流し役である杏に交代する

「それじゃ、次は任せた」
「はい、任されました」
杏に交代して食べる側にまわると早速麺が流れてきたのだが俺が取るよりも早く狙っていた麺は横からかっさらわれた
「なっ――」
「ふっふっふ、自分だけ優雅な食事ができると思うなよ要ぇ」
どうやら人の事を挑発してきているらしいタマだが、俺だって数多くの依頼をこなしてそれなりに厄介な依頼人の対応もこなしている。この程度の挑発にのる程短期ではない……などと考えていたのだが目の前に流れてきた麺はことごとくかっさらわれていく
これぱかりは流石に、俺も我慢の限界だ
「上等だ、その挑発乗ってやろうじゃねぇか」
「いいだろう、かかってきタマえ」
「これ以降お前の手元に渡る麺はないものだと思え」
そうして俺も参加することになったそうめん争奪戦は苛烈を極めた。度重なるそうめんの奪い合い、少しずつすり減っていくスタミナ、そして納涼の為にはじめた筈なのにどんどん上がっていくボルテージ……その果てに待っていたのは
「みなさん、少しおふざけが過ぎるのでは？」
沈黙を貫いていたひなたからの雷
そうして、そうめん大会改めそうめん争奪戦はひなたからの雷で終了し、普通に食事をしてから解散と言う流れになった

その帰り道、帰り道が途中まで一緒な俺と千景は二人で帰り道を歩く
「随分とはしゃいでたな」
「そういうあなたも……随分とハメを外してたわね」
「そうだな、多分久々にみんなと会ってネジが外れちまったみたいだ。でもそれは千景も一緒だろ」
「そうね、確かに少し……いえ、かなり懐かしい気持ちになったわ」
お互いに顔を会われるわけでもなかったが、どうやら気持ちは似た

ような気持ちらしい。そこからは何を話すでもなく帰り道を歩いていると今度は千景の方から声をかけてくる
「……ねぇ」
「どうした？」
「いつまで、この時間が続くのかしらね」
「どうした急に？」
珍しい事を聞いてきた千景に対して返事をしてみる
「……今日が楽しかったのは事実よ。でも……だからこそ、少しだけ不安になってしまって」
「そう言うことか、でも……大丈夫だろ」
「どうして、そう言い切れるの？」
「もしもの時はお前らが出る前に俺が頑張ればいい。星屑なら今の俺なら苦戦しないだろうからな」
「そう、そうね……けれど――」
そこで千景は足を止めた。それに気づいた俺も足を止めて千景の方を振り返ると、彼女はまっすぐ俺の方を見つめてきた
「――それを私は、私たちは許さない。あなた一人に押し付けたりしない、確かにさっきは不安になったけど貴方のその言葉でそんなのどこかに飛んでいった」
そう言いながら、千景は俺の目の前までやってきた
「だから、仮にもしもがおこった時は一緒に戦う。たとえあなたが死なないとしてもその背中は私たちが守る……それだけは忘れないで」
少し呆気に取られてしまったが、千景の言葉を聞いて自然と頬が緩む
「……あぁ、そうだな。もしもの時は……背中を任せる」
その言葉を後に、俺たちは再び帰り道を並んで歩き始めた

日常ノ漆

最近はあったかくなってきたかと思ったがそんなことは一切なかったある日。世の中はバレンタインだなんだと若干浮かれている気がしないでもないが、うちは年中無休

「うぅ……さっむ」

時刻は午前9時、本来ならもう仕事を開始する時間なのだが最近は寒い日が続いていることもあって中々布団からでることが出来ない。それもこれも全部布団の魔力が問題なわけだが……でもそろそろとりあえず仕事の準備は――

などと布団の中で思考を巡らせていると、事務所のドアが思いっきり叩かれる。もしも依頼人だとしたらかなり急ぎの依頼なのだろう。今の服装は幸い上はTシャツに下はジャージ。もちろん上着もジャージなのだがそこをパーカーか何かに変えれば多少はマシに見えるだろう

「はーい、こんな朝早くからどういったご用件で――」

「ようやく開けたな要！早く入れてくれ！」

「あはは……お、おはようございます、要さん」

「球子に杏か」

よくウチの事務所にやって来る二人だが今日は普通に平日じゃなかったか？

「二人とも、今日は仕事じゃなかったのか？」

「それなら心配するな！今日はタマも杏もオフだからな！」

「成る程、それでわざわざウチで暇を潰しに来たって訳か？」

「それもあるが今日のタマはあくまでも杏の付き添いだ」

「付き添い？」

「はい、実は要さんにお願いしたいことがあって」

そこまで言うと杏が取り出したのは紙の束、これってもしかしなくても原稿か

「この原稿が俺に頼みたいことか？」

「いえ、そうじゃないんですけどそうみたいな……実は――」

そう言うと杏は俺への頼みを話し始める
「私、仕事の合間って訳じゃないんですけど……暇な時間を使って小説を書いてみることにしたんです」
「小説か、確かによく本読んでたもんな」
「はい、それである程度の所までは書けたんですけど少し展開に詰っちゃって」
「成る程、じゃあ俺がネタ出しに協力をすればいいわけだ」
「いえ、これからの展開は決まってるので」
じゃあ一体に何に協力をすればいいんだこれは、というか完全にネタ出しに協力をする流れだっただろう完全になんかすんごい恥ずかしくなってきたんだが――
「おっ！杏、要のヤツ赤くなってるぞ！」
「えっ、ホントだ」
「珍しいな！写真撮ろう写真」
「タマ……お前なぁ！」
何というか、最初はこういう間柄じゃなかった筈なのに時の流れってのは恐ろしいもんでこういうことをしても何ら違和感がなくなってきたな。まぁそれはそれとして写真を撮りやがったタマを許しておくことは出来ない。とっつ構えて写真を消させなければ
「待てぇ土居球子ぉ！」
「待てと言われて待つ奴はいなぁい！」
「……っ!!!」
俺とタマが追いかけっこを始めてから杏の方に少し視線を向けると何かに満ち溢れたような表情でメモ帳に文字を書き始めた……恐らくネタが思いついたから書いているのだろうがこんなのを書いたところでネタに繋がるとは思わないんだが――
「――っと捕まえたぞタマ！大人しく写真を消せ！」
「わかった！消すから放せぇ！」
首根っこをとっつ構えて猫を掴むようにしながら写真を消すように促す、スマホを操作したタマがしっかりと写真を消したことを確認した……よし

「消した消した！これで良いんだろ!?」
「確かに消したな……それはそれとして――成敗ッ！」
　暴力反対だのなんだの言っているがこちとらこいつらと一緒に戦ってきたんだ、ちょっとしたことじゃくたびれないのは嫌と言う程に知っている……と、そんなことをしていると事務所の扉が開く音が聞こえてきた
「……あなた達、何をしているの？」
　扉を開いた先にいたのは厚手のコートに身を包んだ千景……彼女は今の状況が理解できていないようで困惑したように俺達を見つめていた

「成る程、この写真はそう言うことだったのね」
　事の経緯を聞いた千景は納得したように首を縦に振るとスマホの画面を俺達に見せてきた。そこに映っているのは赤面した俺の写真……
「……タマ、テメェ消す前にグループに写真送りやがったな？」
「ふっふっふ、タマは策士だからな」
「この野郎……」
「あなた達、言い争うのも良いけど本来の目的を忘れているんじゃないかしら？」
　っと、そうだった。本来の目的は杏が詰まっているという展開の解消……で良いんだよな？
「そうだった……というか千景は何でウチに？」
「私も伊予島さんに呼ばれたのよ。今日は特に予定も入っていなかったし」
「成る程……千景も呼んだって事は残りの三人も来るのか？」
「いいえ、若葉さん達は今日もお仕事なので。私が呼んだのはこれで全員です」
　そう言うと杏は立ち上がってコホンとわざとらしい咳をすると俺たちの方を真っすぐ見る

「今日皆さんを集めさせていただいたのは他でもありません、皆さんの意見を聞かせていただくためです！」
「「意見？」」
「はい！次の展開は決まってるんですけどそれはそれとしてキャラクターの心情がいまいちわかってない所があったので、実演をしたうえで皆さんの意見をお聞きしたいんです」
成る程、そう言うことだったのか
「それで、俺たちは何をすればいいんだ？」
「それは……壁ドンです！」
その瞬間、時間が止まった――――
「壁ドンです！」
「いや二回言わなくても聞こえてるから」
「……急用が出来たわ」
「逃がしませんよ千景さん！」
そこからどうなったのかは……正直言いたくないが、結論として俺たちは杏のネタ出し……改め壁ドン実演会をすることになった
「それで、俺がすればいいんだな？」
「はい、こういうのは異性の方が効果的だと思うので」
わかってはいたがメモ係とかではなく普通に俺が壁ドンをする側というわけだ……さてと、こうなったからには早急に終わらせよう
「それで、誰からする？」
「……私からお願い」
「良いのか？」
「えぇ、こういうのは早く終われるに限るから」
一番最初に立候補した千景はそう言うとそそくさと事務所の壁まで歩いて行った……仕方ない。腹をくくって俺も壁――というか壁の前に立つ千景の前にやって来る。こうしてみると、すんごい華奢だ

な
「それじゃあ、やるぞ」
「えぇ、早くお願い」
さて、とは言ったものの千景の事を考えるとあまりガッツリやるのはどうなんだろうなって感じはする。多分あんま強引な感じじゃなくて優しい感じの方がいいよな……いやでも優しい壁ドンってどうすればいいんだ?というかなんか今になってすんごい恥ずかしくなってきたんだが――
「――そりゃ」
いつの間にか後ろにやってきていたタマに背中を押された俺は体勢を崩して千景に向かって真っすぐ倒れこむ。咄嗟に壁に手をついて衝突することなく終わったが一歩間違えたら普通に事故になってたぞ
「大丈夫か、千景――ッ!?」
「えぇ、問題ない――――ッ!?」
こうなって気が付いたのが千景も若干体勢を崩していたのか気が付けば俺の眼前に千景の顔があった
「……」
「は、早くどいてくれると……助かるんだけど……」
「す、すまん」
俺が千景の前から退くと彼女はまっすぐ窓の方まで歩いていって窓を全開にする。外のやたら冷たい風が事務所の中に流れ込んでくるが今の火照った俺には丁度いい気がする。襲い掛かってきたドキドキをどうにかするため天を仰いでいると杏は千景の元まで向かい。何か話をした後こちらに向かってくる
「感想、どうぞ」
「……正直、ここまで照れるとは思わなかった」
「具体的にはどうでした」
そこから根ほり葉ほり感想を聞かれ、それに何とか答えていくと杏は満足したように手をパンと叩き――
「それじゃあ、次に行きましょう!」

悪魔のような宣告を俺にしてきた

次のターゲットになったのはタマ、彼女も最初は逃げようとして何とか難を逃れようとしていたようだったが杏のごり押しに負けて最終的には折れてしまったらしく。天を仰いだまま何とも言えない感情になっている俺の前までやって来る

「……要、一思いに頼む！」

「わかった――」

こちらが壁際だったのだが熱に冒されてテンションが変になっていた俺は、タマの肩を掴むと流れるような動作で彼女の位置と俺の位置を入れ替えてドンッ！と壁に腕をつく

「要さん！ここで何か一言！」

何か一言って言われても思いつかん、思った事そのまま言葉にするか

「球子、生きててくれて……ありがとう」

俺がその言葉を言った直後に彼女の頭から煙が噴き出してその場にへたり込む……かくいう俺も熱に冒されていたとは言え結構メンタルに来ている。正直バーテックスと戦ってた時よりもガッタガタだ

「タマっち先輩！感想どうぞ！」

「……凄い、ドキドキした」

普段のタマとは思えない程にしおらしい声で言葉を発したタマにドキっとしつつ俺もその場に座り込んだ

「次は要さん！感想どうぞ！」

「……千景もそうだが、あぁして面と向かってみると気づかない事に気付く。想像以上に華奢だったり、戦友である前に女の子って事を嫌でも気づかされる……はっずい」

俺の言葉を聞いた杏は興奮した様子でさっきの内容をメモに書きなぐっていた

そこから俺たちが冷静になったのは時間換算で大体一時間後の事だった。すっかり疲れはててしまっている俺たちに対して杏だけはやたらつやつやした様子で良い笑顔を向けている

「ふぅー、良いインスピレーションが得られました。今日は本当にありがとうございました！」

「……そうか、そいつは良かったな」

疲れはてながら俺がそう言うと杏はそそくさと荷物を纏めていく

「申し訳ないですが、このインスピレーションがあるうちに書き上げたいので私はこれで――「待ちなさい」へっ？」

帰ろうとする杏を引き留めたのはまさかの千景。彼女はどこかで見た事ある幽鬼のような足取りで立ち上がると真っ直ぐ杏の方を見る……何故だろう、嫌な予感がする

「体験が創造力に直結するのなら、伊予島さんも体験した方がいいんじゃないかしら」

「えっと、私はもう満足――」

「そうだな！杏も是非とも体験しタマえ！」

「いや、私は――」

拒否権はなかったらしい杏は千景に連れられてズルズルと壁際まで連れていかれる。一方タマの方は俺の目の前に来ると満面の笑みを迎えてくる

「……刑執行の時間か」

「何言ってんだ要」

ここまで来ると流石に何の感情もなく――なってないです、杏の前に来たら否応なく襲ってくる気恥ずかしさ……駄目だ、こればっかりはマジで慣れない

「……えい」

後ろにいた千景が俺の事を押す、成る程やられたことの意趣返し何だろうがやるやつ違う気がするんだが……と、考えているまもなく壁がドンと言う音を立てて気が付くと眼前に杏の顔があった

「あっ――」
「――――ッ！」
なんだ、この感じ……というか嫌という程色んなものが頭の中に色んな情報が入ってきてショートしそうだ……そこから、どちらが退くというわけでも声を出すわけでもなかった所為で無言の空間が間に流れる
「はいっ！そこまで！」
どれだけ時間が経ったのかわからないが、互いに吸い寄せられていく感覚に陥っていた俺達だったがタマのその声でハッとなって大急ぎで離れる。タマが杏の方に、そして千景が俺の方に近寄ってきてさっき杏がしていた問いをしてくる
「「感想、どうだった？」」
「「……凄かった（です）」」
質問に対する回答は、二人そろって一緒だ

これは完全に余談なのだが、今回の経験をしたからかビックリするほどの速度で原稿を書き上げたらしい杏はそれを持って出版社の小説大賞に応募した結果。見事大賞に選ばれ……書籍化が決定したらしい
それを祝して若葉たちも含めた全員で集まって飯を食いに行ったのだが、杏の顔は恥ずかしすぎてまともに見ることが出来なかった

その後の旅路

日本列島――旧梅田駅

時にして百何年か振りに世界を取り戻し、俺は今の世界を見てまわる旅に出た。最初の目的地は諏訪――俺達が世界を取り戻したことを大切な先輩たちへ報告した後、次に向かうのはこれまでの生涯を振り返ると一瞬。けれど今の俺が今まで生きていくのに必要不可欠だった思い出の詰まっている場所

「……北海道は、まだまだ遠いな」

一度は大阪をスルーして諏訪まで行った俺だったものの、こうして来た道を引き返し戻ってきたのには理由がある

「あの時は、弔えなかったからな」

壁外調査の時、ここで多くの人の亡骸とここで心を壊してしまった少女の日記を見つけた。あの時は時間がなかったから弔う事は出来なかったがしっかりと弔うことが出来なかった……けれど、今はあの時と違い1年無駄にしても尚時間は余っている

「最初は、どこに埋めるかだよな」

時間が経ち、朽ちていると言っても地面がコンクリートなのに変わりない。出来るだけ柔らかくて、日の光が当たる所で眠って欲しい。そう思いながら辺りを歩きまわっていると駅から少し歩いたところに元々公園だったであろう場所を見つける

「ここら辺がいいか」

軽く指の先を噛み切って血を流し、近くにあった石に一滴たらす。こうしてマーキングをしておけば自分で場所の把握は出来る。こういった場面になると毎度のことながら便利な能力だと思う

場所のマーキングが終わり、カバンの中からスコップの先端を取り出すとさっき流した血を操ってスコップの柄を生成して地面を掘り始める

最初の穴を掘りきってから梅田駅に戻り、亡骸を持って公園まで戻る。そして持ってきた亡骸を穴の中に置いて埋めていく。そうした

作業を繰り返していくうちにすっかり日は沈み夜になる
　簡易的ではあるが墓地を作り始めてだいぶ経つがまだまだ終わりは見えない、その事を実感する度に自分の中にある無力感が大きくなっていく
「結局、俺も人間だったって事か」
　老いることもなく、死ぬこともなく、そうやって果てのない時間を生き続けて……つい最近ようやく死ねるかと思ったが結局死ぬことはなく、こうして今も生きている
「行けるもんなら、俺もそっちに行きてぇよ……みんな」
　こんなのをアイツらに聞かれたら最後まで生き抜けって引っ叩かれそうだななんて感傷的な笑いが口から零れている自分に呆れながら、明日に備え今日は眠りにつく

　翌日、昨日と同じように埋葬作業を行い続け気が付けば公園が簡易墓地のようになっていた。ここまで多くの死人が出ていた事実を心に刻みつけながら、作業を続けていると公園に残っている亡骸も後二つ、ぱっと見でわかる程小柄で、少し大きい側が小さい側に寄り添うようにして朽ちていた
「残ってたんだな……助けられなくて、ごめん」
　血を使って二人の亡骸を包み込むように囲み、公園まで運んでいく。多分だけどこの二人は別々よりも一緒に眠らせて上げるのが良いと思い、一つの穴に二人の亡骸をゆっくりと置き、その亡骸と一緒に日記を埋めようと思ったが……やめた
「苦しい記憶は、俺が持っていくから。安らかに眠ってくれ」
　せめて向こうの世界で位、安らかにそして穏やかに過ごして欲しい。だからこの記録は俺が持っていく、苦しい記憶は……俺が背負っていく
「よし、これで全員弔い終わったか」
　他にもまだまだいるかも知れないがその人たちは見つけ次第弔っ

ていくことにする、少なくとも駅で眠っていた人は全員弔い終わった筈だから、この場所を離れて別の場所に移動しようとしたところであたたかな風が頬を撫でる

『ありがとう』

「……どういたしまして」

聞こえてきた声は幻聴かも知れないが、感謝してくれているのだろうと思ってもバチは当たらないだろう。そう考えてから荷物を背負い直して再び歩き始める。急いで目的地まで向かう必要もないんだ。せめて自分に出来る範囲の人を弔ってから……ゆっくりと向かおう

「それくらいなら、許してくれるよな。雪花」

あの世でどんな顔をしているのかわからない彼女の事を想いながら、再び歩みを始める——旅は、まだまだ終わらない

Recollection;72
Prologue-The scenery is helplessly monochrome-

天の神との戦い――西暦から続いた勇者の戦いは幕を閉じ、四国のみが生存圏となっていた世界は本来あるべき姿を取り戻した。人智を脅かす驚異の失われた世界から勇者の力は失われ……同時に人類は神の恵みを失った

「……今は、大体京都くらいか？」

まさか使うことになると思っていなかった俺は、西暦の時代の荷物を引っ張り出して四国を出た。元々俺はあの地方の人間ではないし……この身体も人と言うには異常過ぎる、今まで俺の出会ってきた人々がいい人達ばかりだっただけで、普通の人間から見えれば俺は不老不死の化け物以外の何物でもない

何よりも――

「世界を取り戻したあの場所に……俺の居場所はない」

その言葉を発した瞬間、僅かに熱くなった腕輪を見る。若葉たちの想い――これまで俺が関わってきた人たちの想いが詰まったこの腕輪は、どうやら俺の発した言葉を否定したいらしい、けど

「別に気は使わなくていいよ、化け物だと思われるのには慣れてる」

長く生きている中で、化け物扱いされたことは一度や二度じゃない。それこそ西暦の時代は反勇者派といった奴等だって存在した、勇者の事を恨み……天の神を崇める。そう言う奴等だって今まで見てきた……そして、見てきたからこそ俺はあの場所にいるべきじゃない、そう思ったんだ

「それに、一人でいた方が忘れずに済む」

今までは、天の神を倒すという思い……悪く言えばこんな世界にした奴等に対する復讐心を持つことで忘れずに済んだ、けれど天の神を倒した今……俺にはあの場所は暖かすぎる。あの暖かさに包まれていると、忘れてしまう。俺が背負うべき人達の想いを、そして――

――俺が今まで奪って来た、人々の命を……その十字架を

？　神世紀　７１年

天の神との戦いが集結し、西暦は神世紀という新たな時代を迎えてから、早いもので七十二年の月日が流れた。そして俺は一人……進んでいく時間の中に取り残されたまま、立ち止まっていた

「死ねない老けないってのも……考え物だな」

雪花を失って以降、こんな気持ちになることはなかったからもう大丈夫だと無意識的に思っていた……けれどそんなことはなかった、若葉も、ひなたも、タマも杏も友奈も千景も……みんな俺と違って自分の時間を進んでいる。老いていく……俺の事を、置き去りにしている

「ははっ、ひっでェ面だな」

鏡に映る俺の姿はまるで幽霊か悪鬼か……そう思わせるほどに酷い顔だった。時刻は夜の二十二時――今日も、仕事の時間だ

「今日の標的は白神教の研究施設――確か違法な研究をしてるとか大赦で掴んでる場所だったな」

闇夜に同化するように黒い外套に身を包み、手に持った端末を確認するとそこに映っていたのは白神教という宗教団体が所有している研究施設の見取り図……そして、俺が始末する必要のある対象の顔写真

「元大赦所属の役員が二人か、いちいち手を煩わせやがって」

どれだけの期間があるのかは知らないが折角若葉たちが勝ち取っ

た猶予期間……天の神をぶっ殺す手段を確立させればいいものを奴等は天の神を崇め、人類の破滅を目論んでいる。本当に――反吐が出るほどに何の感情も湧いてこない

「それじゃあ、始めるか」

親指の皮膚を噛み切って出血をさせ、浮遊する血の塊を手で弄びながら施設に向かって降下していく、今回の仕事はあくまでもこの施設の壊滅――ご丁寧に武装をしたうえで呑気に欠伸をしている警備員の前に降り立ち――

「な、何だお前ッ！」

「悪いな」

――警備員を昏倒させる。別に殺しても問題はないのだが殺しは必要最低限で済ませる方がいい、気配を消して施設の中を進みながら俺は自分がどうしてこんなことをしているのかを思い返す

事の発端は些細なことだった、神世紀も大体三十年くらいに差し掛かった頃。相も変わらず俺の事務所を訪ねて来ていた杏とタマの姿を見て――俺は自分だけが止まった時計の上にいることを思い知らされた。見知った人が老いていく光景、俺たちの間にある繋がりは何も変わっていない筈なのに……俺はどうしようもなく怖かった、もう一度大切な人たちの死に際を看取らないといけないのかと、もし看取ってしまった場合――俺は自分を保っていることが出来るのかと

だから俺は丸亀を離れて……若葉たちの目が届かない場所、象頭町へと引っ越した。何も言わずに引っ越したことでみんなからメールやら連絡は来たがそれには謝罪の言葉だけを返してそれ以来連絡は取っていない

そして、象頭町で生活を始めてから少し経った頃に天の神を信仰する白神教の存在を知り……俺は自分の中にある恐怖を紛らわすという意味でも大赦の持ってくる白神教壊滅の依頼を請け負うことにしたのだ……その過程で、もう若葉たちに合わせる顔がない程に全身が血で汚れちまったがもう俺から会いに行くことはないから別にどうでもいいだろう

そんな感傷に浸りながら目的の場所までやってきた俺は目の前にある扉を蹴りで破壊して中に入ると。驚いたような顔をした役員連中が俺の方を見てくる
「き、貴様は――ッ!?」
「ようご老人、歓談中の所邪魔しちまってわりぃな」
その言葉と共に片方の役員の首を狙いナイフを投擲する。うまい軌道で役員の首に突き刺さったナイフの隙間から血が噴き出し一人目の始末が完了する
「そ、そうか……お前が大赦お抱えの暗殺者かっ！」
「暗殺者？　んな御大層なもんじゃねぇよ……俺は只の殺人鬼さ」
親指から流れ出ている血液を操作してハルバードを生成すると、俺は残ったもう一人に向けて刃を向ける
「それじゃあ、残りにもさっさと死んでもらおう――ッ！」
早急に殺そうとしたところで、殺した筈の一人目が立ち上がりこっちに刺突攻撃を仕掛けてきた。よく見ると刺さっていたはずのナイフが落下して傷跡は白い皮膚で再生が始まっている。腕も餓鬼とかそこら辺を思わせる化け物になってる辺り……成る程、こいつらもか
「どうだ暗殺者！　我々は人の姿を超越した存在になったのだ！天神（てんじん）様の力によって」
「人智を超越した？　化け物になったの間違いだろう」
よく見ると最初に殺した一人だけじゃない、残りも身体の面積が肥大化しその姿を完全な化け物へと変化させている
「死ねぇ！　暗殺者！」
振り下ろされる巨腕をバックステップで避けると背後に回り込んでいたらしいもう一人がラリアットを仕掛けてくる。まぁ腕がデカい分足場にもなるから有難い――と言うことでその腕を利用して天井まで飛び上がりハルバードを突き刺してそのまま安全な場所まで移動する
「成る程な、パワー特化型って事か。見た感じ皮膚も厚そうだし厄介だな」
厄介そうだが――楽しめそうだ

俺のその言葉を聞いたらしい二体の元人間（バケモノ）はこちらに向かって攻撃を仕掛けてくる。一体目の拳をハルバートで受け止めてそのまま懐に潜り込み拳を叩き込む。分厚いゴムをぶん殴ったような感覚だったからまともにダメージは入らないと思った方がいいな

「ハ、ハハハッ！　どうだ暗殺者！　この肉体は！」

片方に集中しすぎたな、救い上げるように合間を縫って攻撃をしてきた二人目の拳は俺の身体に当たり衝撃が全身を襲い掛かる。あぁ、これアレだな、肋骨ぶっ壊れた……けど、不思議と痛みは感じないそのまま地面を転がって動くことの出来ない俺の近くに、三体の怪物が近寄って来る

「大赦お抱えの暗殺者と言えど……人智を超越した我らの敵ではなかったようだな！」

「どうする？　この暗殺者はかなり上質な素材だ」

「殺したうえで死体に細胞を植え付ければ最強の兵士として我々の駒となる。ヤツを使えばあの忌まわしき〝勇者ども〟を殺すことも可能だろう」

「それもそうだな！　ハッハッハッハッ!!」

何とも三下のやられ役らしい会話だな……それにしてもこいつら何て言った？　勇者を殺すだと？　それ以前に――俺を殺すだと？

「ははっ、そりゃあいい……殺せるなら殺してくれよ」

「ほう、それなら貴様の願い通りにしてやろ――――う？」

手元に呼び戻したハルバードを使って一体目の腕を切断する

「ぐ、ぐぁぁぁぁぁぁ――――何故だッ!?　何故再生しない!?」

「なぁ、俺を殺すって言ったよな？　それなら殺してくれよ――俺を、俺をこの止まっちまった時計の針から解放してくれよ？」

なぁ？　解放出来るもんなら解放してくれよ――――――――

そこからは流れ作業だった、腕を落とされて動揺していた一体目の

首を落として始末し。逃げ出そうとした残りの一体は後ろからハルバードで突き刺して内側から全身穴だらけにしてやった

「こ……の……」

どうやらここまでやっても多少息があるらしい、大した生命力だ

「この……化け物……め――――」

最後の一言を聞き終えた俺はもう一人の頭を踏みつぶして完全にその生命を終わらせる……それにしても――

「化け物……か、ははっ――」

――そうだよな、きっと今の俺はこいつらよりも……化け物だ

大赦の奴らに連絡してから見上げた夜空は――俺の瞳にはどうしようもなくモノクロに映った

Ｅｐｉｓｏｄｅｌ—Ｓｅｅｉｎｇ　ｈｅｒ　ｆａｃｅ—

仕事を片付け、モノクロにしか映らない空を眺めているとエンジン音と共に複数の車両がこっちに向けて走ってきた
「お疲れ様です、不知火さん」
「あぁ……それじゃあ俺はこれで」
「あっ、待ってください！」
後処理の部隊が来た以上俺がここに留まっている理由はない、ましてや必要以上の交流をする必要だってありやしない。さっさと帰って寝ちまいたいんだが呼び止められた以上、少しは足を止めないといけない
「……なんだ？」
「弥勒様からお話があるとのことです」
「はぁ、わかった……連れてってくれ」
弥勒様というのは俺に仕事を依頼してきた張本人——弥勒薊（あざみ）の事を言っている、風の噂で聞いたが大赦に所属しているコイツの同期の中だと一番の出世頭だとか言われているらしい。実際薊が入ってから無名だった弥勒家は力を増していき、かなりの力を持つようになっている
「この車両で弥勒様がお待ちです」
事後処理にやってきた車両の一番後ろ、ロケバスでよく使われているタイプの車の中に入る。要件が何か分からないがさっさと終わらせるに限る
「お久しぶりです、不知火さん」
「依頼を受けた時以来だな、それで……今日は何の用だ？」
「まぁまぁ、そう急かさなくてもいいではないですか」
そう言ってくるのが弥勒薊、弥勒家の次期当主で俺の雇い主——なのだが実際に会ったのは最初に依頼を受けた時以来だし俺個人としてもこの男とあまり関わる気はない……急かしているのだったずっ

とモノクロの景色を見ていると胸の中にある不快感が爆発しそうだからだ
「前置きは良いからさっさと話せよ。今日は特に長居したくないんだ」
「……わかりました、では率直に――」
俺の目を真っすぐ見つめた薊から言われたのは今の俺にとって最悪の一言
「――不知火要さん、貴方に鏑矢の指導をお願いしたい」
「俺が……指導を？」
「はい、鏑矢は白神教のように人類を脅かす存在が現れた時、お役目に当たる少女たちの事です……不知火さん、貴方は私たちが依頼した仕事で対人経験の実績もある、だから――」
「悪いが断る」
「――なんですって？」
「断ると言った……今の俺には指導なんて真っ当な事できやしねぇ。俺に出来るのは精々人を殺すことだけ……そう言うわけだ」
人に教える、そんな教師みたいなこと俺に出来る訳ないだろう……そもそも、まっとうに起きてるのが地獄以外の何物でもないんだから、そんな仕事受けるはずない
「それじゃあ、また仕事になったら連絡してくれ」
それだけ薊に言い残すと、俺は車から出て帰路についた

翌日、目を覚ました俺は時間を見ると時刻は夜の九時頃……連絡は一切ないあたり今日は普通に依頼が来るということもないのだろう。冷蔵庫を開けて中を確認すると普段から食っているゼリー飲料の在庫が切れてしまっていた
「……買いに行くか」
コンビニはこの近くにあるし、意外とゼリー飲料が手元にないと面倒になってくることがあるからな。適当にパーカーを羽織り財布を

持って外に出る。象頭町は田舎寄りの街である事もあってこの時間になると人通りが少ない。コンビニまでやってきた俺は保存用のゼリー飲料を十個ほど籠に放り込んで会計を済ませる

「あぁ、レジ袋お願いします」

会計をしていた店員にそう言うと追加料金が支払金額に追加され、レジ袋にゼリー飲料を詰めている最中にさっさと会計を済ませてからレシート一緒にレジ袋を受け取ってコンビニを出る

「ちょっと、止めてください」

家に帰るためコンビニを出てすぐ、少し暗がりになっている路地に誰かいるのがわかる。見た感じ男が二人で誰かに絡んでいるらしい、ほっといても良いがここで何かあって翌日のニュースにでも載ったら後味が悪い

「おい」

「あっ？　なんだおま――――ぶっ!?」

とりあえず声をかけて反応してこっちを向いたチンピラＡをぶん殴る。すぐに吹っ飛んでいった当たり白神教の関係者って訳でもなさそうだな

「お、お前！　急に何しやが――」

「うるせぇ」

一々聞いてる暇はねぇんだよ、面倒だからさっさと終わらせるためにぶん殴っただけ。チンピラ共は一撃加えるだけで倒れたあたり鍛え方が足りてないな、とりあえず意識を失っている二人をそこら辺に放置して聞こえてきた声の主である少女に話かける

「大丈夫か？」

「う、うん……大丈夫」

その声を聞いた瞬間、俺の身体は固まってしまった。俺が助けた少女の声――その声は間違いなく俺の聞きなれたものだった

「友奈？」

「えっ？　どこかであったことありましたっけ？」

少女の方を見ると、そこにいたのは俺の戦友――高嶋友奈とよく似た顔立ちの少女。しかし改めて見てみると友奈とは違う所が所々に

ある。一番大きい要素なのは髪型、それ以外だと俺の知っている友奈よりも少しだけ目つきが鋭い
「……いや、少し知り合いに似てただけだ」
「そうなんですね、でも同じ名前ってなんか珍しい」
「そうだな、それじゃあ俺はこれで」
この少女と一緒にいるとマズい、心の奥底で蓋をしているものが一気に溢れ出しそうだ。重ねる必要なんてないのに嫌でも彼女に俺の知ってる友奈の事を重ねてしまう
「待って！」
「……なんだ？」
「名前、教えてもらってもいいですか？」
名前を教えてくれ？
「今日会ったのだって偶然だろう、別に名乗る程のもんでもねぇよ」
「そう言うわけにはいきません！　なんか聞いとかないといけない気がするんで！」
友奈の名前を冠する奴はみんなこうなのか、律儀というかなんというか……まぁ、名前を教えるくらいなら別に良いだろう
「要だ、不知火要」
「要さん……あの、私は、赤嶺友奈です」
「赤嶺……か、覚えられたら覚えとくよ」
それだけ言い残すと、俺は再び帰路につく。それにしても――
「赤嶺友奈……ねぇ」
目に映る景色は以前モノクロのままだったが、なんだか少しだけ懐かしい気持ちになった……けれど、それでも心の中にぽっかりと空いてしまっている穴が埋まることは消してない。彼女との出会いは……懐かしさを思い出させると同時に嫌という程の現実を思い出させた

Ｅｐｉｓｏｄｅ２―Ｒｅｕｎｉｏｎ　ｏｎ　ａｍｉｓｓｉｏｎ．―

私は赤嶺友奈、象頭町で生活をしている中学中学二年生。友達と一緒に人類に降りかかる厄災を払う鏑矢というお役目に付いてるんだ。お役目柄体力を使う事だから身体は鍛えてるしそれが趣味になってる所もある

「なぁアカナ。そんなに凄かったん？　昨日会ったっていう……えーっと」

「不知火さんね、不知火要さん。うん、凄かったよ、なんというか……動きが洗礼されてる感じ」

「へぇ、今度会う機会が合ったら是非とも弥勒とお手合わせ願いたいわね」

今私と一緒にいるのは私と同じお役目に付いてるシズ先輩こと桐生静さんと、レンチこと弥勒蓮華さん。私たち三人が人類を厄災から守る鏑矢として、世界に起こる厄介事を解決している、最初の頃はちょっと困惑することも多かったけど今でもすっかり仲良し……なのかな

「また会えるのかなぁ、不知火さん」

「アカナもすっかりお熱やなぁ」

「ここまで熱を上げてるとなると弥勒も興味が出てきたわ、その人に」

？　神世紀　７２年

赤嶺友奈という名前の少女と遭遇してから数か月後、年を越し神世紀７２年になった頃。俺は相も変わらず白神教の施設壊滅任務を遂行していた。この団体そのものの規模がよほど強大であるが故か、いくら潰してもあの害虫がごとく無尽蔵に湧き出してくる

「はぁ……いつまで続くんだろうな……この地獄は」
　そして、今日も今日とて依頼を遂行することになったのだが……今日は依頼主からの言伝はいつもと違った。本来なら一人で遂行するはずの任務だったが今回は複数で任務に当てれとのこと
「……来たか――ッ！」
　いつも通りの外套を羽織って共同で当たるメンバーを待っているとそこにやってきたのは二人の少女。そのうちの一人にはやけに身に覚えがあった――というか一度脳にこびりついて離れなくなっていた
「あのー、もしかして貴方が協力者？」
「あぁ……お前達は？」
「私たちは鏑矢のお役目に付いている者です」
　鏑矢……か、勇者みたいな称号か？　それにしても――
「鏑矢ってどういう意味だ？」
「えっと、簡単に言うと人類に降りかかる厄災を払う……みたいな？」
「人類に降りかかる厄災……ね」
　確かに大赦側から見たら白神教の奴等は人類に降りかかる厄災だな、大赦内に保管されていたバーテックスの細胞を盗み出しその力を使って人類を滅ぼそうとしているんだからそりゃそうか、けど――
「お前らのお役目はわかった……けど、お前らは人が殺せるか？」
「「えっ？」」
「……これからお前らが戦っていく中には化け物の力を使う人間もいる、それでもお前達は――それを殺す覚悟はあるか？」
　俺がその言葉を伝えると、目の前にいる少女たちは言葉を詰まらせる。目の前にいる少女たちはここに至るまで訓練を積んできたんだろうと思うがそれでも人を殺す、命を奪うことに対する覚悟を問う必要がある
「もう一度に聞く、大義の為に……人を殺す覚悟はあるか？」
「……あるよ、覚悟はある」
　俺にそう言ってきたのはこの前であった少女――赤嶺友奈、俺の事を真っすぐ見据えると手を前に出してきた

「これがお役目なら、私たちは戦うよ」
「弥勒も、お役目ならば戦うわ」
　成る程な、瞳に映ってる決意は確かに本物らしい……それに、今回の任務は共同で当たれとのことだから。覚悟があるのならば同じ任務に当たるのは問題ない
「……それならいい、今回の依頼については聞いてるか？」
「一応」
「そうか、それなら標的についてはわかってるな……あぁ、そう言えばお前ら、名前は？」
「赤嶺友奈です」
「弥勒蓮華よ」
「赤嶺に……弥勒か」
　赤嶺の方は名前を知っていたが弥勒……か、中々に珍しい苗字である以上、あの男と関りがあることは確定。まぁそれはその辺に放っておくことにするが今は最低限標的に付いてわかっているらしい。それならわざわざここで時間を潰している必要はない、さっさと終わらせて帰るだけ
「……行くぞ」
　そこから、俺達三人で目的の人物がいる部屋まで向かっていく中で警備員やらなにやらの意識を刈り取っていく。その動きで理解できたが二人とも対人経験の練度はかなり高いらしい
　目的の部屋の前までやってきた俺たちはハンドサインで合図をする、それに二人が頷いたと同時に扉を蹴破って突入。それに驚いたらしいターゲットの顔を確認する
　部屋の中にいたのは白衣を着た男にスーツ姿の人間が二人、白衣の男が持ってるアタッシュケースの中には白い液体が入ったアンプルが見える――アレが今回の目的の物か
「貴様ら、大赦の人間か!?」
「ご明察」
「弥勒たちが来た以上、観念した方が身のためよ」
「たかが小娘に何ができる！」

白衣の男はこちらに向かって吼えてきているがそれ以外の人間は困惑している……恐らくだが研究成果を受け取りに来た別の場所の人間か、白神教を支援している組織の人間だろう、そんなことを考えている間に白衣の男はアタッシュケースから出したアンプルを自分に突き刺そうとしていた

「させるかよ」

自分の能力を使って血液飛ばし、白衣の男の肩に突き刺す。その痛みで僅かながらに動きが遅れたらしい白衣の男に接敵し拘束、ついでに肩の骨を外しておく

「あぁぁぁぁぁッ――――!!」

痛みで悶絶している男を地面に組み伏せると何が起きたのか理解できていない様子の二人に声をかける

「お前ら、白神教の人間か？　それともこの団体を支援してる組織の人間か？」

「わ、我々は――」

俺がそう問いかけると、何かを話そうとしたタイミングで男二人は糸が切れたように地面に倒れた。その様子を見ていた赤嶺と弥勒が倒れ伏した男へと近づき脈を確認すると首を横に振った

「……そうか」

倒れた男二人に対し、少しの間黙とうをした後に白衣の男を立ち上がらせる

「は、離せッ！」

「肩を外されてるのに随分と元気だな」

だが、離せと言われて離す奴は何処にもいない……今日の仕事は人を殺す仕事ではなかったな。殆ど俺が動いてる感じで終わった辺り大赦的に今後の任務がどういうものになるのかを見せるという目的もあったんだろう

その後の流れはいたって今まで通りだ、大赦の事後処理班に連絡をして終了、赤嶺や弥勒とも、その場で解散になった

Episode3―The body sinks, to the bottom of the water.―

赤嶺、弥勒と共同で行った初任務を終えてから更に数か月の時が流れた。進んでいく毎日の中でも任務は際限なくやって来る、そうして毎回現れる世界に害をなす存在の排除を続ける

「か、勘弁してくれ！　私はただ――――」

「その手の言い訳は聞き飽きたよ」

怪物になり果てても尚、命乞いをしてくる大赦の元幹部を屠る。今月だけで渡される仕事の数は二十を超えた。それもひと月ではなく一週間でこの量だ、休む時間も碌にないが――

「いくら潰しても、キリがない……元締めを潰すしかないか」

とは言っても、現在進行形で見つかっていない。大体問題を起こすのは天の神を信仰しているというよりも白神教の持つ力を手に入れる為に所属している奴等だ。しかもそう言う奴等に限ってまともな情報を握っていないし、支部を潰してもそこにいる敬虔な信者は情報を吐かせる前に自害しちまっている

「……手間ばっか無駄にかかるな、本当に」

目の前に広がる惨状を後目に壁にもたれかかっていると、いつも通り複数の車両がこちらに向かってくる音が聞こえてくる

「お疲れ様です」

「……あぁ、お疲れ」

後処理係の人間に後を任せて帰路につこうとするが、目の前に見慣れた仮面の男が現れる

「不知火様、これを」

「……手紙か？」

目の前にいる男が差し出して来たのは便箋、裏を見ると大赦のマークがある辺り、差出人は大赦の人間なのだろうが、現在の大赦にいる知り合いは少ない……その中でもコンタクトを取ろうとする人間に

は心当たりがない
「差出人は誰だ？」
「弥勒様です」
「……どっちの弥勒だ？」
「弥勒薊様です」
　俺の知ってる弥勒は現状二人いるから蓮華と薊、どっちの弥勒からか聞いてみるとどうやら薊の方だったらしい。にしても妙だな……
「……どうして薊本人が来ない？　今更手紙でやり取りするようなものでもないだろう」
「本人は最重要案件だと申しておりましたので、開封は帰宅後に頼むとのことです」
「……わかった」
　少し引っかかる部分もあるが、わざわざ手紙を寄越したって事はよっぽと外部への露出を避けたいって事だろうな。一応そう言うことだと納得して帰路につく

　家に帰り、何時振りになるかわからない部屋の電気をつけると、人口の明かりが俺の目を少しだけ眩ませた。今住んでいる部屋にはベッド以外だと精々本棚くらいしか目立った家具は置いていない
「それで、一体どういう要件だよ」
　ベッドに腰を掛けて便箋を開けて内容を確認すると、そこに書かれていたのは招集依頼とその理由
「白神教が本格的に行動開始の可能性あり……か」
　どこでそんな情報を掴んだのか知らないが、相手方が本格的に動くんだとしたらこっちもそれに対処する為に防衛ラインを張るってことか……面倒だな
「けど、面倒でも……やらないといけない。今更――ここで止まる事は出来ない」
　背負ってきたものの為にも、先に逝っちまった奴等の為にも……こ

こで立ち止まるのは許されちゃいけない。手紙を適当に投げ捨てそのままベッドの上に倒れこみ……目を閉じる

真っ暗だったはずの視界に映るのは、意識を手放すと毎回見る悪夢。まるでテレビの画面越しに映像を見るように流れていくその光景は……きっと、いつかの時代に起こる筈だった光景

――最初に、二人勇者が敵に貫かれ死んだ

俺が変えた、変える事の出来た未来の光景なのだろう

――次に、勇者が一人仲違いの末、仲間を庇って死んだ

一人の力で変えることで出来た、誰かにとっての最悪の未来

――そして、もう一人が光となって消滅し。世界は炎に包まれた

いつ見ても最悪な光景だ、けれど同時に存在した未来の一つとしては妥当なのだろう。勇者と言えど一人の少女であるのに変わりはない、精神的に不調をきたしたとしても、戦闘中に意識の外から攻撃を受けたとしても、文句は言えないだろう

けれど、そう考えられるのは俺が彼女たちと共に戦っていたからだ。実際に戦っている光景を見た事のない人々は、その事が理解できるはずもない

――映像が巻き戻り、また最初から再生が開始される

この夢の最悪な所は、毎回見せられる殺され方が異なる事。順番が異なる、殺され方が異なる、本当に、色々な世界で起こった末路を永遠と見せつけられている

「けど、毎度見せられるといい加減慣れる」

この悪夢のお陰で人の死にざまには慣れた、それが親しい人の死にざまともなれば……それに、元々心なんざとっくの昔にぶっ壊れてたのを――――思い出した

目を開けると、カーテンの隙間から光が差し込んでいる。気が付けばもう朝になっていたらしい
「……この時間に起きるのも、久しぶりだな」
いつもは寝ている時間の方が多い、下手に起きて現実を見るよりも過去の惨劇をひたすら見続ける方が今の俺には合ってる
「……向かうか」
今住んでる場所から大赦本部まではそこそこ時間がある、別に待たせた所で良心が痛むとかもないから適当に行けばいいのだが、残念なことにあっちから時間指定を受けてる以上その時間に向かわなければならない
「はぁ……怠い」
「あれ？　不知火さん」
重い足を動かしながら歩いていると聞きなれた声が後ろから聞こえてくる。振り返るとそこにいたのは私服姿の赤嶺、弥勒、桐生の三人
「こんな所で会うなんて珍しいわね」
「せやなぁ、もしかして不知火さんも？」
「……その口ぶりだと、お前らも目的地は同じみたいだな」
呼び出したのは俺だけじゃなかったのを考えると、そんだけ重要な案件なのか……それとも単に人手が欲しいだけなのか
「ねぇ不知火さん、折角だから一緒に行かない？」
「……お前らとか？」
「うん、折角会えたんだから……どう？　色々話したいこともあるし」
「……そうだな」
どうせ目的地は一緒なんだ、向かうくらいは別に良いか。肯定の言葉をかけた俺が再び歩き始めると、三人が横に並ぶ
「……それで、何が聞きたい？」
「うーん、とにかく色々かなぁ。あり過ぎて悩む」
「それなら、弥勒が先に質問させて貰うわ――」
歩きながら最初に質問をしてきたのは弥勒蓮華
「不知火さん、貴方は一体何者？　勇者なの？　それとも……

バーテックス？」
「俺は人間だよ……最近は、自分でもわかんなくなっちまってるけどな」
　俺は人間……なんだと思うが正直な所、確証を持ってそう言えるかは微妙だ……夢に見るのは同じ光景だし、依頼をこなしてる時だって時々わからなくなる、自分を人間と呼んでもいいものか
　当然のことながら、弥勒もわからなくなっちまってる発言には違和感を覚えたらしく眉をひそめている
「わからなくなってる？」
「……怪我とかはすぐに治っちまうからな。心は人間のつもりだが……もうとっくに化け物になっちまってんのかもな」
　それこそ、壁の外にいる奴等と同じように――――
「人間だよ」
「……えっ？」
「不知火さんは、人間だよ。だって……そうじゃなかったらそんな思いつめた表情出来ないから」
　そう言った赤嶺に、別の誰かが重なって見えた
「……そうか」
「そうね、確かに友奈の言う通り」
「せやなぁ。それに、ほんまもんのバケモンやったらこうして会話も出来ないんとちゃう？」
「……それも、そうだな」
　会話を始めてすぐにわかったが、こうした何気ない会話をするのも随分と久々だ
「じゃあ次はウチから不知火さんに質問！　不知火さんって一応大赦の人なん？」
「……いや、協力者ってだけで俺は大赦の人間じゃない」
「そうなんか」
「……あぁ、お前らには悪いが俺は手を貸すのが一番手っ取り早いから手を貸してるだけだ」
　別に動く分には一人でも問題ない、ただ大赦に協力をすれば確実に

奴等の拠点やそれ以外に関する情報も入ってくる。そっちの方が俺にとっても都合がいい
「不知火さんの目的って……やっぱり――」
「あぁ、白神教を潰すこと……それ以外には何もない」
「……不知火さんは、どうしてそこまでするの？」
桐生の質問に答えていると、俺への質問を考えていたらしい赤嶺がそう問いかけてくるが……意味がわからない
「……どうしてそこまで、とは？」
「そんなボロボロになってまでって意味だよ。今まではそんなに会えなかったからわからなかったけど、不知火さんの目……凄い辛そうだよ」
「辛そう……か、それならそれでいいかも知れないな」
「えっ？」
「そうでもしないとこの世界は守れない……逆に、今のままならこの世界を守れるって事だ。俺にとってなんの不都合もない」
俺はそう言うと、少しだけ視線を空へと向ける。今こうして見えている青空だって真の意味の空とは言えない、結界の中で守られているだけの偽りの空……けれど、雪花や諏訪の勇者たちが託し、アイツらが救った世界だ
「――壊させる訳にはいかない」
俺がそう言ったからかどうかは知らないが、気が付けば赤嶺達三人は複雑そうな表情で俺の事を見つめていた

それ以上、俺に関することに踏み込まれると言ったことはなく。他愛のない話をしながら歩いていると駅に到着する……俺達がこれから向かうのは、大赦本部。そして、そこで聞かされるのは恐らく――
――この世界を守るため何としても阻止しなければならない事の筈だ

Episode4―To meet the girl's determination―

電車に揺られること数時間、その場所にある大赦本部
「お待ちしておりました、不知火様、勇者様方」
仮面の神官について本部の中を歩いていくと、やってきたのは弥勒と書かれた表札が貼られた扉。まぁここにいつまで突っ立てるのもどうかと思うから扉をノックすると仲から声が返ってくる
「どうぞ」
「「失礼します」」
「……邪魔する」
「急に呼び出してすまない」
オフィスの中で業務に勤しんでいた薊は書類に書いている手を止めると俺たちの方に視線を向けてきた
「それで、俺たちを呼び出したのは手紙の内容で良いんだよな。白神教が本格的に行動を起こすってのだろ?」
「その通りです……白神教に潜り込ませている部下から連絡がありました」
その言葉と共に俺たちに渡されたのは紙の束、一番上のものにざっと目を通してみるとどうやら白神教で配られているプリントの写し
「救星の儀……か」
「あぁ、白神教は救星の儀と呼称する大規模テロを実施しようとしている。それも特定の地域ではなく――――四国全土で」
「そんな、四国全土って……ッ」
「テロが起きるだけで、一体どれだけの被害になるのか……流石の弥勒も想像したくないわね」
驚愕の表情を見せた赤嶺と、深刻そうに声を発した弥勒。確かにこのテロが起こった場合どうなるのか想像することは容易い。きっと、今まで経験したことない程の血が流れ、負の感情が渦巻く
「成る程、ならウチらはそのテロが起こる前に白神教の拠点を叩けば

いいって事やな？」
　薊の事を真っすぐ見つめた桐生はそう言うが、恐らく俺達がしないといけないのは――
「――逆、なんだろ？　俺たちはテロが起こるまで何もせず、敵の好きにさせる」
「……嘘やろ？」
「いや、不知火さんの言う通り。テロの実行日まで我々は動かない、こちらが情報を掴んでいないと相手に思わせる」
「どうしてですか、今なら被害が出る前に止められるのにッ!?」
　どうしてか、その理由に関しても薄々だがわかってる
「起こさせてからの方が、敵を潰すなら都合が良い」
「……え？」
「冷静になって考えてみろ、ここで俺達が拠点を一つ潰した所で抑えられる被害はたかが知れてる……だから、事を起こさせて連中を一斉に――」
　俺がそこまで言った直後、目の前にやってきた赤嶺に思い切り頬を叩かれる。少し驚きつつも視線を彼女に向けると、僅かにだが瞳の端に涙が溜まっていた
「赤嶺、俺は前にお前に聞いたな、大義の為に人を殺す覚悟があるか……と、大義の為に人を殺すって言うのは自分の手で命を奪うだけじゃない、先の未来を見据えて……救える命を見捨てるのも、人を殺すって事だと俺は考えてる」
「……」
　俺の言葉を聞いた赤嶺は、そこから先、何を発することなく一足先に部屋から出て行ってしまった。それを見た弥勒と桐生の二人も部屋から出ていく
「良いのか、行かせちまって」
「……ええ、覚悟を決めていると口にしていても。まだ彼女たちは子供です、今回の判断は……彼女たちには酷すぎる」
「そうかよ」
「不知火さんにも、そんな役割をさせてしまいましたね」

「気にするな、こういうのは慣れてる」
とはいえ、流石に友奈そっくりの見た目で泣かれると中々にくるものがあるな
「それじゃ、俺も帰る」
「えぇ、こちらの準備が整いしだい改めて連絡させていただきます」

大赦本部での話を終えてから数日、いつものように白神教の支社を潰して周り、家に帰っては泥のように眠りにつく日々を続けていた。初めの頃は心が少しずつ砕けていくような嫌な感じがこびりついていたが今ではすっかりその感覚もなくなった
起きてる時も、寝てる時も今の自分にとっては大きな変化ではない、これが自分が人間じゃなくなっていることの証明である気もして少し自嘲気味になるが……それも今更だろう
「……ん？」
色々と考えていたら変に目が覚めてしまった。既に日は昇っているがまだまだ時間は早い。一体何をするかヲ考えていると家の扉がノックされた。こんな時間に誰だと考えつつも玄関を開けるとそこに立っていたのは鏑矢の三人
「どうした、こんな朝早くから」
「……不知火さん、お願いがあります」
赤嶺は、そう言うと俺の事を真っすぐと見つめ言葉を続ける
「私たちと、戦ってください」
最初はそれがどういう意味なのか、わからなかった。戦うことに意味はない、ただでさえ大規模テロが控えている、そんな状況で味方同士で、不要な戦いをする必要等皆無だ
——けれど、それでも
「わかった、戦おう……そして見せてもらう、お前らが見つけた答えを」
目の前の少女たちの想いに、久々に応えてみようと、そう言う気分

になった